目次

わたしの「父帰る」……大和禎人 1
ねずみ小僧丸楠（十五）……鈴木昭三 10
日本近代化の恩人シドッチ……新井宏 15
果物物語（二）……青木昭成 25
ＯＢ株式会社……三戸岡道夫 28
老春繚乱……三戸岡道夫 34
―ヘブンズ・パスポート―
笹ヶ崎村（九）……太田和貞 39
方解石の出る楠峠（九）……伊澤敏久 47
茜色の翼（一）……瀧澤中 51
泰山木（五）……紙透寛夫 56
―紙透小太郎の一生―
漢詩　潮騒録（二十四）……鯨游海 65
近藤重蔵・富蔵の生涯と
其の時代（二十五）……金子正義 70
千篇萬律（編集子メモ）……76
表紙・カット……宮城正彦
カット……鈴木國男



わたしの「父帰る」

大和禎人

父が帰ってきた。ただしそれは明治四十年前後の時代の集合写真、六ショットの中に見出せる映像としてである。血のつながるわたしはその写真の並みいる顔の中にただちに父は前列から何段目、左から、右から、たとえ何段、何人目であろうと、すべて識別して指差せるものであった。それが血縁というものであろうし、余人では知り得ぬ一種の霊感にも似たものであったろう。摩詞不思議な、別に言えば神の告知とでも言えるフシのものであったように思える。

写真六葉は伯父の家の旧屋を取り壊すについて、一つの行李から発見されたのであった。古家を解体をするについては、梁材など今は価値ある木材として買い手がつき、思い切ったといういきさつだったようだ。

父の写真はそうした事情で整理の際に発見されたものだった。

姻族誰彼が集まっての整理だった。

「ああ、これは叔父さんの真人さんが写っている写真ですよ、よくまぁ、仕舞われていて、東京に家族がいるはずです、送ってあげてくださいな」

そう言ったのは九十二歳に達している多江さんだったという。わたしの従兄弟にあたる人だ。わたしはこの人に内風呂で背中を流しもらった覚えがある。中学生の頃だ。夏休みを村井町に過ごした昔のことで、気恥ずかしかった記憶がある。

「でも、今の住所などわかっていない、疎遠の事情をどうすればいいの」

これは当主として、わたしから言えば甥のほうの未亡人だった。取り壊しになる家の背後にこじんまりとした家を建て、いまは一人居の身分、子女はすべて東京に出ているという。

ここで塩尻の三沢奈緒美さんが、

「ああ、それなら、疎開で村井に居らっしゃった時分娘さんとは会っているし、小父さんにも会った記憶があるわ、調べて送って上げましょう」

「そう、奈緒ちゃん頼むわね、そうしてあげて」

三沢夫人は多江さんから言えば姉にあたる憲江さんの娘である。わたしにとって同じ従兄弟にあたる憲江さんは塩尻の旧家に早く嫁していて、すでに故人、わたしはついに会うこともなかった人だ。奈緒美さんも主人を亡くされ、未亡の由、子女はやはり東京にあって、独居の身分という。

「村井には同級生の浅川さんがいるのよ、小父さんの娘さんはなんでも、その浅川さんの誰さんかと結婚しているように聞いているから、わかると思うの」

「そう、よかった、ぜひそうしてあげてくださいな」

多江さんは老齢だが、まだしっかりしていた。今は松本の浅間温泉町に住み、竹内姓、わたしにとって唯一相知る血縁だった。

今にして思えば因縁話になるが、取り壊しになるという家の現状有る姿、不動産屋さんの言う「現状有姿」をわたしはごく最近カメラで撮りおさめていた。

それは平成十一年のこの年、九月二十八日のことだ。前々日、特急「あずさ」で松本入りをし、折から「太鼓門復元まつり」で賑う松本城を訪ね、また、あるこだわりがあって旧制高等学校記念館に足を踏んでいた。記念館は県宝として松本高等学校校舎が保存され、県の森と呼ばれるその敷地内にあり、戦後学制改革により消滅したとはいえ、公私立旧制高校、京城大予科などまでをふくめる四十一校の資料をあつめる青春ロマンの館という性格をもつところだ。わたしにはかつての受験生としてとくに松高にはこだわりがあった。昭和十年の昔だ。すでにある損保会社の勤めについたばかりなのに、願書を出してあって、休暇をとり、受験の意地を通したのだった。すでに二浪に相当する年齢ながら、念願のはじめての高校受験だった。勝算はないばかりか、家貧しく学費の上でも所詮無理があった。父はすべてを承知でわたしを送り出したのだった。浅間に近い大村に父の姉が稼いでいて、そこへ宿を頼んだ上の受験だった。

「父さまも、ちったぁぐあい良くなったかね、禎っちゃが試験受けるくらいだけに、のう」

伯母のヨネ婆ぁさまがそっと耳元で囁いた。雪の朝だった。靴を履こうとするわたしを送ってくれながらである。血縁の情としてそれはそっと言われたのだった。わたしの耳底に残る言葉だ。

「きみ、それは夏服じゃないの」

口答諮問ではそうした指摘をうけた。たしかにわたしは受験に際し薄手の夏の学生服しか持っていなかった。

合否の結果は発表を待つまでもなく明白だった。

わたしは受験を終えた帰路、せめてのことに松高の徽章をもとめて帰っている。長く秘蔵していたが、今は失われてそれもない。この日、記念館では各高校の徽章を染めぬいた手拭い一筋を買いもとめている。白線入りの破帽、弊衣、釣り鐘マントに高下駄。それはわたしにとっては往時の憧れだった。

浅間温泉の宿は二泊、二日目は城の背後、重要文化財の開智学校の参観にあて、次いで三日目こそ、実は今回の旅の念願である村井町訪問にあてられていた。その日が二十八日なのだ。午後一番の「あずさ」で帰京予定に先立つ時間を割いて予定にあてていたのだ。信州大医学部の病院に循環器系医師を勤める甥がいて、その勤務の都合をはかり、車で案内をしてもらう約束だった。

「伯父ちゃんの気分転換を考えて、ちと山手をドライブしてから、村井へ行きましょう」

「悪いね、見納めだ、頼むよ」

四輪駆動のワゴン車だった。家族ぐるみの旅行の便を考えた愛車だった。

牛伏寺の山道を車は苦もなく駆け登って山門に達している。牛伏川渓谷の深い緑のなかにある真言宗の古刹が牛伏寺であり、厄除けのご利益で知られ、本尊の十一面観音は重要文化財である。峰を連ねて鉢伏山、崖の湯があり、これから訪ねようとする村井の町は見はるかす眼下である。

都市化の波がおよんで、大きく村井町も変貌を遂げているはずとは、かねて別の旅で何度か通過することがあり、車窓から目を凝らし、景観の著しい変化は見て承知していたが、田川の流れを越えて町へ入り、まず駅舎の前に立った時、それはもはや隠れもない現実として突きつけられた。

明治三十五年十二月十五日開業、大正十五年三月の建築という村井駅は往時の芳川村村井町のつつましい村駅から松本市大字芳川村村井町を現所在地とする町場の駅へ変わり、わたしの記憶にあるたたずまいは一変していた。建物としては昔のままと言うが、建具類の近代化だけでも馴染みのない姿になっていた。

駅前の右手は不動産業者の小ビル、左手は立ち食い蕎麦の店、客待ちのタクシーのゾーンまであるといった風景で、年間乗降客一七七・一万人は松本市へ向かう通勤客と学生生徒が占めるのであろう。

駅頭にある若山喜志子歌碑は尋ねる目標の一つだったが、駅舎から見て右手、もとの位置とかわらぬそうだが、健在だった。父らが戦後に奔走した建碑だった。

ふるさとの信濃を遠み秋草の
　りんどうの花は摘むによしなし

この地に足を踏むに至ったわたしの思い、それは東京生まれの人間としては少しく望郷という感傷とは違うも

のであるはずだったが、信州村井の人としていまは泉下にある父に代わりこの地を尋ねた志はさして遠くはない心境なのであった。

わたしたち家族が戦火に追われて疎開し、わたしの場合は別に軍の召集解除によりたどり着き、虱だらけの戎衣を脱いでから、同じ疎開者という肩身の狭い暮らしに甘んじ、勤め先の学校に復帰してからは校内居住をつづけて、帰省のため往復を幾度となく重ね、戦後の昭和二十五年にもなって、ようやく都営住宅の入居を果たして家族の東京復帰の日まで、ゆうに数えて七年、村井町とは縁に結ばれる遠い日々があった。

久々やまれぬ回帰の心情を誘われ、この日を迎えたわけだった。車は行きつ戻りして、

「あっ、ここだ、大和良平という門札がある」

「どれ、うーむ、そうだ、ここだったか」

「よかった、やっとだね」

「うん、ありがとう、ちょっと下りて、写真を撮っておこう」

わたしは興奮を覚えながら、シャッターを切った。

だが、門札の主はすでに物故しており、空しい思いとともに、いまだなぜに、という不審が心に湧いたが、ヒソとして窓にはカーテンが引かれていて、無人のようすで、声をかけようもない。

伯父杲治は疎開中に死を迎えており、わが家の東京引き上げ以後は疎遠久しく、伯父のつれあいの死去の折も格別の訃報もなかった。従兄弟関係となれば住居上でも距離おいて無音を免れず、仄聞によれば空しく認められる門札の人も松本市の教育長の職を退いて、幾許もなく死去、そのつれあいも五ヶ月後に亡くなった由を聞いていて、もはや訪う声をかけるまでもないのだった。

「このようすではどうやら、活気のない暮らしかも、どうしますか」

「そうだね、もう良いよ、ありがとう、汽車の時間もあることだから」

これまでと、車首を巡らしてもらい、奈良井川筋を、覚えのある神戸橋を渡る迂回路を走り、更科蕎麦の馳走にあずかったりして、松本駅まで送ってもらった。

父祖の地忘じがたし、とする心情は父の亡きあと、二世であるわたしの、それとない、むしろ淡いセンチメンタルに過ぎなかったかも知れないのである。赤紙と呼んだ軍の召集礼状をうけ、金沢へ入隊の折、わたしは村井へ立ち寄り父の父親である大和五平の墓に詣でている。言わば父祖の地に対する思い入れであった。いま再びそれに近い心根を抱いての村井町探訪であった。しかし、失望の二字を記録する結果を残し、都市化に失われようとするものへの単なる感傷旅行に終わったようだ。

農家の出であった父真人については、母の場合と違ってその生い立ちを伝える写真がまったく残っていない。農というつましい家業では写真を撮る、なにかの記念に映像を残す、といった機会はほとんどなかったのだ。わたしは写真による自分史として年鑑的アルバムの編集を進めていて、すでに十六巻を数えている中に、時には特集を組み、母のページその他があるのだが、父のページは残念ながら欠けている。資料となる写真が皆無なのである。いま、村井町の生家の解体にあたって、そうした遺憾を補う写真が出てきたという知らせは父の生涯の時空を埋める期待で胸ふくらませる出来事であった。

感傷旅行に少なからず失望を抱えて帰って、月余にそうした知らせであったから、なにやらわたしの思いの通じるものがあって、そうした僥幸を恵まれたような気がした。

九十二歳という従兄弟の多江さんの健在があって、

「これらの写真は東京の真人さんのもの、送ってあげなさい」

という生き証人の助言にも助けられた。塩尻の三沢奈緒美さんが引き受けて、村井町の同級生に電話を入れ、とりあえずわたしの妹のところへ電話があった。三沢さんが疎開中の一家とわずかにせよ逢瀬があったこともこの際幸いしたのだった。

塩尻市広岡高出高原通り、リカーハウス「たかはら」という商店名のある大判の買い物袋に写真を入れ、宅急便がほどなく届けられた。

B3ほどの大きい台紙に貼られた写真はみな四つ、もしくは六つの大きさで、学校での古色を帯びた集合写真ばかりである。「写真師　杉浦製　信州松本」と台紙にあるものが一葉、「Sendai Higasi IchiBancho Sirasaki」とあるものが四葉、同じ一番町「T・Otake」とあるものが一葉の計六葉である。そして六葉のそれぞれに何段の何人目が本人とわかるように的確な付箋がつけられていた。おそらく多江さんの配慮であったろう。

写真はすべて明治四十年代、仙台の五葉は二高時代、それより古い松本中学校時代のものが一葉である。後者は古城のおもむきある松本城をバックにしているので直ちにそれとわかるものだった。

「大正八年拾壱月参日
創立三十五周念記念誌
松本中学校三十五周年記念會」（用事ママ写す）

まことに古めいた右のごとき記念誌に添える卒業生名簿がわたしの手元に奇跡的に保存されており、あらためて探索の頁をめくり、めくりして、ようやく父の名を発見できた。第十九回明治三十六年三月卒業（六十一人）とある仲間にその名を連ねているのを発見できたのであ

る。頭注に法学士とのみあって、各氏名の上には近況を抽象して家居、県会議員、何学士、東京高師卒などとあるにすぎない体裁のものだ。

ついでながら、同誌による学校沿革の冒頭を写しておきたい。

松本中学校ハ明治九年舊筑摩縣ニ於テ第二大学區第十七番中学區第一番小学東筑摩郡南深志町開智学校内ニ變則中学科ヲ設ク　是レ本縣中学校ノ濫觴（らんしょう）ト為ス　（甲字原文ママ）

とあり、松本中学校と改称独立したのは明治十三年一月であることが次いでの叙述で知ることができる。そして、同年六月として、

明治天皇東山道ニ御巡幸蹕（ひつ）ヲ松本ニ駐メサセラレシ際本校ニ臨御生徒ノ学習ヲ天覧アラセラレタリ

という記事がある。

第一回の卒業生を送り出したのは明治十八年である。引用の文中に南深志の地名があり、開智小学校の名称を認められるが、松本中学校は今日の県立深志高等学校であり、開智小学校は明治九年落成の和洋混交の擬洋風建築の貴重から注目されて長く創立地の松本市女鳥羽川畔にあったが、重要文化財の指定にしたがい、今は松本城の後背地沢村町（現開智二丁目）に東京オリンピックの昭和三十九年移築、一般に公開に供されている。

さて、わたしは菊池寛さん（旧字は寛のハネに点があり、生前、ご本人はおれの菊池は泥の土偏でなく、寛には点がないのが本当だ、と頑張られた由、今は点がないので叱られないだろう）の初期の戯曲作品「父帰る」の題名にあえてなぞらえ、ここに父の履歴を掘り起こし、明治三十六年にようやく遡ることができた。父は中学校を卒業、時に二十歳ということになる。往時の学制を詳（つまびら）かにし得ないのが残念で、今日にくらべて順当な進学歴であったかどうかを知り得ない。卒業同期の名簿に家居、実業、中村貞一氏という名を拾えるが、同村の人だ。父は後年、疎開中この人の遺業を讃え、

『中村水道記念碑』

なる建碑のため奔走している。さきの若山喜志子歌碑の場合と同じくやはり疎開中昭和二十年のことだ。表向き撰文を他の氏名に譲っているが、父はそうした表面に立つことを好まない性格の人だった。水道の工事は昭和十年に遡るもので、その功績に対するなんらかの顕彰は多年友人として気にかけていたのだった。篆額を「厚生利民」として水源地に碑は建てられた。

父の出生地は今は松本市になっているが、以前は東筑摩郡芳川村村井町という農村である。地名として村の町という呼称は少しく面妖に思われるが、宿場町の性格をもつ家並みにもよると思われる。中央線は塩尻以北を篠ノ井線として広丘、村井、南松本を経て松本に達する。

松本平南隅の農村だった。

村井宿

慶長年間、北国脇往還に開かれた宿場である。松本から一里二十町、郷原宿へ一里二十町、宿場の長さは五町九間、町割りは一戸分の間口六間、奥行二十間から三十間、元禄年間の記録では八十二軒ほどの家があったという。本陣・問屋・旅篭屋が並んでいたが、明治二十年、二十七年の大火により当時の姿を失った。

しかし町割りや鍵の手・用水路には昔の面影を残している。

平成十年三月
芳川村地区景観整備委員会

こんな標識が村井の大和の真ん前の旧家の敷地に建てられていた。カメラにおさめている。山村医院とあるその家だけが、かろうじて宿場の昔の名残りをとどめ、風格をそなえていた。簡明な説明の中に、旧態の家並みが間口に比して奥行きの深い短冊形であることが知れる。

ここに言う用水路は「川下（せんげ）」と呼ばれた各家の奥手を流れ、農具や器物の洗い物などに使われた疎水を指している。

さらに注目すべきは二度の大火という記述である。父の父親大和五平の時代に相当する。当主として心労多くその死を早めた。跡継ぎの兄呆治が二十歳（はたち）、次男の父が十二歳であったというから、二度目の大火後間もなくである。この事情は父の遊学の上で、いかに兄の呆治の理解が篤いものであったか物語る。農家であれば中等教育を受けさせることすら、問題でなければならない、稀有のケースにあたるのだ。呆治兄は高等小学を了えただけだが、二年ほど村の小学校を勤めたという。秀才であったに相違ない。長野市と松本市が県庁誘引の争いをした明治十四年の南北分県論の争いに際しては投石のかどで留置されたという熱血の人でもあった。世辞で言うでなく切れ者だった。芒洋の次男坊はこの兄の見識に育てられたと言って良かろう。

仙台の五葉は各学年別と思われる三葉と、明治四十年五月十八日撮影とデーターの明瞭な「弁論部出演者」とあり、父の氏名の上には擬国会と記される一葉である。擬国会とはなにを指すものか、他に同様の氏名があり、模擬国会として論戦を戦わせたものであったろうか。論

題の明確の人もある。たとえば後の国民文学の歌人で晩年、歌集「幸木」で芸術院賞を受賞した半田良平さんの場合には「公孫樹下に立ちて」などと見える。この人は父とは同期、懇親の間柄であった。

他の四葉については判断に苦しむ映像になっている。内三葉では集合する顔ぶれの中に、一人、二人と角帽を被っている人物がいるからである。卒業期の何らかの部別の記念写真かも知れない。大学への進路を決定した連中が稚気満々、まだ在学中なのに、角帽着用におよんだものであろう。かろうじて白線帽集団だけのものが一葉だけ残される。何年生の時のものか明らかでない。

仙台の二高の名簿は一冊だけ昭和十六年十二月、同窓会による「会員名簿」が手元にあり、唯一、考証の手がかりを与えてくれる。父真人は索引上「ヤ」の項にあって「やまと」と誤認されているが、明治四十二年卒業の第一部英法科の仲間にその名を発見される。さきの半田良平さんは文科である。第二部は理科、第三部が医科で同期一六七名と知れる。父が後年、自立して出版業に手を染めて刊行し、名著の評価をうけ、また現天皇が愛読書とされ、話題を呼んだ「黄河の水」の著者鳥山喜一さんは一年先輩の文科卒業というご縁をあらためて知るのである。

ついでながら、明治二十七年第三回卒業十三名中、文科四名の一人に土井林吉の名を発見できる。土井晩翠さんである。母校名誉教授とある。だが、旧職員の列にはその名を見出せない。父の話題で土井さんの姓は「つちゐ」が正しいが、ご本人は（「どゐ」でもどちらでも結構です）と言われていたと聞いたことがある。客員として時には教壇に立たれたことがあるに相違ない。

そうした晩翠さんは「雨の降る日は天気が悪い」という奇妙な題名の随想集の序の署名で、わざわざ「どゐ」とルビをふり、「付言」として（選挙人名簿には「ド」の部にある。いろいろの理由でこれからは「どゐ」に改音することにした。特に知己諸君に之を言上する。）と宣明している。

知名の晩翠さん例がこのようであるから「ヤ」の部の「やまと」とよく間違えられる迷惑はわたしも同様なのだ。しばしば訂正を余儀される。「おおわ」の姓は長野県独特のものなのだ。「やまと」でも良いとは言いかねて、一々お断りをしている。

働き蜂という異色の二高校章を幼時の記憶で、父の持ち物の中に見た覚えがあり、それが象徴する意味を聞いた日がある。若干二十歳で家督を継ぎ、それこそ働き蜂よろしく農事に励んだ某治伯父は篤農家と呼ぶに相応しい人だった。養蚕景気の絶頂期とは言え、弟を仙台に遊学させている理解は明治期のこの時代ゆえに並のことではない。父の性が不器用そのもので、農に向かないと見抜いてのことかも知れないが、八歳の年下の弟に対する

庇護の厚さに驚かされる。

しかし、兄の意をむかえて法科に籍をおいたことは、父にとって本懐ではなかった。多く文人志向をもった父にとって、法律や経済の勉強は（砂を噛むようなものであった）という口吻を聞いている。後年、書肆経営を企て、わずかに良心的な二書（前記「黄河の水」および初刊の早大教授西村真次氏の「鳴く蟲の観察」）を世におくり玉砕したが、一つ意気地を貫いたものと言える。また、桃李庵の号は漢詩の「桃李不言　下自成蹊」に由来すると言うより、ヒストリアンを意味し、深く関心を史学の分野にもった人であった。だから、大学も法科に進みながら、官途を卑しむ思い強く、市井の逸民を自称して生涯を終わっている。

わたしはあらためて村井を訪ね、カメラに撮りおさめて帰った映像を見直し、やがて取り壊しになろうとする父の生家のただずまいを見直して気づいたことは、昔は無かったブロック塀が道路際に築かれ、都会風を装っているが、二階部分の土蔵造りは昔日のままであることだった。この造作を解体する時は多分大変な土埃をあげるであろうと想像される。すべての滅びの時である。

事前の整理に際し、偶然にも小さな柳行李から父の写真が発見されて、九十年ぶりにわが家へ帰ってきた。ほとんど五十年ぶりの村井往訪の見返りのように、奇跡を与えられたのだった。まさに、虫の知らせてくれての、「父帰る」であった。

わたしは六葉の古い変色気味の写真をなんとか蘇らせようと、接写技術を期待し写真スタジオに持ち込み、複写を頼むことにした。ところが、思わぬ挿話を加えることになった。六葉をすべてキャビネの大きさに、と注文したつもりだった。ところが出来てみると、原画のほうに親切にも本人をどの位置と判別しやすいように、送ってくれた人の配慮の付箋がしてあった四葉について、本人をキャビネにクローズアップした仕上げが届けられていたのである。頼んだ店の仕事ではなく、この場合そうした仕事専門のプロの仕事だった。集合写真から抜け出して、大写しの父が見参したのである。

「これはこれで結構だから、あらためて集合写真のキャビネを頼みますよ、これはこれで怪我の功名でした、なに、あなたの店のせいじゃない」

と言って、むしろ慰めていた。帰り来ぬ日の父が学生服の輝くような若さで帰ってきたのだから、なにも言うことはないのであった。

（H十一・十二・二十三）

ねずみ小僧丸楠（十五）

鈴木昭三

この天光軒十五夜嬢の小田郷村への乗り込みは、くうにい達の最初の目ろ見とは違ってまるで出征兵士を送る時のように勇ましい行進になってしまいました。

氏子総代やくうにい達は、露人館などのある川の前の往還を人力車に乗せた十五夜嬢の名を連呼して賑やかに披露して歩くつもりだったのです。道中で軍歌が始まったのはとんだハプニングだったのです。

ハプニングと言えば二日間頼んだだけの芸人に過ぎない十五夜嬢に、これ以後村の衆は大いに引っかき廻されるのであります。

後になってあの頃を述懐した奥山武太夫に言わしめれば、十五夜嬢は正に幕末の日本の太平の夢を破った黒船の出現に似ていたそうです。武太夫の言った黒船とは比喩的だけではなかったと思われます。

私の尊敬していたくうにいでさえも、大和男の子として身を立てる可き重大な時に、幸か不幸だったかは別としてこの黒船にやられるのであります。

多岐利神社、通称おたきりさんの社務所の裏手には太い枝を四方に広げ樹齢五百年と言い伝えられている一本の大杉があります。

この杉の木陰は川の前のがき共の秘密の溜まり場で、百坪ぐらいの下草のまばらな、ちょっとした広場になっております。地ごく耳が先生役の春画教室もここだったのです。ここに十五夜嬢を迎えた日の朝早くから氏子総出で口演会場を作ったのであります。

この春祭りは村の恒例で学校は休みでした。私達がき共は朝起きるからもう祭り気分で浮かれていましたから、互いにふざけ合い、相撲で取っ組んだり、寝ころんで歌ったりしながら、大人達に小言を浴びながら、この広場の地面に藁むしろを地面に敷きつめたのであります。

このむしろ席の社務所側に、村の製材工場から運んできた桧の厚板を並べて一段高く舞台をしつらえました。

舞台の中程には、朝日と富士山の絵柄の布をかぶせたテーブルが置かれ、その背後の金屏風の裏には曲師の椅子も用意されました。

やがて、春宵の夕闇の中に、おたぎりさんの参道のぼんぼりの蝋燭の火が赤く浮かぶ頃、氏子ばかりか村中のあちこちから、言い合わせたように座布団をかかえ、割り子や重箱の風呂敷包みをさげた村の衆でこの会場はすぐに埋めつくされたのであります。

天光軒十五夜嬢の口演は、この初日と、翌る二日目の昼夜の計三回でした。

彼女のだしものは乃木大将と辻占売り、壺坂霊験記の二本立てで、そのどちらもさわりの部分の抜き読みでした。

小田郷村は古来から東海道を北に折れる水防の神夏芽神社の参詣道になっていましたから、諸国の参詣人や商人達に混ざって数多くの芸人も足を止めた所でした。芸人と言ってもピンからキリ迄ありますが、村に立ち寄ったのはほとんどキリの部類だったようです。露人館の宿帳には色いろな芸人の名が残されています。

村の衆の好きななにわ節語りは言うに及ばず、講釈師義太夫語り、手妻師、祭文語り、本読み等があり、中には三四人だけの芝居の連中もいました。これらの芸人は寄り合って一座を組んでやって来た者もいたし、独りとぼとぼと路銀かせぎに、道端のお堂や空き家に村人を集めてその芸を見せたりしたのもいました。

私が子供の頃でもおかしな連中がやって来ました。川の前にあった農業会の倉庫を彼等はよく会場に利用していました。物まねという触れ込みで、始まりから終り迄、さかりのついた猫の鳴き声だけをやったり、なにわ節と名をうっていても、弾き語りの三味線でもなくて、目の前に置いたテーブルを二本の張り扇でたたいて語るおかしなのもいました。芸名からしてもうさん臭いのがありました。寿々木米若ではなくて麦若。広沢虎造ではなくて猫造。鼈甲斉虎丸ではなくてその威を借りた狐丸。玉川勝太郎ではなくて馬毛太郎。声帯模写と称し、古川ロッパの弟で古川ナッパ。この古川ナッパ氏はロッパの弟と称するだけあって、福よかな四角な顔につるの太い眼鏡をかけていて、私達子供ばかりでなく大人の衆までロッパの弟と信じ込みました。この古川ナッパの口演は倉庫で昼夜二回やったのです。昼も夜も十二、三人位の客の入りで、その前の方に陣取った只の川の前のがき共は、

昼の部の声帯模写の声わ色をもう夜の部では皆んな下手なりに覚えていて、ナッパの話の先を取って、しゃべってしまったのです。特に地ごく耳はすごくて、開演前の口座に勝手に上がって昼間聞いたナッパそっくりに客の前で真ねして、客席をわかせたのです。ナッパの口演が終わって未だ客席に残っていた私達の前に、金ピカの背広に蝶ネクタイのナッパが舞台から降りて来ました。がき共は叱られると思いました。

ナッパは笑顔でやさしく地ごく耳に、芸人になる気はないかねと尋ねました。地ごく耳はちょっとはにかみましたが、あると答え、二人は連れ立って地ごく耳の母に会いに行きました。

地ごく耳は私よりは年齢が二つ上でしたが、この二年後、小学校の高等科の一年生の時に、ナッパの紹介で東京の噺家の内弟子になるのであります。

その後になって、東京に行った地ごく耳と、その周辺の私達はそんなことはなかったのですが、村の衆の中には戦後になってもナッパはロッパの弟だと信じていて、更にナッパの弟にはハッパというのがもう一人いるのだと実しやかに語る人もいました。

こんな風で村にやって来た芸人は色いろな人がいたわけですが、人を食ったような芸名でインチキ臭い連中でも、小田郷村の衆の好み等は一応気にして前以って調べてあったようです。時代ものを演じる講釈師やなにわ節語り達は特に、武田信玄や甲州を嫌っている事を知って、気遣っていた節があります。戦国時代の昔、小田郷村を含めてこの遠州一円が甲州軍に蹂躙され言い知れぬ屈辱を受けたことがDNAにインプットされていたと思うのです。

戦国武将の話しでも村では武田信玄はご法度です。なにわ節で好まれただしものは、天保水滸伝とか清水次郎長伝であります。侠客ものの切った張ったの威勢のいい話が村の衆は大好きであります。

その点今回の天光軒十五夜嬢の乃木大将ものや、お里沢市などのお涙頂戴の人情話は好みではなかったのです。

それにもかかわらず十五夜嬢の口演が、初日から回を重ねる毎に爆発的に客の数が増えて、二日目の千秋楽の夜には、会場に座っている客よりも、それを取り囲む周囲の立ち見の人数の方が多かったのです。その立ち見の客の大半は村の北端の銅山の労務者達でした。彼等の中には人影で前が見えないと言って、大杉の枝にまたがっている者もいました。

千秋楽の客席の舞台に近い前の方には村の若い男達がいつも屯していました。この若い男達は回を追ってその数を増していたようです。

村の衆が余り好きではない人情ものを語る天光軒十五夜嬢の人気が回を重ねる毎に沸騰してきたのにはそれなりの理由があったのです。それはやっぱりなにわ節ではなくて、その後のサービスの余興にあったのです。

私が見ていた千秋楽の夜、なにわ節が終わり、舞台のテーブル等が片付くと、今まで屏風の陰にいた曲師が素手に扇を一本握ってその姿を現わして詩を吟じたのであります。

全体が暗い会場の中で広くなった舞台だけがアセチレンのガス灯に一際明るく照らされていました。

今までの紋付の着物に白いたすき掛けの十五夜嬢は、舞台に立つと床の厚板をどんと力強く踏み鳴らし腰の朱鞘をさっと横に抜き払いました。刀身が青白いガス灯に稲妻のように光り、彼女の姿が一瞬宙に舞いました。十五夜嬢の剣舞であります。

その時、彼女の舞い姿が同時に周囲の垂れ幕や社務所のガラス戸に黒く大きな影絵になって映りました。そのさまは、彼女が影絵と戦っているようで私には不気味で恐ろしい光景でした。

「べんせい　しゅくしゅく　よるかわをわたる・・」

「かすがさんとう　ばんかにとざさる　かりゅう・・」

この夜の二つの詩は口演の勧進元の奥山武太夫の注文だったそうです。

剣舞が終わり次の舞台の準備のために十五夜嬢が社務所の中に消えました。それを待っていたかのように、会場の後ろの方から男達がひとりふたりと立ち上がって人込みのなかを泳ぐようにかき分けて前の方に押し掛けたのです。

舞台の袖から曲師の弾く三味の音が華やかに響きわたりました。曲師の椅子の側の板の上では法被に鉢巻き姿のくうにいが小太鼓を打っていました。それはくうにいでした。

三味の音に乗って十五夜嬢は長襦袢のように派手な花模様の着物の裾を後でじんじばしょりにして、舞台に文字通り踊り出てきたのであります。

会場の見物人から拍手に混ざって男達の鳥の叫びのような悲鳴と爆笑が湧き起こりました。その時十五夜嬢の踊り出たのとは反対側の舞台の袖に、ばらばらっと七八人の男達がかけ上がり、隅の方にかたまってあぐらをかいて座り込んでしまいました。

「かっぽれ　かっぽれ　よーいとな　よいよい」

曲師の三味と歌とくうにいの太鼓に合わせ、手を振り足を上げ、まるで六法でも踏むように小気味よいリズムで舞台の中央にでた十五夜嬢に、見物客は手を拍ち、歓声を上げました。それから突然予期せぬ爆笑が起こったのです。

それは先程舞台に上がった男達が、一斉に上半身を板の上に伏せ顔だけをひねって踊っている十五夜嬢の方を見上げたのです。かぶりつきの男達も舞台の板に顔を乗せると、同じように十五夜嬢を見上げたのです。

踊っている十五夜嬢の衣装のじんじばしょりの下は男

ものの白い木綿のさる股でした。十五夜嬢は背も高くて太りじしでしたから、丸見えのさる股は、丸い尻の筋肉が動く度にぱんぱんに張った布地も生きもののように動いて今にも張り裂けそうに見えたのです。

「沖い—の暗いのに　白帆—が見ゆるよ」

十五夜嬢は白足袋の上の白い素肌の片足をあられもなく思い切り高く上げたのです。もう一本の片足でちんちんをし、舞台の板を踏み鳴らしながら、片手を小手にかざして遠い沖合を眺める所作に移りました。

その時でした。舞台や会場の男達から、前以て相談でもしていたのか、異口同音に、踊りに合わせて歌うように大声で合いの手が入ったのです。

「見ゆるよ　見ゆるよ」

その声に客席からも、大杉の枝からも又また大爆笑が上がりました。

そんな観客のどよめきの中にあって、十五夜嬢はにこりともせずに、曲師のいつ果てるともない見ゆるよの声に合わせて舞台で一人ちんちんで廻わり続けていたのであります。

会場の前の席や舞台の上からは男達の合いの手のように何かが見えたのかも知れません。このかっぽれはこの夜は三回目を踊ったわけですから、初回に見た客からの口コミで若い男達に伝わり、それを見ようと恥も外聞も忘れさせたのかも知れません。このかっぽれは、十五夜嬢母娘の十八番だったのかも知れません。舞台にいたくうにいは観客の爆笑の中でも平然と太鼓をたたき続けていましたから、彼も承知の上だったと思います。客席の片隅にいた官服の駐在も三回目のためか、ただにやにやしていただけでした。

因みに男もののさる股は村ではえて股と呼んでいて、今と違って股が縫い合わされてはいなくて、左右の布が重なり合っていただけでした。踏んばれば自然に布が割れて用が足せたのです。

このおたぎりさんの春祭りを終えて天光軒十五夜嬢母娘は一旦は帰ったのでありますが、本職のなにわ節ではなくて、このかっぽれの魅力で村の衆と、銅山の労務者の人気を掴んでしまったのであります。

私は十五夜嬢のかっぽれを見て以来、ずうっと今に至る迄、かっぽれは卑猥なものと思い続けております。

（つづく）





日本近代化の恩人シドッチ

新井宏

宝永五年（一七〇八）八月二十九日早暁、大隅国屋久島の唐ノ浦に、年の頃四十歳、六尺豊かな色白鼻高の異国人が、武士風にさかやきを剃り、羽織袴に二尺四寸余の日本刀を帯びて上陸した。ローマ教皇から派遣されたシチリヤ島パレルモ生れのイタリヤ人ジョバンニ・バッティスタ・シドッチである。

シドッチ……その名を知る人は必ずしも多くない。現在の高校日本史の教科書を見ても、約半数がシドッチの名前さえ載せていない。屋久島の観光案内書にも、またシチリヤ島の観光案内書にも、その名を見ない。明らかにキリスト教の殉教者でありながら、ローマ法王庁から聖人として遇されてもいない。

しかし、シドッチが日本の近代化に与えた影響の大きさについては、もっともっと注目しても良いであろう。長い鎖国の状態にあった日本が、中国や朝鮮に比べて、より早く近代化を達成できたのはなぜか。

もちろん、専門家による無数の多角的な論考がある。曰く教育水準の高さ、曰くマニュファクチュア（工場制手工業）の発展、曰く柔軟な政治権力構造、等々である。それに加え、たまたま幕末の頃、欧米諸国がクリミヤ戦争、セポイの反乱そして南北戦争に追われ、中国では大平天国の乱で忙殺され、日本進出が一時的に停滞した状況も幸いしたであろう。

しかしながら、歴史に遊ぶ世界から飛躍していえば、それはイタリヤ宣教師シドッチの日本侵入のお陰なのである。シドッチの日本侵入が、新井白石をして、『西洋紀聞』や『采覧異言』を書かせしめ、それが徳川吉宗の「蕃書の禁の緩和」をもたらし、やがて杉田玄白などの蘭学の隆盛を生み、幕末に至って、大島高任らが独力で高炉を完成する潜在能力をもたらしたのである。

すなわち、日本の近代産業のスタートが、欧米に遅れること、わずかに半周で済んだという幸運は、全くシドッチのお陰なのである。

シチリヤ島生れの宣教師

さて、そのジョバンニ・バッティスタ・シドッチであるが、彼は一六六八年にシチリヤ島パレルモの貴族の第三子次男として生まれている。輝く海を背景にしたシチリヤ島の活火山エトナの大噴火が起こる前年である。当時のパレルモは、スペインの支配下にあり、対オスマン・トルコの前哨基地として、多くのイエズス会士が訪れ、バロック芸術の花が開いていた。

シドッチは、はじめ郷里の学校で学んでいたが、その非凡な才能はイエズス会士の注目するところとなり、十歳にも満たない歳でローマに出た。そして学に従うこと二十二年、教皇庁の正課十六教科について完全にマスターしたばかりでなく、算術、物理学、数学なども含めて、天文、地理、方術、技芸など、当時のヨーロッパの最高水準の学識を身につけて行った。そのため枢機卿フェルラリの知遇を得て、若年にして教皇庁の法律顧問に抜擢され、教皇庁第四等の位サチェルドス（司教）に登った。

ちょうどその頃、中国やシャムにおいて、キリスト教の禁教が緩和されるとの情報がローマにもたらされた。多分、日本においても同様の事情にあるだろうとの判断のもと、一七〇〇年には、枢機卿の会議でアジアでの布教の再開方針が決定され、シドッチが日本への宣教師として派遣されることが決まる。シドッチ自らが願い出たものだという。

日本への派遣が内定すると、シドッチは直ちに教皇庁にある全ての日本資料を探索し、日本についての膨大な情報を自分のものとして行った。フランシスコ・ザビエルの報告はもとより、多くのイエズス会士の報告や、天正少年使節団、支倉常長使節団の記録を精読する中で、まだ見ぬ日本への夢が膨らんで行く。マルコ・ポーロの昔からローマ人にとってあこがれの国であった日本。ザビエルが、異教徒にあっては最もすぐれた国民であると称賛した日本人。シドッチが日本を志向し、日本讃美に向うのは当然の成り行きであった。

その中でも、特にシドッチが傾倒したのは、シドッチと同じくイタリヤ出身の宣教師マルセロ・フランシスコ・マストリリであった。七十年ほど前の寛永十四年（一六三七）単身マカオから日本に密航し、薩摩に上陸して日向の櫛ノ津で捕らえられ、殉教死したことは、教皇庁では、もちろん良く知られていた。シドッチは、マストリリが、クリストワン・フェレイラ（日本名沢野忠庵）の背教の罪をつぐなうため日本で殉教したことに、深い感動を覚え、自らをマストリリに擬し、マストリリの所持していた十字架を下賜してもらった。マストリリの故智に学び、第二のザビエルを目指すのが、シドッチの目的であった。

日本行きが内定してから三年後の一七〇三年、教皇クレメント十一世は、インドと中国の典礼問題解決のため、

特派使節としてアンチオキアの総司教トウルノンを東洋に派遣することにし、シドッチを日本布教の宣教師兼教皇使節として同行させることにした。

シドッチは、郷里に残した五十四歳になる母を想ったが、パレルモに寄ることなくフランスに出て、フランス・インド会社の船でゼノアを出港した。ちょうどその頃、イスパニヤ王位継承戦争で、イギリスとオランダの軍隊二十万人がジブラルタルを占領するため集結していたが、海峡を無事通過し、インドの東岸ポンヂシェリーに到着したのが、その年の終りの十一月六日であった。しかし、ここでシドッチはトウルノン総司教の仕事を手伝うことになり、結局マニラに到着したのは翌年の九月になってしまった。

マニラでは四年の間、日本入国の機会を伺いながら、日本人の子孫や漂流民を尋ね出して日本語の習得に努めている。その傍ら、聖ヨハネ病院や聖クレメント学院を設立し、地域住民からは聖者として崇められたとも伝えられているから、シドッチの人柄や宣教師としての非凡さがうかがえよう。シドッチにとってもマニラでの成果は大きな自信となったはずである。そして日本を目指す。

屋久島へ上陸

しかし、日本行きの機会はなかなか訪れなかった。もとより鎖国中の日本へ向う船などあろうはずがない。やがてその内に、シドッチの決意がフィリッピン総督のルシェベルリを動かす。シドッチのために、渡航費一切を負担し、船を一艘艤装してくれることになった。船名をセント・トリニダート号といい、ミゲル提督が船長を買って出て、一七〇八年八月いよいよ日本に向って船出する。

航海は逆風と悪天候のため六週間以上も要し、屋久島主峰の宮ノ浦岳を遠方から望み見たのは十月九日（宝永五年八月二十七日）である。しかしすぐには島に上陸せずに機会をうかがった。そして翌十月十日にトリニダート号は島の沖合いで日本の小舟を発見した。通訳の日本人を通して、シドッチの上陸と保護を要請したが、漁師等は厳しい国禁を理由に肯んじなかった。

シドッチは、いよいよ単独で上陸すべき時が来たのを悟った。ローマとマニラに宛てた手紙を数通認め、自分をここまで送り届けてくれた乗組員達に感謝するため、黒人や奴隷を含む全員の足に接吻する。人は皆、涙にむせび、口をきける者がなかったという。そして十月十一日（八月二十九日）早暁、ミゲル船長以下八名に伴われ、小船で陸地に向かう。

シドッチが上陸した地点は、屋久島の最南端、屋之間と平内のほぼ中間にある唐ノ浦である。現在の浦崎の東二百メートルにある。しかし、現地が確認されたのは意外に新しく、松田毅一氏が日欧の記録に基づき現地を精査した昭和四十二年のことである。もとよりシドッチ上

陸の地はおおまかに知られていたが、諸説あったようで、現に市販の屋久島の地図や観光案内図に示されているシドッチ上陸地点も、唐ノ浦とは異なっており、松田氏の考証結果を参照している様子がない。残念ながら、シドッチは日本において、その程度にしか認識されていないのである。

さて、唐ノ浦に上陸したシドッチを最初に見付けたのは、恋泊村の百姓藤兵衛である。武士風にさかやきを剃り、四目結の紋のある浅黄色の紋付き袴に、帯刀姿をしていたとはいえ、言葉が通じない。ローマやマニラで学んだ日本語ではやはり歯がたたなかったようだ。

恋泊村は、当時人家わずかに四軒の集落で、近隣も小集落ばかりであったが、二週間後には村役人から薩摩藩庁を経て、長崎奉行所宛てに第一報が送られている。それと同時に、シドッチの身柄は、屋久島で最大の港、宮の浦に移される。しかし、薩摩藩の手では言葉の問題があって、単にローマからやって来た異国人という程度のことしか分からず、シドッチの語る断片的な言葉を長崎に伝えて見ても、長崎側でもさっぱり要領を得なかった。結局、宝永五年十一月になってシドッチは国法に基づき長崎に送られ、オランダ人を介して本格的な取調べを受ける。そこでシドッチは、自分が日本に来たのは、ローマ教皇の命によるものであり布教伝道のためであること、禁教を解いてもらうため江戸に行きたいこと、自分の身

については、本国に送還されるにしろ、日本に留置されるにしろ、また如何ような処分を受けるにしろ、全くかまわないことを申し述べている。そして、その報告が江戸にもたらされたのが、宝永五年の年末であった。

新井白石の登場

宝永五年が六年（一七〇九）に改まると間もなく、徳川綱吉が没し家宣が六代将軍に就任する。このことが、シドッチにとっても、日本の近代化にとっても、大きく幸いした。家宣の政治顧問ともいうべき新井白石が、シドッチに深い関心を寄せ、自ら取調べを願い出たのである。

新井白石……全ての近代の学問が白石に始まっているといっても過言ではあるまい。詩人にして儒学者、儒学者にして政治家、政治家にして百科全書派に比せられる博学者であった白石。江戸時代、熊沢蕃山と並んで多くの儒学者の目標とされた白石は、独学ながら若くして儒学者としての名が高く、初めて木下順庵に師事した三十才の時に、いきなり客員教授並みの待遇を受けた程であった。しかも生涯にわたって続けられた漢詩の分野では、江戸期にあって唯一朝鮮や中国で評価を受けた『白石詩草』『白石余稿』に示されるように、江戸期の代表的な詩人であり、また室鳩巣によれば、若い頃は、俳諧の分野でも桃青（芭蕉）とも競り合ったほどであったという。

政治家としての白石は、家宣の政治顧問を勤めるなかで、長崎貿易制限新令、金銀貨改良などいわゆる正徳の治に大きな功績を残している。またあまり知られていないことであるが、白石が創設に預かった閑院宮家から、後に光格天皇が出ることになり、現皇室に血統をつなぐ基を作ってもいる。白石なくして現天皇家の存在はなかったのである。

しかし何にもまして、新井白石は学者であった。博学者であった。『藩翰譜』『読史余論』『史疑』に示された歴史学者としての力量、今なお続く「邪馬台国論争」の巻頭には、未だ白石の学説がかならず紹介されるほどである。地理学者、言語学者、民俗学者、考古学者、宗教学者、植物学者と並べたててもあまり意味をもたないかも知れないが、いずれの分野においても、白石は当時の水準をはるかに抜き去っていた。言語学・音韻学の『東雅』『東音譜』、民俗学の『南島志』『蝦夷志』、「神は人なり」や「石鏃人工説」の『古史通』など、ほとんど全ての分野で日本初の学説を提出したといっても過言ではないのである。

江戸へ

さて、長崎においてシドッチが一貫して主張したのは、教皇の使者として江戸に行き、将軍に拝謁し、禁教の廃止を願うことであった。奉行所の役人が、宣教師の入国は国法により厳禁されていると強圧しても、それはスペインやポルトガルの宣教師の場合であって、イタリヤ人である自分には適用されないはずだというのが、シドッチの主張であった。何時の時代でも、先例のないことを独断で進めないのが役人である。何事も、江戸の宗門改役にお伺いを立てた。

事実、この件は政治的には微妙な問題があり、奉行所の役人達も、シドッチのことをバテレンとはいわず、単に異国人と称していた程であった。

綱吉死後、六代将軍に就任した家宣は、直ちに「生類憐れみ令」を廃止し、間部詮房や白石を起用して政治改革に乗り出していた。当時長崎は貿易収支の赤字に悩み、国際問題には敏感になっていた時期であった。家宣からの諮問もあり、白石も望んで、シドッチの江戸での取り調べが決まる。そしてシドッチが長崎を出たのは、屋久島上陸からほぼ一年後の宝永六年九月二十五日である。江戸への道中は、厳戒の中で、麻縄をかけられた駕籠に、その長身を屈めて乗せられた。そのため、江戸に着いた時には、両足が萎えて全く起つことも出来なかった。

東西の知性の出会い

江戸では、小石川茗荷谷の山屋敷、通称切支丹屋敷に収容され、十月二十二日から宗門改役（切支丹奉行）の横田備中守（大目付）と柳沢八郎右衛門（作事奉行）の立会いのもとに、訊問が開始された。折りから、今にも雪が降出しそうな寒い日であった。薩摩藩の支給した

南国の着物をまとったシドッチに対して、奉行が暖かい着物を与えようとしたが、シドッチは異教徒の施しは受けないと断り、それよりも逃げるはずのない自分のため、夜も付添う看守に気の毒なので、獄中に繋ぎ止めてほしいと申し入れた。このようなやり取りには、同席者一同、心打たれる思いであった。

ここで白石の本領が発揮される。「そなたは思うにも似ずうそつきだ」と高飛車に決めつけたのである。聖職者をうそつきと決めつけたのであるから、シドッチも大いに気色ばんで、物心ついてから、うそ偽りを申したことはないと反論した。それに対して白石は、看守をつけるのも暖かい着物を与えるのも、ともに貴殿を守るためのものである。暖かい着物を、法の建前で受けられないなら、異教徒の看守のことなど知らぬ顔をすべきであるのに、とやかくいうのは、いずれか一方がうそに違いないと、論理的に責めたのである。矛盾をせめて、相手を承服させるのは、白石の得意とするところであったが、その中に宿る白石の温かさには、シドッチも感じ入った。かくしてここに、東洋と西洋の代表的な知性が対面する奇跡が始まったのである。

白石は、この日に備えて、転びバテレン岡本三右衛門（シチリヤ生れ本名ジョセフ・キアラ）の著書をはじめ、切支丹と海外に関連する和漢籍にはほとんど全て目を通していた。訊問にはオランダ通詞の今村英生も同席したが、予備知識の豊富な白石にとっては、ラテン語まじりの日本語でも結構意は通じたらしい。初日は西洋諸国の地理や歴史がテーマであったが、白石の持参したマテオ・リッチの万国坤輿図が時代遅れのもので、十分な成果は得られなかった。

第二回の訊問は、三日後の二十五日に行われた。こんどは白石はオランダ人が献上したヨアン・ブラウの東西両半球図を持参した。シドッチは、この地図はイタリヤでも貴重なものだと評価し、これを基にして、ヨーロッパの地理・歴史や政治形態のことが、直接詳細に白石に伝えられた。

続いて三十日に行われた第三回の訊問は、切支丹奉行の出席もなく、よりのびのびした雰囲気のもとで行われたが、内容的には前回を引き継ぐものであった。シドッチの天文学から自然科学、地理、歴史に至るまでの博覧強記ぶりには、同じ趣向のある白石をいたく感心させた。これを基にして書かれたのが我が国初の体系的な世界地理書『采覧異言』である。

そして最終回に当る第四回の公式訊問が行われたのは、十二月四日であった。いよいよ核心の宗教問題が取り上げられる。シドッチは、最初の訊問の時から、江戸に来た目的すなわち禁教の解除を求めて、キリスト教についてしきりに語りたかったが、白石はそれまでわざとその機会を設けていなかった。その頃になると白石は、シドッチの博識や知性のみならず、慎み深く謙虚な物腰からにじみ出る人間性、それにも増して、親兄弟とも別れて、自分の利害を眼中に置かず、艱難辛苦のすえにひとり日本にたどり着いた献身的な態度にすっかり魅せられていた。シドッチもまた、合理主義者の裏に潜む白石の人間性に感応して、この人物であれば、禁教解除の機会をもたらしてくれるかも知れないと、期待を高めていた。

切支丹アレルギーの緩和

待ち望んでいた時が来て、シドッチは乏しい日本語の中にあっても最大限の熱弁をふるった。我ら宣教師が日本にやって来るのはけっして領土侵略のためではないこと、その点ではむしろ新興国オランダやイギリスなどプロテスタントの国の方が、激しくアジアに侵入しており、はるかに警戒を要することをシドッチは具体的に説いた。それはオランダなど一介の商人国に過ぎないと見なしていた当時の幕府の認識を大きく変えるきっかけとなったばかりでなく、一方では切支丹への警戒心を緩和させるのに大きな効果があった。

切支丹の教義については、イエス・キリストの誕生から死、そして再生にいたるまでのキリスト教の歴史を説き、キリストは人間の罪を償うためこの世に遣わされたのだと説いた。その説明は、岡本三右衛門（キアラ）の記すところに逐一符合していたという。かくして、領土侵略の意図がないということについては、ある程度誤解を解くのに成功したが、キリスト教の教義については、儒教式の合理的な考え方になじんだ白石にとって、あまりにもドグマに満ちていて、到底理解し得るところではなかった。そのため、白石は西洋の知恵は、形而下には勝れるが、形而上なるものはあずかり聞かずと判断してしまう。後の和魂洋才の始まりである。

そして、いよいよシドッチの身の振り方に係わる訊問が始まった。焦点は、シドッチが布教のためにやってきたのか、あるいは宣教の許可を求める信使としてやってきたのかにあった。シドッチの気持ちからすれば、どちらでも同じようなものであるが、判決を下す側からすれば、大きな違いである。シドッチはたしかにローマ教皇から派遣された使者だと主張してはいるが、国書を持参した訳ではない。白石の気持ちからすれば、なんとか信使としての線でまとめたかったが、証拠は不十分であり、しかも困ったことに、本人は布教への意欲をしきりに見せている。

結局、白石はシドッチの処分案として、上策を本国送還、中策を拘禁、下策を処刑として上申した。結果として、幕閣および家宣が採用したのは、切支丹屋敷に終身囚禁するという中策であった。ただし、囚禁の条件はけっして悪くない。年二十五両の他、五人扶持が給付され、日常の世話をするための召使いの夫婦も付けられた。このような状況は、オランダ人経由でマニラにも伝わった。

シドッチが江戸で厚遇されているばかりでなく、シドッチの毅然とした態度が将軍を動かし、いずれ鎖国政策も緩和されるという噂まで生まれ、それが正式な報告書にも載せられて、一七一三年にはローマにまで届く。その結果、シドッチは在日教皇代理教区長に任命される。

実際、シドッチの囚禁はゆるやかなもので、その後も白石はしばしばこの切支丹屋敷を訪れている。しかし、当然のことながら外部との接触は一切禁じられており、生活は保証されているとはいえ、道を信ずること篤きシドッチにとっては、耐え難い生活であった。かってこの切支丹屋敷に住んだ転びバテレンのフェレイラ（沢野忠庵）やキアラ（岡野三右衛門）のことを想い、その心の動きを自分の心に重ねてみても安らぎは得られなかった。

一方、ちょうどその頃、白石は長崎における金銀等の流出問題に取り組んでいた。日本では江戸時代の前半まで有数の金銀の産出に恵まれ、輸入代金の支払いには、主として銀そして金が当てられ、膨大な量の金銀が海外に流出していた。ところが元禄を過ぎた宝永の頃になると、銀や金の産出が、かっての十分の一以下の水準まで低下してしまっていた。代わりに銅が最大の輸出品として登場したが、それも元禄を過ぎる頃からかげりを見せはじめ、一方では贅沢品の輸入はますます増大し、金銀の不足は貿易制限でもしなければ、どうにもならない状況に至っていた。

白石はこの金銀流出問題を契機に、シドッチに対する疑念を生じる。すなわち、シドッチが既に元禄改鋳の金貨の品位低下を通じて、日本における金銀欠乏を知っており、金銀の威力を利用して布教をしようというそぶりを示していたからである。シドッチが信仰に支えられた無私の人であったことは疑いないとしても、当時の宣教師が経済を知らない訳がない。いやむしろ布教に当たって、経済を武器とするのは当然のことであった。このような疑念もあって、白石は海舶互市新令、通称長崎貿易制限令を立案する。それと共に、切支丹屋敷通いからも段々に遠のく。

召使い夫婦の洗礼

このような中で、シドッチは持てる全てのエネルギーを持って、自分の本来の目的である布教に向かう。とはいっても、唯一の対象者は、召使いの夫婦、長助と阿春である。もちろんこの夫婦は、切支丹屋敷に勤務するだけに事情があった。もともとは転びバテレン岡本三右衛門の召使いであったが、岡本の死後も切支丹屋敷に留め置かれた者である。

さて岡本三右衛門とはどんな人物であったのであろうか。本名をジョセフ・キアラといい、一六〇二年シチリヤ生まれで、日本教管区長フェレイラ（沢野忠庵）の棄教の不名誉を雪辱するため、一六四三年筑前に潜入した十名の宣教師の一員である。それはシドッチの敬愛するマストリリが同じ目的で入国殉教してから六年後のことであったが、結局は逆さ穴吊りの拷問に耐え切れず棄教、キリシタン屋敷で四十二年間生活し幕府の切支丹禁制政策に協力し、シドッチ収監の二十五年前に亡くなっている。遠藤周作の代表作『沈黙』は、キアラをモデルとして、自分が転ばぬ限り信者が拷問を受け続けて死んで行くなかで、いくら祈っても沈黙を続ける神への絶望と、それにもかかわらず神への信頼を寄せる心情を描いている。

シドッチはおそらく同じシチリヤ島出身のキアラについて良く知っていたであろう。長助と阿春もキアラからひそかにキリスト教を学びシチリヤの美しい風土について聞いていたに違いない。シドッチに仕えるようになる頃、夫婦は共に五十歳を越えていたが、シドッチの人間性に触れてそこに神を見る。

そして長助と阿春は洗礼を受ける。そればかりでなく、洗礼を受けたことをわざわざ奉行のもとに自首し、火刑でも磔刑でもどんな極刑に処せられても良いと申し出た。それはシドッチが切支丹屋敷に囚禁されてから五年後の正暦四年のことであった。五十代半ばの夫婦が、このような決意に至ったのは何であったろうか。シドッチの博愛に感激し、シドッチの唯一の希望に自分達の身を献じることで応えたのではなかろうか。そのためには、ひそかに洗礼を受けるだけでは不十分で、それを公表する必要があった。あるいはそれがシドッチの望みでもあったかも知れない。

牢に閉じ込められた長助は十月七日に病死、同年十月二十一日夜にはシドッチも死亡する。絶食死、病死、凍死、憤死、餓死などの説がある。

白石はその知らせに当惑する。信使として助けたのは、シドッチとの無言の約束であったはずではなかったか。その好意を無視された無念さ、しかしそれにもまして、シドッチの勇気ある行為に思いが揺れた。そして、シドッチの死を機に『西洋紀聞』の執筆を開始したのである。この『西洋紀聞』は、漢文体で書かれた世界地理歴史書の『采覧異言』を補完する形で、国文で書かれており、天主教の紹介やその批判に重点が置かれている。

蕃書の禁の緩和

鎖国の江戸時代にあって、この両書ほど政治家や知識人に国際的な意識を開眼させた書物はなかったであろう。なによりも大きかったのが、享保五年（一七二〇）に吉宗が「蕃書の禁の緩和」をしたことである。家宣、家継に代って政権に就いた吉宗にとって、政治力学的には白石を排斥するのが当然の成り行きであったが、意外にも政策面では白石の施策を多く継承している。特に長崎貿易制限令や金貨改鋳政策は、吉宗に至って定着を見たほどである。その流れにあって、吉宗は禁書緩和の政策をとり、実用的な蘭学を奨励したのである。

蘭学の興隆ほど鎖国日本を利したことはなかった。元禄の文化爛熟を経て、日本人の好奇心は島国内には留まり得なかった状況のなかで、蘭学が開花する。その頃ちょうど、ヨーロッパでは近代化そして産業革命への足音が急速に高まっていた。時代は動き始めていた。

そのような状況にあつて、中国はもちろん朝鮮も長い間中華文明の絶対的な優越意識に支配され続けていた。吉宗が禁書緩和を決めた一七二〇年には、中国では逆に清の康熙帝がキリスト教禁令を出す。それに対して日本では、鎖国下にありながら、西洋に眼を開き、医学、天文学、自然科学などを中心にして蘭学者と呼ばれる者が百名以上も輩出するようになる。ドイツのアダム・クルムス教授の近代解剖学の名著がアムステルダムでオランダ語に翻訳されたのが一七三二年であるが、それが輸入され、オランダ語をほとんど解さぬ杉田玄白らによって『解体新書』として出版されたのが一七七四年である。近代鋳砲の技術書ヒュゲーニンの『ロイク国立鋳砲所における鋳造法』が出版されたのが一八二六年であるが、十一年後には早くも日本に入っており、この本だけを基にして、多くの反射炉や洋式高炉が日本各地に建設されたのが一八五〇年代である。また化学に関する最新知識が宇田川榕庵により『舎蜜開宗』として一八三七年に紹介され、一八〇七年に発明された雷管についても、尾張藩の医師吉雄常三が国産に成功したのが一八四三年である。

かくしてペリー提督がやって来た一八五三年頃には、緒方洪庵の適塾に学ぶ者が三千人にもおよび、オランダ語を自由に使える蘭学者が数百名に達していたという。

半周遅れで走れた明治維新

ヨーロッパは産業革命を経て激しい勢いで走り始めていた。しかし蘭学のお陰で時差は数十年、いわば半周差であった。大差ではあったが、中国や朝鮮のように一周遅れにはなっていなかった。その頃、朝鮮では知識階級で西洋語を理解するものなど皆無であったことや、阿片戦争が起った時に、清の道光帝をはじめとする多くの官吏がイギリスがどこにあるのかさえはっきり知らなかったことを思うと、如何に蘭学の隆盛が日本を救ったかがわかる。明治維新の直後、政府高官がこぞって、混乱収まらぬ日本を後にして米国やヨーロッパに向かったのも、その流れの中にあってこそ理解できよう。

日本における近代化の成功は、歴史的に見れば僅差の幸運によっている。もし蘭学の興隆がなければ、朝鮮や中国と同じ道を歩んだ可能性が高い。吉宗をして「蕃書の禁を緩和」させた蘭学の祖新井白石。そして新井白石をして『采覧異言』や『西洋紀聞』を書かせしめたジョバンニ・バッティスタ・シドッチ。大袈裟にいえば、シドッチと白石が明治維新以降の躍進を生み、日本の現在を築いたのである。

果物物語（二）

青木昭成

次郎柿

「次郎柿ゃあ　森町の原産だで」
町の衆は　一様にそう自慢する
だけど隣の町に住んでいたから
「嘘だに」
と　いっつも密かに思っていた
四角ばって　大きなあの　ほっぺ
うちの背戸でも毎年　だがぼっちら
ぼっちら成って　原産の由来など
聴く暇などないまま食べられてしまっていた

そうだ次郎柿　そのおまえを
森の次郎さんが贈ってくれた
おまえの容姿は変わらず　いかつい
男衆に育てられたせいなのか
喋らず　怒らず　だが急に熟しやすく
森町のはずれの字・森の
山の畑では鋏の音が　ぽきり　ぽきり
今日もゆったり　だが急ぎつつ鳴っているだろう

だから　そう言う理由なのか
次郎柿　おまえの肌は
つるべおとしの晩秋のいろ
明快だが　いそいで染めあげられて
甲冑の緋おどしの　火のいろ
あくまで明るく濃い　紅花のいろ
そして　内部から
おのずからに浮きあがる　あの薄い
白粉　あれは一体何んなのか

だから次郎柿　おまえはまた
冬のはじまりの手ごろな　重み
人の門歯にかすかに残す　それは

果物だけが持つ　それ　その固さ
舌に　ふとひろがり　だが
一気でない甘味をよみがえらせる
霜の溶ける音がきこえる
冷気が人の喉元をなでてゆく

だから次郎柿　おまえは
こうして冬のはじまりの使者か
そう言えば　おまえを探し出してくれたのは
松本次郎と言うお人とか
安政の頃の
いや次郎右衛門さんかもしれない
いや次郎兵衛さんだったかもしれぬ
むかし　伝聞が真実になり
いまは　真実が伝聞になり

こうして目のまえの　おまえは
富有でなく　会津身不知でなく
まして御所柿の仲間でもない

ラ・フランス
だが　ナイフに伝わり
いちずに果肉が放散する香り
日本人があまり味わいなれない　それは
香気と呼ばれる一つの強さ
まさしくそれは洋梨

ラ・フランス
ラ・が女性の定冠詞であるのは
西洋のならわし　けれど
フランスと続けたことで
「そばかす美人」の洋梨の香気が
日本人の嗜好までも変えてしまったのか

ラ・フランス
雪国に育てられて
缶詰でしかお目に掛れなかった　その
ふやけた姿　その甘過ぎた味覚よ
今は　一個　一個づつ太い柄を
自分の中心に突き立てて居並ぶ

ラ・フランス
長十郎や二十世紀の季節はもう終わった
彼女だけが強靱に　しかし　神妙に

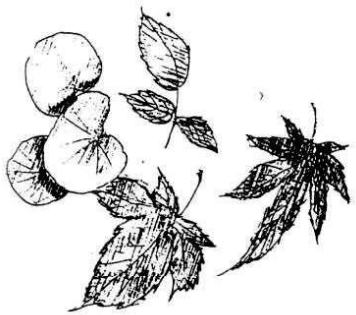
ラ・フランス

舌つづみを打つ
たらふく食らう
などと食材について日本人は　時に
なんと即物的なもの言いをするものだ
だが　なんとこれはまた優雅な
もの言いを言おうと工夫したものなのか

ラ・フランス
そのとき　造物主は掌の力を抜いて
余所見していたのにちがいない
そのとき　造物主は絵の具の筆を
落とした土からただちに拾い上げ
そのまま塗り続けたのにちがいあるまい

ラ・フランス
それはなんと妙な
みじかい「ひさごかた」であることか
それはまた「そばかす」に
ひどくまみれた黄緑の肌であることか

おのれの時代とおのれの存在を
主張してやまない





ＯＢ株式会社

三戸岡道夫

西暦二〇〇〇年の朝は晴れやかに明けた。一月一日の朝、クリーン・バンク頭取の聖徳太平は、頭取室の窓からあかずに空を眺めながら、

「うむ、よい空じゃ。今年はよい年になりそうじゃのう」

と、傍らにいる秘書役の泉ピン太郎に話しかけた。

「さようでございます。二十一世紀の空は、その色、その光、すべてが二十世紀と違います。二十一世紀は二十世紀の延長ではなく、一千年代から二千年代への転換期です。今年は千年に一度のチャンスです」

「その千年に一度のチャンスがわがクリーン・バンクにも来たのだ。今日からスタートするマルチ・スーパーマーケット…」

「いえ、頭取、違います。マルチ・スーパーリージョナルでございます」

「うむ、そうだったな、マルチ・スーパーリージョナル…」

昨年の暮にクリーン・バンクを中心とする二十ほどの第三地銀が統合することに決って、マルチ・スーパーリージョナル・メガバンクがこの一月一日からスタートすることになったのである。その持株会社の名前は寿松竹梅株式会社といい、社長は聖徳太平である。

「今日からは頭取であると同時に統括会社の社長でございますから、そのお覚悟で…」

「うむ、なにか討入り前夜のような気分だのう、いささか足が震える」

「それは武者振いではありませぬか」

「うむ、そうかもしれぬ」

そのために今日、一月一日の朝、持株会社の発会式が行われることになっていた。銀行の正月は、三が日が休みで、仕事始めは四日からである。しかし二十一世紀はそんなことを言っている時代ではない。しかも今日は千年に一度の吉日であることから、慣例を破って、一月一日午前九時に発会式が行われることになったのである。

だから聖徳頭取は夜明け前から、本店ビルの最上階にある頭取室に出勤して、その高みから初日出を拝み、明けゆく東空にたなびく瑞雲に、新銀行の未来を占っていたのである。

「如何でしたか、新銀行への卦は？」

ピン太郎秘書役の問いに、

「うむ、上上吉じゃ」

聖徳頭取の顔は輝いていた。

発会式の時間が刻々と近づいていた。

「頭取、そろそろお時間でございます」

「うむ、では参ろうか」

大会議室のヒナ壇には、今回統合された二十の銀行の頭取が並び、会場には二十の銀行の全重役、本部の部長、それに主要な支店長たちが勢揃いしていた。が、どうしたことか、そこには、聖徳頭取の指示で二十の銀行のＯＢ会の会長も出席しているのだった。

（なんでＯＢ会の会長が？）

人々は不思議に思ったが、聖徳頭取の頭は、聖徳太子のようにいつもくるくる動くので、何を考えているのか油断がならなかった。

聖徳頭取は壇上、中央に立つと、

「今日は千年に一度しかないめでたい日です。このめでたい日に、わがマルチスーパーリージョナルメガバンクがスタート出来たのは、二十一世紀初頭の瑞祥事と壽ぐばかりであります」

先ほど頭取室で練習したおかげで、スーパーリージョナルをスーパーマーケットなどと間違わずにすんで、ピン太郎秘書役は胸をなで下した。

「さて、そのリージョナルバンクの構想でありますが、これまで二十あった銀行を新構想の下に業務別に分類して、三つの銀行に再編成し、持株会社の下にぶら下げます。その名前は、壽松銀行、壽竹銀行、壽梅銀行の三行であります」

会場からすかさず、

「さすがいい名前ですなあ」

と賞讃の声が上がった。その讃美に応えるように聖徳頭取は一段と声を張り上げて、

「今後われわれはこのリージョナルバンクの上で、金融に関連する森羅万象を営業内容として、金融ビッグバンを乗り切っていくわけでありますが、私はここで皆さんに一つのことを約束いたします。新銀行になっても、私はリストラはやりません」

眉のあたりにきっと決意を浮かべて、そう言い切った。

どのくらいのリストラが言い渡されるかと戦戦恐恐としていた会場からは、

「え、え、えっ…、本当ですか！」

と驚きと喜びのどよめきが起こり、

「ブラボー」

「さすが聖徳頭取！」

の歓声が上った。

「お静かに…」

ピン太郎秘書役があわてて声を制した。聖徳頭取のスピーチはつづく。

「…と申しますのは、わがリージョナルバンクは、金融に関連する森羅万象にむかって、事業を拡大するからであります。そのためにはいくら人があっても足りません。リストラをするどころか、新たに人を採用したいくらいです」

（これは凄いぞ。銀行統合とは人間のリストラだと思っていたのに、わが新銀行はそうではないんだ。これなら新銀行発展にむかって、全行員の意欲が盛り上がることまちがいない）

と会場の眼は輝いた。

「だが、人が必要だといっても、これからは何か特技を持った人間でないと役に立ちません。何の特技もなく、ただ漫然と銀行に来るだけの人間は必要ありませんから、念のため」

と釘を刺すことも忘れなかった。

「さて、それでは新しい事業拡大とは何ぞやということになりますが、我々がこれから目ざすのはシルバー・マーケットであります。皆さんもご承知のように、二〇二五年には日本の人口の四分の一が六十五歳以上になると言われています。すなわち約三千万人です。これは巨大な金融マーケットです。我々はこれを新銀行の戦略マーケットにしようというわけであります」

（うむ、そうなのか）

と会場の無数の顔がいっせいにうなずいて、すすきの穂のように揺れた。

「が、その中で、最初に手をつけるのが老人介護の仕事であります。三千万人の老人のうち、十パーセントから十五パーセントぐらいが、病気になったり、ボケになったりして、介護が必要になりますから、その人間が全国で三百万人から四百万人になるわけです。その介護が社会的にも大きな問題となり、この四月から介護保険制度がスタートするわけですが、わが新銀行もその社会のニーズに応えて、介護の金融商品をこの四月から発売することを計画しています。その具体的な内容を申し上げますと、ボケ定期預金と、ボケ信託です」

（ボケ定期預金と、ボケ信託…？）

聞き慣れない言葉に、会場はどよめいた。すると企画担当の笑福常務が立ち上って、

「お静かに…、わたくしからその詳細を説明いたします。まずボケ定期預金ですが、一口に言えば、定期預金が満期になったら預金で支払う代わりに、サービスで支払うという仕組みの預金であります。老人がボケた場合、欲しいのは少しばかり高くても金利ではなくて、不自由な身体を世話してくれる介護です。食事の世話とか、車椅子での移動とか、お風呂に入れてくれるとか、洗濯とか、さまざまな介護です」

「それで…」

「介護するにはヘルパーが必要です。ヘルパーを頼むにはお金が必要ですから、ボケ定期預金から順次支払っていくのです。しかし預金を本人に支払い、本人からヘルパーに支払うというのではなくて、預金を毎月一定額をヘルパーに支払い、ヘルパーはその金額相当だけ、毎月本人へ介護サービスをする―、そのようにすれば、結果的に定期預金を介護サービスで支払うという、新しい商品が出来るわけです。そのためにボケ定期預金は予め満期日をもうけずに、預金者がボケた時をもって満期到来とし、その日から介護サービスが始まるわけです。これこそ二十一世紀の初頭を飾るにふさわしい金融商品であること、まちがいありません。なお、このように考えてきますと、預けるものは必ずしもお金でなくてもいいことになります。不動産でも、株式でもいい。そうなりますと一種の信託です。ボケ信託とでもいうことになるわけです」

（なるほどよくわかりました）

会場はいっせいにうなずいた。

笑福常務の説明が終ると、ふたたび聖徳頭取が壇上に立ち上って、

「さて、そうなりますと、我々としては介護するヘルパーを養成して、たえずプールしておくことが必要になります。が、この介護サービスを銀行本体で行うというわけにはいきませんので、これをＯＢ会でやってもらおうと思うのです」

会場の眼がいっせいに二十人のＯＢ会会長に注がれ、

（今日の発会式にわざわざＯＢ会の会長が出席しているのは、この為だったのか）

と納得した。だが、その時聖徳頭取は、

「そのためにはすべてのＯＢ会を一つに統合して、これを株式会社にする予定です」

と、とんでもないことを口走ったのだった。

（えっ、ＯＢ会を株式会社にするんだって？）

二十人のＯＢ会長はもちろんのこと、会場全体も飛び上らんばかりに驚いたが、聖徳頭取は平然と、

「そしてそのＯＢ株式会社を、壽松銀行、壽竹銀行、

す。だが、これは真剣な思いつきです」
と、二十人のOB会長の顔を一人一人のぞきこむようにしながら、
「二十の銀行が統合されたわけだから、二十のOB会も当然統合せねばならぬ。その人数がどのくらいになるのか、まだ正確には調べてはないが、聖徳会の人数が千五百人だから、かりにその二十倍だとすると、三万人ということになります。三万人ですぞ、三万人…」
「うへ、凄い人数ですな」
「考えてみると、これは新銀行の行員の数と、ほぼ同じ人数なんです。その上どのメンバーも、老人力に溢れている。プロ並みにパソコンをこなす人間もいれば、介護の資格を取っている者もいる、その他、写真家、植木屋、多士才才、一種の職人プロ集団で、これは巨大勢力ですよ。これを統合するには従来の親睦団体という単純なものではなくて、株式会社という強力な組織に結集させねば、とてもまとまりがつきません。そうすれば巨大な力が発揮できます」
「なるほど、わかりました。それで資本構成とか、社員はどのようにお考えで…」
「OB全員が株主になるのです。一人一万円ずつ出資すれば、三億円の資本金になります。同時に、OB全員が社員になる。三万人の社員というわけですな」

壽銀行の三つの銀行に並んで、持株会社の下にぶら下げることにいたします」
そう新構想をぶち上げて、騒然とした空気の中で、発会式は終了した。

発会式が終わり、頭取室へ引き上げた聖徳頭取は、すかさずピン太郎秘書役へ、
「OB会の会長を呼んでくれ」
と指示した。
「二十人、全部でございますか」
「そうじゃ、全部じゃ」
OB会の組織をクリーン銀行を例にとって説明すれば、それは聖徳会という名前で組織運営されていた。しかし会といっても法人格などはなく、会員千五百人程度のただの親睦団体にすぎなかった。
やがて二十人のOB会会長が頭取室に集まると、聖徳会会長の鈴原丈彦が代表して、
「なぜ、OB会を一挙に株式会社にするのですか。その理由をお聞かせ願いたい」
と質問した。瞬間、聖徳頭取の顔に、にやりとしたものが走って、
「いや、ほんの思いつきでそう言ったまでじゃ。さっきスピーチをやっている時、鈴原会長の横顔が眼に入ったら、急に、あっ、株式会社だと思いついたので

「でも、三万人の社員に給料が払えますか」
「馬鹿を言うな。給料などは払わない。無給です。それのみならず、今、毎年、年会費を払っておりますな、それを今度は会社への上納金として引つづき払ってもらうのですよ」
「む、む、む、それはよい考え…」
「だが、給料を払わぬ代りに、仕事のチャンスを与えます。そしてその仕事が成功した場合には、報酬の半分は自分のものとし、あとの半分は会社へ臨時上納金として納めます。さすれば働けば働きに比例して金が懐に入り、仕事にはげみがつこうというものです」
「会社へは入ってくるだけで、出るものがない。ちょっと、なんとか組のシステムに似ていますねえ」
「そんなことはちっとも構いません。二十一世紀のメガバンクです。株式会社とても新しい発想で運営せねば、グローバルスタンダードに乗り遅れますぞよ」
「頭取がそこまで広い視野で圣営をお考えとは存じませんでした」
「それから会社の名前は鶴亀株式会社としたい。シルバー産業、介護産業を戦略マーケットにするわけだから、長寿のイメージがよかろうと思ってな」
「銀行が松竹梅で、OB会社が鶴亀、これほどめでたい名前はありませんな」
「うむ、そして今後は人事の面でも、松竹梅と鶴亀の間で、活溌な人事交流を行いたいと思っている」
「えっ…、人事交流を？」
「そうじゃ。わたしは発会式でリストラはやらぬと宣言したからな。その代わり人事交流をするのじゃ。このぐらいの戦略がやれぬようでは、これからの銀行圣営はつとまらぬぞよ、ウハ、ハ、ハ、ハ…」
人事交流の深い意味を知って、OB会会長たちもにんまりしたのだった。

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日）
春季号……二月一日…十二月三十一日
夏季号……五月一日……三月三十一日
秋季号……八月一日……六月　三十日
冬季号……十一月一日……九月　三十日



老春繚乱

―ヘブンズパスポート―

三戸岡道夫

片岡文彦は高校二年生である。三年生になれば受験期に入り頑張らなくてはならないが、今はちょっと受験の間にあって、比較的のんびりした高校生活を送っていた。

学校の休憩時間。親友の坂田進が、

「おい、文彦、ヘブンズパスポートって知ってるかい?」

と声をかけてきた。

「えっ、なに…、ヘブンズパスポート?」

「いい事をするたびにシールを貼って、百枚たまると願いごとがかなうという手帳のことさ。今、流行だよ」

「へーっ、そんな手帳あるんだ。なにか面白そうだな。で、進、君は持ってんのかい」

「うん、先週買って、もうシール貼っているよ」

「へーっ、いま持っている?」

「うん」

「じゃあ、見せて、見せて」

ヘブンズパスポートというのは、最初ある若いデザイナーが考えて作った手帳である。その仕組みは、

(百回いい事をしたら願い事がかなう)

という考え方で、何かいい事をしたらそれを記録していくのである。その記録方法として、手帖にシールを貼る。百枚貼れば完成で、その手帖にヘブンズパスポートという名前をつけたのである。

(願い事へのパスポート)

とでも言えばよかろうか。そのために手帳を実物のパスポートとほぼ同じサイズにしてあるのである。

進は鞄の底をごそごそやって、ヘブンズパスポートを取り出した。

最初のページにプリクラで撮った進の顔写真シールが貼ってあり、その次の願いごとを書きこむ欄に、

(大学受験合格)

と書いてあった。その次にシールを貼る欄があって、すでにシールが十枚ほど貼ってあった。

「へえー、やってるね。でも、いい事って誰が決めるの?」

「それは自分で決めるのさ。まあ、自分一人でやる一種のゲームみたいなものだからね。自分がいい事だと思えば何でもいいんだ。大きい事だって、小さい事だって、自分がいい事だと思えば、それでいいんだ」

「じゃ、進、これまでにやったいい事って、たとえばどんなこと?」

「うん、それはここにメモしてある」

手帖の末尾には、いい事の記録欄があって、そこには、

・道に散らかっているゴミを片付けた
・駅の放置自転車を整頓した
・おばあちゃんの肩をたたいた
・煙草を吸うのを一日やめた
・母に起されないで朝起きた
・宿題をサボらないできちんとやった

などいろいろ書いてあった。

「ずいぶんゴチャゴチャしているなあ」

「ということは、いい事っていろいろ沢山あるってことさ」

「起されないで朝起きるなんて、当り前じゃないか」

「うん、そうかもしれない。でも、おれにとってはいい事なんだ。いつも起されないと、起きないから」

「でも、道のゴミを拾ったり、おばあちゃんの肩たたいたりしたくらいで大学受験合格だなんて、セコいよ」

「いいの、いいの、そう文彦みたいに真面目に考えなくても。一種のお遊び、ゲームなんだから」

「それに、願いごとのためにいい事をするって、動機が不純だよ。いい事って、もっと純粋に人間の善意でやるものだろう」

「それはそうだけど、動機はどうだって、いい事はいい事だよ。やらないよりは、やった方がいい。文彦、君もそう理屈ばかり言ってないで、ヘブンズパスポート買ってみろよ。いい事って、やると、気分がすっとするよ。ファイト一発リポビタンDじゃないけど、元気が出る」

「ふーん、あんまり気乗りしないなあ」

「おれは一生懸命やって、来年の受験までにはシール百枚集めるよ。そうすりゃ見事、大学合格だ。うれしいなあ」

「ちえっ、進、おまえ、少しおめでたいよ」

(ヘブンズパスポートなんてセコいよ。あまり気乗りがしないなあ)

と思いながら文彦は家へ帰ってきたが、なぜかいつまでも頭のどこかにひっかかって離れなかった。

「ただ今」

家に着いたが、返事はなかった。

「お母さん、居ないの？」

母のまき子は祖父の入浴の世話をしているところで、文彦の声が聞こえなかったらしい。

祖父の健治郎はボケのため、一人で入浴できなかった。そのためまき子は夜は忙しいので、手がすいている昼間の時間に健治郎の入浴をすますのだった。

「おじいちゃんのお風呂？」

文彦は奥へむかって声をかけた。

「あら、お帰り」

母の声はしたが、祖父の入浴が忙しくて顔を見せなかった。文彦の足はいつもはそのまま二階の自分の部屋へ上ってしまうのだが、今日はどうしたわけか風呂場へむかったのである。

風呂の湯気と匂りが、鼻をつく。母が、裸の祖父の身体をバスタオルに包んで、一生懸命に拭いているところだった。

（母さん、大変だな）

と思った。

が、その母にされるままに立っている湯上りの祖父の姿を見たとき、文彦の頭に、幼い頃祖父に手をひかれて飴を買いに行ったり、その帰りに公園のすべり台で遊んだり、またゲームの相手を根気よくしてくれたことなどが思い出され、その瞬間、

（あっ、ヘブンズパスポートだ）

という思いが、ぱっと花火のようにひらめいたのだった。

文彦はやにはに浴室へとび込むと、

「ぼくがおじいちゃんを拭いてあげるよ」

母の手からバスタオルをむしるように取ると、祖父の身体を拭き出した。

「え、えっ…、文彦どうしたの、今日は」

「別にどうもしないさ」

おじいちゃんの肩や背中には黒いしみが点々とあり、肌がたるんでいるのを少しかわいそうだと思いながら、文彦はていねいに拭いた。

祖父は気持よさそうな表情で、文彦のされるままになっていた。母は、

「文彦が手伝ってくれると助かるわ」

と言いながら、手早く下着の準備をし、いつもより早く祖父の入浴を終えることが出来た。文彦の心に、これまでなかった何かが、ぽっと、生れてきたような気がした。

翌日、文彦は池袋のバライティショップへ出掛けると、ヘブンズパスポートを買い、その第一号シールを貼った。

そして、

（おじいちゃんにやってあげられることは、まだいろいろあるなあ。これなら進のシールに負けないぞ。おじいちゃんはヘブンズパスポートの宝庫だ）

と思った。

祖父の健治郎はいつも家でおとなしくしているのだが、徘徊が始まると大変だった。どこへ行ったのか、わからなくなってしまう。

その徘徊を防止するには、時々、健治郎を外に連れ出して、運動をさせておくといいということがわかってきた。それで、一週間に二度ほど、まき子が健治郎に付きそって散歩に出ることにしていた。ここにもヘブンズパスポートのチャンスがあるなと思った文彦は、

「お母さん、おじいちゃんの散歩、たまには僕が代わってやるよ」

「えっ、どうして急に親孝行になってしまったの。いや、おじいちゃん親孝行かな」

「ううん、親孝行っていうわけでもないけど、お母さん、結構大変みたいだから…」

そんないきさつがあって、文彦は時々、健治郎といっしょに散歩に出ることになった。

家を出て、小公園の中を抜けて、お寺の境内を通って、駅の方まで行くと、帰りは商店街を帰ってくる大した距離ではないのだが、二人でゆっくり歩いていくと、結構いい運動と気晴らしになった。

そんなある日、散歩の途中、友達に逢った。友達は、

「おじいちゃんの散歩かい」

「うん」

「犬の散歩の方がカッコいいのに」

その心ない友達の言葉に、文彦は、

「おじいちゃんは犬じゃないよ」

と憤然とやり返した。

小公園のすべり台の横を通る時、いつも文彦は、幼稚園のころ健治郎につれられて遊びに来たことを思い出した。文彦がすべり台に上ったり、すべったりして、何回も歓声をあげるのを、健治郎は眼を細めていつまでも見守ってくれていた。そんな昔を思い出すと、文彦は急にそんな昔に還りたくなった。

「おじいちゃん、昔、ぼく、このすべり台ですべったね」

「すべり台、ああ、そうだったなあ」

健治郎にもその思い出は残っているようであった。

「今日もすべってみようかな」

「うん、うん」

「おじいちゃん、見ててくれる」

「うん、うん」

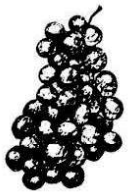
何を言っても、うん、うん、だが、明らかに健次郎の眼は何かを期待していた。

文彦はやにわにすべり台にかけ上ると、
「わーい」
歓声をあげて一気にすべり下りた。
「ねえ、今度はおじいちゃんが滑ってみない。ぼく、見ててあげる」
「うっ…？」
健治郎は蛙が押しつぶされたような声をあげたが、眼は好奇心に光っている。そしてすべり台にむかって歩き出した。
文彦はあわてて、健治郎がすべり台の階段を上るのを、後から助けた。そしてすべり台の上にいっしょに乗ると、健治郎をゆっくりしゃがませて、背後から支えるようにして、いっしょに滑り下りた。
「おじいちゃん、やったね」
文彦が大声で叫ぶと、
「うん、やった、やった」
健治郎はまるで子供のようなはしゃぎようで、喜びの声をあげた。
その日散歩から帰ると、文彦は急いでヘブンズパスポートへシールを一枚貼った。そして記録欄に、
（おじいちゃんと散歩）
と記入したが、さらにちょっと考えて、
（おじいちゃんとすべり台）
と記入して、もう一枚シールを貼った。
こうして文彦のヘブンズパスポートのシールは、十枚、二十枚とふえていき、親友の進のシールとひけを取らないようになっていった。
年が明け、高校三年生に進学する頃になると、文彦のシールは百枚に達し、見事ヘブンズパスポートは完成したのである。
「今年は文彦、受験期ですよ。頑張らなくっちゃね」
とまき子が言うと、文彦は、
「大丈夫、ぼく、大学合格まちがいなしだから」
「えっ、どうして？」
「おじいちゃんのお蔭さ」
「……？」
その日から、文彦のヘブンズパスポートは、二冊目を目ざしてスタートを切ったのである。

笹ケ崎村（九）

太田和貞

毒まんじゅう



「しげ、……。しげ、……」
何度も呼ばれて、しげは目をあけた。
目の前に、十郎兵衛の顔があった。
「お、おう。気が付いたか、……」
しげの顔に十郎兵衛の涙がポタポタとこぼれた。
（旦那さまは、なぜお泣きになるのだろう？）
しげには、十郎兵衛の涙が解せなかった。
「しげ、しげ、……」
十郎兵衛の声が次第に遠ざかるのを感じながら、しげは目をとじた。
長八が濁流の中で、しげの手を運よく摑んだとき、しげの体はすでに硬直が始まっていた。
体を丸めて濁流の底を転がっていたしげを探し当てた喜びよりも、しげの体の異常さに長八は驚いた。
「見付けたぞう！。早く、早く、舟をよこせ！」
しげの体を抱いて、濁流に浮んだ長八は大声で助けを呼んだ。
田舟に引き上げられても、しげは体を丸めていた。
長八はしげの背中に当てた膝と両肩に置いた両手で、一気に活を入れた。
しげが、すーっと大きく息を吸い込んだ。
そのあとは、静かな呼吸が続き、硬直して丸めていた体も次第に伸び始めた。
蒼白だった顔色がすこしずつ赤みを帯びてきた。
（奥さまは、名主さまの夢をみていなさるのか？）
長八が、そう思う程、しげの顔はおだやかで、口元に微笑さへ浮べているように見えた。
それから丸一日間、しげは眠り続けた。

二日目の朝、しげはようやく目をあけた。
「お気が付かれましたか、……」
聞き覚えのある声に、思わず、「はい」と答えて、起き上がろうとして、しげは、「あっ」と小さな声をあげた。
「急に動いては、いけません。静かにお休みしていましょうね」
掛け直した掻い巻きを軽るく叩いてくれたやさしさに、
（はて、どなたであろうか……）
と、しげはゆっくり目を開けた。
しげが娘時代にお針を教えて貰った善養寺の大黒さんの顔が、しげをのぞきこんでいた。
「気が付かれたことを十郎兵衛殿にお知らするために、誰か使いを出しましょう。十郎兵衛殿もきっと喜ばれますよ」
使いを出すために、座敷を出ようとした大黒さんが、
「そう、そう。忘れるところでした」
と振り返って、
「床の間のツユクサは十郎兵衛殿が生けられたのですよ。おしげさんが流されるすこし前に、十郎兵衛殿がおしげさんに贈ろうとして、摘まれたそうです。わしの懐の中でツユクサが無事だったから、しげもきっと目をさますと、そうおっしゃって、ご自分で活けられました。重湯を持ってまいりますから、それまでお花を眺めていてくださいね」
と言って、床の間のツユクサをしげの枕元に置き直してくれた。
小さな花器に無造作に生けられたツユクサは愛らしかった。
（旦那さまが、私のために摘まれたツユクサ）
そう思うだけで、しげは心が躍った。
嫁にきてこの方、十郎兵衛から花を贈られたことは無かった。しかも、十郎兵衛自身が、そのツユクサを生けたと聞かされて、しげはそのツユクサから目が離せなかった。
ツユクサは小さなチョウが青紫色の翼をいっぱいに広げて、しげの枕元を飛び回っているように見えた。
「さあ、さあ。重湯ですよ。たくさん召し上がって、早く元気になりましょうね。十郎兵衛殿には今、使いを出しましたので、おっつけお見えになるでしょう」
起き上がったしげの口に重湯を運ぼうとするのを、しげは口に手をやってさえぎり、居住いを正してから、
「この度は、いろいろとありがとうございます」
と礼を言った。
「これは、これは、ご丁寧なごあいさつ。着物に仕付け（仕付け糸）、人には仕付け（躾）が大事ときびしく教えてきた私ですから、今のおことばはありがたくいただいて置きます。でも、これからは肩の力を抜いて、養生、養生、……」

しげの緊張をほぐすかのように、大黒さんは笑顔で言った。その笑顔に、しげは、
「私を助けてくださったのは、どなたでしょうか？」
と真顔で尋ねた。
「それは長八さんですよ。泥の底から長八さんがおしげさんを探し当てて、田舟に押し上げてくれたそうです。さすが河童の長八だ。あの泥海の中から奥さまを探し出すとは驚いたもんだと村の人たちは噂していますよ」
大黒さんの話しを聞きながら、しげは右手を見詰めていた。
（あれが長八だったのか、……）
しげはかすかに残っていた記憶を確かめるかのように、両手を胸に抱いた。
十郎兵衛が、しげの部屋に戻ってきたのは、夜も遅くなってからだった。
「すまん。すまん。いろいろと手筈を整えていたので、こんなに遅くなってしもうた」
そう詫びながら十郎兵衛は、しげが臥せっている部屋に入ってきた。
「よかった。よかった。しげが元気になって本当によかった」
十郎兵衛は何度も、そう言ってうなずいた。
その夜、遅くまで十郎兵衛としげは、長八のことについて話し合った。
「旦那さまにお願いがあります」
しげが思い詰めた顔で、切り出したのは、長八を養子にしたいということだった。
「唐突にそう言われても、……」
十郎兵衛は言葉を濁したが、十郎兵衛自身も長八のことを考えなかった訳ではなかった。
最初は、しげの話しに反対していた十郎兵衛も、
「旦那さまの代で、この名主の家を潰してしまうお積りですか？」
と言う、しげの反論に、
「わかった。わかった」
と十郎兵衛は言わざるを得なかった。

河童の長八、さかなを
つりにきたけれど、
流れの凄さに驚いて、
あっちへ、ひょろひょろ。
こっちへ、ひょろひょろ。

満水の小合溜井を前にして、即興で唄い、踊った長八の当意即妙は平左衛門から聞いて、十郎兵衛は感じ入っていたし、足をすべらせて用水堀にはまっても、
「只今、お見せいたしましたのは、河童の川流れにござ～い」

と大声でおどけて見せた機転に驚嘆もしていた。
人の心をすばやく見抜き、たくみに人の心を捕えるのは長八の天性といえた。
「名主は百姓たちの心を忘れてはならぬ」
と常々、自戒していた十郎兵衛にとって、長八は好ましい若者に映っていた。
松丸太になった昇龍の松から跡継ぎのいない淋しさを、嫌というほど思い知らされたその日に、しげが長八に助けられた。
（長八を跡継ぎに）という気持ちの上に、さらに、（やはり縁が深いのだ）という気持ちが重なり合った。
しかし、しげを気づかう気持ちが浮び上がって、（長八を跡継ぎに）という気持ちは心の奥に沈んでしまった。
それが、しげの「長八を養子に迎えたい」という言葉に、再びむくむくと心の奥からその思いが頭をもたげてきた。
「しかし、跡継ぎといっても、……」
十郎兵衛は煮え切らない返事をした。
「旦那さま。私は赤子をこの胸に抱きとうございます。長八に、旦那さまか、私の縁戚の娘を娶せて、その赤子を抱きとうございます」
しげは十郎兵衛の顔を真正面から見据えて、はっきりと言った。
しげの目は、
（旦那さまも、そうではありませんか、……）
と問い掛けていた。
「……」
十郎兵衛は黙っていた。
（長八が、わしの悴に、……）
ともすれば、口の端に浮かび上がってくる笑みを十郎兵衛はこらえながら、
「むずかしいのう、……」
と言った。
（わしが隠居して、長八に十郎兵衛を名乗らせよう。十郎兵衛の名とわしが後見人になれば、……）
しげの顔を無表情に見返しながら、十郎兵衛は心の中で、そんなことを考えていた。

しげが濁流に押し流された次の日から、空を覆っていた雨雲が切れ始めて、雲の切れ目から薄日が差し始め、六月中旬から降り続いていた雨が嘘のように、ピタッと降り止んでしまった。
（どうにか、持ちこたえたか、……）
十郎兵衛は雲の切れ目から、チラッとのぞく青い空を見上げながらそう思った。
江戸および近郊の農村は、利根川および江戸川の氾濫でたびたび洪水に見舞われた。
寛保二年（一七四一）と天明六年（一七八六）の両年の洪水で大きな被害を蒙ったと伝えられていたが、この弘化三年（一八四六）の水害もそれに劣らないと十郎兵衛には思えた。
寛保二年と天明六年の大洪水および毎年の水害の手痛い経験から、囲堤という先人の知恵が生れたのだった。
囲堤に三段に積まれた土俵に立って、十郎兵衛は空を仰ぎ、そして泥海を眺めていた。
（みなの疲れも極限にきている、……）
雨が降っている間は、そう思ったとしても、どうしようもできなかったことだったが、雨があがってみれば、なんとか、しなければならなかった。
そうゆう目でみれば百姓たちの動作も、十郎兵衛にはなんとなく緩慢に見えた。
（もし、雨が降れば、あれでは水の勢いを防ぎ切れまい）
そんな思いから、十郎兵衛は囲堤の現場で働く名主たちを善養寺の本堂に集めた。
本堂に集まってくる名主たちに会釈を返しながら十郎兵衛は、例の「水戸浪人人相書」の廻状のことを考えていた。
（毒まんじゅうを食らってしまえば、一個も二個も同じこと、……）
最初の毒まんじゅうは関東御取締出役の廻状を握り潰したことだった。
水との戦いの最中に、「水戸浪人人相書」を順達しても、名主たちの心を逆撫でするだけであった。お上に、百姓を思う心があれば、廻状を出すべきではなかった。
しかし、その廻状を一度は順達しようとした十郎兵衛の心のどこかに、お上を恐れ、お上にこびている自分の姿に気付いて愕然とした。

尚、御出役様の御廻状、雨にて汚損の恐れも、これ有る間、写しを以て御達し申し候。

覚めた目でみれば、この文言は十郎兵衛のこび、へつらいそのものであった。
雨の日の廻状の順達は、廻状が汚れるのは当り前のことだった。それを汚れては恐れ多いと、わざわざ写しを以て順達しようとした十郎兵衛の心の有様が、毒まんじゅうを食らってみて、初めて気付いたことだった。
二つめの毒まんじゅうは、きょうの名主の集りであった。果して、名主たちが十郎兵衛といっしょに、毒まんじゅうを食らうかどうか、十郎兵衛にも分からなかった。
「幸い、雨もあがった。ここらでみなに休みを与えねば、心の土手が破れてしまうかも知れん。わしはあす一日を休日にしようと思う」
十郎兵衛の提案に、名主たちはざわついたが、敢えて反対を言う者も出なかった。

「働いてばかりいては、心も体も腐ってしまうわ。それに長いこと女房殿とご無沙汰では、どちらもお気の毒ということじゃ。十郎兵衛殿が気をきかしたんじゃ。あ、ハッ、ハッ、……」

融海和尚の豪傑笑いに、誰もが首をすくめた。

「みなさんもご承知のように、わしの女房が長八に助けられました。その喜びと言っては、わしも面映ゆいが、男には一日に米五合、女には三合の割で三日分、わしからみなにわけ与えたいが、承知して貰えんだろうか？」

そう言って十郎兵衛は頭を下げた。

「休日をいただける上に、家のみやげまでもろうて、それこそ盆と正月がいっしょに来たようなもんじゃ」

「おしげさんが助かって、本当によかった。いただけるお米は、災難除けのしるしとしてお守り袋の中に必ず入れて置くようにと、みなによう話して置きましょう」

「長八は男を上げたのう。なにしろ、大物代の奥さまを助けたんじゃから、……」

名主たちは急に饒舌になった。

米の受け渡しの手立てや休日には名主、年寄などの村の重立った者が現場に残って万一に備えることなどが、パタパタと決った。

十郎兵衛は祝いの米を配ることで、長八の名前を名主や百姓たちに、しっかと植え付けたかったし、そうすることが、しげとの約束の第一歩になって欲しかった。

あとは、母ひとり、子一人の長八親子が首を縦に振ってくれることだけだった。

しげが長八に助けられたことで、しげと長八の結び付きが強くなり、水呑み百姓の長八の家に自由に出入りしやすくなるであろうと十郎兵衛は考えてもいた。

しかし、長八が十郎兵衛という名前の重さに、たじろぐのではなかろうかと、十郎兵衛はかすかに危惧してもいた。

しげのたっての頼みに、十郎兵衛が煮え切らない生返事をしていたのも、そこにあった。

名主の家を絶やしてはならない。それ故、長八を養子に迎え入れるという図式に、十郎兵衛がとまどいを感じていたのも事実であった。

確かに、家を絶やしてはならないという家訓の前には、どんな方法を選んでもという意味合いが含まれていることに、十郎兵衛自身も気付いてはいた。

しかし、しげが死に掛けたことで、しげと十郎兵衛の心が微妙に変化し始めた。

閉じ籠っていた仏間から出てきたしげがコロコロとよく笑うようになったあのとき、しげはその胸に赤子を抱くことを諦めた。

十郎兵衛が、しげの心を思いやって、酒を止めたとき、十郎兵衛は跡継ぎを望むことを無理に心の底に押しかくしてしまった。

それが、しげの死に直面して、急にしげの心に赤子を抱きたいという思いがほとばしった。

泥海の中で、長八に手を摑えられたとき、世代をつなぐことの深い意味合いをしげは感じた。

自分たちの時代から次の代に引き渡す自分の赤子がいないのであれば、それに代わる息子を探すことの重大さをしげは改めて思い知らされた。

仏壇の奥で林立するご先祖の位牌は黒光りするだけで、しげに何も語ろうとはしなかったが、しげの心の動きを静かに見守っているような気がしてならなかった。

だからこそ、しげはやみくもに、十郎兵衛に、

「長八を養子に、養子に長八を」

と迫っていたのだった。

関東御取締出役の田口東兵衛様が舟で巡察にみえられたという知らせを受けて、十郎兵衛は善養寺駆け戻った。

昨日ならば、十郎兵衛が百姓たちに与えた休日で、百姓の姿は囲堤の上にひとりもいなかった。

「不埒者！。御役目をなんと心得ておるか！」

一喝されて御役御免を言い渡され兼ねなかった。

通常、関東御取締出役が村々を巡察するときには、前以て通知が届き、隣り合った二つの村の村方三役、つまり名主・年寄・百姓代の六名が村境までお出迎えし、お見送りをするのが慣例になっていた。

名主は紋付き、袴を着用し、名字帯刀を許された名主は腰に脇差を帯びて威儀を正した。

しかし、今回は事前の連絡もなく、早急なことだったので、十郎兵衛は、自分のみが紋付き、袴に着替えた。

「十郎兵衛にございます」

十郎兵衛は客間の前の廊下に平伏した。

「十郎兵衛か、毎日ご苦労である。遠慮せず、さぁ、これへ、これへ」

田口様のお言葉に、十郎兵衛は、

「恐れ入ります」

と挨拶してから、田口様の前まで進み、

「御目役、ご苦労さまに御座居ます」

と再び平伏した。

十郎兵衛が頭を下げたとき、プーンとかすかに酒の匂いが漂ってきた。

十郎兵衛は顔を上げて、田口様の顔をキッと見た。

田口様はあわてて、視線をそらしながら、

「よもやと思うが、百姓たちに休日を与えた名主がおると聞いたが、十郎兵衛、そちは知らぬか？」

田口様は横を向いたまま、聞いた。

「一向に存じませぬ。この非常の時に、休日を与えるとは、もっての外、あってはならぬこと。何かのお間違いでございましょう」

十郎兵衛は平然と答えた。

「わしもそう思う。わしの聞き違えかもしれぬ」
田口様は、チラッと十郎兵衛の顔を見た。
「先日、水戸浪人の人相書を廻わしたが、読んでくれたか？」
「は、はぁ。早速、村々に順達いたしました」
「そうか、それはご苦労。ところで、……。水戸浪人の行方について、十郎兵衛の耳に何か入ってはおらぬか？」
「何か聞えて参りましたならば、真っ先に、田口様に御注進いたしますが、……。残念ながらまだ、何も聞いておりませぬ」
「左様か、……。何かあったら、早速に知らせてくれい」
「は、はぁ。かしこまりました」
「忙しいところを邪魔した」
田口様が立ち上がろうとするのを十郎兵衛は慌てて止めた。
「この水で御座居ますので、何も御座居ませぬが、一献、召し上がっていただこうと思いまして、只今、用意させております。今、しばらくお待ちを……」
「いつもながらの配慮、かたじけないが、役所に用事も残っておるので、早目に帰らねばならぬ、……」
両手で襟を正すしぐさをしたその袂に、十郎兵衛は三両を包んだ紙包みをポトンと落した。
田口様は小びんを撫でるふりをして、袂の重さをはかった。座敷から出るとき、
「この水の被害はどうか？」
と初めて聞いた。
「囲堤のおかげで、どうやら持ちこたえております」
「それは、重畳、心して当れ！」
田口様はそれだけ言うと、舟で帰っていった。
水戸浪人の件で、田口様がわざわざこの水の中を舟で十郎兵衛を訪ねてきたのはたんなる口実に過ぎなかった。
（火急な御用で、まとまったお金が必要だったのだろう。田口様は、わしが百姓たちに休日を与えたのを知っていなさる。だからこそ、金をせびりにきたのだ）
と十郎兵衛は推量した。
（それにしても、誰がこのわしを、……。田口様と昼酒を酌み交わした名主が怪しいかも知れん。いずれ、二、三日すれば、わしの耳にも入ってこよう）
そう考えて、十郎兵衛は田口様のせんさくを止めてしまった。
（つづく）

方解石の出る楠木峠（十）

伊澤敏久

昭和十六年の春、仲間達は、憲造、謙一、昭一らと別れることになり、全員が峠にいつ集まるか知る由もなかった。
十二年から続いた日中戦争は、十六年になっても続いていた。
人々の生活は、次第に変化をきたして何か自由が失われていった。今年も楠峠では、うぐいすの声が谷川から聞こえて、春ののどかさを感じさせていた。
春も過ぎ、夏を迎えた。
春からは仲間達は、楠峠へ集まることはなかった。
暑い夏が来て、八月の始めに、思いがけなく昭一のところへ憲造から手紙が届いた。
「夏休みが出たので、八月半ばごろ、家に帰る。」との内容だった。
昭一は、思わず胸の高鳴りを感じて、「憲造と会える・・・」と何度も心の中で叫んだ。そして、楠峠に集まることができるかもしれない、と強く感じた。
翌日、仲間達に連絡したのである。憲造が帰るということを・・・。
数日して、謙一も十五日には、帰る、との連絡があり幸一らも夏休みで家に居ることが一層、仲間に会えるということを喜んだ。
八月十五日の午後、仲間達九人は、楠峠に久しぶりに集まったのである。
憲造は、憲造らしく白い軍服で来た。皆は、さすがに

憲造だと思った。
憲造を中心にして、輪を作ると、
「俺も今日まで楠峠に行きたかったことは、何度もあった」
と言いながら、喜びが皆にありありとわかるように、大声で笑いながら話した。
「俺はまだ、飛行機には乗らないが、学科と地上訓練でしぼられている毎日だ。
朝早くから、規律のある生活で緊張の連続だ・・・」
憲造が話し終わると皆は、憲造の話し方が大人っぽくなったことを感じるのだった。仲間達は憲造の話をじっと聞いていた。
しばらくして、謙一が話し始めた。
「俺は、名古屋の軍事工場へ行って、ゼロ戦のエンジンを作っている。大きな工場の入口から出口がどこだか広くてわからない位の建物で、機械の音がやかましく聞こえる。中で大勢の工員と一緒になって働いている。
俺の機械は、旋盤と言って、エンジンの部分を、目盛りで正確に作られる製品を使っている。また、使い方がわからないようなところがあるので、先輩が一人ついていて、おしえてもらってやっている。俺は、まだ養成工だ」
と言って、話すと、昭一が、
「月に何台位飛行機ができるのかな」
と聞いた。
「台数は、はっきりわからないが千台以上は、できるとは聞いたことがある」
雄二が、
「すごいなあ」
とびっくりするような声を出した。そのうち、幸一が、
「俺は中学へ行ったが、教練で勉強の間に、よく軍事教官から、教育を受けている。俺も学校に軍人がいるとは、びっくりした。軍人は、教官と言って、恐さを感じることもよくある。校舎の横に銃がたくさん置いてあるのを見た。上級生になると、その銃を使って訓練をやると聞いていた。俺はまだ一年なので銃などまだ、もたせられた訓練ではない。学校も勉強ばっかだと思ったら、小学校と違って軍事教練をやるとは驚いた。
職員室へ入るときも、大声で、『何年何組、名前を言って、誰々先生のところに用事があって入ります』と言うんだ。声が小さいと、『もっと大きな声で言え』と入口の近くの先生が言うから、職員室に入るときも、小学校のときと全然違う。いろんなことにまごつくことが多い・・・。学校へ進んだ者は、どこでも、こういうことをやるんじゃないかと思う」
昭一が間を置いて、
「俺は、家出働いているから、話を聞いていると、何か自由になるような事がないような気がするなあ。町の

中でも、米が自由に手に入らず、着る物もなくなってきた。俺の家の商売も売る酒がだんだん少なくなってきて、何か窮屈になったような生活だな・・・」
仲間達は、楠峠に集まっていた頃の方が楽しかったと感じさえしていた。
暑い夏のじりじり照りつける太陽の日を楠がさえぎり、仲間達の絶好の話の場となっていて、南から吹く風が涼しさを一段と話よくするためか、夢中に短い期間だったが、会わなかった様子を話に弾ませ、喜びに浸っていた。時間の経つのを忘れていたためか、東の方から入道雲が見え、夕闇が近づいてくる頃になっていた。謙三が、
「大分、時間が過ぎたな。帰らんといかんな」
皆は、無言で謙三の言葉に従う気配が見えた。仲間は立ち上がり帰途に着いた。歩きながら、
「今日は、洞窟の話が出なかったな」
仲間の一人が言うと、幸一が、
「また、会えるときに行くさ」
皆は、黙って、今度いつ会えるかわからないことを思いながら峠を下って家路に向かった。
謙三は、一週間後東京に帰り、憲一も二日遅れて名古屋に向かった。幸一らも夏休みが終わり、秋に入り、毎日学校の帰りは、夜遅くなった。翌日、六時頃の汽車に乗り、通学していたのである。
十二月に入り、相変わらず生活は、軍事中心であって切りつめられていった。十二月八日の日である。人々は驚くべきことを知った。それは、ニュースと新聞で、アメリカとの戦争が報じられたことを知ったのである。誰もが、大変なことになったものだと感じると同時に、日本が強い国であることも感じた。
幸一らも、学校で生徒全員講堂に集まり、ラジオの臨時ニュースを聞いたのである。その時、ニュースが終わった後、校長先生が、
「ますます私達は、心を引き締めなくてはならない」
と力説した。幸一は、帰宅後、父にアメリカとの戦争のことを話すと父は、無言だった。
それからのニュースは、日本の戦いぶりが新聞に大きな勝利を出しているようなことが報じられている毎日であった。
年が明け、再び春が訪れた。三月初めに、幸一の父親に召集令状が来たのである。幸一は、まさかと思ったが、役場の人が母親に届けたのを母親から幸一は聞いた。
幸一の母は、
「お父さんは戦争に行くんだね」
と言って幸一に、納得させるような口調で言った。
幸一は、複雑な気持ちになった。幸一は、日本は戦争には勝つだろうと信じていた。
一週間後、出征する前の夜、幸一は、母親と二人で父

親に呼ばれた。

「幸一も知っているようにアメリカと戦争を日本は始めた。今は、日本が勝っているように見えるが、アメリカは国も広いし物資も豊富で強い国だ。最後は、日本が勝つかどうかわからない、とお父さんは思う。ところで幸一、お前は絶対に、軍関係の学校に行かないようにして、文科系統の学校に進学しなさい。お父さんはこのことを言うために呼んで話したんだ。わかったな。幸一。お父さんは、二度と帰ってくるかわからないことも言っておく。他の人には、絶対にしゃべらないようにしなさい」

翌日、町長や町の人々を前にして、軍人の服装で奉公袋を左手に持ち、玄関前に二等兵幸一の父親は出征の挨拶をしたのである。

（父親の心は、言葉と違っていた）

一人の個性ある人間を社会の規範の中に置かれていたのである。教え子の女学生も加わり小旗を手に振り、汽車の駅まで歩き、見えなくなるまで送ったのであった。

先生は愛知県の豊橋の連隊に入隊したのである。

（つづく）

社　生口（内規）

☆　同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎しております。「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行されます。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせっかくのお申し出でがあり、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。

郵便振替口座　〇〇一二〇－四－九〇八一五

加入者名　作家群編集部

茜色の翼（一）

瀧澤中

一

藤堂英助はその朝、たった一人で靖國神社の鳥居をくぐった。

早朝の九段下は、運動着姿でジョギングをする人以外、人影はまばらである。夏ももうじき終わろうというこの時期、背広にネクタイをきちんと締めた藤堂英助の姿は、毎朝のこととはいえ、目立つ存在だった。

衆議院議員になって三十六年、あと二年で七十歳という年齢にはとても見えない、若々しい足取りである。

鉄製の鳥居は、靖國らしい、いかにも無骨でまっすぐな佇まいをみせている。その鉄の鳥居に、漸く上がってきた太陽の光が反射して、鈍い輝きを英助が踏みしめる玉砂利に映し込んでいた。

戦時中、この鳥居も鉄砲の弾にするために、鋳潰されそうになったという。

（潰されずにいて、よかった）

藤堂英助はお参りする度に、そう思っていた。

「センセイ、きょうはまた、お早いですな」

神社の前の道を、いつも掃き清めている老人が声をかけてきた。

「いや、どうも」

藤堂英助はなんとなく照れたような笑いを、その丸くエネルギッシュな顔に浮かべて微笑んだ。

きょうは、英助にとって特別な日になるはずであった。政権与党の憲政会で最大派閥を誇る徳富派の、彼は幹部である。その派閥の長・徳富矢一郎が、きょうの党大会で総裁に選出される。

憲政会の総裁すなわち日本国の総理である。

そして藤堂英助は、おそらく大蔵大臣か、党の幹事長に就任し、次の次を狙う好位置につけるはずであった。

党内で徳富矢一郎のライバルであった松島五郎が、つい十日ばかり前、この靖國神社参拝の際に洩らした失言

が、徳富矢一郎と藤堂英助に幸運をもたらしたのである。
その日は終戦記念日。
松島五郎は現職の運輸大臣である。その松島が参拝の時に記者から質問を受けた。
「大臣、これは公式参拝ですか、それとも非公式参拝ですか」
松島は記者をにらみ返すようにして、
「公式も公式、大公式じゃ。日本国政府運輸大臣たる松島五郎が、天下御免で公式参拝じゃ。文句があるかっ」
松島には、戦死した軍人たちの遺族が組織する「日本戦慰会」が大きなバックボーンとしてあった。総裁予備選でも党員票の取りまとめに戦慰会は動いており、その意向を無視することはできなかったのである。
しかし松島の発言は、その日のうちに諸外国に伝わり、アジアの一部の国から辞任要求が声高に叫ばれた。
現総理の沖田はその声を無視できず、松島を更迭したのである。
新聞各紙は「やっとオキタ」などと、在任中はほとんど何も成果らしきものを上げられなかった総理を褒めそやした。
つい一週間ほど前に大臣を更迭された人間を、総裁には選出できない。松島五郎は議員による本選挙を辞退した。結果、対抗馬で予備選二位だった徳富矢一郎が、総裁に選ばれる運びとなった。
（おかしな話だ）
藤堂英助は、本殿の前に立ちながら、思った。
（松島五郎の「失言」は、確かに俺に有利な結果をもたらしたが、さて、日本の国としてはどうだったのか）
もし俺が、同じことを同じ場面で聞かれたら、たぶん松島五郎と同じ発言をしたのではないか。
事実、藤堂英助は四十七歳で初入閣した時、堂々と公式参拝の趣旨を記者に語って、翌日の新聞を楽しみにしていた。
しかしほとんどの新聞は英助の発言を無視し、一部の雑誌が、囲み記事程度に英助のことを書いきりだった。
（あの頃は、日本も貧乏だったから、脅かして金を取ろうなんていう国はなかったんだな）
藤堂英助は、海軍兵学校を出てから航空畑で育ち、いわゆる神風特別攻撃隊に属した。
議員の中には、特攻出身を売り物のように言う者もいたが、藤堂英助は極力そのことを避けた。
（特攻もそうでない兵隊も、みんな同じく、命を賭けて国を守ろうとしたんだ。特攻だけが偉い訳じゃない）
そういうことも含めて、英助は政治家としては珍しく、自分の過去を語りたがらなかった。
お参りを済ませ、本殿の石段を下りると、ふと御神籤の木箱が目についた。
「よし、やってみるか」

百円玉を一枚、料金箱の中に入れると、御神籤の箱の中に手を入れて、ひとつ、取り出してみた。
「どれ、なんと出る」
開くとそこには、
「凶」
と書かれてあった。
「ま、気をつけろ、ということか」
桜の枝に御神籤を縛りつけると、そのまま議員会館へ向かった。
この時、まだ朝日は藤堂英助に降り注いでいた。しかし、西の空には、鉛色の雲が沸いていた。

二

丸の内にある「カワベ自動車ビル」は、周囲のビル群の中では、あまり目立つ建物ではない。
しかし、「カワベ」のブランドは、世界の自動車業界の中で、燦然と輝いている。
いや、正確に言うと、輝いていた、と、過去形で語らねばならない事態に陥っていた。
拡大しすぎた生産体制が、不況の中で経営の足を引っ張り、創業以来という、一千億円を越える赤字を、三年前に計上してしまったのである。
社長であり創業者である河辺進は、
「一人の解雇もあり得ない」
という信念のもとに、再建を誓った。
カワベ自動車ビルに向かう一台の車。
そこには、間もなく七十歳になろうという、河辺進が乗っていた。
（この三年、俺はすべてを捨ててきた）
面長で怜悧な印象の、ただ唯一と言える暖かみのある大きな目が、少し潤んでいた。
（きょう、やっと黒字計上の目処がたつ。そうしたら、俺は会長職に退こう）
朝十時から開かれる役員会議で、今年度末までに累積赤字解消の目処が立ったことを、担当役員から報告されることになっている。
（まったく、生きた心地がしなかった）
社内では独裁者と陰口を叩かれながらも、嫌われるのを承知で給与カットや人事の重点配置などを行って、自身も給与を半減させた。
社員は一人も辞めさせない、というのは、言葉としては美しいが、殺されるか半殺しにあうか、どちらかを選べ、というに等しい選択だった。そして、河辺進は「半殺し」を選んだのである。
自分も社員も半殺しにあう。しかし、殺されるよりはマシだ。
サービス残業、賞与カット、マイナス昇給、休日出勤、

技術部門の営業への人事異動、役員の半減と子会社の整理。あまりの激務に耐えかねた社員が自殺をし、労災認定の裁判まで起こされた。

（役員には、特に苦労をかけた）

銀行や外国自動車メーカーからの出向役員と、創業以来の役員との軋轢を調整するために、河辺進はやむを得ず、プロパーの役員を辞めさせることもあった。

自宅への嫌がらせに、妻は耐えきれず、ついに病に倒れた。

そして昨年の夏に死んだ。

最後を看取らねばならない日に、河辺進は出資者の外国自動車メーカー本社のあるアメリカに、出張せねばならなかった。

その日以来、一人娘のゆりは、家を出ていってしまった。五十歳で初めて授かった子だった。河辺進はすべての夢をゆりに託そうとした。しかし、美しく成長したゆりは、仕事で家庭を一切省みない父親に愛想を尽かしたのである。

（それも、仕方のないことか）

河辺進が社長を退こうと考えたのは、そんな家庭の事情もあった。

（俺が会長になったところで、ゆりは許してはくれまい。が、残る人生を、会社とゆりのために使い果たすには一番いい選択肢だ）

車はカワベ自動車ビルの前についた。

玄関から秘書の上月早苗が走って出迎えた。

三十歳になったというのに、一向に嫁に行く気配がない。瓜ざね顔の美人で、どこか近寄りがたい美しさがあるせいか、男も交際しずらいのだろう。

「社長、おはようございます」

「ああ、おはよう」

いつもの挨拶だ。しかし、この日は河辺進も上月早苗も、何となく声が明るかった。

きょうで、この三年間の苦労が報われる。

きょう、やっと長かったトンネルから抜け出せる。

上月早苗と二人きりでエレベーターに乗った河辺進は、珍しく軽口を叩いた。

「上月君、いい加減に、婿探しをしたらどうかね」

上月早苗は少し厚い唇を微笑ませて、

「社長、私がまず、社長のお嫁さんをお探ししますわ」

「ばかいっちゃいかん、誰がこんなクソじじいのところに来るものか。ははははは」

社長室のある二〇階でエレベーターは止まり、上月早苗が前を歩いて、社長室のドアを開けた。

社長室の正面の、大きなガラス窓から、皇居が見えた。

「きょうはきっと、いいお天気になりますわ」

カーテンを開けながら、上月早苗が言った。

「そうか。では、役員会議が終わったら、一緒に靖國

あたりまで散歩に出かけんかね」

一瞬、上月早苗の頬が赤らんだような気がした。

「ええ社長、ご一緒しますわ」

この堅物の男は、プライベートはもちろん、仕事でも自分から上月早苗を誘って二人きりになることは一度もなかった。それは早苗が社長室に配属になってから五年間、本当になかったのである。

「社長、私、靖國神社って一度も行ったことがないんです。何があるんですか？」

河辺進は、じっと皇居を見ながら、その右手奥にあるであろう、靖國神社の方を目で探し、

「靖國にはな、ともだちがたくさんおる」

そう言いながら、目はまだ靖國神社の大鳥居を探していた。丸の内のこの場所からでは見えにくい。それでも鳥居の上の部分が、チラと見えた。

上月早苗は、そんな河辺進の後ろ姿を見ながら、机の上に新聞を置いた。

「あ、社長、藤堂さんが載ってますわ」

その声で初めて鳥居から目を離した進に、早苗は新聞を手渡した

そこには、『藤堂英助、大蔵大臣最有力』と書かれていた。

「ふーん、英助が大蔵大臣じゃ、日本もおしまいだな」

その言い方は、決して冷たいものではなく、旧知の間柄だからこそ言える、愛情に満ちたものだった。

「祝電と花束、ご用意いたしましょうか？」

早苗の提案に、河辺進は、

「いや、ちょっと早かろう。第一、あいつも言っておったが、政界というのは一寸先は闇だそうだ。もしかして無役になったら可哀相だからな。まあ、酒席くらい用意しておくか。駄目でも良くても、酒ならいいだろう」

河辺進はニコリ、とすると、また靖國の大鳥居に目をやった。

（あいつにとっても、俺にとっても、きょうは最良の日になるのか）

河辺進のいる社長室にも、朝日は燦々と光を注いでくれた。しかし、やはり西の空には、鉛色の雲を見ることができた。

泰山木（五）

―紙透小太郎の一生―

紙透寛夫



三、僕（紙透小太郎）（つづき）

農業の余暇に、いろいろな仕事

『竹切り』など、他村に見られない特殊なものだろう。この材料は、主に横浜港で石炭の荷揚げ用に使われるもので、いわゆる篠のことだ。秋の一番多忙になる時が『シユン』である。この時に一斉に切り出される。一日に十五把ぐらい切ったことは、そう珍しいことではない。一把とは百二十本で、一把二十五銭乃至五十銭。当時としては相当によい収入であった。しかし、彦兄や『オキ』奥の太郎、峯さん兄弟の、山窩のような人達には、到底及びもつかなかった。短期間の間に切り出しをやり、早朝から星を戴いて帰るのであるが、我が村の山ばかりではなく、ずいぶん遠くまで行ったこともあり、一秋で三百円ぐらい稼いだこともある。

国蔵小父の家で、桐畠を管理した時、苗木植え、施肥、夏季の手入れなどに、常傭的に行って、大いに働いたものだ。大正八、九年のころだから、既に三十数年前のことだ。あの桐畠はどうなったであろうか。国蔵小父も十数年前に死亡されてしまった。

また、隠居屋や服部方には、農繁期よく手伝いを頼まれて行ったものだ。当時、日当は一円二十銭ぐらいだったように思う。

父がよく舟木材の運搬を、請け負ったので、この仕事にも加わった。長い舟材を荷車で、横浜の運送屋まで出

す仕事で、山から出すまでは、滑走させたり、肩で担ぐのであるが、荷車の通る場所まで出てしまえば、後は楽なものだ。よい時には一日五、六円になることもあった。あの当時の五、六円は今（この手記を書いている昭和二十六～七年現在）の一千円に当るだろう。その帰りには、牛飯屋に寄って、一杯の焼酎と牛飯を食べて帰ることが、とても、楽しみであった。

谷戸に横浜金丸銃砲店の、火薬庫が出来る時には、土工の仕事もした。土塀の土盛り作業で、終日『モッコ』を担ぐ仕事だ。これはずいぶんな重労働なのに、一日一円くらいにしかならなかった。農閑期にはこうした仕事も、また止むを得ない。この工事は半年くらいで、終ったであろうか。本職の工事請負者が来て、その配下の土方連中も、大勢来ていて、村の臨時の土工と一緒にやったもので、一応、土工の仕事も体験したわけだ。この火薬庫と既設の倉庫合せて、全部で約十五棟くらいあったと思う。

この倉庫への火薬の出し入れが時時あった。例のお宮の下までは、馬車で来るのだが、それからは道路が六尺くらいしかなく、手荷車か肩でなければ運搬が出来ないのである。この仕事を村の人達が、一箱幾何かで請け負うのである。茂吉さんが一切の世話をしていた。来る時には数千箱、一日も二日も連続して来るのである。大体一箱三十瓩ぐらいのもので、天候の良否、農の繁閑により、運搬賃が決まるのであるが、一箱四、五銭だったように思う。一日よい時は五、六円くらいになった。なかなかの重労働で、一挙に片付けなければならぬ仕事なので大変だった。ダイナマイト、導火索、雷管などの主に工業用だったように思う。ダイナマイトの試験をするために、開梱していたのを、恐る恐る見たものだ。

この火薬庫に一人の請願巡査がいた。人里離れた一軒屋で、ずいぶん淋しいだろうと思ったが、そう言うふうにも見えなかった。細君と小さい子供がいた。その巡査が新聞を取りに、林ちゃんの家まで来たのを見受けた。火薬庫の警戒と言っても、大したことなく、ほとんど遊んで暮らしていたようだ。呑気な仕事があればあるものだなぁと、感心したものだ。

砂糖屋に、ちょっと手伝いに行ったことを、書かねばならぬ。二十歳の夏と言っても、お盆の前後、約一週間。服部さんの娘、おきくさんが嫁いだ伊勢佐木町の『寅屋』砂糖店である。主人は亡くなって、未亡人が全盲ではあったが、眼開き同様、店の出納一切どころか、家業一切をやっていた。息子も全盲で、この人は余り仕事をしなかったと思うが、マンドリンの名手であった。この人がおきくさんの亭主だ。

店員は二人程で、一人はその年、兵隊に行くことにな

僕の酒飲みも、そうした機会で始まったようだ。『菊正宗』とか『白鹿』などの、鏡を抜きたての一杯は、本当に味のよいもので、またビールの冷えたのも、なかなか良いものであった。暮れの三十一日は夜明かしして、元日には、一杯飲んで十円くらいの小遣いをもらって帰り、大いに良い正月が出来た訳だ。

八百屋。十七歳の春ごろ、どうした動機であったか、今考えると思い出せないが、ふと、僕にも出来るだろうと思って始めた。材料は総て家で作ったものを、八百屋篭に入れて担いで行くので、わずかなものだが、大根、ねぎ、白菜、馬鈴薯、人参、ほうれん草、三つ葉、小松菜、里芋などと言うようなものを、持ち歩き、台所へ行き声を掛けるのだ。最初はなんだか恥ずかしいような気持ちであったが、慣れるに従って面白くなり、次第にお得意も増えてきて、大概二、三時間で売り尽くした。その間、競争者も増えてきたので、朝早く出掛けることが、先決問題となってきた。売上げは大概、一日五円ぐらいの平均であったようだ。帰ってから午後は、明日の仕度をするのである。

販売区域は、最初は保土が谷、次は久保町まで行くようになった。段々商売のこつを覚え、いろいろ主婦の心理状態も分かるようになった。婦人の心理状態は、ずいぶん複雑なものである。もちろん、その人によるのであると、右側に樹齢約百年の銀杏の大木があり、境内には杉の大木が数本、紅葉、猿すべりなどがあった。杉の巨木のうち、樹齢二、三百年にもなるのがあったが、僕が五、六歳の時、切り倒されたような記憶がある。石段を昇り詰めた左右に、古びた石灯籠が数基あって、真直ぐに社殿に突き当たるのだ。社殿の左側に適当な空き地があり、祭礼当日は舞台が掛り、お神楽や芝居が、毎年催されたものだ。右側銀杏の木の下に囃子堂が出来た。

毎年一回の祭礼はこのような行事で、まず祭日の二、三日前、全村各戸から男子一名ずつ出て、大掃除をやり、幟を立てる。これは参道入口一の鳥居のすぐ前である。この幟は組み立て式となっていて、器材格納庫は参道に沿って、建てられていた。この幟を立ててから、囃子堂、芝居小屋が建てられるので、大抵、丸一日は掛るのである。神主は上大岡の松本先生が教師兼業で毎年来ることになっていた。当日、荘厳な式は、大抵午後一時ごろ開催され、後に神輿、余興が行なわれるのが例となっている。祭典、余興は若い人、殊に青年男女の楽しみであり、一番愉快な年中行事の一つである。殊に青年男子にとっては、この上も無いことである。

八月下旬から着々と準備された。まずその年の行事を如何にするかは、青年団の幹部連中によって、協議決定される。まず、

（一）　揃いの浴衣を作るかどうか。

っていた。服部さんから、是非、僕にと頼まれたので、行った。百斤（一斤＝六百グラム）入りのものを桶に出して、よく細かくする仕事で、大したことはなかったが、あの異様な砂糖の臭いが鼻について、仕方がなかった。配達の方も時々やった。この店は買いに来るよりも、注文により配達するお得意様が多かったようだ。

夕方、仕事を終った一時、店に座っていると、当時、喜楽座に出ていた俳優の市川荒次郎だの、誰々と言った幹部俳優が、店の前を通ったものだ。

次は、酒屋の小僧の真似を、やったこともある。たけ姉上の所へ、暮れの一番忙がしい時期に、一週間ほど、手伝いに行ったのであるが、十七歳ころから毎年行った。

まず、最初は、徳利洗いから配達の手伝いをやったが、裏の空いた寒い家での作業なので閉口した。それよりも、夜遅いのが一番辛かった。従兄弟の仲さん、勝太郎の二人がいたが、勝太郎はまだほんの小僧で、余り役に立たなかったようだ。徳利は五合、一升が主で、なかには二升入り、一斗入りなどあったが、全部僕が洗うのだ。洗いが二日ぐらいで終ると、あとは配達だが、一番遠い所は水源地（横浜水道貯水池）の宿舎から、都築郡の白根辺までであった。水源地の下に、ちょっとした飲食店があって、そこでよく、忠さんが油を売って怠けていたようだ。

るが、掛け値をする家と、しない家との区別、高くとも良い品を喜ぶ家、品は悪くとも量を主とする所があるように、いろいろ、戦法も変えなければならない。また特殊な品物は、ブローカーをやらなければならない。例えば、栗のようなものは、どうしても、他からのものを、間に合わせなければならない。一升二十五銭ぐらいのものを、五十銭ぐらいに売って儲けたこともある。そうしたものは、僕のポケットマネーになったことはもちろんである。

思い出の二、三

○春日神社の祭礼

九月十一日が村の鎮守の祭礼であった。氏子は南、北永田を合せて約百二十戸ぐらいの小さな部落の人たちだった。場所は村の中央、ちょっとした高台にあり、境内はあまり広くないが、村の鎮守としての威厳は、充分保たれていた。木の鳥居、石の鳥居が一つずつあって、これが参道である。ここを通ると、谷戸から流れてくる小川に、石の橋があり、それはわずか一間（約一・八一六メートル）ぐらいしかないが、この石橋があるために、大いに神神しさを増す。これを渡るとすぐ石段がおよそ七十段、この左右が杉の森林になっており、昇り詰める

（二）　芝居をどうするか。
（三）　神輿を出すかどうか。
の三点が主である。決定したら、まず揃いの浴衣の値段と柄を選定するための相談会を開き、柄の見立てに呉服屋へ行き、見本を持ち、家庭を訪問して、注文を取る。これは老幼男女に向くようなもので、例えば柄の中に『なが若』と印を入れるなどのことが考え出された。一戸で五、六反も買い、夫婦子供たち全部これを着て、祭礼当日は神輿を担ぎ、芝居余興を見物するのである。青年、子供たちには少なくとも、この揃いの浴衣を着せるのが普通である。青年たちは、また、この揃いを着て、付近の秋祭りに遠出を掛けて、夜明かしをし二、三里離れた村へ往復することを、誇りにさえ感ずるのである。

次は芝居であるが、例年、一舞台四、五十円くらいで、村芝居専問の一座を、依頼した。費用は村の人たち有志からの寄附によるので、費用は心配する必要はなく、結構より以上集まったものである。

神輿は樽神輿を出す場合が多く、これは九月に入ったら、すぐ準備に掛かるのだが、毎年服部半造氏宅で快く庭や縁側を提供してくれた。青年の大部が総出で諸材料を揃え準備するのである。必要な木材、樽、装飾用色紙、縄等々を集める者、組立てをする者、約一週間かかるので、これは皆、夜間作業で行なわれたものである。気候は秋冷に向かい、若者たちが嬉々として、雑談しながら作業する様は、他には見られない、農村でのみ味わい得るものであろう。

当日ともなれば、まず青年団長を先頭にして、仮装した者、あるいは道化た者全員が、神社社頭に勢揃いして一同参拝、一錬りしてお神酒を頂戴し、村中を一戸毎に錬り歩くのである、各戸では『花』（寄附金）と酒肴を準備していて、回って来たら世話人に渡すのである。こうして神輿は次第に元気付き、勢いは増すばかりである。青年たちは各家の酒に酔って、荒れ狂うばかりに錬り歩いた。こうしたなかにも、秩序は保たれて行くのであるが、平素、評判の良くない家は時々、『祟る』のである。神輿が障子を破り、土足が畳間に入ることも、稀ではないが、しかし、決して問題となるようなことはない。こうした家は、主に平素からの酬いであって、村全体からは、反って、喜ばれる結果となるのであり、自然、一つの懲罰なのである。へとへとに疲れた青年たちの昼間の行事は、これによって幕を閉じるのである。

夜は芝居であるが、これは村は元より総出であり、近郷近在は元より、横浜からも青年男女が集まり、境内は立錐の余地もなくなる。青年団の幹部は、抜け目なく、芝居小屋の側に、小さな座敷を建てて、これに頑張り、行事の進行と『花』の受付を、仕事とするのである。『花』の披露は倍額の『花びら』によって、軒にずらりと張り出すのである。例えば、五円の寄附金は『金拾円也何何

様より』と、半紙一枚に大きく墨書きし、張り出すのである。

僕は例年青年団幹部として、この行事をやったが、なかなか愉快なものだ。大正八、九、十の三か年、みな思い出ならざるはない。今もそうした昔の行事を、やっているのであろうか。青年たちに、そうした純真さが、あるであろうか。ダンスのような、亡国的なもののみに、走っているのではなかろうか。

○お盆の行事

著者（紙透寛夫）付記

父小太郎は、ここで筆を投げている。どうしたのだろうか。ほかに幾つか遺っている手記や日記にも、成人までの追想文は見当らなかった。結局『五十年』と題したこの手記は、『二十年』で終っていた。

ここまで書いた時に、戦犯釈放となったのか？いいや、そんなことはない。では、何があったのだろう。多分、講和が何時になるか、まだ不透明な時期であり、早く娑婆に出たいと、一日千秋の思いで、毎日、鬱々としていたことと思う。更に、留居家族の窮状に思いを致す時、自らは何も出来ない苛立ちに、日夜悶々として、書くことなど、嫌になったのだと私は推察するのである。

だが、私はその当時のことを調べてみた。父がこの『五十年』を起稿して、七か月経った昭和二十六年九月八日、サンフランシスコ対日講和条約・日米安全保障条約が調印され、翌年四月二十八日に発効した。同時にGHQも廃止されて、巣鴨プリズン（以下、巣鴨と略す）は追々と、その管理も日本側に移管された。けれども、戦犯の期待した釈放は無かった。

昭和二十七年八月、巣鴨のなかで、囚友同志が刑死・獄死した人たちの、遺書遺稿集を作ろうと、巣鴨遺書編纂会が結成された。多くの人が協力したようで、父も編集委員の一人に名を加えられた。このほかに刑死者の追想記も依頼されたようである。また、一時、選挙によるフロアリーダーにも選出された。巣鴨の塀の中で、父の住所は時々変ったが、当時は4C23であった。私にはどの棟か階かは、分からなかったが、フロアリーダーとは、言わば、そこの世話係代表のことだと思う。フロアリーダー全員が集まる会議も、ちょくちょくあり、出席した。皆の意見・要求など取りまとめて、代表が法務省に赴き、具体的な事柄を要望したようである。

こうした、いろいろな用事が出来て忙しくなり、父は自分の手記を書けなくなったのではないかと思うのである。

当時の父（小太郎）の日記を読んだら、

十月二十一日　晴

遺書ノ浄書――中略――中ニマカッサルデ刑死サレタ小川海軍少佐ノ分アリ気ノ毒ナリ

十月二十七日　曇

遺書ノ浄書故海野馬一氏ノモノ浄書シツツ涙ス。五十枚ヲ書キ終ル。

とあった。父は編集委員の一人として、遺書遺稿を浄写したが、この二人の分は、どんな内容であったか、『世紀の遺書』により、その一部を次に書き写す。（原文のまま）

小川正造

千葉県。海軍主計少佐。昭和二十三年二月四日「マカッサル」に於て銃殺刑。三十五歳。

遺書

孝子へ

私が死の宣告を受けたことは既に承知の事と思ふ。驚愕と悲嘆の涙に身も世もない様子が想像される。私もこの遺書を書き乍らも夢の様な気がしてゐる。――中略――事実責任者ならば私も潔くその責任をとる。然し事実は責任者は別にあるのである。之を考へると私は死んでも死に切れない思ひである。必ずや事実は今後白日の下に暴露されるものと信じてゐる。――中略――孝子よ、我を見んと欲せば吾が子を見よ。吾子は吾が分身にして吾が血のつながりなり。（世紀の遺書二六四～二六六ページ）

海野馬一

岡山県出身。陸軍士官学校卒業。元陸軍少佐。昭和二十三年四月五日、「ボンチャナック」に於て刑死。四十九歳。

遺書

児等よ。この本の余白に父の手記がある。文章の下手、字のまずいことを笑ってくれるな。牢屋の内で監視の眼をかすめながら、内々に書いたものだ。長さ五分にも足らない鉛筆の芯に、椰子の葉の筋を括りつけてかいたものだ。――中略――ボンチャナック刑務所では四月十八日、四月二十日、四月二十四日、五月五日非常な私的制裁を受けた。然し予はキリストの「人もし汝の右の頬をうたば左をも向けよ」との教を心に持ち、「こんなことをする者も亦神の子だ」と思ひ、心に愛を充たしてゐた。――中略――九月三十日の取調では、調書を読み聞かせられることなしに署名させられた。

日記

十一月十五日

――中略――忙がしい裁判だった。二時間少々で終り、すぐ検事の求刑、私としては申したい事の十分の一も云へなかった。遺憾の極みだ。これが和蘭の裁判だ。昨年五月以来一年七ヶ月拘留しておいてこの粗雑さ、敗戦者に対する裁判はかくの如きものか。陳述したいことを何故なさしめないのか。弁護士が大いにやってくれようとしても、その陳述を止める。被告に対しては特にそうだ。――中略――

十一月二十八日

――中略――九時、「死刑を宣告す」と、実に簡単に片づけられた。呆然たらざるを得ない。馬鹿気た気がする。が格別悲しいとは思はなかった。同輩の上杉大尉も死刑だった。死刑を宣告された時の心は、この様なものかと思ふ。本年三月以来「和蘭裁判だから……」と覚悟は決めて居た。――中略――五十年の人生を生かして下さった神仏に対し感謝の念が沸いた。――中略――予は幸福だ。何故なら神仏を信じてゐるからである。死刑を宣せられたが、人道に反したことをなしてゐないと信じてゐるからだ「生死一如」古人の言、宜なるかな。――中略――

四月一日

愛児和幸は今日から通学する。その姿を瞼に浮べ。いとし児の嬉々とたはむれ学校に通ふ姿を目に浮べをり（世紀の遺書二二八～二三四ページ）

父は、他にも数多くの浄写をした。遺族となる人に宛てた肉筆の、生々しい遺書遺稿。一編一編、その実物を手にしての浄写は、本当に辛かったと思う。涙に濡れた遺書遺稿の上に、父はまた、新たな涙を重ねたことであろう。

大勢の人の協力で、本は次のように出来上がった。

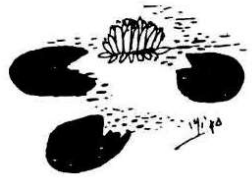
書名　世紀の遺書
編集　巣鴨遺書編纂会
発行所　巣鴨遺書編纂会刊行事務所
昭和二十八年十二月一日発行
頒価　一千円
本の体裁　A5判、八二八ページ
装丁　中村岳陵画伯
外箱　東山魁夷画伯

立派な本である。戦犯死没者は当時の調べで、刑死、病死、自決、事故死など合計一、〇六八名。そのうちの、

七〇一名分の遺書遺稿が掲載されている。死没地は巣鴨のほか、中国、蘭印、ビルマ、マレー・北ボルネオ、香港、オーストラリア、仏印、フィリピン、グァムと広範にわたっている。

私はこの『世紀の遺書』を幾度読み返したことだろう。もう表紙は剥がれてしまい、なかも、ぼろぼろになっている。読む度に重苦しい思いをしたが、この本の中身については、後の方の章で、折々に述べたいと思う。

（つづく）



漢詩

潮騒録（廿四）

鯨游海

賀庚辰春

平成十二年正月

貞觀泰平何日逢
開元孰處正嚴冬
國危孔子會當顯
遮莫枕鐘夢臥龍

押韻・逢 冬 龍

〈庚辰（龍）の春を賀す〉

貞観の泰平　何れの日にか逢わん
開元孰の処ぞ　正に厳冬
国危うくして孔子　会らずや当に顕わるべし
遮莫　鐘を枕に　臥竜を夢みん

〔注　解〕

貞観は、初唐太宗朝の時、開元は、盛唐玄宗朝の時の年号。政治経済が安定し国勢が全盛の黄金時代であった。転句は宝鑑「家貧しくして孝子顕わる」をもじって借用した句。

遮莫は、ままよ、それはそれとして、の意で漢語独特の表現。臥竜は臥竜鳳雛より。寝ている竜と鳳の雛の事。機会さえあれば大いに実力を発揮するであろう英雄の喩え。口語に訳してみよう。

初唐のあの貞観の時のような天下泰平の世に、何日逢えるのであろうか。また盛唐のあの開元の時のような良き時代は一体孰処へ去って了ったのであろうか。今、日本はまさに冬の時代。

国危うければ今年こそ救国の仁者、あの孔子のような大偉人が必らずや顕われる事であろう。ままよ、私はとりあえず除夜の鐘を枕にして、その英雄の顕われる夢でも見る事にしよう。

☆ささやかに嬉しきことのありし年
しじまの鐘をまどろみつ聞く

詠新茶・其四　　平成十一年五月

不變樹陰相似花
春風又過舊知家
主人偏愛琴書酒
始見慇懃烹澁茶

押韻・花家茶

〈新茶を詠む・その四〉

変わらざる樹陰　相似たる花
春風また過ぐ　旧知の家を
主人偏えに　琴書と酒を愛でしが
始めて見たり慇懃に　渋茶を烹るを

〔注　解〕

春風を擬人化した詩。結句「見る」の主語は春風。起承句の前半は、宋之問・代悲白頭翁「…年年歳歳花相似」を、転結句の後半は「歳歳年年人不同」を謳ったもの。

琴と書は、文人の添景として度々登場する。書は詩を含む書物。陶淵明、王維、白居易らの詩に多用され、わが国でも菅原道眞らが好んで用いた。

所で酒は古詩の時代からよく詠まれたが、茶は中唐以後に詠まれるようになった。西域から伝わって以降唐代に普及したからであろう。

結句の慇懃は、心をこめて丁寧に、の意。

なお承句の「主人」は作者の私を指しており、春風が茶を烹る主人を初めて見て驚ろくと云う趣向。

☆風薫りみどりさみどり地に盈つる
　茶のある国によくぞ生れにし

讀三戸岡道夫先生著愉快小説老春繚亂戲作詩二首連作其一　　平成十一年四月

南無益軒大先賢
不呆老春與祕傳
爲誓醉狂期不洩
亦盟開口咲昂然

押韻・賢傳然

〈三戸岡道夫先生の著わせる愉快小説「老春繚乱」を読みて戯むれに作れる詩二首連作その一〉

南無益軒　大先賢
老春に呆けざる　秘伝を与けよ
為に誓う「酔狂にては期して洩らさず」と
亦盟う「口を開けて笑う事昂然たり」と

〔注　解〕

益軒とは江戸前期の儒者、教育者、本草学者の貝原益軒を云う。松永尺五、木下順庵、山崎闇齋らを師とし陸王学、後に朱子学を奉じた。愼思録、大和本草、益軒十訓、女大學、等々の著書を残している。

その益軒十訓の一つで不老長寿の法を説いた養生訓に「節して洩らさず」と戒めたのは有名。先賢は先哲と同じで昔の賢人。

結句の「開口咲」は白楽天・對酒「蝸牛角上爭何事　石火光中寄此身　隨富隨貧且觀樂　不開口咲是癡人」より引用した。昂然は意気旺んなさま。口語訳してみよう。

南無貝原益軒大先生さまさま。願わくは老いて春を楽しむ私めに呆けない為の秘伝を授け賜え。

その為に私は先生にお誓い申し上げます。「酔って戯むれには決して洩らしません」さらにその上に次の事もお約束致します。「日常生活では意気旺んに一日中口を開けて笑う事を心がけます」

なお三戸岡先生の「老春繚乱」は月刊誌「蘇える」に平成十一年四月より好評連載中である。

☆老いし春終日笑え呵々呵々と
　なお足らずんば夢にも笑え

又・二首連作其二　　平成十一年四月

養生八訓不能忘
而老癡呆非所望
願召我魂如不解
六耶七也月耶陽

押韻・忘望陽

〈又・二首連作その二〉

養生の八訓　忘るる能わず
而うして痴呆に老ゆるは　望む所に非ず
願わくは我が魂を召されん事を　如し解せずんば
六か七か　月か陽かを

〔注　解〕

益軒の養生訓は八項より成る。

承句の癡は痴の正字。癡呆はボケる事。

結句の「六耶七也」は少し説明を要しよう。陶淵明の詩、責子に「阿舒已二八　懶惰故無匹　阿宣行志學　而不愛文術　雍端年十三　不識六與七…」とあり、それを下敷として用いた。なお二八は十六歳、志学は十五歳。詩題の又は「前と同じ題」の意。

口語に訳してみよう。

貝原益軒先生の「養生訓」八項を私は忘れる事はない。而し乍ら痴呆に老いて行き、呆けて迄決して長生きはしたくない。

若し私が呆けて来て、六と七の区別がつかなくなったり、お月様とお陽様の区別がつかなくなった時は、どうぞお願いですから私の魂魄をお召しになって下さい。

☆陽か月かおぼろにかすむ漁火か
ただ曖々と美しきかな

三月推敲得一吟一歌涕濡琴
平成十一年二月

三月推敲得一吟
一歌三疊涕濡琴
鄰人莫咲凡夫韻
一斗百篇方外音
押韻・吟 琴 音

〈三月推敲して一吟を得一度歌えば涕琴を濡らす〉

三月推敲して 一吟を得たり
一歌三疊すれば 涕琴を濡らす
隣人咲うなかれ 凡夫の韻を
「一斗百篇」は 方外の音なれば
〔注 解〕

三月間も推敲を重ねて漸やく一首を得た。嬉しくてたまらず三度繰り返して歌ったら涕がこぼれて琴を濡らした。

どうか隣人よ笑ってくれるな、この凡夫の詩を。

たった一斗の酒を飲む間に忽ち百首もの秀歌を詠んだあの李白の場合は、凡俗と異なる仙界の音なのだから。（苦吟する私と較べ笑わないでくれ給え）

推敲の原義は「推す」と「敲く」とである。字句をあれこれと選ぶ事で中唐の詩人賈島の造語。

題李凝幽居と云う五言律詩の頷聯「鳥宿池邊樹 僧敲月下門」の「敲」で迷った末、韓愈の行列にぶつかって了う。韓愈は「敲」が良いとし、これが縁で賈島は韓愈の門下生になったと云う。

この逸話でも判る通り苦吟派の賈島には、苦吟の末成った喜びを詠んだ句があり正に共感出来る。「二句三年得 一吟雙淚流 知音如不賞 歸臥故山秋」なお承句の「三疊」は王維の「陽關三疊」で知られる通り三度繰り返して朗詠する事。また「一斗百篇」は杜甫が李白を讃え詠んだ句「李白一斗詩百篇」より引用した。ここでは李白とその詩を指す。

☆幾月ぞ苦吟の果ての吾が調べ
重ねて詠めば琴咽び泣く

《漢詩の流れ15》落日の美しさ（中晩唐）

日本で云えば奈良時代後半から平安時代にかけて、即ち七六六年（唐朝の大暦元年）から六〇年間を中唐、八二七年（宝暦三年）から約八〇年間を晩唐と呼ぶ。

昇り続けて来た大唐王朝が、恰も落日の如くゆっくりと沈んで行く。皇帝の指導力の欠如、宦官の横暴、党派の争い、官僚の腐敗、内乱等々、何れの国家、多くの組織がどの時代にも経験する避け難いパターンである。

しかし文学上では、それ故にこそ亡びの美しさが存分に表現出来たのかも知れない。

社会批判の風刺詩を作った元結、顧況。大暦の十才子と云われた銭起、盧綸、韓翃、李益、司空曙、劉長卿、韋應物、柳宗元、劉禹錫らが活躍する。

前後八年にわたる安祿山・史思明の大乱は漸やく終息したが、その爪痕は深く、社会不安は唐朝の滅亡まで延々と続くのである。

大乱後の一時の憩いを自然の静寂に求めた彼ら十才子は王維、孟浩然を踏襲して山水詩を詠じた。韋應物は自然諷詠に特に優れた詩を残し、後世「王・孟・韋・柳」と併称されるに至った。また李益は辺塞詩も得意とした。

しかし盛唐の李・杜のあとを継承した代表は中唐では韓愈と白居易である。

韓愈は浮沈を繰返したが正四品上の地位に昇った。当時流行の装飾的な美文に反発、漢以前への古文復古を説き、自由な文体を創始し散文上で革命を行った。「唐宋八大家」の筆頭である。一派には苦吟派の孟郊、賈島、ランボーに比される早熟の天才、李賀も直弟子であった。李賀は怪奇幻想の世界をさ迷った異色の詩人である。

白居易（白樂天）程日本人に親しまれた詩人はいない。わが国文学に与えた影響も大きく、わが菅原道眞が心底より私淑した事で知られている。白居易の本質は杜甫を継ぐ社会詩である。「詩は政治に寄与させねばならぬ」とし、「単に風月に嘲れ、花草を弄ぶ」だけではならないとした。親友の元稹と共に誰にでも判る平易な言葉で詩を書いた。この為「元軽白俗」とそしられる事もあったが。とまれ底辺にあえぐ人達に暖かい愛情を示し大衆からも親しまれた。王建、張籍、李紳らも同系の詩人である。

晩唐を代表するのは杜牧である。滅びゆく美しさを限りない哀感をこめて表現した。詩風と詩人は時代の背景が生むものである事を改めて実証した。

時を同じうして「溫・李」と称される溫庭筠と李商隱がいる。李商隱は杜牧と共に晩唐を代表する才子である。杜甫を学んで格律謹厳、一字一句に美的世界を構築した。また李賀の手法も学んでいる。典故を用いた難解な作品が多いが、詩の頂点を極めた詩人でもあった。

唐朝が亡び宋に至る迄の約五〇年間を五代十国時代と云う。羅隱、皮日休、陸龜蒙、司空圖、韋莊らが名高い。



近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（二十五）

第一部　北方探検近藤重蔵　下

第一章　重蔵の栄華と失脚

二、択捉島への航路を開く

金子正義

（五）

六月十六日、此の時季の国後島は、西海岸より東海岸が穏やかである。幸い朝霧も早く消えた。

先ず宜温丸が先発してケラムイ岬を南下し、岬の突端を東に廻って北上した。

東弗迄（トウフツ）の十里の海岸は多くの澗もあるが錨地は無い。

然し高田屋嘉兵衛は、昨夜写し取り乍ら頭に入れた元文四年の海図と海岸線や潮の流れを比較し乍ら慎重に船を進めた。

近藤重蔵は昨年の択捉島渡りの帰りは、アイヌのイタオマチプで東海岸を通ったので、島の背骨を成す山脈や緑の岸辺に思いを深めて眺望していた。

卍丸の船頭勘兵衛は卍丸を水主の定吉に任せて、宜温丸に乗り込み高田屋嘉兵衛の航路按検を見守っていた。

五百石船の卍丸は宜温丸より後から出帆し、船脚を抑え乍ら宜温丸より沖合を走航している。卍丸は北前の弁財船と云えども五百石積である。国後島より択捉島に至る沿岸の入江、澗、港湾の錨地は変化が多く、卍丸が船を寄せる寄付場所は稀にしか無い、風浪を避けて入港しても岩壁の岩間に繋ぎ留める以外にない。

従って、船は東弗には寄らず、昔の大噴火で羅臼山の溶岩が広く海底に拡がっている羅臼崎の沖合を北上して古釜布（フルカマップ）に向った。

フルカマップ河口の湊は海底の浅い湾内にあるので宜温丸も卍丸も湾入口の大崎を廻り込んだ岸辺に船を寄せた。

間も無く番役所より迎えの艀が来たので、近藤重蔵と配下の宮本源次郎達が先ず上陸した。フルカマップの番役人も昨年と同じ者達で、再会を喜び番役所総出で艀を宜温丸、卍丸に向け高田屋嘉兵衛や卍丸の船頭勘兵衛以下の主だった水主達を迎え上げた。

フルカマップでは夏場にはトマリから交易商人や運上屋も来て、港に商場も開かれるので、交易商人達は目敏く大小二隻の湾入を見て、忽ち番役所にやって来て、卍丸が沼島衆の船であると知っているので、

「根室辺で秋物の鮭鱒などの集まるのを待つよりも、フルカマップで安く大量に買い入れた方が得だ。此処では見れば分るように湾内周辺の海には腐る程の蟹や鱈が満ち溢れ、岸辺には皮や油の取れる海獣も多く、只のように安く手に入るぞ」

と頻りに勧めた。

卍丸の沼島衆は、近藤様の言われた通りだと直ぐ対応しようとしたが。

卍丸船頭の勘兵衛は、此の辺の魚群には流石に驚いたが、産卵の時季は北に行けば行く程魚介類は豊富となると睨んだ。

日の丸御用船として御救い交易を試みるとしても、フルカマップだけで海産物を積んで引き返すなど莫迦げた事だ、と集まって来た運上屋達に、御用船は択捉島航路の按検が本務だ、帰りに魚介物を買い上げよう、と伝えた。

フルカマップの運上屋、交易商人達は、

「其れではお帰りに買い上げて下さるなら、其れ迄に生鮭を丸干しや、見開きにしたり、塩漬や燻製にして集積して置きますから是非買い上げて下さい」

と湊の会所番役人を仲立にして申し入れた。

勘兵衛は慎重に近藤重蔵に報告し許可を求めた。重蔵は元より卍丸を日の丸御用船としたのは、アイヌの為に御救い交易を試みようとした事なので、フルカマップ出帆を一日延ばし、充分運上屋や交易商人と商談を綿密にする様に、経理担当の宮本源次郎を其の掌に当たらせる事にした。

近藤重蔵は宮本源次郎に、

「従来の松前藩知行地の交易場所のアイヌ交易では、鮭百本で玄米八升入一俵である。然るに和人取引では百本で五百文である。従ってアイヌ救済の御救い交易では和人と同様に百本五百文として差別せず買上げ、此れと同価の米麦、酒、煙草を渡すように、他の海産物と此の交易率を基準にせよ。労役の日当は一日玄米二升五合（二百五十文）であるから、アイヌを海産物の加工や運搬等に使役する場合も同一とし、決して二合五勺などで働かせてはならぬ」

と厳命した。

フルカマップの和人商、仲買人も大量の魚介を海で腐らせるよりましであると喜んで交易比率に応じ、一日懸となって海産物個々の取引値の取決めを行なった。

六月十八日、日和も風向も上々であった。図らずも一日休養を取った宜温丸、卍丸の船員達は、元気にフルカマップを出帆し、国後島の背稜を成す羅臼山、エビカラ

クス山により、北端のルル岳、チャチャ岳に至る五百丈、六百丈の火山稜を望見し乍ら舵を艮（うしとら）にとった。

山々より流れ下る河川に押し流された溶岩が岬を作り澗となる、変化の多い海岸線に沿って航行した。

近藤重蔵は昨年の択捉島往還には、アイヌのイタオマチプで行きは西海岸、帰りは東海岸沿いに漕ぎ渡ったが、風浪の無い限りは、岩礁や潜礁を巧みに避けて漕行するイタオマチプの方が確かに安全であると思った。

然し七十石の宜温丸や五百石の卍丸は海岸より沖合に航行せざるを得ない、高田屋嘉兵衛や五平が慎重に海底を測量し、海流を見定めて按検し海図に記録し乍ら進航する。

艫て船は雄大なチャチャ岳の山裾が展開した岩石層のイカバノツ鼻、オンネベツの錨地に達したが、海底が浅いので奥に入れず船を岩壁に繋ぎ留めて一泊することになった。

此の辺の海面も産卵に河川を遡行する鱒の大群が銀鱗の尾鰭で海面を波立て騒がせていた。

重蔵は昨年択捉島よりの帰途此処に上陸してチャチャノポリ登山をした事などを高田屋嘉兵衛に話したが、

「今回は其の暇は無い、天候の変らぬ裡に明日安渡移（アトイ）矢岬を西に廻ってアトイヤの澗に入り、択捉島渡りの按検を致そう」

と話していると、松前の出張番所の番役人が、沖を北上する大・小二隻の官船がオンネベツに入るのを見て、番役人が早船を漕ぎ寄せて来た。

番役人はフルカマップの役人と同じように重蔵を見て驚き。高田屋嘉兵衛より明日直ぐ出帆するので、岩壁に一夜繋留するのみであると訊いたが、湾内に入れなくとも、乗員一同と共に上陸なされる様にと頻り勤めたが重蔵が応じなかったので、締めて一旦引き上げたが、暫くすると、重蔵の顔見知りの上役人が挨拶に来て大蟹や比目魚の大籠籠を献じて帰った。

六月十九日卯刻、日は疾に上っていたが、雲脚が早い。然し、腕利の水主達は気にしない。其れに通詞が、

「アチャポが朝から昼までは国後水道の潮流は南から北に向う。アイヌはパイダルで其の落潮に乗って択捉島ベルタルベに渡る、早く出帆した方が良い。と言っている」

と嘉兵衛に告げたので、先ず宜温丸が纜を解き、卍丸が続いて出帆した。

嘉兵衛は先を急がず、イカバノツ鼻白糖湾のある凹凸の海岸線の按検を慎重に行い、昼近くアトイヤ岬の北端を西に廻り込んでアトイヤ湊の錨地に入った。

恰度潮の流が止まる刻限であったが、空は雨雲の動きが疾くなった。

湊番所の番役人は思いもかけぬ大小二隻もの官船の入港に驚き、暴風雨の懼れがあるからと、近くのアイヌコタンからアイヌを集め、番役所役人総掛りで、宜温丸は轆轤で陸へ、卍丸は錨地の繋柱の囲みの中に太綱で幾重にも繋ぎ留めた。

作業が終わる頃には雨が時折強く降り、次第に荒れ始めた。

近藤重蔵達は番役所に、船員達は船内や近くの商家や和人の民家に分宿し、アチャポ達は付近のアイヌコタンに分宿した。

夜通し風雨は強く降り荒れていたが、空が白む頃には歇んだ。然し海は無気味な海鳴りを陸に乞響かせて、海潮は激流していた。

昼近くには時折強く降り頻きった雨も歇んで空は青く澄み渡ったが、湊番役人は未だ船を海に下すのは危険であると、其の日は暮れた。

次の日も空模様は怪しく船は解纜できなかった。

近藤重蔵は、高田屋嘉兵衛、勘兵衛等を連れてアトイヤ岬の岩壁上に立って、眼下の国後水道を展望させた。

重蔵は、

「対岸の択捉島ベルタルベ岬へは海上僅か五里の海峡である。南へ十五里には色丹島がある。更に遥か遠くのカムチャツカより千島列島の北太平洋沿いに流れて来る親潮が、此の国後水道よりオホーツクの海へ落ち潮となって流れ込むのじゃ。

昼からは、オホーツクの海の黒潮が張り潮となって国後水道に奔流する。夏場の海の穏やかな間は、アイヌは昔から木の葉のようなアイヌのバイダルでも潮流を巧に操って往還していた。

拙者も昨年最上徳内殿とイタオマチプで往還した。然し今度は、七十石の宜温丸での渡航である。露国船や英吉利の海洋探検船等は千石船であるから通過したろうが、和人船は渡し便船も図合船も通っていない。従って今度の宜温丸の按検で航路を開く訳じゃ。

嘉兵衛始め皆の衆、善く善く此の高見より海流を見定め択捉島への船道をつけて貰い度い。

拙者は昨年十数日間、毎日此処から潮流を展望していた。」

高田屋嘉兵衛以下一同は近藤重蔵の説明に強く胸を拍れ、今は急流の停止している眼下の深淵を見下して、必ず渡航して見せよう、船路をつけて見せようと、拳を握り締めて勇み立った。

だが、翌日も天候が悪く、次の朝も、アチャポの日和見は悪く空しく日を送った。

重蔵は、根室に巡回視察に来るであろう蝦夷地御用現地司令の松平信濃守忠明との対応を思い、亦、卍丸によるフルカマップの幕府直捌の御救い交易の事も気になった。

択捉島の航路按検は高田屋嘉兵衛に任せ、フルカマップに集積されている海産物を、御用船卍丸に積み込ませ根

室に戻り、高田屋嘉兵衛の帰りを待ち乍ら、松平忠明への報告の準備をしようと考えた。

近藤重蔵は嘉兵衛源兵衛等を呼んで事情を話し、航路按検の事は、海運の玄人である嘉兵衛に任し度いと云い。次の日和見宜しければアトイヤより解纜し、宜温丸は択捉島へ、卍丸はフルカマップへ向い度いと伝えた。

高田屋嘉兵衛は、重蔵が自分を信頼して按検を任せると一同の前で明言した事に感動し、必ず遣り遂げましょうと誓った。

卍丸の船頭源兵衛は、是非嘉兵衛の択捉島航路按検に加えて下され、卍丸の方は水主定吉を沖船頭として一切任せますので、と強く航路按検を望んだ。

重蔵は源兵衛の海の男として好ましい態度に感じて、「宜し、択捉島は南北五十里、周廻り二百六十里もある長大な島で、国後島の三倍の広さである。従って今回の按検はベルタルベ、丹根萌（タンネモエ）より西岸伝いに約十五里、内保湾迄の水路、碇泊場を検するだけで充分じゃ従って、来年度以降も続いてやる事になる。源兵衛が航路按検に意欲を持つて呉れるなら、沼島衆に択捉島ばかりか続いて得撫水道渡りの按検を任されても宜いぞ」

と云うと。

源兵衛は我が意を得たとばかり莞爾として、「有難き御言葉、我等沼島の海が男、誰もが欲得を離れて生き甲斐ある仕事を遣り遂げます。」

と応じた。源兵衛等沼島衆は、重蔵が択捉島開拓に拘る間は協力し、特に翌寛政十二年の本格的開拓に伴いない全島航路の按検を成し遂げ、更に得撫島水道渡りの按検をも果たしたので享和元年、蝦夷地奉行羽太正養より、特に次の様に労金を賜った。

淡州沼島

金三両　船頭　源兵衛
金二両　水主　源之助
同じ　源左ヱ門
同じ　勘右ヱ門
同じ　定吉
同じ　八郎右ヱ門

右者　ウルップ島へ渡海の節格別骨折に付書面の通り別段に被下候世

酉　七月

と犒われたが、未だ先のことである。

重蔵は配下の宮本源次郎が、幕吏として高田屋嘉兵衛等の船頭をも見下して、生半可な天文海運操船の事などにも喙を入れるので、

「拙者は、卍丸で根室に戻るか、宜温丸一同の統括を宮本源次郎に頼む、然し海運、按検等、航海の事については高田屋嘉兵衛に任せてある、宮本源次郎は、択捉島の地形観察、住民の暮らし振り、会所や場の設置位置等を専らにする様に」

と釘を差しておいた。

翌、七月朝日、絶好の船日和よりではないが、フルカマップに向う卍丸には差し支え無しと錯地の繋柱の囲み柱より解纜しアトイヤ岬の北端を廻ってイカバノツ鼻の沖を南下して一気にフルカマップ向った。

行きは七十石船の宜温丸に合わせて船足を弛めての航行であったが、流石は沼島の五百石船である追い風に乗って夕刻にはフルカマップに入港した。

予想より早く戻った卍丸を迎えたフルカマップ番人役や、交易会所の仲買商人達は恭恭しく近藤重蔵を迎え卍丸の定吉や八郎右衛門等の主だった水主達に、番役所の倉庫に積み込まれている海産物を見せて、契約書通り用意した海産物です、明日卍丸につみ込みましょうと云った。

既に卍丸側よりの交易品、米、煙草、酒、毛布等は、会所番役人より先渡してあり、仲買人よりアイヌ側に渡されている訳である

翌日、番所役人の立会の上で、沖船頭としての定吉、知工（事務長）としての八郎右衛門等船員達は、場所取引は馴れているので万事滞りなく遣り遂げた。

近藤重蔵は其の状況を観察し乍ら、フルカマップの交易は、卍丸が大阪の市場に積荷を売り捌いてから、其の交易差益が分るが、日の丸御用船として買い上げが安いので、相当の差益を得ようが、交易商場の仲買商人は卍丸の買い上げが安いので、交易商人、運上屋の利益は薄い。其の分はアイヌに交易品として渡す米麦、酒、煙草、木綿糸、針などが当然少なくなる惧れがあり、幕府の直捌の御救い交易と云うても、直接アイヌと交易するのでなければ、御救い交易は逆にアイヌを一層貧しい立場に追い込む事になる。と気付いた。

運上金を松前藩主や知行地の主に納める場所請負商を廃しても、交易商場で、和人の仲買商、運上屋の手を経ないと、アイヌと交易できないようでは御救い交易にならぬ。アイヌ自身が直接商場に来て和人と平等に交易出来るようにするには、アイヌの生活を向上させ、風俗習慣も和人と同じように成ることだ。

其れには原始的な狩猟、漁猟の手掴み、棒叩きでなく綱や用具を使っての収獲の増大、天干し、塩漬、粕漬等の俵物に加工し、其の海産物で幕府の直捌に堂々と対応できるようになることである。

狩猟漁猟ばかりでなく、蝦夷地千島の山川には豊かな地下資源、金銀銅、砂鉄火の岩が無尽蔵である。先住のアイヌにこそ此の地を拓き豊かな生活を享受させるべきである、と重蔵は択捉島の開拓に思いを馳せた。続く。

☆同人の青木昭成が満を持して「詩集・茄子紺いろの」を上梓した。先ずはおめでとう。氏はあとがきに云う「詩を作る行為、それ自体はいかにも孤独なもの」と。孤独な闘いの中から私達の心琴を打つ言葉が開花する。

「茄子の実はあか味を帯びて　ふかまる藍いろの枝から　吊りさがっている・・・」

この一瞬の安定と不安定。氏には我々凡俗の感性では見えないものが見えているに違いない。だから「クレーン車が　汗をかいている」の表現が生める。更なるご精進と第二集の刊行を期待したい。

☆異色の新人、工学博士の新井宏を同人に迎えた。専門の金属鉱業関係は元より、歴史、考古学に詳しく韓国語も善くすると云う多才の方。爾今小誌にも新風が吹くであろう。乞ご期待！

☆ニュージーランドのグラマースクール（六年制男子校）で日本語の教師をしている娘が同僚の数学の先生と結婚すると云う。私は家内と二人でいそいそと出掛けた。

遠来の我々に配慮したのか、友人達は招かず近親者のみ十一名が広い芝生と疏林に囲まれた郊外のレストランに集まった。

牧師がにこにこと微笑し乍ら現われた。私は娘の成人後始めて彼女と腕を組んで数歩あゆんだ。庭の一隅で型通りの祝福の挨拶があり、誓いの言葉や指輪の交換、書類へのサインが済み、一同辺りを散策し写真を撮った。

陽が漸やく沈まんとする頃、屋内の一隅に導かれ大テーブルを囲んで団欒が始まった。勿論挨拶等は一切ない。「和気藹々」とはこれを云う。シャンペンも肉も美味しかった。

他の居合わせた客らがそれぞれに祝福してくれる。皆も楽しそうだ。「あの花嫁は汝の娘か」「イエス」「日本には一度行った事がある。先日は日本のヨットがアメリカ艇をやっつけてくれて有難う」「コングレティレイション」と連発して握手攻めに逢う。宴は三時間にも垂んとしたであろうか。英語を話せない筈の女房も楽しげに輪の中心に居て、兄嫁達と話しが弾んでいる様子である。

今夜の費用は「花嫁の父」が支払う習慣だそうで頃合いを計らってカードで支払った。牧師様の出張費を含めて四万円弱であった。

この国の人は皆優しく思いやりがある。先生を「サー」と呼ぶ。散歩していてすれ違うと必らず声を掛けられる。「ハーイ」「グッドモーニング」「ファインデー」等々。

私もこの頃はこちらから声をかける。必ずにこにこと応えてくれる。皆思いやりがありそれを実行している。

ふと論語の孔子の言を思う。仁と云う語。そして実行する事の大切さ。この国には仁があり実行がある。

成田に着いた。私と女房の心は暖かく幸せ一杯であったが、この国が何やら寒々と感じられた。私の周囲には「仁」に満ち溢れた人々が一杯いるにも拘わらず。（く）

祝上梓
青木昭成著
詩集「茄子紺いろの」
出版・印刷　帝国出版リンデン

「まんじ」　第七十五号
平成十二年二月一日発行（非売）
編集　鯨游海
発行　柴田富佐子
〒一〇一―〇〇六二
東京都千代田区神田駿河台二―九
柴田方
「作家群」
（まんじ）編集部
TEL　〇三（三二九三）〇〇九四　柴田方
郵便振替口座　〇〇一二〇―四―九〇八一五
加入者名「作家群編集部」
印刷　有限会社帝国出版リンデン
東京都中野区江古田四―三十七―十一
TEL　〇三（五三四五）七三八〇

目次

勲章の亡霊……大和禎人 1
老春繚乱……三戸岡道夫 6
―拾い屋さん―
仮名に着想を得たハングル……新井宏 11
その頃あれはアルマジロ……青木昭成 20
笹ヶ崎村（十）……太田和貞 23
ねずみ小僧丸楠（十六）……鈴木昭三 33
漢詩　潮騒録（二十五）……鯨游海 42
泰山木（六）……紙透寛夫 47
―紙透小太郎の一生―
方解石の出る楠峠（十）……伊澤敏久 54
近藤重蔵・富蔵の生涯と
其の時代（二十六）……金子正義 59
千篇萬律……表紙・カット……宮城正彦 69
カット……鈴木國男



勲章の亡霊

大和禎人

「米寿を今年はお迎えになられますこと、まことにおめでとうございます、つきましては秋の叙勲申請の時期がまいっておりますが、おうけなさいますかどうか、ご内意を承りたいと存じまして、電話で恐縮でございますが、ご意向をお聞かせ頂きたいと存じまして、はい、恐縮でございます」

「そういうことでしたら、そちらさまのご都合によると思われます、お任せいたします」

役所流、型どおりことさらの慇懃さで、相手は教育委員会のしかるべき部署の事務係長のようであった。米寿に達すると高齢者叙勲ということがあることを、Aさんは知らないわけではなかった。

（そちらさまのご都合）と口をついてでた言葉には曖昧なところがあって、叙勲という旧套に対し平素幾分か抵抗を覚え、かねて皮肉の眼を向けてきた者の言葉としては不十分なフシのものであったと、言ってしまってから気づいたものの、手遅れであった。

ノーベル文学賞はうけたが、文化勲章は辞退した気骨のケースに喝采を心ひそかにおくったAさんである。受賞の諾否を問われる作法があることは承知していたが、いざという事態に当面してみると、とっさにNOという言葉は出なかったのだ。

Aさんは過去に軍歴があり、しかも金鵄勲章功何級かを受章していた。戦争中はそうした履歴が珍重され、遇されてみると満更でもない、と思いつつ、実は心咎めることもしばしばであった。

「動員室の仕事も大変だな、長い間ご苦労、今度の金鵄のワクはお前さんにしようよ、もらっときな」

「はっ」

あえて辞退など思いもよらぬ軍隊という特殊な組織の中

であった。動員室の仕事は兵員を把握し、つねに適正な考課と配置を考え、時には転属要員の人選をしたり、論功にもかかわり、機密の仕事をするところだ。普通古参の准尉級が実務を掌握するのが例になっていたが、この部隊では曹長が任に当たっていた。（お前さん）と呼びかけて、囁きかけたH曹長は部下思いの人情家であった。野戦の武功となると、甲乙の判断はつけがたい、ならばいっそ事務室でもという気持ちだったろう。

「なぜ、貴様が金鵄かよ、バカげとるよ、うしろ弾食わねぇように用心しなよ」

内務班の古参上等兵に脅された。日夕点呼の際の営内報で伝達され、明らかにされると、無事ではなかった。内務班にはガ島の死線を体験した兵士もいた。仕事を終えて事務室から内務班に帰ってくると、針の筵が待っていた。およそ軍隊というところに内在した矛盾撞着の犠牲者の一人にAは心ならずもされたのだった。

「やぁ、しばらく、お元気、どこかにお勤め？」

「いえ、先生もお元気で、ご活躍のようですな」

折々、見かけて、あまり顔を合わせたくない相手だ。たまたまその日に限って、真正面の出会いになった。近隣に住む元教委の指導主事で、悪代官の見本のような人物である。ある日には、バス停をすでに発車しているバスの進行を遮ってストップさせ、乗り込むほどの心臓の持ち主の彼を見かけたこともある。すでにリタイヤしているはずだが、元気はあいかわらずなのだ。

「なに、わたし？、K女子大に週三日ほど出講していますよ、これで、わたしも従四位はかたい、ふ、ふ」

語尾のふくみ笑いに呻然としたことだ。

足掛け四年、シベリア抑留にも耐えて、帰国したAさんは高校の教師という勤めに復帰し、戦後の学制改革に伴う新しい中学校の校長を最後に、米寿を迎えるこの年まで、健康に恵まれて生きてきた。凡庸の無事を自ら任じてもいる。

ところが、一方に、ジンクスめくが

（急がしく、気ぜわしい人間ほど早く死ぬ）

かれの心のうちにいつかそんな定説が育っている。他を抜き去って早ばや叙勲をうけると、間もなく早世する例が不思議に多いからだ。公立学校関係の叙勲は校長職にあったものについて、一般には死去に伴い追叙というかたちが大方で従五位勲五等瑞宝章あたりが授けられる。そして、新聞の片隅の記事として報道され、

（ああ、あの仁も亡くなったか）

という感想を呼んだものだったが、近ごろはそうした記事もあまり見かけなくなった。

（それで良いのだ）

という思いがAさんにはある。一方、春と秋の叙勲では米寿に達した高齢者に叙勲があり、それはそれなり結構かも知れないが、死亡、追叙の場合にそなえて、あらかじめ自らの手で「功績書」を認め、最終勤務校に託しておくようにという助言が当局から加えられている。

Aさんも当該校の教頭から、再三の懇請があって、

「功績書を自分で書くなんて、おかしいじゃありませんか」

「ええ、わたしもそう思うんですが……」

など会話のやりとりがあって、とうとう書いていた。書かされたというほうが当たっているかも知れない。申請には日限があって慌てさせられる実務者への同情にほだされた案配でもあった。

ところが、年齢にかかわらず同輩を出し抜いて生存者叙勲のケースが間々ある。極端な例ではある校長のかつての部下で学年主任だった者が、教頭、校長と累進して辞めると、いちはやく叙勲をうけた例すらある。

「きみはどうしてそんなに早く」

かつての上司が驚きの声をあげたケースも実際にあった。どうした要領か、天性の遊泳術に長けた人物であるに相違ないのだ。

なぜにそのような先後の情実が行われるのか、奇怪だが事実として存在する。高齢者に該当する米寿に達したとしても、自らその旨申し出なければならないと、Aさんは聞かされてもいた。そんな馬鹿な、依怙の沙汰ではないか。

などなど思いつつ、ここでAさんはかつて自分が金鵄勲章をうけたほろ苦い経験を思い出すのである。敗戦、日本の軍隊の解体とともに、その種の勲章の価値は遠に失われてしまった。夢見にもその勲章のお陰で嘗めた苦い経験は忘れ去られて久しい。そればかりでなく、実は内緒の話になるが、戦後骨董屋の手に渡してしまっていた。（だれに向かって申し訳ない）と謝ればよいのか、思惑するまでのこともないほど、時代は変わってしまっている今日だが、それはAさんの心の古傷として棺に覆われる日までどう潜めて見たとて、とうていは消えないものだ。買い手が算盤玉を弾いて示された、その際の額は言いたくない。売り渡した以上、もちろん過去に恋着はないつもりだが、曰くつきの授かりものの勲章は、ついに佩用することもなく、忌まわしいばかりの過去を拭い去る気持ちから闇に葬ったあんばいである。

（あの勲章は軍を統率したもう陛下からの畏き賜りものだった、恐れ多くて、いまに化けて出るかも知れない）と一方では大いに気になっているのだ。

叙勲を誉れとして、人寄せを派手にして、祝賀会が催され、引き出物に菊花紋章を用いた花瓶などを贈る倣いはしばしばその例を見ている。一通りの形式があって、そうした儀礼をとり仕切る業者が存在するらしい。潔く

そうした派手を退ける見識者は稀れのようだ。まして辞退したというケースはあまり聞いていない。

Aさんの知る範囲ではあらかじめ功績書を書くことについて拒否して、最終勤務校の校長から、叙勲辞退の意向なら責任上、その旨を一筆念書にしたものを預かりたい、という要請をうけた由、口頭だけではあとあと厄介な問題になっても困る、というのであった。たとえご当人の考えに出た意向であったとしても、死後となれば背後に家族があり、その意向を配慮に入れねばならぬという、考え方なのだ。叙勲を事大にとらえれば、そこまで考えなければならない、ということになるのであった。

Aさんの思惑もかねてそのへんにおかれて、いざ当面した場合を考えると浚巡を避けられない気持ちを潜めていたのであった。

「あっさりといきましょう、家族のために貰えるものは貰っときましょうよ、なにも断る必要はない」

そんなわきの意見もあった。穏便な考えならそうなるのだろう。

栄典制度としての叙勲をようやく見直そうという機運が兆して、官民の格差を是正しようという内容の報道があった。結構なことに聞こえるが、官と民を区別する思想は消えていない。一皮剥げば官尊民卑の思想は底流して歴然としているように察せられる。

警察、消防、教育と一般叙勲の報道は大方を占めて羅列され、春秋恒例の叙勲の記事は紙面を大きく占めて目に飛び込んでくる。

「きみ、まだかい、気をつけて新聞を見るんだが、まだらしいな」

「うん、きみらのように酷しい仕事じゃないからな」

「そういうもんかな」

Aさんの友人には消防官吏がいて、勤めあげ、署長になり、関係十一階級の二位、かつての軍人階級のベタ金星二つに遇されて退職した人間だった。彼は遠の昔に叙勲されているから、Aさんのことをしきりに気にしてくれるのだった。

どうやら教育職は警察、消防の下位にランクされているらしいのだ。

たとえ米寿に達しても自らの申し出でがなければ、とかねて友人から聞かされていた他区の話とは異なり、Aさんの最終勤務地の教育委員会は当局の方で調べがついていて、申請をしてくれた点を徳としなければならないはずだ。(そちらさまのご都合)と日和見のAさんの意思表示は曖昧であったが、その後、あなた任せはひとり歩きをして、秋の叙勲行事が近づくにつれ、どう情報が流れるものか、ご本人の自覚を待たず、業者からのカタログの類が日ごと、莫大の量送り込まれはじめた。勲記にあわせて勲章、略綬を額装する倣いもあるらしく、そうした額縁だけでも高価なものは何十万、ピンからキリまであって驚かされた。

そうこうするうち、やがて公示、伝達の日を迎えることになった。

「つきましては伝達は十月十八日となりました、晴れの日のご出席をいただけますでしょうね」

その場所と時間を伝達する電話であった。

「やぁ、その日はちょうど旅行に出る日です、まずいですなぁ、残念ながら出席できません」

「なんとかおさし繰りつかないのでしょうか」

相手はこの大事になぜ、と詰る語勢を感じさせるものになったのがわかった。

「いや、わたし一人の旅行じゃないのです、ごく親しい関係と一緒の予定ですから、断るわけにはいかないのです」

「わかりました、せっかくご一代の晴れですから、と思いまして、止むを得んでしょう、ようござんす」

憮然とした電話の相手を想像できた。

事実、旅行はグループで早く行く先を決めてあり、往復の列車の切符まで買ってあったのだ。

同行の誰にも叙勲の事実は秘して口にしなかった。

偶然のいきさつだったが、Aさんの叙勲に対する少々拗ねた思想が、いざという場合にこんな事態を期せずして呼んだようである。こう言っては怪談めくが骨董屋に手放した金鵄勲章の亡霊がむんずとAさんの襟首をつかんで、今回のことの経過一切を監視されている、という現実味を欠いた妄想が胸のうちを占めていた。それとない仲間うちの話題に隠れ、叙勲のことは胸に抱く秘事として口を封じるAさんのいじらい姿がそこにはあった。

学務課長、主香其来とある刺を通じて、門戸を叩き、恭しく勲章はAさんの宅にもたらされた。恭しくという形容がピッタリ、お役人の挙措は流石と思える心得たものであった。

紛れもなく皇国民教育をうけたAさんはせめてもの虚勢を張って迎えたものだったが、虚勢はそこまでで終わっている。

一番低廉の額縁を買い、額装を型どおりにし、寝室というには粗末な寝間の欄間に掲げることにした。そして足を向けて寝ている。足を向けてはどうこうなぞ、今は戦後五十年を呼吸したAさんにとっては意識にはなく、間取り具合からもそれがごく自然で闊達な睡眠姿勢なのであった。

(H十二・三・十六)



老春繚乱

—拾い屋さん—

三戸岡道夫

楽々園が始まるのは朝の九時からであるが、その時間になると、待ちかねたように老人たちが集ってくる。春野爺さんも秋野婆さんもそうした仲間なのであるが、この二人は園内に入ると、他の老人たちのように談話室でくつろぐようなことはせず、すぐゴミ拾いにとりかかるのだった。

二人はつれだって、まず談話室の中を見廻す。そしてちょっとでも紙くずが落ちていれば、獲物を狙う鷹のように一直線に突き進んで、手に持ったビニール袋の中に拾って入れるのである。それはゴミを拾うというよりも、まさに獲物を仕止めるという感じだった。

談話室が終ると廊下のゴミを拾い、それから食堂、娯楽室、トイレへと進んでいくのであるが、二人が競争するように拾って歩くので、建物の中のゴミはたちまち拾

空が抜けるように青い。その空の下に、老人ホーム楽々園の庭が美しくひろがっていた。

庭は広いというほどではないが、老人ホームの建物の南側にひろがっていて、楠や桜の大木が二、三本、処を得た配置で新緑をしたたらせ、つつじや、椿、くちなしなどの灌木が、庭の周囲を縁どっていた。

だが楽々園の庭の美しさは、そうした木々の緑の美しさよりも、庭内にチリ一つ落ちていない、清潔さにあるといってよかった。

清潔さの秘密は、春野さんという爺さんと、秋野さんという婆さんが、せっせとゴミを拾っているからだった。

楽々園は老人ホームといっても、別に老人病院でも、老人介護施設でもなんでもない。老人用の集会所として、市が提供している老人向け公民館のようなものだった。

いつくして、次は庭や、建物の周囲へと進出していくのだった。二人のゴミ拾いのおかげで、庭にもそれほどゴミが落ちているわけではないが、それでも紙くずや、通行人が園内へ投げ込むジュースの空罐など、獲物には事欠かなかった。

そんな二人の姿を、談話室の老人たちはお茶を飲みながら眺めて、

「あんな馬鹿なことがよくつづきますね」

「いいんですよ。あれが二人の趣味ですから」

「そうですよ。あの二人にゴミ拾いをやめさせてはいけないんです。いつか、こんなことがありましたよ。管理人さんがゴミ拾いを気の毒がって、『そんなに一生懸命ゴミを拾わなくてもいいんですよ』と言ったら、春野さんが急に怒り出して、手に持っていたビニール袋のゴミを全部庭にぶちまけて、それをまた一生懸命拾ってビニール袋へ集めていましたよ」

「趣味というより、生き甲斐ですね」

「生き甲斐、生き甲斐・・・、わたしたちも、もう少しボケたら、ゴミ拾いが生き甲斐になるかもしれない。そろそろ春野さんや秋野さんにお近づきしておいた方がいいのかも知れませんね」

「いや、いや、あなたは大丈夫ですよ」

老人ボケにも、軽度のものから、重度のものまである。普通は物忘れがひどくなるとか、ぼんやりしているとか、思い違いが多くなるなどという現象が多くなるようであるが、それが進むと異常行動が目立つようになる。たとえば誰彼かまわず話しかける、何でも手当たり次第に口に入れる、何でも拾って歩く、やがてあたりを徘徊して行方不明になったり、暴力をふるうという異常行動にまで進む場合もある。

あまりにひどい場合には社会生活が出来なくなるわけであるが、ゴミ拾いに熱中する程度のボケは、他人に迷惑をかけるわけでもなく、かえって社会の役に立つというものである。

ボケといっても、どこからがボケで、どこからがボケでないと、境界線がきまっているわけではない。だから楽々園へ来る老人たちが、

(おれはボケてはいない)

(わたし、頭の方は大丈夫よ)

と思っていても、その中には、本人は気がついていないが結構ボケの始まっている人がいるかもしれないのである。だから談話室の老人たちもうすうすそれに気がついていて、ゴミ拾いの二人への共感があるのだった。

そんな共感がいつの間にかは春野爺さんと秋野婆さんを中心にした、

(拾い屋グループ)

へと発展するのに時間はかからなかった。そのきっか

けは、ある老人の、
「わたしたちも、そのうちに、ゴミ拾いが生き甲斐になるかもしれませんなあ」
と言ったことからで、
「どうせやるなら、ボケないうちにやりましょうや。ゴミ拾いは世の中のためにもなることです。毎日こうやって談話室でたのしく喋ったり、ゲームをやったり、体操やったりするのもいいけれど、少しは世の中にお役に立つこともやらないとね・・・」
「そうですよ。ゴミ拾いには、春野さん、秋野さんという大先輩がいることだし、わたしたちはその後をついていくだけでいいんですよ」
「さんせい」
「さんせい」
と話はたちまち纏って、
「じゃあ、皆さん、明日の朝家をでるときビニール袋をひとつずつ持ってきて下さい」
「スーパーでの買物のビニール袋が家には山ほどありますから、大丈夫です」
翌朝、てんでにビニール袋を持って集まった老人たちは、なにかほんのりと希望にもえているようだった。
「まるで子供の頃、遠足に行く朝のような気分ですな」
「わたしは家を出るとき、嫁から『お父さん、ビニール袋などぶら下げて、みっともないこと止めてください

よ』と反対されましたが、そんなもの無視してきました」
ビニール袋を片手に持った老人たちは、春野爺さんと秋野婆さんの後について、室内や庭のゴミ拾いはじめたが、そんなものはすぐ拾いつくしてしまって、
「次は道路のゴミ拾いといきましょうか」
一行はぞろぞろと門から外へ出ていった。あわてたのは管理人で、管理室から飛び出てくると、
「どこへ行くのですか、皆さん、変なことをしては困りますよ」
悲鳴をあげた。
「変なことではありませんよ。ゴミ拾いのボランティア活動です」
「でも、この二人を外に出すのは危険ですよ」
春野爺さんと秋野婆さんを指さした。
「大丈夫です。わたしたちが付いていますから」
「交通事故には気をつけて下さいよ」
「大丈夫、危いところへはいきませんから」
こうしてボケ老人をリーダーとした楽々園の拾い屋グループは、紙くず、ゴミ、空罐、たばこの吸がら、落葉・・・、なんでも拾ってはビニール袋へ入れ、横断歩道を渡り、横丁を曲がり、路地へ入り、公園、川の堤防などへと歩いていった。
公園で遊んでいた数人の子供たちが、
「あれ、なに・・・？」

と目をみはり、
「わーい、面白そうだな。ぼくたちも拾おう」
と走って集まってきた。
「おじいちゃんたち、なに拾ってるの？」
「何でもだよ」
「拾ってどうするの」
「町をきれいにするんだよ」
「いま、はやりのボランティアだね」
「まっ、そうゆうことだ」
「あっ、空罐が落ちていた」
一人の子供がすばやく草むらにころがっている空罐を見つけて、老人のビニール袋へ入れた。
こうして子供たちが老人集団へ加わって、拾い屋グループはふくれ上がっていった。その子供たちを見る町の人々の反応は、
「ぼくちゃん、感心だね」
とほめてくれる人もいれば、
「・・・？」
と、老人、子供の混成部隊に、怪訝な眼を向ける者もいた。しかし大部分の人たちは、拾い屋グループなどには無関心で、忙しげに通りすぎていった。
と、その時だった。向うから、学校帰りの高校生の一団がやってきた。
やたら型ばかり大きい鞄を肩からぶら下げ、地面を引

きずるようにズボンをはいた足で、ぺた、ぺたと歩きながら、互いに大声でわめきな合いながら歩いてくる。
が、拾い屋グループと正面衝突しそうになったとき、ジュースを飲み飲み歩いていた高校生の一人が、空罐を、
ポイ
と捨てたのである。すると秋野婆さんが無心にかけ寄って、その空罐を拾ってすばやくビニール袋へ入れた。
「ケッ、拾いかた、うまいねえ。じゃ、おれのも拾わせてやろうか」
そう言ってもう一人の高校生も空罐を捨てた。空罐は、
カラ、カラ、カーン
と音を立ててころがり、一人の子供の前で止った。一瞬、子供はその空罐にとまどったが、
「まいったなあ、でも、まあ、いいや」
ちょっと悲しそうな表情でそう言って、小さな手で空罐をひろい、ビニール袋の中へ入れた。
高校生たちは声高に通りすぎた。
「ああいう高校生もいるんですねえ」
「まあ、いいじゃありませんか。ボランティア、ボランティア」
老人たちがなぐさめあっていると、一人の高校生がかけ戻ってきて、
「お爺さんたち、すみません。ほんとうはぼくも空罐を拾いたいのですが・・・、いま拾うと、仲間外れにな

ってしまうので、ちょっと出来ないのです。でも、そのうち、僕たちもきっとゴミを拾うようにします。今日は、かんべんして下さい」

そう言ってぺこりと頭を下げると、仲間の方へかけ戻っていった。

「うん、ああいう高校生もいるんですねえ」

一行は足どりも軽く、次の路地へ入っていった。

社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎しております。「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行されます。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせっかくのお申し出でがあり、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。

郵便振替口座　〇〇一二〇－四－九〇八一五

加入者名　作家群編集部

仮名に着想を得たハングル

新井宏

ハングルを韓国語あるいは朝鮮語のことだと思っている方が多いであろう。しかしハングルとは、李朝朝鮮で十五世紀中頃に制定された、世界で最も合理的かつ人為的な表音文字のことであり、いわば文字と発音記号を兼ねた表記法のことである。

母音が十字、子音が十四字の合計二十四字の基本字形から成り、それぞれの字形は、発音時の口形を写している。通常、基本字形を数文字を組み合わせて一文字につくる。当初は、婦女子の文字として正字の地位を得なかったが、徐々に広まり、二十世紀初め頃から、言文一致の動きで、ハングル漢字まじり表記が一般化し、第二次大戦後は、北朝鮮、韓国共に、完全なハングル書きに移行している。

韓国に行くと良く分かるが、現在では、全ての表記がハングルによっており、漢字はもとよりローマ字の表示も見かけない。近くて遠い国が、ますます遠くなる一因にもなっている。

もちろん、韓国や北朝鮮はもともと漢字公用の国である。日本よりもはるかに漢語に依存する度合いが強く、やや堅い文調のものなら、八十パーセント近くが漢字語から成立っている。したがって、全てを漢字表示にしてしまえば、朝鮮語を全く知らなくても、日本人ならほとんど理解できる。

しかもハングルは、日本のカナ文字のように一漢字を表音するのに二、三文字を要するようなことはなく、全ての漢字をその一文字で表現できる。だから、なれてしまえば、ハングル文字の羅列でも、さほど冗長に感じることなく、容易に漢字語が目に浮ぶようになる。知れば知るほど、その構成の合理性に驚く。

もちろん、ハングルは、朝鮮語固有のテニヲハや基礎動詞、基礎形容詞の表音にも優れている。しかしその機能だけなら、日本のカナ文字と大きく異なることはない。何よりも優れているのは、漢字語の表示に便利な点であ

る。だから、筆者の独断かも知れないが、ハングル文字は本質的には漢字音の表示のために開発されたものなのである。

その上、朝鮮語では、原則として漢字の読み方はひとつである。日本のように呉音あり漢音あり、訓読みあるなどということはない。例えば、各・角・脚・覚・殻・却・刻の七文字がいずれもkak としか発音されない。したがって、ハングルの二十四基本文字を覚えてしまえば、朝鮮語を全く学ばなくとも、日韓で漢字語のほとんどが共通であるから、ある程度の読解はできる。

世宗の創案

このような特徴をもつハングルは、李朝第四代の世宗みずからにより一四四三年に創案され、三年間の準備を経て、一四四六年に公布されたという。公布当時は「民に教える正しい文字」という意味から『訓民正音』と名づけられ、現在とは異なり二十八字で構成されていた。世宗在位の頃は、李朝開国当時の功臣勢力が、もうほとんどいなくなり、科挙を通じて政界に進出してきた儒学者と、儒学的な素養を身につけた世宗が協同して、王道政治を夢見ることができる環境が整いつつあった。そのため世宗は、王立研究機関とも言うべき「集賢殿」に選りすぐった学者を集め、儒教政治の基礎となる儀礼制度を整備し、多方面の書籍を編纂刊行、学問を奨励して人材を育成し、科学技術、農業、医療、音楽などあらゆる分野で、輝かしい民族文化を開花させた。また、国土の開拓や拡張の面あるいは外交面でも、大きな実績を残し、韓国の一万ウォン紙幣にもその肖像が描かれている。

一般には、ハングルは世宗によって創案されたと言われている。それは、世宗が一部みずから執筆し、学者にして政治家の鄭麟趾が説明を加えた書『訓民正音』の序文に、その制定の動機について、次のように書かれているからである。

> 国之語音、異乎中国、与文字不相流通、故愚民有所欲言、而終不得伸其情者多矣、予為此憫然、新制二十八字、欲使人易習、使於日用耳（わが国の語音は中国と異なるので、漢字を使っては表すことができず、民は言いたいことがあっても、言えなかった。予はこれを憐れみ、新しく、学び易く使い易い二十八文字を制定する）

当時は、中国文化至上主義の時代である。その中で、漢字は朝鮮語表記に不便だと言いきり、新しい体系の文字を採用しようとした考え方は、全く非凡で勇気ある発想と言わねばならない。君主の立場にあってこそ、思い付いた構想であったと言えるであろう。事実、かたくなに、ハングル文字に反対した学者も多く、ハングルが市民権を得るのは二十世紀に入ってからなのである。したがって、ハングル制定に見せた世宗の意気込みから見て

も、それが世宗の創案によると言われるのも尤もなことなのである。

しかし、ハングル創案のアイディアを世宗自らが出したとするならば、それは疑問である。当然、このアイディアを世宗に進言した者がいたはずであり、開発担当の実務者がいたはずである。しかし管見のかぎり、このように世宗創案説に異論を唱えているのを知らない。

もちろん、筆者がこのような主張をするには、腹案あってのことである。それは、十中八、九、申叔舟のアイディアになると思っているからである。

申叔舟の着想

申叔舟の名は、日本の歴史上でも良く知られている。それは、一四四三年の第四回癸亥通信使の書状官として来日し、日本に関する書『海東諸国紀』を著し、それが日本の中世の貴重な歴史文献史料として活用されているからである。

申叔舟がハングル制定に当たって、中心的な役割をはたしたのは、別に筆者が強調するまでもなく、周知の事実である。ハングルが制定公布される前年の一四四五年には、世宗の命を受けて、成三問と共に、明の翰林学者の黄瓚の教えを得るため、十三回も遼東を往復している。その際、音韻学者である黄瓚が、彼の言語学的能力に、極めて高い評価を与えたという。そのこともあってか、彼自身、音韻学に深い造詣をもつようになり、『洪武正韻訓訳』『四声通考』『東国正韻』などの音韻書を編纂するようになる。しかし、それはハングル創製に関与した結果であって、創案の着想を得たことは無関係のことかも知れない。

筆者が申叔舟をして、ハングルのアイディア創出者とするのは、別の理由である。それは、彼が日本の表記方法すなわち仮名や仮名まじり漢文について、十分な知識を有していたからである。もしそうであるなら、ハングルの創製に大きな影響を与えたのは日本の仮名文字ということになる。しかし残念ながら、このような主張をどこにも見かけない。

申叔舟は、一四一七年、工曹参判（科学技術省次官）の申檣の子として生れ、一四七五年五十九歳で亡くなるまで、六代の王朝に仕えた学者であり、外交官であり、政治家である。議政府の領議政すなわち当時の首相を二回までも勤めた人物で、学術関係の諸機関はもとより、外交から国防まで、あまねく歴任するなど、国家の枢機に参与しており、李朝朝鮮における最も著名な人物のひとりである。

その申叔舟が、集賢殿学士となったのは、一四四一年二十五歳の時である。この時期に彼は、集賢殿を中心として進められていた、世宗代の活発な学術・文化活動の中心的な役割を果たし、世宗の信任を得た。一四四三年

の訪日通信使の書状官として、彼に白羽の矢が立ったのも、世宗直々の意志によったものと思われる。

この頃の通信使の目的は、江戸時代とは異なって、主として倭寇の禁止要請であった。十五世紀の初頭、足利義満によって朝鮮や中国との国交が開始されたが、それは当時の東アジアにおいて、倭寇をも含めて交易のニーズが急速に高まっていたことを反映したものであった。幕府からも大蔵経などの貴重な品物を求めて、しばしば使節が送られている。日本産の銅が多量に朝鮮に輸出され始めたのもこの頃である。

申叔舟の参加した癸亥通信使は、李朝四回目の通信使で、正使卞孝文、副使尹仁甫で、一行五十余名が一四四三年二月にソウルを出発し、六月に室町邸に入り、国書を伝え、十月に帰朝している。使命は足利幕府の六代将軍の義教への弔慰と、七代将軍義勝の即位祝賀であったが、その間には西国大名との交流も行なっている。

もっとも、この時、室町幕府側では、この使節をあまり歓迎していない。それは、幕府の財政窮乏により、迎接準備の資金調達さえ困難で、何か難癖をつけて追い返してしまおうとする意見さえ有力であった。また、正使卞孝文が相国寺で将軍代理の管領と対面した時も、双方で座席配置を巡って、日本側が、朝鮮を朝貢国と見なしたのに対して、朝鮮側が対等を主張するなどの激しい応酬もあった。ただし、西国第一の大名の大内教弘は、一行を下にも置かぬ、極めてへりくだった礼で迎え、四船を発して一行を護送している。当時、大内氏は朝鮮に対して、銅の輸出を初めたところで、お得意先を接待する意味があったのかも知れない。

日本通の申叔舟

さて、申叔舟は、後に成宗の命により日本に関する書『海東諸国紀』を書くほどの日本通になるが、この時はもちろん日本行きは始めての経験であった。彼にとって幸せだったのは、一行中に副使尹仁甫がいたことである。尹仁甫は、一四二〇年には回礼使宋希璟に従い、一四二二年には回礼使朴熙中、副使李芸、書状官曺敬之に従い、ともに通事として日本に渡航し、一四三九年には、ついに通信使高得宗を正使とする一行の副使として、日本に渡った経験を持つ有数の日本通であった。

申叔舟が、八ヶ月もの長期にわたる日本行の間に、尹仁甫から受けた影響は極めて大きなものがあったに違いない。日本に関する政治、経済状況はもとより、歴史、地理、産業、風俗について、直接現地に接しながら、尹仁甫から教えられた。その中でも注目すべきは、日本における表記法について知ったことである。

それは、『海東諸国紀』の「国俗」の項に、「男女と無く皆其の国字を習う。国字は加多干那（かたかんな）と号す。凡そ四十七字なり。唯僧徒は経書を読み漢字を知る」との記載がある他に、対馬や壱岐の地名などを、あたかも日本の万葉仮名のように、漢字の音で表す方法をとっていることから推定できるのである。

申叔舟は、文章力と言語能力が卓越しており、語学の才にも恵まれていた。後に長く李朝の外交を管轄したこともあるが、明・日本・女真の使臣を迎える際に、通訳を必要としなかったと伝えられている。その申叔舟が、日本における仮名文字あるいは仮名まじり漢文表示に注目しなかったはずはない。

日韓両語の類似性

朝鮮語を学ぶとすぐに解るが、日本語と朝鮮語は、文法が全く同じであり、名詞に漢語を多用し、動詞や形容詞でさえも、漢語に語尾的な助動詞あるいは助形容詞をつけることで済ませている場合が多い。しかも、日本語のテニヲハにそっくりあてはまる助詞があり、「これ」「それ」「あれ」に相当する指示代名詞もある。だから、両国語に精通すると、日本語の文章をそのまま朝鮮語として読めるし、朝鮮語の文章を日本語として読めるという。

したがって、日本で発達したように、仮名を送って漢文を読み下すような方法が、朝鮮語でも可能であった。事実、日本の万葉仮名のような表記法の「吏読」が、ハングル以前には存在していた。この吏読とは、朝鮮語の構文に従って書かれた変則漢文に、漢字の音や訓によって、助詞、助動詞を書き加える方式であり、日本の宣命体に似ている。

しかし、吏読文字といっても、それは漢字であるため、漢字に精通している人でなければ使いこなせなかった。それに漢字音で繊細な朝鮮語の発音を正確に表すのは、もともと無理であった。そのため、漢文を読みやすくする目的で、句節ごとに朝鮮語の助詞を示す記号「口訣」も工夫された。それは吏読文字を略したものであって、日本の漢文の返り点のような役割であった。

このように朝鮮においても、漢文を朝鮮語的に読むための努力は続けられていたが、朝鮮語そのものを、仮名書き的に表記するまでには至らなかった。それは、朝鮮語があまりにも強く中国語の影響を受けていたため、漢文読み下しのレベルでも、何とか間に合ったという事情があったからである。

しかし、高麗時代の中頃から、僧侶たちを中心として、仏典を民衆にひろめるため、易しい文字に対するニーズが高まりつつあった。李朝が始まり、その基礎が定まった世宗の頃は、このような時代背景にあった。

漢字表音への格闘

日本においては、早くから仮名文字が発達し、日本語

の表記に用いられていたのに、朝鮮半島でそれが遅れたのには、もうひとつの原因がある。それは、日本語と朝鮮語では、発音に大きな違いがあったからである。

日本語では、原則として子音のみの発音はないが、朝鮮語では、多くの単語が子音で終音する。しかも、発音が豊富で、母音や子音の数が、日本よりもはるかに多い。そのため、日本では子音と母音の組合わせで、五十音の仮名を作れば済んだのに、朝鮮では一般に、子音と母音と子音の三音の組合わせで文字を作る必要があり、極めて多くの文字が必要となる。したがって、日本のように、五十文字で済むような仮名文字を開発することは、もともと無理であった。

しかし、日本語と朝鮮語の類似性は疑うべくもない。日本における仮名のような便利な方式を知れば、それを朝鮮語へ如何に応用するかは、申叔舟のように、言語的な天分ある学者にとって、さほど困難なことではない。そのような考えを帰朝して世宗に報告したに違いない。

そして、ハングル開発の作業が本格化した。まずは、片仮名のように簡潔な表記でなければならない。しかも、文字数を限定して、漢字音を表現しなければならない。そのためには、日本式のように子音と母音で一文字作るのでは、どうにもならない。そこに、音韻学の知識が求められた。

アルファベットを知っている現代人なら、子音と母音をそれぞれ独立の文字で表記する方式を、すぐに思い付く。言語能力に秀でた申叔舟なら表音文字の仮名に出会って、ローマ字的な表記には、思い至ったであろう。しかし、現在使われている日本語が、全てカナあるいはローマ字で書かれた状態を想像して見よう。とても読めたものではない。しかも朝鮮語の方が、発音が豊富で、子音終了形が多く、リエゾーンして発音する場合が多いのであるから、ますます実用的ではない。だから、子音と母音をそれぞれ独立の文字で制定しただけでは、全く実用に堪えないのである。

そこにハングル誕生の苦しみがあった。漢字の一文字の発音を一文字のハングルで表したい。この要求に正しく応えるには、音韻学の成果を取り入れるしかない。そこで、音韻学者の黄賛を訪ねて、遼東通いが始まったのである。

一般に使用される漢字は、約一万字であるが、発音数が一万種もあるわけではない。朝鮮語の場合でいえば、発音の数にして五百程度である。しかし、この五百と言う数値も、カナ文字的な表記とするには、あまりにも多すぎる。ところが、子音と母音と子音などに分解してしまえば、高々二十四の音しかない。これを一文字にまとめる。そのための格闘が、集賢殿で始まった。その中心人物の中に申叔舟がいたわけであるから、ハングル表記構想のアイディア自体が申叔舟によってもたらされたと

考えても全く不思議ではあるまい。

かくして、筆者が日本の仮名文字がハングル誕生に極めて大きな影響を与えたとする仮説に、ある程度納得頂けたであろう。

もっとも、このような仮説が検証されるためには、世宗によるハングル創製のプロジェクトが何時始まったか知らねばならない。申叔舟が帰朝したのが世宗二十五年十月なのに、ハングルの創案は、同二十五年十二月（太陽暦では一四四四年一月）と伝えられ、その間が二ヶ月であまりにも短い。

しかし、プロジェクトのスタートがいつの事であったか史書は伝えない。検証し得ないことには、学者は手を出さないので、いまのところ筆者の思い込みに過ぎないのかも知れないが、百歩譲っても、日本通の尹仁甫が、日本の仮名文字について、報告していた可能性もある。やはり、日本の仮名表記がハングル創製に大きな影響を与えたことは、十分に考え得るのである。

ハングルを創った人たち

ハングル創製に業績を上げたと伝えられる人物は、申叔舟ばかりではない。その他に、鄭麟趾、崔恒、李善老、朴彭年、成三問、李塏、姜希顔、などがいる。いずれも、世宗が目をかけた秀才ぞろいであっただけに、その後の李朝の政治に大きく登場するが、その多くが数奇な運命をたどる。それは、世宗の死後、李朝の恒例とも言うべき政争が悲惨な形で起ったからである。

李朝の歴史をひもとけば、始めから終りまで、骨肉相争う殺戮で彩られている。三代の太宗はふたりの異母弟を殺害して、傀儡の定宗を二代に立て、まもなく自分が即位した。四代世宗の子である七代世祖は、甥の六代端宗や異母弟ふたりに死薬を与え、九代成宗は十代燕山君の生母すなわち自分の妃に死薬を与えた。その燕山君は義母ふたりを斬殺し、祖母を撲殺、さらに異母弟ふたりに死薬を与えた。また十一代中宗もひとりの妃とその子を殺し、十二代仁宗は義母に毒殺され、十三代明宗は異母弟をひとり自決させ、十五代光海君は同母兄に死薬を与え、異母兄を部屋に閉じ込め蒸し殺しにし、さらに十六代仁祖の弟を殺害するなどの凄まじさである。その上光海君は、実父十四代宣祖を毒殺したとさえ疑われている。またその光海君の後継の長男夫婦も自殺して果てているし、十六代仁祖も自分の長男を毒殺し、更に長男の妃とそのふたりの子（自分の孫）を殺してしまっている。十七代孝宗は、仁祖の妃に死薬を与え、十九代粛宗も妃である二十代景宗の生母に死薬を与えた。きわめつけは二十一代英祖がその世継ぎの長男を米びつに閉じ込めて、餓死させてしまったことである。まだまだ続くが省略する。

世宗の死後起った血なまぐさい政争は、その子文宗が

在位わずか二年で病死し、文宗の子端宗が十二歳で位についたことで始まった。文宗の遺言によって、右議政の金宗瑞らの大臣が政権をにぎるが、世宗には秀才の誉れ高い有力な王子たち、すなわち端宗の叔父たちがおり、金宗瑞らとの間に抗争が始まる。ハングル創製に功あった集賢殿の出身者たちも、それぞれの人脈により、次第に色分けされて行く。

まず、最年長の鄭麟趾が、ライバル的な金宗瑞と合わず、世宗の次男の首陽大君、後の世祖に付く。これに鄭麟趾に近い崔恒が従う。一方、李善老は、最初首陽大君に付くが、それを裏切り、世宗三男の安平大君を担ぐ。また申叔舟は、首陽大君が明に使臣として赴いた時に同行し、中国語を駆使して大活躍したことによって、首陽大君の信頼厚く、その関係で、金宗瑞らに冷遇されていて、首陽大君派と見なされた。

これに対して、申叔舟とほぼ同年で、共に一四四七年、文科の高級試験に合格した若手の成三問、朴彭年と李塏は、文宗の遺言に従って端宗を守る立場をとる。成三問は、文科試験で首席を得た秀才で、申叔舟と共にハングル創製のため、明の黄瓚を訊ねて遼東に通った同志であるが、この頃は申叔舟と対立関係にある。成三問が貧しい家庭出身で、教条主義的なのに対して、申叔舟が良家の出身で、現実的な肌合いを持っていたことや、実力伯仲の中で、成三問に首席を奪われたことなどが、両者間の対立に関連したかも知れない。

このような経過の中で、首陽大君すなわち後の世祖は、だまし討ち的なクーデターで政権を掌握すると、政敵を徹底的に殺害し、端宗を脅かして王位を簒奪してしまう。

これに対して立ち上がったのが、成三問、朴彭年、李塏ほかの集賢殿出身者の六名である。しかし、そのクーデター計画は成三問の秀才的な逡巡から事前にもれ、世祖によって三族に至るまで非業な死に追いやられ、結局、端宗も殺害されてしまう。韓国では、この時の六名を死六臣と称して、あたかも忠臣蔵四十七士のように、ほめたたえている。なお、安平大君に付いた裏切り者の李善老も、安平大君同様に殺害されてしまう。

それに対して、世祖に付いた鄭麟趾、崔恒、申叔舟の三名は、いずれも相前後して領議政（首相）の地位まで登りつめる。申叔舟の場合は、世宗から成宗までの六代の王に仕え、領議政を二回も勤めたほか、終生外交を管轄し、文人でありながら女真族討伐の前線に出て、大きな実績を上げている。ただし、不倒翁的な政治経歴から、策略家と見られ、死六臣に比べると全く人気がない。

しかし、日韓の歴史学者の間では、申叔舟の評価、特に外交上の業績に対する評価が極めて高い。例えば、成宗の命によって一四七一年に書かれた『海東諸国紀』の記述にしても、日本や琉球について客観的に理解しようとする態度で一貫しており、主観的な記載や独断あるいは偏見や蔑視が見られない。そのため、史料的な価値が極めて高いという。また、日本という国に関する認識も正確で、臨終の際に成宗に「日本と和を失わないよう」と遺言したとエピソードは伝えている。

いつの世も、事大（対中国外交）交隣（対日外交）が朝鮮の外交の基本であるが、日韓外交が紛糾すると、今でも必ず登場するのが、雨森芳州と申叔舟である。申叔舟は、極めて現実的な政治家で、それ故に、より憎まれる面もあったのかも知れない。

正義は妥協を許さず、時として、国や身を滅ぼすことが多いが、政治や外交は妥協こそがその要諦である。外交を長く管掌した申叔舟は、相手に対して、偏見や蔑視を持つことなく、正確な認識のもとで、交隣を成立させていた。その申叔舟が、わが国の仮名文字にヒントを得て、ハングルを纏めたとするならば、誠にうれしいかぎりである。

漢字禁止の弊害

さて、ハングルと申叔舟の関係については、この辺で筆を置くが、最後に漢字を捨てた北朝鮮と韓国について一言しておきたい。第二次世界大戦後、両国では漢字の使用を原則として禁止したが、このことによって失ったものはあまりにも大きい。特に今日に至るまで、漢字使用を厳しく禁止している北朝鮮は、そのことによって、歴史が途絶され、社会進展が大幅に制約され、大損をしたと言っても過言ではないであろう。さすがに韓国では漢字禁止の弊害に気がつき、いま是正へと動きはじめている。

文字としては、ローマ字に匹敵する程、多くの人たちが漢字を用いている。いわば人類共有の財産である漢字を自らの手で投げ捨てたことが、如何に馬鹿げたことであったか、北朝鮮の歴史が検証している。

確かにハングルは優れている。漢字に替り得るほどの素晴らしい性能を有している。しかし、その優秀性によって、漢字に取って代り、漢字の併用まで禁止するとなると話は別である。漢字圏の世界は、漢字の表意文字としての資産を共有していたのであって、表音文字としての機能を共有したわけではない。それは、今日の中国で、漢字表記は統一されていても、はなし言葉は大きく異なり、通じ合わない事情と良く似ている。各地域に適応した形、例えば、日本で言うならば、漢字仮名まじりの表現こそが、時代を先取りした表記法なのである。

いまや世界はコンピューター時代である。中国、台湾、日本、韓国、北朝鮮はお互いに協力して、書き言葉としての漢字の統一をはかり、その文化を守って行く必要があるのではなかろうか。

その頃 あれはアルマジロ

青木昭成

どこの国で見つけて来てくれたのだろう
どなたが　どんな経緯から
それを連れて来てくれたのだろう

その時ぼくらは　かわるがわる
少年の目で見つめてみたものだ

たしかに　それは模型ではないほんものの
剥製　だが熱帯の土の穴から　ふらりと
這い出してきたばかりに　その運命を
あの珍獣の姿に固定されてしまったのだろうに

それでも　ある漠然としたひとつの世界が
その時　ぼくらの向こう側に広がっていた

そう言えば週に二時限だけ　ぼくらは
自分の机を離れて　廊下をぞろぞろ歩き
生物教室へと移動していたものだ
生物と無生物のいりまじる空気のなかへ

あの教室の北側の
ガラス越しにはプラタナスが　四六時中
太い幹の翳りを映していた

だが半世紀の日々は
ぼくらの記憶の彩りを薄めつづけ　なのに
なぜか　あの一隅だけには残照がはえる
かすかに黴のにおいがよどんでいる
足首のもとへ冷気がすり寄ってくる
珍獣は　声もたてず　首もふらず

それは生きつづけることと同意語なのか
小さな頭に大きすぎる義眼を光らせ
それとも　虚空へ
口を解放しつづけているのだろうか

そうだ　あいつは
ホルマリン漬の蛙のようには扱われていない
体じゅう乾いた角質でかたく仕あげられ
黄土いろに塗られたエナメルの甲冑で

たしかに　それは
鎧鼠・哺乳類・異関節目・アルマジロ科
と補足分類されていて　ぼくらを一瞬
たじろがさせたものだ

それが　かってはアリやミミズなど
せわしく食い歩いたろうあの小さな手足
そうだぼくらは　なんとなく愛すべき珍獣を
指先で触ってみたい衝動にかられたものだ

それを躊躇させたのは　ぼくらのK先生
寡黙な白衣をいつも羽織っていて
後世を見据えるような　あのぎょろ目で

おかげでぼくらは　いまも原色図鑑のように
老いつつなお　わんぱくを自覚させられ
あの大切そうなアルマジロのケースの縁へ
往年の少年の目で　還えっていくのだ



パイナップルは多年草

植物がいつのまにか動物になる
動物がいつのまにか植物になる
そんな不可思議が起こるわけはない
とは言え　生物の細胞が
この世にあらわれた始世代ごろには
あるいは　人間には想像もつかない
突然変異が起こっていたのかもしれない

そうだ　それが生物の真実とは言えないが
あのパイナップルは不思議な植物だ
あれは珍獣アルマジロの変異かもしれぬ
とぼくは　ひそかに思ってみたりする
敵に襲われたアルマジロは
からだを球にまるめて身をまもる
そのうえ肌はカメのような骨質と角質の
かたい甲におおわれていて
だからパイナップルは
ラグビーのボールのような胴体を
人々にそっくり見せながら　なお
短葉で頭をそっとかくし　あの店の片隅に
隠れているつもりなのかもしれぬ

それが熱帯の多年草の特色なのだろうか
実が熟してくれば
その角質はじょじょに緑から黄いろへ
さらに果肉はしだいに白色から黄いろへ
それでいて外形に似合わぬ内部の
いかにも柔らかく　ゆたかな肉質
果汁をしたたらせる繊維が重畳し
人々を誘ってやまないエステル
それこそ熱帯の香り

つまり　パイナップルはアルマジロの
生まれかわりの果物なのか
それとも　アルマジロがパイナップルから
生まれてきた生き物であったのか

笹ケ崎村（十）



朝焼け

太田和貞

「お名主様の奥さまは、まるでオトタチバナヒメみてえだ。ヒメが、荒海に身を投げて荒海を鎮めたように、奥さまがこの泥海に呑み込まれなさったお陰で、あれ程、降り続いていた雨がパッタリとやんでしまった」

百姓たちの間に、こんな噂が広がり始めた。

事実、しげが泥海で死にかけた翌日から雨は降らなくなり、薄日さへ差し始めた。

しかし、今まで降り続いていた雨が止んでしまうと、囲堤（かこいづつみ）の土俵の補修などの作業もなくなってしまった。

その上、今まで張り詰めていた気持ちに、ポッカリと穴があき、囲堤を警戒していても、囲堤に腰をおろしてぼんやり泥海を眺めている百姓が多くなった。

十郎兵衛は気になっていた六地蔵のことを名主たちに諮った。

「お地蔵さまのお陰で、囲堤の破れは防ぐことはできました。しかし、このままお地蔵さまを土中に埋めて、わしらが足蹴（あしげ）にしていては、いけないとわしは思います。一日も早く掘り起こして、元の場所にお戻しせねばならぬと思いますが、……。いかがでしょうか。幸い雨も止んでおりますので、……」

十郎兵衛は口には出さなかったが、このまま、漫然と泥海を眺めているだけでは百姓たちの気力がなえてしまうと恐れていた。

それに、六地蔵を埋めたことに、六地蔵を信仰している百姓たちからの抵抗もあった。

切れ所（きれどころ）（決潰場所）に埋めた六地蔵を掘り起こすためには、その外側に輪のように新たに堤を築き立てて、泥海と遮断しなければならなかった。

破損した圦樋（水を引き入れるための樋）の取り替え、その埋め戻しなどと、ちょっとや、そっとで、できる普請ではなかった。

御普請（幕府が費用の一部を負担する工事）を代官所に願い出ても、着工はいつになるか分からなかった。

何通もの願書、目論見書（計画書）、絵図面などを揃える間にも、陳情と接待の繰り返しをして、下検分の段取りに、やっと辿り着けるのだった。

十郎兵衛は、先日の田口様の一件があってから代官所に願い出る気が無くなっていた。

それに、しげが助けられたことでもあり、この切れ所の復旧普請は十郎兵衛の手で行ないたかった。

「二合半の飯食らい道」を独力で完成させた下小合村の先代の勘兵衛の反骨と意地に、十郎兵衛はあこがれてもいた。

御鷹狩りの際の人夫の御扶持米の五合の半分の二合半の朝飯を食っても、こえ桶を天秤棒で担いで二合半道の堤防の上り下りはつらいという自嘲が、「二合半の飯食らい道」という名前にこめられていた。

「またまた、大惣代さんに散財をお掛けすることになりますが、どうぞよろしくお頼み申します」

切れ所の復旧普請の一切の掛り（費用）は十郎兵衛に負担させて欲しいとのことばに、名主たちは異口同音に賛成し、「大惣代」という名で十郎兵衛を呼んだ。

しげも台所から汁を運んだり、酌をして回った。

しげには、きょうの集りに長八が入っていることが、なによりも嬉しかった。しげの願いを十郎兵衛が着々と実行に移してくれているように、しげには思えた。

「さて、きょうは名主の会合で、六地蔵を掘り起こし、圦樋を伏せ替える（交換する）ことが決まった。その普請もわしがやることも認めて貰った。そこで、わしは、こうしたい」

ここで、十郎兵衛はことばを切って、四人の顔を見た。

「これからは若者の時代だ。わしや平左衛門の出る幕ではない。長八、甚兵衛、平吉の三人でこの普請をやりとげて欲しい。わしと平左衛門は後見人に回る。勿論、一切の掛りは、わしが出す。圦樋に必要な用材は納屋にある筈、……。どうだ、やってくれるか？」

十郎兵衛の問い掛けに、三人は顔を見合わせていたが、長八がおずおずと言った。

「こんなわしらでよろしかったら、喜んでやらせていただきます」

「そうか、そうか。それはありがたい。存分にやって見せてくれい。ところで、平吉は十九歳。長八と甚兵衛は二十二歳だったな。生まれ月は何月だったかな？」

長八が四月、甚兵衛が十月と聞くと、

「長八がいちばん、としかさ。それならば、長八が才領（リーダー）を務めては、どうか？」

「触次」という呼び方より、「大惣代」と呼ぶことで、掛りを負担してくれる十郎兵衛におもねっていた。

その夜、十郎兵衛は平左衛門、忰の平吉、河童の長八と荒縄の甚兵衛を名主屋敷に呼んだ。

十郎兵衛にとっても、久し振りの名主屋敷であった。

その日、しげは朝からうきうきして台所で立ち働いて、平左衛門たちをもてなす準備をしていた。

「この度の骨折り、心からありがたいと思っています。さらに、しげを泥海から助けてくだされ、十郎兵衛、お礼のことばもありません。まだ、水との戦いの最中ですので、ささやかではありますが、わしらの気持ちをお汲みとっていただければありがたいと思います」

十郎兵衛は、そう挨拶して盃を上げた。

「おめでとうございます」

「ちょうだいいたします」

平左衛門たちは口々に挨拶を返した。

「さぁ、さぁ。これからは無礼講といきましょう。膝を崩して、膝を崩して、……」

十郎兵衛は畏まっている平左衛門に両手を差し出して、膝を崩させた。

三人の若者も、それにならって膝を崩した。

「しげ、お酌をして回らんかい。特に命の恩人の長八には、いくら礼を言っても、言い尽くせるものではない」

十郎兵衛は至極機嫌がよかった。

十郎兵衛は甚兵衛と平吉の顔を見た。

「それは、もう願ってもないことで、……」

二人はこくんとあいづちを打った。

「長八！。ここはひとつ、気張ってくれい。みんなも長八に力を貸してやって欲しい」

ここまで言って、十郎兵衛は急に台所に向って怒鳴った。

「しげ、しげ。酒だ！。長八が今度の普請の才領を承知してくれたぞ。わしも今夜は呑むぞ。しげもこちらに出てきて、酌をせぇい！」

上機嫌な十郎兵衛の声に、「はい、はい」と、しげはお盆に徳利を三本立てて、座敷に入ってきた。

次の日の暁七つ（午前四時）に、長八、甚兵衛、平吉の三人は普養寺の山門の前に集った。

山門のあたりには、夜のとばりがまだ立ちこめていた。

期せずして、三人の腰に真新しい荒縄が巻かれているのを見て、長八は嬉しかった。

昨夜、十郎兵衛から唐突に、六地蔵の掘り起こしと圦樋の普請の話を聞かされ、

「これからは若者の時代だ」

とハッパを掛けられ、ついついその気になり、才領まで引き受けさせられてしまった。しかし、夜中に目が醒めてからは、一番鶏が鳴くまで輾転反側していたが、

（ああ、一番鶏が鳴いている）
と思った途端に、深い眠りに陥り、七つのすこし前に目が覚めたときには、気力も体力も凛々と体に満ち溢れていた。
平吉は二隻の田舟を用意していた。最初の一隻に長八と甚兵衛が乗り込み、平吉が棹を振った。
二隻目には、長い竹竿や掛け矢、荒縄などが積まれて、一隻目の田舟につながれていた。
泥海は、しーんと静まり返っていた。
平吉が棹を振る度に、水滴がキラッ、キラッと白く輝きながら飛び散った。
陽光が一瞬にして天空を駆け巡った。
これまで憂鬱そうだった空や泥海が明るい表情に変わり、空と泥海が呼応しあって一斉に輝き始めた。
長八たちは振り返った。
いま、誕生したばかりの大きな太陽が江戸川堤を昇り始めているところだった。
善養寺の本堂が七色の朝日を浴びて、黒々と浮き上がって見えた。
久方振りに見る朝日だった。
「お天道さまだ！」
三人は一様に朝日に向って手を合わせた。
額、頬、手の甲、はだけた野良着の胸元などに陽の光が当って、チリチリと音を立てた。
「お天道さまが出たぞう！」
長八たちは大声で叫んだ。
叫びながら、
（これで助かった）
と思った。
（お天道さまが出れば、雨は降らない）
そんな至極、当り前のことが無性に嬉しかった。
「奥さまは俺たちにとって、まるでオトタチバナヒメだ！。奥さまがこの泥海に沈んだお陰で、お天道さまがお顔をお出しなさった」
「泥海がこんなに輝いて見えるとは思っても見なかった」
「この朝焼けの美しいこと！」
三人は口々に言い合って、喜んだ。
間もなく、六地蔵が埋まっている現場に着いた。
長八たちは田舟から降りて囲堤の土俵の上に立った。
「平吉、このあたりだと思うが、どうだ？」
長八は平吉に聞いた。
「そうよねえ。田舟が二隻、横に並んで沈んだし、土俵の積み方から言って、長八の足元あたりだべぇ」
長八は甚兵衛の顔を見て、
「甚兵衛は、どう思う？」
と駄目を押した。
「わしもそう思う」
甚兵衛は即座に答えた。
「では、ここが六地蔵と臥樋の破損箇所」
長八は自分の踏んでいる土俵に五尺程の竹を突き刺した。
「ここを中心にして、わしは半径三間程の円の土俵を築いて、中の水を掻い出してから六地蔵を助け出し、臥樋を掘り起こして、新しい臥樋を伏せようと思う」
長八は昨夜書いた俯瞰図（概略の絵図）を拡げて、甚兵衛と平吉に示した。
「臥樋もわしらで造ろう。ケヤキを使い、丈夫で長持ちするものを造ろう。手先の器用な平吉がわしらに差図してくれ」
長八の口調は自信に満ちていた。
「わしらも気張るぞ！」
甚兵衛と平吉も、長八に劣らず勢い込んで言った。
その夜、長八が差し出した書類を受け取って、十郎兵衛は、
「この書類は誰が書いたのかな？」
と、すぐに聞いた。
「はい、私です」
長八はそう答えてから、
「三人で相談したことを、私がまとめました。なにかご不審でも？」
「いや、いや。みごとな筆跡で驚きました。村の書役にしたいくらいです」
「うちのおふくろの話では、二代前のじいさまは書役を務めていたそうです」
「うん。それで読めた。長八はその方の血をひいていたんだ」
十郎兵衛は長八の顔を今一度、眺めてから改めて書類に目を落とした。
文字もさることながら、六地蔵の発掘と臥樋の伏せ替え普請が項目別に簡潔に要領よく書き込まれていた。
たとえば、これまで出番のなかったハンノキも新しく築き立てる堤防の土留めに使われていたし、村の五人組にならって、五人一組の作業方に、男三人、女二人の組み合わせも考えられていた。
飯の炊き出しに、十郎兵衛が新宿町から助けてきたうめ婆さんが含まれていたばかりでなく、十郎兵衛の屋敷内の水塚に収容されていた、じいさま、ばぁさままで書き込まれていた。
つまり、十郎兵衛がこうありたいと願っていたことが文字となって並んでいたのであった。
十郎兵衛は書類の文字を眺めながら、長八の洞察力の鋭さに舌を巻いた。
「三人ともご苦労であった。ようやった。平左衛門と相談したいので、平吉、親父さまにわしのところに来る

ように伝えてくれ。この返事はあすの朝にする」
十郎兵衛のことばに、三人とも頭を下げた。
「しげ、長八たちに何かみやげを持たしてくれ！」
十郎兵衛は台所に向って、怒鳴った。
平左衛門は間もなくやってきて、台所でしげにあいさつをしているのが聞えた。
十郎兵衛は、すぐ立っていき、
「さあ、さあ。平左衛門、わしに知恵を貸してくれ。しげも一緒に座敷にこい。わしにとっても、しげにとっても、この家にとっても、天下分け目の関ケ原の合戦じゃ。どうしても、平左衛門の手が借りたい」
「お家の大事とは、なんのことでございましょうか。事情が分からぬでは、としで血のめぐりの悪くなった頭が、とまどってしまいます」
「平左衛門、お前が小合溜井から帰ってきたとき、長八と甚兵衛は嚢中の錐でございます。近い将来、長八と甚兵衛はお名主さまの手足となって働くと思いますともうしたな」
「はい、たしかに申し上げました。それが、なにか？」
「それがなにかなどと、呑気なことを言っている場合ではないわ。この書類を見てみい。長八はわしらが考えている以上の大物だ」
十郎兵衛は長八の書類を右手で叩きながら、平左衛門に渡した。

「いくら水を防ぐためとは、言っても、お地蔵さまを土中に埋めて、その上をわしらが歩くとは、あまりにももったいないと年寄が騒ぎ立てるので、六地蔵の掘り返しと臼樋の伏せ替え普請を長八、甚兵衛、平吉の三人に頼んだ。その目論見書がこれだ」
「みごとな手（文字の天分）でございますな」
「手は見れば、すぐ分かる。要は目論見書の内容だ。早く、早く読んでくれい！」
「はい、はい。かしこまりましたと申し上げたいところですが、そうせかされては、とろくなった頭がついていけません」
「文字がこれほど、うまいとは思わなんだ。それに、わしの心をしっかと読み取って、この目論見書を作っている。しげを助けて貰った縁もあるので、わしはこの長八を跡継ぎにしたい。平左衛門、なにかよい知恵を出してくれい」
十郎兵衛のことばに、平左衛門は目論見書から目を離して、
「嚢中の錐と申し上げたわたくしのことばに、いつわりは無かったでしょう」
と初めて笑った。
「そうお急ぎになって、あとでこんな筈では無かったと後悔してもはじまりませんので、この度の普請の進め方をよく見てから話をすすめられては、いかがでしょうか」
平左衛門は年寄らしく穏当な考えを言ったので、十郎兵衛も不満ながら従わざるを得なかった。

曇ってはいたが、雨が降らないことが長八に幸いした。
現場に集ってきた誰もが、
「あれは、なんだね？」
と長八に聞いた。
「ああ、あれか。あれは臼樋だ。きょうに間に合わせるために、俺と甚兵衛と平吉の三人で夜なべして造ったんだ。お名主さまからカシの板をいただいて造ったから十年は保証するだ」
長八のことばに、「へーッ」と言いながら、改めてハンノキに繋がれて浮かんでいる長方形の物体を眺めた。
長さ一間半、幅四尺、高さ五尺の中空の木製品が三分程、水に沈んで浮かんでいた。
臼樋と聞いて、なかが中空の訳は分かったが、田舟が五隻も泥水に浮かんでいるのは、理解できなかった。
「それは、今に分かる」
長八は笑うだけで、答えなかった。
六地蔵が埋まっている地点を中心にして、長八の思惑通り、半径三間程の円周上に立てたハンノキの内側に土俵を沈めて、新規に堤を築き上げた。
ここでも荒縄の甚兵衛の考えが生かされた。
土俵の中央にくくり付けられた荒縄で、前後左右の土俵および三尺間隔に打ち込まれているハンノキに堅く縛り付けられた。
さらに、土俵の内側にハンノキが打ち込まれて、がっしりと土俵の堤を固めた。
「念には、念を入れよだ」
内側のハンノキに、斜めにハンノキを渡して補強した。
円内の泥水を掻い出したとき、外側の泥海の水圧で土俵の堤が押しつぶされるのを防ぐためであった。
ここまでの作業は、およそ半日ですんでしまった。
赤い襷を掛けた娘たちを乗せた田舟が近づいてくるのを見て、
「ここらで飯にすべえ」
と長八は大声で叫んだ。
握り飯を配り終えた娘たちが土俵の堤に腰をおろすと、その周りに、両手に握り飯を持った男たちが集ってきた。
やはり、その話題は、きのうの朝焼けの美しさだった。
「あんなに綺麗な朝焼けは、見たことがねえ」
と長八が言えば、誰もが、「そうだ。そうだ」とうなずいた。
「うんにやあ。きのうの朝焼けよりも、もっと綺麗なものを、おらぁ知っている」
茂兵衛が長八のことばにおっかぶせるように言った。
「茂兵衛、なにを言うだ！」

茂兵衛の周りの男たちが口をとがらせた。
「お前たちは何を見ているだ。長八の隣に座わっているきくの顔を、よおく見てみろ。きくは色白だ。その色白のきくの顔が長八の隣に座わっただけで、ポーッと赤味が差してきたのを俺はさっきから眺めていただ」
きくがパッと両手で顔を隠した。
「いくら隠くしても駄目だ。忍れど色に出りけり、わが恋はと言うではねえか。長八も奥さまの手を握るだけではなく、きくの顔の朝焼けにも気付いたらいいだ」
「わかった。わかった。そういじめてくれるな。朝焼けにも、空の朝焼けと顔の朝焼けがあることが分かったので、俺もこれからは顔の朝焼けにも気を付けることにする」
そう言って、長八が茂兵衛に頭を下げたので、みながドッと笑った。
久し振りに聞く笑い声だった。
長八も一緒に笑いながら、茂兵衛の毒のあることばを思い返して心の中で舌打ちした。
(もしかしたら、茂兵衛は毒のあることばを言いたいために、きくのことを持ち出したのかもしれない)
長八は素早く、茂兵衛の表情に視線を走らせたが、大きな口を開けて笑っている茂兵衛からは何も分からなかった。
「長八の言うことは、わしのことばだと思って、やってくれ」
けさ作業を始める前に、十郎兵衛がみなに言ったことばは、長八の耳には快く聞えたが、茂兵衛には違って聞えたようだった。
奥さまを助けたお陰で、長八、長八とみなから可愛がられたが、茂兵衛の皮肉で長八は目が覚めた。
(有頂天になりすぎた!)
そんな自戒のうしろめたさが、
「男と女が組みになって、水を掻い出す、……」
という呼び掛けが、喉に痰がからまって声にならなかった。
「水を掻い出すぞおう!」。男衆と女子衆が組み合って水を掻い出してくれ!」。新しい堤にむしろを掛けるのを忘れるな!」
荒縄の甚兵衛が長八に代わって、そう怒鳴った。
赤い襷を掛けた女子衆に男衆が寄っていき、女子衆の足元に置いてあった水桶を手に取った。
この時代の農村には、まだ揚水用の水車は普及していなかった。手頃な水桶の口に荒縄を渡して、それを自分の腰に回し、向い合った男女がその荒縄を両手に持って手と腰で調子をとりながら、水を桶に汲み、反対側に桶の水を放りあけるのだった。
日照りで、たんぼがひび割れしたときには、こんな光景がよく見られた。

田の畔を崩さないために、むしろが畔に敷かれるようにもなった。
「最初は五組!」。ゆっくり、ゆっくり、水を掻い出してくれ」
新しく築いた土俵の堤が、どの程度の水圧にたえられるのか、長八にも分からなかった。しかし、ハンノキを使って、堤の補強に細心の注意を払ったので、(大丈夫だ!)という自信のようなものが長八にはあった。
「一〇〇杯、汲んだらあとの組と交替する。数をかぞえよう!」
長八のことばで、水桶を操っていた男女が、
「ひぃ、ふぅ、みぃ、……」
と数をかぞえ始めた。
待機していた男も女も、いっしょに、
「ひぃ、ふぅ、みぃ、……」
と手を拍き始めたので、善養寺の森の鴉たちが、カア、カア、と騒ぎ始めた。
最初はそれ程、目立った水の減り方ではなかったが、男女が五巡した頃から水は、ずん、ずんと減り始めた。
渺々とした泥海の中に、四尺程、水面の下がった丸い池が出現した。
「これからは固定した田舟に梯子をおろし、水桶を肩に担いで、泥水を運び上げるんだ!」
両手で水桶を頭上にかざした長八が唄い出した。

河童の長八、棲家を
探しにきたけれど、
川のにごりに驚いて、
あっちへ、ひょろひょろ。
こっちへ、ひょろひょろ。

長八はおもしろ、おかしく唄い踊りながらも、その目は油断なく、堤の様子をみていた。
堤の内側の泥水の水面が下がれば下がる程、外側からの水圧に押されて堤が破れる危険が増していた。
長八は更に声を張り上げて、唄い踊った。

そこで河童の長八は
桶で、にごりをすくいとり、
まわりの池に捨てにいく、
あっちへ、ひょろひょろ。
こっちへ、ひょろひょろ。

長八の唄にあわせて、男衆も女子衆も、「やっさ!、やっさ!」と合いの手を入れ始めた。
円形の池の泥水が少なくなるにつれて、長方形の坎樋が池の中心に寄ってきた。
「やっと分かった!」

さきほど、長八に坎桶と田舟のことを尋ねた若者が、素っ頓狂な声を張り上げた。

「田舟は梯子を固定するため。田舟も坎桶も最初から水に浮かばせて置けば、あとで堤を越えるときの苦労を考えりゃ、どんなに楽か、しんねえ」

若者は改めて、長八を見直した。「あっちへ、ひょろひょろ。こっちへ、ひょろひょろ」とひょうきんな身振りで踊っている長八を眺めながら、

「あいつはレンコンみてえな野郎だ」

とつぶやいた。

長八はレンコンのように、先がよく見通せるというしゃれであった。

泥水の深さは男たちの足首よりも浅くなってきたが、土俵の堤はどっしりと泥海からの水圧に耐えていた。

土俵の両側をハンノキでしっかりと固定していたので、泥海からの水圧をはねかえしていた。

「ここらでお茶にすべえ。みんな、あがってくだっせえ」

長八は池の底の男衆に向って怒鳴った。

怒鳴っていた長八が何かに気付いて、その表情が一瞬、こわばった。つぎの瞬間、表情が崩れて口元に笑みさえ浮んだ。

「この普請場は、うちの紋所(もんどころ)だ。甚兵衛、おめえにもそう見えるべえ」

長八は甚兵衛に話し掛けたが、「え、なに?」と気付かなかった。

「ほれ、よく見て見ろ。この池は丸に一文字(いちもんじ)だ。わしの家の紋所だ!」

そう言われても甚兵衛の視線は宙に浮いたままだった。

「新しく造った土俵の堤が円周の丸、それに直径を走っている古い堤が一文字。それで丸に一文字だろうが」

長八の説明で、やっと分かった甚兵衛は大きく、うなずいた。

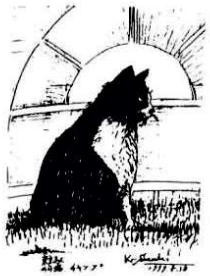
「この池が、わしの家の紋所の丸に一文字なら、この普請は絶対に成功させにゃならんな」

そう自分に言い聞かせながら、長八は梯子をゆっくりと下りていった。

(つづく)

ねずみ小僧丸楠(十六)

鈴木昭三



山の中腹にある村の小学校の校庭に立つと、見晴らしのきく北東には大茶原と言って県内でも有数の広い茶畑が視野いっぱいに開けます。茶畑を貫く一本の農道を挟んで左右に伸びる長い畝は、蒲鉾形に重なり合って遠く迄続いていて緑の地平線を作っております。

畝の果てには南アルプスの支脈の山やまが、なか空を墨絵のように青色く染め分けて連らなっております。

その山やまの中でも一番手前に、やや緑がかって鋸の歯のような小さな峰の寄り集まりが屏風岳であります。

屏風岳は隣村との境界で分水嶺になっていて、村を従断して流れる小田川も、ここを源流としています。

屏風岳は村の郵便局長奥山式太夫の持ち山で、おたぎりさん、ここは正式に多岐利神社の祭神が最初に天降った場所と言われていて、今も頂上には小さな祠が祭ってあります。私の母の勤めている銅山会社も、この山の西の麓にあります。

村では昔からこの屏風岳を殊の外崇敬していて、年寄りの中には朝な夕な山に向って柏手を打って拝む衆もいます。

朝から晩まで一日中山の中で働いている連中は、風向きが急に変わったり雲行きがあやしくなったりすると、まっ先に屏風岳の姿を確かめてから天候を占ったりしたものです。

屏風岳は小田郷村から遠州灘の見える唯一の場所であるのです。

当然遠州灘からもよく見えるので、昔から沖の漁師は

船が方角を決める目じるしにしていたそうです。これと同じように戦時中御前崎上空から侵入するB29も又、屏風岳を目標に進路をとったと聞きました。そのB29が帰りに遠州灘に抜ける前に、空襲で使い残した余りの爆弾を、屏風岳の頂上めがけてどかんどかんと捨てて行きました。

もっとも村の中には、これは銅山への誤爆だったのではと、うがった見方をする人もいましたが、その銅山からは五粁も離れていますし、それに銅山そのものには一回も空襲はなかったのです。

いずれにしても屏風岳はこの地方ではよく目立つ山で、村の衆は愛着をこめて名山だと誇りにしています。

例年おたぎりさんの春祭がすむと、この屏風岳の山ひだの一つに笹の葉形に白く残っている雪が、だんだん細くなりやがて消えてしまいます。

村ではいつも決まって、この頃から山の椎茸の春子の収穫の最盛期になるのです。

椎茸の年間を通しての収穫には節があって、寒子、春子、藤子、秋子と言う順で四回あります。

寒子は一、二月の寒中に芽を出す椎茸で、寒さで大きくは成れませんが、肉厚の傘に亀の甲のようなひび割れが入っていて、食味は最高と言われます。山仕事の衆の目に触れて摘み取られる程度です。藤子は藤の花の咲く頃の椎茸で、これも又量は余りありません。

椎茸の乾燥には生干と言って天日に干すものもありますが椎茸独特の香ばしい香りは、火で焙って乾燥させる焼子にはかないません。乾燥椎茸の商品としての主流はやはり焼き子で、春子と秋子であります。収穫量も多く味の良いのは春子であります。農家は収入源として茶と並んで春子に最も期待をかけております。

山の傾斜地の杉林などの木陰にはほだ木と言って人の背丈ほどの、椎茸の生える椎や楢などの細い丸太が列をつくって立て掛けてあります。この場所をほだ場と言いますが、その近くに椎茸小屋と呼ばれる炉のある小さな小屋があります。摘みとられた椎茸はここで乾燥されるのです。

この椎茸小屋に運ばれてきた椎茸の、大きめのは開いた傘の下の柄の部分に一米もある細く長いひごのような竹串を刺し通して、それをなん枚も重ねて数珠つなぎにします。小さめのは、そのまま日の荒い竹籠に並べます。

炉の上に張った竹の桟に串刺しも、竹籠も乗せて、炉の中の炭火の遠火で時間をかけてゆっくり焙るわけです。作業は炉に火が入ればもう夜を徹して続けられます。椎茸の含んでいる水分の多寡で差はありますが、普通一日か二日位いで、あの香りの良い焼き子と呼ばれる商品に仕上るのです。

椎茸小屋には昼の間に摘みとられた椎茸が後から後から運ばれてきますから、乾燥作業はきれ目がありません。椎茸が摘みとられてくる限り、一週間はおろか、十日以上も作業は続くのです。昼間でも夜中でも、乾燥具合や炉の火加減を見守るために、二人か三人、最低でも必ず一人は付ききりになります。そんなわけでこの時期椎茸農家の多くは、家族全員で椎茸小屋に寝起きします。

子供も生活に不自由な椎茸小屋から通学します。椎茸小屋の子供は通学途中の往還でも、教室の中でもすぐわかります。体から、衣服から、かばんや教科書から臭いがでるのです。炉の上の椎茸からしみ出る水分が、炭火に落ちて焦げた煙の臭いが染みついているのです。吐く息やおならや小便迄臭くなると言います。いわば椎茸のくん製室の中で暮らしているわけですから臭って当り前であります。

あちこちで椎茸小屋の焼き子の仕上りの噂が伝わると、坪買いのぼてふり衆は仲間の商売がたきに気取られないようにこっそりと、朝まだ暗い山道を明りもつけずに登って行きます。ぼてふり衆には長年の付き合いで、気心の知れたお得意の椎茸小屋があるのです。他人より先に顔を出せば大体商いはできるのですが、油断がならないのは、村の人間ではない飛び込みのぼてふり衆です。村の相場に比べれば法外の高値で買い占められることもあるのです。もっともそんなぼてふり衆は投機筋の椎茸商人と結託した連中で、一遍こっきりの事が多いのです。でも村の仲間のぼてふり衆でも、いつなん時肩透かしをくれて、椎茸小屋のお得意を盗らないとも限らないのです。

椎茸に限らず一般に農作物は出始め、つまり初物と言われる中が珍重され値段も高いのです。出荷量がふえてくれば値段も下がります。

春子は椎茸の年間の出荷量の大半を占めます。それから期間も比較的長いので、始めと終わりでは値段に大きな差が生じます。ぼてふり衆は焼き子の詰まった大海袋を車に積むと、一刻を争って椎茸の買付商人の逗留している露人館に急ぐのです。

露人館の商人は、ぼてふり衆の持ってくる焼き子を、早朝でも真夜中でも、殆んど二十四時間買い付けられるように待っています。商人達は露人館の一台しかない電話室の廻わりで番を待って、他人に聞かれないようにひそひそ声で自分の店と連絡し合い、中央の市場の相場をとっております。この相場を村では大相場と言います。商人がぼてふり衆から買い付ける相場はこの大相場よりはずっと安くて、村相場と言われます。村でも名うてのぼてふり衆は、こんな相場の仕組みの中を上手に立ち廻わり、結構もうけていました。

くうにいはこの時期小使銭欲しさに、ぼてふり衆のまねをしたものです。いっぱしのぼてふり衆のように資金はありませんから、顔馴染みの椎茸小屋を拝み倒して焼き子を借り受け、露人館の商人に買い取って貰い、自分

の口銭の利鞘を稼いだのです。

このような、ひとのふんどしで相撲をとるような商いの手口をさいとりと言いますが、村ではさいとりを単にとりとか或いはとんび等と呼んで軽べつしたものです。

ぼてふり衆仲間でもこのさいとりをへばかにして嫌ったものです。

くうにいは見栄っ張りですから椎茸の大海袋をリヤカーではなくて人力車で運びました。彼自身も人力車に客を乗せる時のいでたちでわざわざ半ばきを履き、びいびい笠までかむりました。さいとりを村の衆に知られたくなかったのです。うまく村の衆の目をごまかした積りで露人館に近付くと、玄関に待ち構えていた女中衆が一斉に飛び出て大声で囃し立てたのです。

「春子さまのお着き」

くうにいはいつも女中衆にさいとりの上わ前をはねられていました。

この春子の収穫は例年四月いっぱいで終わるのですが、時には春さきの天候で、寒さがいつになく厳しかったり、雨が極端に少なかったりすると、椎茸の発芽や成育が遅れることがあります。五月の八十八夜も過ぎて一番茶の摘みとり時期にずれ込んでしまう事もあるのです。

村では殆んどの農家は椎茸と茶の両方を栽培していましたから、そんな年の忙しさは全く大変なものです。

農家では人手の足りない時は近所や親せきで互いに助け合うのが普通です。嫁に出した娘達を呼び寄せたりもします。

娘達も孝行者で心得たもので、自分の亭主はおろかしゅうとまで引き連れて応援に馳せ参じます。

村の小学校でも、木の子休みや、茶休み等と言って一週間ぐらいの援農休暇があります。農家では当然の如く児童の労力をあてにしています。親の仕事が長引けば、児童は一週間どころか十日以上も学校を休んでしまいます。

こんな風で四月の中半頃から五月いっぱい村の農家の少しでも働ける人間は、男女、老若を問わず子供に至る迄、がむしゃらに働きます。いや働くと言うより仕事に追い廻わされるのです。椎茸も茶もその頃は現在のように人間の都合通りにはいきませんでした。植物は自然の摂理で生きていますから、それに付き合う農家は、毎日食事は質素で簡単で、睡眠も切りつめた上の重労働です。疲労困憊、半病人のようなていたらくです。農家の衆はみんな痩せて目くぼになります。目付きだってうつろで夢でも見ているようです。歩くにも足がふらついています。

「おてんしょう様が、ひずるしい」

と、みんな日陰を歩きます。その声もかすれて力がありません。やたらと語尾がひいひいと上わずります。それはあたかもこの時から五、六年後の、敗戦直後の私達

が大なり小なり体験した栄養失調症に似ていました。

日本国中が焼け野原で、食べるものが無くておかしなもの迄口にし、その上いつも空腹で、むやみに眠いのです。屁をひっても、しゃっくりしても、くしゃみをしても肛門の括約筋はゆるんでいて、無色の水のようなうんこだけが勢いよく水鉄砲のようにほと走ったのであります。

村の農家の衆は下痢はなかったと思いますが、あの頃の日本人とそっくりでした。その頃村では体力の衰えをひいが弱わったと言いました。声が力なく上わずるのを、ふいごの風もれと言いました。

村では昔から毎年この季節になると、農家の衆の殆どがこのように体力が極度に衰弱したのであります。

ところがおかしな事に、村の衆はこの状態を余り心配していなかったようです。春になれば村にやってくる恒例のはやりやまいぐらいにしか考えていなかったのです。事実夏が過ぎ秋になる頃には村の衆は体力をとり戻して元気になる者が多かったのです。でも元気になれなくて衰弱したまま亡くなった小学校の同級生もいました。

概して村の衆は体力の衰弱を返って勤労の証拠だとむしろ誇りにしていたきらいがあります。奥山武太夫は当時村の句会で、春痩せを季語に加えるべきだと、呑気なことを言っていたそうです。彼のような村の文化人で有力者もこの春痩せを村の衆同様に一過性の通り雨ぐらいにしか考えていなかったようです。

この四月に小田郷村小学校に赴任したばかりの校長だけは村の衆とは違いました。村の農家の、それも児童迄巻き込んでの衰弱ぶりを目の当たりにして、村全体の無神経ぶりに驚がくしました。これは明らかに病気であって捨ててはおかれないと言ったのです。早速村長に進言して、児童に昼食事に栄養剤を服用させるように掛け合ったのです。すけべいだけが有名な村長は、予算がどうのと言を左右にするだけでした。業を煮やした校長は、とり敢えず彼のポケットマネーで、早速翌日から、週二回、肝油ドロップを児童に服用するように決めたのであります。

「銃後の守り、この一粒で農繁期を勝ち抜くぞ!!」

当時の新聞の地方版には、大きな見出しの活字と並んで教室の机の前で顔を上げた児童の口先に、肝油ドロップを指先でつまんだ笑顔の校長の写真が、添えられてありました。

小学校の放課後の教室で、新聞をひろげて窓に寄りかかっていた担任の短現先生は、ごわごわっと音を立てて新聞をたたむと、教室の床に雑巾がけの掃除をしていた私達に向って、ぼそぼそっとつぶやきました。

「かんじんかなめの農家の生徒が、学校に来れないでいるのに、一体どうやって肝油を飲ませるつもりずらか」

この季節私の家の隣の魚徳の店先には、焼津の鰹節

屋から仕入れた鰹の塩辛の入った五升樽が三つか四ついつも置いてありました。

夕方になると農家の女房や子供達が家族の人数に見合った器の丼や片口や空き罐や竹筒などを持って魚徳にやって来ました。禿頭にねじり鉢巻きの魚徳が、特製の長い竹の柄杓で樽の中からすくい取ったどろどろの、塩の結晶が未だ残っていそうなうす茶色の塩辛を、隣にいるおかみさんの前にある台秤に乗っている器の中に、手加減しながらたらし込みます。

「それでストップ、ストップ。ええ、なんもんめ、なん銭」

おかみさんは台秤の目盛りを読んで暗算の金額を大声で叫ぶのです。それから塩辛の入った器を又その隣の娘のよし江さんの前のテーブルに渡します。

「あいよ」

よし江さんも母親に負けない大声で

「はいー、なんもんめ、なん銭です」

と復唱して、お金と引き換えに経木をかぶせた器を客に差し出します。

私はこの時間いつも自分の家の前に立って、銅山会社から帰ってくる母を待ちながら、魚徳一家の息の合った塩辛売りの流れ作業を見入っていたのです。白い大人の割烹前掛けのよし江さんは、私と同じ小学三年生のくせして、大人のような口調で振舞っていました。

時間が経って樽が空になると、魚徳は新しい樽を足元に置き、大きな木槌と鉄の釘抜きを使って、きいきいと奇妙な音をきしませて、樽の鏡をこじます。鏡の板が三つぐらいに割れると魚徳は割れ目に指を突っこんで板を持ち上げます。その時です。強烈な臭いが近所界隈に風のように広がったのです。立っている私はおう吐を催しそうになって思わず身をかがめます。

それは、今の今まで樽の中で発酵を続けていた塩辛からいつ時に発散したガスの臭いであります。腐臭とアンモニアが痛いように鼻孔を刺しました。

私は食べ物じゃないないわいとつぶやきながら、それでも毎日なんとなく魚徳の店を眺めていたのです。

ある夕方、私は地ごく耳と太平と連れ立って、同じ町内の高等科のがき大将の家を尋ねた事がありました。彼の家は農家で、一家は椎茸小屋から今日移って来たばかりでした。

がき大将の家ではこれから夕食と言う所でした。うす暗い裸電球の下で、両親とがき大将と三人の弟妹がちゃぶ台を囲んでいて、戸外から入ってきた私達に一斉に顔を向けました。

「晩げのめしを食っちゃうまで　そこでまってくりょお」

私達は入口の敷居をまたいぐと土間に立ちました。がき大将一家の食事するすぐ前でした。私達三人は遠慮もなく一家を眺めたのです。

ちゃぶ台の上には灰色にくすんだ古めかしい陶器の丼がいかにも重そうに置いてあり、それと並んで染料で真っ黄色のたくわん漬の皿盛がありました。

茶しぶで汚れたシャツの上に、茶問屋の屋号のついたこれ又着古した半纏姿の父親は、丼の内側に立て掛けてあった瀬戸物のれんげで丼の中身を無雑作にかき廻すとれんげに山盛りに、濡れた綿のようなものをすくいとりました。魚徳の鰹の塩辛です。そういえばがき大将の弟が、昨日の夕方、魚徳の店の前にいたのを思い出しました。

父親は自分の茶碗の麦飯の上にれんげを引きずるようにして、ぽたぽたと塩辛をなすりつけました。

次いで母親が父親と同じように彼女の茶碗の上に塩辛をなすりつけました。それから、がき大将がやり、私よりも年下の弟妹が馴れた手つきでやりました。

子供たちの動作をじっと見つめていた母親が頃合いを見はからって彼女の側にあった大きな土びんを持ち上げると、まず最初に父親の茶碗に土びんを傾けて湯気をほと走らせて茶を注ぎました。それから身を乗りだしてがき大将から順に弟妹に、最後に彼女は自分の茶碗に注ぎました。

「さあお前らうんと食え。何ん杯お代わりしてもええだぞ。椎茸小屋と違って飯はうんとたくさん炊いてあるだで」

父親は家族の者にこう言った後、ちらっと私達に顔を向けてから又しゃべりました。

「ちいっとばかりお前らの体が痩せたって、命はどんどん太っていくだで心配するな。それに甲州野郎の変てこりんのドロップなんぞより、塩辛の方が体にええ」

父親は話し終ると真っ先に茶碗を口に持っていきました。それが合図のように家族も茶碗を持ちました。茶碗の縁を唇にあてがい、右手の箸で塩辛茶づけを口の中にかっ込む時、茶碗がちりちりと鳴りました。その後はすすり込むバキュームの音です。

「ざぶざぶ、ざぶざぶ、ざぶ、ざぶ、ざぶざぶ、ざぶざぶ」

父親が最初に茶碗を空にして二杯目を自分でお代わりしました。それからやや遅れて、がき大将、続いて母親と弟妹達がお代わりしました。

「ざぶざぶ、ざぶざぶ、ざぶ、ざぶ、ざぶざぶ、ざぶざぶ」

がき大将一家のざぶざぶの口に吸い込む音は、全く会話もなくて、リズミカルに、時たま雅楽の和琴の爪弾きの如きたくわん漬を噛む音を混じえて、まるでラベルのボレロのように果てしなく続いたのであります。

地ごく耳も太平も私もただただ唖然として立ちすくみました。

父親の言った甲州野郎のドロップとは、校長の肝油ドロップのことです。いくら肝油に勝る体にいいものがあるにせよ、まるで汚物のような鰹の塩辛のお茶漬を、父親と母親だけならまだしも、がき大将と幼ない弟妹達まで物ともせずに、平然と食べ続ける姿は、誠に異様だったのです。

あの魚徳の店先の悪臭の中で鰹の塩辛を求める集団もそれを茶づけにして呑みこんでしまうがき大将一家も、村ではごく普通の当り前のことだったと思われるのです。

私はあの塩辛を子供迄が平気で食べている姿を見て、彼等とは身近かでありながら全く驚いてしまったのです。がき大将の父親にしてみれば、過労で体が痩せてきても、鰹の塩辛さえ食べていれば命は太ると、変な理くつを宣うているのです。鰹の塩辛への期待は信仰にも似ていたと思います。肝油ドロップなどすすめる校長は塩辛教の信者から見れば正しく異教徒だったのです。その上憎むべき甲州人で余計に信用はできないのです。

幾度もくどく申しますが、ともかくこの時期小田郷村は大忙しでありますが、それは農家ばかりではありませんでした。

周辺の町から椎茸や茶の買付にやってくる商人達で、露人館もごった返していました。商人達の相場のやりとりで電話は昼も夜中もじりじりとベルが鳴り、他のお客は殆どお話し中で用が足せませんでした。

折角泊る積りでやってきた客をやむなく断ることもしばしばでした。露人館の客間は往還に面した梅桜桃の三つの部屋が二間続きの上室になっていました。その梅の間に四月から逗留していた小学校の校長は、露人館の余りの多忙さに遠慮して、おかみさんの押しとどめるのも構わずに、自から進んで、屋敷の中の倉、梁山泊の元正平が使っていた空き部屋に移ってしまいました。

そんなある夜、天光軒十五夜嬢母娘が、夫ぞれ両手に大きな荷物を持って、なんの前触れもなく露人館に現われたのであります。

二人は玄関の土間に荷物を置くと、おかみさんに店の前に待たせてあるタクシー代を立てかえて払ってくれと頼みました。

「でも十五夜さん、折角ですが今夜はもうお部屋はとれないのですが」

十五夜嬢は、懐からとりだした大きな茶封筒を、おかみさんにうやうやしく差し出しました。

「お願いです。おかみさんなんとか泊めて下さい。どこでもいいのです」

曲師の母親も十五夜嬢の言葉に加勢するように、おかみさんの方に手を合わせました。

「まあ、隣町の竹の家のおかみさんからじゃありませんか」

おかみさんは封筒から抜きだした便箋を読み始めました。

「なんだい、なんだい、大きな荷物で、丸で夜逃げみたいじゃんか」

くうにいが暖簾を分けて奥から顔をだしました。

（つづく）

漢詩

潮騒録（廿五）

鯨游海

新西蘭土讃歌五首連作其一

平成十一年七月

春霞夕發蜻蛉島
萬里雲濤一夜來
曉旦涼風星點點
忽知此地已秋哉

押韻・來　哉

〈新西蘭土讃歌五首連作その一〉

春霞の夕に発す　蜻蛉島
萬里の雲涛　一夜にして来たる
暁旦の涼風　星点々
忽ち知んぬこの地　已に秋なりと

〔注　解〕

西行の「京をば霞と共に発ちしかど　秋風ぞ吹く白河の関」（京都を春霞の頃に出発したが、ここ東北の玄関である白河の関所に着いた今はもう既に秋風が吹いていることよ）と李白・早發白帝城「朝辭白帝彩雲間　千里江陵一日還　兩岸猿聲啼不住　輕舟已過萬重山」（夜明け、朝焼け雲たなびく白帝城に別れを告げ、千里も離れた江陵に一日で還り着いた。両岸の哀し気に啼く猿の声が耳に残る中、我が軽舟は幾重にも重なる山々を一気に走り抜けた）の詩二句を意識して詠んだ。蜻蛉島は日本の古名。

口語訳してみよう。

春霞の立篭める日本を夕方出発したが、万里の雲涛を越え早や暁方にはここ新西蘭土に到着した。所が何とした事か、この地では涼風が吹き渡り星が冴えている。已に秋である事を忽ち思い知った事よ。

四季が逆の南半球を実感した機智の作と云えよう。

☆雲の海ふり放け見れば月の舟
星かき分けつ吾を追い来る

又・五首連作其二

平成十一年七月

茫茫千里草原中
散在疏林南海風
時聞吠聲無犬影
牛羊此島主人公

押韻・中　風　公

〈又・五首連作その二〉

茫々千里　草原の中
散在す疎林　南海の風
時に吠声を聞くも　犬影無く
牛羊この島の　主人公

〔注　解〕

オークランド市の中心から車で三〇分も走ると、もうそこは茫々と涯しなく広がる緑の大草原。今は七月、南半球は眞冬だと云うのに草は青々と艶がある。日本の三～四月の気候に等しい。

北海道を除いた日本の国土の面積にほぼ同じこの国の人口は何とたったの三百万。人口密度で云えばわが国の略四〇分の一しかない。

この国は農業と観光の国。草原は天然の大牧場。羊を始め牛、豚、馬、鹿等々が群を成し黙々と草を食んでいる。酪農品の第一の輸出先は日本。一方工業製品は殆んどが輸入で、車や電気製品の過半は、メイドインジャパンである。正に補完関係にある。

平和で豊かなイギリス風の先進国で、日本人には極めて親密、友好的である。スポーツが盛んで殆んどの市民が週末何らかのスポーツを楽しむ。特にラグビーとヨットは世界一を誇る。「日本のラグビーナショナルチームならあと十年もしたら十回に一回位はオールブラックスに勝てるようになるだろう」と云ったら即座に答が返って来た。「ノー、ノー。永久に勝てっこない」と。

母国語は勿論英語であるが、最近各学校では日本語熱が旺んで、仏独スペイン語を上廻る人氣という。

☆牛の群羊の群もたじろがず
疎林に洩るる犬吠ゆる声

又・五首連作其三

平成十一年七月

阿娘遊學衣錦晴
借問歸鄉盍擧名
桃咲羊鳴非所以
門人知己自蹊成

押韻・晴　名　成

〈又・五首連作その三〉

阿娘遊学して　錦を衣て晴れやかなり
借問す「帰郷して　盍ぞ名を挙げざるや」と
「桃咲い羊鳴く　所以にあらず
門人知己　自ずから蹊を成せばなり」

〔注　解〕

阿は愛称の接頭語。娘は美しい女。錦を衣る、は「衣錦還郷」錦を衣て郷に還る。即ち功成って故郷に帰る事。ここでは大学院を卒業した事を寓意する。

借問す、は「ちょっとお尋ねしますが」と云う詩的慣用句。盍は何不と同じで「なんぞ……せざるや」と訓ずる再読文字。

転結句は承句の私の問いかけに対する娘の応答になっている。そして史記・李将軍伝「桃李不云下自成蹊」より引用している。即ち立派な人の周囲には招かなくとも多勢の人が寄り集まって来る喩え。桃や李は花も実も美しいので、招かなくとも自然に人が集まってきて、樹下に小路が出来て了う、の意である。

我が娘を褒め過ぎて失笑を買いそうであるが、ここは詩的誇張及び親馬鹿としてお許しを乞う。

☆辞さざるは牧歌の故にあらざりき
門人知己の吾に馴染めば

又・五首連作其四

平成十一年十二月

何事朝來獨緊張
異邦欲見汝新郎
眼中埃有忽消散
眉秀龍顏公冶長

押韻・張　郎　長

〈又・五首連作その四〉

何事ぞ朝来　独り緊張す
異邦にて見えんと欲す　汝が新郎に
眼中に埃あるも　たちまち消散す
眉秀でし竜顔の　公冶長に

〔解　説〕

眼中の埃とは心配事、気にかかる事、迷いを云う。出典は宋の碧巌錄「眼裏に沙を著くる」より。

公冶長とは、孔子が自分の娘を嫁がせた青年。「論語」の公冶長編に「子謂公冶長可妻也　雖在縲紲之中非其罪也　以其子妻之」とある。孔子がその人物を見込んだ立派な青年を指す。訳してみよう。

一体何とした事か、朝から心が緊張して落つかない。遠い異国で吾子のフィアンセに始めて対面するのだから。しかし眼中の埃のように心配していた事がたちまち吹き飛んで了った。眉目秀麗なあの孔子が見込んだ青年、公冶長のような人だったので。

☆白き眉澄みし眸の公冶長
吾子の選びし異邦の人は

又・五首連作其五

平成十二年一月

挑米國杯來日邊
怒張帆走艇疑顛
動中靜有靜中動
應阿修羅韋駄天

押韻・邊　顛　天

〈又・五首連作その五〉

米国杯に挑まんと　日辺より来たりて
怒張の帆走　艇くつがえるかと疑ごう
動中静あり　静中動あり
応に「阿修羅」「韋駄天」たるべし

〔解　説〕

米国杯は一五〇年の伝統を誇るヨットの世界選手権。カップは永年アメリカが独占し続けたが、漸やく先年オーストラリアが、前回ニュージーランドが獲得して世界を湧かせた。

以来四年目の今年、オークランド湾で決勝戦が、予選を勝ち抜いたチャレンジャー（イタリー）とチャンピオンのニュージーランドとの間で争われた。日本チームは今回三度目のチャレンジで「阿修羅丸」と「韋駄天丸」で参加、準決勝に進み四勝六敗で惜敗。チャレンジャーにはなれなかったが過去最高の成績であった。優勝はニュージーランド（連覇）。

起句の「來日邊」は李白・望天門山「天門中斷楚江開　碧水東流至此廻　兩岸　山相對出　弧帆一片日邊來」より。即ち日辺＝太陽の昇る辺り＝日本。しかもそこから来たのは一片の孤帆であった。ここではヨットを暗示している。怒張は、はちきれるようにふくらむ事。

阿修羅は悪神ではあるがやたらに強い神。また韋駄天も仏法を守る神で、魔王を追いかけた事から転じて速く走る喩えに用いられる。

口語訳してみよう。

アメリカズカップに挑戦して日本からもクルーがここオークランドに来ているのだ。日本艇が風を受け、帆をはちきれるように膨らませて走っているが、艇は今にも顛覆せんばかりに傾むいている。ところで動中に静あり、静中に動あり。日本艇は応に「阿修羅」であり、「韋駄天」でありその名に相応しい。

☆韋駄天は白帆傾むけ怒張して
阿修羅の如く走り去りぬる

《漢詩の流れ16》 六朝から唐代にかけて流行した美文に反撥し秦漢以前の古文への復古を実践した大文学者、大政治家韓愈―中唐詩人①

韓愈、字は退之。白居易と並ぶ中唐を代表する詩人で、唐宋八大家の筆頭として唐代の文章を大改革した功績は不滅である。

思想的には儒教を高揚し、老荘や仏教を排除しようと詩や文章で発言した。その為再三に亘る左遷を経験したが、その「ますらおぶり」を止めなかった硬骨の人でもあった。

北宋の欧陽修は「新唐書」で「愈没してよりその言大いに行なわれ、学者これを仰ぐ事泰山北斗の如し」と称揚している（泰斗＝大学者と云う語はこれから生じた）。

科挙に合格した進士であるにも拘わらず門閥の出身でなかった為、若い時は官途に就けず苦労した。しかし中年以降は文名漸やく高まり、國子監四門博士（国立大学教授）、監察御史（百官の不正を糾弾する官）を始めとして京兆尹（首都の長官）、行軍司馬（副司令官）、刑部侍郎（法務次官）、國子祭酒（国立大学総長）、兵部侍郎（国防次官）、吏部侍郎（内務次官）等々を歴任し有名詩人の中では太子賓客正三品の白居易に次ぐ正四品上の地位に昇った。

因みに王維は正四品下、朝衡（阿部仲麻呂）は正三品（死后正二品＝宰相格）であった。

古文の復古と云ってもそれは新らしい散文々体の創造であった。韓愈の「雑説四」の習作を見てみよう。

世有伯樂、然後有　世に伯楽あり然して後に千里の馬あり。千里馬常有、千里の馬は常にあるも伯楽は常にはあらず。故に名馬ありと雖も祇奴隷人の手に辱められ槽櫪の間に駢死し千里を以って称せらるる也。……これを策つにその道を以ってせずこれを食うにその材を尽さしむる能わず、これに鳴けどもその意に通ずる事能わず。策を執りてこれに臨んで曰く天下に良馬なしと。ああ、それ眞に馬なきかそれ眞に馬を識らざるか。

而伯樂不常有。故雖有名馬、祇辱於奴隷人之手、駢死於槽櫪之間、不以千里稱也。（中略）策之不以其道、食之不能盡其材、鳴之不能通其意。執策而臨之曰、天下無良馬。嗚呼、其眞無馬耶、其眞不識馬耶

韓愈は多くの名文や墓誌銘を残したが、詩は約四百首で長文のものが多い。つまり詩を韻文に近づけたと云える。また彼は多くの門下生の面倒をみ孟郊、賈島、李賀、張籍、王建等を熱心に指導した教育者であった。

推敲の詩人賈島に贈った詩をみよう。

孟郊死葬北邙山　孟郊死して　北邙山に葬られ
従此風雲得暫閒　此従り風雲　暫く閒かなるを得たるも
天恐文章渾斷絶　天は　文章の渾て断絶するを恐れ
更生賈島著人間　更に賈島を生みて　人間に著かしむ

泰山木（六）

―紙透小太郎の一生―

紙透寛夫

第二章　歩兵から憲兵へ

一

大正十一年（一九二二）十一月、父小太郎は満二十歳となり、徴兵検査を受けて、甲種合格となった。

徴兵検査は、成年に達した男子を対象として、兵役に服する資格の有無を、身体・身上にわたり検査したのである。旧憲法で、兵役は納税・教育とともに、臣民の三大義務の一つとされた。そして、父のような小作農の三男には徴兵の免除や猶予は無かった。父は兵隊に行くまでは

（家の農業を手伝う）

と述べていた通り、当然のこととして、その積りでいた。

父が大事に保存していたものの一つに、入営の餞別一覧表があった。これには父の若いころの思い出が一杯込められていたのであろう。だが、父の筆跡ではなく、たぶん、村の青年団有志が書いて、まとめたものであろう。奉書のような上質の半紙を縦長に折って綴じてあり、表に

大正拾壱年
入営覚え帳
十一月吉日　紙透小太郎

とあった。中を見ると、八十二名の名前が書いてあり、このうち、服部姓が二十七名と一番多かったが、我が家との関係を私は知らない。次は紙透姓が十二名、これは恐らく親類筋に当たると思うが、現在、私が行き来している家は、このなかには見当たらなかった。このほか、

日に留まったのは寶林寺であった。我が家の菩提寺で、先代の住職と父は同世代で、仲も良かったらしく、父が入隊してからも文通していたようである。また、父がどこで手に入れたのか分からないが、水牛の角を住職へ贈っている。父の一周忌の時だったか、控え室の床の間に、その水牛の角が、さりげなく飾ってあった。現住職の粋な配慮に、私は胸を打たれた。

さて、餞別の金は締めて壱百参拾九円也とあり、品としてはメリヤスシャツ上等一着、雑記帳、葉書五十枚などであり、とくに私の目を引いたのが、小旗弐百本であった。これは父が、いよいよ入営のため、生家を出発する時に、村の人人が農道の両側に並んで、この日の丸の小旗を振って見送ってくれたのではないかと、私は想像をたくましくしている。

そして、父は大正十一年十二月十日、第十九師団、歩兵第七十三連隊(朝鮮の羅南)に入営し、肩に星一つの歩兵二等兵になったのである。

現在、朝鮮は大韓民国(韓国)と朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の二つの国に分かれているが、満州国(現中国東北部)やソ連(ロシア)、東南アジア諸国、大東亜戦争(太平洋戦争)などとともに、国名・地名並びに用語などは、ここでは当時の呼称で述べることにする。

羅南は、朝鮮半島の北端にあって日本海に接する咸鏡北道のほぼ中央、北緯四十二度あたりにある。ここは朝鮮軍第十九師団司令部の所在地で、歩兵第三十八旅団司令部、歩兵第七十三連隊、歩兵第七十六連隊、騎兵第二十七連隊、野砲兵第二十五連隊、羅南憲兵隊と、いわば、第十九師団の主力が駐屯していた北朝鮮における最大の軍都であった。

ここが父の軍人としての第一歩を踏み出した所である。しかし、それからの歩兵時代の記録は残念ながら何も残されていない。

たまたま、新聞の図書広告に『迫力と感動の大型豪華版!史上初めて全郷土歩兵聯隊(原隊)を集大成! 写真集 わが聯隊』ノーベル書房、と載っているのを私は見つけた。その収載聯隊(抜粋)を見たが、第七十三連隊が無いので、フリーダイヤルで問い合わせたら、

「朝鮮の連隊は載っていませんッ」

という返事。そこで買うのは止めた。だが、少しでも父の歩兵時代のことが分かるかも知れないと思い、参考に読んで見ようと、近くの図書館にリクエストした。

九ページ……初年兵は帯剣し、営庭に整列、武装した古兵とともに、軍人勅諭の奉読、軍旗への敬礼を行い、入隊式が行われる。

そして五八ページ……入営当夜は誰でも泣く。消え入る様な消灯ラッパが哀愁の響きを伝えて闇に尾を引くと、鬼の様な荒くれ男が例外なしに不覚の涙

をポロポロ。

更に、八三ページには、就寝ラッパは、

♪兵隊さんは、かわいそうだね、
また寝て泣くのかね……

と聞こえるというんだね。

とあった。父も、ポロリと涙を落としたのだろうか?

一九五ページを開くと、

大阪歩兵第三十七聯隊の吉澤章氏は、終戦後のある時期には、軍隊並びに軍人が最悪のようにいわれたことがあった。また今は、大半の人々は軍隊生活の何物であったかを知る機会が少ないので、さほど関心のない状況である。だが私は、過去軍隊生活が如何に貴いものであったかを今なお信じている一人である。

軍隊は貧富貴賤の別なく皆が同一視されて、一つの目標に向かって日夜訓練される「人間修養道場」だと考える。

と、書いてあった。私の場合は二十年以上時代は下るので、大東亜戦争中はまだ中学生であり、軍事教練を受けて、更に学徒動員で軍需工場の寮に合宿、級友たちと寝食を共にして勤労奉仕をしていた。したがって軍隊生活をじかに体験したことはないが、しかし、それがどんなものか、少しは分かるつもりである。

父にも、いろいろなことがあったと思う。消灯ラッパとともに、並んだベッドに身を横たえ眠りに入り、父は果たしてどんな夢を見たのであろうか?

やがて、父は上官の一人、奥野山喜三郎に出会った。この上官にすっかり気に入られ、

「紙透!」
「紙透!」

と、父は目を掛けられたようである。よっぽど相性がよかったのであろう。

そして、後年、縁あって親戚となったのである。

父は上等兵(伍長勤務)で、満期除隊となった。さて、これからどうするか?いろいろ考えたようである。

私は、母茂登子のいる横浜市弘明寺の家へ、父に関する当時の資料が、あるかも知れないと思ってある日訪れた。先ず、父の一番古い写真帳を見た。既に八十年も昔のものであるが、それ程、傷んでいなかった。現在は大抵の家で、カメラを持っておりいつでも手軽にシャッターを切っているが、昔は写真館で撮ってもらったものがほとんどである。第一ページ最初の左側に、日本髪の若い女性が腰掛けている写真が貼ってあった。名前も何も書いてなかった。

「この人、だれ?」

私は母に聞いた。

「かめちゃんと言うの」
「ふぅーん」
「お父さんは、この人が好きだったのよ。この人と結婚して、酒屋を手伝おうと思ったらしいの。お母さんは一度、この人を横浜で見たことがあるの」
「へぇー」
「早く死んじゃったけどね」
「ふぅーん」
私は右側のもう一枚に目をやった。やはり日本髪だが、こちらは立っていて、眼鏡を掛けていた。写真の下には澄子と書いてあった。
「この人は？」
「それは芸者さんだって」
母はすげなく答えた。
母の言った酒屋とは、父が年末になると、よく手伝いに行った、たけ姉上の酒屋のことで、ここで働らいて、かめちゃんと結婚しようとも考えたようである。ほかに何をするかの選択肢としては、生家に帰って百姓をすることであるが、小作農であれば農地を分けてもらえるはずもなく、まして、あののどを通らない嫌いな麦飯のことを思い出しただけで、やめにしたのであろう。ほかにいい仕事も見付からず、考えた末に、
（憲兵になろう）
と決めたのであった。

憲兵とは、平たく言えば『軍隊のおまわりさん』のことであった。
しかし、憲兵は、軍人であれば誰にでも勤まるという職務ではなかった。誠実にして教養高き軍人に、憲兵として必要な学術を修得させ、初めて憲兵の任務が達成できるのであった。三省堂の『大辞林』は
憲兵……軍隊内の秩序維持を主任務とする兵隊。日本では一八八一年（明治一四）憲兵条例により設置され、犯罪捜査・軍紀維持・思想取り締まりにあたったが、次第に権限を拡大し、公安対策・思想弾圧・防諜などにも強い権力をふるった。
と説明している。また、全国憲友会連合会編纂委員会が編修した『日本憲兵正史』という分厚い本があるが、このなかで、憲兵の採用と教育について述べているので、その一部を抜粋引用する。

憲兵下士の任官および上等兵候補者選定については、陸軍省令陸軍補充規則に定められているが、下士官の任官については、各憲兵隊長が憲兵上等兵在職二年以上の者より、成績の優劣により序列を定め、毎年三月三十一日までに下士候補名簿を作り、憲兵司令官に提出して認可を受け、各隊毎に欠員を補充した。憲兵上等兵については連隊長（独立大隊長）は、毎年二月に憲兵志願者を選抜し、優劣をつけ順序を定めた人名書に、品行証明書を添えて、師団長に提出した。師団長はこれを憲兵司令官に送付し、憲兵司令官はこれを各憲兵隊長に下付し、憲兵隊長はこれら志願者の学力試験を行ない、合格した者を憲兵上等兵候補者として、各憲兵隊毎に三ヶ月から六ヶ月の期間憲兵隊本部に集めて、憲兵として必要な基礎学術を教育した。
憲兵上等兵候補者を決定する条件に、本人の家庭の状況がある。憲兵が各候補者の家庭について、家族の状態、生活の程度、本人入営前の素行等を、詳細に調査して身上調書を作り、憲兵として不適当な家庭、あるいは本人の前歴が好ましくない場合は、憲兵上等兵候補者として採用しなかった。」
憲兵上等兵候補者として教育を受け、試験に合格しても、直ちに憲兵に採用されるわけではない。本人が教育を受けた憲兵隊に欠員が生じた場合、採用序列に従って憲兵上等兵を拝命するものである。―中略―憲兵上等兵候補者の学力は高小卒以上であったが、中学校卒業者で、学校教練を受けた、幹部候補生有資格の憲兵志願者が多かった
以上のように、諸種の関門を通過して任命された憲兵上等兵、下士官は、優秀な素質のうえに、鍛えられた精神と学術および健康な身体をもって、よく任務を遂行した。

いやもう、ここまで読むだけでも大変だった。父は、この憲兵を志願し、試験に合格し、教育を受けて、憲兵上等兵を拝命し、羅南憲兵隊付きとなったのである。
そのころ、日本は不況と軍縮の時代に入っていた。大正十二年、山梨半造陸相は、陸軍の軍縮に着手し、さらに、大正十四年には宇垣一成陸相による第二次軍縮が行われた。
かくして、当時の朝鮮における憲兵隊の配置は、朝鮮憲兵隊司令部の下に、京城・大邱・平壌・咸興・羅南の五つの憲兵隊があった。そして羅南憲兵隊本部の下には、羅南・会寧・茂山・慶源の四つの憲兵分隊があったのである。ちなみに羅南憲兵隊の兵力は、将校六、准士官七、下士二五、上等兵九一、馬四三五で、このなかの上等兵一名が父であったわけである。
満州事変後に、朝鮮憲兵隊の配置定員は逐次増加されていったのである。

やがて、父は会寧憲兵分隊に配属された。会寧は羅南の北にあり、歩兵第七十五連隊・工兵連隊・飛行第九連隊・高射砲連隊・野戦重砲連隊・陸軍病院があり、軍都として北の守りに任じていた。
かつて、私は中央公論社刊の『日本の歴史』第十二巻

を読んだ時に、会寧の地名が載っていたので、懐かしく思ったものである。この本によると、今から四百年ほど昔、文禄慶長の役では、

―他方、加藤清正・鍋島直茂・相良頼房は、咸鏡道安辺をへて咸興にいたり、朝鮮の王子がのがれて北境にあることを聞き、これをおって清正は七月二十三日、会寧城にすすみ、二王子臨海君・順和君をくだらせた。―中略―清正は咸鏡道会寧より豆満江を渡って兀良哈を略し、鏡城より朝鮮の二王子とともに安辺に帰っていた。

とあった。会寧は昔からの要衝であったように思われる。

この会寧で、父は歩兵時代の上官で、目を掛けてくれた奥野山喜三郎と再会した。奥野山は羅南歩兵第七十三連隊から会寧歩兵第七十五連隊に転勤し、陸軍官舎でかつ夫人と住んでいた。お互いに兵科は違うが、同じ会寧におり、会う機会はあったのであろう。

奥野山はかつ夫人に、

「紙透は、いい男だよ」

と父のことを折りに触れて褒めた。かつは

「そんなら、妹の茂登子と結婚させようよ」

「それは、いいなぁ」

と奥野山夫妻は合意し、二人への説得が始まったのである。しかし茂登子は、

「まだ、家にいたい、結婚はいや」

と言い続けて、色よい返事はしなかった。そこで、奥野山夫妻は、考えて、横浜の父の生家に、

（小太郎さんの嫁に是非と思い、一度見に来て欲しい）

と連絡をとった。そこで父の長兄である亀松が来たようであるが、この時も、茂登子は隠れるようにしていたらしい。しかし、

「あんな、いい男はいないよ」

「探したって、いないよ」

と奥野山夫妻がべた褒めなので、ついに茂登子もその気になり、縁談がまとまったのであった。

が、憲兵隊員の結婚は、憲兵隊長の許可が必要だった。父が永久保存と朱筆した諸願届書綴のなかに、その書類があった。

婚姻願

静岡県周智郡山梨町下木戸二十九番地

傘製造販売業　鈴木義平　四女

茂登子

明治四十二年十一月十六日生

右之者ト婚姻致シ度候間許可相成度候也

会寧憲兵分隊上三峯分駐所

陸軍憲兵上等兵　紙透小太郎

羅南憲兵隊長　持永淺治殿

これに対し、朱筆で、

願之通り許可ス　昭和二年七月十四日

と書いてあった。

こうして、昭和二年七月二十七日、会寧憲兵分隊長が、すっかり、こまごまと世話してくれて、父小太郎は班長の官舎で結婚式を挙げたのである。無論、奥野山喜三郎かつ夫妻が媒酌人であった。時に父小太郎は満二十四歳八か月、母茂登子は満十七歳八か月であった。

後年、私は母に聞いた。

「それで、親父と初めて会ったのはいつだったの」

「結婚式がおわって、はじめてよく見たの」

「はっはっは」

私は思わず、笑ってしまった。

（つづく）

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日）

春季号……二月一日……十二月三十一日

夏季号……五月一日……三月三十一日

秋季号……八月一日……六月三十日

冬季号……十一月一日……九月三十日



方解石の出る楠木峠（十）

伊澤敏久

に、陸軍記念日の日など、防諜訓練が行われ、家族全員参加の中、憲兵が各所で、持物検査を行ない、きびしい言葉があびせられたりした。なお工場等では謀喋会の懇議会が行なれ、工場の生活の秘密の厳守など、強い指導がなされたのである。

明治五年に学制がしかれ、七十年間小学校の名称が国民学校と名称が変わり、教科書の内容も、時間割も、教師の教え方も皇国民錬成のためといって指導の強さを増し、新しいページが生まれ、自然と画一化された教育になっていったのである。

中学校では、非常時時局に直面し、皇国の使命を重きにおき、学校教育の刷新を断行して教科の徹底を計り、

七月中頃の日曜日の昼過ぎ、幸一の家に山口が久しぶりに尋ねて来た。

二人は、昔に思いを胸に楠峠に向った。

頂上の木の下の岩石に腰を掛けると、山口が、

「何日ぶりかな……」

「大分来なかったからな……」

二人は暫く会わなかったためか、話も間をおく様な心に置かれていた。幸一が

「俺も変わった様な気がする、学校はどうだ……」

「俺もだ」

谷川の流れの水の音を耳に聞き、遠くの雲の流れに目をやりながらおもむろに口を開き話し始めた。

「俺の学校は面白くない、やめてしまいたい事が今迄何回もあってな、上級生はいばっていてさ、家に帰っても食う物は無いし、親父に云っても聞いてはくれないし……」

何か物足らなさを感じられる点がありありとうかがわれるのだった。

聞いていた幸一が

「俺もそうだ。授業中、出来ない問題があったり、課題を忘れたりでもすれば、先生によくなぐられてな、課題でもわからなければな……。それを忘れたと思われるん

十六年に始ったアメリカとの戦争から、国民の生活が政府の指示に従がい一段と統制力が強まり毎日が軍事色の濃いものとなっていった。

幸一は母と二人活しの生活で衣食住が次第に切りつめられ何か毎日が以前と違い淋しく感じられる日が多くなり、九人の仲間達との合う機会もなく、日ごと心に空しさが深まっていった。

学校や社会でも戦争に関係のない事柄の無い日はなかった。

家庭では、活躍する将兵への慰問袋作りに、家庭の中を切りつめても作製したり、主食の配給米の遅れや、時

一層、国民運動に協力し、皇国青少年学徒として延身奉行することで、各種の事業遂行させるため、教育の方向に徹底を計ることになっていった。

県により、今迄店に並んでいた菓子も配給統制され、統制品は十四品となり、例えば、ビスケット、キャンデー等で、他は皆、軍の酒保用品菓子とされ、子供たちの楽しさを奪った一つとなっていき、食用油も商店から無くなり、米、麦その他の食糧品と共に切符配給制となっていき、店先には、空の菓子瓶だけが次第に並んでいく様になっていった。

さらに食料品だけではなく、一般家庭から鉄鍋が回収され、買い上げられた値段は、鉄類の普通の屑では三十銭（一貫目）同じく銅では二十五銭で、代金は町村役場から支払われたのである……等々。

毎日のことで、新聞や、ニュースでは、軍事関係でにぎわっていた。

二月には、シンガポール占領祝賀会が各所で行われたことや満蒙開拓青少年義勇軍の壮行会、大日本翼賛壮年団の結成されたこと等、四月には海軍航空隊の開隊、五月には大日本婦人会の発起式が各地で行われた……其の他多くのことが戦争遂行に関する記事で新聞を埋めていた……。

だ。問題が解けなければ、グランドを回らせられたり教室の外に出されるんだ……。

俺はな、先生の教え方がと思うだが……　そんなことでも云えばぶんなぐられてしまう……。考査にもやらない所が出たりする時があったりな……。

休み時間になれば、腕力の強いのがあばれたりして、教室が、落ちついていない様だ……。一人でなにか云っても聞くわけでもないしな……。

それから上級生には礼をしない……言葉使いでも悪ければ、問句を云われてな……

毎月八日には、八日は去年戦争の始まった日が、記念日といって、朝な、少しはなれた神社に戦争の勝利祈願をするんだ。全校生徒が行く様で、そのため一時間位は必ず授業がつぶれる様だ。その日、いやな授業だと、皆な大喜びをする……。出来だけ、往復ゆっくり歩く様にしていく……。雨でもふれば、喜び方が又違う……　面白いな……。

部活はしぼられるし、帰りは遅いしな……」

幸一も山口に話を合わせる様に話すと……

山口は暫く黙って聞いていた。……暑い夏の日盛りに楠の日影の下で涼しい風が二人の顔をなぜて行った……

二人は何事もなく流れていく雲を見上げていた。

暫くして、山口が、

「憲造君の思いきり空を飛びたい気持がわかる様な気がするな。所で今から二人で、どうだ、今日はまだ早いから、洞窟に行って見ないか……」

「何も持たないでか……」

「いや、一度家に帰って、綱等、道具を取りに行ってきたらどうかとな……」

「それはよいな、面白いぞ」

幸一も、何時も何か気持ちを変えたい事を考えていたためか、すぐに同調した。

二人は、立ち上がり、急ぎ足で山を下って行った。

途中、幸一が、

「今日は、日曜だから、武二も、雄二も家にいるかもしれんぞ。話をして、連れて行ったらどうだ……」

「そうだな……」

山口も気持ちが一変したと見え、元気のある声で、

「急ごう……」

二人は、暑い夏の中、汗の流れるのも忘れ、峠を下って行き、家に急いだ。

思いもよらずそろった四人は懐中電灯等を用意し、頂上を目指し、西方の洞窟へ息をはずませて向かって行った。

洞窟についた四人は、すぐに命綱を近くのたい木にしばりそれを頼りに穴の奥へと入って行った。

洞窟は九人以外は知るよしもなかったのである。

奥に入って行くに従い上からしずくが、ポタポタ落ち服をぬらし、足下には、清水が、深い所、浅い所と流れていた。四人はこけで滑ってころばぬ様に注意深く進んで行った。

暫く進んだ所に以前憲造等と見つけた頭骸骨で、以前と変わりなく、上から落ちる清水を受けながら洞窟の守神の様に安置されていた。

四人は、通る前手を合わせ、奥へと進んだ。

五、六十米進んだ所で、水の流れに合わせ、「ピーピーキーキー」と、耳にいやと云う程の声が聞こえてきたのである。

幸一が、

「あれはこうもりだ、奥に入っていくとたくさんいるぞ、気をつけんとくいつかれるかもしれん…」

恐る恐る足を進めていくと、洞窟の上の方にたくさんのこうもりが足を上にぶらさがっているのが見られ、電燈を照らすと、バタバタと舞いおりたり飛びまわり始め目はキラキラと光り、無気見に感じられた。その中、驚いたのか　四人のまわりをかすめ始めたのである。

四人は、手や、持ち物ではらいながら奥へ足を進めて行った。

水の中をのぞくと、茶色の桜色のこいこけの上や、両側の岩に小さなむかぜの様な虫が多く見られた。

突然雄二が大きな声で、

「おいあれはなんだ、白っぽい様な物がひらひら水の中に見える…」

三人は目を向けると、少し深くなった四、五米先に、茶色の様によごれた白いボロの様なものが流れる清水にただよっているではないか…

近ずいて見ると、所々が破れ、長い布の様に感じられた。

幸一が

「おい、字の様なものが見えるぞ…。「風」かな、下は「木」の様に見える。そうだ、「武田」の　風林火山の旗かもしれんぞ。」

幸一は武田軍のことは父からよく聞いていた。

四人は驚きで目を見張った。

「あっ　憲造さんだ。白い服を着て早く来いと云っている」

三人が、思わず、顔を上げて先を見ながら、

「そんなー、何も見えんぞ、先の方は真暗いぞ……」
「憲造さんの幻が出たんだ……」
幸一が云うと、
「憲造さんがいればいいんだがな……」
武二も憲造を思い出したのか、大きな声を出した。
「所でこの洞窟はどこまで行っているのかな……」
山口が思わず話すと、幸一が
「わからないなまだまだ先がある様だな。信玄が、元亀二年から遠江の侵略を始めて、三月には高天神城を攻めたが、攻略できず、四月には家康を攻め始め信州伊奈国から天龍川を下って遠州に入ったと云うから、ここで戦ったかも知れんが、こんな洞窟でやったのか、わからんな。徳川軍は、方解石を味方の目じるしとして胄につけたと云うから……」
武二が
「幸一さんの家の先生がいればよいんだがな……」
「そうだな、聞きにいくわけにもいかんし……」
雄二が残念そうに云った。

山口が暫くして
「まるでタイムトンネルだな。家に帰ればアメリカとの戦争のことで、ここにくれば、戦国時代になり……」
と云った時に、懐中電燈が途端に消えてしまった。
真っ暗な洞窟の中で、急に武二の電燈が消えてしまい、かすかに先を照らす三本が頼りとなり、四人は思わず「どきっ」と感じた。（残った三本も消えてしまったら）
「これからどうなるだろうな……」
幸一が一人つぶやいた。
幸一はいろいろなことが何か消えてしまう様に感じたのだった―。

（つづく）

近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（二十六）

第一部　北方探検近藤重蔵　下

第一章　重蔵の栄華と失脚

二、択捉島への航路を開く

金子正義

（六）

七月十三日、卍丸で根室港に戻った近藤重蔵は、港に北前船の弁天丸が碇泊しているのに気付いた。
弁天丸は、山田鯉兵衛が急な幕命で知床半島を廻って斜里に行くので、日の丸御用船として行ったが、用件を果して根室に戻ったのであろうが、山田鯉兵衛の姿が見えない、どうした事かと思い乍ら陣屋に入った。
根室会所役人一同の出迎を受け陣屋の奥の間に落ち着くと、会所詰合定役の大嶋栄治郎が改めて挨拶を言上し、
「弁天丸は三日前に斜里方面の用件を果された山田鯉兵衛様も乗船されて戻りました。
山田鯉兵衛様は江戸からの御用船政徳丸が、漸く六月末に厚岸に入ったと連絡が根室に入って居りましたので直ぐ陸路で厚岸に直行されました。
仔細は此れなる文書を近藤様に御渡し致せとの事でした。」
と夾算文書を差し出した。
政徳丸は蝦夷地御用隊が江戸を出立した三月二十日の後から、主として択捉島の開拓に当たる、富山元十郎、高橋治太夫、松田伝十郎等が、資材、食糧を積んで、三月二十四日品川より出帆した。
処が、東廻航路の金華山沖、三陸沖の特有な濃霧に前途を阻まれ、仙台は石巻港、宮古湾等での日和見多く、何んと六月二十九日に漸く厚岸に入港したのであった。
近藤重蔵は自分の配下となる松田伝十郎等の普請役が到来したと云う事は喜ばしいが、其れにしても山田鯉兵衛は、重蔵より先に根室に入り、会所諸役人の引継ぎを果して、弁天丸で斜里に向い乍ら、野付、標津、羅臼の湊々の地役人に東蝦夷地、千島の幕府上知借上の朱印状を示し以後は、松前支配より幕府御用役の配下になる事を伝え職務は従来同様に果すようにと各郡地役人に令達して、宗谷半島の西海岸よりオホーツク海を望見し乍ら南下し

て斜里湊に入って三橋藤右衛門の到来を待っていた。

三橋藤右衛門は山田鯉兵衛と同じように担当の網走内陸部より紋別郡、網走郡、斜里郡の地役人に幕府の上知借上の朱印状を示し、以後は、松前支配より幕府御用役の配下になる事を伝え職務は従来同様に果すようにと各郡地役人に令達して、宗谷半島の西海岸よりオホーツク海を望見し乍ら南下して斜里湊に入って三橋藤右衛門の到来を待っていた。

三橋藤右衛門は山田鯉兵衛と同じように担当の網走内陸部より紋別郡、網走郡、斜里郡の地役人に幕府の上知借上の朱印状を示し、幕府御用の隷下に入ることを命じて斜里湊に入って山田鯉兵衛に会い、野付、標津、羅臼方面も恙無く幕令下に入った事を報告されたのであろう。

政徳丸が厚岸に入港した事は、其の時に山田鯉兵衛に知らされ、山田鯉兵衛は直ぐ根室に引き返し厚岸に向ったのであろう、と近藤重蔵は推定した。

其れにしても、山田鯉兵衛が如何に御庭番衆の出自としても、機敏迅速な活動は愕くべき事である。

幕府隠密、御庭番、御使番の巡察御用は迅速果敢極秘裡に行動するので、城内で命を受けると家に戻らず直ぐ日本橋通りの大丸呉服店に入り変相して出動する、路銀等は「御殿詰御勘定所旅銀支給」を受け、探索地で必要な時には「支払委嘱令状」を地方代官に呈出すれば足下に金銀は得られる。

其うした特別な職権力の支えがあるから山田鯉兵衛のような活動が出来るのであろう、と近藤重蔵は複雑な思いで山田鯉兵衛の夾算文書を開いた。

鯉兵衛の連絡報告文は簡にして要を得たもので、斜里より厚岸に向った経過は重蔵が推察した通りであった。

急候故一筆申上候

『蝦夷地御用現地司令松平忠明様の根室方面総攬は猿留山道開鑿の工事遅延の為取り止め属僚村上三郎右衛門常福、長坂高景を従えて様似湊の会所陣屋に入られた

箱館奉行所には遠山金四郎景普が駐在しあるも様似陣屋が蝦夷地御用本部と相成候

猿留山道開鑿の事は最上徳内を取放して下役田辺安蔵職務を続行の事にて候

尚様似陣屋の建造物越冬に適し蝦夷地御用役の越冬の他に政徳丸の択捉島渡りの者共にも様似での越冬を許す故政徳丸の者共択捉島渡りの時期を失したる時には様似に収容すべき事

仍て拙者儀厚岸にて政徳丸の者共を取り纏め近藤様の下知を待ち暫く逗留仕り居候　急候故書中不具

寛政己未年　七月十日　恐々謹言

山田鯉兵衛嘉充

近藤重蔵守重様

』

其れにしても三月二十四日品川より出帆した政徳丸が

六月二十九日に厚岸に入港したとは何んと遅いことか、天候気象によるものであるが、三ヶ月余りを要したのは東北地方及び蝦夷地沿岸の航路が開かれてなく、天明の田沼政権下の蝦夷地見分の時も、其の後の御救い交易の時も幕府の雇船が品川より蝦夷地に往還したが、東北の海も蝦夷地の海も外洋航路は未開で、沿岸伝いで天候気象の影響を受けて難航した。

近藤重蔵も最上徳内も天明の見分時に、蝦夷地の陸路海路の開発を幕府に上申していたのであった。

今度の寛政十一年の蝦夷地御用の総理戸田采女正氏教は其の件を重視して、蝦夷地御用役参政である若年寄立花出雲守種周に、蝦夷地航路の開発を特命したのである。

命に依って蝦夷地御用択捉島開拓の器具資材食料を送る政徳丸とは別に、浦賀で航路開発用に天文気象、海洋観測が出来る海洋探索船神風丸を建造させた。

神風丸は千四百六拾石積みの大船で六月二十七日進水し、特に幕府天文方に特命して、長崎より最新式の観測器具を取り寄せた。

天文方の渋川主水は当時最も秀れた天文測量家で、其の弟子の堀田仁助は津和野藩士であるが、幕府天文方として特に神風丸に配属された。

堀田仁助は天文方の観測器具としてオランダ製のイスタラピと象限儀を始め遠眼鏡、時計、磁石の最新式の象限儀、渾天儀、星図鑑、天球儀等を四人の門弟三人の召使及び人夫に船に持ち込ませて七月一日品川を出帆した。

政徳丸がやっと厚岸に入った二日前であり、神風丸も二ヶ月余を要して八月二十九日に厚岸に入った。

神風丸は千四百六拾石積みの大船であるから、江戸より東北、蝦夷地への外洋航路の開発をも目的としているので品川を出帆してから、関東、東北の沿岸の地形を海上より測量し乍ら仙台石巻、南部釜石に寄り八月四日、宮古湾に入ったが逆風激しく八月二十五日迄日和待ちをして漸く順風を得て洋上遙か遠く陸地を見ることなく航行して厚岸に入港した。

堀田仁助は、此の航海に於て洋上より観測された測量図に陸地測量と蝦夷地沿岸図を加えて「従江都至東海蝦夷地針路之図」と云う海陸図を作った。

其の図には緯度線やコンパス・ローズ（方位盤）も描かれてある。

其れは昔東南アジアに迄航海した八幡船や朱印船が、ポルトガル、スペインの船の用いた渾天儀（アストロラーベ）や象限儀を用いて恒星を観測して東南アジアを航海した航海技術と同じであった。

堀田仁助は更に天文観測に依って航海し経緯度を以って陸地の位置を決定したのである。

堀田仁助等は江戸に帰る迄に蝦夷地や太平洋沿岸を測量し、イスタラピを用いて天文観測を行ない緯度を計測しているが其の測定誤差は僅かであった。

一、二例を示せば、

厚岸、北緯四三度一二分、実際は（四三度〇二分）
誤差は（＋）二〇分

松前、北緯四二度〇分　実際は（四一度二六分）
誤差（＋）三四分

箱館、北緯四二度八分　実際は（四一度四六分）
誤差（＋）二二分

此の様に外洋航路開発の幕府の神風丸は、同時代の欧羅巴の探検船と同じレベルに達していた。寛政八年（一七九六）蝦夷地内浦湾に入り込み絵鞆・室蘭の近海を測量し翌九年には室蘭湾内に碇泊し、此れを基地にして樺太と大陸の海峡を探り航路海図を作成して去った英船ブロートン号や、天明七年（一七八七）八月十一日より十三日にかけて　仏海軍のラペルーズが五百トンの木造帆船フリゲート艦二隻で霧の宗谷海峡を抜けて千島列島沿いにカムチャッカ半島に向い九月一日ペトロパブロフスクに入ったが、此等の欧羅巴の探検船の天文地理航法、海図、水路測定に遅れをとるものではなかった。

幕府の蝦夷地御用択捉航路の開発を近藤重蔵より委嘱された高田屋嘉兵衛の按検はどうしたであろうか。

（七）

近藤重蔵が択捉島航路の開発を高田屋嘉兵衛に任せて

卍丸で根室に戻ってからの数日は、国後水道は荒模様であった。特に午前中は濃霧が消えず、晴れ間を待って午後からの出航は、オホーツクの海の潮流が黒潮の張り潮となって国後水道に奔流し危険であった。

高田屋嘉平は勘兵衛と共にアトイヤ岬の岩壁上に立って、近藤重蔵と同じように毎日観潮していたが、朝より午前中カムチャッカより千島列島北太平洋沿いに流れ来る親潮が、国後水道よりオホーツクの海へ落ち潮となって流れ込む海流は一筋であるが。昼から午後にオホーツクの海より流れ来る黒潮は三筋の潮流が一筋になって国後水道に激流となり流れ落ち込んで行くのであった。

一筋はオホーツクの海の潮、一筋はカラフト方面より南流して来る潮であり、更に日本列島沿岸より西蝦夷地沿岸を北流して来る潮であった。

大昔よりアイヌのパイダルは櫂による全くの手漕船であり、近藤重蔵と最上徳内が乗ったイタオマチプも張り帆は有るが帆船ではない。

国後水道の潮流が如何に激しくとも潮流のみを案じての航行でなく、風向、方位を見ての帆走によれば乗り切る事が出来ると気付いた。

幸い宜温丸に乗り込んだ沼島衆船頭の勘兵衛は、帆船の宜温丸に沼島の三角櫓を取り付け、風の強い荒海でも漕帆両用にしてある。

高田屋嘉兵衛は毎朝濃霧で出航出来ず、徒らに日を重ねているが、日が高くなると南風が吹き始め朝霧が吹き消えることに気付いた。

午後には黒潮が張り潮となって国後水道に奔流するが、其の南風で一旦国後水道を北に出てオホーツクの海に出てから南下すれば択捉島の内保湾に入れるのではないかと想定して、

「どうだろうか勘兵衛さんよ、やって見よう」

と同意を求めた。

勘兵衛は腹を抱えて大笑して

「合点でさあ、俺らは近藤様や嘉兵衛どんが、潮の流ればかり案じて何故風向きを重視なさらないのかと、不思議でした。明日南風に乗ってオホーツクの海に出ましょう」

と自信のある面構で同意した。

翌、七月十八日。高田屋嘉兵衛は朝霧を冒し、湊番役人の訝りも無視して宜温丸の纜を解き錯地を離れ風を待った。艫て南風が吹き始め濃霧が動き出した。

宜温丸は未だ疾い親潮の落潮に乗って岸を離れ、帆を張って南風を受け、

「針路を子（真北）に取れ」と叫んだ

択捉島は国後島より北東に在る、未だ霧が深いので宜温丸が落ち潮に流されて択捉島南端のベルタルベの岩礁に乗り上げるのを恐れて針路を子に取らせたのか、と宮本源次郎や乗り込んでいるアイヌ通詞の山本久兵衛等は、霧が全く消えれば卯（東）に針路を変えるであろうと思っていたが、落潮の流れも弱まったのに真北に向って帆走していた。

通詞の山本久兵衛が

「おうい、高田屋どうした卯に舵取しないとオホーツクの大海原に出るぞ、樺太にでも行くのかよう」

と叫んだ。

嘉兵衛は

「通詞役人さんよ、海へ出たら海人の命に従いなされ」

と無視して宮本源次郎には近藤重蔵より海運については嘉兵衛の指示に絶対服従せよと言われたが、単なる元漁師の下役通詞の久兵衛には一々命じていなかったのであろうと思った。

宜温丸は山本久兵衛が騒いだ如く。南風に追われて択捉島を西に走り離れて北海の沖に迄行った。

一旦は択捉島を西に遠く離れた宜温丸は午後よりは黒潮の張り潮に乗り卯の方向に舵を取って、ベルタルベ山の北に長大な岬クンネウエンシリ鼻が、北風を防いでいる穏やかな入江タンネモイ（丹根萌）に入った。

遂に、百石前後の和船で択捉島に航行出来る航路が、高田屋嘉兵衛によって開発されたのであった。

宜温丸が入江の岸辺に碇を下したのが夕刻でもあり、アイヌ舟イタオマチブより大きな外洋船なので土民達は露船以外には滅多に見ない大船に見えたので、警戒して

浜辺に姿を見せず、山辺の樹木の陰から様子を窺い見ているようだった。

翌朝、積込んである小伝馬で高田屋嘉兵衛、通詞の山本久兵衛が上陸し、続いて宮本源次郎とアチャポがタンネモイのコタンコロクルに意を通す為に一包の米を持って上陸した。

通詞の山本久兵衛とアチャポが声を合せてコタンの在る方向に呼び声をあげた。

コタンコロクルのラアキツはフウレシシヤム（露人）が来たのかと隠れていたが、シャモ（和人）の声なので前年会っている近藤重蔵か徳内だと思って嬉んで顔を見せた。

だが近藤重蔵の姿は見えず、ずっと小柄の高田屋嘉兵衛なので半ば警戒し乍ら、イランカラプチ（今日は）と挨拶をして近寄った。

宮本源次郎が玄米一袋を渡して通詞の山本久兵衛とアアチャポが、此れからエトロフ島よりウルップ島迄の船道を定めに行く、案内して呉れぬか、無理なら萌消から内保迄でもよい、と交々に手振り身振を添えて話し合っていると。コタンの男共が集って来て珍しげに宜温丸を見上げ、自分達のパイダル（刳舟）やカリンパテ（板鰐舟）よりも大きいが、露人の大型船とは違って親しみがあると見えて乗って見たいと云う若者もいた。

此の時代のエトロフアイヌは南北五十里周廻り二百六十里で、高田屋嘉兵衛の生国淡路島の五倍程の長大な島の山辺の杜や海辺の入江大河の河口や、澗などに点々と小集落をなしていた、夏季には兎や鹿、海獣熊鷲などの大型鳥獣を狩猟し、季節によって魚類の豊富な海や、海より河口に群がり産卵に遡行する鱒鮭等を、原始的な手掴み棒叩き、精々猪突きの道具ぐらいを使って暮していた。

冬には海も凍て付く酷寒であっても身に着けるものは、コタンのエカシ（長老）コロクル（コタン頭）などは犬皮、熊皮、海豹アザラシ猟虎等の海獣の皮や、和人漢人の古着などを着ているが、普通の男共は木皮、草根で編んだ衣を身に纏い、中には魚皮の干乾を着衣にしている男もいるが、子供は殆ど裸であった。女子は鳥の羽を綴ったり草の衣を着ていて、蝦夷地本島のアイヌのようにアツケシ等は殆ど作れなかったようである。

住居も蝦夷地本島のアイヌのようなコタンのチセのようにアペコツ（囲炉裏がある訳でなく、いきなり穴を掘って枯草を山積にして潜り込んで寝る、柱の無い草柴の、屋根であるが五六畳敷ぐらいの広さで、家族の男女が一緒に寝る。食物もクチヤチセの外で作るので、鍋、釜などの道具もコタンの共有である。

だが、斯うした悠々たる原始的生活に近いエトロフアイヌも、春より秋、太陽が輝き荒海の波涛も和らぐと。

若く元気な男達は、秀れたコタコロクルと共にカリンパテシカチプで海岸伝いに北東に航してフリース海峡を渡ってウルップ島や、北千島の羅処和（ラショク）島辺まで交遊に行き、松前の和人や大陸の山丹人から手に入れた古着や青玉などを土産物ミケトリとして渡し、北千島のクリルアイヌから黒貂や猟虎の皮、鷲の羽などをミケトリとして貰い、此等の珍しき品々を国後水道を越えてアトイヤに渡り、国後島の泊や根室よりキリタップ迄行って和人にミケトリを渡し、綿布や糸針酒煙草などを貰った。

享保十六年（一七三一）の夏、エトロフ、クナシリの「蝦夷」がはじめて松前藩に来辟したと『福山秘府』にあるが、松前藩ではウイマム（交易御目見）に来たものとして、ミケトリの猟虎皮や鷲羽を献上したものと認め、以後毎年松前藩交易船の前に猟虎皮や鷲羽などを持って来て古着や糸、針等と物々交換していた。

猟虎は戦国末期天正十八年（一五九〇）豊臣秀吉が小田原の北条氏を降して天下統一を成し遂げると、蛎崎氏五世の慶広が京に上って秀吉に閲して「狄の嶋主」として認められ臣従したが、其の時の献上物の中に猟虎皮があり、撫でると自由に前後左右どちらにもなびくので馬の鞍の材料によしとして戦国武将が愛用したが、天下泰平となって必要性も薄れ、和人は露人と違って猟虎など必要としないのでアイヌの交易にも扱わなくなった。

元々アイヌは物々交換とか交易とかで大儲をしようなど思いもしない。カムイの神の配慮に従って、自然の恵みを享けた珍しい動植物や物産を広く分け合って共に楽しもうとする友愛の本能と好奇人からの物々交換であるのだ。

珍しい物や、余った食物などを遠く離れた土地に持って行きコタンの近くに、そっと置いて帰る、コタンの人は自分の必要とするだけ取って、その代りの物を置いておくと暫くして最初に物を置いた人が来て替った物を持って帰る

沈黙交易であった。従って始めて会う種族の違う人にはオムシヤの礼をかわし、珍しい土産物を交換するのである。

ラアキツ達タンネモイアイヌは、最上徳内や近藤重蔵とは既にオムシヤの礼を通じてある仲間であり、今度の高田屋嘉兵衛からは土産物の米を貰ったので、エトロフ島舟道を案内してもよいと相談がついて、ラアキツが、「ポロチブは危ないパイダルで案内する」と云った。

高田屋嘉兵衛は

「其れで良かろう、大体の方位海流海底の岩礁を知らせれば宜しい」

と言ってラアキツと二人のアイヌ若者をパイダルごと甲板に乗せて出帆した。

船は南風を左舷に受けて取舵片帆ひらきで走航し、二

里程北上するとクンネウエンリ鼻の北端に出た。

沖合いより右舷後方に深い湾入が見える。ラアキツがモエンシベ（萌消）湾だと云い、湾内奥にママイネモイのコタンが在ると云ったが湾内の岸は内陸の崖を切り落したように絶壁となって巡り、湾に注ぐ川も無く海底は潜礁で宜温丸には入れない、アイヌのパイダルなら自由に奥のママイネモイのコタンに行ける。

湾内入口に鋭い岩礁の上に立つ岩山の小島があったが、ラアキツの水先案内で、北のカバラ岬の根本に僅かの白砂の浜が見えるニイチショウニの浜辺の沖に錨を下して碇泊した。

湾内は魚類にとっては住き群棲地となっていて、鱈、アブラコやカサゴ等が多く、外洋から海面を波立たせて湾入してくる鮫などの魚鱗も見え、沖から子連れの鯨が入ってくる尾鰭も見える。

「漁場としては佳い場所だが、大型船舶の寄港地としては岩礁潜礁も多く不適である」

と嘉兵衛は宮本源次郎に告げた。海運のことには口を出すなと近藤重蔵に嗜められた源次郎は、地形観察、基地設営地の下見こそ我が出番と従者の又四郎や根室で雇った下北半島正津川出身の出稼漁民の寅吉に使役の場を与えようと待ち構えている宮本源次郎孝郷を残念がらせた。

七月二十日、辰の刻頃朝霧が消え始め、カバラ岬の南側の錨地より出帆した宜温丸が岬の北方沖に出ると、遥か右舷前方四里程に駿河の富士山の如き見事な山容をなす岬が現れた。

ラアキツが「山はアトサノボリ、岬はポロノッ」だと通詞の山本久兵衛に告げた。

高田屋嘉兵衛は後で阿登佐岳（アトサノボリ）は海抜約四百丈（1206米）の高山で内保湾に吹きつける北風を防ぎ山裾は内陸に広がって針葉樹が原生林をなし、東に深く湾入した岸には択捉南部の背陵より流れ下った内保川が大きな河口をなしている。

アトサノボリの山裾が其の河口の北側に落ち込んで深みをなして自然の良港となっていた。

内保コタンの集落もその付近に点在しているようだった。

江戸では一生梳の上らぬ御家人宮本源次郎が進んで志願した蝦夷地御用を存分に活躍させる内保湾であった。

既に朝から宜温丸が湾入するのを見ていたエトロフアイヌは、特有の情報連絡でコタン中に知らされ、内保のモシリコロクル（酋長）ネマンカラを先頭に住人は船着場に集っていた。ラアキツが先に立って高田屋嘉兵衛、宮本源次郎、沼島の勘兵衛等一同も上陸した。

取次役となったラアキツが酋長ネマンカラが「オムシヤ」の礼を以って迎えると告げた。

オムシヤの礼は、アイヌが古来より外来者を迎える信義の礼である。アイヌにとって始めて対面する者は、相互に神（カムイ）として敬い、お互いに信じ合って決して裏切らない盟約の礼であった。

エトロフアイヌには始めての渡航者は神の来臨することで、神を迎え神に仕えるのと同じように、神聖にして厳粛なる態度を以って恭順の意を表して迎えるのである。

コタンの住民は悉く集って、モシリコロクル（土地の長）ネマンカラを先頭に長老、老若男女の秩序に従って、お互いに手を握り合って列をなし、無言で高田屋嘉兵衛達の上陸した和人を迎えた。

アイヌの社会では長幼男女の序があり、土地の長モシリコロクル。コタンの長老エカシ。コタンの長コタンコロクル、家長チセコロクルの秩序があって、酋長とか乙名とかの高下の支配階級は無く、カムイの神と共に平等であった。中世以降アイヌに接した唐人、西欧人、和人達がアイヌを支配する方便として、種族の長を酋長とし、コタンの長を乙名とした。困に外来者に接して土地の物産などを交換したりする者、云わば外交役、走り使い役をミケドリ土産取と名づけたのは和人であった。

従って今回蝦夷地御用役人は択捉島の内保のモシリコロクルのネマンカラを酋長として扱い、丹根萌のラアキツは土産取（みやげとり）としたのであった。

ラアキツと通詞の山本久兵衛の合図に依って酋長ネマンカラが、高田屋嘉兵衛に近寄り大地に跪つき恭順の意を表すように一礼して恐懼し乍ら躙り寄って、嘉兵衛の差出す左手を酋長ネマンカラは両手で包み己れの頭上に上げて拝し髪や髭に触れさせて返した。同じように嘉兵衛はネマンカラの右手を己れの両手で包み頭上に上げて拝し髪と髭に触れさせて返し、お互いに抱き合って肩を叩き頬を寄せ合って親密の情を交し合せて礼は了った。

見守っていたコタンの住民は横並びになって、上陸した宜温丸の乗組員の和人アイヌ人夫と向い合って、両手を差出して握り合い肩を寄せ合って包み合い親愛の情を示した。

ラアキツの合図で宮本源次郎が従者の又三郎と寅吉に、土産物を持たせて向い合っているエトロフアイヌと和人の間を通って酋長ネマンカラに恭しく煙草の紙包みを献じ住民達には米一包ずつ与えた。

酋長ネマンカラもラアキツを通して高田屋嘉兵衛に大鷲の羽二枚、宜温丸乗組の一同に日干の鹿肉一塊を供した。

オムシヤの礼の後に高田屋嘉兵衛と勘兵衛は、船積伝馬船を下し、宮本源次郎はラアキツのパイダルに分乗して、広い内保湾内の海岸線を探索し、漁場基地や会所設営の場所、番屋の位置規模等を想定して廻った。

翌二十一日の探索で湾内約十里にコタンが三ヶ所に在り、萌消崎の北側の付根にはママイ（満舞）オタスツ（於

多須津にはキムンイオル（冬猟場小屋）の無人小屋だけがあった。

宣温丸が碇泊しているコタンの内陸部は沼地の湿原であるが、西海岸へ出られる草原地である。訊けば向う側にもイリシヤリのコタンが在ってオホーツク側とカムチヤツカへの通い道ともなるとの事であった。

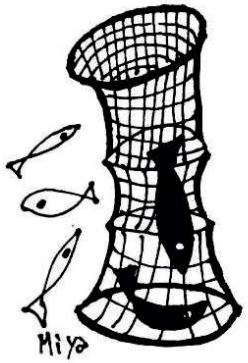
ポロソツ鼻岬の付根には、カムイコタンが在って酋長ネマンカラは其のコタンの長老でもあった。

いずれにせよ、内保の三ヶ村の酋長の下に七十八人のエトロフアイヌが棲んでいる。内保湾内に会所や番屋を設置するのが最適である、宮本源次郎は寅吉と又四郎に命じて、エトロフアイヌを使って予定地として杭打ちして縄張とした。

嘉兵衛、勘兵衛は、宣温丸の碇泊した岸辺も船着場に適しているが一里程北のカムイコタンの岩壁の南が大船でも着岸できる好個の位置と見て、波止場、船着場の設置の承諾を酋長ネマンカラより得て岸壁に印を刻んだ。

近藤重蔵は今次のエトロフ島按検は、内保湾迄の水路碇泊場を按検するだけで充分と言ったが、高田屋嘉兵衛は、内保湾は長大なエトロフ島の西側の半ばにも達してない、せめて北端のカムイワツカ神威岳の山麓が海に落ち込んで澗をなしていると云うシベトロ（藥取）までの海洋を航して見ようと勘兵衛に告げ、宮本源次郎にも伝えると、宮本源次郎は航路開発よりも漁場の開発、交易会所の設置などの仕事が存分に出来る蝦夷地御用に益々意欲を持って、西側だけでなく東側迄も按検しようと、意気込んで賛成した。

続く



千篇萬律

☆私の友人で「まんじ」の愛読者でもあるN氏は先年六十歳で定年退職し、かねてよりの希望であった考古学を学ぼうと予備校に一年間通い明治大学文学部に入学、昨年首席で卒業された。以来一年、何とこの春早稲田大学大学院に合格、更なる研究を続けると云う。英文を読めなかった人が今英語で論文を書く。N氏の精神の強さに驚嘆する。

☆所が上には上が居るものだ。「九六歳の大学生」と題する本がPHP研究所から出版された。その著者が歌川豊國なる方で卒業時には百歳になる。近畿大学の二回生で部活動にも参加してキャンパスライフを謳歌していると云う。

氏の語録より。「目標を持つ事は何歳でも遅くない」「やりたい事は未だ〳〵ある」「社会へ恩返しの出来る人間になりたい為に学ぶ」……。歌川氏の精神の明るさに驚愕する。

☆わが「まんじ」の長老大和禎人と三戸岡道夫の両泰斗が「ひら仮名うさぶろう功名譚」「幻妖城異聞」を夫々相次いで上梓された。当誌上にも一部連載されていた意欲作である。熟年パワーに感動する。

☆当(まさ)に人間の限りない可能性を知る。人間万歳と思う。生きる意欲、創作する勇気が湧く。先哲達よ有難う。（く）

「まんじ」　第七十六号
平成十二年五月一日発行（非売）
編集　鯨游海
発行　柴田富佐子
〒一〇一―〇〇六二
東京都千代田区神田駿河台二―九
柴田方
「作家群」
（まんじ）編集部
TEL　〇三（三二九三）〇〇九四　柴田方
郵便振替口座　〇〇一二〇―四―九〇八一五
加入者名「作家群編集部」
印刷　有限会社帝国出版リンデン
東京都中野区江古田四―三十七―十一
TEL　〇三（五三四五）七三八〇

まんじ 第七十七号 目次

勤王トライアスロン …… 大和禎人 … 4
体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人々(一) …… 千坂精一 … 15
老春繚乱 ― 幻聴 ― …… 三戸岡道夫 … 20
気になる多産の帝妃たち …… 新井宏 … 25
漢詩 潮騒錄(二十六) …… 鯨游海 … 34
笹ケ崎村(十一) …… 太田和貞 … 39
ねずみ小僧丸楠(十七) …… 鈴木昭三 … 45
罠 …… 鍋屋次郎 … 50
脚本「開港・港崎(みおざき)心中」横浜豚屋火事顚末 …… 相原精次 … 63
詩 果物物語(四) …… 青木昭成 … 82
大山巌外伝 血煙伏見 …… 瀧澤中 … 85
泰山木(七) 紙透小太郎の一生 …… 紙透寛 … 93
近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代(二十七) …… 金子正義 … 98
千篇萬律 …… 編集子
表紙・カット …… 宮城正彦
カット …… 鈴木國男

勤王トライアスロン



大和禎人

勤王か佐幕か、三百諸藩は藩論に揺れ、多かれ少なかれその帰趨を迷って動揺し、奔命に疲れ、また悲劇をも招いた。明治のご一新はそうした（トライアスロン）の果て、武家社会によりもたらされた革命であった。

豊前中津藩が朝廷への恭順を決定したのは慶応四年一月二十一日（陽暦二月二日）、すでに同月三日には鳥羽伏見に幕軍が敗れ、明らかに幕府に非なる状況下、遠く九州の西陲とは言え、遅きに失する判断であった。

中津藩の領地は豊前国下毛郡中津、石高一〇万石で、席次は溜間詰、開戦時の藩主は奥平昌服。譜代大名である。だが、いまこそその譜代なるがゆえに帰趨をはかる上の苦悩を免れない立場にあった。

一方、別に世子昌邁が江戸に滞留中で、これを案ずるという事情にも当面していた。豊前中津と武州江戸との距離は意識の上では万里、封地たる郷国中津からは遙け き彼方である。

「ご時世がら、若殿のおん身が気づかわれまする」

「そのことじゃ、心を痛めておる、良い思案があろうか」

当主昌服の前に家老の奥平与四郎が憂い顔を見せていた。藩主に同じ奥平姓の一族であった。

「別して、それがしの思案としてはまず京の動静を探らせ、善処のほかなきよう思われまする」

「そうじゃな、嘆かわしいことじゃが、天朝さまの帷幄を薩摩や長州が壟断する気配と耳にしておる、そちも知ってのとおりじゃ」

九州豊前にも京周辺の事情は諜報として、その程度には認識されていた。すでに。鳥羽伏見の戦端から旬日を経て、薩長二藩には倒幕の密勅が下されていた。

（人数のみ充満、陣を敷く場所もなく『桑名戦記』）

鳥羽伏見戦はまさに泥沼の混戦、桑名、会津、新撰組の

勇戦も空しく終わっている。幕軍として守備にあたっていた藤堂藩（津）の裏切りがあり、腹背の攻撃をうけ、勝敗を分けたのであった。六日深夜、将軍徳川慶喜は大坂城を脱出し、天保山沖から幕艦の開陽により江戸へ逃れた。護衛の任にあった会津の松平容保、桑名の松平定敬の両藩主までもこれに追従脱出したとあるから、もはや幕府にとって形勢の不利は明らかなのであった。

「さすれば、まずは目付の古宇田与九郎めを京に遣わしましょう、じつは内々かのものには含ませておりまする、ご裁可あれば、ただちに」

「そうであったか、よきに計らいくれよ」

主従の考え方は一致した。京の情勢を見た上で、恭順を表明するとしても、有利を導きたい、なおかつ窮地を予想される世子の無事を計らねばならない。

命をうけた目付古宇田与九郎の京への潜行はその夜のうちの発足になった。

「いかにゃでけん」

国言葉で（行かねばならぬ）と妻女には短く、それだけを言っての旅立ちだった。

中津藩は天正十五年黒田官兵衛孝高の入封から長政におよぶ二代のあと、細川忠興が慶長五年、関ケ原合戦の軍功により入封している。黒田氏は筑前博多へ去り、細川氏も加藤氏改易後の肥後熊本に転じている。寛永九年播磨の竜野からはじめて譜代の小笠原氏が入封、五代を経て世嗣なく断絶、元禄七年、同じく譜代の奥平氏が丹後宮津から入封したものであった。昌成を初代として、九代の昌邁の代におよび廃藩置県を迎えるのである。

この際、国なまりで言うなら、よんがよどおし（夜通し）与九郎は京を目指した。かれは一流のがしょうもん（我慢強い人間）を自ら任じていた。この際は一藩の運命すら双肩にかかる自覚から、皆を決する思いなのであった。

京へは二日目の夕刻に着いた。

三条大橋を渡る橋上から比叡、北山、東山の峰々が夕霞の中に粛然して望まれて、この景観のもとに、千年の重みをもって天朝の御所があり、いま回天の歴史を刻もうとしている。だが、いまは静寂、何事もなきように夜闇に沈もうとしている。藩公の参勤に供奉して通過することはあったが、単身の今という時のなかに、格別の思いが胸の中を過ぎる。幾多志士らの流血の挿話を生み、この地を舞台として多くの鬩ぎあいがあった。西陲九州の田舎侍の身にとってそれらはかかわりのない、彼岸の出来事とも思えるものであった。だが、今や火の粉を浴びる身近な問題になりつつある、メラメラと炎の舌になめられ、微小のわが身すら、明日を知れない運命に曝されているのだ。巨大な歴史のうず潮に明日は呑まれるや

も知れぬ。

大橋を渡りきると、中島町のとある旅人宿に入った。参勤下向の際の本陣、脇本陣といった厳しい宿所ではない。

心安だてに宿の主が語りかけた。

「お武家さまはどちらのご家中ですかな、お見かけしますところ、物騒な筋ではありませんようで、もう勇ましいのは薩摩はんでなければ、長州はん、近ごろけんのんなことばかりでございましたな、ようやく一段落で、ご東征とて、錦の御旗をおし立てて、先ごろに勇ましゅうお出発で、手前どもほっとしております」

「なんと、さようか、これはしたり」

古宇田与九郎は舌を噛んだ。

「いえね、お侍様、申しちゃなんですが、もう、つむじ風にはコリゴリでございますよ、お芋様はじめそれはそれは鼻息の荒いばかりで、手前ども京の街のもんは閉口しておりました、疫病神がいなくなってせいせいしているのでございますよ」

「そうか、お芋様とな、これは手厳しい」

「あれで官軍を唱えるのですから、お粗末ですな、天朝さまもさぞご迷惑、お気の毒に思いますよ」

「ところで、ご亭主、早駕籠の手配を頼む」

饒舌をやめた宿の主がこんどは目を剝いた。

「公用で江戸まで参る、迷惑はかけぬ、心配するな」

路銀は中津を出立にあたって家老の奥村から万一に備え十分与えられていた。

東海道は宿駅五十三。京三条大橋から江戸日本橋までは百二十六里六丁一間（宿村大概帳）。いまの距離で約四九二㎞。駕籠で通したとして太田南畝の「改元」によれば十二泊十三日。広重描く「参宮上京道中双六」に見ると十一泊十二日である。これらによれば昔の人は一日約十里（三九㎞）の距離を歩いたことになる。昔の人は足が丈夫だった。女連れでも平均六里は歩いていたらしい。慶安異変の際、徒党一味の熊谷三郎兵衛は日に二十里、三十里を平気で歩いたとされるが、例外だろう。

さて、古宇田与九郎の早駕籠は五日で江戸に達したというから、大変な早さである。かれは駕籠の中央に吊り下げられた用意の白布にとりすがり、揺れに揺れ通す苦行に耐えねばならなかった。覚悟の上とはいえ、与九郎はその試練に弱音を吐かず頑張り通した。本領とする（がしょうもん）を貫いた。道中の関手形などは周到に国元出立にあたってあらかじめ与えられていた。大井の川止めの不測も免れたのであった。

ところで、ここで三島宿では官軍を追い越した子細を漏らすわけにはいかない。

与九郎の早駕籠はいよいよ箱根の険阻をひかえるところまで来て、街道いっぱい官軍の士卒の憩うところを通らねばならぬはめになった。

幕府方の軍議は激論があって、箱根路をポイントとして、峠を越えたところで駿河湾の洋上より海軍力にたのむ艦砲をもって、東上する薩長軍を分断すべし、とした小栗上野介忠順の主戦論が通っていれば戦況どうなったかわからない。しかし、この意見は慶喜将軍がすでに戦意を喪失していたから、実現しなかった。

有栖川宮熾仁親王を総督とする東征軍もまた交戦の一つの山場として予想をこの険路に置いていた。当然、偵察の哨兵を先行させていたはずである。士卒の休憩はその展望を確かめるためであったろう。

三島に先立ち駿府城に官軍は前日に宿営している。三月五日（陽暦三月二十八日）のことだ。禄堂正盛という絵師により滞陣の模様が写されている。錦旗、馬標に菊花の紋章がきらめき、幾旒かの参謀幟などが見えるというものだ。徳川氏由緒のこの城地を占拠した官軍の気勢を手にとるように伺える絵柄だ。京を二月十五日（陽暦三月八日）に発進し、東海・東山・北陸の三道を分けて東進して旬日余りを経ているが、ここに至る間の各藩について使者を送り帰順を促し、恭順の誓紙をもとめ、出兵動員するなどの手順があってのことだ。緩慢に見えて実は破竹の進撃なのであった。

東征軍はこの駿府に総督府を置いたのである。幕臣山岡鐵太郎がこの地まで決死の急行をし、九日、西郷に面会し、とくに将軍徳川慶喜の処遇について寛恕の約束をとりつけた挿話はこの時である。

「待てっ」

一人の士卒が駆け寄って、大手を広げた。

背後にゆっくり歩み寄ってきた上官と覚しき精悍な男があって、鋭い視線を古宇田与九郎に向けた。

ばらばらっと官兵数名が駆け寄り、とり囲まれた。

「何用で何処に行くか、姓名を名乗られよ」

与九郎はこの際の言辞を選ばねばならない。

「わしは参謀の世良修蔵じゃ」

「こうだよくろうと申す」

世良の目から見て、当然ながら疲労で蹌踉とした駕籠の中の人物が異様であることを見逃せない。

「早駕籠とはただならぬ、なんの急用があってか、まずはいずれの家中か申されよ」

「豊前じゃ」

「豊前は何藩か申せ」

次第に語気が荒い。

「な、中津でござる」

「何用でいずれへ参る」

「――――」

「えぃ、はっきりせんかい」
世良が急に居丈高になった。いまこそ、それが官軍の姿勢だった。
「在府の藩公世継ぎの君をお迎えするためじゃ」
この際は事実を告げた方が得策とようやく悟った。
「世子を迎えてなんとする」
「府内の騒擾を避けてのご帰国を促し、老齢の藩公のもと藩論統一をはかり、恭順を表明せんためでござる」
藩主昌服は時に不惑、老齢とは言いがたい。この際の方便の部分もあったが、止むをえない。
「よぉーし、あいわかった、征討軍参謀、長州の世良を覚えておくがよい、通れ」
驕りの言葉の中に与し易さが覗かれた。
（官軍といっても、この程度か）
と思う一方では、
（たまたま下賤はこの男だけかも知れぬ、だが、この輩がいまは正義をかざしている、それが恐ろしい）
一地方の田舎侍としての偽りのない感想だった。

木挽橋を渡り木挽町、塩留橋近かに奥平大膳大夫の上屋敷はある。濱御殿がすぐ南に隣接する枢要に位置している。譜代十万石の格式をもって、それなりの広壮の構えであった。堀を隔てて東の近隣は尾張殿蔵屋敷だ。さらに中屋敷は鐵砲洲、明石橋を目の前にしていて、舟運の便が得られている。西本願寺に近く北東に位置する。
上屋敷との行き来は至近ゆえにきわめて便利であった。実はこの中屋敷が海路を選んだ世子脱出の拠点として役立つのであった。下屋敷だけが二本榎にあり、やや遠く家人の管理に任せ、君主はあまり利用していなかった。
江戸切絵図「京橋南 築地 鐵砲洲繪図」に今日の街区を重ねると、上屋敷は浜離宮の北に位置し、新橋演舞場や国立癌センター、中央卸売市場などに近く、中屋敷は聖路加病院に間近いあたりである。
世子奥平昌邁は伊予宇和島の藩主伊達宗城の三男として江戸に生まれ、幼名、義三郎と云ったが、嘉永四年生まれ、いまだ十八歳の若さである。文久三年に奥平家の養子に迎えられた人であった。江戸生まれゆえに生地に馴染み、あまり中津へは足を向けようとはしなかったのだ。江戸詰めの家老も伊達家から付き従った家臣らに対し、気づかいする傾きで、本人の不羈は大目に見られてきたあんばいに伺える。
「どうしても中津へ帰れと申すのか」
古宇田与九郎の説得は容易ではなかった。
「どうか、ご分別良きようになされませ、いまや、宗家の危機にござります。譜代のご家系ゆえ、この際の進退、去就についてはぜひとも大殿と親しくお話なされ、お家の大事を誤りなきよう、大殿ともどもお示し下さらねばなりませぬ」

「官軍を唱えるやからをそれほどに恐れ、気息を伺わねばならぬのか」
「いまや大勢でございまする、錦の御旗を奉じたものに抗するものはみな賊子、将軍家におかれても朝敵とされ、いまや征討の軍勢が津波の勢いで箱根を、すでに越えたでありましょう、順逆を論じる時ではありませぬ」
膝詰め寄せ、声涙下るばかりの説得だった。
郷国から万里を早駕籠で駆けつけてきた古宇田の汗と埃をにじませた必至の姿に昌邁も粗略をひかえねばならぬ。
「よい、わかった、だが、この期に中津へ帰ってなんとする、余にかかわりなく藩論はすでにいずれか結論を得ているのではないか、いまさら余のあずかる必要があろうか、お父上が専決なされればよいのではないか」
「さればその点にござります、若殿と一致の藩論であることがこの際は肝要でございます、はばかりながら、お家のこの後にかかわり、先途を誤ることがあってはなりませぬ、ご家紋の軍配団扇に傷がつきまする、祖霊に対しましても申し訳立ちませぬ、大殿にとり若君のご同心こそは千万軍のお味方になるはず、さように心得ます」
「さればと言うて、そちの見聞せる話によれば、官軍を称する軍勢が東進して、ほどなくこの地に迫る勢いと聞くではないか、余も先見にそれを案じないではなかった、いまさらどうするのじゃ」
「されば、没義道のやからでございますればおん身に万一のことがあってはなりませぬ、手前に一計がござりまする、と申しますのは、こちらへ参るについて「御軍艦操練所」が当のお屋敷に近きを気づきましての手だてにござります」
「どういう手だてであろうか」
幼年、わずか六歳で養子にむかえられた昌邁は江戸屋敷にあって、きわめて鷹揚に少年期を過ごしてきた。
かれの生家は慶長十三年、仙台の伊達政宗の長子秀宗の入封をもって藩祖とする名門、伊予宇和島の伊達家である。（仙台の宗家は寛永十三年政宗七十歳の没後、次子忠宗が襲封）奥平家とは異なるれっきとした外様である。実家の父宗城は幕末四賢侯の一人と言われた人であった。昌邁はその血を享け、凡愚であろうはずがない。
どうやら、古宇田与九郎の説得は効を奏したようであった。
ただし、脱出は昌邁ただ一人、単身でなければならない。上屋敷の藩士、とりわけ宇和島からの随臣らをも出し抜いた隠密が必要であった。
「ひそかに、お忍びで中屋敷へお移りくだされませ、拙者そちらまでお供つかまつり、その後の段取りを良きように計らいまする」
「なんの旅仕度もせず、身ひとつでか」

いみじくも先覚者にして一世の教育家の福沢は藩の下級武士の家に生まれた人であった。

さらに、安政五年の十月の項では江戸築地の中津藩中屋敷内に藩命により蘭学塾をつくる。と見える。

この後の項に注目が必要となろう、下級貧困の家に生まれ、のちに『門閥主義は親の敵でござる』と「福翁自伝」に記すかれだが、英才を買われて登用をうけている事実である。そして、幼君昌邁もまた江戸にあってそうした当時先進の教養と無縁ではなかったことを知る必要がありそうである。

一方、元治元年十一月の第一次、慶応二年第二次の両度の長州征討戦ではともに藩主昌服が九州諸藩と同列とはいえ、出兵している事実を藩史の別項にひろえる。このことはいま藩が恭順の立場をとるとしても微妙を免れないと言えるのではなかろうか。

さらに、藩士の間には上級と下級の截然とした門閥があり、昇進はもちろん、婚姻すら認められないという隔てがあった。諭吉に（門閥は親の敵でござる）と言わしめた事情である。「天ハ人ノ上ニ人ヲ造ラズ、人ノ下ニ人ヲ造ラズ」という明治五年に諭吉が『学問のススメ』の巻頭で道破した言葉はあまりにも有名である。

諭吉の『舊藩情』という明治十年発兌の論叢では

（略）およそ千五百名。其の身分役名を精密に分かてば百餘級の多きに至れども、之を大別して二等に

「恐れながらそのように」

「失踪同然ではないか、なぜそうせねばならぬ」

「ご時世の急務に応ずるためでございます、ご当方の家中にも、とやこう面倒をかけませぬよう、この際は避けたいのでございます、こちらのご家老さまにはその点お含みをいただけるよう、とくにお願いしてあります、あとあとご理解をかならず頂けるでありましょう」

奥村大膳大夫中屋敷の裏手には船着きがある。ほど近くの明石橋を潜れば外洋に出られる。主従二人を乗せた猪牙船が夜陰滑り出て、「御軍艦操練所」の岸壁へ、櫓を操る古宇田は船手にいたことがあり漕ぎ慣れていた。

「ここでしばらくお待ちをいただきます、お向かいのお屋敷は一橋さまでございます、将軍さまの伏見に敗れてのお帰りは多分ここで上陸なされたでありましょう、間もなく手筈の蒸気貨物船が参ります、フランスの貿易船でございます、武器、弾薬を運びますので、公認のご公儀御用船と申せましょう」

こともなく与九郎はそう言った。

やがて、外国船が姿を現し、エンジン音を停止して、静かに近づいてきた。

中津藩史を繙くと、天保五年の項に福沢諭吉、一月十日に中津藩大坂蔵屋敷に生まれる。とある。

分かつ可し。即ち上等は儒者、医師、小姓組より大臣に至り、下等は祐筆、中小姓、供小姓、小役人格より足軽帯刀の者に至り、其数の割合、上等は下等の三分の一なり。

と論及し、続いて門閥の牢固とした実態を怨念も露わに詳細を極め叙述の筆を進めている。明治十年の後年におよんでの論叢である。その生涯、骨髄に徹した武家社会の歪みの詳細を激しく告発する一篇をなしている。

「この船は仏国籍と聞いたが、どういう手ずるがあってか、福沢先生はむしろこれからは英吉利の時代じゃと言うておられた、塾の方も語学をそちらに重きを置かれるようにお考えのようじゃ、ご時勢じゃのう」

「福沢先生とおっしゃると、ああ、あの中屋敷の方でお見かけしたあのお方ですか、お儒者かとお見受けしましたが、そうでしたか、外国の学者さまでしたか」

素朴な古宇田にはそれ以上の会話は苦手になりそうだから口を噤んだ。身分違いなのだ。若者の自らな気品に気押される案配だった。仏国籍の船は幕府の御軍艦操練所の方の斡旋だった。

（さすがお血筋じゃな、ちと苦手だわい、二人だけの奇妙な旅路、これから幾日かかるやら、気づまりだな）

船足の遅いこの時代のことだ。観音崎を出離れるまでにはや白じら明けを迎えていた。

操舵室の方から、時折、聞こえてくる外国語も耳慣れず落ち着けない。船底に横たわって眠れないままの朝だった。

船は神戸へ向けて進路をとっていた。波蹴る潮路は穏やかな内海添いだが、陸地を指呼できる距離ではない。わずかに富士と思える山容が春霞みの彼方に望めたが、船底の窓は波しぶきを浴びて、瞬時に消し去られた。

「ご貴殿はどうお考えかな、ご公儀の威光はもはや還らぬのではないか、覆水の例え、返すに由もないようにわたしには思える」

ポツリと昌邁が囁きかけた。

「いかがなものですかな、下々にはとんと先が見えませぬ、藩中は鼎の沸くようなありさま、しかしながら、たがいにうかとは本音は申せません、ひとまずは恭順とは殿のご方針がお決まりと、布達がございましたが、その先はいかんとも明らかではございません、若殿のお帰りを待たれるのも、そのへんのことがあってのことと思いまする」

「烏合の鳴きを合わせるだけではのう、しょせん埒もなかろう、さればとて、余のごとき若いものの手に負えることではあるまい」

藩中の現状を指して烏合という例えなら、この若い貴公子の洞察は鋭すぎる。与九郎はそれをどううけとったか、かれなりの主張をやめない。

「さようなことはありませぬ、はばかりながら、若殿は宗家宇和島の伊達様のお血筋、あえて申しますなら譜代の殿ばらとは異なりましょう」

譜代の臣としての苦衷の立場をそんな言葉にした。

江戸へ早駕籠で駆けて五日、心身困憊を招いて五十三駅、四九二kmを走破、折り返しては船旅二日、スリルに満ち、過酷なトライアスロンに耐えて古宇田与九郎は家老奥村の指示にしたがい大坂にようやく着いた。

二人を待ちうけて、家老奥村与四郎はまずは若い世子の前にして拝詭(はいき)せんばかりの慇懃をつくし、

「ご無事、なによりのこと、祝着に存じまする」

と額に汗をにじませ、恐懼の姿勢を示すのを古宇田与九郎は、威厳の老家老の不思議な姿として見ていた。

次いで、古宇田に対しては、

「ご苦労であった、いや、重畳(ちょうじょう)、重畳、よくぞ使命を果たしてくれた、まずは中津へ帰り、疲れを癒し、いっそうの忠勤を励みくれよ、ご苦労であったな」

「は、恐れ入りました、…、ありがたき幸せ」

家老の奥村から見れば、古宇田は使いよい配下以外には思われていない。

しかし、古宇田はそれをどううけとったものか、別段意に介さぬ様子であった。封建武家社会に安んじ、露ほども懐疑を知らぬ姿である。命ぜられたまま、一礼すると、妻子の待つ豊前へと旅立っていった。このトライアスロン選手の淡白さ加減は理解に苦しむ始末に終っている。

それからの家老奥村与四郎は戊辰の政情困難に翻弄され、藩政の重責を担い老体を鞭打つ時を迎える。

ここで、さきの「舊藩情」を補う資料を他に求め、この藩の身分階層を一瞥すると、

・中津藩では七族五老、十二家を混一して、大身衆と称し、この格中より五人または六人が月番をもって家老・年寄に補任される慣いがあった。藩士の第一級はこの大身・大身並・寄合でこれを三格と呼んでいた。

与四郎の奥村家は右の七族中の一で、とくに重きをなしていた。

・第二級は供番・家中・小姓の三格で、この格を騎士あるいは平士という。供番は大身に次ぎ用人を勤役できるが家中・小姓は諸奉行・目付・元締を最高役とし、用人・奏者番・物頭の諸役を勤役できない。
・第三級は儒者・医師・祐筆、上士に準ず。
・第四級の三格を徒士または下士と称す。
・第五級は組外・組・帯刀、これを卒と称す。

（中津藩には郷士の制度はなかった。）

息詰まる階級差別である。諭吉の慨嘆がよくわかる。

そして、こうした差別はひとり中津藩に限られたものではなかった。

中津藩の大坂蔵屋敷は享保五年に堂島新地に設置されていたが、家老奥村を中心とした藩士らはここを拠点として、朝廷へ哀訴し、将軍慶喜の助命を嘆願をするとともに、三月九日には藩主に代わり世子昌邁の大坂警衛を願い出ている。この間、一方では島津久光名義の勤王勧告書をもった薩摩藩使者の園田彦佐衛門、久保新次郎が中津を訪れたため、藩主昌服が勤王誓詞を提出し、薩摩藩より朝廷に上奏される。この二名の薩摩の使者は杵築(きつき)藩(譜代)、日出(ひじ)藩(譜代)、府内藩(譜代)、佐伯藩(外様)、高鍋(たかなべ)藩(外様)、飫肥(おび)藩(外様)諸藩歴訪の史実を残している。薩藩の陽動作戦は甚だ活発であった。

やがて、中津藩は出兵を促され、三島警備を命じられたのを手はじめに、後、甲州に転進して黒駒に滞陣するが、石和出陣を命じられて、掛川藩兵と合流している。

ところが、五月七日に至り藩主昌服が突如として隠居し、昌邁の襲封という事情を迎える。

「余は疲れた、あとを頼む、若いおん身なら耐えるであろう」

養嗣子に遠慮はあったが、長州征討戦では一二五〇余の藩兵を率い、いままた東征軍に各方面合わせて二五〇〇の藩士を統率し、総督府忽意(しい)の下令のまま二転、三転させられ、心労が積もっての退隠決意だった。

六月には尾張、和歌山藩兵とともに白川口へ、次いでは今市警備を命じられる。さらに今治、人吉藩兵とともに日光警備、八月二十一日になると、広島、人吉藩とともに藤原口より会津進攻を命じられるが、日光警備の命もあるため、部隊を二分して二十四日に出陣準備を完了させ、二十七日より白川口へ進攻した。組頭猪飼太兵衛の率いる一〇〇余名の足軽隊で、隊長の山崎直衛ら士分にある二十数名は日光に残留した。つまり軽格のみを死地に向かわしめたわけで、足軽隊は山崎らを非難しながら出陣していったという。

九月　四日、米沢藩官軍に降る。
九月　八日、慶応より明治に改元、一世一元の制を定む。
九月　十五日、仙台藩官軍に降る。
九月二十二日、会津藩降伏。奥羽、北越諸藩前後して皆降を請う。

こうした情況のもと、九月二十日、天皇京都を発輦、十月十三日江戸に着御。江戸城を皇居となし東京城と改称。萬機親裁の詔を下す。（天皇は十二月八日いったん京都へ還幸、翌明治二年三月七日、再び東京行幸、京都府下に還幸延期を告諭、京都の人心への配慮をし、東京

を京都と並ぶ都にするという弁疎を行っている。）

十三石二人扶持という微禄の下士の出身、「舊藩情」に中津藩体制のセクショナリズムを慷慨した福沢諭吉であったが、当代の藩主として襲封した奥平昌邁とは不思議な投合をしていた事実を物語らなければならない。

江戸にあった若い君主は中屋敷に「慶応義塾」の萌芽というべき蘭学塾の誕生に際会しており、その時代を通して諭吉とはやはり無関係ではなかった。

函館五稜郭に敗れ、捕らえられた榎本武揚の助命運動をした諭吉だが、その榎本が後には新政府の高官に用いられて得々とし、旧主家を売ったことを手柄にして明治政府に地位を得ている勝安芳の輩にひどく不快感を抱いて、「痩せ我慢の説」を草したかれ自身は慶応四年の六月新政府への出仕の命をうけながら病と称して辞退、その後も、十一月、翌明治二年一月の再三にわたったが、いずれも固辞を貫いている。

万延元年、幕府軍艦奉行木村摂津守の従僕として幕艦咸臨丸に搭乗、渡米の一行に加わり、さらに文久二年には遣欧使節にも随行、やがて外国奉行翻訳方を命ぜられ幕臣の身分にあった。このころの諭吉は奥村家中屋敷内の長屋に新婚の住居を与えられていたのである。

そうしたかれは新政府への出仕を固辞すると同時に、明治二年八月の中ごろには幕臣を辞して、帰農、一介の平民となる意を決し、翌二年には中津藩の扶持も辞退するのだ。

明治二年には版籍奉還が行われる。明治四年一月、昌邁は東京留学を願い許可されている。時勢への先見によるものだ。七月廃藩置県、藩知事を免官。十二月、こんどは米国へ留学するため東京を出発している。

明治五年七月の諭吉の年譜に（京阪神を経て中津に旅行し、旧藩主の一家とともに七月帰京）と見える。外遊を了えた昌邁が一家をあげて旧下屋敷、芝の白金二本榎に定住した事情であろうし、両者の私淑を物語る。

明治十一年、東京府政下に十五区六郡の構成とともに昌邁、諭吉ともに芝区から最初の府議会議員に選ばれ、諭吉はわずか一か月で辞しているが、昌邁は同十四年芝区長になり、十五年辞職。政界無縁に思われた諭吉が旧主との結縁を重しとした義理堅さが偲ばれ、さらには昌邁の資質をも伺える事実だ。中津藩最後の君主奥村昌邁は明治十七年十一月二十六日に三十四歳で没している。

法号淳徳院、南品川東海禅寺中清光院に葬られる。戊辰戦争という騒擾の渦中、心を労した早世と言える。

法号観光院、同所に葬られる先代昌服は天保元年生まれで明治三十七年に没し、行年七十八歳はよほど長生きであった。中津藩の勤王トライアスロンの最終走者は意外にも奥平大膳大夫昌服であった。

（十二・六・二十一）



体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと（一）

千坂精一

決死隊

戦術についての専門知識があるわけではないが、合戦に明け暮れた戦国時代を掘り起こしているので、だいたいの見当はつく。

戦闘は、攻勢に出たときは弾みがつくから予想した以上の成果があがり、軍団の犠牲も比較的寡くてすむが、いったん守勢に立つと士気が低下して戦意喪失するから、完膚なきまでに叩きのめされて被害甚大になってしまう。

つまり、わかりきったことだが、戦闘は攻勢に出ないかぎり勝ち目がないということである。

乱世の生き残り競争を勝ち抜いた武将たちは、かならずしも圧倒的強者ばかりではなかった。

形勢不利と見て取れば、いかに挑発されようとも受けて立たず、知恵を絞って和睦に持ち込み、振り掛かる火の粉を躱した。

世に名将と謳われた人たちは、みなよく『孫子』を学び、心得ていて、

彼を知りて己れを知れば、百戦殆うからず。
彼を知らずして己れを知れば、一勝一負す。
彼を知らず己れを知らざれば、戦う毎に必ず殆うし。

を実戦に活用し、勝ち抜いていった。

ところで、合戦のなかでもっとも悲劇的なのは篭城戦である。

後詰との連携で敵軍を引き付けておいて狭撃する策ならばともかく、孤立無援のままではまったく勝算はない。

そして、そんな苦境に追い込まれたそのとき、起死回生の活路を開く決死隊が登場することが多い。

幕末戊辰戦争のときの会津白虎隊、二本松少年隊などがそれである。

彼らは、いずれも十代の少年たちだったことから、悲劇の主人公（ヒーロー）になった。

決死隊は、近代戦においても活用された。

明治三十七年（一九〇四）の日露戦争のとき、旅順港内にいるロシア太平洋艦隊を封じ込めるため、石やセメントを積んだ老朽船を港口に沈める任務を帯びた閉塞隊がそれであった。

二月二十三日の閉塞実施に失敗して、三月二十七日に再度決行したとき、福井丸を担当した杉野一等兵曹は、爆薬を点火するため船艙におりたところを魚雷に見舞われて戦死した。

指揮官廣瀬武夫少佐は、任務を終えた隊員たちを端舟（ボート）に移乗させるときになって、杉野がいないことに気づいた。

廣瀬は、福井丸にとって返し、杉野の名を叫びながら三たび船内を隈なく捜し回ったが見当たらず、海水が甲板を洗いはじめて沈没寸前になったので、断腸の思いで端舟に乗り移り、収容する水雷艇に向かう途中不運にも被弾して斃れた。

この廣瀬の部下思いの美談が後世に伝えられ、戦前まではＪＲ中央線旧萬世橋駅前（現交通博物館隣り）広場に二人の銅像があった。

また、陸軍においても、昭和七年（一九三二）の第一次上海（シャンハイ）事変のとき、二月二十二日払暁上海北方廟行鎮（びょうこうちん）での十九路軍（じゅうくろぐん）との激戦で、堅固なトーチカ（コンクリートで構築した内部に銃火器を備えた防御陣地）攻略の総攻撃をかけるおりに、工兵隊の作江伊之助、北川丞（たすく）、江下（え）武次（した）の三人の一等兵が長い円筒形の爆薬管を抱えて突撃し、鉄条網（有刺鉄線を幾重にも張り巡らして電流を通してある柵）に体当たりして突破口をひらいた。

そのことが『爆弾三勇士』と崇（あが）められて、長州藩士合葬碑のある芝愛宕下青松寺に、突撃する三勇士の像が安置された。

決死行の例として、戦前の教科書に掲載されていた二つの話をあげたが、つまり、決死隊というのは、困難な局面を打開するために結成される死を覚悟した特別編成隊のことをいうのだが、いかに危険度は高くても、九死に一生を得られる生還の余地はあった。

この旅順港口閉塞のときも、作業は明け方が最適だが、それでは発見されやすく生還が期し難いことを考慮して、深夜の決行にしたし、また、前述したように収容する水雷艇が用意されていて、第一回は全員、第二回も戦死した廣瀬、杉野以外を無事収容している。

爆弾三勇士については、果たして隊長が体当たりまで強制したのかどうか、寡聞にして知らない。

真珠湾とマレー沖

ところが、太平洋戦争開戦劈頭の昭和十六年（一九四一）十二月八日、ハワイ諸島のオアフ島真珠湾（パールハーバー）に碇泊しているアメリカ太平洋艦隊に挺身攻撃をかけた、岩佐直治大尉（海兵六十五期）を指揮官とする五隻の二人乗り特殊潜航艇（甲標的）による決死隊あたりから、様子がおかしくなってきた。

この特殊潜航艇は、母艦の大型潜水艦に一隻ずつ背負われて発進地点まで運ばれ、そこから自力で潜行して目標の敵艦に近づき、両脇に抱いた直径五十センチほどの魚雷を発射して撃沈する目的で建造されたのだが、山本五十六連合艦隊司令長官は、はじめ、

「帰投の望みなき攻撃は許さぬ」

といって許可しなかった。

そこで、この特殊潜航艇を収容する母艦をオアフ島とハワイ島の中間にあるラナイ島沖に待機させることでようやく出撃許可が出たのだが、母艦の安全は保証されておらず、所詮気休めの机上計画にすぎなかった。

当時の記録によれば、特殊潜航艇五隻は開戦前夜に湾内潜入を果たしていたが、飛行隊の急襲に先んじて攻撃を仕掛けてはならぬ、と固く命ぜられていたという。

だが、水深わずか十メートルほどの浅い湾内にじっと潜んでいて、空爆がはじまれば、友軍機の魚雷を受ける危険はあったし、狭い湾口に防御網を張られたら万事休すで、外海へ脱出することはできなくなる。

事実、一隻は座礁して艇長酒巻少尉が捕虜になったし、他の四隻はついに還（かえ）らなかった。

「非常の際に当たって生命を懸けるが、生還もあり得る」のが決死行であって、これまでの日本海軍の用兵術は、つねに、

「九死に一生を得るを限度とする」

ことを念頭においてきたはずであった。

その用兵の不文律が、太平洋戦争では緒戦から軽視されてしまい、やがて、一方的に押し捲られて敗色濃厚になると、起死回生を焦る首脳部は、到底作戦とはいえぬ途轍もない計画を立てて、それを強行するために、

「人命を、鴻毛の軽きにおく」

と断ずるようになってゆく。

それはさておき。

南雲忠一中将（海兵三十六期）率いる第一航空艦隊（一航艦）の各飛行機が、オアフ島北方上空から真珠湾に侵攻したとき、碇泊していた訓練中のアメリカ太平洋艦隊の艦船は、戦艦八隻、甲巡洋艦一隻、乙巡洋艦十隻であった。

そのうち、戦艦オクラホマ、アリゾナ、カルフォルニア、ウエストバージニア、ネバタの五隻を撃沈、三隻を撃破、巡洋艦四隻と小型艦船数隻を撃破してほぼ潰滅させたので、赫々たる戦果として大々的に報道されたが、肝心要の航空母艦（空母）群は、このときミッドウエー島やウエーク島方面の防備強化のため、飛行隊増援輸送に出動していて一隻もいなかった。

情報不足で空母群を撃滅できなかったということは、奇襲が成功しなかったことを意味していた。

というのは、日本海々戦からわずか三十年あまりのあいだに、各国の軍事力は急速に進歩していて、海戦といえどももはや大艦巨砲の艦隊決戦ではなく、航空機主力の時代に転換しつつあったのだ。

山本長官は、そのことを充分認識していたからこそ、先制攻撃をかけるについて、航空機主力の作戦を採ったのだろう。

そう考えると、たとえ戦艦を何隻撃沈しようとも、無用の長物を葬ったにすぎなかったことになる。

アメリカ側は、緒戦で空爆攻撃を受けて以後、逸早く空母中心の戦略構想に切り替えたようだが、日本側はこの山本作戦成功後も、まだ首脳たちのあいだでは、

「戦艦は飛行機に優る」

とする拘りが主流を占めていたという。

だから、開戦三日目の十日に、イギリス東洋艦隊の主力戦艦二隻をマレー半島沖で捕捉して、プリンス・オブ・ウエールズとレパレス、それに駆逐艦三隻を撃沈したときも、得意気に報道したのだった。

インド洋

ともあれ、この真珠湾奇襲とマレー沖海戦の一方的勝利によって、戦意昂揚に弾みがついた。

年が明けて、昭和十七年一月中旬、インド洋に派遣されることになった第二航空戦隊（二航戦）の空母蒼龍と飛龍は、猛訓練中の所属飛行隊を収容して呉（広島県）を出航すると、二月中旬パラオ島に到着した。

そこで、カロリン諸島のトラック、ニューブリテン島のラバウル、ニューアイルランド島のカビエンなどを制圧してきた第一航空戦隊（一航戦）の空母赤城、加賀、第五航空戦隊（五航戦）の空母翔鶴、瑞鶴と合流して、真珠湾以来の一航艦南雲機動部隊が勢揃いした。

ただちに南下を開始して、行き掛けの駄賃に北オーストラリア随一の軍港ダーウインを空襲したが、駆逐艦、輸送船、商船ぐらいしか碇泊しておらず、たいした戦果は得られなかった。

また、下旬にはジャワ島沖で敵艦船と遭遇したが、これも駆逐艦、輸送船、貨物船ばかりだったので、飛行隊は出撃せず、戦艦の三十六センチ主砲と巡洋艦の二十セ

ンチ砲で撃沈した。

こうして、南雲機動部隊は四月上旬スマトラ島沿いに進んで、目指すインド洋に入った。

インド洋掃蕩作戦は、戦艦金剛を旗艦とする第二艦隊司令長官近藤信竹中将（海兵三十五期）がその任に当たっていて、南雲機動部隊は支援を命ぜられ、遠征してきたのだった。

各空母所属の艦上爆撃機（艦爆）隊は、真珠湾以来これまで、陸上施設同様動かぬ碇泊艦船ばかりの攻撃だったので物足りなかったが、このインド洋作戦ではじめて荒波を蹴立てて航行するイギリス東洋艦隊を捉えた。

艦爆隊は、ただちに急降下して躍り懸かり、主力巡洋艦コンウォール、ドーセットシャーを撃沈し、さらに、セイロン島北東部のトリンコマリー軍港を出て、南下遁走中の空母ハーミスをはじめ駆逐艦三隻と大型商船を相次いで撃沈すると、とって返してトリンコマリーやコロンボの陸上施設を攻撃し、所期の目的を達した。

珊瑚海

インド洋作戦を終えて、一航戦の赤城と加賀、二航戦の蒼龍と飛龍の四隻は内地へ帰還したが、五航戦の瑞鶴と翔鶴はアメリカとオーストラリアを分断するニューギニア島ポートモレスビー上陸作戦の支援を命ぜられて、五月上旬珊瑚海に進出した。

余談だが、珊瑚海というのは、オーストラリア北東部とニューギニア、ソロモン、バヌアツ、ニューカレドニアに囲まれた海域で、大堡礁が蜿蜒とつづいているところからそう名付けられたという。

エメラルド・グリーンの海と、珊瑚礁の景観を眺めていると、こんな穏やかな美しい別天地で残酷な戦闘があったことが信じられないそうである。

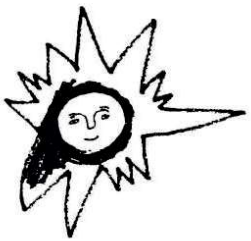
が、事実この珊瑚海で、分断作戦を探知して反攻に出てきたアメリカ艦隊と、機動部隊同士による初めての戦闘が展開されたのだ。

緒戦は双方ともに主力艦隊を発見できず、駆逐艦一隻と油槽船一隻を撃沈したものの、こちらも潜水母艦剣埼を改造した軽空母祥鳳が魚雷を受けて航行不能に陥った程度の小競り合いであった。

だが、やがて空母対空母の戦闘になり、レキシントンを撃沈し、ヨークタウンに軽微ながら損傷を負わせる戦果を挙げたが、こちらも翔鶴が魚雷を受けて火災を起こし、飛行機の発着が不能になった。

このやや優勢で終わった珊瑚海々戦は、一カ月後に主力空母群同士が激突するミッドウエー海戦の前哨戦であった。

（つづく）



老春繚乱
――幻聴――

三戸岡道夫

花畑勝次郎はその名の通り、勝手気ままに人生を生き、元気そのものである。身体も丈夫で、八十歳になるこの年まで、病気らしい病気をしたこともない。たえず病気に打ち勝ってきた。いや、病気の方が勝次郎を敬遠したといった方が、よかったかもしれない。

しかし、さすがに八十歳ともなると寄る年波には勝てず、近頃は耳が少し遠くなってきた。仕方のないことである。

ところが最近は補聴器という便利なものが出来ているので、買ってきて耳に当てると、嘘のようによく聞えた。いや、むしろ以前よりもよく聞えるくらいである。

（わしはかえって若返ったぞ）

勝次郎はわくわくするような気持になるのだった。

しかし半年もすると、すぐその補聴器にも限度がきて、次第に聞えが悪くなってしまった。そこで次々にボリュームを上げて、限度いっぱいにまで上げてしまうともう終りで、ついに聞えなくなってしまった。

（ちぇっ！　買ったばかりなのに、もう故障かい！）

と原因を器具のせいにして、新しく補聴器を買いかえてみたのだが、大した効果は現れなかった。

そんなことを二、三回くり返すうちに、勝次郎の聴力は急速に衰えて、やがて、まったく聞えなくなってしまった。これまでがあまりに健全であったので、衰え出すと、かえってそのピッチが早いのかもしれなかった。

（音がまったく聞えないというのは、不思議な世界だわい）

と、勝次郎ははじめての経験に驚いた。

眼の前がまるで無声映画を見ているような感じ、音量をゼロにしたテレビの画面を見ているようで、眼には見えていても音が聞えないと、現実の中にいるような気がしないのだった。それは、現実を、別の世界から覗いているような感じとでもいえばよかろうか。

しかしそんな状態がしばらくつづくと、それはそれなりに落着いてきて、勝次郎はあたかも深海の底に棲んでいるような気分になるのだった。

深海の底は、何の音も聞えない。

シーンとしている。

無限の静寂の世界である。

いや、その静けさというものは、静寂とか、シーンとかいうような生やさしいものではなくて、『音のない異界』へ自分だけが封じこめられてしまったような、異様で、凄絶な孤独な世界なのだった。

勝次郎の耳が聞えなくなると、妻の八重とのコミュニケーションは筆談に移っていった。筆談といっても、勝次郎の方は勝手に喋る。八重の方だけが紙に書く、いわば片道筆談とでもいうものだった。

その筆談をスムーズに進めるために、家の中には、至るところにメモ用紙とサインペンが置かれていた。

しかし、深海の底は何も音がしないといっても、まったく音がしないわけではなかった。じっと耳を澄していると、海底の奥の方から、何やら音響のようなものが聞こえてくるのである。最初、勝次郎はそれは気のせいだと思った。あるいは耳鳴りの一種なのかもしれない。

が、その音は、気のせいでも、耳鳴りでもなくて、次第にはっきりとその輪郭を現わし、人の声となって勝次郎に聞こえてくるのである。

ある日、その海底音に耳を澄ませていると、

「ごめんください、勝次郎さんはおりますか」

そうはっきり聞えたのである。それはまぎれもなく、親友の友川昌平の声だった。勝次郎は妻の八重へ、

「おい、玄関にお客さんが来ているよ」

すると八重は怪訝な顔を勝次郎の方にむけて、

（誰も来ていませんよ）

とメモに書いて勝次郎に渡した。

「いや、来ている、昌平だ。はやく玄関を見てこい。はやくしないと、帰ってしまう」

勝次郎のすさまじい権幕に、八重は腰を上げて玄関へ出てみたが、人の影はなかった。

（やっぱり誰も来ていませんよ）

八重はそうメモに書く代わりに、右手を胸の前で左右に振ったが、

「いや、そんなことはない。わしはたしかに昌平の声を聞いたのだ。お前がぐずぐずしているから、帰ってしまったのだ」

勝次郎は腹だたしげにそう言うと、玄関へとび出し、ドアを開けて外を見た。しかしそこには人の姿はおろか、人の来た気配すらなかった。

「おかしいなあ。たしかに昌平の声が聞えたのに…」

勝次郎はぶつぶつ言いながら部屋へ戻ったが、八重は、

「気のせいですよ、それともお父さん、ボケたのかし

ら」
と投げつけるように言った。が、もちろんそれは勝次郎の耳へは聞えなかった。
そんなことが二、三回つづくと、八重のほうは慣れてしまって、
「また、例のくせが始まった」
と、それほどまじめに対応しなくなった。
しかし、しばらくして勝次郎が茶の間で架空の人間と会話をしはじめるようになると、
「やっぱりボケが始ったんだわ」
と、八重は警戒するようになった。
しかし八重にとっては架空の人間でも、勝次郎にとっては架空の人間ではなかった。茶の間でみんながにぎやかに話していようと、テレビががんがん鳴っていようと、勝次郎だけは音のない深海の底にいるのである。その海底から、声がはっきりと聞えてくるのである。
（勝次郎さんはいつまでも元気だねえ）
すると勝次郎は、
「うん、元気だ。でも耳がもう駄目だね」
（だって、よく聞いているじゃないか）
「うん、聞こえるのは、聞こえる。でも家のやつらの声は聞こえない。どうしてかな」
茶の間で突如、見えない人間と話し出す勝次郎の会話に、八重をはじめとする家族たちはギョッとして、ボケた勝次郎の顔を見るのだった。
勝次郎が海底から聞く声を、妻の八重は、
「ボケが始った幻聴ですよ」
と言った。しかし幻聴であろうと、何であろうと、勝次郎の聴覚には、はっきりと聞えてくるのだから仕方がなかった。発音も明瞭なら、意味も明確に聞きとれる。普通の人間と喋っているのと、何ら変らないのである。
こうしていつのまにか勝次郎の幻聴との対話がはじまったのである。それは周囲の人から見れば架空の人間との会話であり、ボケ会話であったが、勝次郎にとっては本当の会話なのだった。
最初、幻聴の相手は勝次郎の友人であったり、仕事上の付合いの人達だったりしたが、やがてその会話の中に、勝次郎のまったく知らない人間の声が混るようになった。
（はて、誰の声だろう）
考えてみてもわからなかった。それは勝次郎のまったく知らない声だった。
しかし深海の底から聞えてくるその話し声をよく聞いていると、なにか大昔のことを話しているような内容だった。その会話をじっと聞いていると、
（今年の稲の実り具合はどうだ）
とか、
（来年はもっと荒地を開墾して、田圃をふやさなくてはならない）
などと話している。それは勝次郎の先祖の人達の話し声なのだった。勝次郎の先祖は、どうやら農業に従事していたらしい。
すると突然、会話のボリュームが一段と高くなって、
（おい、勝次郎よ！）
と呼びかけてきたではないか。勝次郎は、他人の会話を盗み聞きしていた者が、不意に声を掛けられたように驚いて、
「は、はっ…」
すっ頓狂な声をあげた。
（勝次郎よ、お前も遊んでいないで、すこしは荒地を開墾しろ）
「は、はい…」
勝次郎は海底へむかってうやうやしく頭を下げると、にわかに廊下から庭へとび出した。そして、
「鍬だ、鍬だ！」
と呼ぶと、物置から鍬を取り出し、やにわに庭のまん中を耕しはじめたのである。
驚いたのは妻の八重である。
「あら、おじいさん、どうしたの。そこは庭ですよ。耕すなら畑を耕してくださいよ」
「だまっていろ、ばばあ…」
勝次郎はもの凄い勢いで鍬を振り上げると、きれいに手入れの行き届いている庭を、盲滅法に耕していくのだった。下手に八重が止めようものなら、鍬の餌食になってしまいそうだった。
八重はその姿にあきれはてながら、
（またボケが進んだ）
とため息をついた。
人間は先祖から現在へ、血の流れによってつながっている。そして、その血の流れを通して、先祖の交わした会話が現在へ伝ってくるらしいのである。それを媒介するのがＤＮＡ、すなわち遺伝子である。
その先祖の会話は、普通の人間には聞こえないのだが、勝次郎のような耳の聞こえない人間には、遺伝子をクッションにして聞えてくるらしいのである。
そんな庭の耕作事件が二、三回つづくと、今度は別の会話が勝次郎のことろに聞えてくるようになった。
今度は、殺気立った声がとび込んできたかと思うと、遠くに法螺貝の音が聞こえ、
わ、わーっ
といった喚声が聞こえてきた。それはどうやら戦場からの声のようだった。
勝次郎の先祖は、その後、農業から武士に変ったらしい。そして今は、戦場に出ているらしいのである。その殺気立った声が一段と高くなると、

（おい、勝次郎、お前もぼやぼやしていないで、槍を持って戦うんだ！）

「はっ…、はい」

勝次郎はやにわに家の外へとび出した。そして、

「槍だ、槍だ…、槍はどこだ！」

鍬から槍に変わって、八重は驚いた。

「戦国時代じゃあるまいし、槍なんてありませんよ」

「ご先祖さまの命令じゃ。槍だ、槍だ！」

叫びながら勝次郎は裏庭へ走っていった。そして物干し竿を持ち出すと、

「おお、これぞ天下無双の名槍だ」

両手でしごくと、塀の一角をぐさりと突いたのである。

「あっ、おじいさん、困りますよ、そんなことをしては…」

八重は腰を抜かさんばかりに驚いて裏庭へ走ったが、狂ったような勝次郎の天下無双の槍は止らない。

塀を破り、家のはめ板を突き、廊下のガラスを叩き、

ガチャン

ガラスが割れて、四散した。

「助けて、おじいさんが狂った」

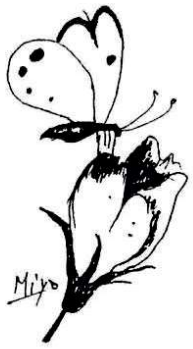
八重はわめいて家の中へ駆け込んだが、勝次郎は、

「わしは、ボケても、狂ってもいないぞ。わしはご先祖さまのために戦っているんだ。ほら、あの声が聞えないか」

勝次郎は幻聴の中で、子供の頃、棒や竹竿を持って、ちゃんばらごっこをした時のことを、夢のように思い浮かべているのだった。

気になる多産の帝妃たち

新井宏



歴史上には、気になる帝妃が多い。かって太宗の後宮にありながら、後にその子の高宗の後宮に入り、ついには病弱の高宗に代わって、中国で唯一の女帝として唐王朝に君臨した則天武后や、ドイツ人でありながら、ロシヤのピョートル三世に嫁ぎ、クーデターで夫を殺害して女帝となったエカテリーナ二世、あるいは天智天皇の皇女で、天武天皇の皇后となった持統天皇などにも興味をそそられるが、それにも増して、仲睦まじく一ダース以上の子供達を生み続けた帝妃達の存在が気になる。

ムガル帝国のシャー・ジャハーンの皇妃ムムターズと、神聖ローマ帝国のフランツ一世の帝妃マリア・テレジアである。もっともマリア・テレジアの場合は、フランツ一世を迎えて皇帝に据えたのであるから、実質的には女帝というべきであろうが、建前上は神聖ローマ帝国の皇帝はフランツ一世だから帝妃である。ムムターズの場合は、十九年に及ぶ結婚生活の間に十四人を出産し、マリア・テレジアの場合も、十九年間に十六人も出産している。

ムガル帝国は回教徒の国である。正妻を四人まで持てるし、後宮には多くの美女を住まわせることができる。皇帝たる者が、何もひとりの妃に子供を生み続けさせることもあるまいと思うのが率直な感想である。休む暇もなく孕みつづけた妃を十九年間も愛しつづけ、しかも末子出産の後で、産褥死してしまったムムターズのために、

巨額の費用と長い年月をかけて墓廟タージ・マハールを建設して葬っている。これほど愛された帝妃、いや女性が、かってあったであろうか。

一方、立場は変わるがマリア・テレジアも、人は良いが政治や軍事の才のない初恋のフランツを愛し続け、フランツ一世の死後は喪服を纏い一生を過ごした。こちらは、「戦いは他人にまかせておけ、幸せなオーストリアよ、汝は結婚せよ」のハップスブルク家であるから、子作りに励んだとしても不思議はないが、席の暖まる暇もなかったマリア・テレジアの活躍を知る我々にとっては、よくも十六人も産み続けることができたものだと感心してしまう。

夫の子を妻が産む。その当たり前のことでも、今の日本では一ダースを越えて生んだらニュースである。しかしギネスブックを見れば、二十七回の出産で、計六十九人を生んだロシアの農夫の妻を伝えている。十四人や十六人の出産で驚くのは、現代の感覚なのかも知れない。事実、多産の伝統を誇るハップスブルク家では、マリア・テレジアの十女マリア・カロリーネが、粗暴で無教養なナポリ王フェルナンドとの結婚生活に耐えながら、十六人の子をもうけているし、三男で後に皇帝になったレーオポルト二世も、その妃のスペイン王女マリア・ルドヴィカとの間に十六人の子をもうけている。奇しくも親子ともども十六人づつの子を産んだのは歴史のいたずらだったのであろうが、それにしても、日本の歴史上では、似たような例に出会わない。

なぜ彼らは、それほど深く愛し合えたのであろうか。筆者のささやかな人生経験からは不思議でならない。ムムターズとはどんな女性だったのだろうか。よほどの美人だったのであろうか。また、皇帝フランツ一世は、噂通りのちょっと軽薄でお人良しな男に過ぎなかったのだろうか。そんな疑問について、いくつか成書を読んでみた。そして勝手に得心した。

ムガル朝は、チムール六代孫で母方の祖もジンギスカンに連なる初代バーブルが、大宛の名で知られるフェルガーナを出て、一五二六年に征服地インドに立てた王朝である。ちなみに、ムガルとはモンゴルの意であるが、民族的にはトルコ系である。この同じ年に、オスマントルコはモハーチの戦いでハンガリーを破り、その後のハンガリー支配を確立している。トルコ民族の膨張期で、戦争には既に大砲や火縄銃が使われ始めている。

ムムターズは、ムガル朝のペルシャ系重臣ギャース・ベーグの孫娘で、一六一二年に十七歳で第四代ムガル皇帝ジャハーンギールの第三皇子シャー・ジャハーンと結婚している。その五年前にアーグラ城内で催された市で、シャー・ジャハーンがひと目惚れしたのだという。ところが、ちょうどその年、彼の父の皇帝ジャハーンギールもギャース・ベーグの娘メフルン・ニサー（のちの皇妃

ヌール・ジャハーン）に想いを寄せている。その時、ジャハーンギールは三十六歳で、既に何人もの皇妃と、数え切れないほどの妃妾をもっていたが、メフルン・ニサーの方も子持ちの寡婦で、すでに二十九歳であった。そしてメフルン・ニサーが実際に後宮に入るのは、その四年後すなわちムムターズが結婚する一年前である。

男女の仲は判らない。メフルン・ニサーはまたたく間に第一皇妃の座をかちえてヌール・ジャハーンの称号を贈られる。聡明で知性ゆたか、しかも才気煥発で、禁欲と清貧を旨とするイスラム信者でもあった彼女は、学者肌で政治や軍事をあまり得意としなかった皇帝に代わって、まもなく政務のほとんどを取り仕切るようになる。しかし、則天武后やエカテリーナとは異なって、ヌール・ジャハーンには一貫して皇帝に仕えるという立場をとり続ける賢さがあった。後世の画家が描いた肖像画では、肉感的というよりは、きわめて理知的で端正な顔だちである。伝えられるエピソードから見ても、皇帝との夫婦の絆は、シャー・ジャハンとムムターズの間のそれに劣らなかったようである。

シャー・ジャハーンの皇妃になるムムターズは、皇妃ヌール・ジャハーンの弟アーサフ・ハーンの娘である。後世の肖像画で見ると、ヌール・ジャハーンと実に良く似ていて、瞳が大きく、目元が涼しく、清楚で理知的である。それでいながら、その瞳を見つめていると、男心に訴えかけてくるような想いのする顔立ちである。ペルシャ系の美人一族だったのであろう。

ムムターズは結婚するとすぐに妊娠し、翌年から七年間、毎年連続して出産する。その間、まだ第三皇子であった武人の夫は、デカン地方やラージャスタ地方の攻略に東奔西走しているが、ムムターズも陣中に常に付き添っている。その後、夫シャー・ジャハーンが父帝の無理な指示に逆って反乱を起こし大敗して南に逃げた時も、それから再起してアーグラを攻め、再び大敗し南インドに逃げた時も、北上してブルハーンプル城を包囲しながら、追討軍の前に父帝に許しを請うた時も、そして再び父に犯意を抱きスィンド地方に向かった時も、更には父帝の死後の政争に勝ち、第五代の皇帝として叛乱を鎮圧した時も、ムムターズは常に行動を共にし、子供を産み続ける。最後となった第十四子の出産も宿営先のブルハーンプルであった。

灼熱の国である。その中にあって、いつも身重な体で、しかも逃げ回ることの多かった日々は、皇妃の生活とは、はるかに隔たったものであった。いわば夫婦である前に戦いの同志であったはずである。事実、第三皇子のシャー・ジャハーンが皇位につけたのも、父帝の死に際して、ムムターズの父アーサフ・ハーンが、機先を制する動きをとったお蔭であった。あるいは、ムムターズは天武天皇を助けて壬申の乱を勝ち抜いた持統天皇の立場に近く、

伯母ヌール・ジャハーンのような政治的な存在だったのかも知れない。

だから死に臨んで、喜びも悲しみもすべて分ち合った皇帝に「新しい皇妃を迎えないように」とか「ムムターズの名を伝える美しい墓廟を造るように」と頼めたのであろう。その時、皇帝は三十九歳であったが、悲しみで髯が真っ白になってしまったと伝えられる。そして再び皇妃を娶ることなく、主体工事だけでも二万人で四年間、完成まで二十二年を要して、白大理石のタージ・マハールを造る。工費は諸説あるが、一千万ルピーと云われる。一ルピーで八十キロの小麦が買えた時代である。

伝承によれば、アーグラ市郊外のヤムナー河畔に立つ白のタージ・マハールには、その対岸にシャー・ジャハーンの黒大理石の墓廟が立てられる予定だったという。

しかし、事実はちょっと異なる。シャー・ジャハーンは、ムムスターズの死後、さすがに新しく皇妃を迎えることはなかったが、房事は盛んで後宮の妾妃だけでは満足せず、廷臣の妻女まで手を出して顰蹙を買った。そして、その晩年には、ムムターズの同腹四人の皇子達の間で、凄惨な政権争いが起こり、戦いに勝った第三皇子オーラングゼーブによって、シャー・ジャハーンはアーグラ城内に幽閉されてしまった。

シャー・ジャハーンは、タージ・マハールの他にも、彼の名をつけた新都シャージャハーナーバードの建設を精力的に進めている。当然ながら、それらの建設には政治的な意味があったはずである。タージ・マハールの建設も妻への追慕という面は間違いないとしても、そこには何らかの政治的な背景があったに違いない。ムムターズの役割に、政治の臭いを感じ取る時に、やはり純愛物語とは違う世界があったことを知る。そして、それなら私にも理解できるような気がして来る。

さて、それではマリア・テレジアの場合はどうであったろうか。

マリア・テレジアはハップスブルク家の皇帝カール六世の長女として一七一七年に生まれている。彼女の生まれるちょっと前のヨーロッパは、スペインのハップスブルク家のカルロス二世が、嗣子を残さず他界したため、スペイン継承戦争の最中にあり、ヨーロッパの列強が利害をめぐって激しく争っていた。ちょうどその中で、今度は皇帝ヨーゼフ一世が天然痘のため嗣子を残さず急逝してしまった。そのため、スペイン継承戦争を戦っていた弟カールが急遽呼び戻され、カール六世として帝位につく。ところが、そのカール六世にもなかなか王子が恵まれない。

そうこうしている内に、カール六世の帝妃クリスティーヌは体調を崩して出産を望めなくなってしまった。ハップスブルク宗家で男系が絶たれることは、再び大規模な継承戦争を生むのが必然であった。当時のヨーロッパで

は、王室間の結婚が網のように巡らされ、有力者であれば誰にでも王位継承権が生ずる状況であった。それは婚姻により国を拡げてきたことで、領土が各地に散らばっているハップスブルク家にとっては崩壊を意味した。

その事態を憂いたカール六世は、領土の一部割譲という犠牲を払って、プラグマーティシェ・ザンクチオンという相続順位法をつくり、王女への王位継承権と領土の不分割相続を国の内外に認めさせる。それは長女マリア・テレジアへの継承を念頭に置いたもので、マリア・テレジアが七歳の時に公示され、十一歳の時に国際的な認知を受けた。

そうなるとマリア・テレジアが誰と結婚するかが大問題である。自薦他薦のひきもきならぬ中で、選ばれたのはロートリンゲンの公子である。ロートリンゲンは後年、独仏の領土争いが続くアルザス・ロレーヌ地方の一小国であったが、その選択の方がハップスブルク家の独立を守り易いとの判断があったのは間違いない。それにロートリンゲンは敵国フランスに国境を接していて、防衛上も好都合であった。

しかし、理由はそればかりではなかった。ハップスブルク家の首都ウイーンは、二度にわたってトルコの猛攻を受けているが、二度目の一六八三年、包囲されて落城寸前だった時に、ロートリンゲン公カールがポーランド王と共に救援に駆けつけて、トルコ軍を破り、逆に二世紀近くトルコの支配下にあったハンガリーをハップスブルク家のもとに取り戻してくれたことがあったからでもある。

最初は、ロートリンゲン公の長男が候補であったが、天然痘で夭折してしまい、次男のフランツが内定する。その頃、マリア・テレジアより九つ年上のフランツは、父の跡を継いで既にロートリンゲン公であった。当時のフランツは、何事にもとらわれることのない無邪気で快活な若者で、ウィーンに招かれた時には、皇帝をはじめとしてその一家の人々からすっかり気に入られたという。肖像画を見ると、幼いマリア・テレジアが、もう彼の虜になったというのも分るように思われる。

しかし、この結婚話は順調に進まなかった。それまでフランスの友好国であったロートリンゲンがハップスブルク家のものとなることは、フランスにとって大脅威であった。そして国際的な画策のもとで、フランスはフランツに対して、ロートリンゲン公から将来のトスカーナ公に「国替え」することを、結婚の条件として突きつけた。

ロートリンゲン公にとっては著しく不利な条件であったが、フランツはハップスブルクを選ぶ。マリア・テレジアへの愛があったかも知れない。若い時のマリア・テレジアは実に美しい。後にハンガリーの国会に乗り込み、長男ヨーゼフを左腕に抱えて、涙で対プロイセン戦の支

援を訴えた時の肖像画など、見惚れてしまう。

そして結婚式は一七三六年、マリア・テレジアが十八歳の時にウィーンで行われた。その時、皇帝カール六世はまだ元気であり、新婚のふたりの間に男子さえ生まれれば、継承問題は解消するはずであった。しかし、三年間にわたり相次いで女子は生まれるが、男子は恵まれない。そうこうしている内に、皇帝カール六世が、きのこ料理の中毒で急死してしまった。

プラグマーティシェ・ザンクチオンという相続順位法を事前に準備し、国際的にも認めてもらっていたとはいえ、当時のヨーロッパでは平気でそんなことは無視する。各国から異議が出され、勝手な形で継承権が主張される。その情勢を見て、隣国が領土の侵食を準備し始める。そして現実に、皇帝カール六世の死後からわずか二ヶ月で、プロイセンのフリードリッヒ王がシュレージェンに侵入する。有数の農業、商工業地帯であったシュレージェンはハップスブルク家にとって富の源泉であった。しかし、新式の武装を整えたプロイセンの前には、準備の全くできていなかった現地軍では手も足もでなかった。

これを見て、隣国バイエルンもフランスと組んで、ウィーンに向かう意向を示す。まさに四面楚歌であり、プロイセンの要求に屈してシュレージェンを割譲して、事態を収拾するというのが、当時の現実的な解決策だった。

しかし、マリア・テレジアには現実が分っていなかった。父帝が定めたプラグマーティシェ・ザンクチオンの領土不分割の原則に忠実に、シュレージェンの分割を断固として拒否する。敵フリードリッヒ王が、かって父帝カール六世に命を助けられたことがあり、それなのにという忘恩の仕打ちに、怒りがあったのかも知れない。そして歴史の回転が始まり、それがハップスブルク家にとって幸いした。

例え経験乏しい女王であっても、方向を明確に示せば、国内はまとまる。そしてモルヴィッツでプロイセンとの本格的な戦いに臨む。

さすがに当時のハップスブルク家はヨーロッパの大国であった。それに対して、プロイセンは何といっても新興国で公国から王国に昇格したばかりであった。したがって戦機はハップスブルク側にも十分にあったが、まずい戦い方で敗れてしまう。決して大敗したわけではなかったが、情報戦も巧みなフリードリッヒ王は、これをプロイセンの大勝と宣伝して国際世論を盛りあげる。そして各国間でハップスブルク家の分割が協議され、ボヘミヤの首都プラーハが陥され、神聖ローマ帝国の帝位もバイエルン家のカール七世に移ってしまった。

そんな中で、マリア・テレジアは起死回生の策にでる。ハンガリーに出向いて、ハンガリー王としての戴冠式を行うと言い出したのである。

ハンガリー全土がハップスブルク家の支配化に入ったのは、前述のようにトルコによるウィーン包囲を撃退した後の一六八六年で半世紀ほど前である。もともとハンガリーはボヘミヤと同じく独立貴族の集合体的な国で、王と云ってもその上に乗っかっている存在に過ぎず、実権は貴族の集合体であるハンガリー議会が握っていた。王冠はハップスブルク家が受け継ぎ、マリア・テレジアは自動的にハンガリー女王となってはいたが、情勢は厳しかった。

もちろん戴冠式挙行はきっかけを求めてのことである。それから五ヶ月間にわたって、ハンガリー議会との実に粘り強い交渉を続ける。そして女王のために、六万人の軍隊と四百万グルデンの軍資金を供与するという成果を勝ち得たのである。もちろんそのためにハンガリー議会に大幅な譲歩もしているが、生まれたばかりの王子ヨーゼフを抱き、ハンガリー人に窮状を涙で訴えた演出は、女性ならではの効果をもたらした。その点では、マリア・テレジアもフリードリッヒ王に劣らず、きわめて宣伝上手であったといえよう。

十八世紀末のハップスブルク帝国の人口を見ると、本拠地のオーストリアは二百万人に満たずチロルを加えても、四百万人に過ぎない。それに対してハンガリーは八百万人の人口を抱え、ボヘミアやモラヴィアも四百万人を数える。人口的に見る限り、ハンガリーは大国であった。そのハンガリーがマリア・テレジアを支援するという。それは、ハップスブルク家にとっては全く新しい意味を持ったはずである。

ハンガリーでの成果が、マリア・テレジアの名声を一気に高める。フリードリッヒ王の苦戦もこの時から始まった。紆余曲折の後に、結局はシュレージェンをプロイセンに譲ったものの、ハップスブルク家はボヘミアを取り戻し、当初の領土規模を維持する。一時的にボヘミアを奪い、皇帝カール七世として帝位についたバイエルン選帝侯は、逆にバイエルン領をハップスブルク家に陥とされ、失意の内に他界してしまう。そして神聖ローマ帝国の帝位が再びハップスブルク家にもどり、一七四五年にはマリア・テレジアの夫フランツが皇帝フランツ一世として選出される。

さて、それではフランツは結婚以来どのようにしていたのであろうか。

結婚直後のフランツは義父の皇帝カール六世に大変気に入られていた。そして、カール七世は、フランツに戦勲を上げさせるため、トルコとの国境の戦いに総司令官として派遣している。しかし、ウィーンを開放したロートリンゲン公の孫も、期待に反してバルカン南部を失ってしまった。また生まれる子供達が、相次いで女の子であったことも影響して、よそ者のフランツは肩身の狭い思いをしていたはずである。

プロイセンのシュレージェン侵攻に際しては、フラン

ツもプロイセン王の要求に従おうとの意見を持っていた。そこには個人的に知るフリードリッヒ王の人柄を信頼しているフランツの姿があった。それらのことが後世、お人好しで政治や軍事に才能のないフランツの風評を生む。たしかに、当時の国際状況の冷徹さなどについては、良家の子息フランツには理解しえないものがあったろう。そしてその後、ハップスブルク家の重要事項は全てマリア・テレジアが主導することになり、それがますますフランツのお人好しという風評を定着させる。

しかし、フランツは無能だったのであろうか。それならなぜマリア・テレジアにあれほど深く愛されたのであろうか。

実はフランツは、立場を良くわきまえた極めて有能な男だったのではなかろうかと考えられる面がある。それは彼が領国トスカーナの経営に示した抜群の実績による。

フランツはマリア・テレジアと結婚するに際して、ロートリンゲン公国を放棄せざるを得なかったが、その代わりにトスカーナ公国の継承権を得ていた。そして実際に旧領主メディチ家最後の君主コシモ三世が他界し、トスカーナ公として即位したのは、結婚した年の翌年である。

その頃、トスカーナ公国の財政は完全に破綻していたという。小とはいえ、トスカーナ公国はフランツ自身の領地である。栄光の都フィレンツェを中心とするトスカーナ公国の財政を立て直すことは、フランツの最大の課題であった。そして彼は、経済活動を再び活性化するための施策を次々に実行する。もともと伝統的な商業地域であったことも幸いしたであろうが、トスカーナをして再び先進国に飛躍させることに成功する。

トスカーナ公国は、シュレージェンをめぐるプロイセンとハップスブルク家の戦争に、多額の資金を提供し、兵士も送っている。フランツの内助の功であるが、それを可能にしたのは、トスカーナ公国の富である。またウィーンにマイセン並みのアウガルテン磁器工場を作り、彼のホリチュの領地では模範的な農業経営に成功している。そのようなこともあって、フランツ一世が逝去した時には、二千万グルデン近くの現金と数百万グルデンに上る工場や土地を遺産として残しており、これによってハップスブルク家の戦時負債のすべてが償却されたと言われているほどである。

それにも増して、フランツ一世には人材を見る目があった。マリア・テレジアの治世を助け、大活躍した大臣などには、フランツ一世の推挙による者がかなりの数にのぼるが、なんと云ってもハウクヴィッツを発掘したことが、ハップスブルク家の隆盛の基礎となった。

当時のハップスブルク家の財政は、中世そのままで、貴族や教会に対しては徴税権がなく、軍事動員をするにも、いちいち貴族の協力を要請するしかなかった。それでは近代国家の形を整えたプロイセンには勝てない。

中央集権的な財政を確立させ、中央直属の軍隊を持つことが焦眉の急であった。しかし、ハップスブルク家の重臣達はいずれも貴族であり、それは彼らの権益を著しく侵害することで、当然賛成するはずがなかった。

そこにハウクビィッツが登場するのである。おそらくフランツ一世のもつ経営感覚の鋭さであろう。マリア・テレジアの全面的なサポートもあって、ハウクビィッツの徴税制度改革が大成功する。

このような人材を発掘できたフランツが無能であったはずがない。経営の才があり、人材を見る眼を持ち、しかも人柄が良かったとなれば大人物である。その上、フランツの偉かったところは、マリア・テレジアを常に立て続けたことである。厳しい試練を経て、自信のついてきたマリア・テレジアにも独自の価値観があり、政策面での意見不一致も数多くあったであろうが、フランツはそっとアドバイスするだけに留める。とても凡人にはできないことだ。

そんなフランツに対して、マリア・テレジアが全面的な信頼を置いていたのは間違いない。夫婦であるから、時にはもめごともあったであろうし、世活の知恵として政治的な話は避けていたかも知れない。しかし、稀に見る政治能力に恵まれたマリア・テレジアが、フランツの支えなしに、あれほどの活躍ができなかったと思うのは、その業績を知っての確信である。だからこそ、フランツ亡きあと、マリア・テレジアは寝室を灰色で覆い、喪服を脱ぐことなく過ごし、修道院に入ろうとさえしたのである。

マリア・テレジアとフランツのことを調べてみて、私なりに理解し得たことは、ふたりの間にあった人間的な信頼感の凄さである。それは、シャー・ジャハーンとムムターズの場合のように、共に戦った同志的な結びつきとは異なるが、やはり十六人の子をつくったのは伊達ではなかった。

かくして、気になる多産の帝妃たちも、やっと私の頭の中に所を得たように思う。

（本文を書くにあたり、主として、渡辺建夫『タージ・マハール物語』と江村洋『マリア・テレジアとその時代』を参考にした。）

漢詩

潮騒錄（廿六）

鯨游海



奉呈平坂郁男畫伯戲作疊句五首其一
平成十二年一月

仙客工房繪島山
錬丹撫筆四時閑
先生豪語冠帝展
歳暮未聞牌被頒

押韻・山閑頒

〈平坂郁男画伯に戯れに作れる畳句五首を奉呈すその一〉

仙客の工房　絵島山
丹を練り筆を撫して　四時閑かなり
先生豪語さる「帝展に冠せん」と
歳暮未だ聞かず　牌の頒せらるるを

〔注　解〕

仙客は仙人。工房は画房。絵島山は平坂画伯の住まわれている所。丹は朱い土砂（染料の植物とも）で、絵の具及び仙人の食べ物である丹石にも掛けた。

帝展は今の日展の前身名。日本で最も権威あるとされる絵画の展覧会。なお詩題の畳句とは、同一の句を敢えて重ねて用い連句を詠む事。ここでは「仙客工房絵島〇」と「先生」とが以下の句にも共通して同じ場所に用いてある。短歌の丹青は絵を云う。

仙人のような平坂画伯の画房は湘南の絵島山に在る。常に朱や青の絵の具を練り絵筆を撫でて閑かに画想を練っておられる。

さて先生は豪語された「今度の帝展には必らず金牌をとってみせる」と。然し乍らもう既に歳末だと云うのにメダルが頒せ（分け与え）られたと云う話を聞かないのだが…。

☆帝展に冠たらむ丹青の
仙客の粋凡人は解せず

又・其二
平成十二年一月

仙客工房繪島村
擔樽慰撫到山門
先生意氣衝天嘯
選者無人不足論

押韻・村門論

〈又・その二〉

仙客の工房　絵島村
樽を担ぎ慰撫せんと　山門に到る
先生の意気　天を衝いて嘯ぶかる
「選者に人無く　論ずるに足らず」と

〔注　解〕

換韻する為、山を村に変えた。樽は酒樽。短歌の丹丘生は李白の詩・将進酒に登場する道士の名。

仙人の工房は絵島村に在る。金賞に入選されたらしい様子もないので一つ先生を慰めて差し上げようと私は酒樽を担いで山門までやって来た。

所が先生は元気旺盛で天を衝く勢いで嘯かれた。

「なあーに。帝展の審査員なんて碌でなしばかりでわしの絵が判るのは居らん。論ずる迄も無い」と。

☆月を背に先ずは開かん金の樽
丹丘生を誰か論ぜん

又・其三
平成十二年一月

仙客工房繪島濱
湘南絶景旦昏親
先生嘗未描風物
頑寫眞圖佳麗人

押韻・濱親人

〈又・その三〉

仙客の工房　絵島の浜
湘南の絶景　旦昏に親しまる
先生かつて未だ　風物を描かれず
頑くなに写さる真図　佳麗の人の

〔注　解〕

眞圖とは中国語で肖像画を云う。菅原道真が渤海国の大使を送別した後に詠んだ漢詩がある。見渤海國裴大使眞圖有感「自送裴公萬里行　相思毎夜夢難成　眞圖對我無詩興　恨寫衣冠不寫情」平安時代隣国の裴大使一行を京で応接し、高邁な漢詩を応酬した道具は、その人柄や文人振りに深い尊敬と友情を懐いたのであった。

所で先生が描かれるのは常に正装の美人画である。口語に訳してみよう。

仙客の工房は絵島の海浜にある。ここで中国湘水と洞庭湖の絶景に匹敵する湘南の風光に朝に夕に親

しんでおられる。
それなのに先生は何故か未だ嘗ってこの美しい風景や静物を描かれたことがない。
頑固に描いておられるのは何時も正装した美人の肖像画ばかりである。

☆モナリザの微笑窮めんと筆撫せば
また恋し初めし絵絹布の麗人

又・其四　　平成十二年一月

仙客工房繪島陲
試尋盍畫裸身肌
先生喝破艶眞髄
不若麗人端坐姿

押韻・陲肌姿

〈又・その四〉
仙客の工房　絵島の陲
試みに尋ぬ「盍ぞ裸身肌を画かざるや」と
先生喝破さる「艶の真髄は
麗人の端坐せる姿に若かず」と
〔注　解〕
盍は何不に等しい。「盍んぞ……せざるや」と訓ずる漢語独特の再読文字。
喝破とは、他人の説を打ち破って物事の本質、眞理を説き明かすこと。更に大声で叱りたしなめる、の意もある。ここでは絵画芸術を解さぬ野卑な問いを発した私を叱りつけた意も含んでいる。
眞髄は根本、本質。不若…＝不如…。…に及ばない、…が勝っている。後述短歌の素手は白い手。口語に訳してみよう。
仙人の工房は絵島の陲に在る。
試みに尋ねてみた「どうして先生は裸身肌を画かれないのですか」と。
先生は大きな声で私を叱りつけるようにして説き明かされたものだ。「艶なるものの本質、根本にあるものはだ、ヌードなんぞと云うものよりもじゃ、麗わしい人が正装して端座している姿にこそあるものじゃぞ。未だ汝は修養が足らんのう」と。
（私は下司の心を見透かされギャフンと云わされて了った。）

☆素手まぶし眉目麗わしく端座せる
乙女の姿何に譬えむ

又・其五　　平成十二年二月

仙客工房繪島隈
風聞終得夢金杯
先生莞爾撫鬚曰
浪漫展須知有材

押韻・隈杯材

〈又・その五〉
仙客の工房　絵島の隈
風聞す終に得たり　夢の金杯を
先生莞爾として　鬚を撫して曰く
浪漫展は須からく　材有るを知るべし
〔注　解〕
須　知＝…を必らず承知しておくべきだ。再読文字。
短歌の方眼は画師に授けられる名誉称号。
仙人の工房は絵島の丘の隈に在る。風の便りに先生が終に夢に迄見た金杯を獲得されたと聞いた。そこで早速お祝に参上した所、先生はにっこりと顎鬚を撫でてお笑いになり「どうじゃ。あの帝展と違いこの浪漫展には絵の判る人材が居るじゃろうが。汝よくよく心得ておくがいい」と申された。

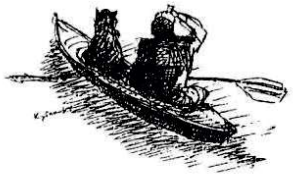
☆ああ終に金杯得たりめくらめく
厚く重たき法眼得たり

《漢詩の流れ17》中唐の詩人②－韓愈その二

韓愈の詩が日本の戦国時代の一武将、稲葉一鐵の命をはからずも救った事をご存知であろうか。
美濃の斉藤道三の家臣だった稲葉一鐵が、道三の滅亡後信長に仕えようとしてある時信長を訪れた。信長は彼を信用せず、応対の家臣に暗殺するよう命じていた。
招じ入れられた茶室には一幅の掛軸が掛かっていて、絵の余白に次の七言二句の讃が書かれていた。「雲横秦嶺家何在　雪擁藍關馬不前」。
一鐵は問われるままにこの詩の全文を吟じ更に注釈を細かに述べた。隣室でこれを聞いていた信長は、その才能、知識に感服し、「文武兼ね備えた天晴れな武将よ」と誉め、自らの非礼を詫び、早速家臣に採用て優遇したと云う。その韓愈の詩を見てみよう。
左遷至藍關示姪孫湘（左遷せられて藍関に至り姪孫湘に示す）

一封朝奏九重天　一封朝に奏ず　九重の天に
夕貶潮州路八千　夕に貶せらる　潮州路八千
欲爲聖明除弊事　聖明の為　弊事を除かんと欲す
肯將衰朽惜殘年　肯て衰朽を将って　残年を惜しまんや
雲横秦嶺家何在　雲は秦嶺に横たわり　家何処にか在る
雪擁藍關馬不前　雪は藍関を擁して　馬前まず
知汝遠來應有為　知る汝遠来せるは　将に意有るべし
好收吾骨瘴江邊　好し吾が骨を　瘴江の辺に収めよ

（朝、一通の上奏文を九重の宮中の天子に奉ったが、夕には八千里彼方の潮州へ流される事となって了った。
私は聖明なる天子の為に悪弊を除こうとの一心だったが、既に老衰の身、歳を惜しむ訳ではない。
雲は秦嶺山脈に横たわって家はどの辺りに在るのだろう。雪は藍田の関所を埋め尽くして馬も前めない。
姪孫の君が遠くを厭わず来てくれたのは何か訳があっての事であろう。好し、それなら私の骨をあの瘴癘の悪気立ち篭める長江の辺に埋めて貰おう）
韓愈らしい格調の高い、天子と国を念う忠臣の憂憤の詩である。
仏教を異国の邪宗として嫌った刑部侍郎（法務次臣）の彼は、仏教を尊崇した憲宗皇帝にもの申した。仏舎利（釈迦の指の骨）を宮中に迎えようとする憲宗に「仏骨を論ずるの表」を上奏してこれを阻止せんとしたのである。どこかの国の胡麻擂り大臣とは大違いである。
憲宗は怒り、直ちに遙かなる辺地潮州（広東省）への左遷を命じた。そこは高温多湿の悪気満ちる瘴癘の地であった。当時このような発令があれば即刻出発するのが規則であった。
然し翌年には憲宗の怒りも収まり、国子祭主（国立大学総長）に呼び戻され、更に憲宗の没後は吏部侍郎、兵部侍郎、御史大夫、京兆尹等高官として全うしたが。
さて筆者の独断と偏見で云えば、日本でもてはやされた白居易（白樂天）と較べた場合、その思想、哲学、政治行政での実践力、人材の育成、文章の改革等々、韓愈の方がより深く大きな貢献をしたと思う。
では何故わが国では白樂天の方がもてはやされたのか。平安時代の日本は仏教が益々旺んな頃であった。仏教を嫌った韓愈がわが国の為政者に敬遠されたのは当然であろう。故に日本では白樂天の下風に立つ事となったのではないか。
それはさて置き、一鐵の話に戻ろう。彼の学識がどの程度のものであったかは今知るべくもないが、当時多少学問をした者にとって、この詩はいわば常識として広く知られていた筈である。偶々信長や側近が知らなかった事が一鐵にとっては幸いであった。
ここで私は敢えて推理してみたい。実は信長も側近も知っていた。そして感心したふりをしたのではないか。茶室に掛けてある自家の軸である。こう考えた方が自然ではないか。当時の武家階級の躾や学問は相当厳しいものがあった筈である。
何れにしろ韓愈の詩が一武将の生命を救い、更に信長の側近として栄達していく端緒となったのである。そして私の推理が正しいとしたら、信長は流石に天下の主となるにふさわしい大きな器量を備えていたと云う事になる。



笹ヶ崎村（十一）

太田和貞

誕掛け

「お地蔵さまをみつけた！」
鍬先にカチッと固い物が当ってからは、両手で泥を探っていた荒縄の甚兵衛が地蔵尊の丸い頭を探り当てた。
「お地蔵さまはご無事だったか？」
河童の長八が振り返って、甚兵衛に聞いた。
「お顔が泥まみれで、よく分かんねえけど、ご無事のようだ」
「そりゃよかった。長い間、ご苦労さまだったのう。泥に埋まって、さぞかし、おつらかったべえ。もうすぐお助けいたしますでえ。さあ、みんな手を貸してくれ」
土俵の上から池の底をのぞいていた男たちに、長八が呼び掛けた。「おう」と応じて男たちが梯子を伝わって、池の底におりてきた。
「お地蔵さまを傷付けねえように、手で掘り起こして貰えてえ」
長八のことばに、男たちは両手で泥を掻い出した。
男たちの手の動きにつれて、地蔵尊が泥の中から次第に姿を表わしてきた。
「ありがてえ。このお地蔵さまのおかげで、柵の破れもつくろえたし、お名主さまの奥さまも助けられた」
長八たちは泥水の中に正座して地蔵尊に手を合わせた。
「静かに、静かに。田舟にそおっと乗せるだ」
長八の手の動きに合わせて、一体の地蔵尊は田舟に乗せられた。
田舟に仰向けに乗せられた地蔵尊の胸元に泥だらけの誕掛けがへばりついていた。
「もう、すこし待ってくだっせえ。お体は必ずきれい

にしますだ」
長八は泥だらけの地蔵尊に詫びを言った。
最初の一体の地蔵尊を掘り起こすと、あとの地蔵尊は見付けやすかった。
三隻の田舟に二体ずつの地蔵尊を乗せた。水に濡れて泥だらけの地蔵尊は長八が考えた以上に重かった。
その重い地蔵尊を担いで、梯子をのぼって池の外に運び出すのは不可能に近かった。
（田舟にお乗せして、田舟の浮力を利用するだ）
長八がさんざん考えた揚げ句に思いついたのは、田舟を利用することだった。
（池に水を入れれば、田舟は自然に浮んでくる）
そう思い付いて、長八はニンマリしたのだった。
「つぎは臼樋だ。気張っていこう」
長八の呼び掛けに男たちは、「やっさ！　やっさ！　やっさ！」と掛け声で応じた。
男たちの「やっさ！　やっさ！」という掛け声が長八には、「仕舞った！　仕舞った！」と聞こえて内心ギクッとした。
長八の紋所の一文字の中央あたりに、臼樋が伏せられていた。その臼樋の入口の前に、二重の杭柵を立て、その間に土俵を埋めて濁流を防いでいた。帰りを急いだしげが、その杭柵の道を通ったとき、運悪く柵が泥海の水圧に崩れて、しげは濁流に呑み込まれたのだった。
その切れ所（決潰場所）を防ぐために、三体の地蔵尊を乗せた田舟が二隻沈められて、濁流をようやく防ぎ止めることができた。
二重の杭柵を一瞬のうちに、はじき飛ばした濁流の水圧は囲堤に伏せた臼樋を跡形もなく、破壊し尽していた。
「甚兵衛、平吉。どうだ？」
長八は二人に聞いたが、二人とも首を横に振った。
「俺もそう思う。折角、苦労して造った臼樋だが、無理して伏せるよりも、この水が引いてから伏せた方がええ。ここは我慢のしどころだんべ」
長八は、そう言って二人の同意を確認した。
「古い臼樋を甚兵衛、平吉、俺の三人で、よおく調べてみた。そしたら、ちょっとや、そっとで伏せ替えられるもんではねえ。それに、臼樋に手を付けたらお地蔵さまも今夜は田舟の上でお泊まりということになりかねねえ。そんでは、元の四つ辻に戻れると喜ばれたお地蔵さまに申し訳が立たねえ。お地蔵さまを元の場所に戻して御霊入れをしてから、臼樋のことを考えべえと思うが、どうだ？」
長八は身振りを入れながら、みなに語り掛けた。
「それが、ええ」
男たちは、すぐに長八に賛成した。
「そんでは、梯子を上ってくだっせえ」
男たちが、みな囲堤の上に立ったのを見届けてから、

池の底から長八は口上を述べた。
「これから、わたくしめが演じますのは一世一代の手妻にございます」
そう言って長八は左足を一歩引いて、深々と体を折り曲げた。
「甚兵衛！。平吉！。囲堤の土俵を崩して池に水を入れるだ」
甚兵衛と平吉は、男たちを差図して囲堤の土俵を二段、取り除いた。
囲堤に迫っていた濁海が池の底に、滝のように流れ込んだ。
「キャーッ」と女子衆は悲鳴をあげ、男たちも思わず息を呑んだ。
「平吉！。甚兵衛！。反対側にも水を入れろ！」
長八のするどい声が飛んだ。
甚兵衛と平吉は、慌てて反対側の囲堤の土俵も取り払って、水を池の底に流し入れた。
丸に一文字の上の半円と下の半円に、同時に水を注ぎ込まなければ、水圧のバランスが崩れて真中の一文字が崩れることを長八は恐れたのだった。
囲堤が決壊すれば、長八は勿論のこと、囲堤に立っている男も女も命の保障は無かった。
池の底の水嵩が長八の膝を越えたとき、長八はヒョイと新しく造った臼樋の上に飛び乗った。
「心配のあまり、わたくしめに集まっている目線を田舟に乗られたお地蔵さまに移してくだっせえ。お地蔵さまは気持ちよさそうに、ほれ、この通りユラユラと揺られておるだ。先刻、池の底にあったお地蔵さまが水が増すにつれて、だんだんと上にあがっていきますだ。これが本日のわたくしめの手妻にござ～い！」
長八は両手を挙げて、みなに紹介した。
それまで、どうなることかと沈黙していた男も女も一斉に、ワーッと歓声を挙げながら手を叩き始めた。
「さかんな歓声と拍手をいただきまして、わたくしめも心から感謝しております。そのお礼として河童踊りをお目に掛けます」
長八の挨拶に、再び歓声と拍手が湧き起こった。

長雨の川のにごりに
驚いて、河童の長八
今日もまた、ねぐら
求めて川をゆく、
あっちへ、ひょろひょろ。
こっちへ、ひょろひょろ。

長八は唄いながら踊った。時にはひょいと腰をひねって尻を掻く度に、ドッと笑いが湧き起こった。
池に流れ落ちる二条の滝は池の底に、ずんずんと水量

を増やしていった。長八の乗っている坎樋が、まるで奈落の底からせりあがってくる舞台のように浮かび上がってきた。しかも、滝が落ちる流れに乗って、ゆっくりと池の中を回り始めた。その後ろに、三体の地蔵尊を乗せた二隻の田舟もついて回った。

河童の長八、驚いた。
お地蔵さまのご先尊、
河童冥利に尽きまする。
四つの辻のもとの場所、
お地蔵さまが戻るよう、
河童の長八、務めます。
命の限り、つとめます。

長八は謡のように、腹の底から低い声を絞り出して、静々と舞った。

囲堤の上から見下ろす男も女も、口をあんぐりあけて長八の所作を見守った。

「河童の長八、務めます。命の限り、つとめます」

と二度繰り返して、舞い終った。

終った途端に、「ワーッ」と大歓声が湧き起こった。

孫娘のきくの帰りを気遣って、田舟で迎えにきた惣右衛門と長八たちは鶴代の脇で出会った。

「きょうは、きくにえらう世話になりました。おかげで、お地蔵さんの御霊入れもできたし、きれいな涎掛けまで掛けて貰いました。こんなに遅うなってしもうて、すまんことでした」

そう言って長八は惣右衛門に頭を下げたが、惣右衛門は長八を無視した。

「それでは、長八さん、……」

きくが長八たちに挨拶して、惣右衛門の田舟に乗り移ろうとしたとき、長八の田舟がグラッと揺れた。

「危ない！」長八が思わずそう叫んで、きくの体を受けとめた。宙を泳いだきくの右手が長八の左手をしっかり握った。

「あらっ」きくは短い叫びをあげたが、次の瞬間、惣右衛門の田舟に乗り移っていた。

「気に入らねえ」

平吉が最っ先に、惣右衛門の態度をなじった。

「そりゃあ、仕方あんめえ。平吉は年寄平左衛門の伜だが、おれと甚兵衛は持高六斗五升と弐石九斗四升の水呑百姓だ。鶴代さんにことばを掛けて貰えなくても、文句が言える身分ではねえ」

「鶴代、鶴代って、えばりくさって、たかが餌まきでねえか」

平吉の悪態を聞きながら長八はきくの柔らかな体の感触を思い起こしていた。長八の左手をしっかりと握った

きくの右手の感覚がよみがえってきた。

ここ東葛西領下之割の村々は徳川将軍の御拳場に指定されていた。御拳場は、将軍が拳に鷹を据えて鷹狩りをする場所という意味で、江戸城より五里以内の地に指定された鷹場であった。

現に、吉宗は七十六回、家重は十七回、家治は四十一回、家斉は三十七回、家慶は七回、その他で合計二〇五回もの鷹狩りがこの下之割の村々で行なわれた。

鷹狩りの最高の獲物であるツルが一羽もとれないと、将軍の御機嫌を損じるのを恐れて、百姓たちは鶴代という野生のツルを餌付けする場所を考え出した。

広さ一反歩ほどのたんぼに水を張り、コブナやドジョウを放し、たんぼのまわりにはヨシやマコモを植えて、ツルが安心して餌をとれるようにした。

「なにしろ、村の会合で正面に名主さま、その隣りがうちの親父。その隣りに座わるのがあの惣右衛門だからのう。五人組の組頭でもねえのに、上座に座わるのは、矢張り御鷹御用の加納さまがこわいからだ」

平吉の悪態は、際限なく続いた。

八代将軍吉宗は、綱吉の「生類憐れみの令」で中断していた鷹場制度を復活させた。そのため、紀州から綱差役の加納甚内を江戸に連れてきた。

加納家の祖、加納甚内の本姓は牧戸氏であった。

享保二年（一七一七）、吉宗が鷹狩りを催した際、クロツル一羽を初めて捕らえた褒美として、同行した吉宗の側近、加納遠江守の加納姓を譲られた。

このときから甚内は加納甚内となり、代々、西小松川村に住みツルの飼付御用を務めた。

加納甚内の配下で、ツルの餌まきをしている惣右衛門に、村人の誰もが一目、置いていた。

それは、頭では分かっていても、目の前で惣右衛門に長八が鼻であしらわれるのを見せつけられて、平吉は年寄平左衛門の伜だけに、赦せなかったのだ。

「きくは、かわいいが、惣右衛門じいさんは、にくたらしい」

惣右衛門に対する平吉の悪態も、ようやく、きくの名が出たことでおさまった。

「長八、お地蔵さんは、なぜ涎掛けしているのか、おめえ知ってるか？」

甚兵衛は平吉の気をまぎらわせるかのように、長八に聞いた。

「まさか、お地蔵さんが、飯粒をよくこぼすからじゃあんめえなあ」

甚兵衛は笑いながら言い添えた。

「うんにゃ。きょうはきくがつくった涎掛けをお掛けしたが、本当は乳飲み子を亡くした母親が赤ン坊の涎掛けをするのが本当だ。この匂いのする子が来ましたら、よろしくお頼みしますと、お地蔵さんにお願いするだ」

「ああ、赤ン坊は乳をよくこぼすからのう。みんな涎掛けをしている。その涎掛けに乳の匂いや赤ン坊の匂いが、しみ込んでいるという訳か。そんなら、そのお地蔵さんが六体も並んで立っているのは、なぜだ？」

甚兵衛が畳かけて聞いた。

「それは、おめえ。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人道、天上の六道で説法しているお姿をあらわしているそうな。この六道のお地蔵さんを拝めば、現世ばかりでなく、あの世でもおれたちを救って下さるそうな」

「長八、おめえ。こむずかしいことをよく知っているなあ。意外と物知りでねえか」

甚兵衛は長八が余りにもすらすらと答えるので、いささか、あきれ顔で言った。

「今、おれが言ったのは、うちのおふくろの受け売りだあ。おふくろが善養寺の法話会で聴いてきたことを晩飯のあとで、おれに聞かせてくれるので、それで覚えた耳学問だ。なにしろ、親ひとり、子ひとりの水呑百姓だから、飯を食ったあとは、いろりの火を見ながらおふくろの話を聞くしか、ねえもんな。それに、おふくろもおれに話して聞かせるのを喜んでいるようで……」

平吉は二人の話を黙って聞きながら棹をさした。先刻の惣右衛門に対する怒りも治まっていた。

善養寺の杜から離れた満月の光を受けて、泥海がキラキラと輝き始めた。

「泥海から満月を眺めるとは、思ってもみなかったなあ」

平吉がポツリと言った。

「稲穂が水に浸かって、ことしの御年貢が心配だ」

長八のことばに、甚兵衛も平八も黙りこくった。

田舟は囲堤に沿って、静かに進んでいた。

囲堤に築かれた土俵の列をぼんやり眺めていた長八が、

「平吉！。舟をとめろ！。田舟をとめるんだ」

と叫んだ。

平吉が、「おう」と答えて、棹を両手で押えて、両足を船板の上で踏んばると、田舟はブルブルと身を震わせてとまった。

「水が引いている。甚兵衛、平吉！。あそこをよく見ろ。土俵が濡れているところより水面が三寸程、さがっている！。水が引き始めたんだ！」

三人は田舟から囲堤に上がった。土俵に腹這いになって、泥海の水面と土俵の濡れ具合いとを確めた。

土俵にくっきりと残っている汚れの線より、水面はたしかに三寸程、さがっていた。

「雨が止んできょうで三日だ。この三日の間に、水はひそかに引いたんだ。平吉はおやじさまを呼んできてくれ！。おれと甚兵衛は名主さまに知らせにいく！」

そう叫んだ長八の声は弾んでいた。

（つづく）

ねずみ小僧丸楠（十七）

鈴木昭三

露人館玄関の格天井に吊られた自慢のシャンデリアの明りを受けて、おかみさんは十五夜嬢母娘とくうにいの見つめる中で、三枚目の便箋から顔を上げると、黙ったまま隣のくうにいの半纏の脇腹を指先で軽く突つきました。くうにいは直ぐに要領よく片目をつむりおかみさんに答えてから、十五夜嬢に初めてにいっと笑いかけました。

「ちょ、ちょっくらな、あね様と、そ、相談が」

くうにいはどもりながら、あわてて暖簾の奥に消えたおかみさんの後を追いました。

調理場の前では、こちら向きのおかみさんがおいでおいでをしていました。

「十五夜さんが一座の興業中にね、穴間湖あたりでやらかした美人局がばれたらしいの。土地の顔役にひどい目に合わされて、今朝もそこの子分衆に落し前をつけろってすごまれ、ほうほうのていで竹の家さんへ逃げ込んだんだって。でも竹の家さんじゃ力になれなくて、どうしようもないから、二人の駆け込み寺はもう露人館しかないよって、因果を含めて差し向けたので宜しくって。まあそんな意味の事で始まっているの。くうにい、知っているかい、あの辺りは誰の島だったっけ」

くうにいは風呂焚きの煤で黒く染まった掌を、自分の顔の前で左右に振りました。

「やめなって、やめた方がええって。どうせ曲師のばばあの仕組んだに違いないあくどい芝居が、失敗したからと言って、なしをつけにあね様が出たんじゃこりゃ筋違いですぜ。あに様の面汚しになるだけじゃないかね」

「くうにい、今夜のこの話を持って来たのは、もう十

五夜さん達じゃなくって、竹の家さんに移っているのよ。手紙の宛名も、これこの通り露人館親分様になっているのよ」

おかみさんは懐から出した茶封筒をくうにいの前に差し出しました。くうにいだって露人館親分様の文字ぐらいは読めたかも知れません。

「それだったら十五夜に竹の家の手紙をそのまま持たせて満州へ行って貰ったらええじゃんかね」

おかみさんは不満顔でのくうにいの言いぐさに、急に吹き出し、彼の背中を茶封筒で打ちました。

「何を言ってるの子供みたいに。十五夜さんは店の前に待たせてあるタクシー代も払えないのよ。すってんてんの二人が満州まで掛けで渡る妙案でもあるって言うの。それからさっきの手紙の続きだけど、女中でも下番でもええから、暫く二人をかくまってくれって。二人共着のみ着のままで捨てちゃ置けないから、当座の衣類は芸者衆の着古しだけど、ひと通りは揃えたつもりだって。それに何かの役に立つ時もあるかも知れないって、稽古三味線の古いのを母親に持たせたんだって」

「おやおや手廻わしのええこと。この忙しい露人館の都合も確かめないで、至り尽せりだなあ竹の家は。おためごかしの厄介払って言うとこだな」

「まあまあくうにい、困った時は相身互いよ。ともかくあの二人なんとか泊めて上げなきゃ。そうだ」

おかみさんは言葉を切っていたずらっぽく、くうにいの顔をのぞきこみました。いつの間にかおかみさんとくうにいの話し合いを、取り囲んで立ち聞きしていた女中衆も、おかみさんの次の言葉を興味深かげに待ちました。

「いくら女好きと評判でもさ、まさかくうにいの所へ泊めると言うわけにも」

女中衆は大笑いで手をたたきました。くうにいも頭をかいて苦笑しました。

「うーん　せっかくですから、じゃあ皆様のご期待に添わせていただきまして、十五夜一人だけお預り致しましょうかね、へっへっへ」

くうにいは笑いながら背後の暖簾の方をふり返ると、少し小声で続けました。

「あの曲師のばばあめ、あいつは十五夜のお袋でもなんでもない赤の他人だそうだよ。十五夜の小娘の頃から手めえの金になる事なら、どんな阿漕なまねでもやらせたそうだよ。お袋ともあろう者が血を分けた実の娘に、あんなはしたない事をさせるわけがないよ」

「くうにい今更そんなこと。それより梁山泊の空いている広い方の部屋しか、ないわね今夜は。校長先生にお許しをお願いしてみるわ」

「あね様、校長野郎なんかにそんな事までいちいち」

「そんな事言わないでよ、えらいお人なんだから。ちょっ

くらお話ししてくるわ。十五夜さんには、部屋はなんとかするからって安心させて上げな。それからお帳場に言ってタクシー代払ってあげて」

せっかちらしく目和下駄の歯音を土間に響かせて中庭の闇の中に消えたおかみさんは、直ぐに又顔を見せました。

「タクシーの運ちゃんには、判取り帳にちゃんと書いて貰ってよ、安くはないんだから」

天光軒十五夜嬢母娘の逃避行もこの夜露人館のねぐらに落ち着くことができやっと終ったのであります。

梁山泊は倉の二階で二間きりでした。十五夜嬢母娘は校長と隣り合わせになったのであります。

「あぶない、あぶない」

くうにいは十五夜嬢母娘の荷物を女中衆と手別けして梁山泊に運びながら、闇の中でひとりつぶやいていました。

先日の夕方、地ごく耳と太平と私の三人ががき大将の家を訪れたのは、ある相談の為だったのです。

川の前のがき共がおたぎりさんの大杉の下の秘密の溜り場に屯ろする楽しみの一つは、あそこなら煙草が自由に吸えると言う事だったのです。

ところが私の敬愛するくうにいが賭博で警察に逮捕されたのですが、その実は赤の嫌疑であって、彼の仲間の太平と私も同様に思想犯で逮捕される、しかしその手初めは子供のくせして煙草を吸っていると言う理由でつかまると、川の前のがき共にからかわれ、おどされて以来私は一時は煙草をやめたのです。太平も話がこわくて、露人館で毎日拾い集められていた客の煙草の吸殻を、おたぎりさんの溜り場に持ち出さなくなったのです。でも太平も私もくうにいが釈放されて戻って来ると、彼の部屋で彼のゴールデンバットを吸うようになっていました。この喫煙は太平と私の秘密にしていて、親友の地ごく耳にも隠していました。

太平からの吸殻の供給を絶たれて困ったのは、私達をおどしたがき共でした。

がき共は学校の放課後いつもの様におたぎりさんに集まっても楽しみが無くなって活気がありませんでした。集まるがきも一人減り二人減りしてだんだん淋しくなりました。その中にがきの一人が村のデパートで煙草の万引きをやってしまいました。他のがき共も煙草を吸いたくて、おかしな言い方ではありますが、それなりに苦労していたようです。

そんなある日、地ごく耳が漫画の貸本で金もうけの方法を考えついたのです。勿論煙草を買う為の資金です。

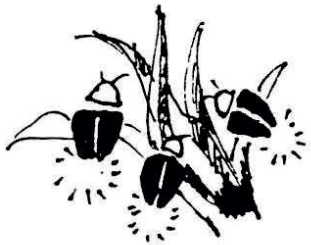
そんなわけで地ごく耳と連れだって出かけたのであります。

塩辛茶漬を食べ終えたがき大将を加へ、四人はおたぎ

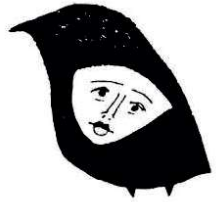
りさんの石段の下の常夜灯の石がけに腰をおろしました。
地ごく耳は上級生のがき大将に弁説たくみに貸本の錬金術を披露しました。
まず貸本用の漫画本を十冊用意する。その一冊を一日一銭で貸し出す。
小田郷小学校の生徒数は、尋常科一年生から六年生迄約二百人。高等科が一二年合わせて三十人都合二百三十人だが、半分の女子は当てにならないからはずす。それに男子でも一日一銭の小遣いを貰えない者もいるから、貸本の客になれるのは百人だろう。一冊の本を百人全部が読めば貸せ料は一円になる。それが十冊ならば十倍の十円になる。
ここで地ごく耳は十円が如何に莫大な金額であるかを説得する為に、彼の兄の郵便局での月給は十二円であると教へてくれました。
太平も十円に感激して、ねずみ小僧の講談から思いついたのか
「昔はな、十両盗めば人の首が飛んだんだってよ」
と、がき大将に言いました。
私も、この際何か言わなくてはと考へたのですが、適切な言葉が思い当らなくて、咄嗟におかしな事を言ってしまいました。
「ヒステリー先生の月給は訓導だから十三円五十銭だって」
がき大将も地ごく耳も太平も、十円と言う金額に有頂天になってしまっているのか、只意味もなく
「ほー」
と、感心してみせました。
それから私達は夕暮の往還に人通りのないのを見定めてから、おたぎりさんに貸本が成功するように拍手して拝みました。四人は金持になった気分でうれしくて思わず万歳を叫んだのであります。
その後、もとでの十冊の漫画本は案外簡単に集まりました。
裕福な太平は馴染みの客からの貰いものがあったりして、のらくろ軍曹を始め、冒険ダン吉、タンクタンクロー、一二三四五六等数冊を提供してくれました。地ごく耳は、月丸ねえさんに買ってもらったというたこの八ちゃんと凸凹黒兵衛の二冊、私は萩乃の形見となったのらくろ曹長をだしました。
がき大将の号令で川の前のがき共が久しぶりに全員集合しました。がき大将が貸本の計画を発表すると皆大賛成でした。がき大将は貸本業に協力することを誓わせ、本を貸す時の規則を皆で考えました。
例えば本を貸すのは放課後で校門の外で、一銭と引き換えでがき大将だけが渡す。貸本は新聞紙で包んであって、登下校の道中では決して開けない。借りた本は一泊だけで、翌日再び新聞紙に包んで校門の前でがき大将に

返す等など、考え方の緻密ながき大将は貸本の取り引きに手落ちのないように気を使いました。下校の道中で勝手に新聞紙を破いて本を見れば罰金一銭追加。一泊して翌朝返さない時は新規の取り引きとみなして一銭追加。家に帰って貸本を友達に見せれば罰金一銭。それらを見張るのは川の前のがき共の務めとなりました。他にも細かな規則はたくさんあったと思います。
営業を開始すると、貸本の噂は学校中に知れ渡り、校門の外で待機していたがき大将に客は殺到しました。十冊の貸本は上級生に独占されて、尋常科の低学年生は借りることが出来ずがっかりしていました。
おたぎりさんに集まった川の前のがき共は、初日も二日目も三日目も、がき大将の掌の上の一銭銅貨十枚を確認して万歳を叫びました。がき大将も上機嫌でどなりました。
「いつかこのぜにで、煙草や饅頭を買うぞ」
がき共は歓声をあげて拍手しました。

（つづく）



罠



鍋屋次郎

第一部　突然の倒産

平成二年六月二十日午前五時二十分、インパルス工業株式会社社長大沢卓司はベッドサイドで鳴り響く電話で目が覚めた。電話は経理担当鳴海常務夫人鳴海明子からで、

「主人が……亡くなりました……」

啞然とした大沢は

「え！　奥さん！　今なんとおっしゃいました！？」

と絶叫した。隣のベッドでは、目を覚ました大沢の妻咲子が怪訝な顔をして座り込んでいる。

「主人が亡くなりました。……自宅の物置きの中で首を吊って……」

後は声になっていない。

「どうして！　なぜ？……」

「……」

「それで、ご遺体はどうなさいました？」

「少し前、警察の方に部屋に安置していただきました」

「直ぐそちらに行きます」

大沢社長が鳴海常務宅に到着すると、数人の警察官が裏庭にある物置きとその周辺に立ち入ることの出来ないようにロープを張り、鳴海常務の遺体を検死のため運び出す手配をしていた。

座卓に伏せて、声を殺して嗚咽している明子に大沢は

「奥さん、遺書か何か書かれたものはありませんか」

「まだ……見ていません……探していません……わかりません……どうして……命を縮めたのでしょう……」

嗚咽は激しくなるばかりだった。

その日の午前十時、インパルス工業株式会社社長室には私服の警察官が大沢社長に質問をしていた。

「大沢さん、鳴海さんのご遺体を調べると、背中から腹部にかけて幅広いベルトのようなもので何回も鞭打たれたような腫れが幾筋もついていましてね。着衣にはその形跡は見つからないんですよ。どこか別の場所で裸にされて暴行を受けたのではないでしょうか。確かに直接の死因は縊死と判断されますが。しかし、誰かが首吊りをさせたとも考えられるのですよ。自殺しなければならない原因とか、社長さんの知っていることをお話してください。社長さんだったらご存じでしょ」

「……」

「貴方が最も信頼していた鳴海常務さんでしょ。社長さんが何かをご存じない筈はないんじゃないですか」

「余りにも突然なことで……」

「では、鳴海常務さんの執務机に案内していただけますか」

と言って立ち上がりながら

「今お話したような状況で他殺の疑いもありますので、鳴海常務さんの使っていた机、ロッカー、乗用車は後程当署で調査しますので封印します。手をつけないでください」

と指示をした後、

「昨夜、鳴海常務さんは東京へ出掛けていたそうですね。誰と行ったのですか」

「経理課長の山本と行きました。しかし、山本は午後八時三十分頃鳴海常務と別れて、午後十時前には帰宅したと言っています」

との大沢の答えに

「山本経理課長さんを呼んでください」

と山本経理課長を呼ばせ、課長が社長室に入ると同時に、警察官は

「しばらく課長さんとお話したいのでこの部屋を使っていいですか」

と体良く大沢社長を追い出した。

社長室を出た大沢は、来客用の応接室に入り、十行以上ある取引銀行の内、主力銀行の都市銀行大信銀行厚木支店の田中支店長と、地元銀行の相模銀行厚木支店の平出支店長に「鳴海常務が今朝亡くなった」旨の電話を入れたが二人とも外出中で、伝言を依頼した。

大沢社長はこの数年間、会社財務は全て鳴海常務に任せきりで、月例の報告を聞く限り全て順調に推移していると信じ切っていた。

全く、鳴海常務に何があったのか見当もつかない。専務をはじめ営業担当役員、工場長等に聞いても、皆原因が分からず呆然としている。

その日の地方紙の相模新聞夕刊には、「インパルス工業株式会社、経理担当鳴海敬介常務取締役、謎の自殺？」と書かれ、「全く突然のことで、心当たりもなく困惑している」との大沢社長の談話も掲載されていた。

その夕刊に目を通し終った時、大信銀行田中支店長か

ら電話があり、お悔みの挨拶の後
「御社の当面の資金繰りの概要は、融資課長が鳴海常務さんからお聞きしているとは言っていますが、詳しくお聞きしたいので、お取込み中のところ恐縮ですが近日中に担当をお伺いさせたいと思いますので、山本経理課長さんに宜しくお伝えください」
との要請があった。
また一方の相模銀行厚木支店からもその直後に電話があり、やはり不在の詫びとお悔みの挨拶の後に、
「突然で恐縮ですが、明日午前中に融資課長と担当者をお伺いさせたい。その折、支払手形の振出明細としての支払手形記入帳と振出した手形控え等を見せてほしい」
との連絡が入った。極めて事務的な冷たい響きで、大信銀行の支店長の話とあわせて考えると
「おかしいな？」
「どうして支払手形の発行状況を銀行が調べる必要があるのか？」
と不安ともなんとも言えない思いがした。が、しかし、会社経理の全てをもう何年も鳴海常務に任せて何一つ落度がなく、どこの銀行も応援してくれるし、売上規模の飛躍的増加と毎年の増収増益の業績から、最近では幾つかの証券会社が「三年後の株式上場」の話も持ち込んで来ていることに思いを巡らした大沢は、むしろ鳴海常務の「突然の死亡」と言う非常事態に際して銀行が応援してくれる好意と考えると、先程感じた不安は嘘のように何処かへ行ってしまった。

相模銀行厚木支店長は、一ケ月ほど前、本店の融資部から
「インパルス工業の資金需要に疑問がある。至急、会社実態調査を調査部に依頼のこと」
と注意を受けていた。しかし、大手都銀の大信銀行他が積極融資を展開していたので、支店長は鳴海常務や山本経理課長等に対して来月下旬に調査に入ることを言いそびれていた。
そんな経緯から、翌日の六月二十一日に融資課長と担当者を派遣してインパルス工業㈱の経理実態調査を実施した。
結果は、今年に入ってからの、資材購入担当部の帳簿から計算される実際に支払わなければならない金額の合計額と、経理部で発行した資材購入支払手形の総額との間に大幅な開きがあり、少なくとも数億円以上の「空の支払手形」が発行されていることから、その分の資金がどこかに流れていることが判明、事の重大さにびっくり仰天した融資課長からの電話報告を聞いて駆けつけてきた平出支店長は
「社長さん、どうもおかしいと思っていたのですが、経理帳簿上の資材の仕入額が、資材部の実際の仕入額を大

幅に上回っていて、資金がどこかに流れていますね」
「そんな……」
と、全く思ってもみたことのない事実を突き付けられ、頭の中が混乱して言葉もない大沢社長は、蒼白な顔で同席している経理課長の山本に
「君は知っていたのか？」
と一言詰問したが、経理課長の山本は、
「私には全く分かりません。作成され回ってきた伝票と照合して、鳴海常務の指示に従って毎日処理していただけです」
後は大沢社長が何を聞いてもこの繰り返しだった。
平出支店長の隣に座っている唐島融資課長は、調査した数字ばかりぎっしりと書き込まれた紙を振り上げ、興奮して
「山本さん！　貴方と鳴海常務さんが銀行に持ってきた、『インパルス工業の資金収支表』に記載されている数字は実績と全く違いますね。どういうことですか！」
「……」
「私達は、あなた方から提出される資金収支表をもとに会社への資金応援をしているのですよ。私達銀行をだましていたのですね！」
と、自ら押え切れない怒りと共に、支店長の前で『融資課長の自分は、今、このことを初めて知って憤っている』ことを必死に示していた。山本は
「全て鳴海常務さんが作成されましたので、私には分かりません」
と答えて後は全く黙してしまった。

一方、大信銀行厚木支店は、その翌日の六月二十二日、鳴海常務の資金需要説明に疑念を持ち始めていた木村副支店長をリーダーとして支店独自の調査班を結成、会社が現実に使用している諸会計帳簿をチェックした結果、今年に入ってから総額三億円強の「架空支払手形」の発行状況を確認、更に鳴海常務の机の中から、八億円強の融通手形の発行残高を推定させる十数枚の支払手形発行控えが発見された。途中から状況を見に来た田中支店長がそれ等の報告を聞いて、直ぐにその場から銀行本部の「融資管理部」に連絡、今後の対応打合せを開始した。

その日の正午過ぎから、山本経理課長の姿は社内にも自宅にも何処にもなかった。

第二部　恐ろしい陰謀

昭和五十年四月、大川良一は、借金をした人に対して情け容赦なく法律を適用することで近年急成長してきた金融会社「カンセイ」社長室で、社長の神田省吾から次

のように申し渡されていた。そこには「カンセイ」の法律顧問の鈴木が同席していた。

「次のことを約束してくれれば、君の今までのことは水に流そう。つまり、クローネ商事の財務帳簿の内容を君が見事に粉飾して当社から融資を引き出し、結果的に当社の貸付金五千万円が回収出来なくなったこと。それは全て君が計画的に行なったことだ。それを帳消しにするために、俺の弱みを握ろうとして秘書を連れ出し手込めにしたこと。これはまだ警察沙汰にはしていない。これから言うことを約束すれば、この二つをなかったことにしてやるよ。どうかね」

「……」

「しかし、君の財務に関する知識は凄いな。公認会計士のチェックもパスしたよ。舌を巻いたよ。俺達を易々とだました。凄い腕だよ」

「約束って、何ですか？」

「約束とはこういうことだ。全部で三つある。一つは、君は今直ぐ名前を権藤敬介とすること。その戸籍謄本と住民票はここにある。生年月日は昭和二十年八月二十日。本籍は北海道釧路市だ。詳しくはここに書かれている。二つ目は、君は経理事務の能力があるから、当方で指示した会社に経理マンとして就職すること。三つ目は、ここにいる鈴木を私の代理人として連絡させるから、以後ずっとその指示に従うこと。以上だ。どうする？」

「権藤敬介って誰ですか？」

「親も子もない天涯孤独の男だ。彼はもうこの世にいない。しかし、死亡届けは出されていない。戸籍上は生きている」

「分かりました、と言わなければ帰して貰えないんですよね？」

「分かっているじゃないか」

「じゃ、受けましょう。だけど、いつ迄にどのような指示があるのですか？　いつ迄続くのですか？」

「まあ、任せておけ。悪いようにはしない。君の能力を生かして生活できるようにはしてやるよ。よし、今直ぐこれから鈴木の指示するマンションに移れ。権藤敬介として。生活費は鈴木から受け取れ」

案内されたマンションは、東横線の新丸子駅から歩いて数分の、多摩川が良く見えるところだった。

「俺は今日から権藤敬介か。天涯孤独な男と言っていたが、俺と同じだ。どんな奴かな」

と思いながら窓外の景色を眺めていると、鈴木が

「今まで住んでいたアパートからの引っ越しは全てこちらでやるから、お前は一切顔を出すな。夕方には荷物が届くからここで待っていろ」

と言い残して出ていった。

それから二ケ月が過ぎた。その間、食事は外、退屈でパチンコと映画の毎日にも拘らず、二週間に一度は必ず彼が部屋にいるときに鈴木がやってきて、少々遊んでも不自由しない程度の額の生活費を届けていた。それは監視していることを無言で示していた。

そんなある日、チャイムが鳴った。訪ねてくるのは鈴木しかいない。生活費には早いと思い玄関のドアを開けると、そこには鈴木と共に神田が立っていた。

「おい、背広と白地のワイシャツ、地味なネクタイで外出準備をしろ。就職先を世話する。黙ってついてこい」

と鈴木が抑揚のない冷たい沈むような声で命令した。

一時間あまり「ベンツ」に同乗させられて着いたのは、神奈川県津久井湖近くのインパルス工業株式会社本社である。

まだ四十才代前半の働き盛りの大沢社長は、神田と、神田の法律顧問の鈴木と、権藤の三人を応接室に案内して

「神田さん、初めてお目にかかります。貴方を良く存じ上げている村木一政は私の大学時代からの親友です。彼から貴方のところに経理マンの紹介をお願いしたと先週連絡がありました。早速今日はお越しくださって恐縮です」

「初めまして。私は村木一政さんには昔からお世話になっています。そんなわけで経理といっても工場の原価計算、工業簿記、商業簿記いづれにも堪能な権藤君を如何かと思いまして本日連れて参りました。彼は大学卒業後、工場の経理を担当した経験があり、直ぐにも間に合うのではないかと思います。独身、もう直ぐ三十才です。企業会計原則と工業簿記の虫の様な男です」

と話して、権藤の方を向いて

「君、大沢社長さんにご挨拶しないか」

と促した。

「権藤です。よろしくお願いします」

「経歴は既にお聞きしております。権藤さん、私と一緒に働いてくれますか？　経理を一手に担当していた者が病気で退社したものですから。早いほうがいいでしょう。今度の土曜日に引っ越しをして、来週月曜日から勤務してくれますか」

インパルス工業株式会社は、昭和四十年に大沢社長の父親が創立した。合板メーカーとして急成長して、今は資本金は五千万円、年商は二十億円に達している。父親は一昨年急逝し息子である大沢卓司が引き継いだ。

販売先は、大手家具メーカーと大手家電メーカーが主体であった。工程を省略化した大量生産によってコストを引き下げ、社歴はまだ十年しか経っていないが、日本の景気の上昇に加えて既存メーカーのシェアーを徐々に

侵食して成長し続けている。
大沢社長の一番の悩みは、会社の成長に伴って必要とする人材が揃わないことであった。

二年が経過した。権藤敬介の努力によって、分散している三つの工場のコスト管理が徹底され、売上増加とともに会社の収益力は更に上昇し、大沢社長の権藤に対する信頼は格別なものがあった。そんなとき、地元の古い料亭「さがみの」の一人娘明子の婿に権藤を欲しいとの話が持ち上がった。大沢社長のお供で時々姿を見せる権藤に女将が目をつけた。一人娘は気立ては良いが左足がほんの少し不自由だった。その為か婚期を逸して三十才を少し過ぎていた。権藤が料亭の仕事にはタッチしないことが条件で、住居も料亭とは別に構えるという。大沢は、権藤を自社にいつ迄も繋ぐための絶好な条件と乗り気になり媒酌人を買って出た。

そんなある日、鈴木から権藤宛に
「今夜八時、本厚木駅前のホテル山川に来るように」
と電話があった。
行くと、そこには神田と鈴木の二人が待っていて
「お前は婿に行け。お前の戸籍は釧路の権藤から『さがみの』の経営者一族の鳴海に変わる。そうすればお前が昔大川良一であったことはこの世の中から完全に消える。全ての手続きは鈴木が行なう」
と神田が一方的に指示した。権藤は神田の手から逃げられないことを感じていた。この二年の間にも一ケ月に一度位の割りで鈴木から連絡があり、どうして知るのか分からないが、彼の状況は全て握られていた。

権藤の結婚披露宴は料亭「さがみの」で盛大に行なわれた。大沢社長夫妻の媒酌で、多数の地元名士と共に、新郎側来賓として神田と鈴木、そして新郎ご友人・ご家族ご親戚として権藤の全く知らない「大学時代の友人」が五人と、「北海道の叔父さん、叔母さん、おばあさん」等が出席していた。
結婚の話を決めるとき、鈴木から、「親戚・友人の出席は形を作るからお前は一切黙っていろ」と指示を受けていた。
その後、毎年十二月には、大沢社長の自宅に結婚式に出席した北海道のおばあさん「権藤タミ」の名前で大きな蟹が必ず送られてきた。

昭和六十一年五月、インパルス工業㈱取締役会で、鳴海敬介が取締役経理部長に推薦されその二年後の昭和六十三年には常務取締役に就任した。
常務取締役に昇進したとき、それまで大沢社長が握っていた「会社の実印」を鳴海敬介が管理するようになり、更に銀行関係の書類で社長個人保証などの手続きの必要性から、大沢社長個人の実印も鳴海敬介の手許にあることが多くなった。

結婚してから十一年を経過した。この間、鳴海敬介にとっては生まれて初めて味わう、平凡な中にも家庭的な暖か味のある日々を過ごしていた。九才と三才の二人の女児に恵まれ、社内はもとより地域社会からも「インパルス工業の鳴海さん」として、また料亭「さがみの」の婿として知名度も上がっていた。
「この幸せな日々を失いたくない」
これが、子供が生まれてからの、鳴海の本心だった。

常務取締役に昇進して数日後、鈴木からではなく神田自身から電話があった。
「常務取締役昇進のお祝いを行なう。今度の日曜日、午後七時に横浜山下公園前のホテル神奈川に来るように」
との指示とも連絡とも言えない口振りだった。行きたくなかった。今でも月に一度は鈴木から電話があった。特に要件は何もない。ただそれは
「監視しているぞ」
を感じさせる電話だった。

当日行くと、ボーイにレストランフロアーの奥まったところの個室に案内された。なんと個室の入り口には「インパルス工業株式会社　鳴海敬介殿常務取締役ご就任祝賀会会場」
と仰々しく書かれている。
部屋の中には、神田と鈴木の二人が座っている。窓から山下公園と港の夜景がよく見える。湾の中を行き来する船の灯が美しい。
形だけの乾杯の後、個室の入り口に立っているウエイターを遠ざけると、鈴木が話し始めた。
「神田社長は今日と言う日の来るのを十年以上待っていた。インパルス工業も今や資本金三億円、年商二百億円に達しようとしている。実力経理担当常務はお前だ。お前は神田社長に今までの恩を返せ。今日お前があるのは全て神田社長のお陰だ」
そして更に続けた。
「架空仕入れ操作によって金を引き出せ。二百億円以上の売上規模の中で二～三年あれば十億円程度は問題なく出来るはずだ。方法は全て手形で行なう。詳しくはこれを読め。その他融通手形の相手方として協力せよ。仕組みはそこに書いてある通りだ。そして俺の指示に従って操作せよ」
と、架空仕入先やその方法などが詳しく書かれた紙を鳴海の前に置いた。その内容は二つあって簡単に言えば、一つは『架空仕入を計上して金を浮かせて、その金をこ

ちらへ寄越せ』と言うことと、二つ目は『融通手形の相手となって協力せよ。絶対に迷惑は掛けない』と言う内容だった。

暫くその紙に目を通した鳴海は

「融通手形の協力はなんとかするとしても、資金の引き出しは出来ない」

「そうか。その協力をしてもらえなければ、今日ここに呼んだ意味がない。お前の過去を全部ばらそうか。今の平穏な生活も、何もかもフッ飛ぶぞ。可愛いお嬢ちゃんもね」

「……」

「どうする？　お嬢ちゃんが可愛くないのか」

「……」

「……」

「分かった。金額は？」

「さっき言った通り最低十億円だ。それ以下は駄目だ」

「……」

しばしの間、双方の沈黙が続いて、鳴海が言い出した。

「その額を五億円にしてくれ。その額までなら全体の資金繰りの中で二～三年の間に自然体に処理できるだろう。それが限度だ。そして、それをやり終わったら俺を解放してくれ」

鈴木が神田のほうを向いて

「社長、約束していいですね。ただし、その五億円はこれからの二年間に実行することとして」

神田が頷くのを見ながら、鳴海は、要請された融通手形の協力に不安となり

「鈴木さん、インパルス工業は潰さないでしょうね」

と厳しい口調で念を押した。

これに対して、神田が今日初めて口を開いて

「当たり前だ。お前には迷惑はかけないし、またお前なら、今お前が言うように誰にも分からないように処理できるはずだ。俺はお前の能力を評価している。これを最後にお前を解放しよう。融通手形を協力してもらうのも、資金引出し五億円が終ったらおしまいにするよ」

架空仕入操作を始めてから三年を過ぎてくると、金額もだんだんエスカレートしていた。こうなってくると、財務関係書類の辻つまを合わせるために、銀行筋には尤もらしく話してある架空の販売先と架空の仕入先のことを社内の営業や工場関係の幹部の人達に気づかれないように、取引銀行との話し合いは全て鳴海常務、山本経理課長の段階で処理し、社長や工場長は儀礼的挨拶だけにとどめるように鳴海は全神経を使っていた。あるとき、大信銀行副支店長から

「本店の融資部が行員教育の為に工場見学をしたいと言っているので、工場長さんに手配しておいていただきたい」

との申し出も、鳴海常務と山本課長が工場の入り口で

大信銀行一行を待って自ら工場内を案内して、早々に昼食の接待に「さがみの」へ連れ込んでしまったりした。

鳴海常務が亡くなる二ケ月前の平成二年四月二十日、彼は大変なことを発見した。それは、大沢社長から「相続対策に必要なので、自分所有の土地建物の相続資産評価額を算出して欲しい」と頼まれた。そこで、鳴海は大沢社長所有の全ての土地建物の登記簿謄本を取り寄せると、なんと大沢社長所有の土地建物の全ての登記簿謄本に

債権者	奥羽木材株式会社
債務者	インパルス工業株式会社
債権の種類	手形債権・売掛債権

と記載され、続いてその後に、代物弁済契約による停止条件付所有権移転請求権仮登記云々と書かれている。日付は平成二年三月三十一日、丁度今から二十日前に行なった仮登記だ。ペーパーカンパニーの架空仕入先とはいえ奥羽木材㈱は法律上は法人格を持ったキチンとした会社である。

これでは、奥羽木材㈱に渡してある支払手形を万一不渡りにしたら、大沢社長個人所有の土地建物の全部が奥羽木材㈱の所有になってしまう。相続対策どころではない。

一年位前のこと、鈴木から呼び出されて横浜のホテルで会ったときのことを思い返した。その時、鈴木が

「奥羽木材㈱のインパルス工業㈱への手形債権が多額になるので、大沢社長の個人保証を欲しい。当方で、インパルス工業の手形を換金するときに必要なんでね。これはどこまでも手形の換金上の形式的な書類だよ。安心しろよ。君には迷惑はかけない。君から再三頼まれている『終りにする時期』を神田さんと相談するよ」

と言って手形債務五億円に対する個人保証書を作成して持ってきて捺印を求められたので、大沢社長には内緒で大沢社長の個人の実印を押して社長の印鑑証明書と一緒に渡した。その保証書には「必要に応じて個人資産を担保提供することの応諾文面」も記載されてあったので、それについて質問した鳴海に対して

「君がいるところに、担保の登記等する訳ないだろ」

の言葉を信用してしまった。

それから、鳴海常務は鈴木に何度も連絡したが時間が取れないと言って会おうとしない。六月一日、神田に直接会って仮登記を解除してもらおうと「カンセイ」本社事務所で神田が来るのを待ち続けていた。夕方五時少し過ぎ、神田と鈴木が連れだって戻ってきた。

三人で「カンセイ」の社長室に入ると同時に、鳴海は神田と鈴木の前で土下座して

「お願いだから大沢社長の個人資産の仮登記を外してくれ。そして金を引き出すのは終りにしてくれ。それと融通手形の発行ももう止めにしてくれ」

と哀願した。神田は

「融通手形では一度も君に迷惑を掛けたことはないだろう。まあ、よく考えておくよ。今日はこれから来客もあるし、兎に角悪いようにはしないから今日は帰ってくれ」

その翌日六月二日の夕方、インパルス工業の本社三階大会議室で「年間売上高二百五十億円達成社内祝賀会」が催された。大沢社長は今では地域の多くの公職につき、そちらのほうで多忙を極めて、会社には毎朝短時間顔を出す程度となっている。

今日の祝賀会には、インパルス工業の全役員は夫婦揃って出席することになっており、大沢社長夫人咲子とその隣に立つ鳴海の妻明子を、他の役員夫人達が取り囲むようにして談笑していた。社長の大沢も何時の間にかその輪の中に入り上機嫌でいる。二次会は全役員夫妻が出席して「さがみの」で催すことになっている。社長婦人の咲子が、少し離れたテーブルで経理部の男女社員と談笑している鳴海に、こちらに来る様にとニコニコしながら手招きしている。

その翌日の夕方、鳴海は東京の「カンセイ」の本社に出掛けたが、わざと逃げているのか神田にも鈴木にも会えない。

それから数日後、電話を掛けても不在と言うし、電話を掛けてくれるように依頼しても一向に掛かってこない。日はどんどん過ぎていく。その間、一回でも手形を不渡りにすることはできない。このままでは架空仕入分だけ確実に資金が流出する。そして増え続ける不足資金を調達する為に、金融機関から増加運転資金として借り増しをして資金繰りの辻つまを合わせなければならない。『悪循環の、自ら止めることの出来ないベルトコンベアーの上を、否も応もなく走り続けさせられている』自分の姿に半ば絶望的になっていた。

主力銀行の大信銀行、相模銀行も既に資金繰りそのものを不審に思っている節が感ぜられる。特に大信銀行木村副支店長が何かをかぎ付け、「銀行本部の企業診断チームによる診断申入れ」をしてきた事も彼を追い詰めている。

妻の明子は毎日夕方から出かけて夜遅く料亭「さがみの」から帰ってくるので、平日顔を合わせるのは朝の短時間のみ。夫が地場一流企業の常務取締役に昇進して、仕事と社用のお付き合いの両方で毎晩遅くなっているとしか感じていない。

鳴海にとっては、日曜日のひととき、二人の娘と過ごしている時が唯一幸せを感ずる時だった。

六月十九日、午前中に漸く鈴木から電話があり、会ってこの前の返事をしたいとのこと。夜九時に、銀座松坂屋から道を二本入ったところにあるクラブ「マル」を指定された。

たまたま、その日は午後五時から「全日本合板工業会年次総会」が日本橋で開催されることもあり、鳴海は社長の代理として出席、そこには山本経理課長も同行した。それも午後七時には終ったので、鳴海の馴染みのクラブ「仔猫」に二人で顔を出して時間を潰した。

午後九時少し前、クラブ「マル」に入ったが神田も鈴木もまだ来ていない。九時半になって漸く二人が現れた。三人が席に着き軽くビールを口にしたとき、待ち切れない鳴海は

「鈴木さん。仮登記の抹消を早くしてくださいよ」

と鈴木に食ってかかるような口調で迫った。ところが鈴木は

「インパルス工業の支払手形を持っている限り抹消は出来ないよ。そんなこと君、当然だろ。こちらには手形債権があるんだ」

と平然として言った。

血相を変えて

「約束が違う」

と迫る鳴海に対して、鈴木の態度は一変した。

「俺達の持っているインパルス工業の支払手形は正真正銘の正規の手形だ。インパルス工業が一度でも不渡りを出せば、社長個人資産は全て当方のもの。大沢社長の承諾書も貰っているからね。印鑑証明書も。これまでのことは君が一人で全て行なったもの。大沢社長の個人実印の盗用も。君は有印私文書偽造だね。俺達は知らないよ。権藤敬介がずっと以前死亡していることを立証すれば、君は一体何者なのかということになる」

「……」

「君は良くやってくれた。架空仕入れ計上で、この三年の間に十億円は当方に協力してくれたね。感謝するよ」

そして続けて

「君が作り上げている財務書類、どれ一つとってもボロは出していないね。さすが凄腕だね。その証拠に大手証券会社が上場を口説きにいっているんだろ。会社内は勿論のこと、あそこまで取引銀行はじめ世間をだます手際には感心したよ。実際には既に赤字転落している会社なのにね。君が行なった財務書類の完璧なごまかしそのものが、君が主役で架空仕入の全てを実行したことを立証する証拠になるね」

「……」

飲み干した空のコップを握りしめている鳴海の左手が

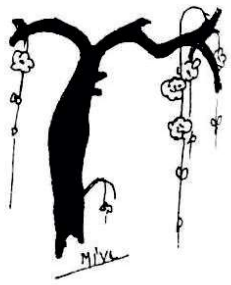
震えている。
いつの間にか神田の姿がなくなっている。鳴海の頭の中はそれどころではない。鈴木は続けて
「君、全ては終わったよ。銀行筋も漸く資金繰りの異常さに気が付いたらしいね。それから融通手形のことだけど、俺のほうから渡した手形は振出人が倒産したので払えないよ。八億円か九億円くらいある君の方の振り出し手形は、期日が来る都度銀行に呈示させてもらうよ。宜しく支払ってくれ。これでインパルス工業も終りだ。俺達は手形債権者として法律的に債権回収に入るよ」
「鈴木！　貴様！」
と立ち上がって、左手に握っていたコップを投げつけると同時に右手で鈴木の胸倉を摑んだ。
鈴木も立ち上がりながら
「お客様のお帰りだ。ご自宅までお送りしろ。俺が言ったとおりにしろ！」
と大声を出すと、どこにいたのか黒ジャケット姿の男が数人出てきて、喚き続ける鳴海敬介を引き摺るようにして外に連れ出し、黒塗りの乗用者に押し込んだ。

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）　（原稿締切日）
春季号……二月一日……十二月三十一日
夏季号……五月一日……三月三十一日
秋季号……八月一日……六月　三十日
冬季号……十一月一日……九月　三十日

脚本
「開港・港崎（みおざき）心中」
――横浜豚屋火事顚末――

相原精次



登場人物

五兵衛……
遊女鶴岡……
遊女屋の女将……
問屋日野屋真右衛門……
鉄五郎……
ナレーター……

時代　江戸末期

舞台
新興横浜の関内居留地。港崎仲之町（みおざきなかのちょう）の遊郭の中の一部屋。
遊女鶴岡は、物思わし気に一人部屋の中にすわっている。

ナレーション
安政元年（一八五四）神奈川条約、さらに四年後には欧米諸国との修好通商条約が締結された。ここに日本は長い鎖国を解いたのである。入国を認められた欧米諸国は、極東のこの国に新しい夢を描き、東京湾内に国旗を掲げたマストも厳めしい巨船を次々に送り込んだ。
東海道神奈川筋の寺々が臨時の領事館として使われることになったため、現在の横浜駅を中心とした平沼から東神奈川あたり一帯の沖は、巨大な外国船で賑わった。
当時、大きな船の着く設備もない不便さに、幕府は急遽、東海道筋から離れた横浜村に港を築くことにした。横浜村は戸数百戸余りの寒村にすぎなかったが、村の海辺の沼地を埋め立て、新しい町を作り、その先端部に桟橋を築いたのであった。

大岡川と中村川とで隔てられた蝶が羽根を広げたような形に造成されたこの地区は、三カ所に架けられた橋で通行する以外交通が遮断されており、各橋に関所が設けられていた。長崎の出島の形態に似たその中は、日本人の商人の建物が並ぶ地区と、外国の商館の地区とを中央の大通りを挟んで二分して、新しい町としたのであった。

日本国内は開国に大きく揺れ動いていた。開国反対派による討幕運動はますます激しくなっていた。そうした動揺にもかかわらず、横浜関内の町は賑わいを増し、国際色豊かな港都は見る間にできあがっていった。次々に外国商館が建ち、一攫千金を夢見る日本人の商人や問屋も店を構えた。わずか一・二年の間に、何もなかった場所がこれほどの変わり様を見せたことは日本にこれまで例がなかった。

開港と同時に、町の中央部には港崎町と名づけられた遊郭も置かれた。堀と塀で囲まれたこの広い遊郭は、内外の商人たちの出入りで賑わった。

遠く遊女たちの嬌声や、酔客たちの戯れる声。遊女鶴岡は部屋で一人物思いをしている。そこへ女将が入ってくる。

女将　どうかね、鶴岡。もうその気になってくれたと思うがね。

鶴岡　……

女将　同じ港崎町にいて、異人さん相手と、日本人相手とじゃ、どれほど実入りが違うか、考えてもごらんよ。

鶴岡　……

女将　異人さんはね、めっぽう女には優しくてね、みんなここへ来たては気味悪がってた子がね、今じゃ、誰もが異人さん相手じゃなきゃ嫌だって言っているほどなんだよ。このあたしだってさ、もっと若けりゃ、って、そう思っているくらいだよ。

鶴岡　……

女将　女はね、ほんとに稼げるっていうのも、そう長い間じゃないんだよ。いつまでたっても若いと思っていちゃだめだよ。男ってのはね、（鶴岡の顔をのぞき込む）

鶴岡　（下を向いたまま反応しない）

女将　お前もねんねじゃあるまいし……品川からわざわざここに呼んだ意味は、お前だってよく承知してくれているんだろう。お前には、大枚払っているんだよ。

鶴岡　……

女将　青くても見る目ってのは一緒なんだね。お前を見た異人さんは、必ず「ツルオカハドウシマシタカ」って言うからね。ほら、おまえ、ここへ来たばっかりのとき、弁天様へお参りに行ったろう。あのときずいぶんの異人さんがお前の姿を見ていたらしいんだよ。中でもね、一番館のエゲレスさんがお前を是非って言ってるんだよ。遊女とは違う。お前、ラシャメンになれば、こんな店なんかにくすぶってないで異人館で生活もできるし、実入りだって何倍になるかしれやしないよ。

鶴岡　……

女将　エゲレスさんのラシャメンにおなりな。ねェ。

鶴岡　……

女将　（声を荒げて）いい加減におしよ。お前にはとりわけお金もかかっているんだからね。そういつまでも我侭は許さないよ。こうして、三月もお前の機嫌をとっているっていうのも、お前可愛さのためなんだってことも知っておくれね。でも、そういつまでも甘い顔を見せていると思ったら大間違いだよ。（立ち上がり、行きかかりながら、厳しく）ラシャメンが嫌なら、すぐ異人部屋へ行ってもらうよ。港崎で異人さんが嫌だ、なんていうのは聞けない話だよ。

女将出ていく。鶴岡は、大きくため息をつく。

チョンキナを囃し、歌う声と供に女たちの嬌声、ひときわ高くなる。

溶暗

舞台前面にのみライト。港崎町の遊郭の塀が続く、大岡川に沿った路上。塀の中から三味線や、女の嬌声が聞こえてくる。

五兵衛、背を丸めて、元気なく下手に向かって歩いている。女たちの嬌声が気になっている様子。上手から、居留地内にある問屋の主人、日野屋真右衛門、せかせかと歩き、先を行く五兵衛にちょっと関心を示すが、知らぬふりをして、追い抜いてゆく。五兵衛、抜かして行く人の方を見る。「ハッ」として、あわてて近づき、前方へまわる。

五兵衛　日野屋さんじゃねェですか。

真右衛門　（びっくりしたように）どなたさんでしたかね。（見つめる）

五兵衛　中津川の五兵衛ですよ。五兵衛。

真右衛門　中津川の……ああ、いつぞや、理助さんと一緒にお見えの、近頃糸商いを初めたゆうてはった、あの中津川のね。

五兵衛　その後、どうなったのかなし。まさか、お

忘れじゃねェだろうと思いますが。どうなりましたかなし。

真右衛門　理助はんは、もう中津川へお帰りでおますか？

五兵衛　あの男は、もうとっくにな。また、そのうち、新しい荷物を持ってくるだずら。

真右衛門　そうですか。そのときはまた、この日野屋に立ち寄ってもらいたいものですな。また、お会いしたときは、よろしゅう言うといておくんなはれ。ほんじゃ、急いでますよって。（行きかかる）

五兵衛　（怒ったように）ちょっと待って下さいよ。日野屋さん。

真右衛門　何ですね。そないな大きな声で。

五兵衛　その後、どうなっておりますかなし。俺の分は。

真右衛門　俺の分？

五兵衛　ずいぶん、遅れてるだずら。

真右衛門　遅れて？　はて、何のことでおましたかな。

五兵衛　何のこと、と言をっせるのか！　忘れているはずはなかろうが。（かみつくように迫って行く）

真右衛門　おっと、そんな怖い顔で迫っちゃ、あきまへん。……あ、あ、思い出しましたよ。思い出しました。外国の商人へ売った一件でおましたわなァ。

五兵衛　そうですがなし。確か、相手はエゲレス人の、エート、なんて言ったか、ボ、ボ……

真右衛門　えェ、えェ、ボイルですゃろ。（真顔になって）それですがな、それ。あれはあきまへん。手前どもも、あのボイルには一杯食わされたんですわ。荷を受け取るとすぐに手配しとりました船に積み込みよりましてな、そのまま船に乗ってしもうたんか、姿を見せませんのですわ。迂闊でした。手前どもも、間に入った者として、あなたはんには申し訳ない、思うておりますのや。ほんまに。

五兵衛　そんなことは、この前も聞いたがなし。何度同じことを言う人があらすか。

真右衛門　そうでしたかな？　この前も、同じことを。……そりゃそうですわ。事実がそうなんやから、他に言いようもおまへんはなァ。

五兵衛　あんたは仲介者として、そんないい加減なことで済むのかなし。確か、この前はあと三十日待ってくれ、三十日あれば何とかなる、そう言っておりやしたな。その日なんですよ、今日は。俺は一日中、あんたを捜しまわっていたんだ。

真右衛門　そうですか。今日が、その三十日目でおましたか。そりゃ申し訳ないことをしましたな。別にあんたはんから逃げとった訳やないんですが。ええ、ええ、糸商いはあんたはんお一人でもなし。また、ここんとこ、糸がちっと落ちてましてな。糸屋はんとは、あんまりなァ……まァ、ついつい、他の商いに紛れて、一日中飛び回っておったんですわ。

五兵衛　（ムッとする）

真右衛門　まま、そうお気を悪うせんと。いや、何もな、あんたはんを若いからって見くびって言うとるわけじゃないんでして。同じ会社の汽船が入っていいはずやったんやがね。今日あたり。来ないんですよ。来たら、ボイルの件、はっきりさそう、思うとったんですが。来ないもん相手じゃ、今んとこ、どうにも、なりませんわ。

五兵衛　あんたはどうにもならんで済んどるかもしらんが、俺の方はな、金子を借りて、国で糸を買って、横浜まで出てきたんだ。しかも先払いで。高い荷車代も払ってしまっておるに。国じゃな、俺の帰りを首を長くして待っている者が、大勢いるんだ。俺が手ぶらでどうやって国へ帰れると思うとりやす。残ったのは借金だけ。一家中首をくくっても間に合わんがなし。

真右衛門　首をくくんなはる。そんな滅相もない。

五兵衛　俺が横浜までわざわざ来たのは何のためだと思うだずら。あんたには、その気持ちわからんのかなし。

真右衛門　そりゃ気の毒や思うとりますがな。そりゃもう。それじゃこうしましょうか。手前どもも、仲介に入った者の責任として……どうですやろ、洋銀で百枚までなんとかしましょう。

五兵衛　洋銀で百？　バカを言わっせる。そんな話があらすか。相場で言ったら、八百は下らないって話だったに。

真右衛門　ほほう、ご不満ですか。こちらも情けを持って言うてやっていますのやで。それが不満じゃ、割に合いませんがな。どうもならん。

五兵衛　お前は、お前は、盗人だ。盗人だ。（胸倉を摑みに行こうとする）

真右衛門　何をしなはる。離しなはれ。（手を払いのける）人聞きのわるい。そう言わはるんやったら、御運上所なりと訴えたらよろしいがな。この川のように、結構な大岡裁きもしてくれますやろ。

五兵衛　もう訴えてあるわい。とっくにな。

真右衛門　ほほう。それはお手回しの早いことで。それで、御運上所は何か言うとりましたかな？

五兵衛　（力なく）今、日本にいない者を取り調べ

るわけにもいかん、ということだ。

真右衛門　そりや、まァそうですやろな。そりゃ、あたりまえのことでおますわな。

五兵衛　仲介人との争いなら、神奈川の奉行所へ訴えるがいいと言われた。（少々すごんで）御奉行所へだぞ。

真右衛門　ほゝう。手前どものことを訴えなさる、御奉行様へ。手回しの早いあなたはんのことやよって、もう訴えましたかな。正式な文したためて。ええ、どうですか？

五兵衛　……

真右衛門　は、あ、訴状が書けへん。

五兵衛　……

真右衛門　御運上所へ訴えたとき、したためてくれはった、何とかいった、あのお国のお人に、又たのまはったらええがな。もう一度。

五兵衛　……

真右衛門　ええ、どうしなはった。

五兵衛　（じりじりする）

真右衛門　ほほう、そのお人はもう国元へ戻らはった。そうですか。それはお気の毒になァ。何でしたら、その訴状、手前どもがお引き受けしましょうか？お安く、お受けしまっせ。

五兵衛　お前は。（摑みかかる）

真右衛門　いやいや、これは冗談ですがな。冗談。（五兵衛の手を激しく払いのける）あんさんも、短気なお人でおますなぁ。……どうですかな、百洋銀が、手前どものせめてもの誠意のつもりなんやが、あんたがそれだけじゃいらん、あくまでも争う、そう言わはるのやったらそれもしかたがないんですが、……どうです、短気な判断せんと、わたしどもの誠意受けなはっては。何かと毎日、お入りようですやろ。

五兵衛　（一瞬力なくなる）

真右衛門　あ、そうやったな。確か、荷をお受けしたそん時に、四十洋銀だけ、お先にお渡ししましたわなァ。あれも、その一部とお考え頂いて、手前どもの誠意は、残り、あと六十ということになります。どうです、これで手を打っては。

五兵衛　ウーム、きたねェ、きたねェ。お前は全部承知してやっていたんだな。俺はすっかりだまされていたんだなし。お前というやつは。（再び胸倉を摑む）

真右衛門　やめなはらんか！　こんな道の上で。私はなァ、これから、オランダさんをご接待しますのや。この中の岩亀楼でな。（女の嬌声、ひときわ大きく聞こえる）お、、お、、どなたか、派手にやっておるわ。気ィがせきますな。異人さんは、大門をくぐるのが大好きでなァ。それはそうと、いつでしたやろうか、数度、あんさんに似たお人をこの門の中で見かけたような気ィがしましたが。あんさんもひょっとして、岩亀楼のお馴染みさんと違いますか？　（顔をのぞき込む）隅におけませんなァ。結構な羽振りやございませんか。それとも五十鈴楼止まりでおますかな。あるいは、お局止まり？　ほんじゃ、お人待たせるのもよくありません。急いでおりますよってなァ。これで失礼しますよ。

五兵衛　待て！

真右衛門　まだ何ぞ用ですか。あ、そうや、そうや、「手前どもの誠意を」言うておきながら、それを果さんと行ってはあきまへんはなァ。「日野屋は嘘つきや」言われては身代が落ちますよって。たゞ、今、手持ちがないので、そうやな、あんさんも、いろいろお入り用のようですさかい、今、洋銀で二十、残りの四十は又後日、本町一丁目の店の方へ来て下はれ。いつ来はっても分かるように、店のもんに言うときますわ。（懐から金を取り出す）では二十、確かにお渡ししまっせ。二十な。

以前渡したんと合わせて、これで六十、残りはあと四十でんな。

五兵衛　（顔をそむける）

真右衛門　さァ、取りなはれ。遠慮はいりませんがな。さァ。

五兵衛　（手を出さない）

真右衛門　さァ、どうぞ。取っておいて下さい。せめてこのくらいのことさしてもらわんと、仲介した手前、気ィが済みませんよってなァ。日野屋のせめてもの誠意や思うてほしいでんな。（強引に五兵衛の手に渡す）では、今日はこれで失礼しますよ。

五兵衛　（手の中の二十洋銀を見ながら、しばらく佇む。）

真右衛門　（だいぶ離れて）あァ、今日のこのお渡しの証文はいりませんわ。お互いの信用ですよってなァ。証文ないと信じられんようではなァ。きっとあと四十、お払いしますよ。（そそくさと行く。）

五兵衛　くそ。こんな二十でごまかされたりはしないぞ。何とかして日野屋の鼻をあかしてやるからな。（二三歩行って、その場に、少々やけ気味に腰を下ろす。大きなため息をついて、次第に肩を落とし、力がなくなって行く。）

日野屋、下手に消えるときに一人の男に出会い、五兵衛の様子を見ながら何やら耳打ちをする。男、

うなずき、日野屋と別れる。男、五兵衛に近づく。

鉄五郎　あんた、日野屋にやられたんだな。

五兵衛　え？　あんたは誰だ？

鉄五郎　俺かい？　俺は人呼んで鉄、てけちな男でね。この居留地を縄にして、色んなおこぼれで生きている男さ。もとはと言やァ、俺もあんたみたいな者でね。

五兵衛　お前も糸商人かなし。

鉄五郎　い、や、俺は糸屋じゃねえが、やっぱり横浜へ来りゃ一旗あげられんべェと思ってよ、相模の在から出てきた者だ。木の細工物が異人さんによ、だいぶ喜ばれるっていうんで、二三度荷を運んだんだがよ、そうそう世の中甘くはねえわな。俺も何度かだまされてよ。あの日野屋は、いかん。異人相手の商売は、うめえもんだ。江州人だ。近江出のやり手よ。近江の者は決して阿漕なことはしねえもんだっちゅうがよ、人にもよりけりなんだな。横浜でも評判の男だ。人の足もと見るのがよ、うまいやつでよ。新参の一旗組は、よくあいつにやられるのよ。わるいことは言わねえ、この仕事はなかったことにしな。

五兵衛　何を言わっせる。なかったことに？　そんなバカなことがあらすか。俺は国元で、大枚借金して買い付けて来た糸だっただに。

鉄五郎　それをみんなだまし取られちまったんだな。

五兵衛　俺は取られてなんかおらすか。

鉄五郎　そういう人間を、俺も随分見たよ。

五兵衛　金をもらうまで帰れねェ。何としてもこのままじゃ、帰らねェ。

鉄五郎　しかしよ、こういうことは、御運上所も、取り上げちゃくんねェよ。日野屋は日野屋で、たっぷり儲けておきながら、あとはのらりくらりだ。いつまでも付きまとっていると、命もあぶねェよ。国にも帰らず、いつの間にかこの横浜からも姿を消しちまったやつを、俺も何人か知っているがよ。あんたもそうならねェといいと思ってよ。

五兵衛　消されちまうのか？

鉄五郎　そんなことも、あるかもしれねェな。

五兵衛　（がっくり肩を落とす）

鉄五郎　あんたたちの話を向こうで聞いちまってよ、つい声をかけちまったのさ。

五兵衛　ちきしょう。俺は、これからどうすりゃいいんだ。（頭を抱え込む）

鉄五郎　まァ、国へ帰るのが一番だな。エゲレスのお偉いさんが、この横浜の様子を見て言ったそうだ。ここはよ、異人のごろつきの吹き溜まりだとてたのかなし。あの日野屋め、阿漕に儲けた金に飽かせて、

鉄五郎　早く国へ帰った方がいいよ。横浜で何かやりたいと思ったら、もう一度腰を据えて出直したらいい。

五兵衛　そんな暢気なことは言っていられるか。金をもらわずに国なんか帰ったら……（頭を抱え込む）

鉄五郎　わるいことは言わねェ、日野屋にあんまり着きまとわねェ方がいい……

五兵衛　しかし、俺は……

鉄五郎　（すごみを加えて）悪いことは言わねェよ。

五兵衛　……

鉄五郎　ところで、なんだってな、おめェ、隅におけねェな、港崎にコレ（小指を出す）がいるんだって？　行ってやんな。たっぷりお別れ惜しんで来なよ。じゃ、元気でな。

鉄五郎、立ち去る。五兵衛、後ろ姿を見送る。

五兵衛　ちきしょう。あの日野屋め。（手にした洋銀を見つめる。）

港崎町の女の嬌声、一際高くなる。

な。異人さんが異人さんを見て言ったんだっていうから、確かだろうさ。そのごろつき相手に、日本のごろつきが群がっているんだ。並大抵のことじゃ、この横浜で仕事はできねェさ。だから早く国へ帰った方がいいってことよ。

五兵衛　あの日野屋のやつ、やっぱり初めから俺をだますつもりでだましたんだなし。エゲレスの、何とかいう男から、金はもらってねェ、って言ったが。

鉄五郎　アハハハッ、そんなことはねェ、ちゃんともらってるさ。勿論。実際、日野屋もそんな失敗は何度もしたはずだが、もう今は相手からももらってねェなんてことはねェさ。御運上所や、お奉行にも時々は金を届けているはずだ。そのおかげさ、今羽振りがいいのは。

五兵衛　ちきしょう。お奉行様も抱き込んでいたのか。どうりで。

鉄五郎　日野屋はよう、色んなことをやっているよ。その角の末広町の豚肉屋な、あれも日野屋よ。（意味ありげに含み笑いをしながら）店は俺の名前に似た鉄ってやつがやっているがよ、その鉄てのは、日野屋のお抱え者でな、色んなことをやってる。日野屋が一こと言やァ、何でもやるよ、あいつは。

五兵衛　フーン。あの角の豚肉屋も、日野屋がやって

溶暗

先ほどの遊女屋の一部屋。五兵衛は部屋の中で一人手酌で酒を飲んでいる。二三杯あおると、数本ある銚子に手をのばすが既に空である。ふてくされたように横になる。しばらくして遊女鶴岡が大徳利を下げて入ってくる。

鶴岡　待たせて悪かったね。はい、お酒。
五兵衛　あ、すまねェ、すまねェ。（起きあがる）
鶴岡　はい、どうぞ。
五兵衛　（徳利から直に大口の猪口に酒を注ぐ。）
鶴岡　まるでやけ酒じゃないか。大丈夫かい。
五兵衛　なァに、これくらいの酒。今日は、お前がやけに沈み込んでいるから、なぐさめてやろうと思っているんじゃねえか。さァ、お前も飲め。
鶴岡　すまないね。（酒をあおる）
五兵衛　さァ、俺にも注いでくれ。（猪口を出す）
鶴岡　夜は長いよ。ゆっくり飲もうよ。一気にやっちゃ、酔いつぶれちまうよ。それじゃ、あんた、何しに来たんだか、分かんなくなっちまうよ。
五兵衛　それもそうだ。

チョンキナ踊りに浮かれ興じて、外から一際嬌声が大きく伝わってくる。

チョンキナ、チョンキナ、
チョン、チョン、キナ、キナ、
チョンがヨイヤサで、
チョチョンが、ヨイヤサ

舞台奥にシルエットで拳を出し、負けた者が着物を脱ぐ遊び、映し出される。

五兵衛　どこの誰だ。ひどく騒いでいるな。
鶴岡　どうせ、本町通りの問屋さんが一連隊連れてきているんだろうよ。
五兵衛　問屋か。ちきしょう。日野屋め。
鶴岡　何か言ったかい？
五兵衛　いや、何も。
鶴岡　あんた、弁天さんを知ってる？
五兵衛　州干町の、そこの弁天さんのことか？
鶴岡　そう。
五兵衛　その弁天さんが、どうかしたのかなし。
鶴岡　うん、この港崎へ来たばっかしのとき、一度はお参りしろって、女将さんに言われてね、行ったのさ。それ以来あの場所が好きんなっちゃってね。又行きたいんだけどね、なかなか大門から出してもらえないんだよ。お客さんが一緒なら、女将さんも許してくれるかもしれない。一度、連れてってくれないかねェ。
五兵衛　あ、いいとも。こんなにきれいな鶴岡と連れだって弁天さん参りだなんて、まるで夢のようだ。
鶴岡　ほんとに、連れてってくれるんだね。
五兵衛　あ、。でも、そんなにいいところかなし。
鶴岡　うふふふ。
五兵衛　どうした。何がおかしい。
鶴岡　その「なし」また「なし」が出始めた。
五兵衛　ちょっと酔ったかなし。気をつけていたんだに。
鶴岡　い、のよ。気にしないで。いつもの通りやれば、なし。
五兵衛　この野郎。人のまねしやがって。でも、これが国言葉だずら。
鶴岡　うははは、（転げ回る）
五兵衛　どうしたんだ。
鶴岡　「だずら」
五兵衛　そう言ったか？　今。
鶴岡　うん。
五兵衛　そんなにおかしいか？
鶴岡　ううん。ご免、ご免。
五兵衛　まァいいや。何があったかしらねェが、やけに沈み込んでいたお前が、そうやって笑っているんだから。まァ飲め。
鶴岡　うん。ご免よ。（酒を受ける）
五兵衛　バカにされるから、気をつけていたんだが。
鶴岡　い、のよ。訛は国の手形って言うでしょう。
五兵衛　しかし、横浜へ来て、改めて色んな言葉があると思ったなし。異人言葉はまるっきりわからねえしな。
鶴岡　あんた、国はどこって言ったかねェ。
五兵衛　中津川さ、あの木曾街道の……知ってるかなし。
鶴岡　美濃にも近いところだね。
五兵衛　あ、そうだ。よく知ってるなァ。
鶴岡　ウフフ、実際は何にも知らないんだけどね。
五兵衛　山がいくつもあって、大変なところだ。高い山じゃ、夏でも雪が残っているのもあるんだ。
鶴岡　へーッ。夏でも雪があるの。……どっちがいい。山と、海と。
五兵衛　それは山の方がいい。山は人をだまさねェが、海は人をだますから。
鶴岡　アハハハ、面白いことを言うんだね。海は人をだますだなんて。（ふと寂しそうにする）さっき言ってた話し、弁天さんへ連れてってくれよね。
五兵衛　あ、いいとも。

鶴岡　（寂しそうにする）
五兵衛　どうしたんだ。
鶴岡　いや、何でもない。
五兵衛　そうか。（酒を飲む）
鶴岡　（酒を注ぎながら）ここの弁天さんのお祭りはすごいんだよ。あたしが品川からここへ来たばっかりの時、ちょうどお祭りでね。それはすごい賑わいだった。お祭りに異人さんの波。ああ、ここが横浜なんだな、って思ったよ。何百貫もあるんだってさ、ここの弁天さんの御神輿。あんまり重いんで、わざわざ江戸相撲が来てね、担ぐんだ。
五兵衛　へーッ、相撲さんが来て担ぐのか。俺は相撲取りも見たことはねェけど。
鶴岡　ねェ、連れってくれるものなら、一日も早い方がいい。明日にでも。
五兵衛　あ、いいとも。でも、どうしてそんなに弁天さんへ行きたいのかなし。祭りでもないのに。
鶴岡　あそこの石段に腰を下ろしてさ、波の音聞きながらね、海を見るのさ。……あんたさっき海は人をだますって言ったけど、海は人をだましたりしないよ。
五兵衛　アハハハッ、そうだよな。海が人をだましたり、しないよなァ。
鶴岡　海の先の方を見るとね、その先にはね、神奈川のお台場が目の前でね。そこをズーと行けば、江戸もすぐだからね。あたしはね、江戸生まれ。やっぱり江戸がいいね。
五兵衛　帰りたいか。
鶴岡　帰ったところでさ、どうせ品川か、吉原住まいの、この身だけどね。
五兵衛　こんな仕事、足を洗いたいか？
鶴岡　……（ジッと耐えるように黙る）
五兵衛　ご免よ、つまんねェこと聞いちまった。
鶴岡　ううん、いいんだよ。そりゃね……。でも、どうにもなりゃしないんだよ。この身、自分のものでも、自分の自由になんかなりゃしない
五兵衛　金か？　（互いにため息をつき、酒を注ぎ合う。）
鶴岡　（突然）弁天さんからね……身を投げちまおうと思ってね。
五兵衛　身を投げるって？　それはまたどうして。
鶴岡　（哀願するように）ねェ、誰にも言っちゃだめだよ。
五兵衛　分かっているに。
鶴岡　あたしを、連れだしておくれよ。弁天さんにお参りだって言ってさ。あたしも、女将さんにさ、「決心するための、一度お参りさして下さい」

って、たのんでみるからさ。決心するためだって言えば、女将さんもだめだとは言わないだろうからね。
五兵衛　決心って、身投げのかなし。
鶴岡　バカね、どうして女将さんが、身投げの決心に同意するかね。
五兵衛　そうだろうな。だから変だと思って。何の決心かなし。
鶴岡　ラシャメンになれ、さもなくば異人さんの客を取れって、毎日言われているのさ。ここへ来てもう三ヶ月にもなるけどね、初めっからね。……あたしゃ、いやなのさ。毛唐の相手は。（激しく）死んでも嫌だ。毎日のらりくらりと言い逃れて来たけど、もうだめだね。ラシャメンになるの断れば、もう明日にも異人部屋行きだよ。女将はね、あたしをここじゃなくて、あっちの異人さん相手として連れてきたらしいんだ、初めから。
五兵衛　お前が異人部屋へ行ったら、俺はお前をもう呼べなくなるのかなし。
鶴岡　そうなっちまうね。ねェ、あたしを弁天さんへ連れてってくれよ。
五兵衛　俺に、お前が身投げするのを見ていろって言うのかなし。
鶴岡　何なら、一緒に死んでくれてもいいんだよ。
あたしと一緒に。
五兵衛　うん、それはいい。お前みたいないい女と一緒に死ねたら、俺も本望だなし。
鶴岡　あんた、あたしゃ、冗談で言っているんじゃないんだよ。
五兵衛　バカなことを言わっせる。俺も冗談で言っているんじゃ、あらすか。実際、俺も死んでしまいてえんだ。今。
鶴岡　あんたも、何かあったのかい？
五兵衛　（ためらった末）ほんとのこと言えば、今日も粋がってお前の所へ来ているが、実はな、キタネェ問屋にひっかかっちまってな。
鶴岡　フーン。あんたも何かあるな、とは思っていたよ。
五兵衛　でも、今日の金はちゃんとある。心配はいらねェ。
鶴岡　もう、お金のことはどうでもいいのさ。あんた、ここではいつも悪ぶっていたけどさ、……あたしにはすぐ分かる。あんたはね、人がいいんだよ。
五兵衛　鶴岡、俺は、お前に一度会ってから、どうしても忘れられなくなって、今日も来たんだ。
鶴岡　そう思ってくれるのは嬉しいけど、あんたとこうしていられるのも、今日限りだよ。きっと。

五兵衛　だめだ、お前は異人部屋なんかへ行っちゃだめだ。

鶴岡　あたしもそう思っている。だから弁天さんから身を投げちまいたいのさ。あんたはこれからどうするの？

五兵衛　借金までしてよ、大仕事しようと思って横浜まで来たのによ……

鶴岡　国へは帰れなくなっちまったってわけだね？

五兵衛　そういうことだ。

鶴岡　誰か知った人はいないの？　信州や美濃の方からも、随分来ているはずだけど。

五兵衛　一緒に国を出た理助っていう男がいたんだが、今にして思うと、あの男も俺をだましていたような気がする。全部、お膳立てしたのがあいつだった。人が信じられなくなっちまった。いい男だったんだ、あの男も。この横浜で儲ける味をしめてから、どうも人間が違っちまったなし。確かに、今にして思うと。（酒をあおる）

鶴岡　あたしみたいな女が言うのも変だけど、これから世の中、どうなって行くのかね？　この日本は、今にあの異人さんたちに、むちゃくちゃにされちまうような気がしてね。

五兵衛　それは当たっているな。木曽の山の中でさえ、黒船以後の変わり様は大変なもんだからなし。街道筋が、毎年毎年せわしなく、物騒になっている。聞くところによると、日本中が、大騒ぎだっていうじゃないか。

鶴岡　こんな仕事をしてるとね、色んな人が話をして行くのさ。品川の時代からね。（寂しそうにする）

五兵衛　どうかしたのか？

鶴岡　ううん。何でもない。

五兵衛　誰かいい人でも思いだしたんだな。

鶴岡　何でもないんだよ。あんたこそ、国じゃいい人が待っているんだろう。

五兵衛　いいや、俺なんて、半端もんだからなし。……それだけに、金が欲しかった。……それも全部だめんなちまった。（やけになってあおる）鶴岡、一緒に死のう。俺も死ぬ。

鶴岡　何だね、びっくりするじゃないか。だめだめ、男は意味のない死に方しちゃだめだよ。……世の中にはね、国のこれからのこと心配して、命を張って生きている人がいっぱいいるんだ。お酒、注いでおくれな。（五兵衛から酒を受け、一気に飲む。）実はね、品川にいたとき、水戸藩を脱藩した人があたしんところへよく来てくれたのさ。その人はね、心から国のこと心配してね。国を開くのは異国に魂を売ることだって。

五兵衛　水戸藩にいた……。桜田門で何か起こしたのが水戸藩だったがなし。まさかそのときの……

鶴岡　ううん、あのときはまだ十八だったからね。そのあとさ。今から二三年前になるかね。一月の寒い日、老中の安藤対馬を坂下門で襲った一人だったんだ。

五兵衛　それじゃ、その場で……。

鶴岡　そう、その場で……（涙ぐむ）あの人は、いつ死ぬか分からない、でも犬死にはしない、っていつもそう言ってた。懐の中にはね、斬奸趣意書、とかいって、いつも決意を篭めた書き付けを持っていたよ。公武合体は反対じゃない。でも、今老中の勧めているのは外国に日本を売り渡す隠れ蓑だって。いつもそう言ってた。

五兵衛　そうだったのか。この横浜に居留地ができたのも、そのなれの果て。

鶴岡　あの井伊様を初めとして、今の幕府の偉い人はみんな大罪人さ。あたしにはよく分からないけど、攘夷は当然のことだと思うよ。今からでも遅くない、日本から毛唐を一日も早く追い出してしまって欲しい。

五兵衛　そうだよ。その通りだ。俺もそう思う。

鶴岡　あたしはね、思っているんだ。もう今の時代はね、武士も百姓もないって。

五兵衛　うん。

鶴岡　みんなが一つになって、国のために立ち上がるときなんだよ。徳川様には申し訳ないけど、もう国を治めていく力はなくなっちまったのさ。あたしは、公武合体して、それに平民も力を合わせて、国を挙げて一日も早く、毛唐の異人なんか追いだしちまって欲しい。あんたは異人をどう思う？

五兵衛　俺だって、異人は嫌いだなし。俺も攘夷のために命を張って闘っておいでる人は偉いと思うよ。

鶴岡　ほんとにそう思うかい？

五兵衛　ほんとにそう思う。

鶴岡　でも、この横浜に集まってくる人は、異人が目当てじゃないのかい？

五兵衛　それは、まあ、な。

鶴岡　あんたを責めるわけじゃないけどさ。

五兵衛　俺は間違っていたよ。横浜で儲けよう、なんて思ったことな。そう深くも考えずに、まわりに釣られて、何か大きなことやりたいって、そんなこと考えちまった。

鶴岡　あんたを前にして何だけど、あたしはね、ここへ来る日本人が情けないんだ。この港崎は異

人と、そんな異人を相手にして儲けた人たちが遊びに来るんだよ。腹が立つ。同じ身を売ってもさ、品川の頃の方が、よかったよ。今の客はみんな薄汚い。あたしのこんな身体を売る商売も褒められたことじゃないが、この居留地に出入りする連中は、あたしのこの身体以上に薄汚いんだ。あたしはね、身体は売っているかもしれないけどね、ここにたまってくる人間は、異人にさ、毛唐にさ、国を売っているんだ。毛唐にヘコヘコ頭を下げて、国を売っているのさ。お陰でさ、今、国中が大変なことになっているんだ。きっとこのままじゃ、毛唐が日本中にのさばり出すに決まっている。牛鍋なんていって、畜生を殺して、その肉を喰い、血をすする鬼が、日本をだめにしようとしているんだ。あたしゃ、身震いがするよ。日本中がバテレンの鬼たちに駄目にされちまうんだ。その上に、あたしたち遊女はね、何人かが、ラシャメンにされているのさ。鬼たちの犠牲にされようとしているんだ。あたしゃ、そんな女を何人か知っている。毛唐の家で、動物みたいに飼われているんだよ、中には船で遠い国まで連れて行かれるのもあるらしい。ほんとは、こんな港崎は火にでも焼かれてなくなっちまえばいいんだよ。

五兵衛　すまない。鶴岡には申し訳ないと思う。

（両手をついて謝る）

鶴岡　あら、あんたのことを責めたんじゃないんだよ。

五兵衛　いや、俺は、お前に教えられた。一時は、浅はかにも毛唐に糸売って儲けようと思っていた。俺は今日、たった今、初めて分かったんだなし。

（すすり上げながら改めて手をつく。）

鶴岡　何だねェ、手なんかついてさ。手をあげておくれよ。

五兵衛　俺は、横浜の問屋連中が憎い。日野屋を初めとして、みんな憎い。お奉行様も、御運上所のお役人も、みんな汚ねェ。お前の言うとおりだ。そうなんだ。お前が言うように、みんなでグルになって、あいつらは日本を外国に売り渡そうとしているんだ。

鶴岡　あんた、あたしが三ヶ月もの間、どんな気持ちで毎日ここにいたか、分かってくれるんだね。

五兵衛　うん、分かる。お前は強い女だ。

鶴岡　あたしゃね、毛唐を相手にしなきゃならないとすれば、死のうと思っているのさ。もう、一日も延ばせそうにないんだよ。もう、死ぬしきゃないんだよ。お酒注いでおくれよ。

五兵衛　飲め。俺も飲む。（鶴岡に注ぎ、自分も手酌であおる。）

鶴岡　（酒を飲みながら）ね、あたしを、江戸の方まで見渡せる弁天さんへ連れてってておくれ。あそこからは、品川も近いんだ。もし、それがかなわなければ……あんた、七口を持っておいでかい？

もし持っていたら、あたしに、おくれな。あたしはそれで自分の身を……

五兵衛　七口かなし。一本持っている。イザっていう時のために。（取り出す。）これさ。（抜き出ししみじみかざす。）お前は強い女だ。俺はお前に教えられた。

鶴岡　嫌だねェ、人をそんなに褒めるもんじゃないよ。

五兵衛　いや、本当にそう思っているんだ。この七口で、あの日野屋をひと思いにやってやろうかなし。

鶴岡　日野屋一人やっても、自分一人の恨み晴らすだけじゃないか。

五兵衛　俺一人の恨み？

鶴岡　そう、日野屋みたいな男一人やっても日本は変りゃしない。あんたは、やっぱり帰った方がいいんだよ。

五兵衛　帰れ、だと。とんでもねェ。今更帰えれやしねェ。

鶴岡　ちょっと聞いたことがある。悪い問屋にいつまでも付きまとって、消されちまった人があるって。このままじゃ、あんたも……

五兵衛　鉄、とかいうやつもそんなふうに忠告してくれた。

鶴岡　鉄？

五兵衛　知っているのか？

鶴岡　う、……うん。あの豚屋でしょ。

五兵衛　ええッ、あいつが豚屋だったのか。あいつまでが、ちきしょう、親切そうな言い方してたくせに。お前、さっきこの港崎が燃えちまえばいいって言ってたな。

鶴岡　うん。

五兵衛　（真顔になって）鶴岡、一緒に死んでくれ。俺は、お前となら死ねる。

鶴岡　あたしと一緒に？　いいんだよ。無理しなくたって。あたしゃ、一人で逝くよ。……ついつい今日は話しちまったんだ。あたしなんかどうせ、この郭からは逃げ出せない身。毛唐が死ぬほど嫌いじゃ、その通り、死ぬよりしかたがないじゃないか。あんたは、あたしを強いって褒めてくれたけど、やっぱり弱いんだよね。ついつい言っちまってさ。

五兵衛　いや、俺にうち明けてくれて、俺は嬉しかった。一緒に死のう。

鶴岡　でも、あんたは死ぬような理由なんか、ありはしない。

五兵衛　いいや、俺は、お前を一人死なせるわけにはいかない。お前が好きだ。一緒に死のう。俺も、もうこのまま国へは帰れないんだ。

鶴岡　あんたなら、いくらもやり直しはきくよ。

五兵衛　俺の心は、お前と一緒だ。俺も、ずっと、何か意味のあることはしたいって思っていた。それがたった今、何であるかが分かったんだ。お前に教えられてなし。

鶴岡　意味のあること？

五兵衛　そうだ、意味のあることだなし。江戸でも、京都でも、今、国の行く末を心配して大勢の志士たちがよ、国を売り渡すような腰抜けに、天誅を加えたいって、頑張っておいでる。おれは、卑しい百姓にすぎねェけど、百姓が国を憂え、国を売り渡すのに反対して、何かをしちゃならねえってことは、ねえだろう。お前もさっき、みんなが立ち上がる時だ、って言ったわなし。俺の本当の命を、今ここで生きようと思う。お前と一緒に。

鶴岡　本当の命を？

五兵衛　そうだ。鶴岡、俺たちは、同じ死ぬんでも、意味のある死に方はあるだずら。世の中のためんなって死のう。

鶴岡　世の中のためんなって、死ぬ？

五兵衛　そうさ、俺もお前も、今は同じ思いでいる。

二人で、世の中のためんなって死のうが。

鶴岡　どうするの？

五兵衛　火だ。火をつけるんだなし。この港崎に火をつけるんだなし。

鶴岡　この遊郭に。

五兵衛　そうだ。俺は、今からこの外に出て、末広町の豚屋に火をつける。つけ終わったらすぐに戻って来る。そうしたら、ここにも火をつけるんだ。火はたちまち広がって、町屋筋を伝って、この横浜全体に広がるはずだ。東の異人館や、西の本町全体に広がるはずだ。この横浜は一気に火の海となって……国を売る人間どもに、一泡ふかせてやろうと思うんだなし。きっと全国の攘夷を唱える人たちの励みになるだずら。俺たち、二人のこの意気込みが、日本中の攘夷運動にも火をつけることになるだずら。

鶴岡　あんた、本当に、あたしみたいな女と一緒でもいいの？

五兵衛　そんな言い方はあらすか。俺はお前の心根に惚れたんだ。お前は、ただの遊女じゃない。いいか、俺は火をつけて、豚屋が本当に燃え上がるのを見届けて、又この部屋に戻ってくる。ぐずぐずしてると夜が明けちまう。今がいい。起き出すのが遅いから一番いい時間だ。（耳を澄ませる）ほれ、あたりはもう疲れ切って、すっかり寝静まっている。ここにも火をつけて、火の中で、二人して、この七口で相対死だ。分かったな。鶴岡、俺と一緒に死んでくれるかなし。

鶴岡　あんたこそ、本当に後悔はしないんだね。

五兵衛　当たり前だずら。俺は今、本当の命に目覚めたんだ。ほれ、さわって見ろ。（鶴岡の手を取り左胸に当てる）俺の心の臓は、喜びに踊っているだに。な、な。意味のある大きな仕事だ。それはな、二人の死と一緒に起きるんだ。

鶴岡　あんた、本当なんだね。

五兵衛　本当だとも。（鶴岡をひきよせ、抱く）鶴岡、俺は、お前が好きだ。お前を一人死なせやしないに。

鶴岡　あんた、本当なんだね。

二人、激しく抱き合う。

溶暗

ナレーション

慶応二年十月二十日、未明、豚屋鉄五郎の家から出た火は港崎の遊郭を焼き、町の左右に広がる安普請の新興横浜の町にも広がり、あたりはたちまち火の海となった。東側の外国商館の地域を始め、西側の本町通りに立ち並ぶ日本人の問屋の建物をもなめ尽くした。

世間はこの火を「豚屋火事」と呼んだ。男と、遊女の共同した付け火であることは知られていない。諸外国の領事は、この大火を重要なことと見て、新しい町づくりのために、幕府に多くの進言をした。町の中央の遊郭、港崎仲之町の跡を広大な公園にして、空き地として残すことにしたのもそのためである。今の横浜スタジアムのある横浜公園がそれである。

日本中に吹き荒れる攘夷の嵐は尊皇運動と複雑に絡みながら展開し、また、世直し運動が日本各地に高まりを見せている頃であり、新しい時代は容赦なく進んだ。港には改めて堅牢な洋館も建ち並び、前にも増した賑わいをみせたのだった。

遊郭は、関内の商業地の、そうした再整備と供に、吉田橋の外に当たる関外地区（野毛）に移され、新吉原町の名となってたちまち復活したのであった。



果物物語（四）

青木昭成

草木ではないくせに「果物」と言われ
かたほうで「野菜」と呼ばれる

だから私は　生き生きとしたその造形に
ときには　わざと吃驚してみせたりする
けれど私の言葉にそれ以上の
どれほどの彩りが加わるというのか
どれほどの詩情が添えられるというのか
まして手品のように　魔法のように

だから
「それは」と私は言いかけ
「人間の感覚の問題では」とつづけた
なかば信じ　なかば疑い　だが我に帰る
それは私のせいいっぱいの比喩であって
しかし　私の内部の納得ではなかった

放置されてしまった生き物なのだ

かくして「果物」たちと言い
かくして「野菜」たちと言い
無心でいるとき私の脳裏に
何の異彩をも映ることはないのだが
それは静かに　浮かびつつ　沈みつつ
凡庸な私の今日を打ち消しながら
一日を終えさせてくれる

「緑黄色野菜」

うさぎの仲間ではない　なのに
「野菜」を採るべきだとなぜか言う
「野菜」をどんどん食べろ　と識者が唱える
「野菜」は食用にする草木の総称である
と　解説するのは国語辞典だ
つまり昔から「あおもの」とも呼ばれて
敬称ではないが　蔑称でもない
それが　いつから人間にとって
尊重すべき「緑黄色野菜」に変身して
しまったのか

「やさい」と「くだもの」と

そのとき　私は
ふいに訊かれたのだった
トマトは「野菜」の仲間だろうか　と
ならば
スイカは「果物」の仲間だろうか　と

そのとき　私はなぜか　ふと
うつつの外の世界で考えはじめていた

ともあれ　たしかに
トマトは八百屋の店先にならんでいる
なるほど　ならば
スイカは果物屋の棚に鎮座ましましている
けれど　ともに多年生の

「野菜」と言い　「果物」と言い
それを一つの環の型に結びつけてみる
そんな表現があったら　なんとも面白い
なのに何が「人間の感覚」なものか
それは　なるほど嘘ではなかろう　ともあれ
すでに己をも　はぐらかしている

そうだ　私の畑に
トマトが真っ赤に完熟していた
なま温かく　その表皮は陽に輝いている
内部に太陽が宿っているのか　その香りを
口一杯につめこみながら私は嚥みくだす

振り向けば　それは反芻のような記憶
だが　それはまた私の中枢への刺激
いまここに　どんな思惟も偏見もなく
トマトは「果物」そのもの味となり
懐古のなかに熟している

やがて　夏の終わりの西日が　畑に射す
すえなりのスイカが影となり　その
枯れた蔓にとりついた姿は沈黙の世界
誰の視線をも　あらためて牽くことのない
それはもう「野菜」の仲間たちの屑にすぎない

レタス　一玉
玉ねぎ　一袋
ブロッコリー　一株
みょうが　一パック
エシャロット　一束
きゅうり　一箱
パプリカ　一個

日本人はなにかといえば　珍品を並べたがる
かぞえ方にも　どくとくの工夫をかさねる
まとめる　ととのえる　色どりも分ける
それはわが身分を均一販売するかのような
商いなのである

「旬の果物」

生菓子は　それとなく
水分を含んだ菓子のことである
水菓子は　ともなれば
さらにもっと水分を含んだ菓子のことである
それを総称して　すべて「果物」とも呼ぶ

日本語は妙な味のカテゴリーをもった言葉だ
ところで　それをもっと一義的に解釈すれば
「果物」は草木の果実の食用となるもの
とも限定されている
そして

林檎　梨　マンゴ　葡萄　オレンジ
杏　桜桃　柿　バナナ　パイナップル

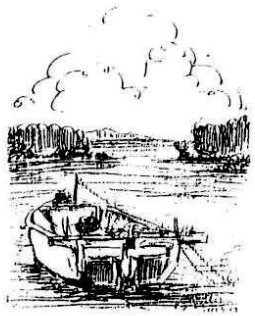
などすべて木の実である
だが　いまや「シュン」の「果実」と呼んで
珍重する気風などすっかり薄れてしまった
そして

トマト　西瓜　メロン　とうもろこし
苺　まくわうり

などすべて草の実である
だから　私にとって「果物」は
それがわが血肉となる栄養素とは
どうも考え難いのである　むしろ
その「果物」たちの持っている　それぞれの
香気にふれると　私の心はたちまち溶けて
一匹の生き物にすぎなくなる

大山巌外伝
血煙伏見

瀧澤中（あたる）



幕末――。

後の世から見れば、
「幕府の末期」ではあったが、井伊直弼が惨殺された万延元年から文久にかけて、つまり西暦で言えば一八六〇年代の初頭は、徳川幕府はまだ、少なくとも外面的には厳然とその威容を誇っていた。
しかし、弓なりに張った日本列島の最南端に位置する薩摩では、やがて幕府を末期に追い込むであろう男たちが、梓弓を引き絞って秋（とき）の来るのを待ち望んでいた。
文久二年（一八六二年）四月、後の大山巌、いまは二十一歳の大山弥助は、その男たちの一人だった。

京都・伏見。
大山弥助は、川船から下りて宿所である寺田屋に、同志十余名と向かった。
「信吾どん、ふしぎな天気でごあすな」
大山弥助が声を掛けた。
同志の中に、二〇歳になった西郷信吾がいる。ぽっちゃりとした顔立ちで幼い日の面影が残る弥助と対照的に、西郷信吾は日に焼けた精悍な顔つきである。
「うん、本当じゃ。天気雨じゃのう」
弥助は信吾の声を聞きながら、整然とした屋敷の並ぶ

伏見の町を、おそらくは御所があるであろう方向に目をやっていた。

四月末と言っても、今の暦でいえば、六月に近い。夕方の蒸し暑さの中で降る雨は心地いいが、自分たちのいる川筋に雨が降り、御所の方は晴れ渡っている。

「おかしな天気じゃ」

弥助はもう一度、独り言のように呟いた。

西郷信吾は、初めての出陣に奮い立つ気持ちを抑えきれない、という風である。後に従道と名を変え、明治政府の高官となった時も、神経質に先々のことを思い悩む、たとえば木戸孝允などとはまったく異質の性格を持ち続ける。

大山弥助は、その風貌とは裏腹に、緻密さを伴った「勘」を持っていた。単なる天気雨だ、別に珍しいことではない。そう自分に言い聞かせるのだが、割り切れない心の襞が残るのだ。

弥助たちはなぜ京都にいるのか。

彼らは四〇名弱の集団で、薩摩藩の中の「精忠組」というグループの一派である。これが他藩の応援を得て関白・九条尚忠、京都所司代・酒井若狭守を誅殺し、二条城を乗っ取るという計画を遂行しようとしていた。

簡単に言えば、倒幕のクーデターである。

精忠組は元々、大久保一蔵（利通）が首魁であったが、大久保らの穏健な志向に満足しない一派が、この行動を起こしていた。

藩内最右翼の過激派と言える。その連中が、薩摩藩の実質的な当主・島津久光率いる上洛部隊の中に混じっていて、大坂までやってきた。ここから島津久光の命を無視し、独断専行しようというのだ。

寺田屋に着くと、にぎり飯が出された。

四月二十三日の夜である。

二階の大広間は集まってきた二〇名近くの侍たちで、むせ返るような熱気に包まれていた。

あるものは刀を磨き、あるものは脚絆の紐を繕い、遺書をしたためている者もいる。大山弥助は得意の槍をしごこうとしたが、天井が低い上にこの人数ではどうにもならない。

「おお、これが弥助どんの槍か」

有馬新七が、大山弥助と西郷信吾の前に「ドスン」と腰を下ろした。

西郷吉之助より二つ年上の三十七歳。そしてこの精忠組行動派の首領である。

「弥助どんは、いつから槍をやっているのか」

弥助から槍を見せてもらいながら、有馬新七は尋ねた。

「はい、十五の時に梅田先生のところではじめもした」

「おお、梅田どんの槍か」

『梅田どん』というのは、鹿児島一の槍の遣い手である梅田九左衛門のことである。その流派を「鏡智流」と言った。無論、弥助は免許皆伝の腕前である。

「何で槍を始めたんじゃ」

どうやら、有馬新七は弥助に興味を覚えたらしい。と、隣から西郷信吾が口を出した。

「弥助は、飛び道具が大好きで。ご尊父も鉄砲の研究をずっとやってごあした」

「ホウ。しかし槍は飛び道具ではあるまい」

弥助は頷いた。

「皆が示現流ばかりやっているので、ちいと毛色の変わったものが面白かろとおめもして」

示現流は、機先を制して一太刀で相手を倒す、薩摩独自の剣法だ。言わば薩摩の必須お家芸なのである。「チェストー」という掛け声でも有名だ。

「弥助どんは、面白いのう。そうか、人と変わったものがやりたかったか」

有馬新七が打ち解けてくれたので、弥助は思い切って西郷吉之助のことを尋ねてみた。

「新七さぁ、吉之助兄さぁが見えませんが、どうされたかご存知でごありましょか」

有馬新七の顔が急に険しくなった。

「何か、誰かから消息を聞いたか」

「いいえ。ただ、下関で待っている筈というお話は伺おうております」

弥助たちを乗せた藩船は鹿児島を出て、一度下関に寄った。ここで先発している西郷吉之助や村田新八と、島津久光一行は、落ちあう手筈になっていた。しかし、吉之助は現れなかった。

「おいも、詳しいことは分からん。ただ、久光公のご命令を待たずに、京・大坂に上ってきたらしい。それで久光公のお怒りに触れ、帰藩を命じられた様子じゃ」

有馬新七は唇を噛みしめると、自分の太刀を畳の上に「どん」と立てた。

「我らと共に、立つ心積もりであったろうに」

明るかった西郷信吾の顔が、みるみる青ざめていった。大義のためならば命も惜しまないという兄の性格が、これまでどれほど兄自身の境遇を苦しめてきたことか。

今年ようやく勘気が解けて、島から戻ったばかりであるのに。

今度こそ命はないかもしれない――。

思いは弥助も同じだった。

（しかし、われらも今夜を限りの命かもしれない。動ずることはない。あの世で兄さぁに堂々と会えるよう、思い切って働くまでよ）

弥助は、なお一層決意を固くするのであった。

有馬新七は、そんな二人の様子を見て取って、

「案ずるな。吉之助どんも我らも、同じ道を歩むのみじゃ。信吾どん、冥土の土産話になるほど働こうぞ」

そう言うと、刀の鍔を「ちゃりーん」と合わせた。元

気を出せ、という意味である。
信吾は、兄の消息を聞いて気落ちした自分を恥ずかしく思い、刀を抜き放つと、
「チェストー！」
と気合を入れた。
有馬新七というのは猪武者のように言われているが、そうではない。確かに性格的には直情径行を絵に描いた男だが、かつて山崎闇斎派の儒学者である山口管山の門下生となって学び、高じてその師の代講もつとめるほど学問好きなところがあった。
敢えて欠点を言うとすれば、それは学問好きに共通した、自分の思想に殉ずる傾向が強すぎたということだろう。
理論や学問は完成度が高ければ高いほど、現実に運用するといびつになる。その点、あまり学問好きではなかった西郷信吾や、学ぶことは好きだが、目に見えるものしか信じなかった大山弥助とは一線を画す。
しかし、この場合の有馬新七の思想、つまり尊皇倒幕は単に思想ではなく、当時の青年たちにとっての大義、であった。これをしなければ、日本は駄目になる。そういう切実な思いであったからこそ、青年たちは命を捨てることを厭わなかったのである。
夜が、だんだんと更けていった。
月の傾き加減が、決行の時刻の迫っていることを示していた。
西郷吉之助は、帰藩を命じられていた。
が、有馬新七が得ていた情報は半ば正しく、半ば間違っている。
吉之助が島津久光の命令を待たずに、京・大坂に上ったのは事実。しかし、そこで吉之助がしたことは、倒幕クーデターを起こそうとする他藩の人間を抑えることであった。
「島津公が軍勢を率いて上洛する！」
これほど倒幕派の意気を上げる情報はなかった。島津久光が、倒幕のために軍を動かしたと早合点したのである。が、実際は全く違う性格のものだった。
久光が京に上洛するのは事実だった。しかし、久光は単に幕政を改革するための勅状が欲しかっただけなのだ。
しかも久光に出された勅状の一部には、
「浪人どもが騒いでいるが、これを鎮めよ」
という、つまり倒幕派にとっては思惑とまったく逆のことが書かれていたのである。
吉之助は、このまま尊皇倒幕派が暴発すれば、幕府に尊皇派弾圧のいい口実を与えると考え、久光との約束を破り、京・大坂の同志を鎮めに急行したのである。ことは一刻を争っていた。
が、久光は、
（吉之助が動乱を煽っている）

という風評を真に受けて、直ちに帰藩を命じたのである。
有馬新七らがこのことを知らなかったのは、むしろ幸いだったかもしれない。
藩内若手グループの尊敬を一身に集める西郷吉之助は、どこまでも自分たちのシンボルであってほしい。それには、いま寺田屋に集まっている二〇余名にとって、島津久光に反抗した倒幕の先駆者こそが、西郷吉之助にもっとも相応しい役どころなのである。
「回天、回天、えぃっ、回天」
寺田屋二階の階段口から、階下に向かって佐土原藩浪士の富田猛次郎が槍を振り下ろしていた。
見ていた大山弥助が、手を叩いた。
「いや、こりゃよか思いつきじゃ」
自分も槍を持って富田猛次郎の隣に行った。
典型的な日本家屋であるから、刀すら思い切って振り回せない。まして槍をしごく訳にはいかない。富田猛次郎の様子を見て、槍をひっさげ弥助が歩み寄った。
「『回天』先生、ひとつおいにもやらせてみて下さい」
回天というのは合言葉で、「回天」と問えば「天」と答えることに決めていたのである。あまり回天、回天と言うものだから、とっさに弥助が「回天先生」とあだ名をつけた。一同、どっと笑いあった。
そのうちに、二条城討ち入りに際して、蠟燭を灯す竹串を作るための青竹が運び込まれたり、その竹を削ったりして時が過ぎていった。
が、異変はすでに、その時起きていた。
月が異様に赤くなって路地を照らしている。
その中を四人の武士が、寺田屋に到着した。
奈良原喜八郎、道島五郎兵衛、森岡清右衛門、江夏中左衛門。
いずれも、島津久光から派遣された、鎮撫のための使い、藩内屈指の剣士たちである。
島津久光としては、勤皇に何の異議もない。
しかし、実際の政治としては、
（公武合体による幕政改革）
を理想としている。
藩の中で、妙な動きをされては目障りなのだ。そこで奈良原らを派遣し、過激派を慰撫しようとした。そして説得が駄目な場合は、有馬らを斬ってもよい、という許可も与えてある。即ち、同じ藩の中で、殺し合いが始まろうとしていたのである。
四人は寺田屋に入ると、江夏中左衛門がそっと階段を上がり、二階に顔を出した。そして他に気取られぬように、有馬新七、橋口壮介、柴山愛次郎、田中謙助を階下の部屋に呼び出した。
降りてきた四人に、奈良原喜八郎が口火を切った。
「多く言わんでも、わかりもそ。おいは久光公から言わ

れて来もした。久光公は、直々にお会いになるそうじゃ。どうか出頭してくれぬか」

「行かぬ、と申したらどげんすっと」

有馬新七が、蠟燭の灯に目をぎらつかせながら問うと、奈良原喜八郎は興奮気味に、

「お主、君命に背く気かぁ！」

と言いつつ、刀に手を掛けた。

「君命だろうと何だろうと、事ここに至る。いまさら引き返せるか！」

有馬新七も刀を引き寄せた。

「どうしても聞けぬというのか。もし出頭する意思がなければ、君命により上意討ちをせねばならん。そいでんよかか」

奈良原喜八郎は、必死だった。殺したくない。奈良原も精忠組に属している。見る夢は同じなのに、方法が違う。それだけで斬り合わねばならないのか――。

しかし、田中謙助の一言でついに事は始まった。

「上意が何じゃ！、聞く耳もたぬ」

なにおっ、という小さなつぶやきの直後、

「上意！」

と叫んで、道島五郎兵衛が田中謙助の顔面に、一直線に刀を振り下ろした。

「うぁ」

田中謙助は刀を抜く間もなく、そのままうつ伏せに倒れた。

「おのれっ、道島！」

有馬新七は道島五郎兵衛の退いた所を抜き打ちにしたが、寸でのところでかわされた。

「それっ」

月明かりだけになった室内で、刀どうしが斬り結ぶ。そのたびに閃光が、彼らの命の輝きのように、短く華やかに散った。

「あっ」

有馬新七の刀が折れた。新七はすぐに道島五郎兵衛に組み付くと、そこへ異変に気づいた橋口吉之丞が、二階から刀を抜いて駆け寄ってきた。

有馬新七は道島五郎兵衛を壁に押さえつけると、叫んだ。

「吉之丞！、おいごと刺せ！、おいごと刺すんじゃ」

吉之丞は一瞬怯んだが、すぐに気を取り直して、

「チェストー！」

と絶叫しながら有馬新七の背中を刺した。

「うわ」

「おぅ、おお」

最初の声は有馬新七の、次のうめき声は道島五郎兵衛のものだった。吉之丞の刀は有馬新七の身体を貫通し、見事に道島を刺し貫いたのである。二人は即死だった。

「柴山！、刀を抜けい」

柴山愛次郎は、騒ぎで一瞬立ち上がったが、また静かに座りなおした。

「おいは、上意討ちに遇ったならば、逆らわぬ。甘んじて斬られる」

そうして刀をとらず、無腰のまま、首をはねられた。

橋口荘介は肩先から胸にかけて深手を負った。苦しい息の下で橋口は、奈良原に哀願した。

「喜八郎どん、水を、水を」

奈良原喜八郎は半分べそをかきながら、かつてともに精忠組の仲間であった男に、末期の水を汲んで与えた。

「喜八郎どん、後は、宜しく頼む」

言いおえると同時に、橋口荘介は静かに脱力していった。

奈良原喜八郎は、両刀を置き、上半身裸になって、合掌しながら二階に上がった。

（もういい、もう、これ以上殺さんでいい）

二階でもようやく異変に気がつき、騒然として数人が階下に下りようとしていた。中でも大山弥助は槍の穂先を階下に向け、西郷信吾は抜き身の刀を肩にかけて、いつでも斬りだせるようにしていた。

（なんじゃあ、幕府の犬か）

しかし大山弥助の槍の穂先にいたのは、なんと同じ藩内で旧知の奈良原喜八郎ではないか。

弥助が驚き、少し槍を退くと、

「待て、待てぃ」

と叫んで奈良原は、そのまま二階に上がった。

そして諸肌を脱ぎ、返り血で塗られた顔面で周囲を見渡すと、どっかと座って、

「いま、新七どんや愛次郎どんは、君命に背いたので上意討ちにした。が、もういい。おいは、おはんらを斬るつもりはなか」

あまりに突然の出来事に、本来ならば切り刻まれるであろう奈良原喜八郎の捨て身の説得は、功を奏していた。

「どうか頼むから、藩邸に出頭してたもんせ」

奈良原喜八郎は拝むように両手を合わせた。

その手が、震えていた。

しばし沈黙のあと、

「わかいもした」

と言って数名が、説得に応じて階段を下りようとしたその時。

「待ちぃやい。ちいと待ちぃやい」

弥助は槍を持ったまま、奈良原喜八郎の後方にいた。

「喜八郎どん、あんた、おいたちと同じ思いでおるんか」

奈良原喜八郎は顔を後ろに向けた。そこには、双眼を怒りと悲しみで真っ赤にした弥助の姿があった。

「新七どんが、どげな思いでここまで事を運んできたか、喜八郎どんはわかっておられるのか」

弥助は、槍を水平に構えたまま、奈良原喜八郎に狙い

を定めている。
階下から、階段を伝わって血の匂いが上がってきた。
弥助は、倒れているであろう有馬新七の姿を思い浮かべ、それが西郷吉之助と二重写しになった。いったい彼らの四〇年に満たない人生とは何だったのか。
奈良原喜八郎は、弥助の方に座りなおすと、黙って合掌し、目をつぶった。
弥助はそれを見て、今度は奈良原喜八郎に西郷吉之助の姿が映った。そして奈良原と吉之助の姿は、どんどん淡く朧げになっていった。
弥助の双眼から、涙が溢れそうになったその時、西郷信吾は静かに弥助の肩に手を置いた。それが合図であったかのように、弥助は槍を置き、全員、薩摩藩邸に向かった。
奈良原喜八郎は、弥助が最後に階段を下りて、二階に誰もいなくなっても、まだ合掌を続けていた。
奈良原喜八郎は後に、沖縄県知事となった。
中央にあれば首相の器とまで言われたが、自ら望んで沖縄に渡り、その行政に生涯を尽くした。そして決して、どんな誘いがあっても、中央政府の顕官にはならなかった人であった。
伏見の町は、まだ夜明け前であった。

おわり

泰山木（七）

―紙透小太郎の一生―

紙透寛夫



第二章　歩兵から憲兵へ

二

父小太郎は大正十五年（一九二六）十月に、会寧憲兵分隊の出先である上三峯分駐所に着任していた。母茂登子と結婚式のあと、この官舎で新婚生活を始めたのである。住所は、咸鏡北道鍾城郡南山面三峯洞と呼んだ。ここは、どうも、虎が出そうな、国境のさびしい村であったらしい。
この上三峯について、羅南憲兵隊史（羅南憲友会編）は、

上三峯は豆満江岸の戸数わずか一〇〇戸、人口わずか三〇〇人（内日本人約五、六〇人）に満たない小部落ではあるが、対岸の間島省（図們、龍井村）を経て、奥地の吉林、長春（新京）方面に通じているので、当時、軍事、経済、政治の点から、東の玄関として重要視されていた。日本側の機関は憲兵分駐所のほかに、警部補派出所、税関、小学校などがあり、昭和五年ごろ国際鉄橋の完成までは、木橋を通って自由に往来していたが、完成後は、日支の協定により、上三峯駅と図們駅の相互乗り入れが出来るようになったので、一般の乗客はもちろん、物資や穀物の輸送で、列車発着の都度、国際色が豊かで活気があった。なお、憲兵分駐所の兵力は下士一、

上等兵三、憲兵補一だったようである。

と、概要と特殊性を述べている。

やがて、私（紙透寛夫）はここで生まれた。かって、父の書類を整理していた時、その中に、一通の封筒を見付けた。

寛夫ヘソの緒在中
昭和三年九月五日午前七時出生
九月十日落退

と表に書いてあり、如何にも父らしく、几帳面に糊ですみずみまで、びっしりと封がしてあった。はさみで封を切ると、薄くて上等な和紙を幾重にも折り重ねて包んだ中に、私のへその緒があった。さながら、するめの腕（ふつう、足とよばれている）を平たくしたようで、焦げ茶色になっていた。それをよく見ているうちに、私は父母との血のつながりに思いを致して、胸にじいんとくるものがあり、その確かな証しをしみじみと感じた。

私が生まれて、まだ二か月もたたないうちに、祖父萬藏が、危篤に陥った。父はすぐに、次の届けを憲兵隊長に出して、母と、まだ首の据わらない私を連れて、横浜の生家へ駆け付けた。

内地旅行方願ノ件
昭和三年十一月二日陸軍憲兵上等兵紙透小太郎
羅南憲兵隊長　畑原延太郎殿
小太郎儀
今般別紙ノ通リ実父萬藏危篤ノ旨電報ニ接シタルニ付、十一月三日ヨリ十二月二日迄三十日間（定例休暇六日請願休暇二十四日）ヲ以テ、郷里横浜市中区永田町二九五紙透亀松方ニ帰省致度候間、御許可相成度候也

右出願ノ事実相違ナキモノト認ムルニ付許可相成度上申ス
昭和三年十一月三日
会寧憲兵分隊長諏訪甫三郎

これに対し、朱筆で

願之通許可ス
昭和三年十一月三日

と書いてあった。

私が横浜に着いた時、初めて祖父萬藏や親類の人たちに顔見世をしたことになる。

剛気で、義侠心の強い男と言われた祖父萬藏は、間もなく息を引き取った。

「寛夫は、おじいさんの生まれ変わりだな」

私を見たまわりの人たちは、こう言ったそうである。

父はこの帰省中、十二月一日に憲兵伍長に進級していた。

三

父が保存していた書類の中に、次のような願い書があった。

再服役ノ件願
大正十五年九月二日　会寧憲兵分隊
陸軍憲兵上等兵　紙透小太郎
会寧憲兵分隊長　竹本政文殿
小太郎儀
大正十五年十一月三十日現役満了ノ處尚大正十六年十一月三十日迄向フ一ケ年間再服役致度候間許可相成度候也

これに対し、朱筆で、

願之通認可ス　と書いてあり、大正拾五年拾月一日のゴム印と、会寧憲兵分隊長の角印と竹本の認め印が押してあった。

昭和四年以降は『現役延長ノ件願』となっていたが、内容は同じであった。この願い書は昭和十二年まで、父が憲兵曹長の時代は、毎年必ず提出して許可を得ていた。

私はこれを読んで、なんのことか意味がよく分からなかった。が、前に述べた『日本憲兵正史』を読んでいたら、たまたま、このことが次のように載っていたので、よく理解出来た。

大正十四年以降を例にとってみると、現役満期になる年の十月に、再服役願を憲兵隊長に提出して、現役の延長を認められた者は、さらに一年間現役として勤務することができる。現役延長は一年を単位に認められるから、毎年、再服役願を出さなければならない。勤務成績不良、素行不修等で上司から睨まれた者は、まず、再服役は認められない。現代のように、終身雇用制の時代では考えられない厳しさであるが、当時の憲兵は一年毎の雇用契約を結んでいたことになる。憲兵も職業であるから、再服役が認められないと失職することになる。したがって、服務、内務ともに普段から精励しなければならなかった。将校、准士官は階級

によって停年があり、再服役願の必要はなかった。

馘首になっても、食べていける人はよかったが、そうでない憲兵は、一所懸命に働いたわけである。憲兵は気楽な稼業ではなかったのである。父は無論、精励恪勤したことは間違いない。

昭和四年

父は会寧憲兵分隊に復帰し、私たち家族と官舎で過ごした。やがて、次男孝男（私の弟）が七月十八日、午後〇時三十分に生まれた。しかし、その日の午後八時十五分に、死んでしまった。わずかに、七時間四十五分の寿命であった。戒名は松翠嬰児位。

十二月に、父は羅南憲兵分隊に転勤となり、家族と陸軍官舎で生活した。

昭和五年

十二月一日、父は憲兵軍曹に進級した。

昭和六年

一月二日、長女淑子（私の妹）が生まれた。

そして、この年、父が東京丸之内にあった憲兵司令部内の憲兵練習所に入所するため、家族とともに官舎を立ちのき、八月半ば、横浜の生家に向かった。その時に、次男孝男の遺骨を持参し、生家の墓に埋葬したのである。

昭和六年九月一日、父は憲兵練習所丙種学生として、入所した。ちなみに、甲種学生は転科将校、乙種学生は少尉候補者、丙種学生は下士・上等兵の再教育の三種に区分して教育を受けた。教育期間は乙種学生の一カ年のほかは、十カ月であった。なお、昭和十二年、陸軍憲兵学校が開校し、憲兵練習所の教育を引継いだそうである。

私たち一家四人は、父の生家に近い借家に住み、父はここから通学することになった。この時の届け出た願い書も保存されていた。

衛戍地外居住願

昭和六年九月一日　陸軍憲兵軍曹紙透小太郎

憲兵練習所長　三浦恵一殿

小太郎儀

衛戍地外横浜市保土ヶ谷区岩間上町二二五番地ニ居住ヲ許可相成度、左記事情ヲ具シ此段願出候也

左記

現住所ハ本籍地（実家）ニ隣接シ、且ツ閑静ニシテ勉学ニ適シ、通学ニ約一時間ヲ要スルモ、省線電車ノ便アリ

この保土ヶ谷区岩間町は、昔の保土ヶ谷宿、当時の旧東海道の町であり、歌川広重（初代）が描いた浮世絵

『東海道五拾三次之内　保土ヶ谷の図　新町橋』地点のごく近くにあったようである。無論、今は宿場の名残は少ない。現在のＪＲ保土ヶ谷駅に近い所で、父はここから東京へ通学したのである。

教育の内容は、憲兵の服務に必要な法学、諸法令、実務、術科等、法規に対する理解力や運用力を身につけるための、基本的な教育を施された。したがって、下士官学生、将校学生は憲兵幹部として教育内容もかなり高度なものであったようである。講師も一流で、後年、父は

「非常にいい勉強をしたよ」

と、述懐していた。

やがて、丙種学生の課程を修了し、父は原隊に復帰した。

当時、満州事変が勃発、更に上海事変も勃発し、国内では前蔵相井上準之助が暗殺され、三井合名理事長団琢磨も暗殺され、首相犬養毅が五・一五事件で射殺されるなど、物騒な世の中となったこともあり、母と、私と、妹の淑子三人は、母の実家静岡県山梨町（現袋井市）に、しばらく身を寄せることにした。母にとっては良い里帰りになったことと思う。昭和七年十月二十一日、ここで、次女敏子（私の妹）が生まれた。

（つづく）

社　告（内規）

☆　同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎しております。「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行されます。

同人費は月額二、〇〇〇円也を拠出積み立てております。雑誌発行の経費は積み立て共有の同人費を一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆　維持会会員へのお誘い

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁をしてあげようとお考えの方からせっかくのお申し出でがあり、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめて前納して頂いております。季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の贈呈を行ない、また出版記念会へのご案内などを差し上げ交流を行なっております。

＊同人費・維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座への振り込みを左記へお願いいたします。

郵便振替口座　〇〇一二〇一四一九〇八一五

加入者名　作家群編集部

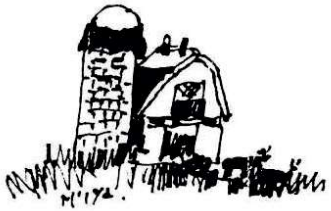
近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（二十七）

第一部　北方探検近藤重蔵　下

第一章　重蔵の栄華と失脚

二、択捉島への航路を開く

金子正義



（八）

七月二十三日、朝靄の籠る裡に宜温丸は錨を上げて乾の方向に漕行した。半刻程すると靄も消えて南風が吹き寄せ始めたが、船は未だポロノツ鼻岬の南側にあった。

嘉兵衛は帆を上げさせ片帆面舵に取って岬の先端を越えて沖に出ると、遠眼鏡に晴れ渡った海上より択捉島の長大な島影が薄墨色に見渡せた。

択捉島の南半部の背稜をなす、四百七十丈程の西單冠山、三百二十丈程の單冠山、四百三十丈程の恩根登山等の火山連峰が、太古創世期に吹き出した溶岩流が急斜面の山膚を流れ落ちて山裾は海に落ち込んでいる。

遙か彼方十里程は其うした絶壁の海岸で船を寄せる溯も無く、漁場を設置する術も無い海岸であった。

然しラァキツがポロノツ鼻岬の北側の宇多須都湾の東北端にコタンがあると云った。

今回は上陸できないが、湾内には魚類も豊富らしいので漁場の候補地としておこうと、宮本源次郎が野帳に見取図を書き入れていた。

宜温丸を、潜礁の多いウタスト湾の外洋より艮の方向に三里程帆走させると、海底の岩礁も切れ西と單冠山と

單冠山の間を流れ下るホロホ川の河口にコタンが在るように嘉兵衛の遠眼鏡に見えたので、宜温丸を砂浜から離れた沖合に投錨させ、船積伝馬船を下して椴松林の河口岸に上陸すると、コタンでなく、無人のクチャチセであった。

宮本源次郎が、此の河の付近は鮭、鱒などが産卵期には群をなして溯行するので、エトロフアイヌが魚を取りに来る時のクチャチセだ。此処も漁場の予定地としておこう、と寅吉と又四郎に目印の杭打ちをさせた。

宜温丸も沖合の投錨地に其の夜は碇泊して休んだ。

七月二十四日、洋上の霧が吹き消えると、ホロホ沖に出て艮に舵取りして一刻程進むと前方を遮る様に陸地が西に傾いて、先端が岬となって真北に突き出ていた。

宜温丸も岬に添って舵は子に向きを変えた。

岬は野斗呂岬で先端に到る迄に溯に老門・振別のコタンがあり、老門は内陸のラウス沼の湿地帯から流れ出る川の河口に在る。川を遡行して東に湿地帯を抜け太平洋側に出ると單冠湾の良港である。然し湿地帯は広大で泥深く足を取られるので、冬に湿地帯が凍てつかないと通れない。

野斗呂岬を越すと留別湾である。湾口は広いが奥行が無く遠浅である。択捉島中央山地の二百三十丈程の大山より流れ来たる留別川が湾の東側に出て河口に留別コタンが在り、湾の出口近くに内保コタンが在る。

ラァキツが、内保には船着場に出来そうな岸辺が在るから宜温丸を碇泊させるとよいと勧めるので、高田屋嘉兵衛は、一応湾口近くの岸辺に投錨して上陸し宮本源次郎に漁場基地や会所の位置等の適否を判定させ、明日留別コタンに行ってコタンコロクルにオムシヤの礼を通してから縄張をしようと其の夜は一同で船中泊となった。

七月二十五日、未だ朝靄が海も陸も見定め難い程籠っているのに、水鳥の群れが騒がしく、アイヌの若衆水夫や炊が起き出す頃には、有萌沼やラウス沼の鷗の大群が海岸寄りの矮生林に飛来して、岸辺の小魚を啄み騒いでいる。霧靄が晴れると上空一面鷗の大群となった。

宜温丸の帆柱や舳走まで海鳥が群がり留まっていたが、高田屋嘉兵衛は、船積小伝馬を下し、ラァキツはパイダルで留別コタンに行き、コタンコロフルのシリムケアイノとオムシヤの礼を交し、ラァキツを通して土産物を渡した。シリムケアイノは、ラァキツとは従兄弟であるので心安く留別川河口のコタンの他に在るコタンの何処にでも漁場を設けても良い、湾内には長須鯨の親子連れがよく迷い込んで浅瀬に乗り上って困る、鯨はアイヌにとっては宝の山だが、必要以上は処分に困っている。

湾内の何処かに油絞の小屋等を作るとよい。と云った、宮本源次郎は我が意を得たりと、寅吉・又四郎等と留別湾内の水位の深浅を計り、風向きや潮流なども測定して、

会所や漁舎の設置位置を予定し、縄張り杭打ちをした。
夜に入って宜温丸を繋留してある内保の浜に、高田屋嘉平、沼島衆の勘兵衛を始めとして宜恩丸の一同とラァキツ・シリムケアイノの留別コタンの主だったアイヌ達が集って夕食を共にした。アイヌ達が喜ぶものは酒や餅でなく、真白な米飯であった。エトロフアイヌにとっては滅多に口にしない山海の珍味であった。
高田屋嘉兵衛は、知人もアイヌも楽しく談合しているので、今後択捉島の開拓の中心基地は此処が良いと思ったので、ラァキツと通詞役の山本久兵衛に
「内保コタンは南の内保湾にもあるので、此処留別湾の方は北内保としよう」
と、アイヌ側に伝えたが、別に異議は無かった。アイヌにとっては、安らかなカムイコタンであれば、北でも南でも同じであった。
高田屋嘉兵衛も大らかな気持で夜空を見上げた。
折から晴れた夜空に下弦の月が輝いていた。

七月二十六日、朝靄が南風に吹き消えると、内保より真北子(ね)に舵取りして岸より沖に離れ出て一刻程航行すると、右舵前方五里程に、秀麗な富士山を二つ並べたような散布山(チリワプ)の大岬が見え始めた。
ラァキツとアチヤボが声を揃えて、散布山を指して何か叫んだ。
通詞の山本久兵衛が
「散布山に帽子形の雲がかかると雨となるが、良く晴れているので喜んでいるのです。」
と云い、三人で身振、手振で嘉兵衛に、
「エトロフとは岬の多いと云うことで、此処の大岬は火山が二つ高く空に突き出ていて、北散布は四百七十丈程、散布山は四百八十丈程あります。長大な択捉島の略中央に位置しますので、洋上遙か遠方より見える良き目印となっていますが大岬の東西両側共に岸部迄断崖絶壁をなす、択捉島の代表的火山岬で、海岸の岩礁も潜礁も鋭く、アイヌ舟でも危なくて寄りつけません。
岬の東側の内陸部は、ベツトブ沼のある湿原となって海岸に近く別飛のコタンの船着場があります。
西の内陸部の紗耶沼より流れ出す川が湾入しているので、其の河口の有萌から北へ一里程の奈與加(ナヨカ)迄の海岸に、ヤースネ・ナヨカの船着場もあります。宜温丸も着岸出来る自然の船着場ですが、よく鯨が湾入するので鯨村(トーウイ)と言われています。
其等の浜辺に在る四つのコタンを紗那と言います」
山本久兵衛が、ラァキツ・アチヤポと交々に説明している裡に宜温丸は紗那湾に入った。
集落に入る海の路の入口に番屋を果しているのであろう、エトロフアイヌのチセが二軒あった、浜辺にポンチプが二艘岡伏せしてあった。

ラァキツが紗那のモシリコロクルは、ルリシビであるが、コタンコロクルのイケシツルハにオムシヤの礼と土産物を渡せば良いと高田屋嘉兵衛に伝えた。
ラァキツとアチヤポがチセのアパシエム(入口戸)に立って来意を告げると、ラァキツとは顔見知りのミケトリ(土産とり)のイタクロシケが出て、既に夕日が西の海を赤く染めて沈む頃なので、紗那のモシリコロクルのルリシビで無く、コタンコロクルのイケシツルハに連絡してくると、直ぐ飛び出して紗那までの約一里の海岸辺りの台地を早駆けして行った。程無く駆け戻ったイタクロシケが、オムシヤの礼は明日昼前になるので宜温丸を、奈與加(ナヨカ)の船着場に繋留して待つようにと言った。
然し夜に入って曳き船の手配も出来ないので、宜温丸は湾内入口の岸辺に繋留した侭碇泊した。

七月二十七日、高田屋嘉兵衛は、宮本源次郎と従者達に土産物の米包を持たせて船積伝馬で紗那に向った。
通詞の山本久兵衛達はポンチブに分乗して後に続き、アチヤポとラァキツは知った道であるからと、海岸辺りを徒歩で行き、沼島衆の勘兵衛達は残って船番である。
伝馬・ポンチブが共に湾岸を行くと内陸の紗那沼から流れ出る川岸の台地に、紗那湾内コタンの者達が出揃って、珍らし気に上陸する高田屋嘉兵衛達を眺めていた。
ミケトリのイタクロシケがモシリコロクルのルリシビは蕊取(シベトロ)に行っているが、コタンコロクルのイケシツルハが、近くの有萌(アリモイ)・奈與前(ナヨマエ)・安穏胡丹(アンノンコタン)に知らせたので、ポロチセが来るから待つようにと云った。
艫て男女三十人程集って慇懃丁重にオムシヤの礼を交して、親愛の情を深めてから高田屋嘉兵衛が、参集者一人一人に一包の米、コタンコロクルのイケシツルハには特に煙草一箱を呈した。
イケシツルハは、鯨の天日干一束を差し出して、
「此れはアイヌの貴重な冬の食物だ」と云った。
土産物の交換に依ってオムシヤの礼は終了したが、コタンコロクルのイケシツルハを始めとして参集したアイヌ達は、宮本源次郎や山本久兵衛等の和人を囲んで談合していた。
主にコタンコロクルのイケシツルハが、
「此の辺りの海は魚類や海獣も多いが鯨の親子が良く湾内に入って浜辺に乗り上げる程で、子鯨は沖へ追いやって親鯨は捕えて油や肉は勿論皮から骨迄取り上げて残すものは少しもないが、余り多いので却って困っている。和人達が持って行けば、浜で腐らすことも無い」
と、北内保のシリムケアイノと同じことを言った。
高田屋嘉兵衛は、紗那付近は海産物も多く、海路も良く湾内の船着場も条件が良いので択捉島開拓の本拠としても良さそうだと思い、コタンコロクルのイケシツルハに、湾内を見渡して一番条件の良い紗那沼の北の台地を

択捉島開拓の本拠地として、番役所等を設け度いので、予定地として杭を打ち込んで縄張をしたいがと申し入れると

イケシツルハは、何にか誤解したのか、

「紗那は少し雨が降ると紗那沼や別飛(ベットビ)沼が溢れて、紗那コタンは泥土で歩けない、雨が少ないと火山灰地の黄土が濛々として空も見えない。真冬は泥土も凍てついて、大橇で通れるが港湾も凍結して仕舞う。宜温丸程なら良いが、大船が寄港できる一番よい所は紗那より、留別湾の留別や内保・生都(セイト)の方が大船が入れる海路がある。」

と通詞の山本久兵衛を通して云った。

高田屋嘉兵衛は、北内保・留別には宜温丸を入れて来たが、生都には入らなかったので、帰りに寄って見ようと、ラァキツに云うと、

「生都(セイト)の方は澗の港なので、アイヌ舟なら出入も抵抗も無く自由に出来るが、百石以上の大船は無理だ」

と云った。

一緒に談合していた宮本源次郎も

「北内保や留別は未だしも、生都の方は海岸段丘の出入の多い澗の港であるから、後背地が無く開拓の中心地としては難色がある」

と云った。

高田屋嘉兵衛はコタンコロクルのイケシツルハが紗那に和人の船が入るのは歓迎するが、開拓の本拠にすることに難色を示したのは、蕊取(シベトロ)に行っているモシリコロクルに無断で決めることは出来ないと思ったからであろうと気付いた。嘉兵衛自身にしても開拓の本拠地を決めるのは近藤重蔵であろうから、開拓本部の位置は予定地として何か所か決めるだけである、と思い直し改めてイケシツルハに開拓の本拠地としてでなく、番役所や鯨の油絞りの作業場、倉庫等の予定地として杭打ち縄張りの許可を求め同意を得て早速寅吉・四方吉と、アイヌ人夫達で作業を始めた。

高田屋嘉兵衛は、更に藥取に行っているモシリコロクルのルリシビに伝えておこうと紗那より藥取まで何海里かと、通詞の山本久兵衛を通してイケシツルハに尋ねると

「アイヌ舟のイタオマチプで浜伝いに一日がかりですが、浜辺は、変化の無い白銀の砂浜で、行けども行けども、果てしなく、天候が悪くなっても難を避ける澗も無い航路です」

との事だった。

高田屋嘉兵衛は、藥取への往還に数日をかけて按検する迄も無いと思った。近藤重蔵は内保迄の按検を命じていた。其の役は既に果した。按検続航には食料不足で、藥取に行ってオムシヤの礼をする土産物も不足である。

次年度得撫(ウルップ)島への渡航按検の時に併行して、藥取の按検をしても良し、別途に択捉島の東海岸側を按検する時

に茂世路湾より択捉島最北端のラッキーベツ岬を廻り込んで藥取方面の按検も良かろう。

思い定めた高田屋嘉兵衛は宜温丸に戻って、沼島衆船頭の勘兵衛に話すと、元より得撫島の航路按検は沼島衆だけでも遣り遂げようと思っている勘兵衛である。

「では一刻も早く根室に戻って近藤様に報告しよう」

と大賛成であった。

夕刻になって、湾内各所に開拓施設予定地の杭打ち、縄張りを果した宮本源次郎達が宜温丸に帰って来た。

高田屋嘉兵衛は一同の労を犒った後に、先ず宮本源次郎に勘兵衛に伝えた根室へ引き揚げの事を告げ渋々乍ら同意したので、改めて一同に告げた。

七月二十八日、朝、辰(たつ)の刻頃、宜温丸は紗那湾奈與加(ナヨカ)より南内保へ向って出航した。

南の向い風であるので、右片帆取舵で進んだ。野斗呂岬の沖合より坤(ひつじさる)の方向に舵を取り、阿登佐岳を目印に二刻程航行し、ポロノツ岬より内保湾に入った。

内保コタンの酋長ネマンカラ以下のアイヌ達は、始めて宜温丸が内保湾に入った時と同じように高田屋嘉兵衛一行を心よく迎えた。

高田屋嘉兵衛は、ラァキツと通詞の山本久兵衛を通して、紗那までの航路按検をして来たことと、来春早々より再び来航して内保コタンを中心に漁場を開き、和人とアイヌとの交易会所を開き度いと申し入れると、酋長ネマンカラは、

「其れなら未だ雪や氷に閉される迄間があるから、船着場に番小屋を作ったり、漁場基地に会所や番屋を建てる用林を切って置いた方が宜い、場合によっては何人かの和人が此処で越冬したらどうか」

と好意を示した。

宮本源次郎は、我が意を得たりとばかり喜んで、

「拙者が、此処で越冬しても良いが、近藤重蔵様の許しを得ずには残れない。」

と残念そうに嘆息していると、寅吉がアチヤポと連れ立って来て、アイヌの若者三人で残ると申し出た。

話を訊いていたタンネモイのラァキツが、

「漁場の番小屋を造る木材なら、タンネモイの山にいくらでもあるから切り出しておこう」

と話が進展し、

更にラァキツは、

「此処からタンネモイは直ぐ近くだから、宜温丸に積んであるパイダルを下してヤイエサラマ（自分で帰る）する高田屋さんは早く根室に戻って近藤重蔵様に、択捉の船道をつけたと話すように」

と云った。高田屋嘉兵衛はラァキツ等の好意を喜び、寅吉やアチヤポに委細を託し、深夜暁前の夜間航行で根室に向かった。

七月二十九日、早暁、内保を出帆し国後水道を渡り、アトイヤ岬の東岸を経て追風を受け、国後島の東側太平洋上の満天の星空を仰ぎ見乍ら、真一文字に根室に向った。

冬期の荒波こそ無いが前例の無い夜間航行・沼島衆の船頭勘兵衛、北方航路の雄高田屋嘉兵衛の操航の妙に依ればこそ困難な夜間航行に成功したのであった。

八月朔日、朝日と共に宜温丸は根室に入港した。

二日前に厚岸より根室に戻って宜温丸の帰りを待っていた近藤重蔵が喜び迎えた。

宮本源次郎、山本久兵衛、沼島衆の勘兵衛や水主、アイヌ水夫一同が次々と艀から下り揃うと、近藤重蔵は克くやったと犒って充分休養するように伝えた。

勘兵衛始め一同は、口々に嘉兵衛の航海術の見事さを褒め称えた。嘉兵衛は番所の控の間に入って一刻の休養を取って、改めて近藤重蔵に航海按検、上陸地点の状況等を報告し、後日文書を以って詳細に報告致しますと云うと、

近藤重蔵は、

「今度の航路按検、上陸地見分は嘉兵衛が果した。蝦夷地御用の現地総司令の松平信濃守忠明様は江戸に引き揚げられたが、箱館の奉行所に三橋藤右衛門殿が居られる。ご苦労だが宜温丸で箱館に赴いて択捉島航路測定の顚末を報告して貰い度い。

尚、拙者は様似より幌泉へ抜けるアポイ岳の山道開鑿工事を確認したいので、箱館に行く宜温丸で様似迄同行し度い」

と依頼されたが、嘉兵衛の労に報いる為でもあった。

二日後、嘉兵衛は近藤重蔵の云う通り、択捉島航路の按検・測定の顚末を文書を以って三橋藤右衛門に報告し、賞金を賜った。其の上、近藤重蔵・三橋藤右衛門の推挙に因り、江戸に出て松平忠明に拝謁して、明年寛政十二年択捉島開拓に要する官物運送の命を蒙り、其の準備の為に兵庫に帰り、辰悦丸と雇船五隻の大船に米塩、其の他漁具等を搭積して箱館に廻航する事になった。

一方沼島の船頭勘兵衛は、択捉島航路按検に従っている間に、沖船頭の定吉が御救い交易の幕府御用の仕事を良く果し、更に自由交易の積荷を待ち乍ら勘兵衛の帰りを待っていた。

丁度折よく積荷が卍丸に満積となった時、船頭勘兵衛と一緒に択捉島按検に行った水主達も戻って来たので、上方市場に行き荷を捌き明年再び択捉島按検の御用を務めに来ると云う事だった。

近藤重蔵は、高田屋嘉兵衛によって択捉島航路の開発は緒についたが、蝦夷地、千島の防衛・開拓は航路の開発と共に、陸路の造営が重要である、特に山道難路の開鑿は難工事であるが、蝦夷地御用の名を賭しても成さねばならぬ大事業と思っていた。然るに其の大業に当る責任者最上徳内が解任されるとは、どうした事か、其の真相を知り度いと思った。

（九）

寛政四年根室に露国船エカテリーナ二世号で国使ラスクマンが来た時、通報連絡が遅れ其の対策が翌年になった事も、行路の不備からであった。再び露国と事を構える時には兵馬の騎行の出来る道が必要である。

非常の時のみか今後東蝦夷地、択捉島や千島の開発につれて、商人の通行や物資の運搬が多くなるにつれ牛馬の通れる道幅を必要とする。然るに現時寛政十一年、択捉島、国後島どころか蝦夷本島全般の陸路の未開地が甚だ多い。特に寛政十年最上徳内が道をつけたとは云え、内浦湾の山越内より長万部に至る礼文華峠の難所は、人一人が通るのがやっとである。次に幌別より白老の道は砂地で歩行すら困難である。

最大の難所は広尾に向う道である。様似より幌泉を経て砂流の悪路の多い荒波の打ち寄せる襟裳岬を抜ける道である。

寛政十年七月択捉島の南端ベルタルベのリコップに標柱を建てての帰り、近藤重蔵は広尾より幌泉へ出る難路の中の留辺志別より鋲田貫の岩道を開鑿したが、様似より襟裳を抜ける道も重要であるが工事困難の為に放置した尽である。

寛政十年の蝦夷地見分東班の司令大河内善兵衛は様似幌泉間の難所を通過し得ず松前に帰還したので、今回の蝦夷地御用には山道開鑿について特に徳内に命じた。

徳内は蝦夷地御用隊の出発に先駆して二月十六日に江戸を立ち、三月十日南部領下北半島で、道路普請の職人を雇い、資材食料を集めて四月二十四日船で様似に渡り、五月十八日より、襟裳岬に至る様似より幌泉間の山道開鑿に取り組んだのであった。

然るに六月八日、蝦夷地御用現地総司令の松平信濃守忠明が属僚を従えて工事の進行を視察し、工事の遅延を督し、陳弁する最上徳内に激しく怒って、即刻解任取放しの処分をしたと云う。

近藤重蔵は、前年の択捉島渡りには共に苦労して標柱を建てた仲であり、前々より北方探検の師として尊敬しているので、徳内を身分卑しき山師人夫を扱う如く、即時解任取り放ちとは何たる事かと憂慮していた。

偶々六月二十日官船政徳丸が厚岸に入港し、択捉島開拓に当る富山元十郎等の人員と、開拓用の資材用具食料等が運ばれて来たので、其の処置・対応に山田鯉兵衛が根室より急行して、様似に行き松平忠明に報告した時に最上徳内の解任取放ちの実状を知った。

尚、松平忠明は政徳丸で江戸へ引き揚げるので、厚岸で松平忠明の視察、総覧を待っている近藤重蔵に其の事

を併せて報告に戻った。

山田鯉兵衛に依れば、最上徳内は五月十八日より工事に入ったが、アポイ岳の山麓が海岸際迄迫って大波の打ち寄せる難路であるが、軍事にも平時の物産の運輸にも、せめて荷駄馬が行き交う道路幅にしようと、竣工を進めていると、六月八日蝦夷地御用現地司令の松平信濃守忠明が属僚の寄合席村上三郎右衛門常福、西丸小姓役遠山金四郎景普、西丸書院番長坂高景等を引き連れて工事の進行視察に来て、予想外に工事が遅延しているとして、日数ばかり経ても工事が進捗しないのはどうした訳か、と強く督した。

最上徳内は海岸寄りの岩道や泥土が打ち寄せる大波にも崩れず、山からの洪水にも崩れぬよう岩石等を打ち固める、念には念を入れて造成仕る為と答えると。

松平忠明は「念入りなどは宣しからず」と言ったので最上徳内は、「風浪激しき難所、人命にかかわる事、幕府の御用粗略には致しませぬ」と抗弁した。

所が、下級普請役の最上徳内が、松平忠明は信濃守にして江戸御書院番頭を勤める大身であるのに属領一同の前で抗弁するとは何事ぞ、と松平忠明は激怒して、即刻職取放ちを命じた。

最上徳内は蝦夷地御用普請役と言えども一時抱えのご家人下僚に過ぎない、上司の一存の配下処分で罷免されたのである。

従行の村上常福以下の属僚の誰一人として徳内を助ける者は居なかった。特に村上三郎右衛門常福は、松平忠明に続いて激しく徳内を叱責した。

村上常福は最上徳内が、アイヌの保護と権益の為に、松前藩の場所制度や、請負商人がアイヌの利を搾取する罪を発いて、直接江戸表に報告する等の出過ぎた越権行為をする者として前々より反感を持っていたので最上徳内が解任された後には村上常福は、商人等と結託して私利を肥すと兎角の噂もあると、山田鯉兵衛が報告した。

近藤重蔵は流石に御庭番衆の出自だけあって僅かの日時で蝦夷地御用役の面々が、地位や権勢、金銀の欲を超えて、アイヌ和人の差別を無くし、万人平等の幸福の為に努力する君子ばかりでない事を調べ上げるものであると、感じ入った。

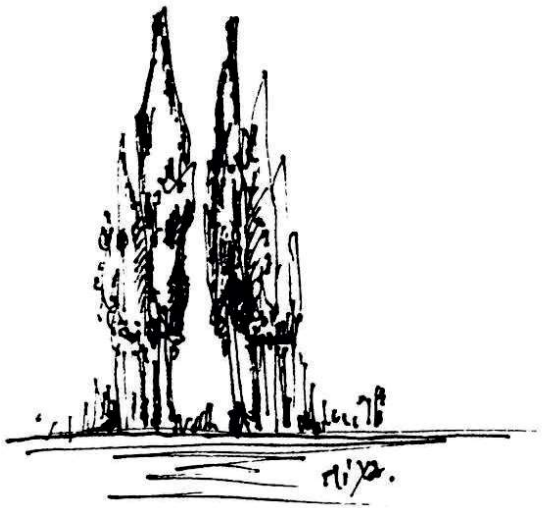
其して最上徳内の去った様似より猿留山道の工事現場に行って見た。

寛政十年に、重蔵が村上島之丞等と通った時と余り変っていなかった。最上徳内の後を引き継いだ工事担当責任の田辺安蔵に会ったが、村上常福より、徳内は「天下万民の為に道を拓く」と言ったが、最上徳内は択捉島や得撫(ウルップ)島、樺太へも行って異人に接しているので、徳内は、露人が進軍して来る時の為に道幅を広くしようとしたのだから、徳内が造ろうとした道幅のある堅固な道でなくアイヌの岨道に多少手を入れた程度の道を速成せよと命

ぜられていると言った。

近藤重蔵は啞然として声も無くアポイ岳を仰ぎ見ていた。

続く



千篇萬律

☆ 江戸初期の大学者伊藤仁斎は論語を評して「最上至極、宇宙第一の書」と書いた。その衛靈公篇第三九章に次の文章がある。

子曰、有教無類。（子曰く、教ありて類なし）。この章は古来定説があり次の如く解されて来た。「教育による差はあるが種類の差別はない＝誰でも教育次第で立派になる＝人の生は皆同じ唯教育如何による」

☆ 二十年程前これに異を説える新説が出た。九大の合山究先生である。即ち「孔子は生まれつき人の才能資質に差がある事を認めていた」とし、「教えがあってこそ似たものがなくなり個性ある人間が形成される」と解し有教為無類人の省略形と主張された。

☆ さて私見を云う。「教育の方法は唯一つの正道しかなく（基礎から一歩〳〵相手の能力個性に応じ倦まず絶ゆまず情熱をもって等…）似たような安直なやり方が他にあるものではない」合山先生も説かれる通り類は限りなく似に近い。従って無類＝似たものが無い、と解釈した。古今東西無類の新説如何！

☆ 今、教育の退廃が叫ばれ改革について囂しい。孔子の眞意は何れだったか。私見を最近ある会誌に「論語解釈に於ける異説と私見」として発表した。教育論議に一石を投じられれば面白いのだが。（く）

「まんじ」　第七十七号

平成十二年八月一日発行（非売）

編集　鯨遊海

発行　柴田富佐子

〒一〇一―〇〇六二
東京都千代田区神田駿河台二―九
柴田方
「作家群」
（まんじ）編集部

☎ 〇三（三二九三）〇〇九四　柴田方

郵便振替口座　〇〇一二〇―四―九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷　大和印刷株式会社
埼玉県川口市青木一―十二―二十

☎ 〇四八（二五四）三三一一

まんじ

No. 78

2000.11.1

まんじ 第七十八号 目次

鎖国と銀産と家光 …… 新井　宏 … 4
演劇台本 渡辺華山 游相日記 …… 相原精次 … 16
御参府中日記のこと …… 三戸岡道夫 … 35
詩　旅　行 …… 青木昭成 … 49
幕末トライアスロン
　唐津藩小笠原長行（ながみち）の造反 …… 大和禎人 … 53
月の海辺の人形たち …… 森　実与子 … 73
霧に包まれていた光(1) …… 鍋屋次郎 … 91
体当たり戦法を強制された
　神風特別攻撃隊の人びと(二) …… 千坂精一 … 98

泰　山　木（八）紙透小太郎の一生 …… 紙透寛夫 … 108
方解石の出る楠峠（十一） …… 伊澤敏久 … 111
笹ヶ崎村（十二） …… 太田和貞 … 114
ねずみ小僧丸楠（十八） …… 鈴木昭三 … 121
漢詩 潮騒録（二十七） …… 鯨　游海 … 125
近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（二十八） …… 金子正義 … 130
千篇萬律 …… 編集子 … 138
表紙・カット …… 宮城正彦
カット …… 鈴木國男



鎖国と銀産と家光

新井宏

一六三七年

一六三七年、オランダのアムステルダム。一夜にしてチューリップ球根の証券市場が崩壊した。投機家ばかりでなく、多くの小市民が、資産階級入りの夢を目前にして、全てを失った。

異常であった。一六一〇年頃から始った欧州でのチューリップ熱は、珍種を求めて次第にエスカレート、定常的な価格上昇をもたらし、チューリップ神話を生んだ。花嫁が球根一株を持って嫁ぐと、まもなく家が建った。

ついに一六三三年になると、ヨーロッパ最大の金融市場アムステルダムでは、現物の球根ばかりでなく、まだ見ぬ球根さえ証券化して売買するようになっていた。アメリカ大陸からもたらされる過剰な金銀が、利を求めて金融市場に殺到していた。

そしてチューリップ証券の総価が、オランダの富を左右するようになった日に、それは紙くずと化した。

一六三七年、日本では、長期にわたって上昇していた米価がついに石当り銀六十匁の最高値を記録した。江戸開府時の三十年前から見ると、実に三倍以上になってしまった。そして同じ年の十月には、キリシタン農民による島原の乱が起こり、日本は鎖国に向かって後戻りできない道を歩み始めた。

一六三七年、東アジアの大陸では、一六三六年に国号を清と改めた女真族が、朝鮮に侵入して李朝を従属させ、北京を窺っていた。明は滅亡に向かって転がり始めていた。

時代が動いていた。

家光の神経症

徳川家光は、不安でならなかった。

元和九年（一六二三）父秀忠の死後は、完全に権力を掌握して、将軍継嗣を争った弟の駿河大納言徳川忠長を改易、自刃させ、豊臣氏縁故の加藤清正の子忠広も改易し、諸大名を震え上がらせていた。そして参勤交代制を整備し、寛永十二年には「武家諸法度」の大改定も行い、その権力基盤は極めて安定していた。しかし、不安は去らなかった。諸書が一致して伝えるところによると、一六三七年すなわち慶長十四年に、家光は不安が嵩じて強度の鬱病におちいる。

家光の不安は、幼い日の記憶に根ざしていた。

実質的な長男として生まれ、祖父家康の幼名竹千代をもらいながら、父母の愛情はなぜか薄かった。母お江の方は二歳下の才気あふれる弟国松を偏愛し、父秀忠もこれを許していたので、大奥はもとより幕府内外の風評も、世嗣は国松にと固まりつつあった。竹千代は食べ物から衣服まで差別されたというから、そんな風評が立ったのも無理がない。その異様さには、あるいはお江の方と春日局の女の対立があったかも知れない。

竹千代の付き人や乳母春日局にとって、状況は極めて厳しかった。国松擁立を阻止するためには、竹千代自身の変身に期待するしかない。そんな重苦しい雰囲気のもとで、竹千代は弟国松への嫉妬と父母への抗議を込めて、元和元年（一六一五）十一歳の時に自殺を図ろうとする。大阪夏の陣の直後のことであった。

もう猶予はならなかった。春日局がひそかに駿府の家康のもとに動き、竹千代の地位か確立する。それは家康の死の前年のことであった。

家光の少年期の体験は、その後、自らの制御し得ないものに対する過度の恐れとなって現れた。絶対権力を得てからも、いつ地位が脅かされるか不安でならなかった。

そもそも、権力者というのは、いつも孤独であり、神経症や恐怖症、しいては妄想狂になり易い。天下人になってからの豊臣秀吉がそうであった。ニクソン大統領でさえも神経症や恐怖心を抑えるために、薬物を常用していたという。家光の場合も、権力者特有の環境が神経症、恐怖症を加速したことは十分に考え得る。

このような神経症者が権力者として君臨する場合、組織も本人も、その不安や恐怖を和らげ癒す手段を必要とする。その面で家光を支えたのは、家康への強烈な信仰であり、慈母役の春日局の愛であり、公的面の腹心酒井忠勝の安定感であり、私的面での堀田正盛の滅私奉公で

あった。

家光の祖父家康に対する崇拝の念は、終生変わらなかった。寛永十一年（一六三四）から三年間の年月と五十一万八千両の巨費をかけて、豪華絢爛たる日光東照宮を完成させ、生涯に二十四回も参拝している。もちろんその造営の意図に、諸大名や朝鮮通信使に対して参拝を強要するなど、徳川の権勢を誇示する政治的な意向があったのは確かである。しかし、家光にとって東照神君を崇めることは、家康の宗教的な霊力を得て、自身の精神的な安らぎを得る拠り所でもあった。自分を第二代将軍に擬する守り札を密かに日光輪王寺に納め、死せる父秀忠に対してさえ、強烈な対抗意識を見せている。そのため、家光は家康の子だとする説も流布されたほどである。

また堀田正盛は、家光の治世において、唯一将軍の友で有りつづけた人物で、神経症、恐怖症を癒すのに天分的な能力を持っていた。神経症は、症状が症状を生んで悪循環しやすいのが特徴であるが、心を共有することのできる正盛によって、家光はどれほど救われたか計り知れないものがあった。そのため、将軍の私的な機能の代理人として、老中にまで登り、家光の死後は、殉死して果てている。例え、家光が殉死を禁ずる遺命を残していても、正盛の殉死を、誰もが納得して留める者などいなかったということにその役割が良く現れていよう。

かくして家光の神経症、恐怖症は、周囲に支えられ大きな破綻を来たすことはなかったかに見える。いやむしろ一般的には名君としての評価が高いといえよう。しかし、実はその神経症こそが、家光政権の性格を決定づけた最大の要因であり、激動の世界情勢の中で、鎖国に至る道を突き進む結果をもたらしたのである。

神経症は、自我形成が未熟で、自己中心的であり、融通のきかない人が、長い間ストレス状態にあると起こしやすいという。家光の場合、融通がきかないのは親の秀忠譲りであろうが、少年期の体験や権力者特有のストレスが、神経症を悪化させ、恐怖症をもたらしたと見てよいだろう。神経症にして恐怖症の家光に仕えるのが、どれほど大変だったか。ひとつ間違うと改易である。ピリピリした空気が幕閣周辺を満たしたに違いない。

だから、家光のもとでは、決して将軍を支える全権の宰相は生まれなかった。家光が意図して望んだわけでもないのに、家光の親政体制がどんどん出来上がって行く。その動きを簡単に追いかけてみよう。

例えば、家光は将軍になるや、秀忠大御所時代にもかかわらず、直ちに、剛直な老臣で元守役、青山忠俊の領地を没収してしまった。家康に見込まれて守役になった忠俊は、竹千代のわがままな行動や柔弱な行動に対して、刀を抜いて「いうことを聞けないなら、まず自分の首を切ってからにしなさい」と叱りつけるようなところがあり、神経症、恐怖症の家光にとっては誠に忌まわしい存在であった。あるいは忠俊のこのような行動が家光の神経症を加速したのかも知れない。遠ざけるだけで済んだはずの忠俊を蟄居までさせてしまったところに、家光の神経症の発露を見る。

また、かってのライバル・弟の徳川忠長に対する扱いもそうである。駿河・遠江の二国五十五万石を領し、世に駿河大納言と言われた忠長を、秀忠が亡くなる寸前に改易、蟄居させてしまった。それだけなら、まだ良い。それでも不安だったのか、腹心の安部重次を蟄居先の高崎に送り自刃させてしまう。後に老中まで勤めた重次が、堀田正盛とともに殉死したのは、この時の心の痛みのせいだったのではなかろうか。

権力者がライバルの肉親者を処刑することなど、世界の歴史ではありふれたことである。オスマントルコのように、皇帝の兄弟は全員殺されることが制度として決まっていた国さえある。隣国の李朝の歴史を見ても、親子兄弟に死を賜う例など日常茶飯事である。

しかし日本は異なっていた。もちろん日本でも、武器をとっての兄弟間の争いなら枚挙にいとまないが、権力者が一方的に肉親を殺害する例など極めて少ないのである。だから、例え忠長の存在が危険を孕んだものであったとしても、自刃までさせた行為に、家光の恐怖症を見ないわけには行かない。

また、老中制度の導入も、もとはと言えば、家光の不安に根ざしていた。

秀忠政権の時代は、行政面では年寄出頭人土井利勝の独裁的な体制にあった。行政能力に優れ、有力旗本と諸大名のネットワークを掌握していた利勝を秀忠は十分に活用していたと云えよう。しかし家光は、秀忠が亡くなると直ちに、年寄すなわち、土井利勝、酒井忠世、酒井忠勝の合議制を厳命する。

別に土井利勝に不満があって失脚させたわけではない。それは、その後も長らく土井利勝が形式面では幕閣に重きを成していたことで明らかである。ただ、家光としては、自分の知らないところで、どんどん実質が進んで行くことに不安を感じ、腹心の酒井忠勝を合議に参加させたのであった。

ところが、この時代、まだ組織で動ける時代ではなかった。合議制は政務の著しい停滞を招き、行政が麻痺しはじめる。そこで新たに導入したのが土井利勝、酒井忠勝に、家光側近の松平信綱、阿部忠秋、堀田正盛を加えた、合計五人による大年寄（後の老中）輪番制である。その頃までには酒井忠世は失脚している。そしてほどなく、寛永十五年（一六三八）には、土井利勝と酒井忠勝は格上げされ、通常の老中の仟務は免除される。この時に、土井利勝の影響力はかなり排除されたが、腹心の酒

井忠勝は、家光の前で「頭巾を用い、安座する」ことが許されて、家光の公的世界の第一人者になる。

これによって秀忠政権当時の実力者は実務からは一掃されてしまう。しかも、家光はこの老中制さえ無視して、有力旗本を上使あるいは大目付として、直接手足の如く使い、自己の意思を貫徹させる行動にでる。

このような、家光と老中との関係は、家光独裁下にありながらも、老中と家光の間に意見の相違があったことを示している。権限が分断され、合議でしか物が決まらぬ老中の組織にあって、家光の意思に反した政策が決まることなど、通常ならあり得ない。その老中の決定さえ、しばしば覆す家光の行動は、正に神経症、恐怖症、妄想狂に基くものであった。その代表的な症候が鎖国とキリシタン問題に集中的に現れた。

銀と価格革命

一六三七年は、家光が実質的に政権を担ってからちょうど五年目の年である。その間には、三十万余の軍勢を率いて上洛し、徳川忠長、加藤忠広を改易し、多くの大名を転封し、東照宮を造営し、「武家諸法度」の大改定を実施している。徳川の権力は磐石であった。しかし時代は大きく動いていた。

この頃、日本では銀の産出に陰りが出始めていた。十六世紀中頃から石見銀山、生野銀山、佐渡鶴子銀山が開発され、銀産はうなぎのぼりに上昇し、十七世紀初には、おそらく年産二百トン近くに達し、アメリカ大陸の銀産に匹敵する水準にあったと推定される。しかし、佐渡鶴子銀山などの様子から見て、一六二五年頃をピークに、銀産出が急減し始めたのである。一方、銀の流出は、捕捉できる範囲でみると、一六三七年頃にピークを迎えている。しかもアメリカ大陸の銀が大量にアジアに向かったことで、銀の価値が暴落していた。銀流出の防止は焦眉の急務であった。

二百トンの銀がどれほどの価値を持っていたか、ちょっと試算して見よう。それは、当時の米価から見て、三百万石の米に相当するほどの巨額である。したがって、その銀の産出や流出が、当時の大問題でなかったはずがない。武将の時代は終わり、経済の時代に突入していた。

そもそも経済史の面で、一六三七年とはどんな年だったのであろうか。

アダム・スミスは『国富論』の中で、一六三七年を経済史の第三期の始まりとし位置付けている。それはアメリカ大陸からの銀の影響がヨーロッパでは一六三六年頃までに終息したことによる。それもあるが、実は一六三七年は、東西世界で初めて、金銀比価が十三に収斂した

年なのである。いわば世界経済の一体化が初めて成立した年として、むしろ記録されるべき年なのである。

ここで金銀比価について、歴史的に振り返っておこう。ヨーロッパでは、ローマ時代から十五世紀まで、金銀比価はほぼ十から十二に安定していた。一方、中国では唐代から明代まで、金銀比価は六から八であり、ヨーロッパに比べ常に銀高金安の傾向にあった。モンゴル帝国の成立で、一時その差が縮まったこともあったが、明朝の頃にはもとに戻っていた。また日本ではさらに銀高金安で、奈良時代から室町初期まで金銀比価が三から六の範囲にあった。それまでの日本はなんといっても金の国ジパングであった。

その状況が急変するのは、十六世紀である。

まずヨーロッパにおいては、一五三〇年頃からボヘミヤなどで、一斉に銀山が開発され、年産五十トンの規模に急上昇し、フッガー家の未曾有の繁栄がもたらされる。そしてそれを追いかけるようにして、アメリカ大陸からも金銀が入ってくる。当初は金が主体であったが、やがてメキシコのサカテカス銀山、ペルーのポトシ銀山が開発され、膨大な量の銀が入ってきた。その銀の産出量は、一五五〇年代には早くもヨーロッパ銀産の水準に達し、一六〇〇年頃にはその五倍を超え、年平均二七〇トンの規模になる。その結果、ヨーロッパでは金銀比価が十三に跳ね上がり、銀価ベースの物価上昇が猛烈な勢いで進んだ。世にこれを価格革命という。

しかし、一六〇〇年を迎える頃には、物価上昇も一段落する。そしてその頃からヨーロッパに向かっていた銀が、物価の安い国あるいは金の安い国を求めて、無国籍に徘徊を始める。

まず金銀比価の差を利用して、東洋で金を求め、ヨーロッパに運ぶことで膨大な利益を得る。しかしそれにもまして利益が出たのが、生糸の貿易である。すでに価格革命に見舞われていたヨーロッパでは、生糸の価格がかっての数倍に高騰していた。しかし、中国ではヨーロッパの三分の一以下の価格で極めて高品質の生糸が入手できた。アメリカ大陸の銀が、マニラを経て、怒濤のごとく中国に流れこむ。

一方、日本においても、一五四〇年頃から活発になった銀産が、十七世紀初にピークを迎え、瞬間的にはアメリカ大陸の銀産を凌駕するほどに成長していた。その頃の日本は、豊富な銀によりヨーロッパに先駆けて中国の生糸を求めて走り出していた。それを仲介したのがポルトガル船である。この仲介貿易はまさにポルトガルにとってドル箱であった。

しかし、ポルトガルによる日本の銀とスペインによるアメリカ大陸の銀が、中国の生糸を求めて殺到する中で、何時までも中国の生糸が安いはずがない。またたく間に

生糸価の上昇が始まる。それと共に銀の持つ通貨性によって、生活必需品の物価も急上昇する。東洋における価格革命の始まりである。

ヨーロッパに五十年遅れてはじまった東洋の価格革命が終了するのが、金銀比価の国際水準への収斂した年と同じ一六三七年である。この年、ヨーロッパではスペイン産の生糸が暴落し、中国産の生糸価の上昇もあいまって、東西間の生糸価格差がなくなってしまった。

かくしてアメリカ産の銀の行き場がなくなってしまった。そして再び銀はヨーロッパ、すなわち世界金融市場の中心地アムステルダムに向かうようになる。

この頃のオランダは世界最大の海軍国であり海運国であった。毎年千隻の船舶を造り、全ヨーロッパ船舶の過半を所有していた。しかもその海運力を背景にして、貴金属の輸出入の自由を保障していた唯一の国であったため、全ヨーロッパの資金がアムステルダム銀行に集まってきていた。当然金利が低下し、投機が発生しやすい環境であった。そしてチューリップ市場にバブルが発生し、やがて崩壊したのである。

このような国際環境の中で、日本は極めて特殊な足取りを辿る。十七世紀初にアメリカ銀を凌駕するほど盛んであった銀産が、その後著しく停滞し始めたのである。当時の銀山では良鉱を掘り尽してしまうと、それで終りになってしまうこともあったが、銀の減価によって、採算性が著しく悪化してしまったことにもその原因がある。つまりドレイ労働によるアメリカ銀に敗北してしまったわけである。

そして、つい先日までアメリカ産の銀に伍して市場を支配していたのが、いつのまにかアメリカ産の銀の影響下に立たざるを得なくなってしまった。貿易政策に変化が要請されていた。

幕府の対応

しかしいったん交易の味を知ってしまった日本が、急旋回できるはずがない。バンカド制という一括輸入制を採用して、生糸価を低価に抑え、輸入を抑制しようとしても、いったん高まった生糸に対する需要は収まらない。問題の解決は、生糸の国産化あるいは銀以外の商品の輸出によるしかなかったが、それには時間を要する。

そこで登場したのが、寛永九年（一六三二）から寛永十六年（一六三九）までの五次にわたる「鎖国令」である。

中高校の歴史教科書では大抵、この鎖国令の目的をキリシタン禁教徹底のためと教えている。しかし「鎖国令」は、実質的には、貿易統制令そのものであり、許可された者以外の貿易を厳禁しているのが一貫した内容である。

いわば幕府による貿易の独占化政策である。したがって当初は、ポルトガル船も日本の奉書船も貿易が許可されていたが、第五次に至って遂にオランダ船と唐船のみに制限されるようになったというのがその主要な経過である。

条文中にはキリシタン禁教に関するものも多いが、キリシタン禁教など、慶長十八年（一六一三）以来江戸幕府の一貫した方針であって、何も新規なものではない。いわば、貿易統制令の実効性とは無関係に、イデオロギー面でキリシタン禁制が表面に持ち出されているだけなのである。そこには、家光のキリシタン恐怖症が色濃く反映されている。

ところで、もし第六次の「鎖国令」が出されていたとしたらどうなっていたであろうか。おそらくそこでは、貿易統制令の性格は陰を潜め、全キリスト教を禁教し、オランダをも完全に締め出して、完全な鎖国令が完成していたかも知れない。そうならなかったのには、何よりもキリシタン恐怖症の家光に困惑しながら、なんとか家光を宥めきった実務者たちの力があった。

第六次鎖国令に至らなかったことが、どれほど日本に幸いしたか計り知れないものがある。鎖国中にあっても、オランダという大きな風穴を確保し続けたことが、明治維新後に半周遅れながら、何とか欧米について行けた大きな要素であった。危ういところであった。

さて、幕府のとった対策は、貿易統制面ばかりではなかった。国内経済面では、寛永通宝の発行による銭経済への復帰、すなわち銀経済依存の緩和政策を取るのである。

秀吉の検地以前には、貫高制が行われていたことでも明らかなように、銭はもともと主要な通貨であった。しかも異例なことに、これらの銭は北宋銭など中国からの渡来銭で、日本で発行されたものではなかった。より厳密に言えば、中国の経済とは切り離されたところで、日本の国内通貨としてだけ通用していた歴史があるのである。

しかし大量の金銀の産出は、金や銀を主要通貨の地位に押し上げるのが必然であった。その集大成が慶長五年（一六〇〇）の徳川家康による慶長小判や慶長銀の発行である。したがってその時には、銅銭は発行されていない。

そして銀の主要貨幣としての位置が定まると同時に、銭に対する銀の減価が始まる。慶長銀の発行当時、銭一貫文が銀七匁であったのに、寛永十四年（一六三七）には銭一貫文が銀二十四匁となってしまうのである。これは物価上昇と軌を一にしていた。

このことは、銭ベースでは物価が安定していたことを意味するが、グレシャムの法則で言えば、悪貨の銀が良貨の銭を駆逐したわけで、銭が退蔵され他用途に転用さ

れ、流通しなくなったことを意味している。事実、オランダ東インド会社が日本の銅銭を安南に一億二千八百万個も輸出している例がある。

そして、慶長小判や慶長銀に遅れること三十六年目の寛永十三年（一六三六）になって、寛永通宝が初めて公鋳される。一般貨幣史を見ても、寛永通宝の発行理由を明示していないが、時代背景から見て、銀価対策であったことは間違いないであろう。日本は一日も早く、銀の流出を抑え、国際経済を支配する銀の束縛から逃れる必要があったのである。寛永通宝の発行はその一環であった。

キリシタン恐怖症

家光のキリシタン嫌いも父の秀忠譲りである。秀忠にしても元和八年（一六二二）には宣教師五十五人を長崎西坂で大量処刑している。そもそも江戸幕府が直轄領内でキリシタン信教を禁じたのは慶長十七年（一六一二）であり、キリシタン弾圧は家光に始まったことではない。しかし家光のキリシタン弾圧は異様なまでの執拗さで行われ、いかなる残酷な手段を取っても、棄教させようという変質狂的なものであった。

家光にとっては、ポルトガル、スペインは恐怖の最大の対象であった。もし西国大名がスペインやポルトガルと組んだらどうなるか、それが不安の基調にあった。事実、ポルトガルから見れば、関が原で勝利した家康でさえ、東国の一大名に過ぎなかった時期があるのだから、家光の恐れも理由なしとはしない。しかし、時代は変わっていた。ポルトガルやスペインが布教に熱心だったのは、もう宗教以外には貿易戦争に勝ち残れなくなっていたからであって、それははけっして強さの証拠ではなかった。おそるべきは、むしろオランダやイギリスであった。オランダは既に一六二四年に台湾を占拠し、ゼーランディア城を築いて、東シナ海の制海権を握っていた。

家光が政権を完全に掌握し、寛永九年（一六三四）に第一次鎖国令を出したころ、ポルトガルは、中国産生糸に関して唐船との競争に破れつつあり、日本商人の投資を得て、東南アジア産の生糸の貿易に活路を見出そうとしていた。そのため幕府にとっては新たなルートの統制が問題となっていた。だからこそ、鎖国令の当初は、日本人の渡航禁止と帰国禁止に最重点が置かれていた。そして東南アジアに基盤をおく日本人の問題が、キリシタン禁教の問題と密接に結びついたのである。

いつの時代でも、政治経済の問題が、宗教や思想問題に転化すると、悲劇が始まる。経済問題なら妥協もできるが、宗教や思想問題は先鋭化し、それ自体が目的化されてしまう。正義は我にありと心を武装した時に、妥協が不可能になる。当初は貿易問題の中でのキリシタン弾

圧であったのが、金産や銀産の停滞を期にしてキリシタン弾圧そのものが目的化する。そこに家光が存在していた。

家光は、酒井忠勝と堀田正盛の下屋敷を極めて頻繁に訪れている。同じく腹心で知恵伊豆と呼ばれた松平信綱の屋敷へは、ただの一度しか訪れていないのだから、極めて異例のことである。酒井忠勝が家光の公的世界、すなわち日光東照宮の造営や朝鮮通信使の日光参拝、あるいはキリシタン問題などで奉仕していたのに対し、堀田正盛は、家光の私的世界、すなわち神経症や恐怖症の共犯者として奉仕していた違いはあるが、二人とも家光の心の世界には不可欠な人物であった。だから頻繁に訪れていたのだといえば、それまでかも知れないが、実は両者の下屋敷には共通したものがあった。そこでは、しばしばキリシタン教徒の取り調べが行われていたのである。

穴牢と穴吊るしの刑は、この世のものではなかった。頑強に改宗を拒むキリシタン達は、絶命する寸前に、穴吊るし刑から、この世に引き戻され、回復を待ってまたそれを繰りかえされていた。そのキリシタン達の尋問の様子を見に、家光はしばしば彼らの下屋敷まで通っていたのである。

家光はキリシタンについて、どんなことでも知りたがっていた。かれらの真の目的は何か、武力どの程度か、マニラを攻めることができるか、オランダの宗教と何が異なるか、彼らがオランダと組むことはあり得ないか。問題意識は鋭かった。

それは家光の心の世界での戦いであった。キリシタンに対する恐怖心と敵愾心は、キリシタン教徒の信仰心の強さに比例して、病的に高まっていった。

寛永十四年（一六三七）の島原の乱は、家光の恐怖心にますます拍車をかけた。本質的には松倉勝家の苛政に対する百姓一揆であった天草の農民達の蜂起が、土地柄キリシタンの旗印を掲げたことから、すっかりキリシタンによる宗教戦争となってしまったが、このことにポルトガルやスペインの宣教師達は全く関与していない。当時、各大名は他領へ兵を動かすことが厳禁されていた等の事情もあって、婦女子を含む三万余が、原城に立てこもる頃には、現地での対応ができず、松平信綱を上使として十万余の大軍でやっと鎮圧した。この時、幕府の依頼によって、オランダが原城の艦砲射撃を行っている。

この頃のオランダは、日本からポルトガルを追い出し、日本の貿易を独占するためにやっきになっていた。一五八一年にスペイン支配下から独立したオランダが、旧教キリシタンの危険性を声高にいうのは頷けるが、これはむしろ当初から一貫した方針に基く離間策であったと考えた方がよい。したがってオランダは、キリスト教色を

日本に一切持ち込まないように細心の注意を払っていた。

しかしキリスト教国には違いない。このことを鋭く突いたのが家光である。原城砲撃で見せたオランダの軍事力に脅威を感じたこともあるが、家光はオランダに対する脅迫感にすっかりとらわれてしまった。

幕閣の実務者は、ただ単に銀産停滞に対する対策として、貿易独占をはかるため、制御しにくいポルトガルを切りたかっただけであった。だから、大きく育っている貿易から全面撤退することなど、夢にも考えていなかった。むしろ、ポルトガルを切った時に、オランダが幕府の要求通りに動いてくれるか、その見極めが重要であった。そのために、オランダ商館長カロンの参府を求め、幕府の諸要求に従うことを確認させた後、寛永十六年（一六三九）にポルトガル船の来航禁止に踏み切る。これが鎖国令の完成である。オランダは大喜びであった。

ところが家光はオランダに対する警戒心を全く解かなかった。家光の頭の中では、オランダもキリスト教国であり、その勢力が侮れないことを知れば知るほど不安になっていった。それが端的に現れたのが、平戸オランダ商館の取り壊しである。家光は、老中の決定の頭越しに、大目付井上政重を派遣して商館長カロンに商館取り壊しを命じる。命令が拒否された時には、流血が避けられない情勢であった。

後にキリシタン宗門改め役となり、辣腕をふるった井上政重は、冷酷無情の人物と見なされているが、かなりの人物だったと思われる。無用な流血を嫌い、拷問によらず、尋問によって棄教させ、棄教した宣教師を使ってまた棄教者を得る方法に重点を置いていたのだという。その井上政重がおそらく裏取引きしたのであろうか、カロンはとにかく命令に従って事なきを得た。もし流血事態に至っていたら、家光の危惧した通り、オランダとポルトガル、スペイン連合が出来上がっていたかも知れない。貿易では争っていたが、この頃オランダとスペインは、ヨーロッパで関係改善を図りつつあったのである。

そして更に家光は寛永十八年（一六四一）、酒井忠勝らの反対にもかかわらず、オランダ平戸商館を閉鎖させ、長崎の出島に閉じ込めてしまった。これも家光の直接指示によっている。この頃、酒井忠勝にしろ、松平信綱にしろ、井上政重にしろ、オランダを守るのに懸命であった。

一方、日本を追われたポルトガルは、最後の努力として、寛永十七年（一六四〇）に特派使節船を送ってくる。それに対し、家光は渡航禁止の令を犯したことを責めて乗組員六十一名を長崎で処刑してしまった。断固たる処置とはいえ、ことは使節団の処刑である。報復は必至と考えられた。家光はますますキリシタンへの恐怖を募らせ、諸大名に厳戒令を出す。もしオランダがポルトガル・

スペインと組んだらどうなるか。西国大名がそれに呼応したらどうなるか。家光の不安はつのり、異常なキリシタン弾圧に向かって行く。

鎖国後

ポルトガル船の渡航を禁止する第五次鎖国令は、日本における生糸の暴騰を予想させるものであった。商人達がさき回りして生糸を買いあさった。しかし事態は逆に動く。鎖国によって、為替管理を強化し、銀の国内価格を国際価格からある程度切り離したことで、国内の銀価格が上昇し始め、その結果として、生糸価が下がってしまうのである。幕府側の勝利である。

しかし、それは為替の二重価格制を生むことでもあった。世界的には金銀比価が十三から十六に向かって銀安に進んで行くなかで、日本だけが十二から十、そして幕末には紙幣的な通貨とはいえ、一分銀では五まで銀高が進むのである。そのつけがペリー来航時にまとめて払わされて、幕府は崩壊した。

鎖国令。それは本来、為替管理としての一時避難であったはずである。銀に替わる国内産業を興して、収支をバランスさせるべきものであった。事実、その後銅産を興して、日本は銅の最大生産国になり、盛んに輸出するようになる。

しかし、家光の恐怖心は、鎖国令に必要以上の性格を与えてしまった。一時的な緊急避難ではすまなくなり、江戸時代の安泰と引き換えに西欧からの遅れを招いてしまった。それでも、家光の幕僚たちが、なんとか第六次の究極的な鎖国令の発動の防止してくれたお陰で、明治維新につなぐことができた。

一般に家光は名君として通っている。確かに家光治世下、部下達がお互いの足を引っ張り合うことなく、協調して事に当たっていた。それだけでも名君に値するかも知れない。しかし、それは家光の神経症を癒しながら、政治を進めて行くため、部下達が協力しあって行かざるを得ない状況でもあった。

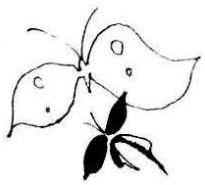
かくして、銀産の停滞は、鎖国をもたらし、世界経済から日本を切り離すこととなった。開国維持でもなく、完全な鎖国でもない道。それは、家光と幕僚たちとの綱引の結果だったのではなかろうか。第六次鎖国令が出されずに済んだことをもって、満足すべきなのかも知れない。



演劇台本

渡辺崋山 游相日記

相原精次



登場人物

渡辺崋山　（登・三十九歳）……
高木梧庵（晋吉・二十三歳）……
お　銀（まち・四十五歳）……
佐藤幾右衛門　（八十歳）……
幸　蔵（お銀の次男・十九歳）……
も　と（お銀の長女・十一歳）……
栄次郎（三男・史実では八歳・芝居では適宜）
留　吉（四男・史実では三歳・芝居では適宜）
厚木南通信テレビ女キャスター……
厚木南通信テレビ編成部　男……
郷土史家　……

第一場

舞台　現代。厚木にある架空の地方テレビ局の前。

編成部の男、悩ましそうに登場。続いて編成部女、登場。

編成部男　そんな企画じゃ、ＯＫは取れないんだってば。

編成部女　視聴率がよければ、何でもいいってわけ？私はそれ間違ってると思う。今さ、何でもないものをただ騒いで、おもしろおかしく編集して、「受け」ばっかりねらった番組が多すぎるのよ。こんなうそっぱち、いつかしっぺ返しが来るんだから。

編成部男　それじゃ、何かいいテーマ持ってるっていうのかよ。

編成部女　それがあれば、こんな苦労してないでしょ。

編成部男　な、な、そうだろ。だったら偉そうに言うなよ。

編成部女　（考え込む。そして突然）ねぇ、地味でもさ、地方テレビとしては、もっともっと身近な問題があるんじゃない。単に受けねらいじゃなくて、郷土に埋もれた歴史を地味に、じっくり掘り起こす、なんて。

編成部男　そんなもんじゃ、視聴率かせげないって。

編成部女　また視聴率だ。視聴率が何なのよ。じっくり、

足もとを見つめようよ。それがいつかは勝利につながるのよ。

編成部男　それもいいよ。いいけど、だから何をしようって言うんだい。そう言うだけの案がなきゃ、そんなの理屈だけじゃないか。

編成部女　何が出るか分かんないけどさ、歩こうよ。ぶつかろうよ。

編成部男　歩いて、石ころにかい？

編成部女　てめえ、ざけんじゃねぇ。こっちは真剣なんだぞ。

編成部男　ご免よ。ふざけてるわけじゃないんだけどね、……それじゃどうすれば、ってことになるわけさ。

編成部女　だからぶつかろうよ。私、思い出したんだ、身近な所に地元の歴史を研究している人がいたんだ。今から行ってみよう。

編成部男　ものになるのかな。

編成部女　行ってみなきゃ分かんないでしょ。（男のおでこをつつきながら）ぶつかるの。さあ、一緒においで。（女スタスタ歩き出す。男、後に続く。）

第二場

舞台　郷土史家の応接間。壁に絵が掛かっている。（実は次の場面そのものを絵と見立てる。崋山、弟子の梧庵、お銀、幾右衛門の四人がストップモーションで中に立っている。）

編成部女　地味でもいいんです。足で歩いた番組を作りたいんです。お願いします。何か、ヒントを下さい。

編成部男　視聴率のとれる番組を作れって、命令を受けて……

編成部女　バカね、今そんなこと言わなくていいのよ。内輪の話は、今はいいの。先生、是非何かヒントを、お願いします。

郷土史家　いくつか、関心を持っているものはあるんだが……。（間が長い）

編成部女　先生、さっきから気になっていたものがあるんです。この絵。

郷土史家　この絵ですか？　この絵のどこが気になっているんですか？

編成部女　あの、ですね、何か、身近な故郷の風景、っていう感じがして。

郷土史家　そんな風に思ってもらえますか。実は、これは私が描いたものなんですがね。

編成部女　先生は絵もお描きになるんですか。

郷土史家　これはね、江戸の末期、この近くに展開した、ある歴史的状況を想像を交えて描いてみたんですよ。

編成部男　俺も気になっていたんだ。四人の人物がいて、武士らしい人の方が農民に頭を下げているんだよね。

ちょっと変だなと思って。

編成部女　うん、そう。私もそのこと気になってたんだ。是非聞かせて下さい、この絵のテーマについて。

郷土史家　そうですか。いいところに目を付けますね、あなた方は。（しばらく考えて）……それじゃァ。……渡辺崋山ていう人をご存じですか？

編成部女　ええ、名前くらいは。確か、江戸時代後期の有名な画家、でしたよね。

郷土史家　そうです、画家でもあった、というべきか。

編成部女　ああそうだ、あの、幕府の政策に反対して、確か牢屋に入れられた人で、最後は、そうです、身の潔白を証明するっていって、自分で命を絶った、人でしたよね。

郷土史家　よくご存じですね。

編成部男　全く、女だてらに……

編成部女　えッ、今なんて言ったの？「女だてら」って何よ。女を侮辱した言い方だわ。

編成部男　そうじゃないんだ。俺の知らないことを知ってたから、感心してたんじゃないか。

編成部女　いいえ、そうは聞こえなかったわ。女が歴史にくわしくちゃいけないって言うの？

編成部男　いけないって、いつ言った？

編成部女　女だてらに、って言う言葉の裏側にそういう意識を感じるのよ。

編成部男　そんなこと、どうでもいいじゃないか。

編成部女　よかないわよ。

郷土史家　（ムッとして）あんたたちここへ何しに来たのかね。

編成部女　ああ、すいません。ついちょっと……。ああそうでした、そうです、この絵と渡辺崋山とどういう関係があるんですか？　四人の人物が描かれていますね。

郷土史家　そうです、こっちが渡辺崋山と弟子。これがお銀、という人。これがお銀の父親の幾右衛門です。

編成部女　この中には、何かドラマがありそうですね。

郷土史家　そうです、ドラマがあるのです。

編成部女　是非教えて下さい。その話について。

郷土史家　ええ、崋山はね江戸を発って今の二四六号線と重なる道、当時大山街道といった道を厚木に向かって旅をしたんですよ。その様子を「游相日記」という本に残している。（立って一冊の本を取り出す）これが復刻された「游相日記」ですよ。

編成部女　ちょっと、見せていただいていいですか？

郷土史家　どうぞ。

編成部女　（パラパラと中を見る）農家の風景など絵がありますね。（編成部男に渡す）当然この中の絵、崋山の描いたものなんですね？

郷土史家　そうです。この中に江戸を発ってから、日記

風にその絵と供に荏田村、下鶴間、海老名、そして厚木と、歩いた様子が書かれているんですよ。

編成部女　へーッ、まさに郷土の埋もれた歴史だわ。何か目的があったんですか、その旅に？

郷土史家　二十四、五年ぶりにある人に会うための旅だったのですよ。

編成部女　そのある人、といいますと。

郷土史家　この絵の中の、この人、お銀さんにね。

編成部女　お銀さんの家が、この近くだったわけですか？

郷土史家　その通りです。海老名と綾瀬の境あたりの、小園というところにいました。今でも墓がありますよ。

編成部男　（本を返しながら身を乗り出してくる）お銀さんについて、もう少し聞かせて下さい。

編成部女　ね、言ったとおりでしょ。面白くなってきたのね、あなたも。崋山と、お銀さんの関係、もっと知りたいわね。

郷土史家　では、崋山はね尾張の小さな、田原藩の江戸屋敷詰めの家に生まれたんです。その江戸屋敷に、殿様が、本当の奥方以上に愛情を注いだ側女中がいた。

編成部女　もしかして、それがこのお銀さんだったんですか？

郷土史家　そうです。お銀さんは男の子を産むとすぐに、里下がりをしなければならなかった。そして、この「游相日記」の旅をしたとき、お銀さんの生んだその息子さんは江戸で二十五歳になっていたんです。

編成部女　ああ、ちょっと。その息子さんて二十五になるまで、母親の顔を知らなかったんですか？

郷土史家　そういうわけです。

編成部女　この老人は、どういう人なんですか？

郷土史家　この人は、お銀さんの実の父親で、なかなか気骨のある人でね。実は、崋山はお銀さんに会い、この幾右衛門という老人に会い、ある生き方を学んだんじゃないかと、私は思っているんですよ。

編成部女　すごく興味ある。ねェ、これ番組になるわ。そう思うでしょ。

編成部男　うん、なるなる。そのためには、もう少し、この話、掘り下げる必要があるね。

編成部女　そうね。

溶暗

第三場

舞台　ここは相模国高座郡柏ヶ谷、矢倉沢往還とも言われた大山街道の南側小園村。道筋奥に畑の作業小屋。周囲には柴垣があり、中の様子は、はっきり見えない。あたりに子供たちの遊ぶ歓声が聞こえる。

溶明

栄次郎と留吉、上手より登場。留吉の腰に縄をか

け馬方が馬を引いているつもり。

栄次郎　どうどう。どうどう。

留吉　兄ちゃん、腰がイテーよ。

栄次郎　さっきからうるせェな。馬はそんな文句は言わねェぞ。坂が苦しいだ、腰がイテーだ。そんなこと言ってたら、お客さんはあきれて、どっか行っちまうぞ。どうどう。どうどう。

留吉　兄ちゃん、やっぱりイテーよ。

栄次郎　うるせーな。馬は文句言わねーもんだ。

留吉　馬、代わろうよ。今度、俺に馬方やらせてくれ。

栄次郎　馬方はえれェんだからお前には出来ねェ。お前は馬で我慢しろ。

留吉　つまねェの。

栄次郎　さァ、しっかり歩け。どうどう、どうどう。

幾右衛門　（垣根から顔を出して）何だ、エー坊とトメじゃねェか。

留吉　あっ、お祖父ちゃんだ。

幾右衛門　何しているんだ。腰に縄なんかかけて。

栄次郎　馬方だ。

幾右衛門　馬方のつもりか。馬方はいいが、腰に縄をかけるっていうのはいけねェよ。罪人の引き回しみてェだ。

留吉　何、その引き回しっていうのは。

幾右衛門　わるいことをした人がな、見せしめのために町の中を縛られてつれて行かれることだ。

留吉　俺、何にもわるいことしてねェよ。

幾右衛門　そうだろうさ。エー坊、縄を解いてやんな。

栄次郎　（いやいや縄を解く）

幾右衛門　エー坊は、でっけェ兄ちゃんみてェに馬方をやりてェのか。

栄次郎　うん、俺も馬方がやりてェ。

幾右衛門　ついこのメェまで馬を怖がってたくせして。

栄次郎　もう、馬は怖くねェよ。

幾右衛門　そうか、ずいぶん成長したもんだ。でも、馬方はつれェぞ。でっかい兄ちゃんを見てみろ。朝早くから、夜遅くまで、馬と一緒に山坂越えるんだ。おメェにはつとまんねェぞ。

そこへ、もとと幸蔵が登場。もとは魚篭を持ち、幸蔵は竿を持っている。

もと　ナァンだ。やっぱり、お前たちここにいたの。

（留吉の服の泥をはたいて落としながら）何でこんなにどろんこなの。

留吉　馬をやってたんだ。

もと　馬？

幾右衛門　ワハハハッ。馬にされて、エー坊に引き回されていたんだ。（幸蔵に向かって）釣りに行くのか？

幸蔵　ああ、でっけーの釣ってくるよ。

幾右衛門　そうかい。

もと　お祖父ちゃんにも持ってくるからね。ただ、肴がいいからって、飲み過ぎはいやだよ。

幾右衛門　またそれだ。その一言がなけりゃ、もともいい娘なのに。

もと　イイイダ。

栄次郎　俺も川へ行きてェ。

幸蔵　今日はだめだ。この前の大雨で水かさが増えてるから、お前なんか一緒にいったらおちおち釣りもしていられねェ。

幾右衛門　全く、兄ちゃんたちのすることは何でもまねしたがって。

もと　エー坊も、トメも母ちゃんが呼んでたぞ。田圃のわらを片づけて来いって。それだけはやんねェと晩飯はやらねェとさ。

幸蔵　じゃ行って来るよ。

幾右衛門　気をつけて、行って来い。（二人、下手へ下がる）さァ、おメェたちは家へ帰って仕事の手伝いをしてこい。夕飯、食えねェぞ。

栄次郎・留吉　うん。めし、めし。おじいちゃんまたね。

（あわてて上手へ下がる）

幾右衛門　ああ、またな。（二人を見送るように）全く、……。（しばらくして垣根の奥へ引っ込む）

ややあって、旅装束の渡辺崋山と絵の弟子、高木梧庵（晋吉）の二人、下手より来かかる。

梧庵　ようやく秋も深まろうとしていますのに、暑いですね。（額の汗を拭く）

崋山　そうだな、確かに暑い。（汗を拭う）

梧庵　先ほどの鶴間の百姓の話では、早川村で尋ねればいいとの事でしたが……このあたりではありませんかね、早川村は。

崋山　そのはずと思うが、人に行き会えば尋ねることもできるのだが、さっきから人にも行き会わない。

梧庵　先生。あそこに人家らしきものがあります。誰かいるかもしれません。

崋山　うん、（その方を確認する）人家、というより作業小屋かもしれないな。

二人小屋に近づき、様子をうかがう。

梧庵　粗末ですが、人が住んでいる気配もありますよ。（柴垣越し、中に向かって声をかける）どなたかおるかな。

返事はない。

梧庵　（再び声をかける）どなたかおるかな。（垣根の奥を確認する）誰もいないようです。

崋山　そうか。仕方がない。ともあれ晋吉、このあたりで汗を拭おう。（周囲の風景を見回す）気がつい

てみれば、相模の山もあんなに近づいていた。絵を描くのも私たちの立派な仕事なのだ、おまえも筆を出すがいい。

梧庵　それはよろしゅうございます。おお、幸いあそこに腰を下ろすにいい石がございます。（石に近づくき、埃を払う）先生、おかけ下さい。

崋山　（石に腰掛け、汗を拭う。ややあって背に負った荷を解き、閉じた帖と矢立てを取り出す）

梧庵　先生、あれが大山です。

崋山　そうであった、晋吉は厚木の出であったな。この先の相模川を渡れば、おまえのふるさと、というわけだ。

梧庵　はい、十年ぶりでございます。川を渡ることになれば。

二人、絵筆を走らす。

梧庵　（絵筆を休めて、遠慮がちに）実は、今度の旅、私を同道下さった訳は、どういうことでございますか？

崋山　不満であったか。

梧庵　滅相もございません。数ある弟子の中で私ごときが選ばれ、光栄に思っております。ただ、（言いよどむ）

崋山　ただ、…どうした。

梧庵　はい、ただ……この旅の目的が、今ひとつ…

崋山　出がけに言ったではないか、大きな目的は二つ。一つは、友信さまの母君の健在かどうかの確認。もう一つは、相模川を渡り、相州の風俗に触れる。それに加えて、絵の修行も兼ねる、とな。

梧庵　はあ、ただ出がけに三浦まで足をのばすことになるだろうとおっしゃられました。

崋山　そうそう、せっかく相州まで来たのだから、三浦も、と欲張ってみた。遊山が過ぎるかな。

梧庵　いいえ、私も三浦は知りません、楽しみです。（やや間をおいて）これから訪ねる幾右衛門というのは根からの百姓なのでございますか。

崋山　いや、佐藤姓だ。もとは小田原北条の家臣であった者の流れと聞く。先祖は秀吉との戦に敗れ、このあたりに住み、百姓となったようだ。健在なら、もう八十にはなるだろう。

梧庵　お銀さまというお方は、いくつくらいになられるのですか。

崋山　そう、確か四十五くらいにはなっておられるはず。もう何年になるだろう。お銀さまが里さがりしてから。今、友信さまが二十六だから、二十五年にはなるはずだ。

梧庵　そうですか。私が生まれるより前のことになりますね。

崋山　そうか、お前の年齢を超えるのか。なるほど、年月を数えればそうなのだが、私の実感としては、まだついこの間のような気がする。お美しく、優しい方だった。十一代さまはお銀さまを離したがらなかった。

柴垣の陰に幾右衛門が現れ、二人の様子をうかがう。先ほどの様子と違い。鋭い目つきである。

梧庵　それでは、友信さまをお生みになるとすぐだったのですね、そのお銀さまがお屋敷からさがられたのは。

崋山　そうだ。友信さまがようやく一歳になろうかという頃だった……、お銀さまもつらかったろう、乳飲み子をおいてのいとま乞いだったのだから。

梧庵　なぜ、そんな時期に…

崋山　里で母親が亡くなった、それが理由だった。確かに、それが理由には違いなかったが、……周りから疎まれていたのだよ、側女中の分際で……、とな。まして美しくもあり、心も優しかったから、余計にな。

梧庵　現在のお殿様は、わざわざ姫路藩からご養子として入られたとお聞きしていますが。

崋山　そうだ。藩財政が貧しいため、裕福な藩の持参金が目当ての、養子縁組だ。情けないことだ。

梧庵　そのお殿様にもお世継ぎが出来ませんね。続いて、ご養子…ですか。田原藩は。

崋山　な、晋吉。私は友信さまを藩主にいただく夢は、まだ捨てていないのだ。

梧庵　ごもっともですとも、友信さまが三宅家の血統を嗣ぐただ一人のお方ですから。

崋山　確かにそうだ、世間への説得はそれが一番わかりやすい。（立ち上がって）しかしな、晋吉よ、私はもはや時代は、大名だ、藩だ、などと言っている状況ではなくなっている、と思っている。単に藩だけのためにとは思っていないのだ。

梧庵　（首をかしげる）わかりません、おっしゃることが。

崋山　弱小な我が藩の内実は火の車だが、事態は何も我が藩だけの問題ではない。実は、幕府そのものが危うくなっている。根本からものを見直さなければ、この日本自体が危ないのだ。アメリカ、エゲレス、ロシア、諸外国が我が国をねらっている。

梧庵　そんな状況があるのですか。私自身がそうでしたが、まして民百姓は、エゲレスの、アメリカの、と言っても、何のことかさっぱりわからないでしょう。

崋山　私は、上に立つ幕府そのものがそんな状態だと感じている。頭が固いのだ。港を開けば幕府に有利な統制がきかなくなると不安がるだけで、やみくもに地図を異人に渡してはならないと決めている。シーボルトは、ある日本人から地図を手に入れたらしい。

梧庵　日本は、ますます、かたくなになるのでしょうか。

巣山　ただ、見捨てたものでもない。日本にもなかなか見所のある若者がいる。高野長英とかいった。その男は私より、ちょうど一回り若いはずだ。実はな、私は昨年、江戸でその男に会ったのだ。

梧庵　江戸で？

巣山　そうだ。シーボルトが国外追放になったことから、一時期、身辺に危険を感じた長英は安芸の国や尾道、大坂、京都などを転々としたようだ。ところが最近、大胆にも江戸へ来ていたのだ。あまり多くを語りたがらないが、病人を診る傍ら、非常な勉強を重ねている。あの男の目は鋭い。しかし、澄んだ目をしている。遠くを見つめている。絵を学んでいる人間として、私には、人の内側が見えるような気がするのだよ。

梧庵　先生、こんな事を申しては失礼かとは存じますが、私もしばしば先生の瞳の中に、澄んだ、深い淵のようなものを感じておりました。

巣山　わハハハッ。晋吉、私は知らぬ内におまえから審判を受けていたのだな。これは迂闊にはできんぞ。（やや間をおきしみじみと）小さな藩とはいえ、田原藩江戸屋敷の年寄り役までつとめた父親を持つこの私でさえ、幼児の頃は食うや食わずの毎日だった、兄弟はよそへ養子に出されたり、妹の「つぎ」は栄養足らずでわずか四歳で死んでいった。どんなに情けなかったか。これが原点なのだ、私の。

梧庵　原点？　といいますと。

巣山　（少々間をおき、それには答えない。石に座り直し。）国元の藩の窮状を思えば、江戸詰めばかりが不満も言ってはいられない。（しばらく間）……私が友信さまを藩主にと、こだわるのは、お前がさっき言ったような、単に藩の血筋などという意味ではない。友信さまが愛おしいのだ。

梧庵　たとえ正妻のお子ではないとはいえ、藩主のお子さまだから継ぐ立場にある、ということでございますか？

巣山　そういう意味もあるのだが、それ以上にあの方の聡明さが重要なのだ。今の殿様は一見友信さまを優遇したように巣鴨に別邸を与え、周囲にご老公と呼ばせている。隠居扱いだ。まだ二十六ではないか。このままではせっかくの友信さまの資質は生かされない。私は、このまま終わらせてはいけないと思っている。そのために私は今、友信さまにこっそり蘭学を勉強してもらっている。あの方も、たいそう勉強しておられるのだ。

梧庵　友信さまも、蘭学を？

巣山　そうだ。このことは、口外してはならぬぞ。頭の固い人間には、危険なこととしか思えないだろう。

梧庵　分かりました。

巣山　友信さまの理解は、驚くほど早い。それだけに日頃から友信さまに「藩主への望みを捨ててはいけません」とお話ししているのだが、過日、「何としても母の消息が知りたい、母の消息を放置したままで、そのことを考えたくない」とおっしゃったのだ。おそらく、ご自分にお子がお生まれになって、ずっと長年心に秘め続けていた母君への思いが、表に出たのだろう。是非に消息を……、とな。

梧庵　私に同道を、とおっしゃられたとき、私はまだその意図を十分承知していませんでした。なぜ今頃、お銀の方を訪ねるのだろうかと。

巣山　お銀さまは私にとっても、母親か、姉のような方であった。特に優しかったのだよ、私に対しても。恩人、と言っても言い過ぎではないと私は思っている。この旅は、友信さまのため、というより、私が逢いたい、ということなのかもしれない。

　小屋にいた幾右衛門の気配を察する。

梧庵　誰かいます。（身構えて小屋に近づく）何だ、年寄りか。ここの百姓か？（返事はない）　こやつ、なぜ返事をせぬ（刀に手をかける）。

巣山　見れば、かなりの年の人ではないか。強く責めるな。ちょっと、ご老人。尋ねたいことがある。

　老人はいっこう振り向こうとはしない。

巣山　ご老人。このあたりに、幾右衛門という人は住んでいないかな。

梧庵　これ、そこの老人。聞こえないのか。これ。（柴垣に近づき、大きく垣を揺する）

　老人、ようやく立ち上がる。

幾右衛門　（無理にとぼけて）ああ、何か用かね。

梧庵　幾右衛門という老人が、このあたりに住んでいないのか、と聞いておるのだ。

幾右衛門　何？（耳が遠いしぐさをする）イ、イ、幾右衛門か。ハハありゃだめだ。飲んだくれでな。

梧庵　知っているのか。幾右衛門を。住まいはどこだ。

幾右衛門　あいつは、酔っぱらって、川に落ちてずーっとメェに死んだ。

巣山・梧庵　（思わず顔を見合わせる。）

巣山　幾右衛門は死んだ、というのか。

幾右衛門　あハハハハッ。（意味不明に笑う）

巣山　幾右衛門には、お銀という娘があったはず。江戸で、屋敷仕えをしていた娘だ。その娘の消息は、知らないか。…お銀、というはず。

幾右衛門　ああ…、何だと？　お銀だ？　お銀か。しら

ねェ……でもねェ…が。あれは小園で清蔵の嫁になっておるわ。

巣山　嫁になって？

幾右衛門　そう。五人の子持ちよ。上は息子で二十二になる。

巣山　二十二になる、息子…。小園はだいぶ遠いのか？

幾右衛門　いいや、二丁も行けば、清蔵の家がある。

巣山　そんなに近かったのか。晋吉、行こうか。

（二人、荷物をまとめる）

そこへ幸蔵と、もと、下手から登場。釣りの帰り。巣山と梧庵がいることに驚く。幸蔵、幾右衛門をかばうように、巣山たちと幾右衛門の間に入る。

もと　お祖父ちゃん、何かあったの。

幾右衛門　いや、何も。通りすがりの人だ。

もと　おじいちゃん、これ。（幾右衛門に魚を示す）

幾右衛門　おお、ありがとうよ。（うれしそうに魚をとろうとする）

巣山　ちょっと待て、その魚は、鮎。香魚ではないか。相模川の鮎ではないのか？（もとに近づく）

もと　（ひどくおびえる）

幸蔵　（今度は、もとと巣山の間に入り、もとをかばう。）

梧庵　何だ、その申し様は。無礼だぞ。

巣山　（梧庵を制する）晋吉、まァいい。

幸蔵　これは、ご禁制の物ではない。俺たちもそのくらいのことはちゃんと知っている。幕府献上の鮎の漁場は、もっと上流だ。専用のやな場がある。

幾右衛門　よく見るがよかろう。幕府の仕掛けた網から漏れた、痩せたこの魚の姿を。これでも遠慮しながら口にしている。

巣山　とんだ早合点ですまなかった。我々は、先を急ぎたい、この先で人に逢いたいのだ。ご老人、大変世話になった。小園で、清蔵の家と聞けば分かるかな。

幾右衛門　幸蔵、もと、この二人は清蔵の家を尋ねている。案内してやれ。

幸蔵ともと、怪訝そうにしながらもうなずいて、無言のまま歩き出す。二人、後に続く。

暗転

第四場

舞台　中央に荒れた農家。濡れ縁に面した庭先。

幸蔵　（無言のまま、指を指す。）

巣山　ここが清蔵の家か？

幸蔵　そうだ。（不安げに、巣山と梧庵が家に近づくのを遮るようにする）

巣山　どうしたのだ。ここに、お銀という人がいるだろう。

幸蔵　そんな人間は、しらねえ。

巣山　ここは清蔵のうちなんだろう？

幸蔵　（うなずく）

巣山　苦労をかけた。これは案内してくれた礼だ、取っておけ。（懐の巾着から金を出し、幸蔵に渡そうとする）

幸蔵　こんなものいらねえ。

梧庵　そう言わずに取っておけ。

幸蔵　（なお拒否する）

巣山　なかなか強情だな。晋吉、あの女の子に渡しておいてくれ。（梧庵に金を託す）

梧庵　（もとに近づき、拒否するもとの手に金を握らせる）

巣山　（一人先に家に近づき）ちょっと、尋ねたいことがあります。どなたかおりませんか。ものもう、どなたかおりませんか。

家の奥から、手ぬぐいを姉さんかぶりにした女、登場。子供たち、木立の奥に身を隠し、やりとりを伺う。

お銀　（手ぬぐいのかぶり物を取りながら、怪訝そ

巣山　か

幸蔵　（うなずく）

巣山　相模川の鮎か？

幸蔵　（うなずく）

巣山　相模川の鮎なら、幕府献上品のはず。やたらに漁は出来ないことになっているのを知らないはずはあるまい。

幾右衛門　地元の川で、地元の者がすなどりして何が悪い。（日頃と違う幾右衛門の様子に、幸蔵ともと、思わず幾右衛門の方を見る。そして二人、顔を見合わせる。）これも、わずかの余り物だ。

巣山　しかし、ご禁制を破ったら、どんなことになるか……、

幾右衛門　あんたはお役人さんに、報告しなさるのかね。どこのどなたさまかは存じませんが、どうせ貧乏な藩の下っ端侍。考えることはそんなことだろうさ。ここは下総の佐倉藩の藩主の知行地だが、とどけなせエ。喜びなさるよ。江戸で点が稼げるってね。隣の厚木の知行の烏山さまはもっと阿漕だ。あちらに届けるかね。

もと　爺ちゃん。この魚食ったら、縛られちまうのかい。

幾右衛門　もと、心配しなくて大丈夫だ。この侍さんの根性を試しているだけだ。

うな面もちで）どちらのお方でございますか？

巣山、しばらくジッと女を見つめる。女、始めの物腰が次第に変わり、油断ない身構えとなって巣山を見つめる。

巣山　ううん、間違いない、耳の下、首筋のその疣。昔、あなた様にかわいがっていただきました。思い出していただけますか。私が誰であるか。

お銀　（油断を解いていない。しかし、恐縮したように）何かのお間違いでしょう。失礼ながら、お殿御のような方に、知り合いはございません。何ぞの、お間違いでございましょう。

巣山　そのようなことはないはずです。あなた様の名は？　何という名でございますか。

お銀　はい、まち、と申します。

巣山　まち？……いいや、昔は違う名だったはず。

お銀　いいえ、まち、でございます。生まれたとき、親からいただいたままの名でございます。

巣山　（いささかうろたえて）もし間違えていたら面目もないが……しかし、そんなはずはない。その首筋の疣が何よりの証拠。お銀、と名のったことはありませんか。

お銀　（顔色を変える）お銀の名を？　私を「お銀」と？　とすると、あなた様は、麹町からおいでで？

はいｏ

（いささか緊張が解ける）左様でございますか。確かに、昔、田原藩のお殿様、三宅様のもとでお仕えし、銀、と名のっておりました。

巣山　やはり、間違いはなかった。

お銀　入っていただくような家ではありませんが、何はともあれ、お入りください。

巣山と梧庵、縁先より中に入る。畳もないため、お銀、二人のためにあわててむしろを敷く。

巣山　（正座して、改めて）お懐かしく存じます。

お銀　いえ、どうぞお楽にしてください。

しばらく無言の対面となる。

巣山　私の名を、思い出していただけますでしょうか。

お銀　上田真澄さま、…いえ、違いますね。……渡辺登さま。そうです、登さまです。まだ十歳に満たない頃から、若殿方のお伽として、いつもお屋敷におられましたね。聡明な、方でしたよ。あのときの、登さんが、あなた様で。左様です、もう二十幾年も前のことになりますね。

巣山　（思わず両手をつく）

お銀　（涙ぐむ）夢ではないのですか、こんなことはあるのでしょうか。自分の身勝手で、お屋敷をおいとましたとはいえ、これまでお屋敷での日々のこと、片時も忘れはいたしませんでした。

巣山　思い出していただけましてうれしく存じます。

お銀　お頭をお上げ下さい。それにいたしましても、どうしたらよろしいでしょう。こんなむさ苦しいところへ……ああ、お茶でも（立ちかける）

巣山　いえ、お構いなく。二十五年ぶりの対面。話をしたく存じます。（立つのを制して）どうぞこのまま。お銀さまにかわいがっていただいた思い出は、片時も忘れませんでした。本当に、お懐かしく存じます。

お銀　思いもかけぬ今日の訪れ。まるで夢のようでございます。

巣山　麹町の上屋敷は、この二十五年の間に、様々なことがありました。確か、お銀さまがお屋敷を下がられて四年後に、殿はお亡くなりになりました。

お銀　（下を向き、涙を拭う）殿がなくなられ、跡をお継ぎになった康和さまも、康明さまも、続いて亡くなられた由、仄聞しつつも、我が身の致せることもなく、ただただ失礼のままにしておりました。

巣山　何と言っても、友信様のことが、一番お気がかりでございましょう。

お銀　（居住まいを改める）いいえ、私は、そのお方のことは存じません。

巣山　そうおっしゃろうとするお気持ちは、お察しいたします。今日は、友信さまのご意志によってお伺いしたのでございます。友信様はお元気でいらっしゃいます。今、巣鴨にお屋敷を構えており、私は幼児の頃からのつながりで今も若様の、お側仕えとなっております。また、この二月に若様には、男のお子を儲けられました。あなた様のお孫さまでございます。

お銀、耐え難く嗚咽する。気を取り直し横を向き、しきりに涙をこらえる。隣の部屋から、障子越しに幸蔵ともと、様子を探っている。

巣山　我が、田原藩では、現在、当主を姫路藩から養子を取って継いでおりますが、このご当主にお世継ぎがいません。私は、以前から、友信さまをと、主張して参りました。それがかなわなければ、友信さまの、今度お生まれのお子さまが後を継ぐのがよろしいでしょう。そのことはさておき、友信さまは、母君さまのことを、非常に懐かしがっておられます。今日こうして来ましたのも、友信さまのたってのご希望です。お手紙を、預かって参りました。晋吉、そちらの荷の中に手紙があるはず。取り出してくれぬか。

梧庵　はい。（荷を解き、手紙を出し、巣山に手渡す）

巣山　（手紙を差し出す）

お銀　（手紙を押し頂く）
巣山　この旅に出るとき友信さまは「きっと里で元気にしていると信じている。お銀さまのご健在を確認できたなら、近いうちに一度お目にかかりたいと伝えてくれ」とおっしゃっていました。

幸蔵と、もと、忍び足で立木から離れ、裏に回って家の中に入る。

お銀　（ふるえる手で手紙をあけ、おそるおそる読み始める。耐え難くその場に泣き崩れる。）畏れ多いことです。友信さまのお心はよく伝わって参ります。でも今は私と関わりのない方でございます。
巣山　友信さまのご藩主か、さもなければ仁太郎さまを、とお話しいたしましたところ、「母の健在が確認できるものならそれが先で、ご健在が分かれば近くに呼びたい」とのことでございました。

幸蔵と、もと、障子の陰から様子をうかがっている。

お銀　ここにいるのは、まち、でございます。あのお方の母親ではございません。二十五年も前にお別れし、既に親子ではございません。どうぞ、友信さまにそうお伝えください。（奥の子供の気配を察して）ああ、お前たちは、そこにいたのかい、こちらへ出ておいで。立派なお武家さんを前にして、驚いております。さあ、出ておいで。

幸蔵と、もと、おびえたように出てくる。二人を見て、巣山と梧庵、顔を見合わせる。

お銀　私の子供でございます。次男の幸蔵と娘のもと、でございます。この上の長男は、荷役の馬方をして家計を支えております。また、もと、の下には腕白盛りの男の子が二人おります。今は、どこぞへ羽をのばしておるのでしょう。夫の清蔵は、近在の新田開発のために今あちらこちら奔走しております。
巣山　これは驚いた。実は、この二人に、ここの家まで案内してもらいました。まさかお銀さまのお子とは。この先の、年寄りの所へ、魚を届けに行っていたようでしたが。
お銀　私の父親、幾右衛門でございます。
巣山　えッ。幾右衛門は川で溺れて死んだと……
お銀　そんなこと、誰から。
巣山　その老人から……。
お銀　そんなことを言っていましたか。確かに、お酒に酔って、川で死にかかったことがありました。それででしょう。お酒が好きでしてね。でも、若い頃から、働き者でした。それに、家の中の貧乏はさておき、人の困っているときは先頭を切って、手助けをする、

という日々でした。とりわけ、川で溺れかかった後は、「これからは、俺の命じゃねエ」なんて言いまして。一緒に住もうって言いましてもここがいい、なんて小屋住まいをしています。それまでは、武士の誇りが捨てられないところがありましたが、そのとき以来、すっかり変わりました。その気持ちは私にもよく分かるような気がいたします。夫の清蔵も、父のそんな様子を見まして、畑仕事の傍ら、何かと人様のため、などと言いまして、あちこち奔走する毎日でございます。今日も、新田開発の許可を御領主にお願いするのだと、百姓を代表して出かけております。
巣山　（梧庵に向かって）何か、違うと思ったのだ。
梧庵　はい、ひょっとすると、垣根の中で、私たちの話を、全て聞いていたのではないでしょうか。
巣山　うん。すっかり私たちが何者なのかを、見抜かれていたということのようだ。
お銀　さあ、二人とも、そこに立っていないでこちらへ出ておいで。ここでご挨拶をなさい。（幸蔵と、もと、を促す）
幸蔵・もと　（その場に正座する。）
幸蔵　（緊張した面もちで金を巣山の前に投げ出す）
お銀　（びっくりする）これ、何をするのです。
（金を見る）お金ではありませんか。これはどういうことなのです？

幸蔵　こんなものはいらねえ。
もと　いらないって云うのに、無理にあの人が……

二人ともジッと巣山を見据える。

お銀　これはどういうことなのでしょう。
巣山　いや、これは困りました。（二人の方を見て）さっきは、ありがとう。驚いた、まさかお銀さまのお子たちとは。二人も、驚いたようだな。私は、決して怪しいものではないから、安心しなさい。お銀さまのお子とも知らず、ここまで案内してもらったお礼に、と思って渡したものだったのですよ。
お銀　そういうことでしたか。子供たちが、とんだ失礼を致しました。ただこんなしがない百姓ではありますが、日頃から人様より故ない施しものは受けるな、と教えておりましたので、どうぞお怒りになりませんように。
巣山　それは立派な躾と存じます。ただこれは、故なき施し、というわけではありませんので、どうぞ分かって下さい。立派な報酬と思って。
お銀　左様でございますね。これは、ありがたく、収めさせていただきます。本当に、どうぞお気を悪くなさいませんように。
巣山　いいや、私の方よりも、このお子たちが傷ついたらしいことの方が心配ですよ。確かに、このお子

たちがお銀さまのお子、と承知していたら、お金を出すことにためらいがあったかもしれません。

お銀　貧しい百姓の子、と思われたわけですね。

巣山　どこか、心の奥底に、あったかもしれません。

お銀　貧しい生活はこの通り、確かでございます。

巣山　私も子供の頃日本橋のあたりで確か備前侯の行列に行き会い、供の者に辱めを受けたことがありました。駕篭には備前侯の若殿が乗っていまして、私より年下なのに「無礼者、若殿のお通りだ」と言って、供周りに、足蹴にされたのです。同じ武士とはいえ、小藩の悲哀を感じざるを得ませんでした。この場合と、状況は違いますが、多少でも、このお子たちが故なき施しものをされた、と心に傷を負ったとすれば申し訳ないと思います。

お銀　いいえ、この子たちも、ただ驚いたということなのだと思います。お武家さまにこんな間近でお目にかかったことがありませんので。

巣山　それならよいが。（二人の子供に向かって）どうか、このこと何かの思い出として役立てて欲しい。

お銀　と言いますと。

巣山　人間、ものの考え方で、私は逆に、あの事件が現在の私を作っているとも思っています。以来、私はあの屈辱を礎に生きております。何をすべきかと。

お銀　よいお話を聞きました。この子たちにも、今日のこと、良い意味で心に残ったことでしょう。幸蔵、失礼をお詫びして、そのお金をおしまいなさい。

もと　（兄が手に戻そうとしたお金を押さえて。）このお金もらったら、母ちゃんが……（すがるように母親の顔を見る）

お銀　ああ、おまえたちそんなことを心配していたの？　大丈夫よ、私はどこへも行ったりしないから。

もと　（安心した顔をする）

巣山　私どもがおたずねしたことで、このお子たちもさぞ驚いていることでしょう。（子供たちに向かって）実は、あなた達のお母さまは……

お銀　（巣山の言葉を遮るように、きっぱりと）その話はなさらないで下さい。二人とも、さっきからお話は奥でお聞きしていた様子です。もう子供ではございませんので、何か察したことと存じます。このことはまたゆっくりと、私の口から説明いたしますので。

（お金をしまい、幸蔵に渡す）

巣山　そうですか。分かりました。

お銀　どうぞ、友信さまと、そのお子さま、仁太郎さまの今後につきましては、よろしくお取りはからい下さいますように。私も、陰ながら、よきように事が進みますこと、神仏にお祈りしたいと存じます。

巣山　左様でございますか。お銀さまのご意向、確かに承りました。……友信さまのお心を思うと、今

のこの出会い、いささか残念な思いでございます。しかし、お銀さま、いえ、「おまち」さまのこの小園での生活。そして、そのお心、私には分かる気が致しました。ともあれ、このようにお元気でしたこと、お伝え申し上げましょう。

では、この先に別の用事もあり川を越え、厚木まで行かねばなりません。これでお暇いたします。

お銀　お茶なりと。こんな家で振る舞えるものとしましては、蕎麦掻きほどのものしかございませんが。もし、およろしければ。

巣山　そうですか。ではお言葉に甘えて。（明るく）実は、腹も空いておりました。

お銀　もと、奥で蕎麦掻きの支度をしなさい。私も、すぐに行くから。

もと　はい。（明るく返事して立ち上がり、奥へ。）

お銀　こうしておりますうちに、夫も帰りましょう。長男も、間もなく戻ることと存じます。長男が戻りましたら、馬を出させ、川の渡しまで送らせましょう。

巣山　それはありがたいことで。

お銀　では、ちょっと座をはずします。（立ち上がる。）

巣山　かたじけないことで。

暗転

第五場

舞台　装置なし。中幕の前で。

テレビ局の男女下手に登場。

編成部女　ねェ、向こうから来るの、渡辺巣山と、弟子の梧庵よ。こんなチャンス二度とないわ、インタビューしましょうよ。

編成部男　本気かい？

編成部女　あたりまえよ。さあ行くわよ。（女マイクを片手に二人の方に進む。）渡辺巣山さんですね。

巣山　はい、そうですが。

編成部女　ちょっとお話を聞かせて下さい。

巣山　なんでしょう。

編成部女　お銀さまにお会いになったのが二十五年ぶりとか、お聞きしましたが、どんなご感想ですか？

巣山　お会いして教えられることが多かったように思いますよ。

編成部女　といいますと？

巣山　将来どう生きればいいかとの迷いがあったのだがその迷いが晴れました。（梧庵の方に向かって）実はな、晋吉よ、私はこの旅をする前からもう一つ、迷っていたことがあったのだよ。それを、まだお前には話していなかったが。

梧庵　何でございますか。それは。

巣山　私は、武士を捨てようかと思っていたのだ。だいぶ以前から。

梧庵　武士を捨てるんですか？

巣山　藩の中にあって、藩のために力を尽くすのも一生には違いないが、藩を捨て、武士を捨て、もっと大きなものに向かって生きるべきではないかという思いが以前からあったのだ。それが、今日、お銀さまの姿を見て、なぜか私自身の迷いが見えた。何か、決心を促された思いだった。

梧庵　友信さまのことはどうなさるのですか。

巣山　何とか友信さまに考えていただき、そのために当面は国元の藩の面々に説得を続けるつもりだ。そちらのめどがついたら、私は脱藩をすることになるだろう。私には別にやりたいことがある。それを目指すべきだ、という決心がついたのだよ。

梧庵　脱藩してまで、目指すものとは何でございますか。

巣山　自由な立場でもう少し勉強がしてみたいということだ。時の流れが私に、そうせよと命じているような気がしてきたのだ。

梧庵　生活は成り立ちますか？

巣山　今以上に苦しくはなるだろう。しかし、好きな絵が、多少は自分を助けてくれる見通しはもてるようになった。

梧庵　では、このまま私は、絵の弟子として先生のお側においてもらえるのですね。

巣山　それはもちろんだ。（編成部女に向かって）というわけだ。

編成部女　よく分かりました。ところで、巣山さんは、その後、幕府から危険人物として、捕らえられてしまいますよね、

編成部男　バカ、何を聞くんだ。よせよ、そんな質問。

編成部女　（意に介さない。巣山にマイクを向ける。）

巣山　そんなことになるんですか、この私が？　そういうことだったら、むしろあなた方の方がよくご存じのはず。私にとって、そのことは未来のことに属しますから。私がこれからどうなるか、全く存じませんな。ただ、ものを部分で見ず、大きな流れで見て下さい。あなた方にはそれができるはずです。

晋吉、先を急ごう。

梧庵　はい。

巣山　おお、相模の峰峰が夕日に染まっておるわ。

テレビ局の男女、巣山と梧庵の四人、夕日に手をかざしながら、……

静かに幕



御参府中日記のこと

三戸岡道夫

プロローグ

江戸時代の末期、松平太郎左ヱ門信汎という旗本が三河国加茂郡松平郷を領していたが、天保十年に江戸へ参勤した。そのとき家老の神谷亮蔵が記録した日記が「御参府中日記」である。

日記には、三河を出発して江戸へ行き、そして三河へ帰るまでの二カ月間の模様が記されているが、参勤道中の手順やその苦労、江戸に着いてからの将軍拝謁までの、特権意識で固まった煩瑣な手続、作法などが、刻明に記されていて、興味深いものがある。

江戸時代の大名はすべて参勤交代を義務づけられたが、それと並んで旗本の一部にも交代寄合というしきたりがあった。一口に言えば、旗本の参勤交代である。しかしその資格が与えられたのは、石高一万石以下の旗本でありながら老中支配の下にあった特別の旗本であり、所領に居住して、参勤交代を義務づけられ、江戸城中の席も帝鑑の間、柳之間と、大名並みの扱いを受けたのである。

したがってその家柄も、

表御礼衆二十家
那須衆　四家
美濃衆　三家
信濃衆　三家
三河衆　二家

の三十二家と決っていて、三河国の松平太郎左ヱ門信汎は、この三河衆二家の中の一家であった。

松平太郎左ヱ門は四百四十石という小禄であったが、徳川家の系統に属するというところから、特別に葵の家紋を許され、交代寄合という格式を与えられていたのだった。

えながら、旗本松平太郎左ヱ門の江戸参勤の模様を追ってみることとする。

第一章　江戸までの道中記

まず出発に先立って、宿泊予定の本陣（宿屋）にそのことを連絡しなくてはならない。そのために参勤の日程表を作って東海道の宿場宿場に予告して、出迎えから待遇について万事遺漏なきようを期した。予定表は次の如くであった。

宿泊予定表

二月十六日　御油宿　尾崎庄左ヱ門
二月十七日　浜松宿　梅谷市左ヱ門
二月十八日　島田宿　大久保新左ヱ門
二月十九日　江尻宿　寺尾与右ヱ門
二月二十日　沼津宿　高田弥惣左ヱ門
二月廿一日　小田原宿　中川太郎左ヱ門
二月廿二日　程ケ谷宿　水谷与右ヱ門

このたび松平太郎左ヱ門の参府は二月十六日に三河松平を出て、右の日程で宿泊予定であるので、宿泊の用意を頼む。

なおこの書面は程ケ谷宿の水谷方に宿泊したときに、返してもらうこと。

もっとも交代寄合といってもそのやり方は一律でなく、様々であった。もともと旗本は江戸在住を建前としているので、多くは江戸から領地へ下向して江戸へ戻るという形が多かったが、松平太郎左ヱ門のように領地に常在して、数年おきに江戸へ行くというものもあった。また信濃衆の場合は一年おきに参勤し、四月に参勤して一カ月の滞在で、五月には帰国した。また、およそ五年に一度参勤するというものもあったようである。

さて、このように大名と同等に扱われるのは表面的には甚だ名誉なことであるが、しかし参勤には相当巨額な費用がかかった。わずか四百四十石の松平太郎左ヱ門家では、その費用捻出に四苦八苦した。

天保十年の松平太郎左ヱ門の参勤のとき、家老の神谷亮蔵が随行して、道中模様を記したが、この時神谷亮蔵は三十五歳の働き盛りであった。

日記は天保十年二月十六日から四月十六日までの二カ月間であるが、次の三部分に区分することができる。

一、江戸までの道中記
（二月十六日から二月二十三日まで）
二、江戸滞在中の日記
（二月二十四日から四月七日まで）
三、帰路の道中記
（四月八日から四月十六日まで）

以下、その日記の記述に従って、若干の補足説明を加

二月十三日

松平太郎左ヱ門内　神谷亮蔵

この宿泊予定表を白木の状箱に入れて、岡崎の問屋へ届けると、岡崎から飛脚で各宿に通知するのである。

なお、天龍川の役人、富士川の役人、大井川の役人あての書状も、別に作成して岡崎の問屋へ届けることも、同じような方法で行われた。

（二月十六日）

出発の日、まず午前三時ごろ、行列出発の供揃えがあった。

一番前には「御先乗」として、家老の神谷亮蔵が馬に乗り、そのかたわらには御先乗りの槍持ちとして、米河内村の油屋手代栄助がつとめた。この馬は切二木村から差出されたものである。

行列の順序は次のようであった。

御具足　一荷
御徒士　三人
御道具　一人
御乗物（御駕）　六人
御供侍（大小刀をさして御乗物を警護する役）二人
御長柄　一人
草履取　一人
御対箱　二人
御袁箱　一人
両掛　一荷
合羽籠　三荷
押え　侍一人
外に弁当持　三人
以上合計　二十六人

午前七時頃、行列はいよいよ出発した。

がその出発に先だち、松平四村から、掃除役二人、下座触一人が差出された。下座触れというのは、御先乗（家老神谷亮蔵の乗った馬）より前にあって、

「松平様のお通り！」

と大声で触れていく、先触れのことである。

先触れの声を聞くと、住民は家から出て、道路脇に土下座をせねばならない。そしてその後に、掃除役が無礼のないように人々を取締り、（馬に乗った家老）が通るのである。

しかし実際は行列の通る時間は前もって知らされているので、住民はあらかじめ道路脇に荒むしろを敷いて、土下座して行列の来るのを待っていた。そして先触れの声によって、土下座のまま頭を下げて平伏したのである。

下座触れと掃除役は、他領通行の場合は、その領主または代官の好意によって出したようで、松平太郎左ヱ門が岡崎藩領内を行列したときは、岡崎の領主がその役を

出している。

さて行列はどの道を通ったのか、御参府中日記にはあまりくわしく書いてないが、九久平に出て岡崎領を通ったとあるから、今の足助街道と想像される。そして細川から岩津、能見を経て東海道に出て、名栗に着いた。

名栗に着いたところで松平太郎左ヱ門は御駕の戸を引き上げて、村役人をはじめ、行列に参加した人々に、

「おのおの方、ご苦労であった」

とねぎらいの言葉をかけた。すると代表者が、

「ははあ、殿様にはご気嫌よろしく、ご無事で行ってらっしゃいませ」

と返事をして、みんな帰っていった。

そしてその帰ったあとには、江戸まで付いていく七名の者だけが残った。その名前は次の如くであった。

御供頭　神谷亮蔵
御侍　深見覚蔵
草履取　林添村　幸七
御道具箱　米河内村　栄助
分持　宮石村　幸吉
〃　大沼村森右ヱ門
〃　九久平村　小七

なお、ここでいっさいの道具類は名栗の大西方へ預けた。これは帰りにまた、ここから行列を作って松平村まで帰るときに使うのである。

したがって行列といっても、それは松平村から名栗までで、後の道中は主従八人の集団の旅だったことがわかる。

午前十一時頃には、藤川の宿に着いた。そこの本陣で昼食をとった。お酒などの特別のもてなしを受けたので、祝儀として百疋（千文）を与えた。

こうして本宿である法蔵寺門前で小休止していると、第一番目の宿泊所である御油の宿の本陣から迎えが来たので、出発し、午後五時頃には御油の宿に着いた。

御油の本陣の尾崎庄左ヱ門がまかり出てご気嫌を伺い、

「お召しの上下（かみしも）が汚れていては体裁が悪うございますから、ご着替えくださりませ。お帰りまでに洗濯しておきましょう」

と申し出たので、その好意に従った。

すると御油にあるもう一軒の本陣の林五郎大夫が、献上物を持ってきて、

「わが家は先年火災にあって、いまだ本建築が出来ないので、何分の御援助を願いたい」

と頼んできた。しかしこんな所で突然そんな事を言われても返事をすることは出来ず、

「帰国まで待て」

と断って、献上物は返してしまった。

（二月十七日）

朝起きたらドシャ降りの雨のため出発を見合わせて、やや小降りになってから出発した。

吉田（豊橋）まで来ると快晴になった。

塩見坂（白須賀）では、伏見奉行の内藤豊後守さまと出会ったので、ご挨拶をした。

間もなく、新居の宿の旅籠の弥右ヱ門より案内人が来た。

午後一時ごろ、新居の関所にかかった。家老の神谷亮蔵が先に出頭して、

「松平太郎左ヱ門が参勤するため、乗籠とも八人がまかり通る」

と申し上げた。すると亮蔵の持物を見て、

「それは何でござるか」

と問うたので、

「殿のさしかえの刀である」

と答えると、

「よろしい、お通り下さい」

と言われた。

江戸時代の関所では、出女と入鉄砲の検査がうるさかった。江戸から女が出ていくことと、江戸へ鉄砲が持ち込まれることが、禁止されていたからである。神谷亮蔵の持っていた脇差が風呂敷で包んであったので、鉄砲ではないかと疑われたのである。

新居から舞坂までは、海上約一里の旅である。無事に舞坂に着いたけれども、誰も出迎えに来ていなかった。そこで舞坂の本陣の宮崎伝右ヱ門に、

「これから通行のときは、きっと出迎えするように」

と注意を与えた。

午後四時頃には浜松の宿に着き、梅谷市左ヱ門方に泊った。

（二月十八日）

朝の五時頃に浜松を発って、天龍川を渡り、見付宿の大瀬屋で昼食を取った。

これから渡らなければならない大井川の様子を聞くと、

「近頃雪どけ水が多くて、川止めになっている」

ということであった。そこで今夜の宿の予定は大井川を渡った島田の宿であったが、予定を変更して、大井川の手前にある日坂の宿の本陣、片倉金左ヱ門方に泊った。

（二月十九日）

夜のまだ明けぬ朝の四時に日坂の宿を出発し、小夜の中山で小休憩した。夜が明ける頃、金谷の宿に着き、本陣の佐塚次郎右ヱ門方で聞くと、

「今日の大井川は川明けになった」

ということなので、すぐ大井川を渡った。

御乗物は旅人がかり、分持六人、川越人夫総勢四十二人で、その賃金の二分二朱と十文を支払い、また世話を

してくれた佐塚次郎右ヱ門へは一朱を与えた。
島田の宿へは、藤枝の本陣の伊右ヱ門方から案内人が来ていたので、小休憩して昼食を取った。
丸子の宿の上の、桔梗屋という茶屋で、また小休憩した。

丸子をすぎれば次は府中（静岡）である。ここで荷物の取調べがあった。
家老の神谷亮蔵が先へ行き、御宿の伊豆屋半右ヱ門のところで、貫目改めの儀がうまくいくように頼んでいるところへ、一行が到着した。
貫目改めとは、今日でいうところの税関に該当しようか。すなわち鉄砲などの禁制品を持っていないか、また盗難品などの怪しいものを持っていないかを調べるのである。また人夫一人が持つ荷物の重さは五貫匁（約二十キログラム）が限度になっていたので、それを超す荷物を持っていたときは人夫を増員させた。東海道では、品川、府中、宮、桑名、京都にこの貫目改め役がいた。
やがて駿河町奉行加藤靱負組の同心である、高田宗蔵と木原順蔵の二人が、
「我らは府中の宿での貫目改めと、人馬取締り見届けのために、出役いたした者である」
と松平太郎左ヱ門の前に土下座した。松平太郎左ヱ門は御駕の戸を少しあけて、
「お役目御苦労である」
と声をかけると、両人は引取った。
こうして貫目改めが滞りなくすんだところへ、江尻（清水）の宿の本陣の寺尾与右ヱ門のところから案内人が来て、今夜は江尻の寺尾与右ヱ門のところに泊った。

（二月二十日）
朝四時に江尻（清水）を出発して、海が見渡せる景色のよい倉沢で昼食を取った。
今夜の宿泊予定である沼津の宿の本陣から案内人が来ていて、沼津の高田惣左ヱ門の家に着いた。主人の惣左ヱ門がまかり出て、献上物を差出した。そして、
「上下を着替えてはどうか」
とすすめられたが、緊縮の折なので、両方とも断った。

（二月二十一日）
午前四時に沼津を出発した。
出発のとき、沼津城主の水野出羽守様から、同心が二人、問屋前に来て、ご挨拶があった。それに対して松平太郎左ヱ門は一朱を与えた。
三島の宿に着く頃になると、ようやく夜も明けてきたので、三島神社に参詣した。
それから箱根山に登った。箱根の本陣は昨年四月に焼失してしまったので、手代の甲州屋与右ヱ門の家で小休憩して弁当を食べ、箱根の関所通過の手続を取った。

関所へは御本陣の柏屋がまかり出て、
「松平太郎左ヱ門様がお通りなされる」
と申し上げると、御番所詰合いの者たちは次上下姿で平伏した。
松平太郎左ヱ門はとどこおりなく通過された。
すでに二月も末（今日の三月下旬）だというのに、残雪は深く、お供の者たちは難儀であった。米河内の栄助などは、二度も三度も雪の上ですべってころんだ。
先畑の宿で小休憩をした。ここで小間物などをお買い上げになり、夕方、小田原の宿の本陣の中川太郎左ヱ門の家に着いた。
亭主は江戸へ行って留守であったので、親戚の者たちが来て、もてなしてくれた。

（二月二十二日）
早朝に小田原を出発し、平塚の宿にて小休憩した。
少し行くと、奥殿御在役の伊与田多平殿とぱったり出会ったので、間の宿の本陣で御酒肴を差し上げ、しばらく談話をし、菓子などを献上した。
夜になって程ケ谷の宿に着き、本陣の水谷与右ヱ門方に宿泊した。

（二月二十三日）
早朝に程ケ谷を出発して、川崎の宿の万年屋で昼食を取った。
品川の宿の釜屋平兵ヱの家で、田中増右ヱ門が供廻りをつれて出迎えていた。田中増右ヱ門は江戸詰めの松平太郎左ヱ門家の用心（家老格）で、在府中の殿様の面倒を、神谷亮蔵とともに見るのである。
一同は品川宿の釜屋で弁当をすませ、祝儀として三朱を与えた。内訳は殿様より二朱、神谷と田中で一朱である。
さて、ここから麻布の龍土町にある松平石見守の借家まで行列を仕立てて乗込むのであるが、江戸市中の行列の構成は次の如くである。

一、御先御案内人　石見守様の御家来一人
一、御具足　御手人
一、御乗物（殿様の駕）　陸尺四人
一、腰侍二人　神谷亮蔵、深見覚蔵
一、御　槍　同衆方
一、御　箱　同断
一、合羽籠一荷　御手人両名
　ただし若党一人、草履取槍持兼一人
一、押侍一人（田中増右ヱ門か）
　以上　計十七名

松平石見守は、三河松平村からはごく近くの奥殿の藩主（一万四千石）で、松平太郎左ヱ門とは姻戚関係もあ

り、きわめて昵懇の間柄であった。そのため太郎左ヱ門の一行が江戸にいる間の住居として、龍土町にある自分の長屋を改造してくれたのであった。

松平太郎左ヱ門一行が到着した日、その長屋では、麻上下を着用した家来たちがお待ちしていた。素田泰助と佐藤十次郎の二人が出迎えに出て、居間へ案内し、松平太郎左ヱ門は御着座あそばされた。

そしてお供の者たちもとどこおりなく到着した後に、御料理が運ばれてきた。

御料理方は金子初太郎、御毒味方は津波金太夫の二人で、殿様の食事が済んだ後、お供の者へも御料理が下された。

御献立の内容は、御なます、御汁、香の物、お坪、御飯、お平（お手皿付二種）、御肴、お平替り付、御盃、御酒。

お食事が終わってから、お風呂にお入りになった。

借用した長屋は、出入りには裏門が専用に使用でき、また家屋は方々に手入れがされていた。今回のために修理したのである。

また江戸詰の田中増右ヱ門がこの日のために、御膳具をはじめ、油、味噌、醤油、酢のほか、野菜や、米一俵などを買っておいたので、非常に便利であった。

家主である松平石見守様へは家老の神谷亮蔵がとりあえず野袴のままお礼に上り、御用人の八右ヱ門殿に面会して、ご親切のほどを深く感謝申上げた。

こうして松平太郎左ヱ門は二月十六日から二月二十三日まで八日間かけて、三河国松平村から江戸へと旅してきたわけであるが、その間、大名行列のような行列の形式を取ったのは、松平村を出てから東海道までの間と、江戸に入って品川の宿から麻布の屋敷までの間だけで、途中は主従八人だけの旅だったことがわかる。

宿泊はそれぞれの宿の本陣であり、宿に着くと次の宿の本陣の者が案内に出迎えに来ており、大名旗本の参勤の道中では、本陣が実質的な旅行業者のような働きをしていたことがわかる。

また、朝の出発はいずれも四時か五時と、早朝に出発している。夜は何時頃就寝したのか記録にないが、電気のない江戸時代の早寝早起きの習慣が、このような道中日記にも見えていて、面白い。

第二章　江戸滞在中の日記

松平太郎左ヱ門は家柄としては徳川家の血を引いているので、毎年参勤する資格を与えられていたのだが、しかし実際は一年おきに参勤することが多かった。一度江戸へ参勤するのには多額の費用がかかるので、時々病気を理由にして欠勤することもあった。現に今回の参勤は

四年目の参府であった。

参府すれば当然登城して将軍（十二代家慶）にお目見えするので、まず江戸へ着いたことを、老中、若年寄、大目付などに報告しなければならなかった。その報告先が多いので、これをお廻り勤めと呼んだ。

お廻り勤めには一定の形式があった。主人は駕に乗り、その前後を護衛するために行列を組まなければならないのである。しかしそのような人数はいないので、口入屋へ行って、侍と人夫を頼むのである。今日で言えばアルバイトを頼んで、形式を整えるのである。

このお廻り勤めは江戸へ着いた翌日行わなくてはならないので、江戸へ着いたからといって休んではいられなかった。着いた日すぐその足で、家老の神谷亮蔵と江戸詰めの田中増右ヱ門は相談して、口入屋へ交渉に当たった。そして、

桜田町の山崎屋惣兵ヱのところから、陸尺を四人、御箱を一人、草履取を一人、の計六人。

西の久保の水戸屋吟四郎のところから、御徒士（さむらい）を一人。

以上の雇入れを依頼した。

（二月二十四日）

朝は早く起き、午前八時までに行列のお供揃えを、次のように決めた。

一、御徒士二人　金子金次郎、水戸屋吟四郎
一、御乗物（殿様）陸尺四人　山崎屋日雇供侍　山田菊次郎、小川惣兵ヱ
一、御箱一つ　山崎屋雇方
一、御槍持　御部屋の者
一、合羽籠　御手人（大沼、森右ヱ門）
一、御弁当持　御手人（宮石、幸吉）
計十三人

御弁当については、殿様はお駕の中で召し上がって貰うこと。お供の者は三合入りの弁当箱に、飯、味噌、煮〆めなどを入れ、また茶樽には茶を入れること。

なお弁当所は鈴木市兵ヱのところへ頼むこと。

お廻り勤めの順序は次のように決めた。

御大老　井伊掃除守様　外桜用
御老中　松平和泉守様　大名小路
　　水野越前守様　西丸下
　　太田備後守様　辰の口北の角
　　脇坂中務大輔様　西丸下
　　松平伯耆守様　大名小路
　　土井大炊頭様　辰の口南側

若年寄　増山河内守様　八代津峰
堀　大和守様　西丸下
小笠原相模守様　西丸下
松平玄蕃頭様　西丸下
林　肥後守様　呉服橋内
永井肥前守様　鍛冶橋門
大岡主膳正様　大名小路
堀田摂津守様　鍛冶橋内
大目付　初鹿野河内守様　裏二番町
神尾豊後守様　裏二番町
丹羽近江守様　飯田町二合半坂
土屋紀伊守様　小川町広小路
神尾山城守様　築地
計二十ヶ所

お届けの口上は、いずれも御式台で申し置くのである。しかし万が一お聞き取りくだされぬ方がある場合を考慮して、次のように御手札（中奉書、半紙堅紙、幅三寸五分ほど）に書いて持参することが必要である。

御手札

私儀、当正月に毎年の参府仕るべきところ、旧冬より病気につきお届申し上げました。やっとこの節快方に向いましたので、お伺い申し上げたところ、参上すべしと仰せ渡されましたので、去る二月十六日に在所を出発し、昨二十三日の夕方、参着いたしましたので、ここにお届けに参りました。

二月二十四日　松平太郎左ヱ門

なお、日雇のお供の者へは次のような注意を与えた。朝の出発が午前八時すぎならば、朝食の支度は出さない。また夕の帰りが午後四時前ならば、夕食の支度はしない。ただし今回は午後四時すぎとなったので、日雇へ夕飯の支度をした。

また、この日、家老の神谷亮蔵は調べもののために浅草方面へ出掛け、留守番は深見覚蔵がつとめ、田中増右ヱ門が時々見廻りにきた。

（二月二十五日）

昨日はお廻り勤めに一日中かかってしまったので、他は何も出来なかった。そこで二十五日になって、お土産を知人に配った。

お土産は松平村から持ってきたものも若干はあるが、江戸へ来てから買ったものもある。内容は次のようである。

まずは、下谷の山口植之助様方へのお土産である。

殿様から山口植之助様へは、美濃枝柿を一箱、それと漬松茸樽入を一箱差し上げ、さらに山口善右ヱ門様へは、三河小奉書一束を、差し上げた。

さらに奥方様からお誂えの品、二包みを、善右ヱ門様へ差し上げた。

次に松平石見守様へは神谷亮蔵が、次のお土産を持参した。

一、御扇子箱入（五本入）　一箱
一、三河小奉書　一束
一、吹上御香箱入　一箱
一、御肴料　金百疋

神谷亮蔵は玄関から入り、内玄関で御坊主がお土産を受け取った。そして御使者の間で御用人と面会し、ご口上を申し上げると、「かたじけなく思召し、よろしく」とおっしゃられた。

奥方様へはに田中増右ヱ門が使者となっておもむき、お菓子一箱（浅草船橋屋にて代金百疋にて購入）、花屋形天地赤半切箱入（芝神明にて銅代金三朱七匁五厘にて購入）を差し上げた。

ほかに貞次郎へは、御手元より品々を差し上げられた。

次に松平太郎左ヱ門が登城の順序として、御席願いをする必要があった。御席願いというのは、江戸城で将軍家にお目通りする日時と順序を、決める願いである。

今月の御月番は松平和泉守様である。そこで殿様は徒歩で、供侍として山田菊次郎、深見覚蔵を従え、御槍持（日雇）、御草履取（幸七）、御箱（栄助）、合羽籠（幸吉）の六名を従えて、大名小路にある松平和泉守様邸へ行った。

右玄関で御取次へ案内され、公用人の伊藤儀兵ヱ殿に口上を伝え、この旨を和泉守様へお伝えするように頼んで、お帰りになった。その時、左のような「口上の覚」を提出した。

口上の覚（書状）

私儀、順年につき参府仕りました。御席次第お礼申し上げたく、この段願い上げ奉ります。

二月二十五日　松平太郎左ヱ門

御月番　松平和泉守様

なおこの日、家老の神谷亮蔵は、江戸城内の進退について最も指導的立場にある、取次役の御坊主を訪ねた。それは下谷池の端にいた御坊主の関口玄古である。しかし玄古は一昨年に死去し、倅の玄清が後を継いでいた。しかし玄清はまだ幼かったので、親戚である取次役助役の平井栄朴が一切を切り廻していた。そこで神谷亮蔵は平井栄朴のところへ頼みに行った。

（二月二十六日）

御坊主の関口玄清のところの平井栄朴から、次のような返事が来た。

大御所様（前将軍の家斉公）へ献上の儀は、御月番（松平和泉守）へお伺いされたい。

（二月二十七日）

田中増右ヱ門は使者として御月番の松平和泉守様へ行き、次の如くお伺いした。

御　伺

私儀、参府順年の御礼を申し上げる際、西の丸（大御所家斉公）へも御太刀、馬代献上いたしたく存じ、ここにお伺い申します。

二月二十七日　松平太郎左ヱ門

松平和泉守様

（二月二十八日）

松平和泉守様より次のような使者が来た。

相達したき儀があるので、本日中に御一人でおいで下さるよう、和泉守は申していることをお達しします。

二月二十八日　松平和泉守内

鈴木面度兵衛

伊藤儀兵ヱ

沢田鉄之進

そこで田中増右ヱ門が参上し、沢沼半十郎殿へ御口上を申し上げると、

「大御所へ御太刀代、馬代を献上してもよろしい」

という返事があった。

以上によって登城の手続は一段落して、登城許可の日を待つのみになった訳であるが、この時代の登城の手続きが如何に複雑であったかは、この御席願いの一事を見てもよく判ろうというものである。

（二月三十日）（旧暦）

殿様は松平石見守様の宅へ行き、石見守様とお会いなされて、いろいろ御馳走になられた由であった。

また本日夕方、下谷の山口善右ヱ門殿がおいでになり、御座敷でいろいろとお話をされた。

貞次郎様も来られ、四万山のお話をされた。御酒肴も取りつくろって差出し、夜になってから御機嫌よくお帰りになった。

（三月一日）

殿様は田中増右ヱ門を連れて芝方面に出られた。

（三月二日）

神君様（徳川家康）より御拝領の御具足拝見のため、松平石見守の御使として中根権次郎様が来られた。殿様は一緒に石見守様の家へ行かれ、ほどなく帰って来られた。

（三月三日）

御節句であるけれども、登城を目の前にした登城待ちの時であるので、なんの節句の行事もしなかった。

殿様は本所の羅漢堂へお廻りになり、夕方帰宅された。

殿様の留守中に、熊谷徳右ヱ門、竹ノ内宇三郎の両名が来たので、田中増右ヱ門が用件を承っておいた。

（三月四日）

御節句の御祝儀として、田中増右ヱ門ならびに神谷亮蔵へお酒が下された。

（三月五日）

殿様は水天宮へ御参詣された。午後は雨となる。

（三月六日）

小雨。終日、神谷亮蔵は田中増右ヱ門たちと御助成の相談をした。

（三月七日）

雨。本所割下水松倉町の松平五郎三郎様が来られ、昼頃お帰りになった。殿様の持病が起こった。三河より書状が届いた。

（三月八日）

殿様は今日も御気色勝れず、食事も召し上がらなかった。夕方、うどんを少々召し上がった。

昨年から江戸へ出て来ていた松平村の紺屋与右ヱ門の倅が今日訪ねて来て、

「お帰りの節は一緒にお伴させて欲しい」

と頼まれた。

（三月九日）

殿様の体調はほぼ全快された。

（三月十日）

殿様は虎の門の金毘羅様へ御参詣された。

（三月十一日）

何事もなし。

（三月十二日）

田中増右ヱ門が御坊主の関口玄清のところを訪ねると、

「松平太郎左ヱ門の登城は三月十五日になったから、献上物などをよく調べておくように」

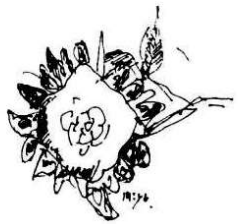
と注意された。

田代為右ヱ門のところから、箱入すしを献上した。神谷亮蔵は田代家へまいり、御助成の儀をお願いした。

（三月十三日）
神谷亮蔵は関口玄清のところへ行ったが、すでに登城して不在であった。そこで親戚の平井栄朴のところへ行って話合った。献上物の予定は次の通りとなった。
御一ケ所　御太刀、馬代、各一両ずつ
御三ケ所　金三両を持参して頼む。
ほかに筆墨料ならびに御使が必要でも、都合三両一分で仕切ることを約束して帰った。

（三月十四日）
正式の登城通知が来た。

（つづく）



祝出版

◉三戸岡道夫（資料協力　滝澤中）
「大山巌」　ＰＨＰ文庫

◉相原精次（共著）
「神奈川古墳散歩」　彩流社

旅行



青木昭成

1　出発

だから　と思うのである
私のこの旅にはなんの目的もない
にもかかわらず私の言葉だけが
まるで手毬のように　ふと私を弾ませる

妻を伴い　私はその時
おおかたの人達がする振舞いでいた
落ち着きを持たず　もちろん仕事を持たず
つまり初めて懐にしたパスポートの
その有りような気分で　そっちの話

あっちの風景のきらくな期待を描いていた
もう何年　この雰囲気から離れていたろう
私の戸惑いが妻のとまどいを誘う
惑星へでも往ってみようか　等という
きばつな好奇心が私にあるわけでなく

ただ　搭乗カウンターまえの　あい変わらず
不作法としか言いようのない物ほしげな姿
私もまたその行列のなかに身をおいているのだ

外国語の早口がときどき　それを遮る
そして　ますます寡黙におちてゆく私に
旅なれたはずの妻もやはり同調する

この日　みなみの海のうえを台風が
明け方から駆けぬけ　通過していた
日射しが建物の影をひとしきり走り去る
ダイヤはしだいに落ち着きをとり戻し
時間遅れの午後三時発を表示していた

だが　ふしぎな気だるさが背中に残る
はや　私はあわい旅愁の中にただよい
この身を任せはじめていたのか
いや　どう力んでみてもこれ以上
若くはなれない私の齢　それを改めて
甘受しようとしていたのか

2　時　差

それは　まさに閉塞された一つの世界だ
エコノミーの身うごきの不自由なシート
時間は私の膝のうえで止まっていた
まどろみが　まどろみを続けさせない

「まるで変わった」とまた落ち着かない顔で呟く
建物が変わり　方角が違い　表示が並ぶ
だから結局「アウスガング」の文字だけを探し
人々の歩む方角を頼る　そして　ほどなく
私たちは入国チェックの列のなかに立っていた

3　出迎え

文字と画の表示を　どこまで追えばよいのか
コンコースの空中に等間隔に吊りさげられ
これほど表示の多い空港もめずらしい
そのつど「ゲペック」「ゲペック」と
妻が指さし「げっぷ」のような発音を
口のなかで発する

動く歩道を乗り継ぐ　それにしても
めざす荷物のベルトコンベヤーは
階段を降りて　地上階にあった
だが　トランクの群が搬出口を詰まらせ
それはすでに故障して止まっていた
対応の遅さが　この国への期待を苛立たせる
到着の安堵をすっかりストップさせて
慌てさせてしまった

ランプの下の読書が　読書にはならない
妻はいくどとなく航空地図を開きなおし
私に話しかける　すると私の時間が
思いだしたように動きはじめる

フランクフルトはうす雲の空の下
レンガいろの屋根を静かにひろげていた
雲間から西日のすじが窓のそとを流れる
私は腕時計の短針の刻みを見る
十一時間の経過をあらためて確認してみる
機内のアナウンスは　現地の夏時刻と
気象のあらましを何度となく伝える

それを聞き流しながら　だが私の
頭はなんとも重く　そうだ　体の芯では
曜日を戻すことなく明日へと進んでいた
それは否応なしに私の生理を疲れさせる
否応なしに私の脳裏を混乱させる
それが私の腕時計をついに現地時刻にまで
戻させない気分にさせていた

「ほんとに変わったわ」と妻が言う
歩く方角にすっかり自信がもてなくなっていて
たしかに　彼女にも十年の時間の経過があった

やっと　空港の目隠しドアーを押した
そこには　若いS夫人の紅潮した笑顔があった
出迎えの瞬間はいま終わったのだ
内と外とのお互いの苛立ちの何十分間かが
驟雨のようにかき消され　夫り　そして
日本人同志の挨拶が私たちを
ドイツ語からをも開放してくれていた

若いと言うことは特権だ
Sさんは挨拶と同時に妻のトランクの把手を
摑んでいた　ホールを横切る
エスカレーターへいっきに乗り込む
駅への　それも長いコンコースを急ぎながら
しかし　あきらめ声でいった
「予定の汽車には無理かもしれません」

4　フライブルグへ

事実を事実としてここに書こう
いや　それは私の記憶かもしれない
いやいや　記憶の残滓でしかあるまい
三人はエレベーターに　いそぎ乗り込む

人工地盤の下の長いホームへ降り立つ
そこは　列車のいない　人の消えた空間でしかなく
「つぎは　一時間待ちです」　Sさんが言う
オープンテーブルのある二階の喫茶店へ戻る
コーヒーと紅茶とケーキを前にして
私は思いきり背伸びをしていた

やや暗い列車の窓の外を
ほの白い穂先の麦畑がながれる
濃いみどりのとうもろこし畑がながれる
この国の麦秋は七月だったのか　と納得し
この風景に会うべき　はるばる
尋ねてきたことに間違いがない
と　しみじみ感動する

とおい地平の空に　夕なずむ茜いろは
あまりにも美しすぎる
私と妻の内部からは　もうすっかり興奮は去った
三人はそれぞれの向かい合いになるシートを
それぞれの思いで占めていた
「もう九時半だわ」
ぽつりとSさんが言った
やっと夜が来ていて　だが白夜に似ていた

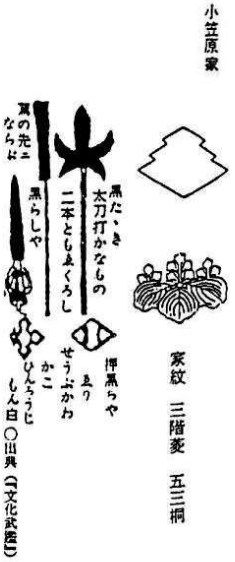
十一時のフライブルグの
駅のホームはやや暗かった
そこには　かっぷくの良いオペラ歌手の
S氏が待っていた　軟水の
ペットボトルの大きな一本を
左手にぶら下げて

（つづく）



幕末トライアスロン

唐津藩小笠原長行（ながみち）の造反



大和禎人

（薩摩や長州の賊子どもに屈してはおられぬ）
小笠原長行の思いは怒髪天を突かんばかりの面持（おもも）ちに見えた。
（負けてたまるか、いや負けはせんぞ）
と心内に叫ぶものがあった。
かれの強気はすでに士卒を率いて京に上ろうとした挙にもよく現れていた。朝廷よりのしきりな攘夷督促のなか、生麦事件の賠償金を独断で支払い、その上鎖港談判の中止を提唱してたための非難を浴び、その趣旨を弁明しようとしたこの上京の企ては、穏やかならざる一種のクーデターと見なされ阻止されたのである。
（国家の危急にのぞんで、余の思案の真意を理解されぬとは遺憾の限りじゃ）
切歯扼腕の思いであった。
この際の小笠原長行は文久二年（一八六二）図書頭から抜擢の登用をうけて老中格の要職にあった。年歯ようやく四十歳の若さゆえに、幕閣にあってその誠意にかかわらず周囲から疎（うと）んぜられたかむきを否定できない、かれはいったん罷免を余儀なくされている。

唐津藩の小笠原氏は文化十四年、松平（越智）家にかわり陸奥棚倉より入封、譜代。六万石、帝鑑間詰、初代は長昌、この移封は石高は同じながら、東北での財政貧しく遠く転じるにあたり、失費上大変な困難を強いられている。小笠原氏の棚倉以前の封地は遠州掛川で、わずか三代での再びの移封であったから無理からぬ。幕藩体制の中、頻繁を見た大名の異動、転勤によりもたらされた無残の始末であった。
棚倉での借財と莫大に上（のぼ）った転封費のため財源に苦しみ、唐津藩の始祖小笠原長昌は領民に献金を依頼したり、

楮の植えつけ計画を立てたり、窯業を奨励し、献上唐津を始めている。渋い色合で茶人好みの唐津焼である。

さて、当代の藩主は五代長国だが、藩情まことに複雑微妙の様相に心を悩ませていた。藩祖である長昌の末子で長男の長行が幼少とあり、いったんは襲封を見送っていたものの、今は世子の立場にあることであった。

長国は文化九年（一八一二）に生まれ、信濃松本藩の戸田光庸の二男で唐津藩四代長和の養子となった人である。天保十二年（一八四一）二十九歳で襲封していたが、治世十余年ほどを経て、嘉永七年（一八五四＝安政元）長行が養子となるにおよび、実質的な藩政は英才、かつ正統の血筋である長行の手中に帰するというまことに不本意な成り行きを見たのであった。藩政改革の実は多く長行の手腕にかかるという藩情を呈したのである。

ここに藩内は大殿（長国）派と若殿（長行）派に分裂を来し、対抗する不穏を生じた。この確執は長行が文久三年に幕府に出仕して後にもおよび、しこりは長く尾をひくことになる。幕末の政情の渦中、長国の立場上止むを得ずとは言え、ついには廃嫡義絶に及ぶのである。

小笠原長行は文政五年（一八二二）の生まれ、戊辰の危急に際して、四十六歳、長国は五十六歳であった。二人の間の養子縁組、世子決定のあと先のいきさつがあって生じた藩情と言うことができる。

唐津藩の江戸藩邸、上屋敷は外桜田にあった。別して中屋敷は本郷御弓町、下屋敷は深川高橋。とりわけ上屋敷の外桜田は譜代として枢要の位置におかれていた。嘉永三年の江戸切絵図によれば家紋剣輪違紋を印す大岡越前守藩邸とは対角をなす角地に三階菱の家紋とともに小笠原佐渡守の名を発見できる。佐渡守は長国である。長行は壱岐守を称したからこの屋敷の当主ではないが、幕府出仕いらい役目上の定府、起居をここにおく格好であった。唐津の藩情の煩わしさを離れてほっとする思いがなくもない心情だった。

因に近隣となる大岡は名奉行忠相が三河の西大平に封ぜられ一万石、大名の列に加えられてから、戊辰開戦時には七代忠高の時代を迎えていた。慶応三年五月までは大番頭を勤めた。参勤交代のない定府大名なので封地には陣屋をおくのみ、

「西大平陣屋にはわずかに三、四人のほか、詰め合いござなく、江戸表は遠路かけ隔てつかまつり、即今進退方に迷心失途つかまつり候」（『東海道先鋒記』）

とあり、維新に際して帰趨を迷う苦衷を記録している。

「江戸は広い、もはや誰にも気がねせずともよい、なによりもそれが重畳、久々晴れ晴れする思いじゃ、のう、幸二郎」

「はい、殿様、唐津ではお気がねが大変ございましたから、さようでございましょうとも、なにせい大殿にご遠慮なさるばかりでございましたから」

「いや、わたしは誰にも遠慮をしてはおらんかった、信ずる道ば歩んできたまでぞ」

「はい、殿様はお強い、かえって大殿さまの方が苦手になさっておられましたようで……」

気のおけない話の相手は従僕小林幸二郎だ。気安さから九州訛りらしいものが口に上る。長行に従って、小林は後に会津への亡命にも従った一人で、さらには蝦夷地函館まで追従している。あまつさえ他の唐津藩士とともに新選組に加わり、弁天台場で降伏後、病死している。函館称名寺の供養碑に同じ弁天台場に戦死した藩士栗原仙之助とともにその名を刻まれている人物なのである。

小笠原壱岐守長行の幕閣にあってのスピード出世ぶりは次のようである。

・老中格　慶応元年九月四日～十月九日
・老　中　慶応元年十月九日～慶応二年十月六日
（ここでいったん罷免された理由は前記のとおりだが、すぐに再任されている。）
・老　中　慶応二年十一月九日～慶応四年二月十日

老中としてのかれは慶応二年の第二次の征長役に際し将軍家茂の全権として九州の幕軍を指揮の任にあたっている。弱体化した幕政を支える立場に置かれていた。こうしたいきさつがあれば唐津藩の佐幕的立場はまた止むを得ず、戊辰戦争となると、薩長から最たる朝敵と見做され、藩主長国の立場を苦しいものにしていた。

慶応三年十一月二十日、江戸藩邸では長行の長子の誕生を見た。男子である。後に海軍軍人として中将。子爵小笠原長生である。四十五歳にして得た嫡男である。将軍徳川慶喜の大政奉還の宣明は十月十五日であるから、すでに政情は大きく転換を初めていたが、藩邸は明るく喜色に包まれたに相違ない。訓こそ正しくは（ながなり）だが、むしろ（おがさわらちょうせい）としてこの人の名は父長行よりも戦前派世代にとっては著名かも知れない。海兵、海大卒。日露戦争では報道と広報を担当、広瀬武夫をはじめ「軍神」を創造し戦意高揚と国民教育上に影響を与えた。軍令部参謀、香取艦長。大正十年退役後は宮中顧問官、学習院御用掛などを勤め、文筆に長じて、「東郷元師詳伝」「海戦日録」「撃滅」などを著し、昭和三十三年、九十一歳で亡くなっている。小柄だが、品よく貴公子の風格を具えた人であった。

すでに大政奉還後、唐津藩主小笠原長国は苦慮のあげく、朝廷への恭順を表明し、近隣の福岡藩、佐賀藩に斡旋を依頼して、慶応四年二月、新政府に上京を願い出た

が、これに対する回答は、「長行の切腹または唐津での蟄居」を条件として伝えられた。

唐津から長行にとって義理の甥にあたる小笠原胖之助が藩命を伝えるため急遽、江戸上屋敷へ到達した。すでに江戸城下騒然として、東進する官軍の迫ろうとする風雲の中であった。

「余に帰藩せよとてか、ことさらお主を使者に立てるとは義父どのも考えたのう、この際なんのための帰国を促されるか、察しはついておる、だが、お主の立場もあろうが、わたしは帰らん」

「……」

「帰らん、断じて帰らんぞ」

気色ばんだ大声だった。

「各藩大方恭順の大勢なれば、もはや九牛の一毛の譏りをうけましょう、ここはならぬ堪忍をなさりませ、藩の命運にかかわりましょう、よいご分別をなされませ」

胖之助も必死の眦で迫った。

「このまま、諾々と、お主の言うとおりにはできん、幕臣の一分が立たぬ、藩長のかざす大義があるとするなら、こちらの大義も守らねばならぬ」

「彰義隊結成の動きにでも参加のおつもりですか」

「いや、寛永寺に謹慎しておわす将軍家を護ろう名分はもっともに聞こえるが、かえってご迷惑をかけよう、上野に根拠をおくのではこの江戸地の滅びを招く、第一市民が迷惑する、いたずらな砲火は避けねばならぬ、あちらの方は渋沢成一郎とやら、三河の名流を担ぐと聞いたが、しょせん敗北に終わるだろう、もっと大きく巻き返さねばなるまい、わたしは会津に頼るつもりじゃ捨て置いてくれ」

眉宇すでに決するものを見て胖之助も追求を止めた。

会津に頼るという長行の思惑の背後には東北、奥羽の列藩の結束、対抗の大同団結の期待がある。長行はそうとは口にしていないが、胖之助もまたかれなりに、同じように先途に漠然としてはいるが、どうやら希望がもてそうな気がした。幕末の渾然とした士道を歩む上で、二つの道の一つを選ぶとすれば、使命を離れては旧守の道を選びたい、そういう思いをもつ方の人間の一人だった。突き上げられたように君命を没却する腹構えに変わり、やがて長行の後を追い会津への道を急ぐことになる。

慶応四年三月、帰国命令を退けた長行は、側近十八名とともに、会津亡命の道を選んだ。

（陸奥にこそ頼れる士魂が滅びずにある）

黙々として道を急ぐ一同のどの胸にもそうした思いが道連れとして浮んでいた。

ここで慶応四年という激動の年について三月までの動向の概略を写しておきたい。

一月　三日、旧幕府軍、入京の途中鳥羽・伏見で薩・長・土の三藩軍と交戦（戊辰戦争始まる）六日、徳川慶喜、松平容保・松平定敬、らを伴い、軍艦開陽丸で大阪脱出六日後江戸着。十日、朝廷徳川慶喜・松平容保ら旧幕閣の官位を止め、京都屋敷を没収。十七日、会津藩征討の朝勅、仙台藩に下る。

二月　三日、天皇親征の詔。九日、有栖川熾仁親王を東征大総督に、板垣退助を東山道先鋒総督府参謀に任命。十二日、徳川慶喜江戸城を出て上野寛永寺に入り謹慎。二十二日、松平容保江戸より会津に帰国、挙藩防戦を藩士に告げる。二十三日、旧幕臣渋沢成一郎ら浅草本願寺で彰義隊を結成、月末までに会津藩士順次帰国。

三月　六日、大総督府江戸城攻撃を命令。八日会津藩軍組織を改革し白虎隊などを組織。十三日、西郷隆盛と勝安芳、江戸薩摩藩邸で会見（江戸城無血開城談判）十九日、奥羽鎮撫総督九条道孝、仙台藩・米沢藩に会津征討を命じる。

会津藩公らのたどった道筋は滝沢峠を越え、時、あたかも残雪を踏む奥州街道を辿った。藩祖保科正之の頃は日光街道を通ったもののようであったが、二代、正経以後の参勤は奥州街道の道筋が慣例になっていた。下野の今市から鬼怒川沿いに藤原、川治を経て三王峠を越えると、そこは岩代で、ようやく南会津に達するのであった。戦後の今日になって、第三セクターにより野岩・会津鉄道が新藤原から川治、湯西川、芦ノ牧などの温泉観光地を経て会津若松に達する鉄路の開通を見ているが、この時代の冬期は五街道の一として、ほどほどに整備されていたとは言え、北国路のこと、ことさら雪の深い難路を免れない道筋であった。

藩公、松平容保が江戸を退去し、会津に向かったのは二月十六日、それから七日後、二十二日に若松城下に達している。江戸詰の会津藩士とその家族たちも、二月中には江戸屋敷を引き払って、帰国の途についている。保身に汲々とする将軍慶喜に裏切られ、狐影を奥州路に引かざるを得なかった藩公自らの心境も思われ、さらにはあとを追った藩士らの無念の胸を嚙む思い、いかばかりか、察しなければならない。

（長行との父子の縁を切り、唐津で謹慎させる）という結論を長国は申し出でるため慶応四年三月、入京したが、江戸にいたはずの長行が、すでに会津に亡命していた事実が判明して、長国、ひいては唐津藩は苦しい立場を免れなかった。しかし、たびたびの恭順の申し出でに対し、閏四月、ようやく新政府軍務局は征討軍への参加を認める通達を与えるに至り、銃隊百人ほどが奥羽征討軍の第二軍に配置された。そのほか同年七月には小田原へ出兵、九月にはさらに下田へも出兵している。

「おん身の救援をうけようとは心強い、容保、涙する思いでござる、遠路さぞお疲れであろう」

会津の藩公は謹慎の意を表して、城郭中の薬草園の建物に蟄居していたが、城門まで出迎え、長行の手をとると強く握り締めた。

「わずかな手勢、ご覧のとおりじゃ、いささかのお役にたちましょうや、心もとなく無念のかぎりに存ずる、いまはただ一矢を賊徒に報いん志の一途のみ、お察しあれ」

「かたじけない、いまや藁をもつかみたい思い、おん身の率いられる藩中の方々は心強い当千の勇士とお見受けして頼もしい限りでござる」

第二次の長州征討に際しては、将軍家茂から全権を委ねられた小笠原長行の過去がある。怨念はいらい消えてはいない。つき従う十八士はみな長行の腹臣、屈強の者たちであった。等しくその思いもまた長州の異常なまでの野望、薩摩や土佐の遅れじとばかり幕府衰退に乗じよう露骨、かれらはとうてい天を共に戴ける輩ではないという心境を抱く人々であった。

会津藩主松平容保は養嗣子として尾張徳川家の支藩美濃高須の松平義建の子として生まれた人で、その義建は水戸徳川家の六代治保の子で、高須藩主を襲い、のち尾張徳川家を継ぎ、徳川慶勝となった人である。容保は徳川一族の血を濃くひく人であった。藩祖保科正之の遺訓である徳川家への忠誠一筋を今こそ守り、宗家のため一臂の抗いは、譜代、外様の別を超えて、衆目の必然視するところ、それとない期待をうける立場にも立たされていたのであった。

後を追った小笠原胖之助は夜に入って合流した。

「そちまでここへ、どういう考えじゃ、わたしへの藩命を伝えよう使者ではなかったか、あとあとの処分を覚悟の上か、私のことはかまわんほうがよい」

「いや、叔父上、それがし、唐津の藩士の性根に生きる分別をして、後を慕ってまいったもの、ご一行にお加えあれ」

「それほどに言うか、そなたの父上が嘆かれようぞ、藩主たる長国どのを子たるそなた背いてよいのか、無謀に走っては心を痛めようぞ」

「父は父、しょせん男児の思惑の外におわすまで、わたしはわたし、大義に生きようと思いまする」

「その大義とはなにか、われら、ここまで道中考え続けてまいった、軽々の付和はかえって大義に背こうぞ」

心外なと叫びそうな胖之助の顔色を長行は見て、それ以上の言葉をひかえた。

長行はいまこの甥が口にしたその大義について、真義を追いもとめ心を労してきた。幕閣に身をおいた者としての心裡の葛藤はただでさえ胸苦しく、あまつさえかれに殉じて付き従ってきている家臣の上を思えば、自らの思いの行方に当然ながら自責が伴い、迷いの黒雲の広がりを避け得ず、苛まれ続けていたのだった。

始めて若松に至りし所、當城下は四面に高山あり鉢底の形を為せり、去れども聞きしに優る繁華にて市中人家一萬九千餘もありて不自由なる事なし、此頃は別して繁昌、市中にも娼妓體の者多く、城東の天寧寺に東山とて温泉場ありて、此節は諸国脱走人群衆最盛なる由、余は多事なりしに由て、此境に遊ぶ能はず遺憾 不少

幕軍総督大鳥圭介は「南柯紀行」に会津城下の印象をこう記す。五月十五日、会津藩若年寄山川大蔵に伴った際の所見である。やがて襲う戦禍を予測しない殷賑を写していて意外に思える。

会津両君に謁し種々の愚衷を建議し、板倉、小笠原侯も日々登城ありて、事務を謀られし由なり、但矢張因循姑息 加之 奥羽同盟の事成りしを以て、一體の人心大に弛緩せし形ありて、建議せし件々も急には行はれず、大に失望せり。

「南柯紀行」原文ママ

ここに写した同紀行後段に大鳥の言う（失望）は大いに複雑微妙に往時の事情を物語り、注目の必要がある。

（会津両君）とあるのは容保、世子喜徳を指しており、板倉、小笠原の両名を敬して（侯）という尊称を一応用いているが、ここには武人派の相剋するいきさつがあり伺える。小笠原とあるのはもちろん長行であるが、板倉は備前松山の藩主板倉勝静を指すものだ。

板倉は小笠原と同時期老中職にあったが、大鳥軍が宇都宮城を攻略した際、すでに江戸を脱出し板倉家廟所ゆかりの日光に拠っていたが、恭順の意を表し、宇都宮藩に自首し、謹慎中のところを救われたのであった。会津亡命は小笠原長行と前後している。

いったん恭順を表明した身、幕軍に救われてみると、方途に迷わざるを得ない。追従していた家臣らも大方がすでに四散し、手元金まで持ち逃げされていた。そうした板倉を大鳥は戦列に加えるつもりはない。

「会津に頼ろう、もはやほかに行くところがない」

暗い顔色の板倉を見て、

「そうなされよ、いずれそれがしもお会いする時もありましょう、ご無事を祈ります」

大鳥は慇懃だが、冷たくあしらってそう言った。

一方、会津のこの時期の決断にはまだ迷いがあった。大鳥の失望はそのへんにある。いまだ徹底抗戦の断を下してはいなかった。

「南柯紀行」は右に先立つ閏四月の項で次のように述

べる。

会津より林正十郎宰相殿より手書を持来たり、是迄の戦功を賞せられ、余には御紋附の羽織を贈られ、兵隊へは酒肴料を贈られたり、且云ふ、不日会津よりも兵を出し勢を合すべき見込にして、已に有志の輩は出立したる者あり、必此上盡力あるべしとなり、於是全軍士官感泣せり、

この記述に伺うかぎり会津の宰相、つまり藩公の親書がもたらされていて、慇懃な礼をもって大鳥軍を迎合する意図が伝えられたように思われる。しかし、日光山警備を名目として派兵されていた会津藩の主将の山川大蔵に伴い会津入りをしてみると、著しく期待に反する空気が察せられたのである。

会津藩公平容保は会津の生まれでなく、養子であったという事実はすでに触れたとおりである。養子に入ったのが弘化三年、十二歳であった。嘉永五年、十八歳で襲封し、肥後守を称している。誠実一筋のかれが養家の存亡を重しとし、第一義においたのは当然であったろう。この点にこそ大鳥軍と手を結ぶことには逡巡があった。奥羽列藩の同盟が成立したいまはむしろこれを盾として和平の道が開かれることに、なお一縷の望みを託す考えがあった。大鳥軍と手を結ぶことは錦旗を奉ずる西軍に対し、東軍として対峙を鮮明にすることであった。極力それは避けたいという思惑がまだあったのである。

さらにまた先帝孝明天皇の信任あつく、再三にわたって宸翰を与えられている事実を考えても、天朝方に反逆の意志は毛頭ない。公武合体派による文久三年八月十八日の宮中クーデターと言うべき政変は畏きあたりとの信頼関係を基盤として遂行され、七卿落ち、長州の京都追放が行われた。順逆を論ずるなら、この時点での会津は順、長州は逆であった。いま順逆ところを変え、いずれを賊子と呼ぶか、あまりにも矛盾多く、無念やるかたない心境なのである。将軍徳川慶喜はある意味では先見の持ち主として、政治家の資質をもったであろう、その政治性に裏切りをうけた松平容保は愚直、あまりにも誠実の人であった。将軍より二歳年上のかれだったが、おそらくは慶喜を好きにはなれなかったに相違ない。

奥羽列藩同盟結成の気運を機会として小笠原長行は家臣七名を連れて白石に赴き、さらに福島に足を運んでいる。

白石は伊達氏の家中の重臣で大名格、片倉小十郎の城下である。仙台藩を盟主とするとき、奥羽列藩の代表が相寄るに便宜な地の理を得ていた。この地を拠点として白石同盟がまず成立している。しかし、なおこの時点では会津救済、平和収拾の具体策を探ってきた列藩としては平和同盟、もしくは嘆願同盟、希望連合という段階に

とどまり、寛大至仁のあつかいを「列藩衆議」の上で願うという姿勢であった。西軍の督促のまま一応は会津を包囲はしたものの、仙台藩を中心とする東軍は戦闘行為を禁止して、時に空砲を放つなどの日和見に終始し、薩長奸賊の偽勤王にかわり真勤王を東方から起こそうという気構えを保っていた。

（大いにわが意を得たり）

小笠原長行は列藩のこの動向を察し雀躍する思いであった。白石城に集まった各藩の重役の肩を叩き、大いに鼓舞もしたいという気持ちで赴いたのであった。

「この期にさような、無暴ではないか、あなたは勇ましい、おん身大切になされよ、暴徒が肩で風を切る時代じゃ、どこに敵が潜むやも知れぬ」

「お気づかい無用、それがしの存念のままの行動でござる」

いまは互いに会津に寄寓の身、板倉勝静が語りかけるのを長行は振りきるようにして出てきた。老中として同列にあった板倉だが、文政六年生まれで一歳年下の四十五歳、ともに分別の年ごろにもかかわらずその思惑にはかなり隔たりがあったようだ。

奥羽鎮撫総督九条道孝の率いる西軍が海路仙台に入ったのは三月二十三日、奥羽諸藩に会津討伐を命じて譲らぬ形勢の中、たまたま参謀世良修蔵が参謀大山綱良にあてた密書を不用意に福島藩士に託したことから、仙台藩兵の隊長、瀬上主膳の手にわたり、「奥羽皆敵、逆撃せん」とする内容の献策が露われ、激怒した瀬上の命をうけた仙台藩士姉歯武之進、福島藩士鈴木六三郎ら一〇名ばかりが閏四月二十日の深夜、福島城下の妓楼金澤屋に寝込みを襲い、悪名高かった世良を捕らえ、阿武隈川原に斬首するという行動に出た。

鎮撫総督九条道孝は二十九歳、副総督沢偽量が五十一歳、上参謀醍醐忠敬はまだ十九歳、いずれも公家衆とあり、せめて年輩者の沢に統率を期待したいところだが、実戦の経験がなく、実質的には下参謀の長州の世良三十四歳、薩摩の大山四十二歳の二人に実権を掌握されていたのである。ありがちな成り行きであった。

世良修蔵謀殺の報が情勢を一変させ、仙台、米沢の東軍主力は会津包囲の軍を解き、九条総督を仙台へ強制送還するという公然たる反乱が導かれた。同時に奥州諸藩の家老たちはふたたび白石に会同し、奥羽二十五藩の同盟が成立、仙台藩を盟主に推した。五月三日、さらに仙台城に会合して、正式に同盟条約書を議決、北越八藩がこれに加わり、奥羽越三十三藩の大軍事同盟が発足したのであった。

「祝着至極、これにて安んじ給え、貴台はもはや真勤皇の一翼を担われるご身分となりましょう、奥羽を一つに、いまや奥羽越三十三藩が結集し、衆議をもって不戦と平和を実現するのです、やがて公議所が設けられ、新

政府が発足することになります、おん身は晴れて晴天白日、祝着に存ずる」

会津に帰った長行は藩公松平容保の手をとり、白石結盟の成果を告げた。浮かされたような長行の熱弁が藩公を煙でつつむあんばいで、次いでかれの語り継いだ内容は啞然とするものであった。

「いまは仙台におわす輪王寺宮公現法親王をお迎えしてご即位を願い、東武皇帝と称し奉る、新天皇政府の樹立でござる……」

「なんとさような、驚き入る、まこと実現可能のことであろうか」

「不可能を可能にするのがわれら使命でござる」

長行の口にのぼった輪王寺宮は彰義隊の戦争で上野を焼かれ、会津に逃れ、米沢を経て、仙台に迎えられていたのである。（註・輪王寺宮は孝明天皇の弟宮、明治天皇の叔父にあたる）

「列藩同盟の軍務局に仮太政官を置き、板倉ならびに不肖小笠原が政務を統括します、地方の太政官は平将門の例がござる、いずれは仮でなく正規のものに、さらに仙台の伊達慶邦公を権征夷大将軍に、おん身を副将軍に迎える手はず……」

「なんと、これはしたり」

「いや、まっとうな計略、方針でござる、しごく順当な人事でありましょう」

そこまで言って、長行は眉一つ動かさなかった。かねて会津亡命という暗い前途に、ここまできてはじめて光明の射し来る予想に胸膨らみ、滔々の弁を迸らせたのである。幽囚同様の寄寓の身にこの日の訪れを見ようとは夢寐に描くとも望み得ないと思われてきたことだが、正夢になろうとしている、その今をつかみ取ろうとする、それも輝くような希望もってだから無理もない。

「さらに、これは皮肉ながら、仙台に送還中の鎮撫総督九条卿以下、沢、醍醐の諸卿を奸賊の下参謀とは切り離し、奥羽越列藩の権威に組み替え、太政大臣、以下の執柄（摂政、関白の異称）の官に就かしめる……」

「ほう、そこまで」

「完膚なく新政府を称する薩長の蒙昧のやからに存分に一矢を報いるのでござる」

鬱屈していたもののすべてを吐き出し、溜飲を下げる思いなのであった。

六月十六日には大政という元号まで公にした。同盟軍政府の名において、各国公使にも「北部政府」として外交交渉をひらき、わが国には南北二政府の並立することを認めさせ、さしあたり新潟港が同盟政府の管下にあることから、「北部政府」の主権の存在を認めさせようとする、北国お手盛りの「ご一新」の発足であった。

列藩同盟の盟主は門地から言えば会津、実力から言えば仙台しかない。いまそうした関係が円満に手を結び、

中心となる同盟が組織されたのだから、十分に地方政権としての資格をそなえるものであった。だが、ここで政権の核に征夷大将軍を擬し、旧幕府の老中が施政権を手中に収める形態は亡命幕府政治復活の傾向を免れない。せっかくの新政府は近代を具体的には構想してはいなかったと言える。

ここで、もう一人の大名君主、桑名藩の松平定敬の主従一〇〇余が会津を目指し亡命の道をたどっていたことを無視するわけにはいかない。定敬は会津の松平容保の弟で兄の京都守護職をたすけ、所司代の職にあった人だ。三月十六日、長岡藩の手配によるプロシャ船により、横浜を出航し、箱館回りで二十三日、新潟に着き、北越戦争を戦うなど、転戦、流転のあげく会津に達していた。

同盟軍の最前線白河城の失陥が五月一日、仙道口は敗色濃厚になると、仙台軍務局は新政府の傀儡として仰ぐ九条道孝を盛岡、ついで秋田に転陣させる愚挙におよんで、自ら新政権に拠りどころを失う結果を招いている。秋田を仙台に並ぶ政治指導者に成長させ、やがてその離反を招くのである。戦局はここにいたり急展開する。

西軍は常陸の平潟に薩摩藩兵の精鋭を上陸させた。

六月二十九日　白河口の同盟軍が総退却をする。

七月十三日　平城陥落。

十四日　弘前藩同盟離脱。

十五日　越後戦線の膠着を打破するため、仁和寺宮純仁親王を北越征討総督に任じ、西園寺公望をつけ、長、芸、肥などの兵を発し、本営を柏崎におく。

十六日　三春藩離反。

二十七日　新発田藩離反。

二十九日　二本松藩落城。

八月に入って、

二日　相馬藩離反。

十一日　仙台藩相馬口駒ケ根で大敗、重大な戦局を迎える。

小笠原長行に従い会津入りをしていた唐津藩士に出兵の要請があったのはこの戦況を見て、会津本営の下した決断であった。

水野忠右衛門、高須大次郎、水野栄松、高須熊雄、吉倉冕三郎、西脇乾三郎、栗原仙之助、田辺鉄三郎、綿貫七之助、鶴岡健四郎、佐藤房太郎、香山五三郎、市川熊雄、宮川丈之助、山際平三郎の十五名が母成峠の戦いに参加した。戦いは激戦で八月二十一日、水野忠右衛門、高須大次郎、吉倉冕三郎、田辺鉄三郎、市川熊雄、綿貫七之助の六名が戦死。この人々の墓は会津大龍寺の異郷にあり、母成峠の石碑にもその名を刻まれている。

幕軍の大鳥圭介率いる部隊も転戦、各地に苦戦をつづけていた。「南柯紀行」にかれは言う。

二十四日、早起、余諸隊長と謀て曰く、今若松の危急を捨て不救は義を缺くべし、然れども兵隊の心も斯く迷亂しては用を為さず、又弾薬もなし、迚も此儘直に戦地に出づるとも甚心元なし、今より米澤に至り弾薬を借り、且彼藩とても同盟の隣国累卵の危に臨み之を救うの策あるべし、然らば之と共に謀らば弾薬兵糧の運輸も差支あるまじ、衆議如何と問ひしに、其策然るべしと決しければ、則ち出發の令を伝へたり

大鳥の麾下のあって参謀の新選組の土方歳三はこの期にやはり会津にあって、宇都宮戦では傷を負っていたが米沢に走り、また庄内に赴き、援兵を交渉するなど活発な行動をしている。

すでに西軍は二十二日、猪苗代を攻略し、十六橋を突破、二十三日には若松城下に迫っていた。

ここで「南柯紀行」に注目すべき記述をひろえる。

十二日、鳥渡を発し福島に至りたり小笠原侯、竹中春山並に第一大隊荘内兵隊出張せり、兵隊休息せしめ余は小笠原、竹中の本陣に至り、兼て熟考したる二本松侵撃を申渡せしに、（下略）

小笠原、大鳥の接触が注目される。わが小笠原長行が戦陣に活動している事実が明らかに読み取れるのだ。同じく会津に客萬の板倉、松平二侯の消息はいざ知らず、〝真勤王〟の意気地に生きる姿がここにある。

大鳥はこの時、落城の二本松奮還を提議しているのだが、すでに米沢降伏、仙台も国論変じ、謝罪の今は庄内も孤立の状態であった。

然る上は奥羽の藩一も恃むべきものなし、仙臺へは海軍着の由なれば仙臺へ行き、榎本其外に謀り力を合せ、事を共にする外策なし、此に於て暴動徒死するとも益なしと夫より愈〻議定して仙臺行の事に一致せり

十四日、桑折を発し、越郷の関門を通行して白石城に一泊す、余は兵隊の事を先づ榎本に談ぜんと翌拂暁會人成田某を伴ひて發し、急駕籠にて仙臺城下国分町なる榎本の旅宿に着し諸兵隊の事を談ぜし所承知、其餘は時勢の變換の世運を話し涕涙を催せり

（原文ママ）

会津藩主松平容保の決意の時が迫っていた。

（わが身はともあれ、客将の処遇をこのまま座視して死地に陥れることはできぬ、これまでの心入れは謝してあまりあるが、これ以上、ともに窮死を待つはとうてい忍びない）

苦衷のほどをを弟松平定敬に打ち明け、この期に際して、城を出て落ちのびて米沢に行けよ、という指示を伝えた。

「小笠原、板倉の両侯にはそなたから、しかるべく退去せられるよう申し伝えくれよ」

「いいや、それがし、すでに覚悟、兄上を見殺しにはできませぬ、退去なぞもってのほか」

「いや、会津の存亡はわたしがともにせねばならぬ、これも天命であろうよ、聞き分けてくれい」

骨肉の情、兄は弟を気づかい、弟は兄を気づかう悲壮を互いの胸に、兄容保はもはや籠城のほかなく、抗戦の陣頭指揮の意を決し、天主の楼上に弟を招き、訣別を促したのだった。

小笠原長行は大鳥と別れて、帰城していたが、すでに榎本艦隊への合流の腹を決めていた。

（もはや、連盟の一も頼むにたらず）

大鳥の下した結論に同調する腹だ。

「この上、逃れて蝦夷地に渡ってなんとされる」

「あくまで一義のため、が、なるようにしかなりますまい、ご貴殿もお覚悟の時ですぞ」

「危ういのう、どこまで行けば暗雲の晴れるものやらと、心細いかぎりじゃ」

板倉勝静の口からは愚痴がもれた。

「ご随意になされよ」

二人の会話はそこで終わっている。

（こちらの殿にお別れを申しあげよう、ずいぶんと心を労せられた、城地を守られることの難さ、心情お察し申しあげねばならぬ、せめて勇気づけの一言を）

長行は呟きを胸に、天主へ通じる冷えた欅の長廊下を歩いた。亡命いらいほぼ半歳の月日が流れている。

（この城が落ちれば、北国はやがては白皚々の冬を迎えよう、戦況はすでに一足早く冬に傾いておる）

残雪を踏んだ日が回想され、さすがに悲痛な感慨が胸に上った。

一方、そうした事情の中にも、唐津隊士八名は桑名兵百数十と合流、さらに庄内兵を加えて庄内に向かい、九月二十日朝にいたり、寒河江付近で新政府軍に包囲され激戦を展開している。圧倒的な西軍優勢に敗れ、この戦いで唐津藩士白水良次郎が戦死、桑名藩士の戦死者とともに同地寒河江の陽春院に葬られた。

九月二十五日、庄内が降伏、二十六日、桑名藩降伏に際し、唐津藩士の残る他七名も桑名隊とともに降伏、謹慎している。

長行は家臣二名を自分のもとに残し仙台に向かい、小笠原胖之助以下の二十三名を九月二十三日、急ぎ庄内に向かわせているが、すでに降伏の情勢を知り、断念の上かれらもまた仙台入りをしている。

新政府への軍艦引き渡しを拒否した海軍副総裁の榎本

武揚は奥羽列藩同盟を支援するため、艦隊を率いて八月十九日に品川沖を出港し、同二十四日より松島沖に結集していた。九月三日に同盟軍の軍議が仙台城にひらかれたが、盟主仙台藩はすでに恭順に傾いており、この軍議に参加していた土方歳三らの強硬意見は採択されず、翌日には米沢藩が降伏し、十二日には仙台藩も降伏を表明するに至る。榎本は仙台藩の降意の撤回を説得したが聞き入れられなかった。

大島圭介が榎本の来着を知って仙台へ急行したのは九月十五日で、石巻の豪商毛利家を宿舎とする榎本と会談している。土方歳三も同宿、同席していたと思われる。

（我儕（等）の如き無能者は快戦、国家に殉ぜんのみ）

土方歳三の語録に拾える一語である。三十五歳の生涯を戊辰戦争の渦中に捧げた人物の爽快な遺言だ。ここにこの際、宿舎まで土方を訪ねてきた医師鈴木良順に対し土方が明らかにした心境である。

鈴木良順は幕軍に身を投じ、負傷者の治療にあたり会津を経て、仙台まで来ていたのだ。かれは西洋医学を長崎でヘボンから学び、文久三年に西洋医学所の頭取を拝命し、将軍家の侍医ともなった人だが、元治元年ごろから近藤勇と交流し、慶応元年上洛した際には壬生の屯所を訪れるなど、新選組の理解者だった。土方を訪ねてきたのはそうした関係からであった。

「あなたのような学識のお人は死んではならない、これまで随分のお働き、心強くありがたいことでござったが、もはやこれより先はわれらにお任せあれ、江戸へお帰りになって、あなたなりに世のためお働きになられるのが良ろしいのでは……」

土方の心からの忠告であった。

鈴木は蝦夷地への従軍を断念し、勧告に従った。横浜に船行して縛についたが、明治二年十二月赦免され、後に陸軍軍医総監として西南戦争にも従軍している。明治四十年三月二十日に亡くなっている。

開陽を旗艦として回天、蟠龍、長鯨、神速、鳳凰、大江の七艦が折ノ浜（石巻）を出港したのは明治元年の十月十二日であった。ほぼ三千名が分乗したとされる。開陽の二千六百トンにくらべ大江は艦隊中わずか百六十トンという最小であったが、これに三百余名を乗せたというから、船内の混雑が想像される。

さて、ここで亡命藩主、それぞれ元老中の唐津藩小笠原長行、備中松山藩の板倉勝静の二人、それにいったんは兄松平容保の示唆に従い米沢に向かいながら、恭順に決した同藩の入国拒否に会い、仙台へ転進して来た桑名藩主、元京都所司代の松平定敬ら三侯を加えての乗船はおのおのの異なる藩情の微妙を見たのであった。

小笠原長行は家臣の随行二名を限られ、米渓彦作、尾崎俊蔵の二人を選び、小笠原胖之助ほかの二十三名は新選組に入って渡海することになった。

板倉勝静の場合はすでに艦隊に松山藩士九名が乗船し来たったことから、かれらに加え随従藩士で逃散後に残っていた三名を合流、辻七郎左衛門を勝静に従わせ、他の依田織衛ら十一名は新選組に加入渡海している。

松平定敬は名を一色三千太郎と改め、随従は三名までと限られ、成合清、成瀬杢右衛門、松岡孫三郎を選び、他の藩士十七名は新選組に入隊し、渡海している。他にここまで追尾してきた藩士約十三名はそのまま仙台で降伏した。なぜ定敬がことさら一色なぞと改めたものか、心情は明らかでないが、渡海にあたりそれまでの名誉を一切捨てるほどの意識によるものであったろうか。

旧幕軍とともに新選組が仙台に進駐したのは八月十六日のことだったが、会津では百三十名を数えた隊士は戦死や脱走、それに斉藤一ら二十名ほどが玉砕を主張して会津に残留したため、三十数名に減少していた。しかもなお土方はかれらに進退を選択させて、新たな決意をもって蝦夷地に向かおうとする者以外は無理を強いず、戦意の強固な者たちだけを残したのであった。が、いまここに渡海にあたり右の三藩以外にも諸藩の新手を加えて新選組隊員は百名を超える再生を見たことになる。

蝦夷地に向かう旧幕陸軍は新選組を加えて二千二百、旧幕海軍六百五十余名、合わせて三千である。

榎本とともに品川を脱した元フランス軍人のブリュネとカズヌーヴの二人を追って、フォルタン、マルラン、プッフィエという三人が合流を果たし、乗船していたのは異色である。かれらは明治二年になって合流するニコール、コラッシュ、プラディエ、クラトー、トリポーらとともに旧幕軍の軍事教師をつとめることになる。

回天を先鋒とし、殿を開陽とする艨艟七隻は十月十二日の正午近く折の浜を出発した。十三日宮古湾鍬ケ崎港に入り、南部藩主の便宜供与もあり兵糧、薪水を補給した。十七日、鍬ケ崎を出港。下北半島の尻屋崎を望んで北西に針路をとり、津軽海峡を渡り、四日を経て二十一日、内浦湾に入り、ようやく蝦夷地鷲野木村、鷲ノ木の港に艦隊は相次いで投錨を果たした。

（甲板上に出で四方を望むに積雪山を埋め海岸の人家も玲瓏として實に銀界の景を為せり）

大鳥圭介は実感をもってこう表現している。かれの文辞、はなはだ文学的である。

旧幕艦隊の鷲ノ木に集結、上陸の報はいちはやく五陵郭の箱館府に達しており、二十二日深夜には先発隊が峠下村で待ち伏せていた松前兵に襲撃されたが、大鳥軍はこれを一蹴している。ここで軍議によって二手に分かれて箱館に向かうことになった。大鳥隊は本道を土方隊は間道を川汲峠を越えて進軍することになった。唐津藩士の新選組は土方隊に属していた。川汲では敵兵の銃撃を

うけたが、松前兵わずか数名で反撃にあうと逃走した。両幕軍にとって大敵はむしろ寒さであった。

（袂も裾も皆凍りて薄板に等しく、これを畳めば折るるばかりなり「南柯紀行」）

二十三日、雨に濡れた大鳥はこう記す。

一方、間道の土方軍は海風にさらされ、川汲峠では腰までの深雪をかきわけて進まねばならなかった。

大鳥隊は大野村で戦い、圧勝していたが、唐津藩士を主軸とする新選組の戦場となった七重村では十月二十四日、蝦夷地守備軍により本道と山手から狭撃され苦戦となった。

この戦況を打開するため斬り込み隊を募ったところ、新選組嚮導役に任じられていた三好胖之助がこれを志願した。（この場合、小笠原胖之助がなぜ姓三好なのかという疑問を投げかけられるが、かれは三芳胖と名乗って新選組隊士に組み入れられていたのである。松平定敬が身分を秘して一色三千太郎を名乗ったのと同じではなかろうか。亡命者の肩身を狭くしての思惑に出たものかも知れない。）

この作戦は成功し、政府軍は退却した。しかし、果敢に斬り込んでいった胖之助（十七歳）は壮烈な戦死を遂げ、従臣の小久保清吉（二十二歳）もこれに殉じ戦死した。

蝦夷地へむけての再生新選組は一一五人とされるが、京都時代からの古参組は一七人、個別加盟や従士が三六人、藩別の集団加盟は桑名が二六人、唐津が二四人、備中松山一二人という内訳で、果たして組織への忠誠心はどうかという危ぶみを免れなかったが、胖之助らの働きはその懸念を一掃するものになった。しかも蝦夷新選組の戦闘はこれきり、箱館市中取締という任務に制約されて出撃にめぐまれなかった。土方のみが終始戦塵にまみれ東奔西走していた。

胖之助と清吉は七重村の宝林庵（現亀田郡七飯町宝琳寺）に葬られた。小笠原長行は大鳥軍の中にあったが鷲ノ木から箱館へ向かう途中、宝林院に立ち寄り、回向の手を合わせている。

（若いそなたたちを死に追いやったのはこのわたしかも知れぬ、許してくれ、戦の科じゃと言うにしても、あまりにも無情じゃ）

新しい墓標は積雪の中にあった。

二人の墓は唐津市の近松寺にも供養墓として建てられたものがある。宝林庵とこの近松寺の場合も胖之助の戒名は同じで、三好院殿儀山良忠居士となっている。清吉の方は近松寺で誠心院義峯信忠居士とあり、宝琳寺のものは誠心院忠山道孝居士となっている。また、清吉の場合はJR埼京線、板橋駅（東京都）東口の新選組殉難者墓碑にもその名を発見できる。

右の七重村での吹雪の中の乱戦の様子は（右を防がんとすれば左に迫り、是を防がんとすれば彼に迫る）『戊辰戦争見聞記』という桑名方の資料にも見られ、桑名隊はわずか十七名であったが、意を決し、全員銃を捨て、抜刀して敵陣に斬り込み、森陳明らの負傷五名を出した。うち一名は重傷のち死亡を記録されている。斬り込み隊の勇士は唐津藩士だけではなかった。

右の森は森弥一左衛門陳明（変名、森常吉、四十四歳）であって、桑名藩抗戦派の全責任を負って翌明治二年、十一月十三日、築地藩邸内で切腹している。

辞世の二首が次のように伝えられている。戊辰戦争の幕引に際し、見事な一人の士魂の呼びかけである。

嬉しさよ　尽くす誠のあらわれて
　君にかわれる　死出の旅立ち
なかなかに　惜しき命にありながら
　君のためには　何いとうべき

十月二十六日、大鳥軍がまず五稜郭に入城を果たし、夕刻までに土方軍も入城した。郭内は前夜までに守備兵が逃亡していて、無血の入城であった。五稜郭は幕末期に幕府が箱館奉行の庁舎としてオランダ築城書を参考に築造、元治元年に竣工された異風の近代城だ。箱館奉行は江戸後期蝦夷地の防備と支配のため置かれた遠国奉行で、はじめ蝦夷奉行、のちに箱館奉行として松前に置かれたが、五稜郭竣工とともに郭内に移されていた。

奉行の清水谷は吏僚とともに残軍に守られて、二十五日深夜脱出して、青森へ落ちのびていた。

五稜郭、弁天台場に幕府の旌旗の日輪旗がへんぽんとひるがえった、というから順逆を論じようとする立場の目には異様の風景を呈したと言えるのだろう。

時をおかず、土方隊は松前攻略に向かい、十一月五日松前城攻略。

松前侯は夫人方迄熊石村より日本船に乗り、近臣も之に従い出帆し、津軽の方に赴きし由なり、誠に気の毒の次第なり、後に残りし家来は五百許りにて其重立ちたる者を蠣崎衛士と曰ふ、悉く降参したれば松前に送り、謹慎せしむ「南柯紀行」

十一月十五日、軍艦開陽の砲撃援護をうけて江差を占領。ところが、ここで艦砲射撃を行った開陽は江差沖に停泊した午後六時より暴風が吹き荒れ、弁天島近く座礁して、数日後に沈没してしまう。救援に派遣された神速も沈没、旧幕軍は二艦を失う打撃をうけた。

全島の海陸軍之を聞き一駭一歎、膽を破り、肝を寒うし、切歯扼腕、涙を堕す許りなり「南柯紀行」

この艦艇を失った打撃は大きく、後に陸中宮古湾に集結した西軍艦船を奇襲、奪還作戦の冒険が企てられる。

十一月四日、英仏二国の軍艦が箱館に入港、榎本は両国の艦長、領事と会見し、覚書として榎本ら徳川の家臣

団を事実上の政権と認めるという内容に、榎本は感謝して、蝦夷地開拓と、徳川家血統のものを首長と仰ぎたい旨を両国を通じ、新政府に嘆願書を託しているが、岩倉具視に拒否されている。ともあれ、いち早く英仏が食指を動かし、早速、この北辺に来ている事実の抜け目のなさは驚くほかない。

十二月十五日、土方軍松前からの凱旋を迎え、蝦夷地平定の祝賀会が開かれている。弁天岬の砲台および五稜郭、ならびに軍艦、各国艦ともに祝砲各二十一発を放った。同じこの日、士官以上の投票選挙によって仮政権の諸役を決定。榎本釜次郎を総裁とし、海軍奉行荒井郁之助、陸軍奉行大鳥圭介。陸軍奉行並、箱館市中取締裁判局頭取を土方歳三といった顔ぶれであった。

明治二年の初春を迎え、注目すべき動きが桑名藩によって蝦夷地にもたらされる。

同藩の家老酒井孫八郎が前年のおしつまった二十九日蝦夷地に渡って来て、藩主松平定敬に恭順を説得するため、まず土方歳三に数次にわたり、粘り強く面談を重ねているのである。『酒井孫八郎日記』によれば一月一日を初回として四回におよんでいる。土方は相当わずらわされ、辟易したはずである。

「どうか、どうか、この老人に免じてお聞き届けを願いまする、衷心よりのお願いでござる」

「再三にわたり、お手前もご苦労に思われますが、そちらの殿様にもお考えがあって、われらに同心されての荷担でござるゆえ、いかがなものでしょうな」

「なにとぞ、ごもっともではござる、が、不肖ら家臣より翻意を願いまするは恐れあり、榎本総裁どのにもおとりなしの上、この期は他よりの退陣勧告を願いたいのでございます」

酒井が藩の命運を憂い、必死の思いで海を渡ってきた苦衷を土方も察することはできる。ただ迂闊にできぬことは隊の一角を崩し、連鎖を招くことは避けねばならないのだ。

「御意のほど、重々理解できます、が、ただし、御身の方の藩公お一人の問題ではあいすまぬ点を考えねばなりますまい、総裁に取り次いで高見を仰ぎましょう」

言を左右に度重なる訪れをあしらってきたが、土方はとうとう老人に言質を与えた。

このいきさつが幕軍に身を投じている備中松山の板倉勝静、そしてわが小笠原長行の二人の今後に流離定めなき運命の翻弄を招くことになるのだった。

蝦夷地の平穏は翌年三月までであった。

三月二日、新政府の艦隊甲鉄以下の八隻品川を出航。

三月二十五日未明、榎本艦隊はすでに江差沖に暴風下座礁で開陽ほかの二艦を失う傷手で、免れぬ劣勢を挽回するため、新政府艦隊が北上し、宮古湾に集結するという報せを得て、急遽、回天、蟠龍、高尾の三艦を南下させ、その停泊中の奇襲を企図した。しかし、またも折悪しく荒天に災いされ、回天一隻のみが宮古湾に突入し、政府軍艦隊のとくに主力艦「甲鉄」の奪取を計った。この艦はもとは幕府が購入契約をしていたものを、新政府側が手中にしていたものだ。回天は外輪船で平行接舷が困難の上に、甲板はかれより三メートルも高かったが、果敢に甲板を蹴って飛び降りる決死の戦闘を行っている。しかし、衆寡敵せず相手の肝を奪うこの作戦は失敗に終わった。わが国初のこの近代海戦には後に「Admiral Togo」として名声を馳せる東郷平八郎が軍艦「春日」乗組の三等士官として参戦している。

一方、新政府陸軍は青森に集結して諸藩兵を三軍に分けて四月九日、海軍とともに渡海、乙部に上陸し攻撃を開始した。総数八〇〇〇余、これに対する榎本軍は約三〇〇〇、戊辰戦争最後の決戦が開始される。

「土方くん、きみから話のあった、桑名の申し入れだが、この際退陣させてはどうか、桑名ばかりではない、あの方々を擁していてはむしろわれらの本意とするところを疑われよう、好んであの方々を戴いてきたわけではない、この蝦夷地に太平をひらくのは我々の手で力のかぎりを尽くすことにして、不要の足枷は脱却しようではないか、大鳥くんも異議なかろうと思う」

「よろしいでしょう、仙台を進発に際して、備中のごとき、家臣の倨傲は驚くばかり、（主君に従うものをなぜ乗せぬ）との居丈高に腹立たしき思いをした拙者なれば、家老の渡海、陳情もあり、異存はありません」

蝦夷地平定にこれまで不敗の功労をあげた土方歳三は新選組の土方というより、いまは全軍司令の立場にあり明日は知らず、「不敗神話」すら育てていた。

新政府軍来襲の報に事態は切迫、幕軍は迎撃態勢に入った。榎本の勧めもあり桑名の松平定敬はようやく箱館脱出を決意し、十三日、メリケン船で横浜に向かった。随従するもの、かの酒井孫三郎ほか三名で、二十六日、横浜に着いたが、定敬のみは降伏を潔しとせず、そのまま上海へ密航した。いったん上海へ渡った定敬は外国への逃亡をあきらめ、五月十八日、横浜へ帰ると、拘禁され、市ケ谷の尾張藩邸に護送され取り調べを受け、八月二十七日、神田橋の津（藤堂）藩邸に移され謹慎を続けた。晩年東照宮の宮司をつとめ、最後まで徳川家の藩塀としての役割を果たした。明治五年恩赦をうけたが、敗軍の将はなにも語らなかった。明治四十一年七月二十一日、六十三歳で没している。

「忠哉義哉桑名士民、守節取義……嗚呼忠節、永照千春」

撰文ならびに書を定敬とする招魂碑が桑名城の天守台跡に建てられている。節を貫いたを定敬の気持が集約されている。碑は青銅製の槍の刃先を模したものだ。

新政府軍の攻撃を迎えて、唐津藩士は弁天台場（箱館湾）の守備についた。四月二十四日、新政府軍は湾内の幕軍脱走軍艦を攻撃、箱館湾海戦が始まり、幕軍は回天、蟠龍の二艦および、弁天台場からの砲撃で応戦した。さらに四月二十六日、五月四日と新政府軍の襲撃は続き、五月四日の台場からの砲弾は新政府軍の主力甲鉄艦の帆柱と春日艦の艫に命中、七日には蟠龍艦は故障停泊しながら応戦、回天艦は一艦で応戦するも、被弾して運転不能となり、浮き砲台となって、台場とともに応戦した。

五月十一日、新政府軍は箱館を総攻撃、箱館港では蟠龍の撃った砲弾が新政府軍艦朝陽の火薬庫に命中、轟沈させた。しかし新政府軍は箱館市内を制圧し、幕軍は苦戦、湾内の回天、蟠龍の二艦も砲撃により全滅し、箱館海戦は午後四時頃に終わった。

五月十五日、弁天台場は五稜郭に先立ち降伏した。唐津藩の栗原仙之助が弁天台場で戦死、享年二十四歳の若さである。長行の従僕の小林幸二郎は降伏後病死している。箱館の称名寺の供養碑には両名の名があり、栗原の場合はJR板橋駅東口の新選組殉難者墓碑にその名を発見でき、また唐津市の法蓮寺にも葬られている。

板倉勝静の脱出は箱館を出港する英国船に乗船したのが二十三日、辻七郎左衛門ら六名が従っており、二十九日に仙台勝見浦に寄港すると、五月十日には積立丸に移乗して十三日夕刻に上総松部に着いた。さらに浦賀に入港してから小舟で鉄砲州に上陸、出迎えの藩士らと対面したが、ここで自訴を決意し、二十五日には駒込の吉祥寺に入った。翌日柳川藩兵に発見されたが、すでに自訴状を提出していたため、大事なく、六月二日、安中藩邸で謹慎を申し付けられ、明治五年赦免された。東照宮祠官などをつとめ明治二十二年四月六日、六十七歳で没している。

小笠原長行もまた明治二年四月二十三日、榎本武揚の勧めで板倉勝静とともに箱館を脱出し、江戸へ戻った。その後、渡米したように周囲を欺き、東京で約三年の潜伏生活を送った。明治五年自由の身となったが、生涯公の場には出ず、家臣とさえ没交渉を通し、明治二十四年六十九歳で没した。降伏した唐津藩士は青森に送られ謹慎、後、東京に送られ旧藩に引き渡され、明治三年にはほとんどの者が自由の身になった。

（H十二・九・二十七）

月の海辺の人形たち

森　実与子



まだ日没までには時間がある。

私たち——といっても二人だけなのだが——は、小さな公園で遊んでいた。

砂の塔を作ってはすぐに崩したり、鉄棒で逆上がりの練習をしたり、ブランコに乗ってはどっちがたくさん地面から離れるか競争していた。それからすべり台をすべり、コンクリートでできた怪獣の穴をくぐって、ひと通りの遊びを終わらせると、私はブランコに腰かけた。かなり疲れてしまったからだ。けれども同級生の山村京太くんは、まだ飽きもせずに遊び続けている。今度はジャングルジムに上りはじめた。

足元には、たくさんの落ち葉が積もっている。私はブランコに座りながら、その地面の落ち葉を足で踏みならして、一人遊びをした。葉っぱを落とした公園の木は、枝だけが伸びて、まるで丸坊主みたいだった。

そのとき、私の父（パパ）になる人が公園に姿を現した。

ここは山村くんと私の、二人だけの隠れた場所だったのに、父（パパ）になる人は、私たちの秘密の小道を見つけて、やってきたらしい。おそらく、道に迷ったのだろう。肥った大きな体を左右に揺らしながら、はあはあと息をきらしている。それでも何でも知っているといわんばかりの顔つきで、真っ直ぐに私たちのほうへ近づいてきた。

その顔には微笑が浮かんでいる。

「さあ、もういいだろう。出発する時間だよ」

父（パパ）になる人は、私に言いきかせるように言った。

「私たち、まだ遊び始めたばかりなのに……」

もっと公園にいたかった私は、嘘をついた。

「そんなことを言ってもダメだよ。服がすっかり汚れてるじゃないか」

嘘はすぐにバレてしまった。

「さあ、出かけるんだ」
父になる人は、さっきより強い口調でもう一度繰り返した。
「もっとここにいてはいけないの？」
「ダメだよ。今から出かけないと、日が暮れてしまうだろ」
「ねえ、山村くん」
私は、ジャングルジムの上を見あげて言った。
「私、出かけなくてはいけないの。お願いだから、下りてきてくれない」
彼は、一瞬、淋しい顔をしたようだった。
私は父になる人のほうへ向き直り、
「山村くんに、さよならも言ってはいけないの？」
と尋ねた。
「いいよ、早くしなさい」
「どこへ行くんだい？」
山村くんは、下を見おろして言う。
「知らない」
と答えたあとで、私は何だかぐずぐずしているのが嫌になって、思いきって、
「さよなら」
と言ってしまった。
突然のさよならに驚いたのだろうか、山村くんは身動きひとつしない。しばらくして、
「また帰ってくるの？」
と聞いてきた。
「一度さよならしたところへまた戻ってくるなんて、最低だと思わない？」
「……」
「もう二度と、このブランコにも会えないと思うの」
「手紙くれる？」
「いいわよ。ただ私、あなたの住所の綴りが書きにくくて。イタバシク・トキワダイ……」
これを機会に、なるべく彼のことを忘れようと思っていよく断ったつもりだったが、山村くんは諦めない。
「そんなのわけないよ。とにかく手紙だけでもくれよ」
「うん、いいわよ。……父になる人に綴りを教わるわ。あなたのお母さんに、〝おむすびありがとう〟って伝えてね」
心とは裏腹の返事をしていた。
山村くんとの別れは名残り惜しいけれど、私は服の汚れを落として、出かける支度をはじめた。
ジャングルジムの真ん中あたりに、山村くんだけがポツンと残った。
「やっと慣れた生活から、瑠里を引き離してしまうのはイヤなんだが。残念だけど仕方がないんだよ」
父になる人は、私たち二人に対して、ちょっぴり申し訳なさそうな顔をした。

「今まで私、山村くんみたいなボーイフレンド、持ったことがなかったんだもの」
私は素直に、自分の気持ちを言った。
「わかってるよ、瑠里」
「僕も、瑠里ちゃんと一緒に行ってはいけないかな」
ジャングルジムから下りはじめた山村くんは、独り言のように呟く。
「君のお父さんやお母さんは、それじゃあ困るだろう」
「お母さんのほうは、喜ぶかもしれないけど……。お母さんは、僕が五才の時に家に来たんだ。僕は来年の八月で九才になるんだよ」
「いいわ。それなら私、山村くんのパパに、私たちと一緒に行っていいでしょうって、頼んであげる」
「いけないと思うな、それは」
と、父になる人は反対する。
山村くんは、もう地面に下りてしまっていた。急いで下りてきたせいか、ただでさえ丸い顔が、赤く染まってりんごのように見えて、私は一瞬、吹きだしてしまった。
「本当は、瑠里たちを一緒にさせてやりたいんだが……」
そういいながら、父になる人は山村くんの肩に手をかけた。
「去年の今ごろ、僕のクラスに瑠里ちゃんが転校してきました。すぐに仲良しになったけど、二年生になってすぐに、瑠里ちゃんと僕、大ゲンカしたんです。僕が他の女の子とばかり喋っていると言って、瑠里ちゃんは凄い顔をして、僕の頬っぺたをぶったんです。それから何日も、僕たちは口をきかなかった。けど、結局引き分けになって、それから恋人同士になったんです」
山村くんは父になる人に、私たちのことを正直に告白した。
「ケンカするほど親しいんだね。……もっといつまでも、仲良くしてもらいたかったんだけどね」
父になる人は、残念そうな顔つきだった。
「瑠里ちゃん、僕のお財布あげるよ」
山村くんは、ジャンパーのポケットから小さな黒い皮の財布をつまみだして、私の目の前に差し出した。
山村くんのお財布は、手触りがよさそうな柔らかい皮でできていた。私はそれがむしょうに欲しかった。だって、山村くんとはもう二度と会えないかもしれないけれど、この財布を持っていれば、いつでも山村くんを思い出すことができると思えたからだ。
なかには、あまりお金が入っていないことはわかっている。けれどもそんな理由からじゃなくて、もらうわけにはいかなかった。死んでしまったママから、人には物をやらなければならないけれど、人が物をあげるといっても、決してもらってはいけないと、強く言いきかされていたからだ。
「それは山村くんの大切なお財布だもの、もらうわけに

はいかないわ」

今度は私が、胸元にたらしていたハートのペンダントを首からはずして、山村くんに差し出した。

ママが私の六回目の誕生日に買ってくれた、記念の品である。

「これ、本物のシルバーのペンダントよ」

私は、山村くんはこれを受け取ると思っていた。なぜなら、山村くんはこのペンダントが大のお気に入りで、いつもペンダントに触れさせてくれと言っていたし、ある時など、一晩借りていったこともあるからだ。

それなのに、私が首にペンダントをかけてあげようとすると頭を横に振り、私のせっかくの好意をかたくなに拒んで、このペンダントをただじっと見つめているばかりだった。

（相変わらず意地っ張りだな。こんな最後の別れになってまで、お互いに意地の張り合いをしても仕方がないのに……）

でも私は、山村くんの振る舞いを善意に解釈することにした。

きっと彼のお父さんも、人に物をやったりもらったりすることについて、私のママが言ったのと同じようなことを、教えているにちがいない。だから受け取るわけにはいかないのだろう。

「いや、いいよ」

彼は、最後にポツンと言った。

私たちの様子を黙って見ていた父になる人は、ニコニコと笑いながら、ズボンのポケットから大きな財布を取り出した。千円札を二枚つまみ出して、山村くんが手にした財布に、一枚を小さくたたんで入れてやった。それから私の手を取って、もう一枚の千円札を握らせてくれた。

やがて父になる人と私は、秘密の公園に別れを告げ、隠れた路地を歩いた。それから見慣れた家々や店の前を通り過ぎ、大通りを横切って、私たちが住んでいるアパートへ向かった。てっきり山村くんも一緒に歩いてくると思っていたのに、ついてこなかった。

後を振り返ると、彼がまた、ジャングルジムに上っていくのが見えた。

アパートの前には、父になる人の車が置いてあった。私が遊んでいる間に、父になる人は一人で出発の準備をしたらしく、緑色の車は、ピカピカに磨かれている。それを見て私は、この町ともとうとうお別れする時が来たのだと、観念した。

父になる人にうながされて、私は車の助手席に座った。

父になる人も運転席に座るとすぐにエンジンをかけ、車は静かに動きはじめた。

「さあ、いよいよ出発だ。長い旅になるぞ」

「もう一度、公園と山村くんを見たいな」

車を走らせて公園のそばを通り過ぎた時、私は空を見あげた。

山村くんは、さっきジャングルジムに上っていたときより、ずっと上のほうにいる。

「さようなら、ヤ・マ・ム・ラ」

私は車の窓をあけると、身を乗り出して手を振り、大声で叫んだ。

山村くんも、手を振っている。何か叫んでいるみたいだけど、私には何も聞こえなかった。

時計を見ると、夕方の五時だった。

私たちは、こうして新しい旅に出かけた。

私はこれが本当に最後だと思って、遠ざかって行く公園のほうをもう一度振り返った。

車の窓から見えるジャングルジムと、その後ろに沈んでいく夕陽と、まだ手を振っている山村くんの姿は、一枚の写真のようにじっと動かなかった。夕陽の影になって、山村くんの表情は、笑っているのか、泣いているのかよくわからない。

……その姿も徐々に小さくなり、やがて私の目の前から消えていった。

「本当にかわいそうだな」

父になる人はポツリと言う。

「大丈夫よ……」

私は答えたが、恐らく声はうわずっていたと思う。

父になる人は、私の身体に手を回しただけで、何も言わなかった。

私は、もう少しで泣き出しそうになっている自分に腹が立った。

父になる人は、私という八才の子供がつきまとっていることで、ありあまるほどの苦労をしているだろう。だから私は自分を押さえつけ、涙をこらえた。

助手席にいると、父になる人に胸の内を知られてしまいそうな気がして、私はフロントの席をまたいで後の座席へ移った。何だか、急に力が抜けてしまい、座席に横になって思いきり身体を伸ばした。

父になる人がラジオをつけると、外国の男の歌手が、淋しいメロディの曲を歌っている。それを聞きながら、私は自分に言い聞かせた。

「そうだ、きっとどこへ行ったって、淋しくない人間なんて、世の中に一人もいないのだ」

と。

そのあとで、日本人の女の人が、自分を騙した男のことを歌っていた。

それはお金とかで騙されたわけではなく、何か他のやり方で騙されたらしい。女もまた、淋しそうに歌っている。

また私は、自分に言い聞かせた。

「この昔からの世界は、絵本に書いてあるような、楽しいオトギの国ではないんだ。本当に淋しい、一つの大きな世界に違いない」

と。

私はフロントの席へ戻り、父になる人の横に戻った。

しかし父になる人は、口をきいてくれなかった。私も何も喋らなかったから、しばらく沈黙が続いた。でも高速道路へ入った時、父になる人はやっと口を開いてくれた。

「おなか、減っただろう。後の紙袋の中に、食べ物があるよ」

「一緒に食べるから、今はまだいい」

「私は、タバコで食欲がなくなっているんだ。でも瑠里はタバコを吸うわけじゃないから、私を待ってなくていいよ。私は、まだなかなかおなかは減らないよ」

それでも私は、父になる人がおなかの空くまで、待つことにした。一人だけ食事をしても、少しもおいしくないだろうと思えたからだ。

今度はラジオに、一人の男が出てきた。

漁船が外国の船から威嚇射撃されたことを。ひどい訛りの言葉で話している。父になる人と私は、おしゃべりをやめてその話に聞きいった。

「イカク射撃ってどういうこと?」

「脅かすために、射撃したんだ。だからミサイルは船を直撃したわけではなく、海に落ちたんだよ」

「じゃあ、間違えて船に届いてしまうこともあるの」

「うん、運が悪ければね」

「ああ、怖い」

私は身震いした。思っただけでも恐ろしいことだ。射撃されなかった人たちは、当たり前のことだが、運のいい人である。父になる人が、そういう目にあうことはないだろう。私もこの通りだ。それは本当にうれしいことだ。私たちは、誰にも束縛されなかったし、なにものにもとらわれていなかった。

一分前までは、出かけることで胸がふさがれる思いだったけれど、今はこうして出かけて行くことが、うれしいほどに感じられた。

「ラザニア……」

これは、父になる人お気に入りの、私の呼び名である。私は父になる人を、T・Qと呼んでいる。

父になる人は私の首筋の後ろに手を回し、指に力を込めてもんでくれた。

私たちは、楽しく車を走らせながら、旅を続けた。

私は、この次はどんな土地で暮らすことになるのか、本当はちょっぴり不安だった。そこには、どんな人たちがいるのだろう。どんな学校に通うのだろうか。ひどい訛りの言葉だろうか。でも、そんなひどいこともないとは思うけど……。

私は、一人で先のことを考えはじめた。その時ふと、ジャングルジム上にいる山村くんの姿が、思い浮かんだ。

もう、ジャングルジムの遊びはやめただろうか。それとも、まだ一人で遊んでいるのだろうか。思い返してみると、山村くんは、今まで私が生きてきたなかで、一番いい仲間だった。数えきれないくらいの回数、山村くんとは一緒に遊んだ。公園は、私たちの庭だった。彼のことは、当分の間忘れることができないだろう。いや、これから先もずっと、決して忘れることはないと思う。

「ところで……」

父になる人は、突然真面目な質問をしてきた。

「瑠里はどう考えているんだ。つまり、私がママと知り合ってからの三年間、私たちは、一か所に落ち着いて暮らしたことがなかったね。そのことを、どう感じていたのかい」

私は、父になる人が何を言っているのか、ちょっと理解できなかった。

そこで、

「でも、落ち着いて家のなかにいるより、この車のなかのほうがおもしろいよ」

とあてずっぽうにいった。

「瑠里は、車なしじゃいやなんだろう」

「わかんない」

「車がなければ、列車かバスで旅しなければならない。そうしたら、自分の車で旅をする半分も面白くないからだろう」

「そうね」

はじめの質問からは、だいぶはずれてしまったみたいだ。

父になる人もそのことに気づいたらしく、すぐに、

「でも瑠里は、二年でも三年でも、ひとところに落ち着いたほうがいいんだろう」

と聞いてきた。

「多分そうみたい」

私は答えた。

「学校のことかな。転校は、今度で二度目になるからね」

「それもあるけど……」

「すまないね。小さい町は、いやかい」

「よさそうな町なら、どこでもいいわ」

「本当は、八戸へ行くのは、イヤなんだろう」

私は、その質問には直接答えなかった。

「そこには、どんな人たちがいるの? T・Qのお父さんやお母さんがいるの?」

「いや、誰も知った人はいないよ。私が子供の頃、ほんのわずか住んでいた町だからね」

「お仕事、どうするの?」

「私は、日本中、いや世界中どこへ行っても仕事はでき

るよ。文章を書く仕事だから、むしろ一つのところに住むよりも、いろいろな場所で暮らした方がいい」
「その町は、ここから遠いの？」
「そうだな、腰が痛くなるほど遠いかな」
「ずっと走りつづけるの？　それとも、どこか泊まりながら行くの？」
「どっちでもいいけど、走り続けると瑠里がたいへんだろう」
「私は平気よ。……そうだな、海を見ながら行きたいわ」
高い塀に囲まれて景色の見えない高速道路を走るより、田舎の道を、父になる人と二人でゆっくり旅してみたかった。いやそれよりも、見知らぬ土地で新しい生活をはじめることが、ほんの少し怖かったから、海が見たいと言ったのだ。
父になる人は、そんな心細い私の気持ちを察したのか、
「瑠里は、海が好きなんだね。じゃあ、高速道路を下りて、国道を走って行こう」
と答えてくれた。
そして早速、次のインターチェンジで高速道路を下りた。
混み合っていた高速道路とは違って、町はずれの国道には、数台のトラックしか走っていない。薄闇のなかに、ところどころ畑のような広がった土地が見える。薄暗い空には、何かの鳥が、二、三羽とてもゆっくり舞っていた。
まもなくほとんど真っ暗になって、まわりの世界全体が、静かに遠のいたように思われた。
……それからまた一時間ほど車を走らせた。
「外を見てごらん。海の近くを走っているよ」
回りの闇が、海だということがわかった。車の音で気づかなかったけれど、耳を澄ますと、微かに、寄せては引く波の音が聞こえてくる。
「夜の海を見るのは、生まれてはじめてかもしれない」
私は思わず、そう口にしていた。
「T・Qもおなか空いたでしょ。ひと休みして、夕ご飯にしようよ」
私たちは国道をはずれて海岸近くの細い道に入り、堤防近くの自動販売機の前に車を止めた。
二人で外に出て缶ジュースを買い、それから、食べ物のはいった紙袋をコンクリートの堤防の上に乗せて、中身を取り出してみた。
フランスパンが一本、ハム、チーズ、おにぎり、ミカン、紙箱のコーヒー牛乳。袋の中身を、私は欄干の上にきれいに並べた。私は喉をならして、コーヒー牛乳と缶ジュースを一気に飲み干した。飲み終わってから、喉がカラカラだったことに気づいた。それからおにぎりをほおばった。かなり空腹だったらしい。
父になる人は、チーズ全部とハムと、フランスパンのほとんどを食べてしまった。
最後に二人で、ミカンを一個ずつ食べた。
おいしい晩ごはんだった。
なにしろ、どこまでも広がる海を目の前にして、波の音を聞きながら、食べ物をほおばることができたのだから……。
気がつくと、夜空には星が輝き、真ん丸い月も顔を覗かせている。
「私は小さい時から、どこでも暮らせるように生まれついたんだ」
父になる人は、まだ口をもぐもぐさせながらいう。
「私はこれまで、生まれた土地からあんまり離れたことがなかったみたい」
「東京は途方もなく大きい街にちがいないが、人間はいろんなところに出かけて行って、ほかの世界も眺めてみたくなるものだよ」
父になる人は、遠く、海の彼方を見つめている。夜の漁に出かけた漁船なのか、ところどころ、キラッと光るものがある。
知らない世界へ行くのはとても不安なことだけれど、こうして星や月や海に囲まれて夕食を食べるのもはじめてのすてきな経験だし、父になる人がそばにいれば、きっと新しい生活がまた楽しくはじまるのだろうと、予感できた。
私たちは車へ戻り、再び走りはじめた。
車はいいものだと、私は思う。
早くでもゆっくりでも、自分の思うところへ連れていってくれるからだ。
私たちは、時には百キロ以上のスピードで、車を走らせることがあった。もっともそんなときは、ほかの車が全然走っていない時か、道路がまっすぐで平らな時の、ほんの二、三分だけだった。
また私たちは、ほとんど人間が歩くほどゆっくりのスピードで、車を走らせていた。その時は、道路標識に記されていることを、なにもかも丁寧に眺めることができた。
父になる人がこの車を買った時、私のママとパパは別居した。
その時は、パパのお母さんも生きていた。私の本当のパパとママ、そしてパパのお母さんが一同に集まって、ママの言葉を借りれば、理性的に問題全般を話しあった。協議しなければならないことは、山ほどあった。一番大きな問題は、私が、ママとパパ、どちらと一緒に住むかだったようだ。
パパはあまり喋らない人だったし、大体、会社の帰りが遅くて、夕ご飯はいつもパパのお母さんとママと私の

三人きりだった。パパのお母さんは滅多に笑うことがなくて、いつもめまいがするとか、心臓がドキドキするとか、腰が痛いとか、自分の体のよくないことばかりを一人で喋っていた。そんな話を聞かされても、ママも私もちっとも楽しくなかった。そのことをパパに訴えても、パパはいつも、

「気に入らないのなら、出て行け！」

というだけだった。

パパは、ママと私よりも、自分のお母さんの方が大切だったらしい。

結局、私はママと一緒に暮らすことに賛成したし、パパのお母さんは、パパと暮らすことに賛成した。こうして、万事紳士的に、立派に話がまとまった。反面、少しは変にも感じたし、悲しくないこともなかった。

ママは私を抱き、私たちの荷物を詰めた大きなスーツケースを持って、パパとパパのお母さんにさようならを言った。多分、めいめいが六回か七回ずつ、なにかブツブツ言ったみたいだった。

ママは最後に、鉄でできた重い門の扉を、思い切りバシャン！　としめた。

ママと私は、さっと微笑をもらして抱き合うと、晴々とした気分になって駅まで歩き、父になる人と、中古自動車を買うために落ち合ったのだ。

私たち三人は、いくつかの車屋さんを回って、たくさんの車を見たけれど、始終、ゲンゴロウ虫みたいな不思議な形をした、この古ぼけた車のところへ戻ってきた。

父になる人の説明によれば、これに乗る人は頭が良く、私たちが持つのにふさわしいものだそうだ。つまり、経済性が良く、丈夫で、流行の型を追わなくてもいい、不変のスタイルだと言うのだ。

「それに緑色だろう。この色は、世の中で一番生き生きしているんだ」

そんなことが何に関係あるのか、私ははっきり理解できなかった。けれども、それはきっと、何か大事なことに関係するのだろうと、思いこんだ。

父になる人は車を外からじっと眺め、運転席に入り込み、ハンドルを動かし、エンジンをかけて耳をすました。

「うん、なかなかいい音だ。調子がいい」

そしてまた外に出て、全体や各部分を眺めた。

車のフロントガラスの張り紙には、五十四万円と書かれていた。父になる人は、お店の人と話し合って、五十万円でその車を買った。

今からおよそ三年前の、十一月のことだった。

それ以来、父になる人はその車に乗って、ママと私の住む小さなアパートに通い続けた。

三ヵ月たったある日、ママは私に、正式に離婚の手続きを済ませてきたという話をした。そして六ヵ月たったら、ママは父になる人と再婚するので、準備をすすめているといった。

一体、別居とか離婚とか再婚とかいうようなことは、どれもこれもどういう意味があるんだろうか。私にはよくわからなかったけれど、考えてみたところで、答を出すのはきっと難しいのだと思う。

私は、父になる人にそのことを尋ねてみた。

父になる人は説明しようとするけれど、すぐほかのことに話題を変えてしまうように、私には感じられた。

時々、ママと私は大声でケンカをした。お引越しがいやだと私がだだをこねた時、ママは、私がパパのところで暮らしたければ、いつだって、パパとそのお母さんのところへ連れてってやるといった。でも私は、父になる人と緑色の車のそばにくっついていたいと、泣きながら訴えた。

私は、ひょっとして、父になる人がママにそんなことを言わせて、私を手放したがっているのではないかと、疑った。もしかしたら、そのうちに弟か妹が生まれるかもしれない。新しくきょうだいができるのは、一人っ子の私にとってうれしいことだけれど、そうなったら、父になる人とママは、私が邪魔になるのではないか……。そう思うと、怖かった。

そこで三日三晩考えた挙げ句、勇気を出して尋ねてみた。父になる人は、私がママと一緒に暮らすのを、本当に望んでいるのかどうかと。

父になる人は、私の質問に答ようとするのに、一、二分手間取った。

「一つだけ、瑠里に知っておいてもらいたいことがある」

父になる人は、やっと喋りはじめた。

それから、質問の答とは違ったいろいろなことを、百ほども話した。しかし私は、その話が、結局どういう意味になるのかわからなかった。

だけど、たった一つだけ、わかることができた。父になる人は、私がママと暮らすことを、真剣に望んでいたということである。ママが、私のような小さな子供を見捨てずに連れてきたことが、かえってママを好きになった理由だというのだ。

その後、私もずっと元気になって、どんなことが持ち上がろうと、父になる人がママや私を厄介がっているなどとは、決して思わなくなった。

でも時がたつと、私たちはまた言い争いをした。

ある時など、父になる人は私に本気で腹をたてて、どなりつけた。何が原因でそうなったかは忘れてしまったけれど、父になる人が、私を厄介者に思っているわけではないことは、はっきり理解できた。

私が知る必要のあったのは、そのことだけだった。

三ヵ月前、ママが死んだ。

その日は一日中雨が降り、むしむしとした、ただでさ

え気持ちの悪い日だった。
ママは朝から、頭がくらくらして気分が悪いと言っていた。そして台所で夕食の支度をしている最中、突然、床に倒れた。「ドスン」と物凄い音がして、ママの手伝いをしていた私は、はじめ、何が起こったのかわからなかった。でもママはそのまま床から起き上がることができず、話しかけても何も答えてくれなかった。父になる人と私は、急いで救急車を呼んで、ママを病院へ運んだ。
しかしママの頭の血管はプツンと切れてしまい、もう二度と帰ってこなかった。
父になる人と私は、一晩中泣き明かした。それまで父になる人は、私の前で、一滴の涙も見せたことはなかったのに、この時だけは違った。私は、涙のなかに身体中が埋もれてしまうくらい、たくさん泣いた。
二人の涙が出尽くしてしまったあとで、私たちは指切りをした。もうママのことで、泣くのはよそうって。
父になる人とママと私の三人の生活は、ほんの短い間だったけど、心の底から楽しかった。ママは、パパと暮らしているときとは人が変ったように、明るくなった。始終ニコニコしていたし、ときには声をたててケタケタ笑い、心のそこから嬉しそうだった。
ママが死んでから、そんなママの姿を思い出すと、私は父になる人の前でママとケンカしたことが、悔やまれた。そんな時はいつも心のなかで、
「ママ、ごめんね」
と呟くようになっていた。
学校では、いろいろなことをたくさん教わった。でも、私が父になる人から教わったことに比べれば、足元にも及ばなかった。それは父になる人が、多くの本を読んでいたからだ。
父になる人は家にいることが多くて、いつも机に向かって書きものをしては、声を出して本を読んでいる。そして古い言葉も新しい言葉も、自分で作った独特の言い方で読んでいた。だから私も、その本の内容がわかるわけだ。
とりわけ、宇宙の話が得意らしい。
「ラザニア、私たちが生きている世界は、どうやってできたと思うかい？」
「神様が作ったの？」
私が首をかしげると、父になる人は得意気に説明しはじめた。
「いや、この世界は爆発から生まれたんだ。宇宙にはまず最初、水素の原子というものが、雲のように漂っていたんだよ。それがなにかの拍子で大きな爆発を起こして、地球のような星が無数に生まれた。だからこの宇宙には、百億の百億倍……、いや、私たちに計算できないほど数多くの星がある。それらの星は、何十、何百、何千億年

もの長い長い時間をかけて出来あがっている。つまり、この宇宙は気が遠くなるほど広大で、いま夜空に見える星は、実は何万光年も昔の姿なんだよ」
私にはちんぷんかんぷんだった。
「私たちは時間の中で生きているけれども、その時間は、過去、現在、未来と一方的に流れていくから、止めようがない。どんな人間でも、生まれて成長して年をとって死んでいく。時間ほど、残酷で容赦ないものないだろう。だけどね、私たちの生きている空間というものは、自由自在なんだ。縦、横、斜め、飛んだり、跳ねたり、落っこちたり、どう動こうと自由だろう」
「いいかげんなことを言っているんでしょう」
「ほう、いい言葉を知っているね」
「いい言葉？」
「〝いいかげん〟っていうのは、すばらしいことなんだよ。瑠里だっていつも使っているじゃないか。ママに〝お湯の湯加減は？〟って聞かれたら、瑠里は〝いいかげんよ〟って答えるだろう」
私は、話の意味がわかったようなわからないような、キツネにつままれたような気持ちにさせられる。それでも私は言った。
「いろいろなことを知っているのね。学校の先生より、ずっとすごいよ。まるで博士みたい」
「博士？　……そうだね、さながら私は低級博士だろうか」
「低級？……テーキュー、ティーキュー。そうだわ、今度からT・Qって呼んでいい？　低級博士の略でT・Q」
「ふむ、なかなか面白いことを考えるじゃないか」
「ママから、英語のアルファベットを習ったばかりなんだもの」
「うん、T・Qね。簡潔だし、なかなかいい響きだ」
こうして、父になる人の呼び名は、T・Qに決まったのだ。
「話を元に戻すとね、宇宙や人間の誕生は、とても神秘的なでき事だけど、一番不思議なのは、この地球上にはたくさんの国があって色々な人たちが生きているのに、よりによって私たち三人がこうして出会い、一緒に暮らしていることだと思うんだ。宇宙とか地球とか科学的なことも、結局は感情でしか計れないといわれているんだよ」
そして、父になる人は、小説や映画のなかに出てくる人間と実際の人間、――たとえば、父になる人やママや私のような人間――との違いを、説明してくれた。算数も理科も苦手な私だけど、この話だけは、大体わかったような気がした。
どんな小説に出てくるどんなことでも、結局は、みな私たち三人の話らしい。
登場人物は、男の子と女の子しかいない。それが年寄

りか、それとも若いか。幸福であるか、それとも不幸か。ここにいるか、それとも遠いところにいるか。善良であるか、それともひどい人か。賢明な人か、それとも愚鈍な人か。幸運な人か、それとも不運な人か。美しい人か、それともブスか。あるいはそれらがみんなごちゃまぜになっているか。小説のなかと私たちは、たったそれだけの違いがあるに過ぎないというのだ。

ママがいなくなってから、父になる人は、一度だけ烈火のごとく怒ったことがある。

二人で、夕食を食べていたときのことだ。

ママがいなくなって、私たち二人は、ぽっかり穴があいたみたいにしおれてしまった。それでその晩は、父になる人が奮発して上等の牛肉を買ってきてくれた。私たちはアパートの部屋で鍋を囲んですきやきを食べ、父になる人は、かなりビールを飲んでいた。

「ねえ、ママを殴ったことがある？」

私は何気なく、父になる人に尋ねた。

「どうして、そんなことを聞くのかい？」

父になる人は、いつも通りに笑いながら答えた。

「ただなんとなく、聞いただけ……」

けれども、気まずい空気が流れてしまった。父になる人の顔から笑いが消え、一瞬、凍りついたような表情を見せた。そして、グラスについであったビールを一気に飲みほすと、

「私が殴ったから、ママが死んだというのかい」

強い口調で言い、私を睨んだ。

「そんな意味じゃないよ」

「私がそんなことをするわけないじゃないか！」

そう言うと空になったグラスにビールをなみなみとつぎ、そのグラスを強くテーブルにたたきつけた。グラスは割れて、テーブルの上にはビールが飛び散り、金色の液体と白い泡が、どくどくと流れて床にこぼれ落ちた。凄まじい剣幕だった。やがて、父になる人は黙って自分の部屋に戻り、いびきをかいて寝てしまった。

病院の先生に、私はあることを聞かれていた。

ママの遺体が病院のベッドに静かに横たわっているとき、病室には先生と私しかいなかった。父になる人はたまたまその場にいなかった。そのすきに、先生の方から私に質問してきたのだ。

「ママは最近、転んで頭を地面にぶつけるとか、怪我をしたことはなかったかな？」

「……」

私は首を横に振った。

「ママは、頭をぶつけたり殴られたりすることが原因で起こる突発的な病気だったんだよ。きみのママも、何かそういうことがあったのではないかと思ってね」

「先生、病名はなんというんですか」

「硬膜下血腫といってね、発見が早ければ助かった……。まだ若いのに、残念なことをしたね」

「コウマク……、ケッシュ……」

難しい病名で、私にはとても覚えられなかった。

私の知らないところで、ママは怪我をしたのかもしれないし、父になる人とケンカをして、頭を殴られたのかもしれない。私にはわからなかった。

でもこの夜の父になる人の様子から、本当は、ママはこの人に殴られたのだと感じられた。ママを殴っていないのなら、せっかく楽しく食事をしている最中に、怒ることなどないはずだ。しかしだからといって、ママはもう帰ってこない。

私たち三人の出来事は、小説のなかのお話と同じだと、父になる人自身が言っている。だからママの死の本当の理由は、案外、こんなことかもしれないと思えた。

でもこの秘密は、私の胸の内にしまっておかなければならない。

とにかくまだ子供の私は、今は、父になる人にしがみついていないと生きていかれない。時々怖い顔をして怒るけど、本当のパパよりずっと話は面白いし、愉快で楽しい人だ。人のいやな部分や悪いところは、その人のごく一部分だ。いいところを見落として悪いところだけを大きく見て、いやな人だとか嫌いだとか、決めつけてしまうわけにはいかない。いいところも悪いところも含めて、その人の全体を見なければいけないのだ。

その証拠に、すごい剣幕で怒った翌日、父になる人は前夜の出来事など忘れたかのように、ケロッとして、普段通りに私に接してくれた。おそらくこんな人は、世界中探し回っても、なかなかいないだろう。本当のパパは、私よりも自分のお母さんを選んだ。血はつながっていなくても、父になる人は私を選んでくれたのだもの。

大人になるまでは、私は、この父になる人のそばにくっついているしか、生きていく方法はないのだ。

父になる人の隣に座って、あれこれ思い出に浸っているうちに、私は急に眠くなって寝こんでしまったらしい。

東京を抜け出て、どこかの土地を走っていたことはわかっている。

ただそれだけだった。目をさましたら、夜が白々と明けはじめていた。

夢を見ていた。

ママと山村くんが、公園で遊んでいる。私は二人と一緒に遊びたくて、近づこうとするのだけれど、どうしても近づくことができない。そのうちに日が暮れてきて、ママたちの姿が、燃え尽きたロウソクのように、プツンと消えてしまった。あとは真っ暗闇で、何も見えなかった。ただ自分の姿だけが、闇のなかに浮かんで見えた。

懐かしい夢だと思った。

何年も前の、いや、私が生まれるずっと前からの、夢の続きのような気がした。

父になる人は、私の顔を見て、ニコッとしながら言った。

「おはよう、ラザニア」

今、どこを走っているのかわからなかった。しかしどこであろうと、本当にすばらしい景色のところだった。

一方には大きな木が茂った山が迫り、反対側には、大海原が広がっている。そして海の彼方では、今まさに太陽が昇ろうとする瞬間で、海はうっすらとオレンジ色に光っている。私が八年間生きてきたなかで、これほど美しい朝を迎えたことはなかった。

父になる人は、タバコを取り出して口にくわえたが、カーブが多くて、ハンドルから両手を離せない。私はライターを取り出して、火をつけてあげた。

「ありがとう……」

その声はなんとなく弾んでいたが、目は赤く充血していて、白髪混じりの髪は、ボサボサだった。私は、父になる人が一睡もせずに走り続けたのだと思って、なんだか、かわいそうになってきた。

「どこかに止めて、休みたい……」

私は言った。

海の見える道路の、脇の空き地に車を止め、私たちは外に出た。

海は海らしくどこまでも広く、静かでおごそかだった。

父になる人は、車のそばで柔軟体操をはじめた。私もすぐに、それに習った。私たちは、普段から、柔軟体操が体にとてもいいものだと思っていたから、屈伸運動やストレッチはお手のものである。ともかく、健康になるにはお金は一円もかからないのだ。

柔軟体操のあとで、私たちはオシッコをした。

「ラザニア、おまえのこれからの世界には、健康ほどいいものはないぞ」

父になる人は、「将来」というかわりに「これからの世界」と言った。

こういうふうに、父になる人はいつも自分で作った言葉を使うけど、とにかくとてもいい言葉だと思う。

体操のあとで、私たちは車に乗り、ちょっと腹ごしらえをするために、町のほうへ車を走らせた。車のなかには、食べるものはもう何も残っていなかった。

父になる人の言葉によれば、今私たちがいる場所は、盛岡の十四キロ手前だと言う。

ゆっくりと車を走らせると、行く手にレストランと売店とガソリンスタンドを兼ねた店がみえてきた。

車にガソリンをいれている間に、私たちはレストランで朝食をとることにした。

「簡単なものをたべよう。八戸に着いたら、名物のサザエを盛ったウニ丼を、たっぷり食べさせてあげるから」

そんなことを言われなくても、この店には簡単なものしかなかった。

私たちはカレーライスを注文したが、そのカレーライスは、とてもじゃないけど、まずくて食べられたものではなかった。こんなところまで来て、どうしてこんなにまずいものを食べなければならないのか、私は腹がたった。

しかし父になる人は、平気で全部食べてしまった。しかも私の残した分まで、平らげていたから、よっぽどおなかが空いていたのだろう。

「たまげたなあ……」

私は父になる人の言葉をまねて、そっと呟いた。

「よく眠れたかい?」

車に乗ってから、父になる人は私に尋ねた。

「うん、よく眠れた」

「寒くなかったかな」

「寒さなんて、感じなかった」

「寒さを感じる暇もなかったのかな」

「……?」

「夢を見ていただろ」

私は内心、ちょっとギクッとした。どうしてかわからない。夢という、自分の心の秘密をのぞかれたような気がしたからなのか、それはわからない。もしかしたら、父になる人が夢の中味まで知っているのかもしれないと思って、

「どうしてわかるの?」

と誘い水をかけてみた。

父になる人は悠然として、

「そりゃあ、わかるさ」

と言う。

「どうして?」

「どうしてって、目にうっすらと涙を浮かべていたもの」

「えっ、涙を……」

私は驚いた。

いくら考えても、夢の中で涙を流したような場面は、思い出せなかった。

「嘘でしょう」

「嘘じゃない。まつ毛から頬を伝って、涙が流れていたよ。嘘だと思うんなら、鏡を見てごらん」

私は、バックミラーに自分の顔を写してみた。よく見ると、両頬に一、二筋の涙の跡が残っていた。

車はゆっくりと落ち着いて、とても調子よく走っていた。

私は、八戸という町がどんなところかと考えていた。海水は青く、冷たく、北国の海の匂いを漂わせているの

だろうか。そこには、新しく母になる人がいるかもしれない。いろいろなことを考えると、頭がいっぱいになって目が回ってくる。

私は急に淋しい気持ちに襲われて、運転の妨げになるけれど、父になる人の腕にしがみついた。父になる人は無言のまま、真っ直ぐ前を見てハンドルを握っている。

私の目頭に熱いものがこみあげ、それが頬を伝って流れている。

私は、さっきの夢の続きをみているようだった。

ママも山村くんもみな去ってしまったけれど、二人のことは、忘れようとしても決して忘れることはできないだろうと感じた。

「この昔からの世界は、確かに淋しい、ひとつの大きな世界にちがいない」

夕べ、ラジオから流れる歌を聞きながら思ったことを、再び繰り返していた。

そして父になる人の腕にしがみつきながら、このまま二人で漂いながら旅を続けても、この実感は、永遠に私の胸に刻まれるだろうと、ぼんやり考えていた。（完）

「まんじ」季刊発行内規

（発行日）	（原稿締切日）
春季号 ……	二月一日 …… 十二月三十一日
夏季号 ……	五月一日 …… 三月三十一日
秋季号 ……	八月一日 …… 六月 三十日
冬季号 ……	十一月一日 …… 九月 三十日





霧に包まれていた光（1）

鍋屋次郎

「大旦那様、大変です」

と言いながら、京都・伏見の塩問屋「播州屋」の番頭嘉介が顔色を変えて店に飛び込んできた。

永年手塩にかけている梅の木の盆栽を眺めていた徳右衛門がその声を聞いて、裏庭から奥座敷に向かった。

「大旦那様、大変です。京都所司代の板倉様から市中取締のお役人様へ、新たにキリシタン禁制の高札を掲げ、天主堂の取壊しに取りかかるよう命令があったそうです。伏見の天主堂のイルマン・北川様のところへお役人様のどなたかから密かに連絡があったそうです」

「どうして！何かあったのか？」

「よく分かりませんが、半月ほど前、公方様のお膝下の江戸で大事件があって、江戸では厳しいキリシタン弾圧が行なわれたとイルマン様が言っていました」

との番頭の答えに、妻女のお志野が

「公方様のご命令となると、今回の弾圧はかなり厳しいものになりますね」

と口を挟み、徳右衛門の顔を見た。

この時、慶長一七年（一六一二）三月、江戸では有馬晴信への恩賞をめぐる岡本大八（パウロ大八）による陰謀と贈賄事件が発覚、時の老中本多正純を含め幕閣が大揺れに揺れ、岡本と有馬の両名がキリシタンであったことから、幕府膝下での厳しいキリシタン弾圧が行なわれ、同時に家康より京都所司代と長崎奉行に対してキリシタ

ン取締りの厳命があった。

徳右衛門は、番頭の嘉介に

「直ぐ清吉を呼んできなさい。あれはキリシタンにはなってはいないが、バードレと大変親しくしている。手入れのトバッチリを受けるようなことがあってはいけない」

と、弟の清吉を呼びにやらせた。

半刻もすると、清吉がやってきた。清吉は徳右衛門の弟で同じ伏見で古着屋を営んでいる。徳右衛門は、嘉介から聞いた話を掻い摘んで清吉に話してから

「清吉、お前は当分の間天主堂に行くな。今日明日にも板倉様の手勢が天主堂に踏み込むかも知れない状況になった」

「バードレやイルマンはどうしている？」

の清吉の質問に、嘉介が

「イルマン・北川様のお話では、明日以降が危険なので、今日中に主だったキリシタンの方々に、暫く天主堂に来ないように連絡して、その後、バードレ様もご一緒に今晩中に堺に逃れると言っていました」

「堺か、堺なら匿ってくれる大旦那さんも多いから大丈夫だろう」

と徳右衛門が安心した表情で嘉介とお志野を見ながらつぶやいた。

そして、その翌日以降、伏見の天主堂は扉を閉めたままで人の気配は全くなく、ミサをはじめ一切の宗教行事が行なわれず、日本人信徒の出入りもなかった。そのためか、また京都所司代の板倉勝重がキリシタン弾圧に余り気乗りがしなかったのか、天主堂には取壊しの手が伸びず、信徒個々の探索も行なわれなかった。

翌日の夕方、嘉介が店の帳場にいるときに、品のある四十才を少しばかり過ぎたくらいの婦人が静かに入ってきた。

「すみません。番頭さんの嘉介さんはいらっしゃいますでしょうか」

と丁寧に頭を下げながら言った。嘉介は

「はい。私がそうですが。どんな御用で」

と出て行くと

「この中に大事なものが入っていますので大旦那様にお渡しください」

と言って、キチンと折り畳んだ袱紗を嘉介に渡すと、そのまま後ろを向いて逃げるように行ってしまった。

嘉介は、慌てて呼び止めようとしたが、既に通りに出た婦人は小走りに駆けるようにして遠ざかって行った。

「大旦那様、品の良いご婦人が、これを大旦那様にお渡しして下さいと言って置いて帰ってしまいました。どこの方かお聞きしようとしたのですが、あっと言う間に足早に帰られたので」

と言って、その袱紗を徳右衛門に渡した。中には、イルマン・北川の筆跡で

「駿府の状況が大変心配です。相良屋さんから何か情報が入ったらご連絡下さい。オルティノ神父も大変心配しています。私どもの連絡先は落ち着いてから改めて連絡します」

とだけ書かれていた。

この時期、駿府では、バードレとイルマンが一人づつ駐在していて、キリシタン信徒数も増えつつあった。駿府は家康が常駐しているだけに、江戸での厳しいキリシタン弾圧の影響が心配されていた。

播州屋の妻女お志野は、遠州相良の塩問屋「相良屋」の出で塩の取り持つ縁で播州屋に嫁いでいた。お志野の兄幸兵衛は、一年に一回は播州屋に来て、京・大阪の塩相場を自分で確かめていた。その後は、徳右衛門とその弟清吉と三人で、伏見天主堂のバードレやイルマンを招き、キリシタンの教えや、聞いたこともないヨーロッパの文化の話を夜の更けるのも忘れて聞いていた。そんな関係から駿府での弾圧状況の情報入手依頼となったものである。

このようにバードレ達の話を聞いた三人は、バードレ達が親兄弟とも別れ、妻帯することなく、いつ船が難破するか分からない万里の波濤を乗り越えてやってきて、そして、命懸けでキリシタン宣教に全てを捧げている。また、彼等の日常生活はどこまでも清貧そのものであり、誰に対しても驕るところは全くなく、常に信徒のために行動しているその姿に、今まで見てきた我国の坊さんや指導者から感ずることのできなかった「こころに響くもの」を感じていた。

既に外は暗くなっていたが、徳右衛門は今日も嘉介に清吉を呼びに行かせた。

夜遅くなってやってきた清吉にイルマン・北川からの書付をみせて

「突然だけど、お前は遠江の相良屋に行って、駿府のバードレやイルマン、また信徒達の安否を調べてもらってきておくれ。表向きは、東海道掛川の宿から塩の道秋葉詣でをして霊験灼たかな火伏せのお札を貰いに行くこととしよう。秋葉山のお札はちゃんと貰ってきなさいよ。そうだ、市中取締の岡部様に明日届けをしておこう。先方での調べは全ては幸兵衛さんが調べてくれるから、幸兵衛さんの調べが終わるまでお前は相良屋さんでゆっくりしていなさい。どうだ、三日後には出発できるか？」

ここまで言うと、一息入れてからまた続けて

「お前の所の古着の仕入れは、駒吉が十分仕切れるよう

になっていると思うが、一ヶ月近くお前が留守をしても大丈夫か」
と聞いた。清吉は
「古着の仕入れの方はもう伜の駒吉で大丈夫です。女房のお静もいることですから。分かりました。お役に立つように行ってきます」
と言ってから
「それから兄さん、掛川の宿から秋葉街道を左に行くと森町村と言う所があって、そこでは古着の市が立っていて中々盛んな所らしい。秋葉詣での途中に寄ってきてもいいですか。京物の古着がそこの市で商えるかどうか調べて来ようと思うのですが」
「あー、勿論いいよ。では相良屋さんに手紙を書いておくから三日後の朝、旅支度をして来ておくれ。それと路銀は三十両用意しておく」

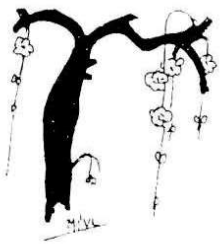
それから約半月後、清吉は東海道を下り、掛川の宿から道を右へ折れて道幅が四尺とない狭い塩の道秋葉街道に入って、日暮れ前には相良屋に入った。
幸兵衛は徳右衛門の手紙を読んで清吉の話も聞いた後
「清吉さん、私も最近駿府でキリシタン騒動があったとは聞いて心配しているところです。そうですか、江戸や都ではそんなに大変ですか、がしかし、詳しいことは全く分からないので不用心に出掛ける訳にもいかない。これは調べるのに日数が掛かると思うので、ゆっくりしていきなさい。秋葉詣でから帰ってきて、御前崎やこの先の海岸を歩いてくるといいよ」
と言いながら
「ところで、この手紙には森町村へも寄りたいと書いてあるが？」
と清吉の顔を見た。
「はい。実は森町村の古着市で京の古着が商えるか見てきたいのです」
「あ、そうですか。森町村の古着屋さんは沢山あって大層繁盛していますよ。大店は三軒位で、その中の山田屋さんのご主人甚右衛門さんとは親しくしていますから、一筆書いておきましょう」
と清吉にとっては願ってもないことを親切に言ってくれた。
清吉は、翌日は幸兵衛一家の好意に甘えて、終日旅の疲れを癒していた。
その次の日、幸兵衛も朝早く駿府に発つと言うので、清吉も朝早く相良を出て、塩の道秋葉街道を掛川に出て、所々に建っている秋葉街道の「常夜灯」を目印に細谷村から戸綿に出て、太田川の橋を渡り森町村へ入った。そこから見た景色は、太田川の清流と、それを挟むように緑の山々が続き、清吉は何となく洛北の風景を感じていた。

森町村に入って、秋葉街道沿いには古着の店と蔵が並び、また古着商人と秋葉山参詣の講の人々を対象としての旅籠も多く、清吉は、山田屋さんには秋葉山詣での帰りに寄ることとしてその店構えを眺めて通りすぎ、森町村の北にある天宮神社を過ぎてしばらく行くと日も暮れてきた。やがて城下村に入り、灯の入った秋葉街道常夜灯の少し先に見えた旅籠吉川に宿を取った。

夕食が終えるのを待っていたかのように、宿の主人留蔵が清吉の部屋にやってきて、挨拶の後
「旦那様は京の都からお越しと伺いました。それで、誠に不躾なお願いでございますが、私の伜とその連れが都の話をお聞きしたいと言っておりますので、御寝み前のひととき、都のことをなんでも結構でございますがお話してやっていただけませんでしょうか。お疲れのところ誠に申し訳ありませんが」
と頼みに来た。
清吉は、このような田舎で都の話を聞きたいと言うのは殊勝な若者と思い、
「いいけど、年はお幾つの若者かな」
と聞くと
「二人とも十七才でございます」
との答えに、疲れてもいるので短い時間でもよければと応諾した。やがて
「今晩は」と言って二人の若者が入ってきた。名前を聞くと、旅籠の息子が亀松でその幼友達が彦次とのこと。二人ともよく働くのか筋肉質のいい体をしている。
しばらくの間、亀松が旅籠の手伝い方々頼まれ仕事の俥引きをしているとか、彦次は家が車屋でお父を手伝って大八車（荷車）を作っていることなどを話していて、やがて、清吉が
「都のこと、何を聞きたいのか」
と言うと、驚いたことに
「南蛮の坊さんのことについて聞きたい」
と言う。江戸と都の今の動きから一寸警戒したがそれは伏せて
「何故、南蛮の坊さんのことを聞きたいのか」
と清吉が聞くと、
「城下村のご隠居の五助様も、森町村の天宮神社の神主様も、行けば何でも教えてくれるが、南蛮の坊様のことだけは見たことも会ったこともないと言って、教えて貰えないから聞きたい」
と言う。そして彦次は続けて
「駿府の南蛮の坊さんは、一度掛川の宿で見た。丈が高く、頭の毛は黄金色で鼻が高く、天狗様みたいだった。だけんど（だけど）その辺のお寺のおっ様（和尚様）やお役人様とは違う。威張らないし優しいだ」
「何故？そんな天狗様みたいな怖そうな南蛮の坊様が、

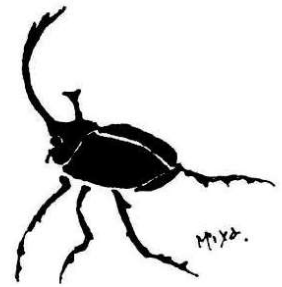
優しいってことがどうしてわかる?」
「大分前のことだけど、掛川の宿の手前で、疝気でいごけなく（動けなく）なっている爺様がいた。可睡（掛川宿の近郊・曹洞宗万松山可睡斎がある）の人だったらしい。通りかかる人は皆、うずくまったまんまの（座り込んで下を向いて膝を抱えているままの）爺様を見ただけで通り過ぎて行く。声を掛ける人はあっても助ける人はいない。掛川の宿まではまだうんと（沢山の距離が）ある。そした時（その時）南蛮の坊さんが一人、従者を連れて通りかかった。南蛮の坊様の命令で、従者が大八車を引いてきてその爺様を乗せて掛川宿の旅籠まで運んでいった。後で聞くと、大八車の借り賃と、旅籠賃は南蛮の坊さんが払って、旅籠ではその爺様の為にお医師様をやって（南蛮の坊さんが医者として診察して）、薬も渡して、その爺さんからは一文も貰わなかったって言うことだ。そして、次の日、爺様は元気になって旅籠を出ていったそうだ。亀松とも話するんだが、中々出来っこないことだ（できることではない）。よっぽど（余程）金を沢山もってるだか（持っているのだろうか）。それにしても偉いことだ。な、亀松」
と彦次が一気に話した。それを聞いた清吉は
「そうか。そんなことがあったのか。お前達もそこにいたのか」
と聞くと
「その日、ご隠居の五助様の使いで掛川宿まで二人で届けものに行った。そしてそこを通りかかった。丁度、南蛮の坊さんの従者が大八車（荷車）にその爺さんを乗せようとしているところだった。その前と後のことは掛川宿の人から聞いた」
と彦次は言って
「なんでそんなに親切だか（親切なのか）」
と続けて、同意を促すように亀松を見た。
亀松も
「俺にもわかりゃせん（分からない）。もしかするとお釈迦様か観音様の生まれ変わりかな」
と言って清吉を見る。
清吉もどのように説明していいやらさっぱり分からない。知っていることは、南蛮寺の坊さんは、家族も、自分の命も、財産も、全てを投げ打って、彼等の信ずる教えを広めようとして来ていることだけだ。それは、清吉達の考えている価値観の世界では量ることも語ることもできないことなのだ。ただ感心してその姿を眺めているだけの自分を常に感じていたので
「あのな、俺にもよく説明できないけど、南蛮の坊さん達が欲しいものは俺達の欲しいものとは違うんだな。どう違うかって言うと、……お金も権力も、あの人達には俺達が考えるほど大切ではないんだ。それよりも、キリシタンの教えを守って他人に親切にして生きていく事が

何よりも大切な事と考えているのかな」
と答えた。
しかし、亀松も彦次も清吉の言っていることがよく分からないといった顔をして、暫くお互いの顔を見合っていた。その様子を見た清吉は話題を変えて
「お前さん達、それを考える前に南蛮の坊さんはどのくらい遠くから、どのような難儀をして来ていると思うか。それを考えていくと少しづつ分かってくると思うよ」
「わっかりゃせん。どんだけ（どれくらい）遠いところだか」
「江戸と長崎の道程を二十個より多くつなぐよりも遠い遠い所から、荒波を半年以上も航海して来ているんだ。それも死ぬ覚悟でな。途中、恐ろしい海賊もいるし、海が荒れて船が沈むこともあるし」
と、以前バードレに聞いたことをここまで言うと、暫く天井を見ながら考えていた彦次が
「どんだけ（どれだけ）遠い所か見当もつかんけど。そんなけんのんな（そんなに危険な）事して。なんか（何か）わからんけど、よっぽど（余程）大事なやることがあるだかの（あるのかな）」
と言って亀松の方に顔を向けて
「な、亀松、おんしゃ（お前は）どう思う?命と換えっこしてもいい大事なもんて何だかな。わかるか?」
（つづく）



体当たり戦法を強制された神風特別攻撃隊の人びと(二)

千坂精一



ミッドウェー

連合艦隊司令長官山本五十六大将は、昭和十六年九月六日の御前会議で対米開戦が決定すると、総理大臣近衛文麿に、

「一年ぐらいは暴れてみせます」

と約束したという。

小国が大国に勝てる公算は短期決戦しかない。

山本は、海軍大学教官のあと欧米視察に出張したのをはじめ、駐米武官二年、ロンドン海軍軍縮会議随員、同予備交渉代表などを勤めて世界情勢に精通していたから、列強を相手にすることの無謀さを知悉していた。

だから、先制攻撃をつづけられる一年ぐらいのあいだに、締結の機会を捉えて和平を整えてほしい、と暗に依頼したのであろう。

山本は、近衛との約束どおり、緒戦のハワイ、マレー沖、ついでインド洋、珊瑚海と連戦連勝して、着々と和平を有利に締結出来る実績をあげていった。

だが、すでに近衛総理は東條陸相との対立で辞職していて、現内閣は総理・外務・陸軍大臣を兼務する強硬派

陸軍大将東條英機の独裁政治体制下にあった。

そして、さらに珊瑚海海戦に先立ち連合艦隊司令部を啞然とさせる大事が起こっていた。

機動部隊が南方作戦に出払っている隙を衝かれて、北太平洋上で合流した空母エンタープライズとホーネットのアメリカ機動部隊に首都東京を空襲されてしまったのである。

四月十八日朝、房総半島へ千三百キロに迫ったところで哨戒機に発見されたので、急遽爆撃機を発艦させると反転退避していった。

ホーネットから発艦したドーリットル中佐指揮の陸軍爆撃機B25十六機は、一二三〇ごろ東京へ侵入し、早大講堂、西大久保、赤羽などに焼夷弾を投下したあと、川崎、横浜、横須賀、さらに名古屋、四日市、神戸などを襲撃しておいて、東シナ海へ抜けると、中国大陸の米軍基地へ緊急退避していった。

私は、この日東京小石川（現文京区）の学校にいて、級友達と校舎の屋上へ駆け上って低空飛行して行く超大型機に手を振ったが、追っ掛け空襲警報のサイレンがけたたましく鳴り渡り、つづいて高角砲の発射音があちこちでひびいたので仰天した記憶がある。

このとき東京の被害は、爆弾、焼夷弾を九箇所に投下されて、死者十二名、負傷者百余名、家屋の焼失五十戸、全半壊五十戸であったという。

十六機もの爆撃機に空襲されたにしては被害が少なかったのは、戦果より心理的打撃を与える威嚇が目的だったのではないだろうか。

しかし、そのことはどうであろうとも、本土に侵入されて首都を空襲されたことは、最高指揮官の山本大将にとってまさに晴天の霹靂であり、威信を傷つけられて大衝撃（ショック）であったに違いない。

慌てた大本営海軍部首脳は、本土防衛線を日付変更線上において、北のアリューシャン列島と南のソロモン群島のほぼ中間にあるミッドウェー占拠作戦計画に着手した。

ここに航空基地をおけば、アメリカ太平洋艦隊の本土接近を防衛出来ると判断したのだ。

その作戦実施にあたり、連合艦隊司令部は真珠湾、インド洋、珊瑚海と連戦連勝して意気揚がる南雲機動部隊（一航艦）に出撃を命じた。

任務は、六月五日にミッドウェーを空襲して上空を制圧し、二日後の上陸作戦に協力することと、かならず反撃してくるであろう機動部隊を捕捉して、こんどこそ真珠湾で逸した空母四隻を撃滅することであった。

南雲機動部隊の主力は、一航艦のうち南雲長官直率の一航戦（大型空母赤城・加賀）と山口多聞少将（海兵四十期・海大二十四期）率いる二航戦（中型空母飛龍・蒼龍）で、戦艦榛名、霧島、巡洋艦利根、筑摩が援護し、

軽巡長良を旗艦とする第十戦隊（駆逐艦九隻）が警戒にあたるという編成である。

真珠湾のときは、これに五航戦の大型空母瑞鶴、翔鶴が加わり、さらに潜水艦が哨戒するという万全の態勢であったが、このたびの編成は、はじめて激突する主力空母対主力空母決戦の構えであるはずなのに、甘く見たのか、手抜きの感は否めない。

ともあれ、南雲機動部隊は、五月二十七日の海軍記念日に廣島県柱島泊地を出港して、勇躍壮途に就いた。

話は変わるが、この日青森県大湊要港からも角田覚治少将（海兵三十九期、海大二十三期）率いる四航戦（大型空母隼鷹、小型空母龍驤と若干の駆逐艦）が同時に出港した。

だが、この機動部隊は南下せずに北上し、開戦時の連合艦隊集合地であった南千島択捉島単冠湾のさらに北東にある太平洋とベーリング海を分けるアリューシャン列島を目指した。

そして、アッツ島、キスカ島を攻略すると、六月四日にはアラスカ半島に近いウナラスカ島のダッチハーバーを空襲して、アメリカ側に日本が北方作戦に出たと思わせる陽動作戦で注目を集めようとした。

しかし、このミッドウェー作戦を晦ます幼稚な策略は、アメリカ側の暗号解読によって看破されただけではなく、

のちの各地における空戦に重大な影響を及ぼす原因となる置土産を与えてしまった。

というのは、世界に冠たる性能を誇る海軍自慢の零式艦上戦闘機（零戦）が捕獲されてしまったのである。

龍驤から発艦した戦闘隊のうちの零戦一機が、発動機と燃料容器に高角砲の弾片を受けて飛行不能になり、ウナラスカ島に隣接するアクタン島に不時着しようとしたが、失敗して前輪を凍土帯の表面が溶けた湿地にのめり込ませ、裏返しになってしまった。

激突ではなかったようだが、こういう場合操縦員は大抵衝撃で放り出されて即死である。

古賀忠義一等飛行兵曹（一飛曹）は即死だったようだが、機体のほうは軟土だったために損傷もなく、完全に近い状態だったという。

このアクタン島は無人島だったので、このことは敵味方いずれにも知られなかったのだが、ひと月余り経ったころ偶々上空に飛来したアメリカ海軍の双発中型飛行艇カタリナに発見されてしまった。

ただちに回収されたが、それが零戦であることを知ると驚いて、急きょ本国へ送られた。

捕獲された零戦は、徹底的に分析、調査、研究されて、やがて零戦に対抗し得るグラマンF6Fヘルキャットやロッキード P38戦闘機が開発された。

いそぎ生産されたこれら高性能機の実戦参加によって、

以後アメリカ海軍航空隊は制空権を拡大してゆき、零戦の活躍が凋んで攻守ところをかえた日本側は、苦戦を強いられるようになってゆく。

さて、本題のミッドウェーについてである。

南雲機動部隊の出撃から二日後の二十九日、戦艦大和を旗艦とする主力部隊がミッドウェーを目指した。

高須四郎大将（海兵三十五期、海大十七期）率いる第一艦隊で、明治三十六年（一九〇三）第二、第三艦隊とともに編成され、名提督東郷平八郎大将が旗艦三笠に座乗して日本海海戦を指揮した由緒ある艦隊である。

その東郷艦隊に倣い、山本長官自身が伝統ある第一艦隊の旗艦大和に座乗して、連合艦隊司令部をおいていた。

出動の目的は、北太平洋のほぼ中央に位置するミッドウェーの後方約千キロまで接近して作戦を指導し、南雲機動部隊への支援態勢を整えて士気を鼓舞するためであった。

このとき、もう一部隊近藤信竹中将（海兵三十五期、海大十七期）率いる第二艦隊も出動した。

サイパン島から出撃する陸海軍合同編成のミッドウェー上陸部隊の輸送船十六隻を護衛する任務についたのである。

こうして、海軍は艦艇、飛行機、将兵を総動員したが、せっかくの大動員も一点集中ではなく、四任務に分割されてしまっていた。

ここからは、南雲機動部隊が乾坤一擲の勝負を賭けるミッドウェー海戦に焦点を当てる。

二十七日に柱島を出港してから三日間は海上平穏であったが、三十一日から天候が悪化しはじめて、六月一日には濃霧で視界不良になり、探照灯をつけて進む状態になった。

このため、補給部隊の油槽船が主力部隊と逸れてしまい、無線封鎖を破って打電し、ようやく位置を確認して合流する有様であった。

このころ、アメリカ機動部隊は南雲部隊の東方五百キロあたりにいたのであるが、情報不足の司令部は千六百キロ離れたハワイにいると推測していたので、ミッドウェーを占拠してから機動部隊の出てくるのを待って叩き潰せばいいと楽観視していた。

そこに油断があって、ハワイ攻撃のときのあのぴりぴりした緊張と慎重さを欠いた結果が、無線封鎖を破って打電した補給部隊の行為になって現れたのである。

その無線発信は、八百キロ後方を航行していた大和にも届いたというから、アメリカ機動部隊も当然傍受したはずで、暗号解読によってすでに承知はしていたが、あらためて、

「いよいよお出でなさったか」

と迎撃態勢をとられてしまったに違いない。

戦闘は、古来から情報把握如何で勝敗が決まるといっても過言ではなく、敵方の兵力と動向を探るのが勝利する必須条件であるはずなのに、状況不明のまま敵地に突入する無謀は自殺行為にひとしかった。

三日、ミッドウェーの北西約千百キロ地点に達した南雲機動部隊の旗艦赤城は、相変わらずの濃霧で手旗信号が使えぬため、各艦に対してここでもまた針路変更を打電した。

四日、連合艦隊旗艦大和は、ミッドウェー北西海面にアメリカ空母のものらしい呼出し符号を傍受したが、無線封鎖中であるし、当然赤城も傍受しているものと判断して、緊急電報を発信しなかった。

だが、南雲司令部は傍受していなかった。

じつはこのとき、ミッドウェー攻略の暗号電報を解読したアメリカ太平洋艦隊司令長官ニミッツ大将は、スプルーアンス少将率いる空母エンタープライズ、ホーネットの第十六機動部隊と、フレッチャー少将率いる空母ヨークタウンの第十七機動部隊をミッドウェーへ急行させていたのだった。

まさか北東六百キロ地点にその機動部隊が待機していることを知らぬ南雲機動部隊は、三隻の空母が迎撃態勢をとって待ち構えている真っ只中へ、突入してゆく格好になってしまった。

五日、ミッドウェーの北西四百五十キロに迫った南雲機動部隊は、日の出前の〇一三〇零戦三十六機の制空隊を直率する飛龍飛行隊長友永丈市大尉（海兵五十九期）を指揮官とするミッドウェー攻撃隊を発艦させた。

赤城と加賀から零戦九機と二百五十キロ爆弾を抱いた九九式艦爆十八機づつ、飛龍と蒼龍から零戦九機と八百キロ爆弾を抱いた九七式艦攻十八機づつ、総計百八機の大編隊であった。

無事発艦させた四隻の空母は、温存の九七式艦攻に八百キロ魚雷、九九式艦爆に艦船用徹甲爆弾を装着させて飛行甲板に待機、艦船攻撃に備えた。

そして、赤城、加賀と支援部隊の戦艦榛名、重巡利根、筑摩から九七式艦攻、零式水偵、九五式水偵など七機を索敵に出した。

飛龍の山口二航戦司令官は、

「広域探索に七機では不充分である」

と主張して、司令部の等閑（なおざり）な索敵を戒めたが、受け入れられなかった。

事実、山口の指摘どおり、索敵機は機動部隊の発見に手間取ってしまった。

アメリカ側は、電波探知機（レーダー）で南雲機動部隊の位置と大々的な攻撃隊の発艦を把握すると、直ちにイースター島の陸上基地から空母攻撃隊を発進させ、迎撃隊を空中待機させた。

ミッドウェー攻撃隊はこの迎撃隊に阻まれたが、制空

隊の零戦が掃蕩しているあいだに飛龍艦攻隊と加賀艦爆隊がサンド島を攻撃し、蒼龍艦攻隊と赤城艦爆隊はイースター島へ向かい、基地の燃料タンク、対空砲陣地、格納庫などを破壊したが、機影は見当たらず蜕（もぬけ）の殻で歯噛みした。

逸早くイースター基地を発進していた雷撃機、陸爆機、艦爆機は、やがて南雲機動部隊の空母に襲いかかってきたが、零戦隊の活躍でさしたる被害もなく撃退した。

こうしたアメリカ側の動静を知らぬ友永隊長は、空中退避と思い込み、燃料切れまで待てぬと諦めたのか、あるいは地上施設破壊が不充分と判断したのか、その意図は不明だが、〇四〇〇赤城の司令部に、

「第二次攻撃の要ありと認む」

と打電した。

このことが、悲劇のはじまりであった。

南雲長官は、索敵機からの報告がないので付近に敵艦隊はいないものと決め込んで、赤城、加賀の艦攻四十三機に抱かせた魚雷と、飛龍、蒼龍の艦爆三十六機に抱かせた艦船用徹甲爆弾を陸用爆弾に取り替えるよう命じた。

艦攻、艦爆を格納庫に降ろし、爆装転換してふたたび飛行甲板に並べ直している最中にミッドウェー攻撃隊が帰投してきた。

傷つき疲労困憊している搭乗員（パイロット）の収容が優先され、上を下への大騒ぎになった。

友永隊長の零戦は、格闘戦で右燃料容器（タンク）に被弾したが、辛うじて飛龍に帰艦した。

そうした混乱がつづいているところへ、エンタープライズ、ホーネット、ヨークタウンが迫ってきた。

〇四二〇、索敵中の利根機から、

「敵らしきもの十隻見ゆ」

と打電してきた。

南雲長官は、敵艦隊発見の報告を受けてもまだ空母の存在に半信半疑であったが、〇四四五加賀、飛龍、蒼龍に、

「基地攻撃を取り止め、艦船攻撃に兵装転換せよ」

と命令変更の信号を送った。

飛龍の二航戦山口司令官は、命令の変更に不信感を抱き、

「現装備のまま攻撃隊を直ちに発艦せしむを正当と認む」

と意見具申したが、司令部に無視された。〈巧遅より拙速をとる〉のが古来からの兵法である。

敵機来襲につづき艦船が発見されたからには、当然空母もいると見なければならず、そうなれば一瞬の決断が命運を分けることになるのだ。

山口は飛行機屋だから、陸用爆弾装備のまま発艦して万一空母を見付けたら、その飛行甲板を爆破すれば、たとえ撃沈にはいたらずとも発着不能にさせることは出来るから、成果はおなじと考えたのであろう。

南雲司令長官は、海大教官、重巡高雄、戦艦山城艦長、水雷戦隊司令、水雷学校長、海大校長などを歴任して、開戦八ヵ月まえに一航艦司令長官になったばかりの水雷屋であったから、艦隊決戦なら自家薬籠中の物であろうが、奇襲でなく四つに組む本格的航空決戦の指揮は、未経験ゆえに迷い決断が遅れた。

一航艦という組織と、南雲個人の双方にとって不幸な人事配置であった。

〇五二〇、ふたたび利根機から、

「敵はその後方に空母らしきもの一隻を伴う」

と報告してきた。

〇六一五、南雲機動部隊は速力をあげて北上し、敵機動部隊との距離を保って〇七三〇に攻撃の火蓋を切るつもりであった。

ところが、〇六三〇アメリカの空母三隻から発艦した戦闘機、爆撃機、雷撃機が襲ってきた。

四隻の空母は、それぞれ回避運動で辛うじて魚雷を避けたが、敵機が去ったあとに不気味な気配が残った。

空母は動く航空基地であるから、攻勢に転じたときは攻撃目標の直近まで移動して、出撃する飛行隊が航続距離を短縮した分だけ戦闘時間を延ばせる利点があったが、劣勢に立たされたときにはこんな危険で恐ろしい艦船はない。

船体が大きいから狙われ易いし、飛行甲板に爆弾を食らえば発着不能で機能停止になる。

それに、大量の航空燃料と爆弾、魚雷をすくなくとも百本以上は積んでいるのだ。

その空母が被弾炎上して、搭載機や爆弾、魚雷が誘爆を起こせば、空母はその数だけ爆弾や魚雷を打ち込まれ飛行機に体当りされたとおなじ結果になるのだから、ひと溜まりもない。

だから、敵機が迫ってきたら、攻撃を受けるまえにガソリン貯蔵容器そのもののような飛行機を発艦させてしまうしか防御方法はないのだ。

〇七二〇、赤城の司令部は、三空母に、

「第二次攻撃隊、準備出来次第発艦せよ」

の信号命令を発した。

赤城の飛行甲板に魚雷、艦船用爆弾を装着した全機が発艦位置につき、一斉に発動機が始動した。

〇七二四、〈発艦始め〉の白旗を合図に先頭の零戦が飛び立った丁度そのとき、頭上の乱雲の中から急降下爆撃機が襲ってきた。

敵機動部隊に接近中であったから、決して見張りを怠ったり油断したわけではなかった。

まさか雲海に隠れているとは、迂闊だった。

当時、電波探知機は戦艦伊勢、日向だけで空母には備え付けられていなかったという。

このとき空母群を襲ったのは、ダグラスドーントレス

急降下爆撃機二十四機で、赤城に三弾、加賀、蒼龍にそれぞれ四弾命中した。

真珠湾で撃ち漏らした空母による手痛い報復であった。

三空母は、甲板に並ぶ魚雷や八百キロ爆弾を抱いて燃料満載した飛行機に引火して誘爆を起こしたから堪らない。全艦たちまち火の海となり、前述の惨状になった。

発艦態勢にありながら、不意を衝かれて迎撃出来ず、やがて空母は火災で機能を失い、これまで一糸乱れず行動してきた南雲機動部隊は、ついに支離滅裂になった。

旗艦赤城は、飛行甲板を直撃されて列機を吹き飛ばされ、艦上は火の海と化した。

加賀は、艦橋に被弾して艦長岡本次作大佐以下首脳が全員即死。火薬庫に火が入って総員駆逐艦に移乗した数時間後に沈没した。

蒼龍は、三時間ほど燃えつづけたあと火薬庫に火が入り、爆発を起こして沈没した。

艦長柳本柳作大佐（海兵四十四期、海大二十五期）は、退艦のすすめを断わり、艦と運命をともにしたという。

このとき、二航戦司令官山口多聞少将座乗の旗艦飛龍だけは回避運動で魚雷を躱し、十二門の高角砲と三十一挺の機銃が一斉に火を噴いてダグラスドーントレスを一機も寄せ付けず、ついに無疵のまま残った。

飛龍の艦長加来止男大佐は、海兵四十二期、海大二十五期生であるが、横須賀の追浜航空隊飛行学生も経験し、海大教官のあとは大湊空司令、木更津空司令、水上機母艦千代田艦長ともっぱら航空畑を歩いてきた生粋の飛行機屋であったから、攻めも守りも充分に心得ていて巧みな指揮振りだったのであろう。

ほかに戦艦霧島、榛名、重巡利根、筑摩、軽巡長良などほとんどの艦船が健在であったことを考えると、アメリカ側は空母だけが攻撃目標だったのではないだろうか。

それはさておき、南雲司令長官は座乗赤城の大破で指揮がとれぬことから、利根に座乗している次席の第八戦隊司令官阿部弘毅少将（海大二十三期）に代わり、航空戦の指揮は完膚無きまで叩きのめされたなかで唯一残った飛龍座乗の二航戦司令山口多聞少将が執ることになった。

やむにやまれぬ事情で瓢箪から駒の人選が最適だったとは皮肉だが、ここまで追いこまれてからでは遅きに失した憾みが残る。

だが、山口は自身の采配で一矢報いる使命感に燃えたであろう。

南雲司令長官は、青木艦長のたびたびの進言でようやく動き、草鹿龍之介参謀長（海大二十四期、少将）、源田實参謀らと軽巡長良に移乗して将旗を揚げ、一航艦旗艦にした。

そのころ、山口は加来艦長と攻撃隊の人選を急いでいた。

友永大尉は、愛機が損傷していたし、本人も疲労困憊していることを考慮して、友永より四期下の若手小林道雄大尉を選任した。

〇八三〇、飛龍を発艦した零戦六機、九九式艦爆十八機の小林隊は、空母ヨークタウンを攻撃して損傷を与えたが、小林隊長機ら零戦三機と艦爆十三機はついに還らなかった。

山口は、あと二隻の空母を撃滅して相討ちにすべく、第二次攻撃を友永大尉に委ねた。

友永機は撃ち抜かれた右翼燃料容器の修復が間に合わなかったので、代替機をすすめられたが、自分の代わりに出撃した後輩小林大尉の仇討ちを意気込む友永は、尾翼の指揮官標識に拘り乗り換えようとはしなかった。

戦闘開始時には百八機の出撃が、零戦六機、九七式艦攻十機の寂しい発艦であった。

この第二次攻撃で片翼燃料の友永隊長機ら零戦三機、艦攻五機を喪ったが、空母一隻に損傷を与えたとの報告を受けた山口は、

「あと一隻で相討ちだ」

と逸ったが、最少の機数で最大の効果をあげるには薄暮攻撃がいいと慎重を期したかどうかは定かでないが、戦闘で疲労した搭乗員達を充分休息させる温情はかけたに違いない。

だが、山口があと一隻と思ったのは誤算であった。

というのは、第一次攻撃で小林隊の艦爆が空母ヨークタウンに艦船用徹甲爆弾を叩き込んだのは間違いないのだが、このときヨークタウンの搭載機は出払っていたため誘爆を起こさず、応急修理で航行可能になったのだ。

第二次攻撃の友永隊が攻撃した空母は、そのヨークタウンだったのである。

二度の攻撃を受けたヨークタウンは、飛行甲板が海面に触れんばかりに傾斜して戦闘不能状態になったが、のこるエンタープライズとホーネットは健在であった。

南雲機動部隊の空母四隻は一箇所に固まっていたので、同時攻撃を受けてしまったが、アメリカの機動部隊は空母三隻が分散していたために、おなじヨークタウンとは思わず他の空母と誤認してしまったのである。

山口が薄暮攻撃をかける残存の零戦六機、九九式艦爆五機、九七式艦攻五機の計十六機が飛行甲板に並んだ丁度その時、一瞬早くエンタープライズから十四機、ホーネットから十六機の急降下爆撃機ドーントレスが飛龍に襲いかかってきた。

四発の直撃弾を受けた飛龍は、甲板にいた十六機が誘爆を起こして一面火の海になった。

航行不能に陥り総員退去のときがきたが、山口司令官と加来艦長は、

「飛龍の最後を見届ける」

義務に固執して退艦を潔しとせず、

「いっしょに月でも眺めるか」

と山口が誘って、二人は然り気なく廃墟と化した艦内へ消えていったという。

山口と加来の執念が支えていたのか、飛龍は翌朝になっても沈まず、駆逐艦の魚雷でようやく沈没させた。

いっぽう、旗艦だった赤城のほうもなかなか沈まなかった。

青木艦長が駆逐艦に移乗して曳航したが思うに任せず、山本司令長官の命で魚雷を打ち込みようやく沈没させた。

主力空母四隻のほか、史料によって異なるが巡洋艦一隻と搭載機約二百機、それに百二十名以上の練達搭乗員を喪い、航空兵力全滅した一航艦南雲機動部隊は、連合艦隊司令部の、

「北西に避退し、本隊に合同せよ」

との命に従い、敗将南雲司令長官座乗の旗艦長良以下の敗残艦隊は、恐らく屈辱を引き摺りながら、後方千百キロに待機したまま役立たず大艦巨砲の無力さを露呈した連合艦隊本隊を求め、広い洋上に茫然自失の蹌踉とした航跡をのこして、彷徨していったことであろう。

この惨敗は一年間秘匿され、生き残った搭乗員達は隔離同様に南方第一線基地へ転属させられたという。

敗因は多々あるが、日本海海戦以来負け知らずの驕りが軽視や侮りを生み、結果の油断がすべてであったように思われてならない。

このミッドウェー海戦が戦局の転換になり、逆転で主導権を奪われた首脳部は、やがて追い詰められると、苦し紛れに途轍もない戦法を編み出すようになってゆく。

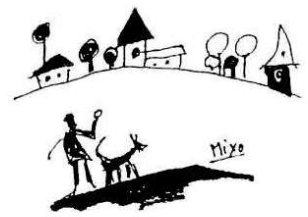
（つづく）



泰山木（八）

―紙透小太郎の一生―

紙透寛夫



第二章　歩兵から憲兵へ

四

父小太郎の弟である紙透平八郎は、満州の吉林省和龍県龍井（りゅうせい）村にあった日本帝国総領事館に勤務し、治安関係の仕事をしていた。

龍井村は、私の生まれた北朝鮮の国境、上三峰から、軽便鉄道に乗って、三時間半の所にあった。

一方、母茂登子の妹である鈴木いつ子は、母の実家、静岡県周知郡山梨町にいて、和裁を習っていた。

父と母は

（お互いに、気心の知れているこの二人を、結婚させたらどうか）

と、相談して話を進めた。この縁談はすんなりとまとまり、父母ははじめての仲人（なこうど）をしたのである。

昭和九年五月吉日、平八郎叔父といつ子叔母は、龍井村の斎藤例三郎宅で結婚式を挙げた。当日、父はもちろん出席したが、母はまだ幼い子供三人に手が掛かり、出席は出来なかった。

龍井村には特務機関もあり、斎藤例三郎は、そこの偉い人であった。

三省堂の大辞林は、『特務機関』について、

①旧軍部の特殊軍事組織。諜報・治安活動・特殊工作などを占領地域・作戦地域で担当する特殊機関。

②（中略）。

と説明している。

憲兵隊は、特務機関の業務援助もし、また、領事館とも連絡があり、情報の収集に努めていた。そんな関係で、父と平八郎叔父は斎藤例三郎と知り合い、相性もよく、個人的に懇意な間柄となったのである。

この斎藤例三郎は、夫人とそろって世話好きで、人の面倒見がよく、言わば、親分肌であった。そんな訳で、斎藤夫妻を知る人たちは、みんな、

「満州のお父さん」

「満州のお母さん」

と呼んで、慕っていたそうである。

さて、そのころ、我が家では、妹の淑子が股関節脱臼（こかんせつだっきゅう）を患った。この治療のために、父は昭和八年十一月十五日から五日間、休暇を取って淑子を伴い、京城（けいじょう）（現ソウル）に行った。当時、朝鮮で一番良いと言われていた京城大学病院で、十七日に手術を受けたのである。その後も、父は数回休暇を取り、京城に行った。最後は昭和九年七月十五日から十一日間であった。母も、一歳になったばかりの次女敏子も連れて、父と一緒に、ある時は交代して、会寧の官舎と京城の病院との間を行ったり来たりしたのである。

淑子は途中、麻疹（はしか）とか百日咳（ひゃくにちぜき）にかかり、更に、食べたものを全部吐いたりして、やせて、ギブスがずるずるに緩んで、再手術を受けたようである。その後も、マッサージ・歩行練習など、通院のために、初めのころから、常宿と決めていた京城大学病院のすぐ前にあった、苑正旅館の三畳間に、母と淑子と敏子の三人は、八か月間もの長逗留（ながとうりゅう）をしたそうである。この間、父は職場を、そう休んでばかりいられないので、官舎で単身の生活を余儀なくされ、手に余った私（寛夫）は、満州・龍井の領事館官舎にいた平八郎叔父、いつ子叔母夫妻のもとに、八か月間、預けられたのである。

父母の苦悩、苦労、淑子の苦痛は、計り知れないものがあった。

私が物心ついてからのことを、ずっと、思い返してみると、どうも、最初の思い出は、寝小便だったように思う。多分、会寧憲兵分隊の官舎にいたころのある夜、私が眠っていた時に、布団の下の方が、急に暖かくなった。と感じた途端に、布団がびしょ濡（ぬ）れになった。びっくりして飛び起きたら、母は、

「しょうが無いね」

と言い、私のパンツと寝巻きを取り替えながら、

「もう寝る所が無いんだから、外で寝なさい」

と怒り、自分の寝床に、さっさと戻って、眠ってしまった。

（困ったなあ）

私は震えながら、しばらく枕元に突っ立っていた。見ると、みんなは、すやすやと眠っていた。

と、父が私の方に顔を向けて、

『こっちに、来いよ』

と、目で言い、軽く手招きをした。私はまるで、盗塁のように、素早く父のわきに滑り込み、この助け船の温もりの中で、じきに安眠した。

次は、龍井村での思い出である。

ある日、叔母が床屋に連れて行ってくれた。子供の視線からは、見上げるように高く、そびえるコンクリートの塀に沿って、しばらく歩いた。正門を入ると、やがて床屋の建物があった。室内に入ると、赤い着物を着た大人たちが、一見、何の屈託もなく、談笑していた。この異様な光景に、まず、びっくりした。私の番がきて、椅子に腰掛けると、その赤い着物を着た一人が、バリカンで私の長く伸びた坊主頭を刈り始めた。叔母は、後の方の腰掛けで見守ってくれていた。

後年、あそこは刑務所の中で、赤い着物は囚人が着ていたのであろうと思った。

もう一つの思い出は、斎藤例三郎宅に遊びに行った時のことである。私より幾つか年上と年下の男と女の子が五、六人いて、賑やかであった。私も仲間に入って、みんなで大騒ぎしているうちに帰りが遅くなってしまった。

辺りは、ところどころに灯りは見えたが、もう、すっかり暗くなっていた。急に寂しさが込み上げ、不安と心細さで、どきどきしながら、急ぎ足で帰る途中、むこうから迎えに来てくれた叔母の顔を見た途端、ほっとして、思わず泣き出してしまった。風呂場で汚れた足を洗ってもらっている間も、泣き止まない私に叔母は、

「もう泣いちゃ駄目」

と、困ったように言った。

私は間もなく小学校に入学する時期を迎え、妹の淑子の股関節脱臼も、大体治ったし、会寧と京城と龍井の三か所に別れていた私たちの、言わば離散家族は、ようやく、会寧憲兵分隊の官舎の同じ屋根の下で、一緒に暮らせることになり、久し振りに愁眉を開いたのであった。

昭和九年は、父が四月二日、日本赤十字社の正社員に列せられ、同じく四月二十九日に、明治勲章の勲七等に叙され、瑞宝章を授与された。そして十二月には、憲兵曹長に進級したのであった。

（つづく）



方解石の出る楠峠（十一）

伊澤敏久

昭和十七年の夏（七月）幸一等四人は久しぶりに洞窟に行き思いがけない様子を見て、服を上からポタリポタリ落ちる清水にぬらしながら、足元の岩伝いに懐中電灯を頼りに時間をかけながら洞窟から出た時は、夏の日とは云え、太陽は西に傾き、涼しい風が四人の顔に感じさせていた。

四人は峠の頂上に向った。

幸一が、

「今日は大分知らない中に時間が過ぎたな、急いで帰らんと……」

「そうだ、急ごう」

幸一の後ろで山口が叫んだ。急ぎ足の途中、幸一が、

「信玄が、遠江に侵略してきてこの辺で戦ったことで方解石のことや、今日見つかった、旗の様なものが、信玄のものであった事が、本当だったら……すごいぞ。一五七二年の頃のものが、今迄残っていると思うと……不思議で、不可解にも感じるな……」

「清水の中だったので今迄残ったのかもしれんぞ……何千年の昔のピラミッドの中の墓のミイラ等に布が見つかったことさえあると聞いているが理科で勉強したバクテリヤ等の関係がなかったかも知れない……」

山口が幸一の話も聞くと続けて話した。

「そうかもしれん……。洞窟の中の清水は外の空気にふれないで流れていたんだ。長い年月が、洞窟の中をそのまま置かれていたんだ。きっとそうだ……。」

とは云っても幸一はまだ疑問がある様に感じていた。
雄二が
「学校の先生に話してみたらどうだ……」
「調べてくれて話をしてくれるかな……」
「今はアメリカと戦争中で、男の先生は少ないしな……」
武二が、後ろの方から云う声が聞えてきた。
「どうして事実を調べていくかが問題だな……」
幸一は、自問自答する様に話すのだった。
山口が、
「俺は信玄の旗に舞い違いない様な気がする……」

話をしている中に峠を下った頃には、家々には電燈がちらほら見え始めた頃、四人の心は次第に五〇〇年前の出来事が脳裏から薄れ遠ざかり、現実の世界に置かれていくのを感じ取っていったのである。

夕暮れの町に入ると、役場の掲示板に、大きな厚い紙に張った「シンガポール陥落」の写真に、「英の芽城に擧る凱歌」と書かれ、日本の山下奉文中将と英馬来軍司官パーシバル中将との会見が、三月から掲示されている新聞の右下の隅が風が吹く度にめくられるのを見ながら四人は家路に急いだ。

町の中にある各所の隣組掲示板には事柄は違っていたが、或る所では、「日の丸列車」驀進と書かれ、昭南駅より出発する感激の「始発一番列車」の写真の下に、「占領地の日の丸列車」と書かれた新聞が、これも、厚い紙に張られて掲示されていた。

四月より張られた所では、
「ラングーン占領」の写真の下に「全市に燃たり日章旗」と書かれ、五月に入ると、コレヒドール島攻略の写真が掲示されアメリカとの戦争が、一段と社会をにぎわせる感じさえし、家々に回される回覧板も戦争に一層協力させる事柄が書かれ、今年も戦争に明け暮れて行く一年になっていく様にさえ思われていったのである。

町の人達は、戦争は必ず勝つと信じては政府への協力に全力を出している中、戦勝の報道のみの中で、異常な平和を感じさえしていた。

九人が別れて八月の中ば、憲造から、夏休みが出たので近い中に帰省するとの手紙が山口の所に届いた。

山口はすぐ幸一等に知らせると、何時か楠峠に集まることかの話が伝えられた。

暫くする中、謙一からも帰る連絡が幸一に知らされたのだった。

幸一が山口と合い
「一年合えなかったから早く憲造さん等と話をしたいな、峠には来た次の日位に出来たら集まる様にしたら……」
山口もすぐ同意した。

再び

再びアメリカとの戦争から二度目の夏休みを迎え、九人は八月の中ば楠峠に集まったのである。

今年も暑い日だった。

幸一等四人は、七月に洞窟に行った時の様にもし洞窟にと思った時のため、懐中電燈、網等を準備して峠に向った。

集った所で、憲造の白い軍服姿を中心に輪となり楠の木の日影の下で一年ぶりに顔を合わせた。

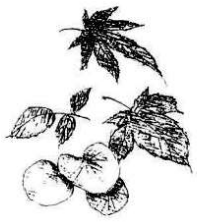
九人は顔を合わせた嬉しさが目を輝かせて皆の顔をみるなり、笑顔に九人の汗を涼風が心よい感じをさそった。

憲造が
「一年ぶりだな……　皆も大分色が黒くなったな……
俺も大分本校のこともわかってきてな、今年は飛行機に乗ることになった。
と云っても二枚羽根の練習機だ、「赤とんぼ」とも云う人もある。
まだ俺は操縦桿もにぎっていないが、秋頃には操縦出来ると思う。
二人で来るので、機長の前で、練習生は後に乗って色々教わっている所だ。その中操縦して楠峠の上に来るから、皆んな見てくれよな」
憲造はうれしそうに話をした。
八人は、喜んで笑顔になり、健一が
「俺のいる名古屋の方まで飛んで来いよ」
と云ったので大笑いをした。
「戦争は必ず勝つぞ」憲造は大声の様に叫んで、
「南方をどんどん占領している様だ。
シンガポールも二月には攻略して、昭南港と叫ばれる様だな
所で、洞窟へは行ったか」
幸一が、七月行った話をすると、憲造が、見たくなった話を出したので、幸一が、
「今度はいつ行けるかわからんから今から行こうか」
と皆を見渡して云うと、皆は、
「行ければよいが……」
「準備はできている」
幸一が云うと、憲造も
「それは面白いな。又、何か発見出来るかもしれんぞ。これからも誰とでも合えば話は何時でも出来るからな」
九人は立ち上り洞窟に向ったのだった。（つづく）



笹ケ崎村（十二）

太田和貞



大潮

平吉が平左衛門を呼びに戻ったとき、当の平左衛門は名主屋敷の長屋門をくぐっていた。

「どうであった？」

待ち兼ねたように、十郎兵衛は平左衛門に聞いた。

「長八の手配り、目配りまことに見事であったと誰もが感心しておりました」

「そうであろう。坎樋の伏せ替えが、できなかったと聞いたが……。できないことを無理にせぬのも名主の心得のひとつと、わしは思っておる。それ故、褒めてやりたい位であった。ところで六地蔵の方は？」

「その六地蔵でございますが、田舟で善養寺まで運んだ六地蔵を井戸の水で、きれいに清めましてから、お和尚さまに御霊入れをしていただいたそうです。それから、四つ辻の元の場所にお立ちいただいたと聞きましたので、わしも見て参りました。六体のお地蔵さまがさっぱりとしたお顔で四つ辻に立ってござりました。その胸元には真赤な涎掛けまでして……」

「なんと、真赤な涎掛けを……」

「はい。可愛らしい涎掛けをしておりました。長八と仲のええ、きくという女子がつくったそうです」

「きく？　はて、どこの家の娘だ？……」

「鶴代の上の惣右衛門の孫娘で、ことし十七歳だそうです。きのうの昼飯どきに、茂兵衛から長八との仲をからかわれて、顔が真っ赤になったと平吉は言っておりました」

「仲がええのか？……」

「そうらしいようで、長八の隣りに座わったことやお地蔵さんの涎掛けまで用意したことなどを考えますと」

「うーん。それは困った。わしも、しげも長八にわしたちの縁戚の娘と娶せようと心積もりをしておったが」

「長八ときくとの仲は、わしがそうかなと思っただけでして……」

「いいや、涎掛けが二人の仲を示しておるわ。しげ、ちょっとこっちへきてくれ。長八に、きくという好きな娘がいるそうな……」

「二十二にもなった若者に、好きな女子がいないのが不思議。若い娘から好かれぬ若者では、うちの跡継ぎになる資格はございません。長八ときくを夫婦にさせて、夫婦養子にすれば済むことです」

「ふーん。夫婦養子とな……。それでは、わしの血がつながらぬ……」

「旦那さまとわたしの間に、赤子が産まれなかったのが、わたしたちの不幸。この家の不幸せでした。たとえ、血がつながらなくても、この家に赤子の泣く声が聞こえ、むつきが風に揺れるのを思い浮かべるだけで、わたしは心が躍ります。赤子をわたしたちの胸に抱かしてくれるだけで、いいのではありませんか……。それとも、旦那さまは血にこだわって、長八ときくとの仲を裂いて無理にわたしたちの縁戚の娘と一緒にさせるおつもりですか……。それでは長八がかわいそうです」

「うん。それもそうだが……」

「もし、仮に、長八がわたしたちの縁戚の娘と一緒になってくれたとしても、この家に住み、旦那さまとわたしたちに囲まれ、おまけに自分の女房までがわたしたちの縁続きであれば、長八の心は休まるときがありません。きくという娘をえびにして、長八という鯛を釣り上げては、いかがですか……」

十郎兵衛は、しげのことばに圧倒されていた。

（泥海で死にかけてから、しげは強くなった）

と十郎兵衛は思った。

「平左衛門、きくという娘がどんな娘か、よく調べてわしに知らせてくれ」

十郎兵衛のことばが、しげに対する返事でもあった。

「きょうの大潮が引き始めるのは、なんどきかな」

先頭の田舟の胴の間に座わっていた十郎兵衛が、棹をさしていた長八に聞いた。

「もうそろそろ始まるころかと思います」

長八自身も、

（ゆうべが満月だったから、潮が動き出すのは朝の七ツ半（午前五時）過ぎだろう。大潮が始まれば、その潮に乗って泥海は一気に引いていく）

そうあって欲しいという願いを、そんな馬鹿なことが起こる筈はないと打ち消していた。それを十郎兵衛に大潮のことを聞かれて（お名主さまも同じことを考えていなさったのだ）、と心強く感じた。

葛西の海辺に近い、このあたりは一日に二回、潮の満ち干があり、潮が満ちてくれば用水堀に水が溢れ、潮が引けば用水堀が干上がったりした。長雨が降り続いて、見渡す限り泥海となって初めて迎える大潮だった。

囲堤（かこいづつみ）で囲まれた笹ヶ崎村は、その外側の泥海が引かなければ、村はいつまでも泥水に沈んだままだった。

囲堤に築いた土俵のおかげで、村が濁流に流されるのは防ぐことができた。しかし、囲堤の内側にたたえられた泥水は田畑を水の底に沈めていた。

昨夜、長八たちから、

「お名主さま、泥水が三寸程、引きました」

と知らされて、十郎兵衛は、

「来たか……」

と目を輝かせた。

「あすの明け六つ、わしが合図したとき、動ける村人全員が篠崎村との村境に集まるように伝えて欲しい。その折、鍬、もっこ、もっこ棒なども忘れんように念を押して置いてくれ。もしかしたら、わしの思わく違いに終わるかも知れんが……」

十郎兵衛は平左衛門に、村中に触れ回らせた。

長八と十郎兵衛の乗った田舟と平吉と甚兵衛の乗った田舟は村を縦断している松戸道に沿って南に下った。

稲荷祠の脇で田舟をおりた十郎兵衛たちは囲堤の上に立った。隣り村の篠崎村も、そのまわりの村々も褐色の泥海に浮んでいた。

そのはるか向こうに、江戸川の氾濫を辛うじて食い止めた江戸川堤が水の上を泳ぎ回わる長蛇のように、曲がりくねっていた。

体の重い十郎兵衛を甚兵衛と平吉が二人肩車で、松の枝に登らせたあと、長八も「御免」と二人に謝って二人の肩車から松の枝に飛び移った。十郎兵衛に遠慮して、一段低い枝に長八は立った。十郎兵衛は片手で松の枝を握って体を支えながら枝の上で仁王立ちしていた。

茶褐色の泥海が続く、はるかかなたに青い海が見えた。

十郎兵衛は無言だった。長八も黙っていた。こうして小半時（こはんとき）（約一時間）が過ぎた。

「長八よ……」

十郎兵衛は長八に話し掛け、

「大潮はくるのかのう……」

と続けようとして、そのことばを呑み込んだ。

泥海と青い海のせめぎあいに微妙な変化が現れた。

泥海が青い海に押し勝ち始めた。潮が引き始めたのだ。

「平吉！　白い旗をあげろ！」

十郎兵衛は平吉に鋭く言った。

平吉と甚兵衛は長い竹竿に吊した白い布を大きく左右に振った。

「おーい！」

十郎兵衛が叫んだ。

十郎兵衛の呼び掛けに呼応するかのように、村々から次々と白い旗があがり、左右に振られた。

昨夜、十郎兵衛は各名主に大要、次のような急廻状を巡達していたのだった。

待望の大潮の兆し見え候はば、笹ヶ崎村と篠崎村の村境に白き旗を掲げるべく候。

白き旗を見候（みそうろう）村方は、隣り村との南側の囲堤を崩し、村内の泥水を大潮に乗せて、一気に海に押し流す手立てをなさるべく候。一村たりともこの約定を破れば、その村方は泥海に孤立するばかりでなく、今後の村々との付き合いより離脱すること必定と存じ候。

十郎兵衛はこれまで村々を苦しめていた泥海を一気に海に押し流すには、大潮の自然の大きな営みに任せるしかないと考えていた。そのため、

「この約定を破れば、その村方は泥海に孤立するばかりでなく、今後の村々の付き合いより離脱すること必定と存じ候」

とおどしまで掛けていた。

「お名主さま、みんなが田舟に乗って集ってまいりました。ご指示をお願いします」

長八の声に、

（わしのおもわくが万が一にも外れたら……）

思い悩んでいた迷いが十郎兵衛の心からフッと消えた。

「みんなよう集ってくれた。昨夜は満月、一日遅れのきょうは大潮。その大潮も、さきほど動き始めた。ほどなく、このあたりの泥水も引き始めよう。囲堤の土俵を二段、崩してこれまで村を苦しめていた泥水が流れやすいようにしようぞ。最初は泥海が村に入ってくるが、そのうち引き始めるから心配はいらぬ」

村人は、またたきもせずに十郎兵衛の顔を真剣に見上げていた。

「掛かれ！」

十郎兵衛は勢よく右手をあげた。

「長八、土俵をはずすのは十間位でよかろう。わしはここで潮の引くのを見届ける」

十郎兵衛は長八に言い付けた。

「へい！」長八は三間ばかりの高さの松の枝から身軽るに飛びおりた。

土俵をはずす毎に、泥海はどっと村に押し入り、村人が、「おうっ！」と声を挙げた。

「心配するでない。引き潮のうねりは隣り村まで来ておるわ。まもなくこの村までやってこよう。わしが思った以上の大潮だ」

十郎兵衛のことばが終わらぬうちに、村に流れ込んでいた泥水が動きをとめ、次の瞬間、流れの方向が変わり、村から囲堤の外へ逆流し始めた。

緊張して水の流れを見守っていた村人たちが、「ワーッ」と一斉に喚声を挙げた。

「お名主さま、お名主さま！」村人たちは口々にそう叫びながら松の枝の上の十郎兵衛を見上げた。

その間にも、引き潮のうねりは物の怪のように、物凄い速さで北上していった。

一刻（二時間）して村の周囲を囲んでいた囲堤が姿を現した。さらに半刻して、村の中央を南北に縦断している松戸道が浮び上がってきた。たんぼの稲がことごとく地面に折れ伏しているさまを見て、誰もが「あ、あーッ」と悲鳴をあげた。

「悲鳴なんぞ、あげてる場合ではねえぞ。これからどうやって、この急場をしのぐか、お名主さまを中心に、みんながまとまることが、いちばんでえじだ。そうでなければ、泥にまみれた稲のように、地面に倒れっぱなしで、起きあがることはできねえぞ！」

長八は村の男や女たちの肩を叩きながら説いて回った。

「みんなよく聞け！　長八の言う通りだ。ただ泣いているだけでは、米は一粒もとれんぞ。水に漬かり、地面に倒れた稲になんとしても立ち直ってもらうためには、わしらが心をひとつにして立ちあがることだ」

十郎兵衛は松の木を背にして、村人に説いた。

「お名主さま」

平左衛門が十郎兵衛の袖を引いた。

「なんじゃ」

振り返った十郎兵衛に平左衛門は、

「下鎌田のお名主さまがおいでになりました」

と言った。

「大惣代さん、谷河内村が今頃になって囲堤を崩して自分の村の水を下に流すというので、わしの村ともめておりますだ。どうぞ仲裁してやってください」

下鎌田村の名主の孫兵衛が、そう言って頭を下げた。

「わしが白旗をあげたとき、囲堤を崩さなかったのか」

「はい、囲堤を崩せば村に水が入ってくると言い張って、だんまりを決め込んだ癖に、まわりの村の水が引いたのを見て、慌てて囲堤を崩しに掛かったので、わしが談判して、今のところはやめさせています。谷河内村が囲堤を崩せば、その下に当たるわしの村が再び水浸しになるので、わしの村と谷河内村が囲堤の上で睨み合っています」

「この約束を破れば、その村は泥海に孤立するばかりでなく、村々との付き合いからも離脱することは必定と、わしがわざわざ書き添えたのを無視したな」

「左様でございます」

孫兵衛は自分が怒られたように、深々と頭を下げた。

孫兵衛の田舟に乗ろうとする十郎兵衛に、

「崩した囲堤は、このあと、どのようにしたらよろしいでしょうか？」

と平左衛門は聞いた。

「あの広い海が、これしきの泥水を呑み込んだくらいで、腹がいっぱいになる筈はないわ。囲堤は崩したままで、泥水が流れるだけ流した方がよい」

十郎兵衛は自信をもって、そう言い切った。

十郎兵衛と孫兵衛の乗った田舟が谷河内村の囲堤に着いたとき、谷河内村の名主藤左衛門が両手をあげて、

「まあ、まあ」と睨み合っている下鎌田村と谷河内村の村人の間に入って、必死になだめているところだった。

藤左衛門は十郎兵衛の顔を見るなり、

「大惣代さん、申し訳ありません」

と、駆け寄ってくるなり、十郎兵衛の前に土下座した。

「大惣代さんのお怒り、まことにご尤もでございます。わしにはお詫びすることばもありません。しかし、ひとことといわしていただければ、囲堤を崩さなかったのは村のためを思って致したことです。どうぞ、このことだけはご承知ください」

藤左衛門の思い掛けない土下座姿に、村人たちは呆気にとられた。

「藤左衛門さんにそのような土下座をされては、このわしが困ります。さあ、さあ、お手をおあげください」

十郎兵衛は藤左衛門に手を貸して、地面から立ち上がらせた。

「藤左衛門さん、今後のおつきあいは葬式と火事のときだけに限らせていただきましょう。それをご承知で、わしの白い旗を無視されたのでしょうから……あの白い旗をあげるのに、わしは命を懸けておりました。それを黙殺されて、土下座されたからといって、簡単に赦しては、わしの命が泣きます。藤左衛門さん、わしも触次、大惣代として代官所で何度も土下座を繰り返してきました。村のため、百姓たちのためと思って、下げたくない頭を下げてきましたが、その土下座が報われたことは、一度もありません。いくら土下座をしても、土下座は無駄なのです。土下座をした方が負けなのです」

十郎兵衛のことばは、いつになく厳しかった。

（長八も、わしと同じように何度も土下座を繰り返すのだろうか？……）

フッと、そんなことが思い浮んだ。

十郎兵衛のあまりの厳しさに、孫兵衛も藤左衛門もことばが無かった。

当時、村では農作業や用水堀などの手入ればかりでなく、私生活についても共同で行なわれることが多かった。

そのうち、特に大事なつきあいは、子どもの誕生・成人・結婚・病気・葬式・法事・火事・水害・旅立ち・家の普請の十種類であった。

「今後のおつきあいは、葬式と火事のときだけに限らせていただきましょう」

と十郎兵衛が言ったのは、いわゆる村八分の意味であっ

た。

葬式と火事以外の八つのつきあいはしないという制裁であった。

藤左衛門は青くなった。孫兵衛もおろおろした。

「大惣代さん、そればかりは、どうかお赦しを」

藤左衛門は十郎兵衛を見上げて、かすれた声で言った。

「大惣代さんのお怒りは、ご尤もですが、村八分だけは勘弁してやってください」

孫兵衛もことばを添えた。

藤左衛門が村八分になれば、名主の会合にも出席できなくなり、事実上の解任を意味していた。十郎兵衛が命を懸けたという差図に、背いたのであるから名主を解任されても、藤左衛門には異議をさしはさむ余地は無かった。

しかし、名主が村八分になったという不名誉が谷河内村のすべての百姓たちに、のしかかることになった。

それだけは、なんとしても藤左衛門は避けたかった。

しかし、どうやって避けられるのか、藤左衛門にも分からなかった。

「大惣代さんがあの白旗に命を懸けたのであればわしの村の百姓たちの名誉のために、わしも命を懸けます」

藤左衛門は腰に差していた小脇差を抜いた。

「あッ。藤左衛門さん、はやまってはいけません」

孫兵衛が体ごと藤左衛門にぶつかり、藤左衛門の手から小脇差をもぎとった。

「わしは今の今まで、藤左衛門さんに反対してきました。しかし、藤左衛門さんが谷河内村のために命を懸けると言われては、わしも譲歩しなければならんと思います。囲堤を崩して流れ出た泥水は用水堀を使って、下に流しましょう。用水堀を流す分には、わしの村も文句は言いますまい。用水堀までの水路の確保は谷河内村の負担ではどうでしょうか？」

孫兵衛は藤左衛門の目を見ながら言った。

藤左衛門は、かすかにうなづいた。

「大惣代さん、藤左衛門さんも承知してくれましたので、いかがでしょうか？」

「おふたりがよろしければ、それでいいのではありませんか……。わしは孫兵衛さんに呼ばれて、ここに来たのですから、これで騒ぎが治まれば、それにこしたことはありません」

「大惣代さん、葬式と火事の件は……」

孫兵衛の問いに

「すべて水に流しましょう。泥水を流すことから起った騒ぎですから……」

十郎兵衛は初めて笑顔を見せた。

（つづく）

ねずみ小僧丸楠（十八）

鈴木昭三

私達川の前のがき共はこの前のおたぎりさんの春祭以来久しぶりの大はしゃぎで、おたぎりさんの丸い川石を並べた石段を、息をはずませ先を争って大またで駆け登りました。今日はがき大将から、貸本のいわば最初の利益配当の吉報が届いたのであります。

地ごく耳の発案から始めた貸本の営業は、料金の取りはぐれも、心配された翌日の返本の遅滞もなくて、計画通りに順調で一か月近くたっていました。

一週間の中で始めから貸し出さない日と決めてあった土、日を除いた五日間は、毎日確実に金十銭也の収入がありました。

読むのに時間を要する小説や長編の絵物語り等はやめて、放課後から家に帰って寝る迄の時間で充分に目を通すことの出来る漫画本を選んだ地ごく耳の企画の良さは勿論ですが、本を借りる側に厳しい決まりを守らせることの出来たのは、小田郷村小学校でにらみの利く番長を張っていた私達のがき大将の力も大いにあずかっていたのです。

私達がき共は例の大杉の下の溜り場に、今日の主役のがき大将と地ごく耳の二人に向い合って地面に坐わりました。がき共が落ち着いて静かになり、がき大将が口を切りました。

「お前ら、今からおれ達の秘密の宴会を始める。大声を出さんように、静かに行動せよ。これから青木葉を一枚とって来て、地ごく耳の前に一列に並べ。さあ早く」

がき大将の指示に、私達は周わりの灌木の茂みの中からちぎって来たつややかで大きな青木葉を掌に乗せて地ごく耳の前に並びました。

地ごく耳は大杉の根方に置いてあった四角な白いボール箱から饅頭を取り出すと、葉の上に二つ重ねて置きました。

白い薄皮から中の餡の小豆が黒く透けて見える田舎饅頭でした。

続いて隣のがき大将は、紺がすりの着物の懐から、絵

柄の異る煙草の箱を二つづつ取り出し、封を切ると、夫ぞれの箱から一本づつ抜き出して、饅頭の隣に置きました。

がき共は真っ白でいやに長く見える新品の煙草に目をみはると、がき大将もご機嫌の笑顔で言いました。

「今日は露人館の吸殻じゃないぞ。チェリーとエアシップだ」

チェリーとエアシップは露人館の吸殻の中ではがき共に最も人気のある煙草でした。青木葉の手塩皿の上で坐わりの悪い二本の煙草を、がき共は言い合わせたように左右の耳に挟みました。

「なあみんな」

がき大将が声を掛けると私達は彼の周わりに輪になって坐わりました。

「貸本のお陰で約束通り煙草と饅頭を買うことができた。でも貸本のことは学校の先生にも村の大人の衆にも絶対秘密だぜ。先生に尋ねられたら、図書館みたいなことやってるずらよって、とぼけてすぐに逃げよ。貸本でもうけて、煙草や饅頭を買っただなんて、親にも兄弟にも言うなよ。ええな」

「はい」

私達は好物を前にして思わず返事がはずみました。

「ば、ばか！　参詣人に聞えたら、どうするだ」

地ごく耳は立ち上ると両手を広げて静かにとみんなに合図しました。

「煙草も饅頭も郵便局の若おっか様にお願いして、隣町から通っている局の女の事務員に、隣町で買って来てもらっただぜ。若おっか様はおら達の味方だで心配はいらん。もし村のデパートなんかで買ったもんなら、怪しまれてすぐに村中の評判になっちゃう。川の前のがき共め、又おたぎりさんの賽銭泥をやりやがったかって、駐在までやって来るかも知れん。煙草は二本とも残さずに吸ってしまう。饅頭も持って帰っちゃいかん。ええな」

私達はてんでに顔を見合わせこっくりしてうなずきました。

地ごく耳の話の中の若おっか様とは、去年の十一月に女の子を産んで以来の月丸ねえさんの郵便局内での呼び名であります。

ここにいるがき共は、恐らく太平と私の二人を除いて、新品の煙草を手にしたのは初めてだったと思います。露人館の吸殻は大半が短くて、たまに長いのがあっても押えつけたように折れ曲っていたり、醤油や何かの汁のしみがあったり、時には唇のしわの跡そのままの口紅がついていたりして、火を着ける前からやにくさいのです。煙草の銘柄の持っている独特の味や香りも殆んど消えうせていたと思います。でも永年吸殻でも専門に吸い続けていると、がき共の感覚も自ずと肥えてくるとみえて、かすかな味や香りの残渣を感知して吸殻にランクづけしていたのです。がき共の人気はチェリーとエアシップだったのです。

地ごく耳が大杉の根方にある洞の中にかくしてあったマッチを持って、みんなの煙草に火を着けに廻わって来ました。がき共の掟でマッチは、がき大将と地ごく耳の二人しか使えなかったのです。

私は片方の耳から煙草をはずして口にくわえました。地ごく耳が隣のがきに火をつけた燃えさしのマッチ棒を私に差し出しました。

私は大きく息を吸い込みました。口の中の煙は遠くから漂ってくる仁丹の香りに似ていました。

二回三回吸い込む中にこれは誰かのにおいだったような気がしました。目を閉じて吸う息を小刻みにしてみました。

「ショーゾ、アカツキナケレバ、エアシップヨロシ」

思い出しました。異人さんのにおいでした。

露人館で遊んでいた私に顔馴染みになっていた赤ら顔のイワノビッチ先生が五十銭のギザを私に渡したのです。

私は村のデパートにとんで行って、どっちかを買って煙草と釣り銭をイワノビッチ先生に差し出しました。

「アリガト、ショーゾ」

イワノビッチ先生はもくず蟹のように五本の指に金色の毛の生えた大きな手で、私の手首を摑むと私の掌の煙草だけを取って、後の釣り銭を握らせてくれたのです。

私はうれしくなりました。

「先生、おら、くうにいに教わって、マルクスも弁証法も知ってるよ」

イワノビッチ先生の笑顔が消え、金色の眉毛に囲まれてくぼんだ青い両眼を飛び出しそうにまん丸にすると両腕を左右にぱっと広げました。

「オオ、オッカナーイ」

イワノビッチ先生はすぐに笑顔に戻って、お帳場の前を小走りに、片手でお尻をぽんぽんたたきながら階段を昇って行ってしまいました。

あの時のイワノビッチ先生の吐く息が、私の今吸っている煙草と同じにおいだったのです。

「チェリーはヒステリー先生のにおいがする」

誰かの声で私は夢からさめたようにあたりを見廻しました。

地ごく耳が指にはさんだ煙草に顔を近づけて銘柄の名を確めるようにして、それから煙草を口にくわえました。

「そうだそうだ、これはヒステリー先生と擦れ違った時のにおいだ」

地ごく耳の言葉にがき共は口にしている煙草がどっちか確かめもしないで一斉にわざとらしく吸い始めました。

地ごく耳はも早や川の前ではがき大将に次ぐ実力者になっていました。

「うーん」

がき大将も口から細く長く煙を吐き出しました。

「実はおれもさっきから、こいつはヒスのにおいだと思っていたわい」

がき大将はにきびだらけの頬を気のせいか少し赤らめました。彼だけは彼女をヒスと呼び捨てにしました。

「ヒステリー先生だ。ヒステリー先生のにおいだ」

がき共も口ぐちにお追従を言いました。

「しようにい、これがヒステリー先生のにおいだっつらか」

突然太平が側から私の鼻先にチェリーを突きつけました。私は太平のチェリーを一服してみました。

「どうだった」

太平が私の耳もとで尋ねました。私も太平の耳もとで

「うんにゃ」

と、首を横に振って二人で顔を見合わせました。

「なあしようにい、ヒステリー先生は竹の家の前からどこへ連れ去られたずらか。この間校長先生と一緒に風呂へ入った時に、ヒステリー先生はどうしているずらかってきいたみたけど、ボクも知りませんって言ってたぜ。でもな、くうにいは今頃は外国にいるかも知れんって。ヒステリー先生はあかだでロシヤかな。それからしようにいにゆっとかにゃいかなんだ。くうにいが預かってるヒステリー先生の手風琴な、この頃十五夜がブカブカひいてるぜ」

「くうにいは知ってるのかえ」

「ああ知ってる。曲師の女の人が三味線で、十五夜が手風琴でかっぽれをやって、くうにいが鉢巻きしておどってたよ」

「ヒステリー先生がそれを見りゃおこるずらやあ」

「おらだってヒステリー先生のものを勝手にひいてる十五夜におこれるよ。それにうちの女中衆もな、十五夜はずうずうし過ぎるって、文句言ってたよ」

私は太平と話している中に、手風琴はほんとの預り主の母に戻して貰おうと心に決めました。

私は二本目の煙草に火を着ける頃には、少しょう煙草に酔ってしまったのか、まるで天女の羽衣を身にまとってでもいる様で絶えず体が揺れて地面から浮いているような気分でした。ゴールデンバットとは違う感じでした。

私の周囲では、がき大将も地ごく耳も、その他のがき共もみんな一様に押しだまり、丸で分別盛りの中年男のような顔付きで、ただひたすら煙突のように煙を吐き続けていました。

以前に吸っていた吸殻は、元の長さの半分や三分の一ぐらいにちびっていてそれを吸い慣れていたがき共には、新品の長い煙草は吸いでがあり過ぎて少しょうもて余しているようでした。

饅頭にも手を出さずに尤もらしい顔つきで煙を吐き続けているがき共の集団は、脇から眺めたら全く異様としか言いようのない姿だったに違いありません。　つづく

漢詩

潮騒録（廿七）

鯨游海

秋風引

平成十一年八月

青青梧葉染清漪
一陣涼風雁未飛
數點晩鐘山野睡
落紅殘紫闇參差

押韻・漪　飛　差

〈秋風の引〉

青々たる梧葉　清漪を染め
一陣の涼風　雁いまだ飛ばず
数点の晩鐘に　山野ねむり
落紅残紫　闇に参差たり

〔注　解〕

梧葉は古来秋風に最も敏感な植物であり「桐一葉落ちて天下の秋を知る」のである。

漪はさざなみ。残はすたれたさま。参差は不揃いなさま、散らばっているさま。

口語訳してみよう。

青々と繁茂している梧葉が清流のさざなみを青色に染めている。折から一陣の風がさっと吹いて爽やかに過ぎ去った。そう云えばもう秋も近いが、雁の群が南の方から飛んで来るにはやや早い。

夕暮となり数点の晩鐘が遠くから聞えて来たが、山も野もすでに睡っているように静かである。

夏精一杯咲き誇っていた花々も散り始め、或は紅に或は紫に闇路を彩どっている。

なおこの詩は日本経済新聞朝刊に連載された辻井喬氏の小説「風の生涯」の文中にあった長編の古詩をアレンジし、七絶の近体詩に仕上げたものである。

☆燃え尽きてはらりと散りぬ花びらの
なお赤々と闇路彩どる

刑部郎中等於越後七千萬兩之雪看酒
平成十二年二月

白馬朱衣鐵面皮
先遊後樂不堪嗤
七千萬兩雪看酒
天網恢恢今始知

押韻・皮　嗤　知

〈刑部郎中ら越後にて七千万両の雪看酒〉

白馬に朱衣の　鉄面皮
先遊後楽　嗤うに堪えず
七千万両の　雪看酒
天網恢々たるを　今始めた知れり

〔注　解〕

詩題の刑部郎中は唐代の法務、刑罰、警察の局長。次官は侍郎、朝刊は尚書。ここでは関東管区警察局長と新潟県警本部長を指す。

白馬は贅沢な乗物をイメージする。李白・少年行
五陵年少金市東　五陵の年少　金市の東
銀鞍白馬度春風　銀鞍白馬　春風を渡る
落花踏盡遊何處　落花踏み尽くして何処にか遊ぶ
笑入胡姫酒肆中　笑って入る　胡姫酒肆の中

同時代の崔國甫も長楽少年行を作り白馬を詠んでいる。

遺却珊瑚鞭　珊瑚の鞭を　遺却して（忘れて）
白馬驕不行　白馬　驕りて行かず
章臺折楊柳　章台（繁華街の地名）　楊柳を折る
春日路傍情　春日　路傍の情

朱衣は高官の比喩。一般下級官吏は青色の制服を、高官は朱色の制服を着用した。鉄面皮は厚顔無恥なずうずうしい徒輩。先遊後楽は范仲淹・嶽陽樓記「先憂後樂」を捩った語「人より先に憂え、楽しみは人より後からする」より借用し意味を変えた。

天網恢恢は老子・七三より。天道の厳正さを云う。

口語訳してみる。

高級乗用車に乗った警察の高官、この図々しく厚顔無恥な徒輩め。（幽閉中の少女救出の眞最中に）卒先して「先憂後楽」すべき立場にあると云うのに「大事仲を放擲して眞っ先に遊び、雪見酒や麻雀に深夜迄楽しんでいた」とは。何と滑稽な事であろうか。嗤いを禁じ得ないし又許せない。

（国民が怒り二人は職になったが、本来二人が受取るべき退職金は計七千万円であった）

一夜の雪見酒の値段が七千万両とは。警察の高官が「天の法網はこの世をあく迄広く掩っており不正や悪を見逃す筈の無い事」を今始めて知ったとは。

☆幼な児の救われし時天地も
人も草木も鬼も泣きしに

春夜臨同期會詠懷二首連以其一
平成十一年三月

滿堂咲語拍肩聲
黃鶴飛杯壺自傾
友嘆秋霜何處得
我憂琴未似淵明

押韻・聲　傾　明

〈春夜同期会に臨んで懐を詠む二首連作　その一〉

満堂の笑語　肩を拍く声
黄鶴　杯を飛ばして　壺おのずから傾く
友は嘆く秋霜　何処にて得たるやと
我は憂う琴いまだ　淵明に似ざるを

〔注　解〕

肩を拍く、は「拍肩執袂」より。肩を拍き着物の袂を執る＝友人同志が睦み合うさま。

黄鶴は居酒屋の壁に仙人が描いた鶴で、客が手を拍くと壁から抜け出して舞ったと云う。

壺自傾は、陶淵明の句を引用「秋菊有佳色　裛露掇其英　汎此忘憂物　遠我遺世情　杯盡壺自傾…」

秋霜は白髪。李白・秋浦歌「白髪三千丈　緣愁似箇長　不知明鏡裏　何處得秋霜」より。

結句の琴は、文人には欠かせない添景で淵明の詩に度々登場する。淵明は弦の張ってない琴を常に携えて詩を吟じたと云う。琴と詩は一対のもの。

同期会の会場は笑い声と肩を拍き合う声で一杯だ。あの伝統にある黄鶴も舞い、友の手から手へ酒杯を運んでくれているかのようだ。

何時の間にか酒がからっぽになり酒壺も傾いた。

さて友人達は互に頭髪が白くなった事を嘆き合っているが、私はそれもさる事ながら、自分の詩作が一向に陶淵明のような具合にいかない事がもっと切実な憂の種なのである。

☆さんざめく宴の卓に寝ころべる
酒壺の如く吾は酔いけり

又・二首連作其二
平成十一年三月

彼呟晴耕雨讀身
君云盡日與魚親
殘年愛惜應歡樂
恨是詩魔我一人

押韻・身　親　人

〈又・二首連作その二〉

彼はつぶやく「晴耕雨読の身」と

君は云う「尽日魚と親しむ」と
残年愛惜して　まさに歓楽すべし
恨むらくは是詩魔　われ一人なるを

〔注　解〕

晴耕雨読とは、晴れた日は田畑を耕やし、雨の日は家で本を読む事。転じて、世間にしばられない気ままな生活を云う。読者には陶淵明の「田園に還る」をイメージしていただくべく用いた。

承句は魚釣り三昧の様子を云う。

転句残年は、残された年、即ち余生。

結句詩魔とは、詩を異常に好み、そのとりこになった人を云う。ここでは作者の私を指す。中唐の大詩人、白楽天の造語と云う。

口語訳してみよう。

彼は呟いていたよ。勤めから解放されて世間に縛られない気ままな日常で、晴れた日には畑を耕やし、雨の時には本を読んでいる生活だと。又君は終日魚釣りに明け暮れているそうだね。

お互に余生を大切にしよう。そして大いに楽しもうではないか。残念なのは詩魔が他にいない事だ。

☆嬉しきは暖かき酒酌がれつつ
　覚えず佳句のひらめけるとき
祝婚歌・贈向島櫻茶屋麗人與櫻島薩摩
隼人華燭之典
　平成十一年九月

屋上仰看櫻島青
胸中一覺宿金星
林間紅葉煮茶釜
向後爲君煖酒瓶
　押韻・青　星　瓶

〈祝婚歌・向島の桜茶屋の麗人と桜島の薩摩隼人の華燭の典に贈る〉

屋上に仰ぎ看る　桜島の青きを
胸中ひとたび覚ゆ　金星の宿れるを
林間に紅葉もて　茶釜を煮しが
向後君が為に　酒瓶を煖ためん

〔注　解〕

林間に紅葉とは、白居易の詩「林間煖酒焚紅葉　石上題詩掃緑苔」より引用したが何と美しく風雅な対句であろう。中晩唐詩の眞髄を見る想いがする。

なおこの詩は、新郎の故郷桜島と新婦の実家向島桜茶屋の文字を句中に織り込んで作った。

後記短歌の竹露とは酒の異名。

☆君が為緑苔掃い詩を賦さん
　紅葉を焚きて竹露酣せん

≪漢詩の流れ18≫中唐の詩人③――白居易その一

字は樂天。酔吟先生、香山居士と号した。四歳年長の韓愈と共に中唐を代表する文人である。下邽（陝西省）の人であるが自からは太原（山西省）出身と称した。下邽の白氏が名門でなかったからと云う。当時名門出身である事が官僚として栄達していく上で有力な条件であった。韓愈も懐州南陽（河南省）出身なのに昌黎（河北省）と自称したのに似る。

父は一介の地方官で各地を転々とし生活は楽ではなかった。後年の詩に「可憐少壮日　適在貧賤時」と詠じている。二七歳で郷試に合格、二八歳で進士に及第し三年後、校書郎に任官された。校書郎は古文書の校正で、文の国中国ではエリートコースであった。

豊かな才能と併せ、生涯を通じて上司運に恵まれ、著名詩人の中では最も幸福な人生を全うした人であろう。家庭的には実子の死や、公務では度重なる左遷を経験したが。官位も各州刺史（知事）や刊部侍郎（法務次官）、秘書監（国会図書館長――当時では要職で阿部仲麻呂も晩年に歴任している）最后は刊部尚書（法務大臣）正三品と栄達した。因みに韓愈は正四品上、王維は正四品下、阿部仲麻呂は正三品、死後正二品であった。刊部尚書の時自から願い出て致仕（辞職）しその四年後七四歳で病没した。韓愈が五四歳で没したのに比しても長命である。

日本文学に与えた影響は大きく、平安朝の文人＝高級官僚は白樂天が憧がれの的であり、「白子文集」はベストの教科書であった。漢学者一家大江千里の詩文にも多くの引用がみられるが、最も熱愛し衷心私淑したのは菅原道眞であった。道眞の詩文到る所にその影響が認められるが、菊を賞でる趣味迄もそっくり眞似した。その慕う事父の如く兄の如くでいじらしい程である。時代的には、白樂天没して一五〇年後の事であった。藤原為時は紫式部の父で著名な漢詩人であったが、「白樂天を夢にみて作った詩」と云うのがあり、高階積善や中書王（具平親王）と昌和している。紫式部や清少納言の白樂天に関わるエピソードは周知の通りである。

では何故白樂天のみが突出してわが平安朝文壇を風靡したのであろうか。

先ず第一に平易な詩文であり日本人に判り易く受け入れられた。第二に親仏的で仏教を尊崇した国の施策に合致していた。因みに韓愈は排仏思想であった。第三に樂天の詩のうち閑適詩、感傷詩、雑律詩が特に好まれ世に喧伝された。樂天自身はこれらは「採るに足らぬ」としているが彼の本領であった諷諭詩――杜甫を次ぐ社会詩で社会の底辺を詠み悪政を批判したもの――兼済の志を述べた詩はわが国では広く流布する事はなかった。これは為政者には好都合な事であった。

後進国日本の封建的な貴族政治の下では止むを得ない事であったろう。

近藤重蔵・富蔵の生涯と其の時代（二十八）

第一部　北方探検近藤重蔵　下

第一章　重蔵の栄華と失脚

三　択捉島の開拓経営

金子正義



（一）

寛政十二年（一八〇〇）の春が近づき、厳冬より蘇えったように、人も森の獣も山野の鳥も生き生きと活動し始めた。

勇払で越冬した山田鯉兵衛は、様似で越年した近藤重蔵や、昨年政徳丸で新たに択捉島要員として着任した、富山元十郎等が待機している様似の番役所に合流して択捉島開拓の渡航準備を始めた。

三月下旬に入ると択捉島開拓の大小の船舶が次々と入港して来た。

昨年択捉島航路を開いた高田屋嘉兵衛の持船・雇船は御用船として日の丸の船印が赤柱のメインマストに立ててあった。

官船は五隻あって、北洋航海向けの特別仕立とする為に、尼崎で建造された三百五十石積の戦闘船（箱船）瑞穂丸・柔遠丸の二隻で、連絡用の飛船が乗せてある。荷物船は三隻共に七百石積で、其の建造費として箱船五百両、荷物船千両が幕府より支払れている。

船頭以下の乗務員の日当等も航海費として、一航海で一隻三百両である。

三隻の荷船も辰悦丸と同じく高田屋嘉兵衛の持船として建造費も航海費も出ている。

官船五隻に従って図合船、鯨船等四隻も率いられていた。

高田屋嘉兵衛は船団を統括するので弟の金兵衛を船頭

とし、各船には船頭・水主・漁夫・人夫等が乗船していた。

近藤重蔵が、昨年の択捉島航路の按検の報告を、高田屋嘉兵衛に江戸に出て、蝦夷地御用役現地司令の松平忠明に直接拝謁して報告させたので、嘉兵衛を只者でないと見て、択捉島開拓に要する資材官物を運送する役を嘉兵衛に命じたのである。

嘉兵衛は国元の兵庫に戻って、江戸で積み込む予定の米塩・衣料等の官物の他に、蝦夷地本島や、択捉島得撫島の開拓資材・設営材料・器具農具・武器火薬は勿論、海産物加工用具・樽・莚・俵・叺等に至る迄の物品や、漆器具・計器衣料針等の細々とした日用品や、酒煙草の如き物迄積み込んだ。

斯うした官物以外の物品は、兵庫より出帆して蝦夷地に至る迄の途中に寄港する湊々で、其の土地の特産の酒・煙草・蠟・紙・薬品・漆器・木綿・砂糖等々を積み込むのであった。

択捉島よりの帰りには、空船でなく箱館の基地に入り、蝦夷地の三品と云われる鮭・鰊・昆布は勿論、長崎貿易に出す俵物（煎海鼠・干鮑・鱶鰭）も積み込む予定である。其の差益は高田屋の裁量とされる訳である。

高田屋の蝦夷地航行の根拠地箱館は、寛政十年の蝦夷地見分隊で、近藤重蔵が行った頃には、既に箱館港も市街地も松前港よりも大きな東蝦夷地の重要な港町として発達していたが、寛政四年根室に露国のエカテリーナ二世号が入って、翌年箱館港に廻航したが、大船を横付にする埠頭等の港湾施設等は無い状態であった。

寛政八年、摂津兵庫の高田屋嘉兵衛が、千五百石積の辰悦丸を松前より廻航させて以来、箱館の港湾施設は高田屋嘉兵衛が自費を投じて次々と構築して、海産物運輸の基地としたので、港に出入する船舶も多くなり、廻船問屋も増加して港町には、長崎屋半兵衛店、角屋吉右衛門店、加賀屋宇右衛門店、秋田屋喜左衛門店、若狭屋宗太郎店、亀屋武兵衛店等が軒を並べ、東蝦夷地は国後島根室厚岸。西蝦夷地は、石狩・江差等の海山の幸を運んだ。

高田屋嘉兵衛は、弟の金兵衛に箱館に廻漕店を開かせて運輸の基地にしたのである。

今度も高田屋の船舶が箱館に入った時、辰悦丸を中心とする船団の盛大さを見た箱館奉行所に越冬していた蝦夷地御用役の寄合、村上三郎右衛門常福が、蝦夷地御用の現地上役として、択捉島に行くと主張して辰悦丸に乗り込んで来たのであった。

蝦夷地御用役の現地司令松平信濃守忠明を始め属僚達は、政徳丸で江戸に引揚げたが、村上三郎右衛門常福は箱館に留って越年し、蝦夷地御用役の詰め役として江戸との連絡に当っていた。

近藤重蔵は、蝦夷地御用役の責務を果す精勤に敬意を

払っていたが、何んと輸送船団に迄乗り込んで来るとは越権では無いかと不審に思って山田鯉兵衛に尋ねると、

「村上三郎右衛門は功名心が人一倍強く、利害打算に聰いので、今度の択捉開拓の利が大であると見通して、浜田屋・秋田屋・若狭屋などの廻船問屋や、二百軒近くの町方商店との結びつきがあるので、村上三郎右衛門は択捉島の開拓に和人商人を介入させる企みからの乗り込みかも知れません」

と案じ顔であった。

近藤重蔵は尤もであると、辰悦丸の艫に居る村上三郎右衛門に、

「今度、寛政十二年より愈々択捉島の開拓経営に入る、態々の見送り辱ない。我等は山田鯉兵衛嘉充と共に蝦夷御用択捉島係として当初より任命されている。然るに貴殿村上三郎右衛門殿は上司として択捉へ参ると申さるとの事、如何なされたのか『昨年松前藩より東蝦夷地を上知して』各地の交易会所は場所請負商より幕府の直捌制に変えたので、会所の統括に当り、新たなる蝦夷地奉行の到来迄、箱館奉行所にて、東蝦夷地全体の統括に当る重責があるのではなかろうか」

と村上三郎右衛門の同行を拒んだが、三郎右衛門は、

「然るが故に拙者が上司として択捉島開拓にも臨むのじゃ」

と飽く迄択捉島行きを固執した。

重蔵は、

「然らば、現地司令の松平忠明様は未だ江戸におられるが択捉島行きを上申なされよ」

と同行を拒んだ。

流石に村上三郎右衛門も重蔵の正当なる主張に従わざるを得なかった。

前々より、長島新左衛門より重蔵の蔭口をあれこれと訊いていたので、近藤重蔵を独断強情の漢と憎しみ、何にかと反目する様になるのであった。

寛政十二年三月二十三日、択捉島開拓船団が様似湊を出港した。官船として辰悦丸は赤柱に日章を染出した吹抜幟を艫端に建て、船尾には家紋の六角の角鹿の印旗を立て、更に武田信玄の「不動如山」云々の文字を染出した旗も並び立てた。

武田信玄の軍旗は、今度の択捉島開拓の船団が択捉島や得撫島の攻略に行く訳でないので必要無いが、新たに択捉係となって政徳丸で来た、松田伝十郎・富山元十郎・高橋治太夫等の要望であった。

彼等にして見れば、江戸より万里の波涛を越えて北方の蛮地に行くのは、北方の赤蝦夷や蠻俗を追い払う為であり、特に千島の奥より羅処和・得撫を犯し、度々択捉にも侵入せんとする露人を追い払う為であった。

是非潮風に信玄軍旗をはためかせて征き度い、と云う

訳であった。

松田伝十郎は下着に衷甲を帯び紅白の麾も携えていた。

近藤重蔵は大人気無いこと乍ら、其の気概や良しと許した。

択捉島開拓船団が厚岸へ向って出港すると、入れ替りのように、兵庫の御影屋松右衛門が船大工を始めとして、港造りの工人を、松右衛門の工造船二隻に乗せて箱館港に入った。

村上三郎右衛門は、余りの事に驚いたが、昨年、蝦夷地御用隊が江戸出立の前に、松平忠明より勘定奉行に、千石船の建造や、箱館の港湾施設の増強を申請していた。

箱館の港湾工事については、三橋藤三右衛門が良く高田屋嘉兵衛の意見を聴いて、兵庫の御影屋松右衛門の才能を存分に生かして、寛政十二年五月より翌年にかけて箱館に造船所や、海産物の集積の出来る面積を取った、幅広い輸送船専用の掘割を造った。其の造設によって多数の大小船舶が自由に出入出来るようになった。

当然、其の工事の統轄者として村上三郎右衛門常福の手柄となり、近藤重蔵への憤りも吹き消えるのであった。

（二）

三月二十五日厚岸に入港した択捉島開拓御用船は、次に国後島泊港に集結するのである。

山田鯉兵衛は、船舶の大小・船種・積荷・船員の構成を綿密に組み合せ、航行日程を作り、四月二十日に国後島泊港で、択捉島開拓島開きを催すので、其れ迄に到着するようにと各船の船頭に伝えた。

近藤重蔵は、国後島泊港に行く前に、厚岸乙名のイコトイに択捉島開拓経営に参画するように伝えようと思った。

イコトイは得撫島や択捉島の居留地より、厚岸の尾幌川畔のコタンに戻っていると厚岸会所の番役人から知らせがあったからである。

イコトイの動静については、今度の幕府の蝦夷地御用で、東蝦夷地の上知により、従来の松前藩主の直領地であった厚岸も、上乗役代行であった馬場与市兵衛が、配下の者共を含めて其の侭、番役所、交易会所等の業務を執行しているので、近藤重蔵とは顔見知りの馬場与市兵衛がイコトイについて報告に来た。

「イコトイは、前々より、母親や妻子の居る厚岸のコタンの他に、国後島にも択捉・得撫にも狩猟交易の為に、各地に棲家があって愛妾を持ち子供も居て、多くのウタレ（手下）を妻子共々に引き連れて移り住んでいますが、コタンを成し定住しているのでなく、ラッコ猟や、鷲羽等の軽物出猟なので、其の狩猟や交易に便な所に移動している訳です。

択捉島では北端のモシリハに、得撫島ではワニナウのマツコタンに棲んでいましたが、近頃はモシリハの総乙

名マウテカアイヌの弟のイパヌシカの処に、愛妾を置いて棲息していましたが、厚岸も松前藩の直領から幕府に上知されたと訊いたらしく尾幌川のコタンに帰っているようです」

と云った

近藤重蔵は様似で越冬中、外部との連絡には、厚岸アイヌのイワレ（市助）を使っていた。

市助はイコトイのウタレではないが一緒に得撫島や択捉島にも渡り、露語にも通じていた。

近藤重蔵は、今度の択捉島開拓経営には役立つ者と目をかけていたので、市助を尾幌川畔のイコトイのポロチセに行かせ、択捉島開拓経営に参画するようにと重蔵の言葉を伝えた。

戻って来た市助は、

「イコトイは近藤様のお招きを大変喜んで、今迄イコトイが厚岸に戻らなかったのは、イコトイが択捉島や得撫島に迄交易に行ったり露人と交友しているので、厚岸に戻れば捕えらえて死刑にされるであろうと恐れていたからで、今度、幕府で直接東蝦夷地を治めることになったと訊いたので、安心して厚岸のポロチセに戻ったが、幕府で択捉を開拓するなら択捉にもイコトイの棲家があるから喜んで近藤様のお役に立ちます、ウタレの者共を集めて四月初めに国後島泊港に参ります」

との事であった。

近藤重蔵はイコトイを存分に択捉島で活動させようと期待して喜び、更に、寛政十年の蝦夷地見分の時近藤隊に従って国後島より択捉島に渡ったアイヌの人夫も連れて行こうと思った。

特に下野の源助（木村謙次）と心を通じ合って和名を貰った孝助、弟助、勘助や、国後島の総乙名ツキノエの近親者阿部助・勇助にも今度の択捉島開拓に参加させようと、市助に命じて伝えさせた。

山田鯉兵衛は厚岸の番役所に行き、和人アイヌを問わず、山林の開拓が出来る人夫や、漁場の漁師や狩人で択捉島へ移住希望の者は、申し出るようにと伝えた。

又、昨年の択捉島航路の按検に行った高田屋嘉兵衛より、宮本源次郎達の漁場や会所の土地選定の出精振りを知らされ、寅吉や、アチャボとアチャボが連れて来たアイヌ人夫三人で択捉島で越年し、タンネモイのラァキツの助けを得てタンネモイの山中より、択捉島開拓の基地の番所や会所を建てる用材を切出してあるとの報告なので、漁場の予定地や会所の番屋の予定地に、本隊が着く迄に仮建築でも建てて置く必要があると、宮本源次郎に相談すると、宮本源次郎が又四郎・四万吉、アイヌ人夫を連れて択捉島へ先渡りする事になった。

幸いにも厚岸会所の番役松兵衛と重兵衛が、択捉島が開拓すれば、新しい会所や番役人も必要となろう、松前藩の直領の時代より会所番役であったが上知された厚岸

役所の勤務より新しい択捉島の番役になり度いと申し出たので、先渡組に入れて、図会船で国後島泊港に向かわせた。

斯うした山田鯉兵衛の綿密な計画と配慮によって、国後島泊港での択捉島開きの祝の四月二十日前日迄には大方の船舶は入港した。

択捉島開きの祝は、近藤重蔵が主催するオムシャの礼のようなものだった。先渡りで泊に入っていた宮本源次郎や、通詞役の山本久兵衛が世話役を勤めた。

参会者は泊港の番役代行長岡弥兵衛次、国後島アイヌ乙名の代表サキチ、厚岸乙名のイコトイ、辰悦丸より高田屋嘉兵衛と船頭金兵衛、参着している各船の船頭達も加わったが、択捉島よりの参会者はいなかった。

四月二十七日、イコトイがウタレと其の妻や子供も従え、図合船や蝦夷船で択捉島に向って船出した。

イコトイは、山田鯉兵衛を通して択捉島入植の人数を近藤重蔵に届けて行った。

成人の男十二人、其の妻女や娘十九人、子供男六人、女十五人、姓別未調査八人の計六十人と云う大人数であった。

既に四月十七日に泊港を立った先渡の寅吉、又四郎、四万吉、アチャボ達と松兵衛、重兵衛の会所番役希望者を含めて、此の日二十七日にはアトイヤに着き、閏四月二日には択捉島ママイネモイのコタンに着き、同四日には老門（ヲエト）に着き、待っていたタンネモイの乙名ラアキツの案内で、予定した会所や漁場の番舎や交易所の小屋等の建造に取りかかった。

寅吉などは前年行って無かった藥取（シベトロ）まで見分に行った。

閏四月四日、摂州兵庫の和泉屋伊兵衛の辰吉丸千二百石積が泊港に入港した。

翌日にも大坂の杉子島の多田屋清左衛門の船八百五十石の明神丸が入港した。

此等の船は、高田屋嘉兵衛の辰悦丸とは違って、国後島場所の仕入物を積んで来たと、船長が云ったが、択捉島開島と訊いて早くも一儲しようと西の廻船業者が、箱館奉所の寄合、村上三郎右衛常福に許を求めて択捉島にも行くのであろうと、山田鯉兵衛は睨んだ。

先に入港している辰悦丸は択捉島開拓経営に必要な材料を積んでいる御用船であるが、辰吉丸・明神丸は国後島番所の仕入物と云うので、国後島会所の支配人勘右衛門、通詞長三郎等が乗り込んで見ると辰吉丸には、中戸組の鯨突大夫の安兵衛、南部宮古の番人等も乗り組んでいた。

両船共に乗込船員の数も多く、船頭、水主等の船員を含めて百三十人程乗船していた。国後島より択捉島に廻航して漁獲、捕鯨等をするのであろう、と山田鯉兵衛は

訝ったが、近藤重蔵は孰れにせよ、廻船業者等の利益になるにせよ、択捉島が開発されてアイヌ達の生活も向上するならば、択捉島の開発を高田屋の独占にする必要もあるまい。

辰悦丸も帰りには鮭・鰊・昆布や俵物（煎海鼠、干鮑、鱶鰭）等を積んで帰り大儲をするであろうと思っていた。

辰悦丸は択捉島開拓用物資を満積して、新たに大工二人木挽二人、小屋番八人を採用し択捉島に向って泊港を出帆した。

閏二十日海峡を渡りタンネモイに入った。タンネモイのエトロフアイヌ達は、遙の沖より旗幟を風に翻えさせて入津する大船を見て松前より征討の軍船が差し向けられたのかと狼狽し、山中や蝦夷松林の木陰から様子を探っていると、船中から上陸する者の先頭には、先年最上徳内と一緒に巡視に来た近藤重蔵がいるではないか、従う者は昨年航路按検とかで来た高田屋嘉兵衛ではないか、と隠れていた者も安堵して出迎に出て来た。敬礼しているとコタンコロクルのラアキツも出迎に駆けつけた。

ラアキツは昨年高田屋嘉兵衛が引き上げた後、越冬する寅吉やアチャポが、タンネモイの山中で用材を切り出して、今年になって先渡りで来た宮本源次郎や、又四郎達が内保や紗那の漁場予定地や、会所、番屋の予定地に運んだと、報告した。

重蔵はラアキツに犒いの言葉をかけ、一夜湾内に停泊するからコタンの者達は自由に船内を見分するが良いと伝えた。亦、ラアキツ達の主だったアイヌと船員との一時の懇談を許した。

翌二十一日早朝出帆した辰悦丸は萌消湾の沖合を通過し、ガバラ岬より内保湾に入ろうとしたが、風向きが坤（ひつじさる）より艮（うしとら）に急変してポロノツ岬の沖に吹き返され、夕刻大シマキ（旋毛風）が起きて。危く遭難しかかり、高田屋嘉兵衛が帆柱に金比羅大明神の札を巻きつけて一心に祈念した。暫くして漸くウタスト湾の弁天湊のトリカマイに入津した。

翌、二十四日辰悦丸は、嵐で痛んだ個所もあるので積込伝馬船で野斗呂岬の西南の付根の老門（ヲイト）に行った。先渡りの宮本源次郎が会所予定地とし、アイヌ人夫や番人達で建てた四間に八間の小屋二棟があった。

近藤重蔵は出迎の挨拶に来たヲイトの乙名シリムケアイヌに、後日他に移すとしても当座の択捉島会所として総ての択捉アイヌの介抱を行なう、五月朔日に択捉島開きの祝をするから各地のコタンコロクルや酋長に島開きの祝いに参会するように伝えるようにと頼み、寅吉、又四郎等に、祝いの準備万端を命じた。

五月朔日の正午に開会であるが、其の直前に昨年来の寅吉や又四郎の出精を犒って寅吉を「通詞勤方」又四郎を「番人小頭」松兵衛を「惣番人名代」に任命して開会に入った。

司会進行は宮本源次郎である。幕府役人択捉島担当者で居合する者は総て臨席、高田屋嘉兵衛を始め老門、内保紗那等に停泊中の船の船長、老門乙名のシリムケアイヌを始めとしてシヤナの乙名のイケシツルハ、留別乙名のタカリベアリ、内保乙名のヌシエ、イコトイを始め根室、国後島の乙名も集った。

参集の乙名達も多く、会所小屋は狭小なので蝦夷松林の砂地に自由に腰を下ろしての会所開きであった。

近藤重蔵も心得て、初めの祝辞も、幕府役人が択捉島支配に来たので無く、島人の暮しが良なるように介抱しに来たのだ、と告げ「苦しいこと、困ったことがあったら申し出るよう、択捉全島のアイヌにも伝えるように、今日はその島開きを祝おう」

と述べて一同に酒樽を見せた。近藤重蔵の言葉を通詞の山本久兵衛がアイヌ語で伝え、山田鯉兵衛が立って、「今日開いた老門（ヲイト）の会所は小さいが、紗那（シヤナ）、留別（ルベツ）、内保（ナイホ）にも番屋を設置して、毎年江戸から役人が来て、通詞や番人も越年して、飢饉や天災の時には択捉アイヌを助け救う。此れは幕府の御厚恩であるから、有難く報いる為に仲良く償事口論は一切しないこと。追々シヤモ（和人）の生活振りを見習って、他島などに出る事は無用である。妻の無い者には妻も世話するから、仲良くして人口増加に努めるようにせよ……」

等々と生活の基本を伝えた。此れは山田鯉兵衛が書き文を読み聞かせたもので、山本久兵衛が平易にアイヌ語に訳して伝えた。

其の後一同に酒樽より清酒を汲み上げて土器で存分に呑ませ、乙名には一包ずつ多葉粉を与えて散会した。

斯くして天地自然全てカムイの神であると信じ、其の恵の中で自由に生きる、エトロフアイヌの島開きが始まるのであった。

（つづく）



千篇萬律

☆格別に暑かった夏が去り、オリンピックの狂騒が終焉金満巨人軍と王さんが優勝して一先ず静かになった。

・降り立ちて今朝の寒さに驚ろきぬ
　露しとしとと柿の落葉深く（佐千夫）

☆人間の営（いとなみ）とは無関係に自然は自からの法則で息吹く。山が火焔を吹き、河水は奔騰し、大地も震えた。俗界では道を外した雪印やそごうが敢えなく失墜（ダウン）した。それがどうした。私達は黙々と想を錬り文字を紡（つむ）ぐ。唯書き、描き続ける。何の為？誰の為？吾不能論（われろんずるあたわず）。

☆倉頡（そうけつ）が文字を作った時鬼は民を想ってすすり泣いた。文字は権力支配の道具として文明社会に登場せざるを得ぬ必要悪であった。権力の為の悪の根源たる文字！代りに文明と聖書、論語、仏典、コーランを手に入れた。ホメロスや李白、杜甫の詩も。わが橘曙覧（たちばなのあけみ）は歌う。

・灯火（ともしび）のもとに夜な夜な来たれ鬼
　我が秘め歌の限り聞かせむ
・人臭き人に聴かする歌ならず
　鬼の夜ふけて来（こ）ばつげもせむ
・吾が歌をよろこび涙こぼすらむ
　鬼の泣く声する夜の窓

☆今年は同人が増えた。新井宏に始まり千坂精一、鍋屋次郎、相原精次が参加、今回又森実与子を迎えた。まんじは厚く、愈々（いよいよ）熱い。いざ鬼神をも泣かしめん（く）

「まんじ」　第七十八号
平成十二年十一月一日発行（非売）
編集　鯨　游　海
発行　柴　田　富佐子
〒一〇一―〇〇六二
東京都千代田区神田駿河台二―九
柴田方
「作家群」
（まんじ）編集部
☎　〇三（三二九三）〇〇九四　柴田方
郵便振替口座　〇〇一二〇―四―九〇八一五
加入者名「作家群編集部」
印刷　大和印刷株式会社
埼玉県川口市青木一―十二―二十
☎　〇四八（二五四）三三一一